

KUNICHIDEN

九日田遺跡

KUYONOMOTO

供養之元遺跡

MAEHARAWADA

前原和田遺跡

東九州自動車道建設(末吉IC～国分IC間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 I

2002年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

供養之元遺跡



塞ノ神A式土器，B式土器

前原和田遺跡 1



前原和田遺跡遠景

前原和田遺跡 2



前原和田遺跡 XI層磔群

前原和田遺跡 3



XVI層 3-ア号断面



XVI層 6-ア・イ号炭化物

序 文

鹿児島県教育委員会では、東九州自動車道（末吉 I C～国分 I C 間）の建設に伴い、平成 8 年度から埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

この報告書は「九日田遺跡」「供養之元遺跡」「前原和田遺跡」の発掘調査の記録をまとめたものです。

これらの遺跡では旧石器時代から古代までそれぞれの時期の遺構や遺物が発見され、多大の成果を収めました。特に、前原和田遺跡で発見された旧石器時代の礫群は当時の生活を解明するうえで貴重な資料として注目されました。

本書は、南九州に住んだ先人たちの歴史の一端を明らかにする貴重な手がかりを提供するものと考えております。文化財の保護や学術研究のための資料として活用していただければ幸いです。

終わりに、調査にあたりまして御協力いただいた日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所や関係者の方々ならびに地元の皆様に心から感謝いたします。

平成14年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 井 上 明 文

例 言

- 1 この報告書は、東九州自動車道建設（末吉 I C～国分 I C間）に伴う「九日田遺跡」「供養之元遺跡」「前原和田遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所の受託事業として、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 3 本書で用いたレベル数値はすべて海拔高である。
- 4 本書の遺物番号は遺跡ごとの通し番号とし、挿図・表・図版の番号と一致する。
- 5 発掘調査において、九日田遺跡は財部町教育委員会、供養之元遺跡・前原和田遺跡は福山町教育委員会の協力を得た。
- 6 発掘調査における実測及び写真撮影はそれぞれの調査担当者が行った。
- 7 各遺跡の執筆分担は次のとおりである。

九日田遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・井ノ上秀文・宇都俊一
供養之元遺跡 第1章・第2章第2節・第3章・
第4章第1・2節・第3節2・第6章・・・・・・・・野邊盛雅
第4章第3節1・第5章・・・・・・・・山崎克之
前原和田遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・大保秀樹
- 8 供養之元遺跡の第2章第1節については立部剛氏（現吉田町立吉田南中学校教諭）より玉稿をいただいた。
- 9 遺物に関する写真撮影等は鶴田静彦・福永修一・横手浩二郎が行った。
- 10 前原和田遺跡の旧石器については、桑波田武志の協力を得た。
- 11 各遺跡の石器の実測・製図及び供養之元遺跡の土器の一部の実測・製図については株式会社文化財環境整備研究所に委託した。
- 12 前原和田遺跡出土炭化物の自然科学分析についてはパリノサーヴェイ株式会社に依頼し、その分析結果報告を掲載した。
- 13 本書の編集は鹿児島県立埋蔵文化財センターで行い、長野眞一を中心にそれぞれの報告書作成担当者が当たった。
- 14 各遺跡の出土遺物・図面・写真は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管・活用する。

九日田遺跡

報 告 書 抄 録

ふりがな	くにちでんいせき							
書名	九日田遺跡							
副書名	東九州自動車道建設（末吉IC～国分IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	I							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	36							
編集者名	井ノ上秀文・宇都俊一							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-5652 鹿児島県始良郡始良町平松6252番地 TEL0995-65-8787							
発行年月日	2002年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
九日田	かごしまけん 鹿児島県 そおぐん 曾於郡 たからべちようみなみまた 財部町南俣	市町村	遺跡番号	31°	130°	確認調査	1,100㎡	東九州自動車道建設（末吉IC～国分IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査
		46443	65-90	41′	56′	19960710		
				9″	26″	） 19960822		
						全面調査 19961011 ） 19970127		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
九日田	包含地	縄文早期 縄文晚期 古代	集石 土坑 ピット群	石坂式系土器 押型文土器 石鏃 深鉢，浅鉢 石鏃 土師器				

目 次

報告書抄録

遺跡の位置図

目次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過（日誌抄）	2
第2章 遺跡の位置と環境	5
第3章 遺跡の層位	11
第4章 確認調査	12
第5章 全面調査	15
第1節 調査の概要	15
第2節 縄文時代早期の調査	15
第3節 縄文時代晩期の調査	25
第4節 古代の調査	29
第5節 その他の遺物	34
第6章 まとめ	35

表 目 次

第1表 周辺の遺跡地名表（1）	6
第2表 周辺の遺跡地名表（2）	7
第3表 早期の土器観察表	21
第4表 早期の石器計測表	23
第5表 晩期の土器観察表	28
第6表 晩期の石器計測表	28
第7表 ピット計測表	32
第8表 土坑内出土遺物観察表	33
第9表 古代の遺物観察表	33
第10表 その他の遺物観察表	34

挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡地図	8
第2図	遺跡と周辺の地形図	9
第3図	調査区と周辺の地形図	10
第4図	土層模式柱状図	11
第5図	トレンチ及びグリッド配置図	12
第6図	各トレンチ土層断面図	13
第7図	土層断面図	14
第8図	集石位置図	15
第9図	集石(1)	16
第10図	集石(2)	17
第11図	VII・VIII層遺物出土状況	19
第12図	早期の土器	20
第13図	早期の石器(1)	22
第14図	早期の石器(2)	22
第15図	V・VI層遺物出土状況	24
第16図	IV層遺物出土状況	26
第17図	晩期の土器	27
第18図	晩期の石器	27
第19図	土坑	29
第20図	土坑内出土遺物	29
第21図	ピット群	30
第22図	III層遺物出土状況	31
第23図	土師器接合図	32
第24図	古代の遺物	33
第25図	その他の遺物	34

図 版 目 次

図版1	遺跡近景	37
図版2	調査風景	38
図版3	土層断面	39
図版4	集石1号～5号	40
図版5	ピット群完掘状況・遺物出土状況	41
図版6	出土遺物(1)	42
図版7	出土遺物(2)	43
図版8	出土遺物(3)	44

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は、東九州自動車道（末吉IC～国分IC間）の建設を計画し、事業区域内の埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会に照会した。

これを受けて、鹿児島県教育委員会は日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所と協議を行い、鹿児島県立埋蔵文化財センターが工事予定区域内を対象にして、埋蔵文化財の分布調査を行うこととなった。分布調査は平成6年10月と平成7年5月に実施した。

この結果、工事予定区域内に13箇所の遺物散布地や確認調査の必要な地点の所在することが判明した。そこで、再度協議を行い、平成8年4月から用地買収等の条件が整った区域を対象として順次確認調査を実施することとなった。

九日田遺跡は、暫定2車線部分及び工事施工区域内の3,160㎡を対象にして平成8年7月10日から8月22日の間に、確認調査を実施した。

確認調査の結果、縄文時代早期及び晩期、古代の遺物包含層が残存することが明らかになった。この結果をもとに、鹿児島県教育委員会と日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は協議を行い、緊急発掘調査の必要な1,100㎡について、鹿児島県立埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。発掘調査は平成8年10月11日から平成9年1月27日までの間行った。

第2節 調査の組織

平成8年度調査

事業主体者	日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	吉元 正幸
調査企画者	〃	次長兼総務課長	尾崎 進
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋
	〃	課長補佐	新東 晃一
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	池畑 耕一
調査担当者	〃	文化財主事	宮田 栄二 (確認調査)
	〃	〃	寺師 孝則
	〃	文化財研究員	寺原 徹
	〃	文化財調査員	松村 智行 (確認調査)
事務担当者	〃	主 査	成尾 雅明
	〃	主 査	前屋敷裕徳
	〃	主 事	追立ひとみ

調査指導者 鹿児島大学法文学部 教授 森脇 広

平成12年度報告書作成

事業主体者	日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所	
作成主体者	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長 井上 明文
作成企画者	〃	次長兼総務課長 黒木 友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長 新東 晃一
	〃	課長補佐 立神 次郎
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長 彌榮 久志
	〃	主任文化財主事 長野 眞一
作成担当者	〃	文化財主事 井ノ上秀文
	〃	文化財研究員 宇都 俊一
事務担当者	〃	総務係長 有村 貢
	〃	主 査 栗山 和己

平成13年度に報告書の印刷・刊行を行った。

第3節 調査の経過

平成8年7月10日から8月22日まで確認調査を行い、その後、平成8年10月11日から平成9年1月27日まで緊急全面発掘調査を実施した。

調査の経過については、日誌抄をもってかえる。

確認調査

7月10日（水）～7月12日（金）

1～4トレンチ設定、掘り下げ。攪乱部分が多く、遺物・遺構は確認されない。

7月15日（月）～7月19日（金）

1～4トレンチ掘り下げ。5トレンチ設定、掘り下げ。1トレンチ拡張、掘り下げ。3トレンチ掘り下げ終了。週の後半に台風6号接近。

7月22日（月）～7月26日（金）

1, 2, 4, 5トレンチ掘り下げ。6トレンチ設定、掘り下げ。2, 4トレンチ掘り下げ終了。5トレンチⅣ層より土器片出土。

8月1日（木）～8月2日（金）

1, 5, 6トレンチ掘り下げ。5, 6トレンチより遺物出土。

8月5日（月）～8月9日（金）

1, 5, 6トレンチ掘り下げ、遺物出土状況実測、遺物取り上げ。2～4トレンチ土層断面写真撮影。2トレンチ土層断面実測。

8月12日（月）

1, 5, 6 トレンチ掘り下げ。3 トレンチ土層断面実測。6 トレンチ掘り下げ終了。

8月19日（月）～8月22日（木）

1, 5 トレンチ掘り下げ終了。1, 5, 6 トレンチ写真撮影。5 トレンチ遺物出土状況実測、遺物取り上げ。1, 4～6 トレンチ土層断面実測。確認調査終了。

全面発掘調査

10月11日（金）

機材搬入。表土剥ぎ。

10月14日（月）～10月18日（金）

C-3 区攪乱層掘り下げ, V～Ⅷ層掘り下げ, 旧地形の地形図作成, Ⅵ層上面地形図作成, Ⅶ, Ⅷ層遺物出土状況実測, 遺物取り上げ。C-4 区表土剥ぎ（重機）, 旧地形精査, 旧地形の地形図作成, Ⅳ層掘り下げ, 形式不明土器出土, Ⅵ層掘り下げ。C-5, 6 区表土剥ぎ（重機）。D-3 区攪乱層掘り下げ（重機）, 旧地形の地形図作成, 写真撮影, Ⅳ～Ⅶ層掘り下げ, Ⅵ層上面, Ⅶ層上面地形図作成。

10月21日（月）～10月24日（木）

C-3 区Ⅷ層掘り下げ, X 層面精査, 写真撮影。C-4 区Ⅳ層掘り下げ, Ⅳ層上面で柱穴群確認, 掘り下げ, 実測。C-5 旧地形検出, 地形図作成。D-3 区Ⅷ, Ⅷ層掘り下げ, 集石2 基検出, 遺物出土状況実測。D-4 区表土剥ぎ（重機）, 旧地形検出。鹿児島大学森脇先生現地指導。

10月29日（火）～11月1日（金）

C-3 区下層確認トレンチ X I 層掘り下げ。C-4 区Ⅳ層柱穴群実測, 写真撮影, V 層掘り下げ, 土坑検出。C-5 区Ⅳ層掘り下げ。D-3 区Ⅷ層掘り下げ。D-4 区旧地形検出, 地形図作成, Ⅳ層下部で柱穴群検出, 写真撮影。D-5 区Ⅳ層下部で柱穴群検出, 写真撮影。

11月5日（火）～11月8日（金）

C-3 区下層確認トレンチ掘り下げ。C-4 区 V 層掘り下げ, 土坑検出, 半截, 写真撮影, 実測。C-6 区旧地形の地形図及び土層断面実測, 旧地形写真撮影。D-4 区Ⅳ層柱穴群実測, Ⅳ層掘り下げ。D-5 区Ⅳ層柱穴群実測, Ⅲb, Ⅳ層掘り下げ。D-5, 6, E-4, 5 区旧地形の地形図及び土層断面実測。

11月11日（月）～11月15日（金）

C-4 区Ⅳ層上面地形図作成, 写真撮影, Ⅵ層掘り下げ, V 層掘り下げ, 遺物出土状況実測, 遺物取り上げ。C-5 区Ⅳ, V 層掘り下げ, Ⅳ層遺物出土状況実測, 遺物取り上げ。グリッド杭打ち。表土剥ぎ（重機）。

11月18日（月）～11月22日（金）

C-4 区Ⅶ層上面検出, 清掃, 写真撮影, 地形図作成, Ⅶ, Ⅷ層掘り下げ。C-5 区Ⅵ層上面地形図作成, Ⅳ, V 層遺物出土状況実測, 遺物取り上げ, Ⅵ層掘り下げ, Ⅶ層上面検出, 清掃, 写真撮影, 地形図作成, Ⅳ, V 層掘り下げ。C-6 区Ⅵ層掘り下げ, 地形図作成, Ⅶ層掘り下げ。D-4 区Ⅳ層掘り下げ, Ⅶ, Ⅷ層掘り下げ。D-5 区Ⅲb, Ⅳ層掘り下げ, 遺物出土状況実測,

遺物取り上げ。D-6区Ⅲb, IV層掘り下げ, 遺物出土状況実測, 遺物取り上げ, 地形図作成。
D-7区旧地形検出, 写真撮影, 地形図作成。E-6区Ⅲb, IV層遺物出土状況実測, 遺物取り上げ。

11月26日(火)～11月27日(水)

C-4～6区Ⅶ, Ⅷ層掘り下げ, VI～Ⅷ層遺物出土状況実測, 遺物取り上げ。

12月2日(月)～12月5日(木)

C-4～6区Ⅷ層掘り下げ。

12月9日(月)～12月13日(金)

C-4～6区Ⅷ層遺物出土状況写真撮影, 実測, 取り上げ。東壁側に下層確認のためのトレンチ設定, 掘り下げ, 断面清掃, 写真撮影, 実測。D-4～6区V層掘り下げ, IV, V層掘り下げ。
E-4～6区V層掘り下げ。

12月16日(月)～12月20日(金)

C-3区東壁土層断面写真撮影, 実測。C-4区北壁土層断面写真撮影, 実測。C～E-4～6区清掃, 写真撮影, 地形図作成。C～E-10～12区Ⅱ, Ⅲ層掘り下げ。D-4～6区V, VI層掘り下げ(重機)。D-11, 12区Ⅲa層遺物出土状況実測, 遺物取り上げ, 地形図作成。

12月24日(火)～12月25日(水)

C-3, 4区境ベルト掘り下げ。C-4区IX層以下掘り下げ。C-11区Ⅲa層掘り下げ。D-4～6区VI層掘り下げ(重機)。E-5, 6区表土剥ぎ(重機)。E-10～12区Ⅲa層遺物出土状況実測, 遺物取り上げ, 地形図作成。年末年始休業中の安全確保のための作業実施。

1月7日(火)～1月10日(金)

C-3, 4区境ベルト掘り下げ。C-4区X層以下掘り下げ部分土層断面実測。C-11区Ⅲ層掘り下げ。C, D-3区境ベルト掘り下げ。D-3, 4区境土層断面写真撮影, 実測。D-4区Ⅶ層遺物出土状況実測, 遺物取り上げ。D-4～6区清掃写真撮影, Ⅶ層上面地形図作成, Ⅶ層掘り下げ。D-5区Ⅶ, Ⅷ層掘り下げ。D-10～12区東壁土層断面実測, 埋め戻し。E-4～6区Ⅶ層上面検出, 地形図作成。

1月13日(月)～1月17日(金)

C, D-4区Ⅶ, Ⅷ層掘り下げ, 遺物出土状況実測, 遺物取り上げ。C, D区境ベルト掘り下げ。D-4区Ⅶ層遺物出土状況実測, 遺物取り上げ。D-4, 5区Ⅶ層掘り下げ。D-5区遺物出土状況写真撮影。D-6区Ⅶ, Ⅷ層掘り下げ。D-11区埋め戻し。E-4, 5区Ⅶ, Ⅷ層掘り下げ。E-4～6区Ⅶ層上面地形図作成。1, 2, 4号集石写真撮影, 3, 4号集石実測。

1月20日(月)～1月24日(金)

C, D区境ベルト掘り下げ。D-3, 4区Ⅶ層掘り下げ, 遺物出土状況実測, 遺物取り上げ。D, E-5区Ⅶ, Ⅷ層遺物出土状況実測, 遺物取り上げ。E-5区Ⅶ層掘り下げ。E-6区Ⅶ, Ⅷ層掘り下げ, 遺物出土状況実測, 遺物取り上げ。3, 4区境ベルト掘り下げ。4号集石実測。

1月27日(月)

E-5区Ⅷ層掘り下げ, 遺物出土状況実測, 遺物取り上げ。5号集石実測。調査用機材かたづけ, 撤収。調査終了。

第2章 遺跡の位置と環境

九日田遺跡は、鹿児島県曾於郡財部町南俣九日田に所在する。

遺跡の所在する財部町は鹿児島県の北東部、宮崎県との県境に位置し、北及び東は宮崎県都城市、西は始良郡霧島町・国分市・始良郡福山町、南は曾於郡末吉町と接している。地勢的には鹿児島県と宮崎県に広がる霧島連山と宮崎県日南地方の鱈塚山地に囲まれた都城盆地の西部に属している。

町の西部には瓶台山、白鹿岳、陣ヶ岡等の山地が南北に連なり、中央部や東部は火山灰台地で、全体的に都城盆地の中心部の東方へ傾斜している。それぞれの台地間を大淀川へ流入する横市川や溝ノ口川の支流が沖積低地を形成して都城盆地へ流れ込んでいる。

遺跡は、南西部に所在する陣ヶ岡から延びる丘陵が河川の侵食等により、やつで状に入り組んだ舌状の台地のひとつの先端部に近い位置に所在する。遺跡の南側を馬立川が北東方向へ流れ、横市川となり大淀川へ流入している。遺跡の標高は約290mで、川との比高差はおよそ50mである。この馬立川をはさんで南側の台地に耳取遺跡が所在し、谷を隔てた北側の台地には踊場遺跡がある。

財部の地名の由来は日光神社に関連する古代財日奉部によるとする説がある。「和名抄」の中の日向国諸県郡八郷の中に財部郷の名が見え、建久8年の大隅国図田帳には財部院が、同年の日向国図田帳には財部郷の記載がある。江戸期から明治22年の市町村制により財部村となるまでは、財部郷と呼ばれていた。大正15年には町制施行により財部町となり、現在に至っている。

財部町内では昭和58年に鹿児島県教育委員会が実施した大隅地区埋蔵文化財分布調査により、多くの遺跡が確認された。その後も農政関係の分布調査などにより遺跡の数は増加しつつある。また東九州自動車道の建設に伴う調査でも7箇所の遺跡が確認されている。これらの中から発掘調査が行われた主なものを見てみると、昭和61年には長十塚遺跡と石仏段遺跡の確認調査が行われている。いずれも縄文時代晩期や古代の遺物が出土している。長十塚遺跡は東九州自動車道建設に伴っての調査も行われ、同様の時期の遺物・遺構が確認されている。昭和62年には横尾遺跡・横尾山遺跡・中崎上遺跡の確認調査が行われている。横尾遺跡からは縄文時代早期の土器や石鏃等が出土し、中崎上遺跡からは縄文時代早期の押型文土器・燃糸文土器・完形に復元できる塞ノ神式土器、前期の曾畑式土器、中期の阿高式系土器、後期の岩崎上層式系土器・指宿式土器等が出土している。昭和63年には中崎上遺跡の一部の全面調査が行われ、縄文時代早期の貝殻文系円筒土器の中でも西之表市の下剥峯出土のものに類似する土器が出土している。平成5年には宮原遺跡・霧島迫A・B遺跡の確認調査が実施され、縄文時代早期や後晩期の遺物が出土している。平成9年には西栗須遺跡の確認調査が行われ、縄文時代後晩期の遺物が出土している。平成12年には田平下遺跡の発掘調査が行われている。また、東九州自動車道建設に伴う発掘調査は平成8年から12年にかけて実施され、旧石器時代から古代まで各時期の遺物・遺構が確認されている。

《参考文献》

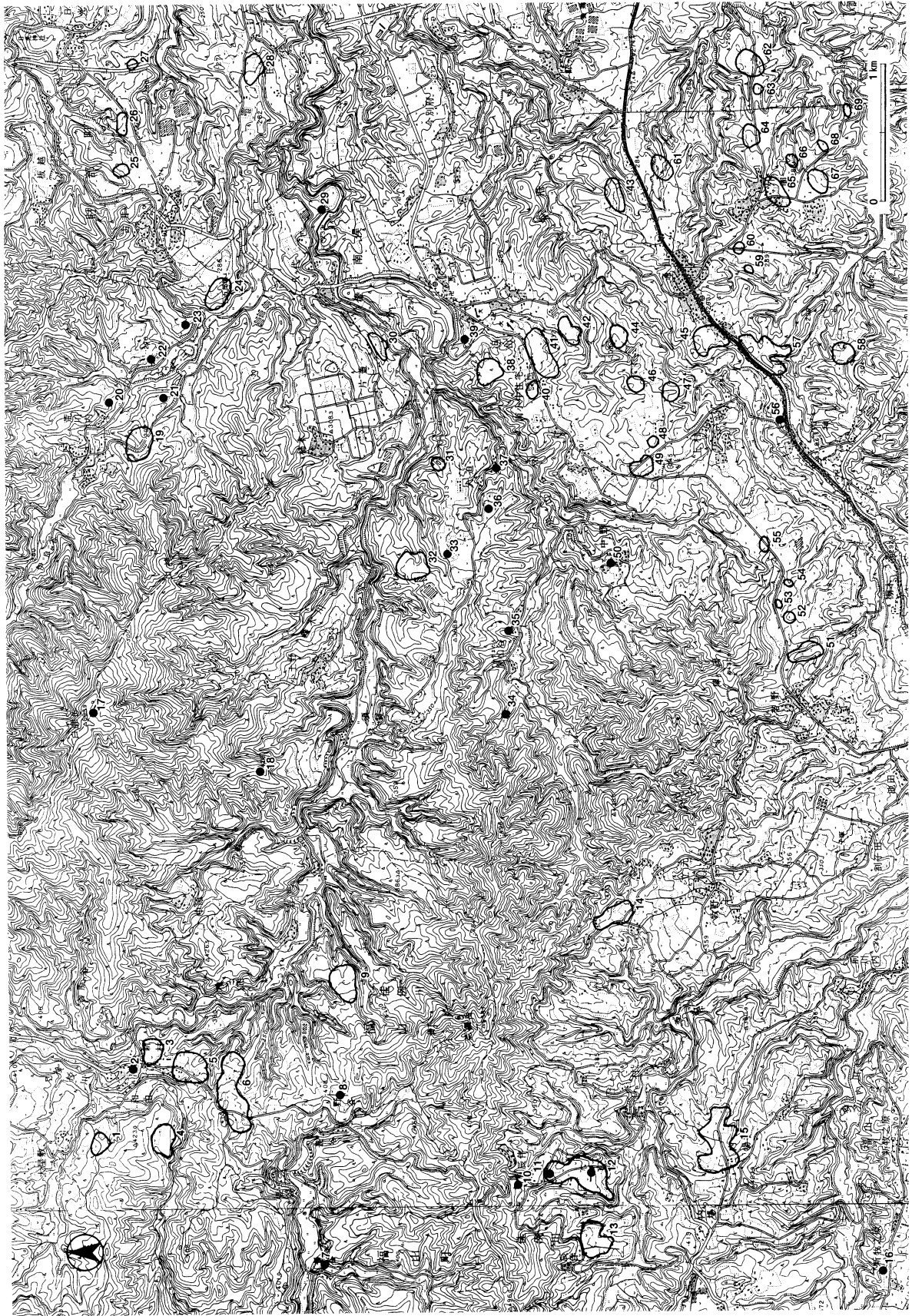
- 1 角川書店『角川日本地名大辞典』46 鹿児島県 1982
- 2 財部町教育委員会『長十塚遺跡・石仏段遺跡』財部町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)1987
- 3 財部町教育委員会『横尾遺跡・横尾山遺跡・中崎上遺跡』財部町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)1988
- 4 財部町教育委員会『横尾遺跡』財部町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)1989
- 5 財部町教育委員会『宮原遺跡・霧島迫A・B遺跡』財部町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)1994
- 6 財部町教育委員会『西栗須遺跡』財部町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)1998

第1表 周辺の遺跡地名表(1)

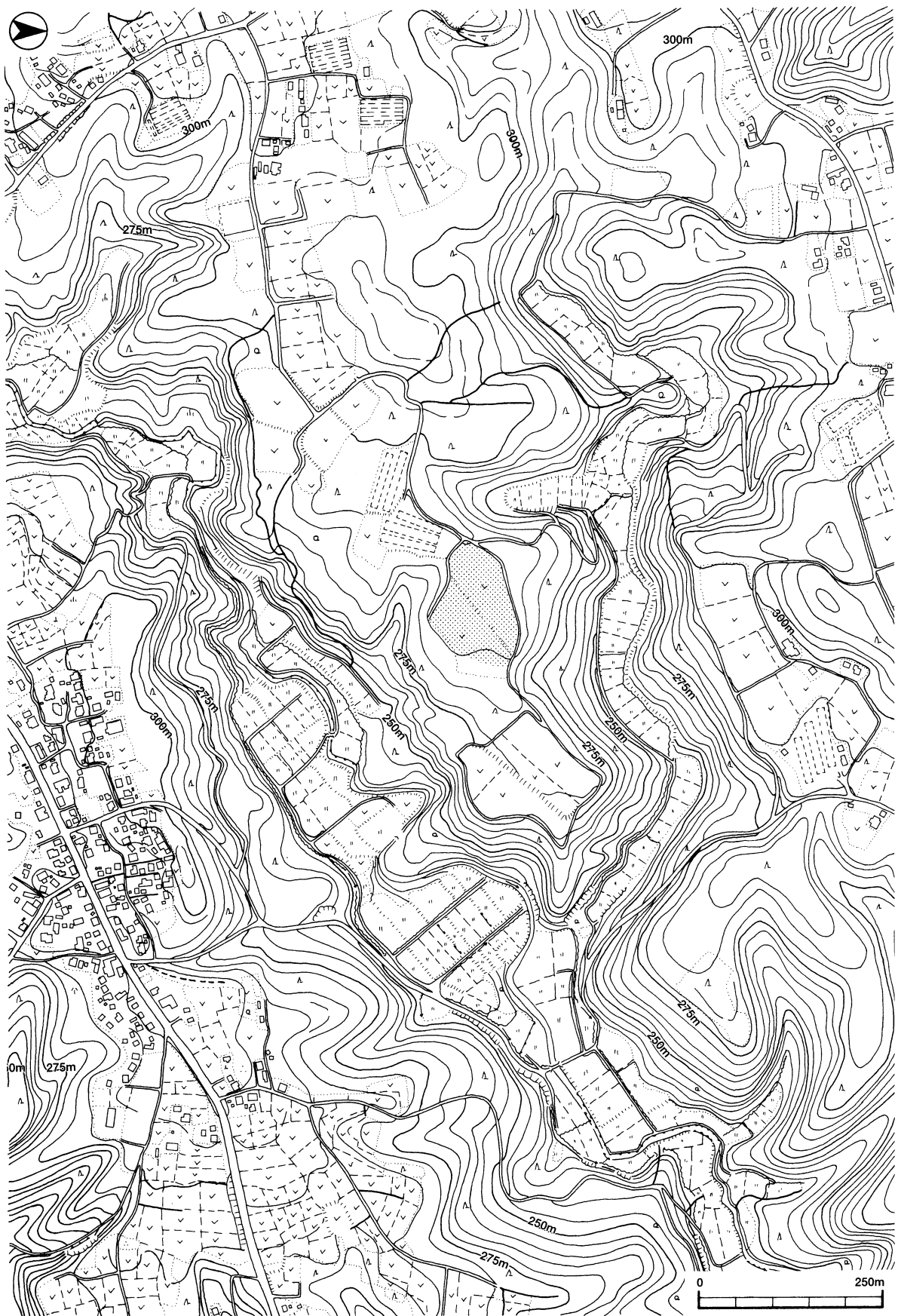
番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	小坂元A	福山町比曾木野小坂元		縄・古・歴	土器・成川式・土師器	
2	新村	” ” 新村	台地	縄(中)	岩崎式	
3	前原	” ” 前原	台地	縄・古・歴	土器・成川式・土師器	
4	城ヶ尾	” ” 城ヶ尾	台地	旧・縄・古	ナイフ形石器・塞ノ神式・成川式	H10,11調査
5	前原和田	” ” 前原・和田	台地	旧・縄(早)	ナイフ形石器・押型文	本報告書
6	供養之元	” ” 供養之元	台地	縄・古	塞ノ神式・成川式	本報告書
7	長谷	” ” 長谷	台地	弥	大型石斧	
8	野谷下	” ” 野谷下		古・歴	成川式・土師器	
9	永磯	” ” 永磯	台地	旧・縄・歴	細石器・手向山式・土師器	H9,10調査
10	辰伴	” 佳例川辰伴	台地	弥	土器	
11	栗ノ脇	” ” 栗ノ脇		縄	土器	
12	芹牟田	” ” 芹牟田		縄	土器	
13	赤松段	” ” 赤松段		縄	土器	
14	山神段	” ” 山神段		歴	土師器	
15	一本松	” ” 一本松	台地	縄(中・後)	阿高式・岩崎上層式・指宿式	H10調査
16	花建原	” 下牧之原花建原			須恵器	
17	黒棚城棚	財部町南俣天子馬場				
18	花平陣跡	” ” 丸鶴城ヶ原				
19	黒棚	” 北俣黒棚	台地	縄(早)・歴	押型文・磨製石斧・土師器	
20	松峯	” ” 松峯	台地	歴	内黒土師器	
21	下戸越	” ” 下戸越	台地	歴	土師器	
22	柳ノ口	” ” 柳ノ口	台地	縄(前・中・後)	轟式・春日式・阿高式・指宿式・石鏃	
23	古井後ヶ谷	” ” 古井後ヶ谷	台地	縄		
24	西原	” ” 西原	台地	縄(早)・歴	押型文・土師器	
25	古井下原	” ” 古井下原	台地	歴	土師器	
26	宮後	” ” 宮後	台地	歴	土師器	
27	霧島迫B	” ” 霧島迫	台地	歴		
28	田代ノ上	” 南俣田代ノ上	台地	縄・歴	土師器・須恵器	
29	久保谷	” ” 久保谷	台地	歴	土師器	
30	八ヶ代上	” ” 八ヶ代上	台地	縄(早・後)・歴	前平式・土師器	
31	高篠坂	” ” 高篠坂	台地	縄(早)	前平式・手向山式	H10,11調査
32	高篠	” ” 高篠	台地	古代	土師器・須恵器	H10~12調査
33	大迫A	” ” 大迫	台地	縄(早・前)	轟式・黒曜石	
34	炭山谷	” ” 井牧ヶ平俣迫	台地	縄・歴	石斧・土師器	
35	炭山	” ” 炭山	台地	縄(後)・歴	指宿式・土師器	

第2表 周辺の遺跡地名表(2)

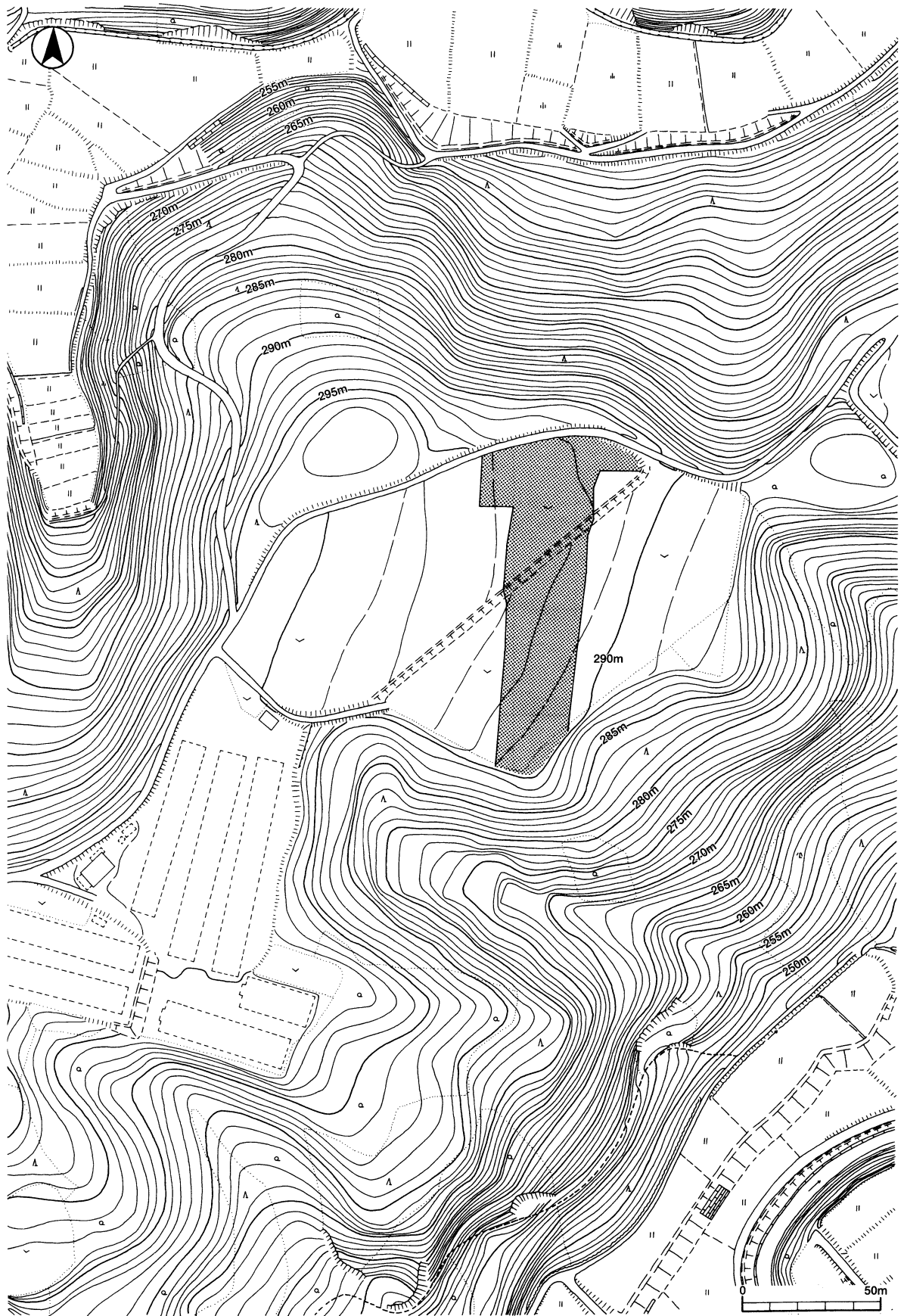
番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
36	大迫B	財部町南俣大迫	台地	歴	土師器	
37	片蓋前	〃 〃 片蓋前	台地	縄(早・前)	押型文・塞ノ神B式・チャート	
38	九養岡	〃 〃 九養岡	台地	旧・縄・歴	三稜尖頭器・手向山式・土師器	H11調査
39	馬立	〃 〃 馬立	台地	歴(奈良)	土師器・須恵器	
40	石仏段	〃 〃 石仏段	台地	縄(晩)・歴	黒色磨研土器・土師器	S61調査
41	長十塚(城ヶ尾)	〃 〃 長十塚	台地	縄・歴	土器・石鏃・土師器・須恵器・土錘	S61調査
42	踊場	〃 〃 踊場	台地	縄(早)・歴	塞ノ神式・土師器・須恵器	H12調査
43	王ヶ平	〃 〃 王ヶ平	台地	歴	土師器・須恵器	
44	九日田	〃 〃 九日田	台地	縄(早・晩)・歴	石坂式・黒川式・土師器	本報告書
45	耳取	〃 〃 耳取	台地	旧・縄・歴	ナイフ形石器・吉田式・土師器・礫群	H11,12調査
46	前山2	〃 〃 前山	台地	縄(晩)・歴	黒色磨研土器・土師器	
47	前山1	〃 〃 前山	台地	歴	土師器	
48	芭蕉ヶ迫2	〃 〃 芭蕉ヶ迫	台地	縄・歴	石皿・敲石・土師器	
49	芭蕉ヶ迫1	〃 〃 芭蕉ヶ迫	台地	縄・歴	土器・土師器	
50	中野	〃 〃 中野	台地	歴	土師器・須恵器	
51	長田	〃 〃 長田	台地	縄・歴	土器・土師器	
52	梅田	〃 〃 梅田	台地	縄・歴	土器・土師器	
53	荷床2	〃 〃 荷床	台地	歴	土師器	
54	八畝	〃 〃 八畝	台地	縄・歴	土器・土師器	
55	荷床1	〃 〃 荷床	台地	歴	土師器	
56	野方	〃 〃 野方	台地	縄・歴	土器・土師器・内黒土師器	
57	桐木	末吉町諏訪方桐木	台地	旧・縄・歴	ナイフ形石器・船元式・土師器	H8～調査
58	関山西	〃 〃 関山西	台地	縄	土器	H13調査
59	通山上川路	〃 深川五位塚通山上川路	台地	縄(晩)・中世	夜臼式	S59調査
60	真方入口	〃 〃 〃 真方入口	台地	縄(前・晩)	轟式	S59調査
61	中牛牧	〃 〃 中牛牧	台地	縄(晩)・古代	土師器	S61調査
62	楠木岡C	〃 〃 楠木岡	台地	縄(晩)・古代	土師器	S61調査
63	楠木岡B	〃 〃 楠木岡	台地	縄(晩)・古代	土師器	S61調査
64	楠木岡A	〃 〃 楠木岡	台地	縄(晩)・古代	土師器	S61調査
65	臼杵	〃 〃 臼杵	台地			
66	下ノ窪	〃 〃 五位塚下ノ窪	台地	縄(晩)・古代	入佐式・土師器	
67	四枝道	〃 〃 四枝道	台地	縄(晩)・古代	土師器	S61調査
68	仮牧	〃 〃 五位塚仮牧	台地	古代	土師器・須恵器	S60調査
69	五位塚渡り下	〃 〃 五位塚渡り下	台地	縄(早)	山形押型文	S60調査



第1図 周辺の遺跡地図



第2図 遺跡と周辺の地形図



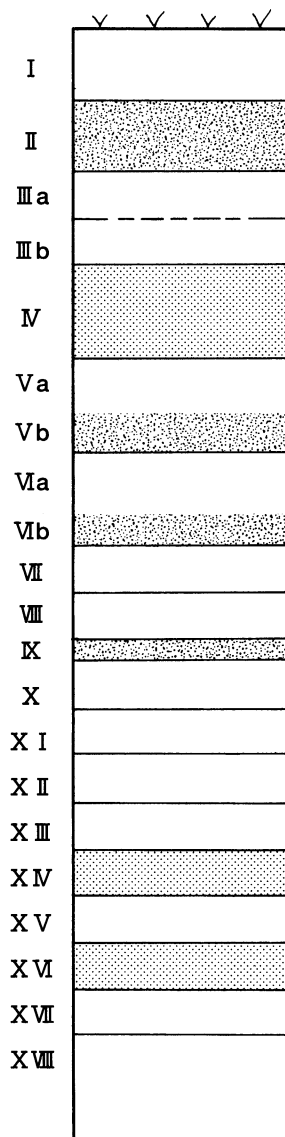
第3図 調査区と周辺の地形図

第3章 遺跡の層位

九日田遺跡は直線距離で桜島の北東およそ30kmに位置しており、その火山堆積物がほかの地域に比べ、多く確認されている。また、霧島山系の南東部に位置しており、ここを噴出源とする火山堆積物も見られた。鹿児島県下ほぼ全域に堆積する喜界カルデラの火山堆積物も確認されている。

遺跡の現況は畑地であり、ほぼ平坦であったが、掘り下げていくと起伏が見られ、旧地形は現況とはかなり違ったものであったことが想像される。こうした起伏を造成し、盛土等を行い畑地として利用したものと考えられる。

遺跡の標準土層は次のとおりである。



第4図 土層模式柱状図

- I層 暗褐色の現耕作土。場所によってはII層の軽石が混じったり、旧表土の上の客土等により、数枚に分かれる。
- II層 黄白色軽石層（文明ボラ）。文明年間の1471～1476年頃の桜島の噴出物。
- III a層 黒色土。
- III b層 黒褐色土。
- IV層 黄褐色細粒軽石混硬質土。約4,000年前の霧島の御池起源の軽石を混入する。下部は軽石が多くなる。
- V a層 暗橙色土。V b層の腐植土。
- V b層 橙色火山灰（アカホヤ）。約6,300年前の喜界カルデラ起源の火山灰。
- VI a層 黄褐色軽石混淡茶褐色土。
- VI b層 黄褐色軽石層。P11と呼ばれる約7,400年前の桜島起源の軽石。
- VII層 明茶褐色土。
- VIII層 黒褐色土。
- IX層 黄白色火山灰層（薩摩火山灰）。P14と呼ばれる約11,000年前の桜島起源の火山灰。
- X層 黒褐色土。
- X I層 黄褐色軟質ローム。
- X II層 暗茶褐色軟質ローム。
- X III層 褐色土。
- X IV層 暗褐色硬質土。赤色のパミス（P-15）が点在する。
- X V層 暗褐色硬質土。
- X VI層 暗褐色硬質土。赤色のパミス（P-17）が点在する。
- X VII層 濁黄白色砂質土（二次シラス）。
- X VIII層 シラス。

第4章 確認調査

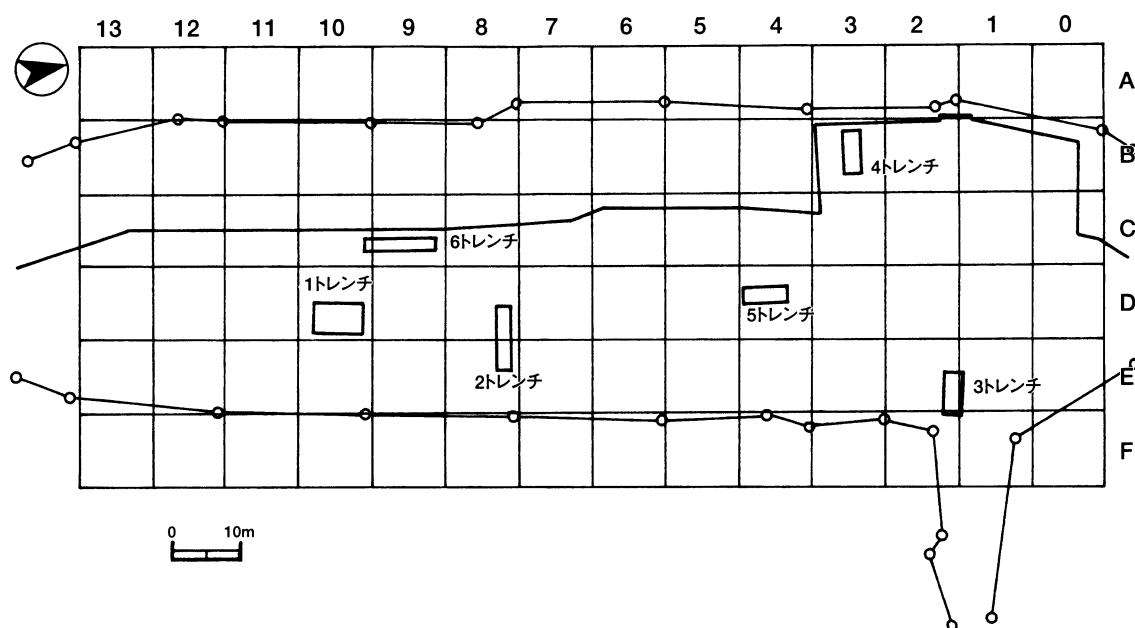
道路建設は暫定的に2車線分しか計画されていないので西側の工事を実施しない部分については調査を行わなかった。ただし、橋脚などの工事予定区域については確認トレンチを設定して調査を実施した。

確認調査対象区域の現況は畑地であったが、段差や傾斜等を考慮して6箇所にとレンチを設定した。トレンチの大きさは2.5m×6mの大きさを基本としたが、地形等を考慮して幅2m～2.5m、長さ6m～10mの大きさとした。1トレンチは幅を4.5mに拡張して調査を行った。

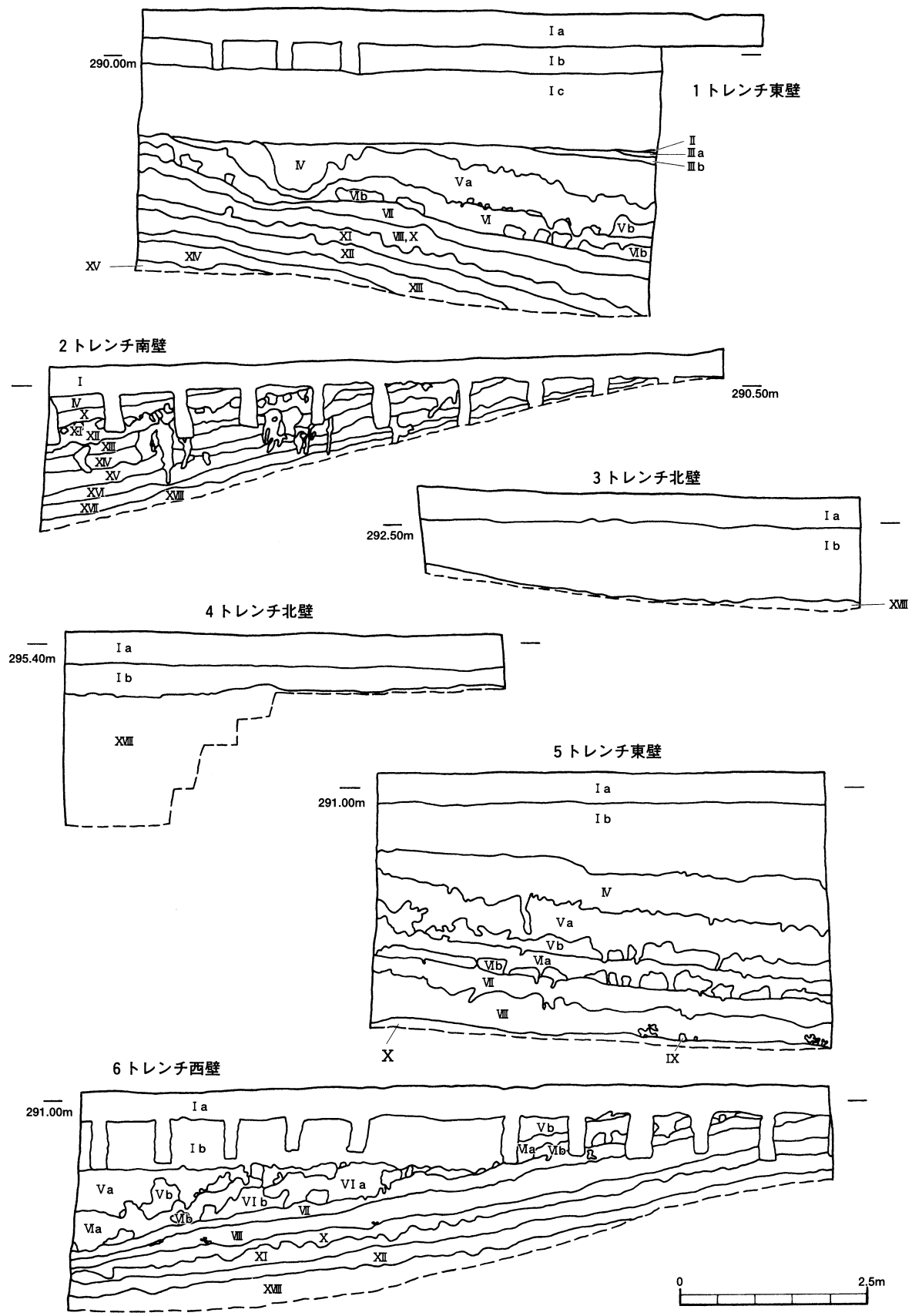
層位について見てみると、1トレンチはI a（耕作土）層の下に造成によると思われる盛土があり、枯木などが混入していた。下部は北から南へ傾斜しており、北側ではV層まで一部削平され、南側でII・III層がわずかに残るのみである。2トレンチは表土の下は西から東へ傾斜しており、東側ではIX層であるが、西側ではXVIII層のシラスとなる。3、4トレンチではI層は2層に分けられ、その下はXVIII層のシラスとなる。5トレンチは比較的安定した堆積状態であるが、II、III層は削平され2枚に分けられるI層の下はIV層である。IX層はわずかに見られるのみである。6トレンチもI層は2枚に分けられ、その下はV層となり、北から南へ傾斜している。明確なIX層は確認できなかったが、わずかにそれらしい粒子が見られたので、それをもとにVIII層とIX層を分けた。

遺物は1トレンチ及び5トレンチで土器片等を確認した。1トレンチからはIV層から土器片等が少量出土した。5トレンチではIV・V・VI・VII層から土器及び石器等が出土した。遺物の時期は縄文時代晩期及び早期である。

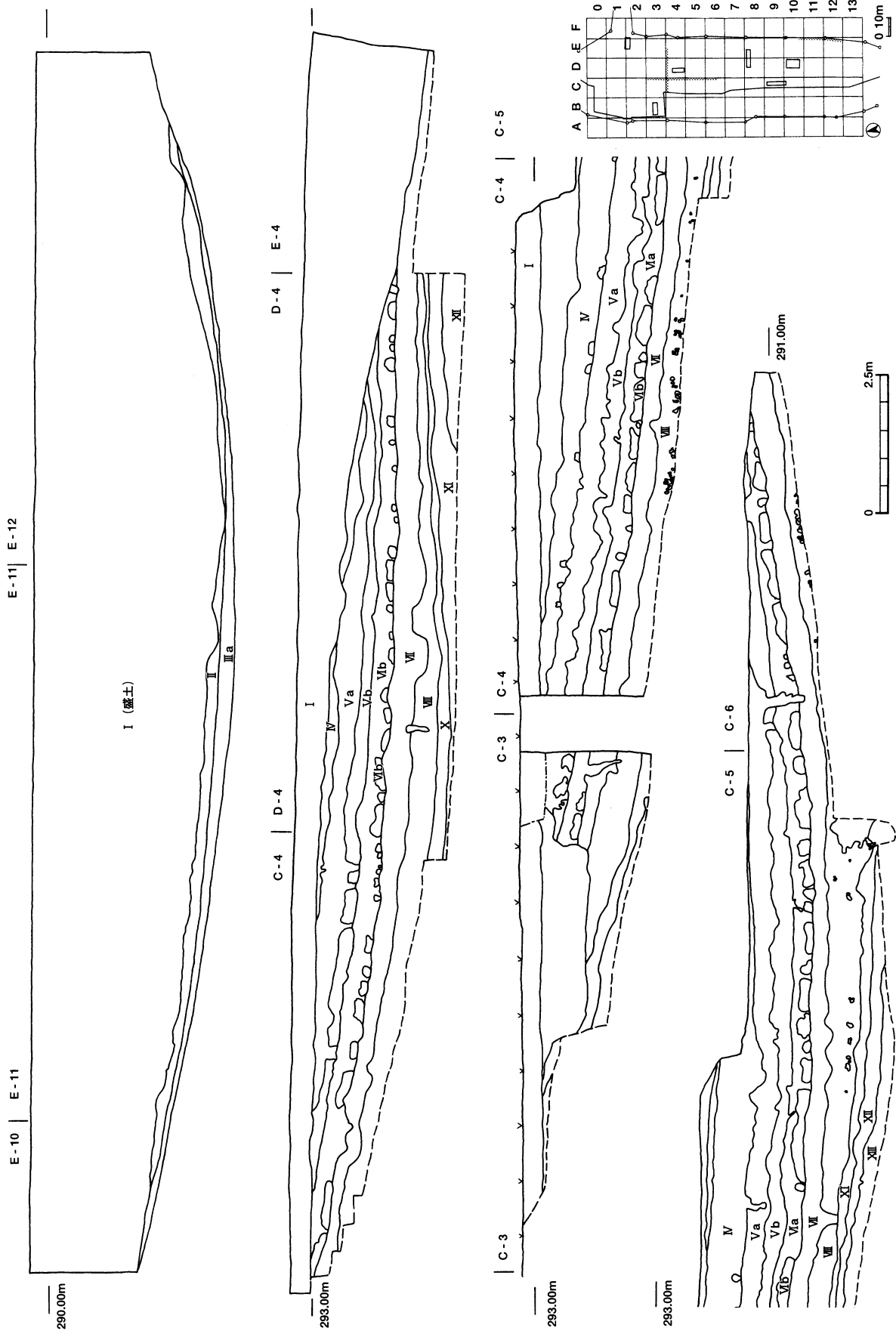
この調査結果をもとに、1トレンチ及び5トレンチの周辺部の1,100㎡について全面調査を実施した。



第5図 トレンチ及びグリッド配置図



第6図 各トレンチ土層断面図



第7図 土層断面図

第5章 全面調査

第1節 調査の概要

全面調査は確認調査により遺物が確認された1トレンチ及び5トレンチの周辺の1,100㎡について実施した。調査区の設定は、日本道路公団により設置されたセンター杭No.17とNo.18を結ぶ直線を基準とする10m×10mのグリッドを設定し、北から南へ0, 1, 2, 3…とし、西から東へA, B, C…として、No.88は5・6及びC・Dの中心とした。調査の結果、1トレンチ周辺のD・E-11区のⅢa層を中心に古代の遺物が出土し、5トレンチ周辺のC・D-4・5区でピット群等の遺構が検出された。また、C・D-4～6区においてⅣ層から縄文時代晩期の遺物が確認され、C～E-3～5区のⅦ・Ⅷ層から縄文時代早期の遺物や集石が確認された。以下時期ごとに記述していく。

第2節 縄文時代早期の調査

縄文時代早期の調査は、C～E-3～6区のⅦ・Ⅷ層を中心に行った。

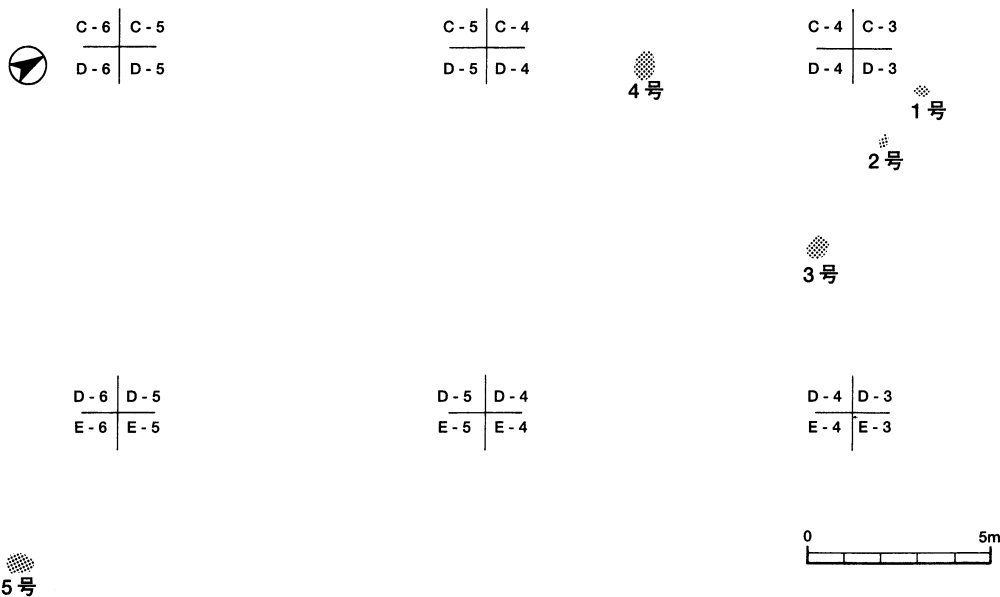
Ⅶ層の地形は5区の列で東から西へ浅い谷が入っており、遺物はこの谷部から南側斜面を中心に出土している。遺構は集石がD-3・4区及びE-6区のⅦ～Ⅷ層にかけて5基検出された。遺物もⅦ～Ⅷ層にかけて出土し、Ⅶ層とⅧ層の土器が接合するものも数点見られた。

1 遺構

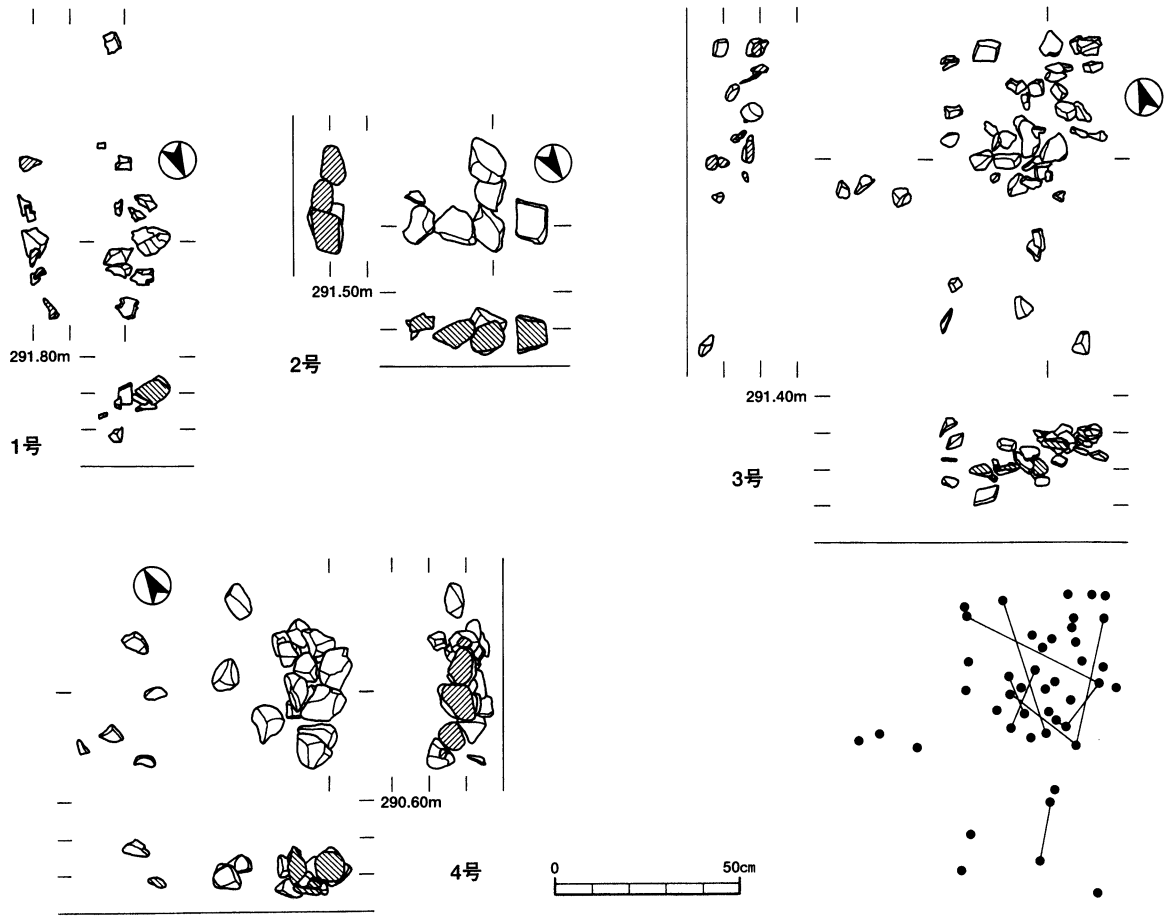
遺構は集石がD-3区から2基、D-4区から2基、E-6区から1基検出された。

1号集石（第9図）

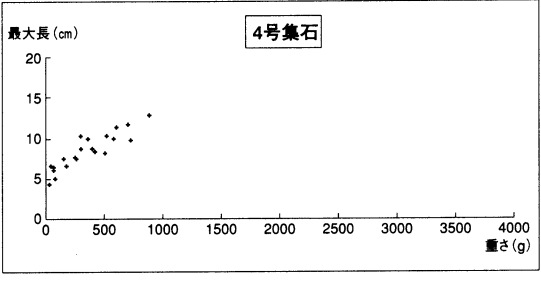
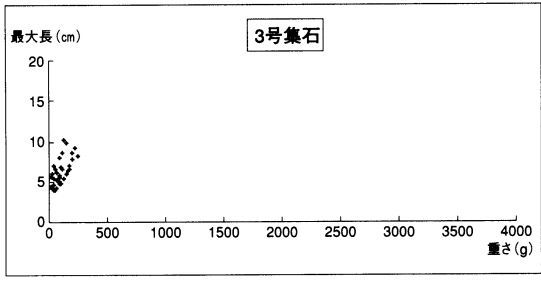
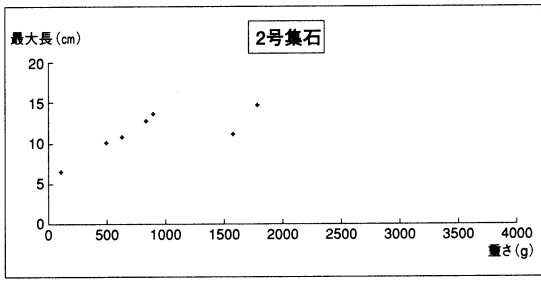
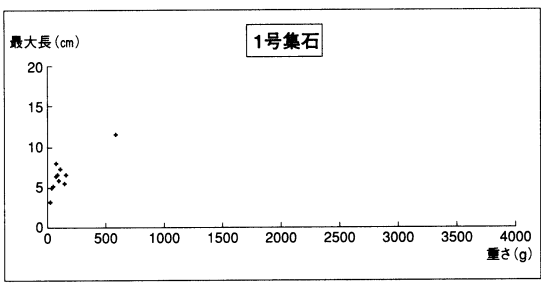
D-3区のⅦ層中で検出されたものである。約20cm×50cmの範囲に北から南へ傾斜して3cm～10cm程度の比較的小さい礫が11個検出されている。礫は火熱を受けたと考えられる破碎したものが多し。掘り込み等は確認できなかった。



第8図 集石位置図



第9図 集石 (1)



2号集石 (第9図)

1号集石と同じD-3区に検出されたもので、Ⅶ層の下面からⅧ層にかけての集石である。約30cm×40cmの範囲内に7個の礫が検出された小さい集石である。礫の大きさは10cm前後とそろっており、破碎したと思われる最小の礫1個を除いては、完形の礫である。掘り込みは確認できなかった。

3号集石 (第9図)

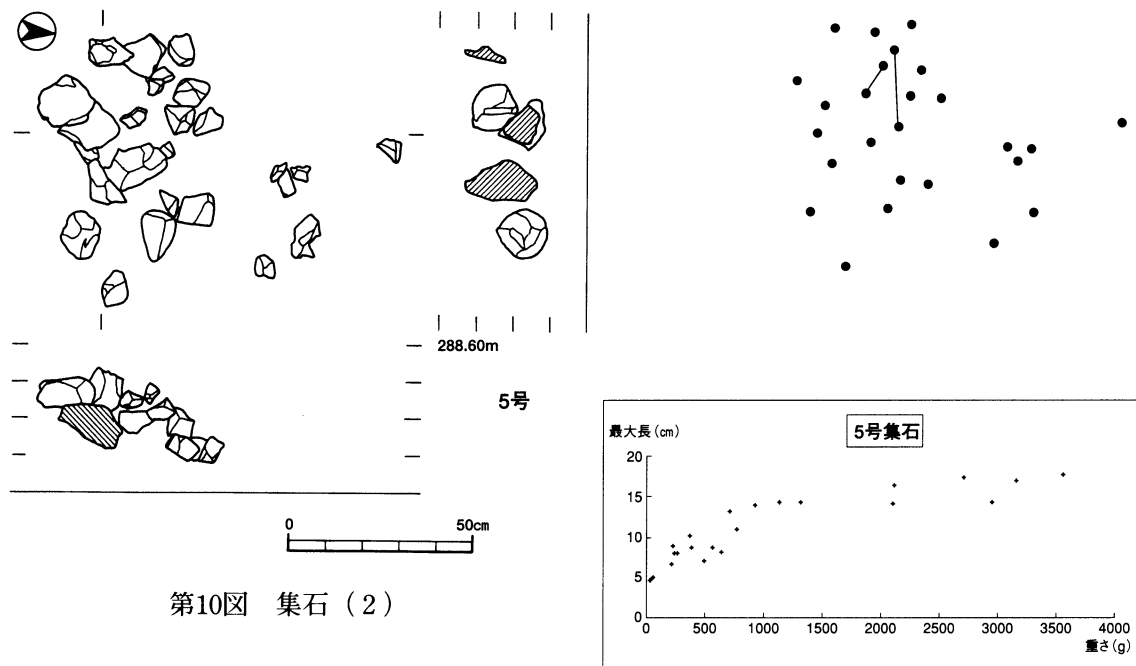
D-4区のⅦ層下部で検出された集石である。約70cm×90cmの範囲に44個の礫が検出された。中央部がややまとまっているものの、全体的には散在している状況に近い。検出レベルの高低差も20cmを超えている。礫の大きさは中央部の数個を除いて、拳大以下のものが多く、火熱によると考えられる破碎したものがほとんどである。掘り込みは確認できなかったが、埋土中に炭化物と焼土が少量見られた。

4号集石 (第9図)

D-4区のⅧ層中で検出されたものである。約50cm×70cmの範囲に検出された礫の数22個のうち15個が集中しており、残りが1方向に散在している状態である。集中部分の礫は10cm前後の大きさで完形のものが多いが、散在しているものは火熱を受けたものと考えられ、小さく破碎している。炭化物等は確認されず、掘り込みも検出されなかった。

5号集石 (第10図)

E-6区のⅧ層中で検出されたものである。1号～4号は約7mの範囲にまとまっていたが、この5号は約23m離れた位置から検出されている。約70cm×90cmの範囲に24個の礫が確認された。礫は約50cm四方にやや集中している部分と、1方向に散在する部分とがある。検出レベルにもばらつきが見られる。礫の大きさは最大で15cm程度、最小のもので5cm程度であるが、10cm前後のものが多い。小さい礫は火熱により破碎されているものと考えられる。掘り込みは確認できなかった。



第10図 集石 (2)

2 遺物

遺物はC～E-3～5区のⅦ・Ⅷ層を中心に出土した。5区の列に西から東へ入る浅い谷の部分から緩やかな傾斜の南側の斜面にまとまっている。出土遺物は土器と石器のみである。

土器 (第12図)

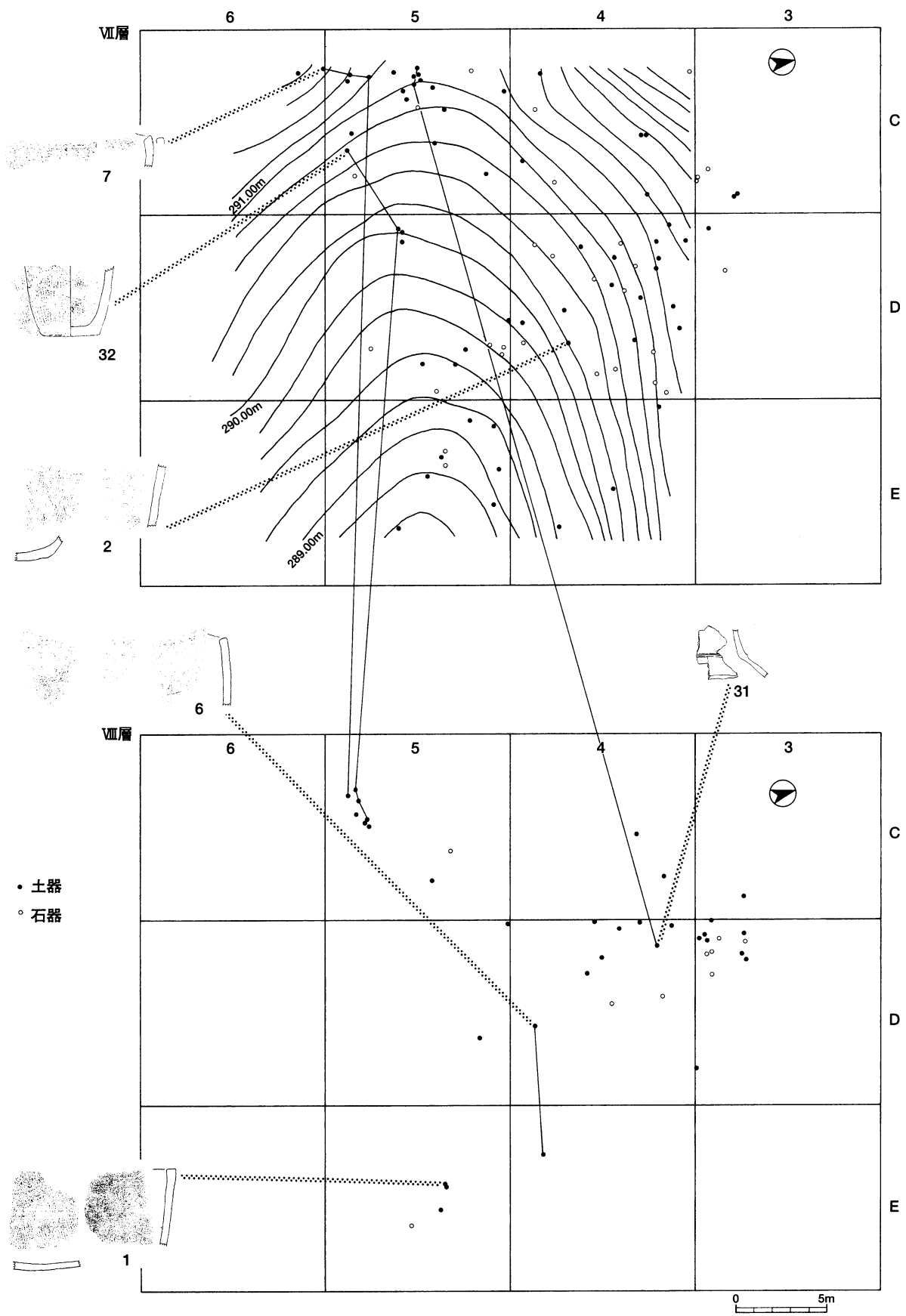
土器は小破片が多く、完形に復元できるものはなかった。

1・2は同一固体と考えられるもので、胴部から直線的に外傾しながら口縁部へと続き、口縁端部が直行するもので、口唇部は平坦である。器形は破片が小さいため明らかでないが、角筒の可能性も考えられる。口縁部は貝殻腹縁による細かい波状の刺突文を平行に7～8条施文する。胴部はこれも貝殻腹縁によると思われる条痕を綾杉状に施文した後、貝殻によると思われる3～4条を1単位とする連点状の刺突文を数条廻らす。内面は丁寧なナデ仕上げである。

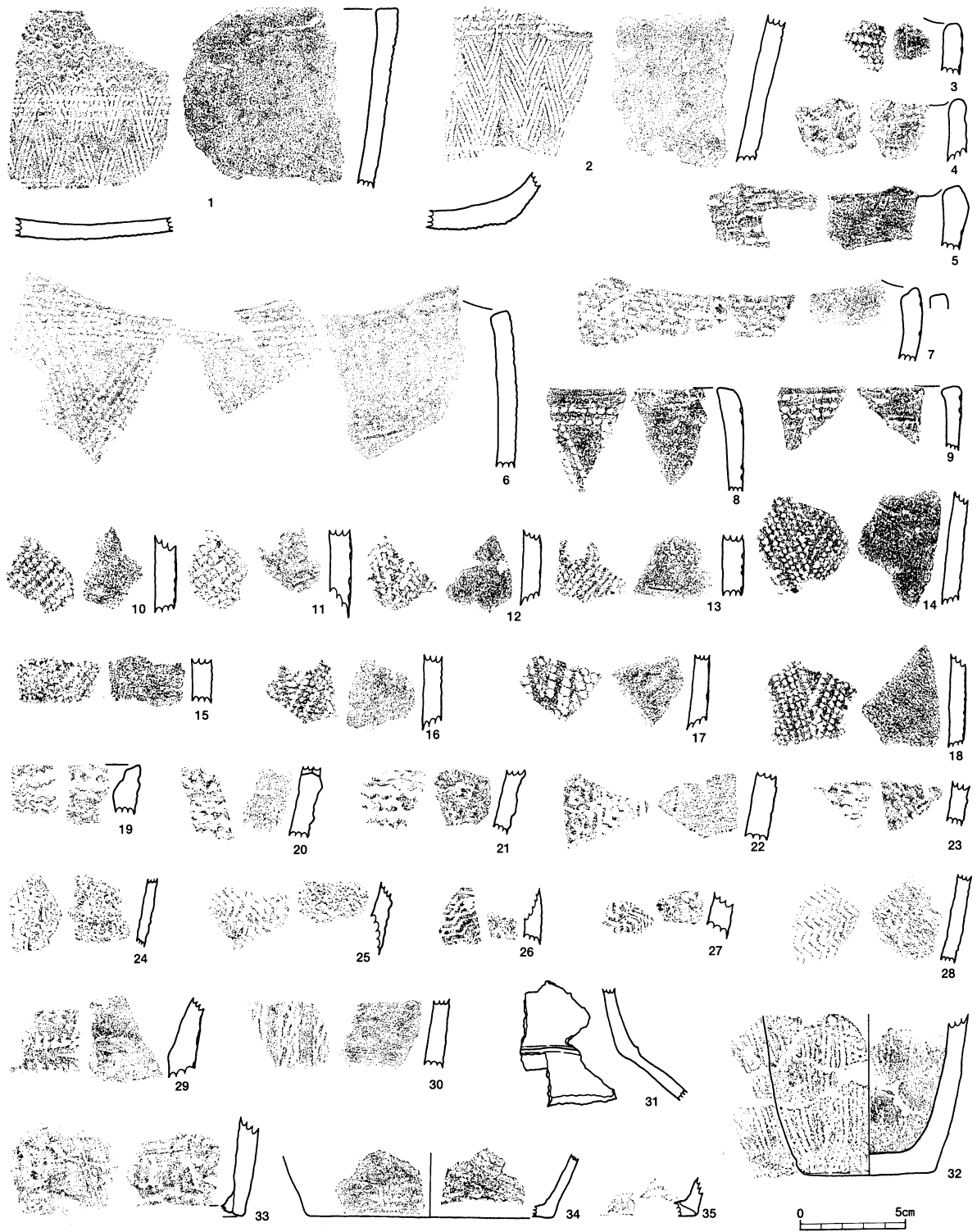
3～18は貝殻腹縁によると思われる連点状の刺突文を施すものである。3～5・7は刺突文を横位に数条廻らす口縁部の破片である。破片が小さいため器形ははっきりしないが、いずれもわずかな山形隆起するものである。7はわずかに内湾する。5は外面にこぶ状の突起を持つものである。6はわずかに内湾する山形の口縁部である。口唇部は平坦で内傾する。口縁端部は数条の刺突文を水平に廻らしており、山形の部分は条数が多くなっている。口縁部下位は7～8条を単位とする斜位の刺突文を交互に施文している。このため、無文部が三角形状に残る部分がある。内面は丁寧なナデ仕上げである。胎土に金雲母を混入している。8・9はわずかに内湾する口縁部である。口縁部は2～3条の刺突文を廻らし、下位は数条の斜位の刺突文を交互に施文し、三角形状に無文部が残る点は6と同様である。口唇部はいずれもほぼまっすぐであるが、8はやや外傾し、9はやや内傾している。10～18は胴部の破片である。いずれもほぼ直行するものと考えられるが、小破片のため、はっきりしない。文様は数条単位の斜位の刺突文を交互に施文するが、破片が小さく全体の文様構成は明らかでない。内面はいずれもナデ仕上げで、胎土にはいずれも金雲母を混入している。

19～28は押型文土器である。いずれも山形押型文であるが、19～23は山形の幅が広くやや粗いもので、24～28は山形の幅が19～23に比較して狭いものである。19は内面の口縁端部にも外面同様の押型文を施すものである。このため口唇部の断面は三角形状に尖っている。20には内面と外面の両方から穿孔したと見られる補修孔がある。24・25・27・28は胎土に金雲母を混入している。いずれも破片が小さく全体の器形や文様構成等は明らかでない。

29は「く」字にくびれ、外反する深鉢の頸部の破片と考えられるものである。外面は貝殻腹縁による横位の押引状の刺突文を数条施す。30は胴部の破片である。外面の文様は網目状の撚糸文を縦位に間隔をあけて施文するものである。撚糸は明らかでない。31は壺形土器の頸部と考えられるものの破片である。くびれ部の外面に微隆起線状の断面三角形の貼付突帯を1条廻らす。破片が小さいため全体の器形や文様等は明らかでない。32～35は底部である。32は底径6.2cmである。外面は縦位の貝殻条痕文を施す。内面はケズリによる成形である。34は復元底径11.5cmである。34・35は同一個体と考えられるものである。



第11図 VII・VIII層遺物出土状況



第12図 早期の土器

第3表 早期の土器観察表

挿図	番号	出土区	層位	部位	胎土	焼成	色調		文様器面調整等		備考	
							内面	外面	内面	外面		
第 12 図	1	E-5	Ⅷ	口縁部	石,長,角,金,細礫	良	淡黄褐色		ナデ	貝殻腹縁刺突,貝殻条痕	角筒?	
	2	D-4	Ⅶ	胴部	石,長,角,金,細礫	良	淡黄褐色		ナデ	貝殻腹縁刺突,貝殻条痕	角筒?	
	3	E-5	Ⅶ	口縁部	石,長,金	普	淡褐色				貝殻腹縁刺突	
	4	E-5	Ⅶ	口縁部	石,長,角,金	良	淡茶褐	淡褐色	ナデ		貝殻腹縁刺突	
	5	C-6	Ⅶ	口縁部	石,角	良	淡黒褐	淡褐色	ナデ,スス		貝殻腹縁刺突,瘤状突起	
	6	D-4	Ⅷ	口縁部	石,長,角,金	普	淡褐色	褐色	ナデ		貝殻腹縁刺突	
	7	C-5	Ⅶ,Ⅷ	口縁部	石,長,角	良	褐色	黄褐色	ナデ		貝殻腹縁刺突,スス	
	8	E-4	Ⅶ	口縁部	石,長,角,金,細礫	良	淡褐色	淡茶褐	ナデ		貝殻腹縁刺突	
	9	D-4	Ⅵ	口縁部	石,長,角,金	良	淡褐色		ナデ		貝殻腹縁刺突	
	10	E-5	Ⅶ	胴部	石,長,角,金,細礫	良	淡褐色		ナデ		貝殻腹縁刺突	
	11	C-5	Ⅶ	胴部	石,長,金	普	褐色	黄褐色			貝殻腹縁刺突	
	12	D-3	Ⅶ	胴部	石,長,角,金	良	淡茶褐	褐色	ナデ		貝殻腹縁刺突	
	13	D-9	Ⅶ	胴部	石,長,金	普	淡褐色		ナデ		貝殻腹縁刺突	
	14	D-4	Ⅶ	胴部	石,長,金,細礫	良	淡褐色	淡茶褐	ナデ		貝殻腹縁刺突	
	15	D-5	Ⅶ	胴部	石,長,角,金	良	淡黄褐	淡褐色	ナデ		貝殻腹縁刺突	
	16	E-5	Ⅶ	胴部	石,長,角,金,細礫	良	褐色	淡茶褐	ナデ		貝殻腹縁刺突	
	17	D-4	Ⅶ	胴部	石,長,角,金	良	淡褐色	淡黄褐	ナデ		貝殻腹縁刺突	
	18	E-5	Ⅶ	胴部	石,長,金	普	暗黄褐色		ナデ		貝殻腹縁刺突	
	19	D-4	Ⅶ	口縁部	石,長,角,金,細礫	良	褐色~淡褐色		ケズリ,山形押型		山形押型	
	20	D-3	Ⅶ	胴部	石,長,角,金,細礫	良	褐色	暗黄褐	ナデ		山形押型	補修孔
	21	D-4	Ⅷ	胴部	石,長,角,金	良	淡黒褐	黄褐色	ナデ		山形押型	
	22	D-4	Ⅵ	胴部	石,長,角	良	淡黄褐色				山形押型	
	23	D-4	Ⅷ	胴部	石,長,角	良	褐色	淡黄褐			山形?押型	
	24	C-5	Ⅶ	胴部	石,長,金	良	淡褐色		ナデ		山形押型	
	25	C-4	Ⅶ	胴部	石,長,金	良	淡褐色		ケズリ		山形押型	
	26	D-4	Ⅶ	胴部	長,角	良	褐色	淡黄褐			山形押型	
	27	C-4	Ⅶ	胴部	石,長,金	良	淡黄褐	淡褐色	ケズリ?剥落?		山形押型	
	28	D-4	Ⅶ	胴部	石,長,角,金	良	淡褐色	淡黄褐	ケズリ		山形押型	
	29	6 T	一括	頸部	石,長,角	良	淡黄褐色		ナデ		貝殻腹縁刺突	
	30	C-5	Ⅶ	胴部	石,長,角,金	良	黄褐色		ナデ		網目状燃糸	
	31	C-5	Ⅶ,Ⅷ	頸部	石,長,角,細礫	良	淡茶褐色		ナデ		ナデ,突帯	
	32	C-5	Ⅶ,Ⅷ	底部	石,長,角,細礫	良	淡茶褐	淡赤褐	ケズリ後ナデ		貝殻条痕	
	33	表採		底部	石,長,角,金	良	淡褐色	淡黄褐	ナデ,一部ケズリ		ナデ,条痕	
	34	C-5	Ⅶ	底部	石,角	良	淡黒褐	暗茶褐	ケズリ		ていねいなナデ	
	35	C-5	Ⅶ	底部	石,長,角	良	褐色	茶褐色			ナデ	

石器

石器は石鏃、スクレイパー、楔形石器、石皿等計11点が出土した。このうち、石鏃1点と石皿1点がⅧ層からの出土で他はⅦ層からの出土である。

石鏃 (第13図36~39・42)

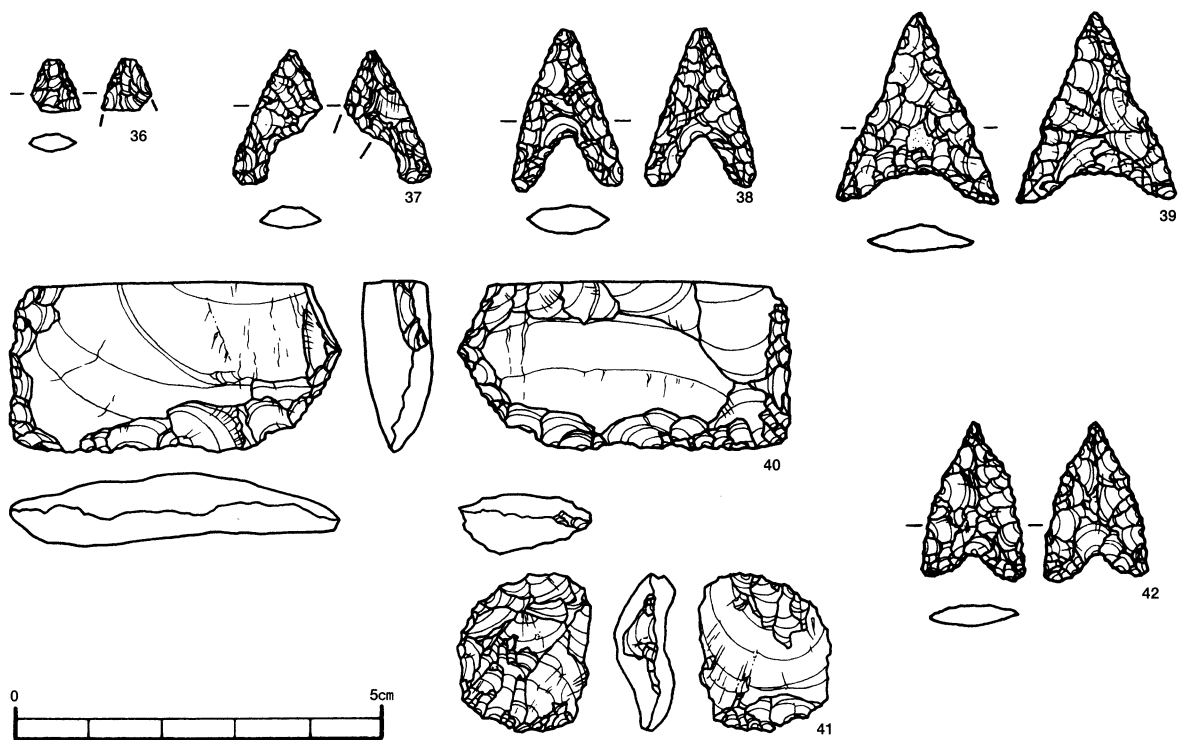
Ⅶ層から4点Ⅷ層から1点出土した。先端部のみのものと片脚が欠損したものが1点ずつある。基部の形態は凹基であり、37・38は三角形状に抉りが入り、39は弧状に抉りが入る。側縁部はほぼ直線状であるが、42は外側へ張り出している。整形は側縁及び基部ともに表裏両面から丁寧に二次加工を施しているが、中には大きな剥離も見られる。石材は黒曜石及びチャートを用いている。

スクレイパー (第13図40)

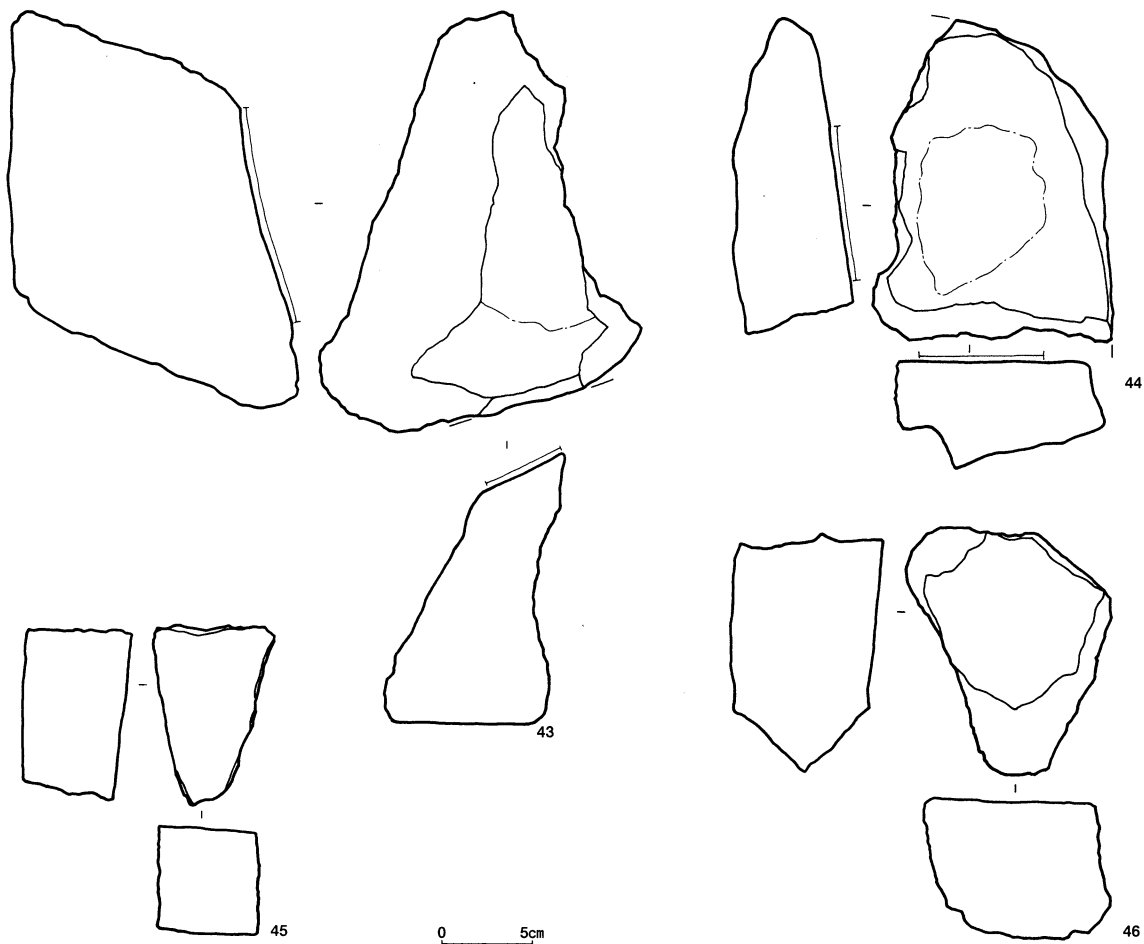
D-4区から1点出土した。石材はシルト質の頁岩を用いており、上部は節理面で割れたものと考えられる。周縁部に表裏両面とも二次加工を施し、刃部としたものである。

楔形石器 (第13図41)

D-4区から1点出土した。表裏両面ともに上下両端から対向する剥離が見られる。石材は気泡を少量含む黒色に近い透明な黒曜石を用いている。



第13図 早期の石器 (1)



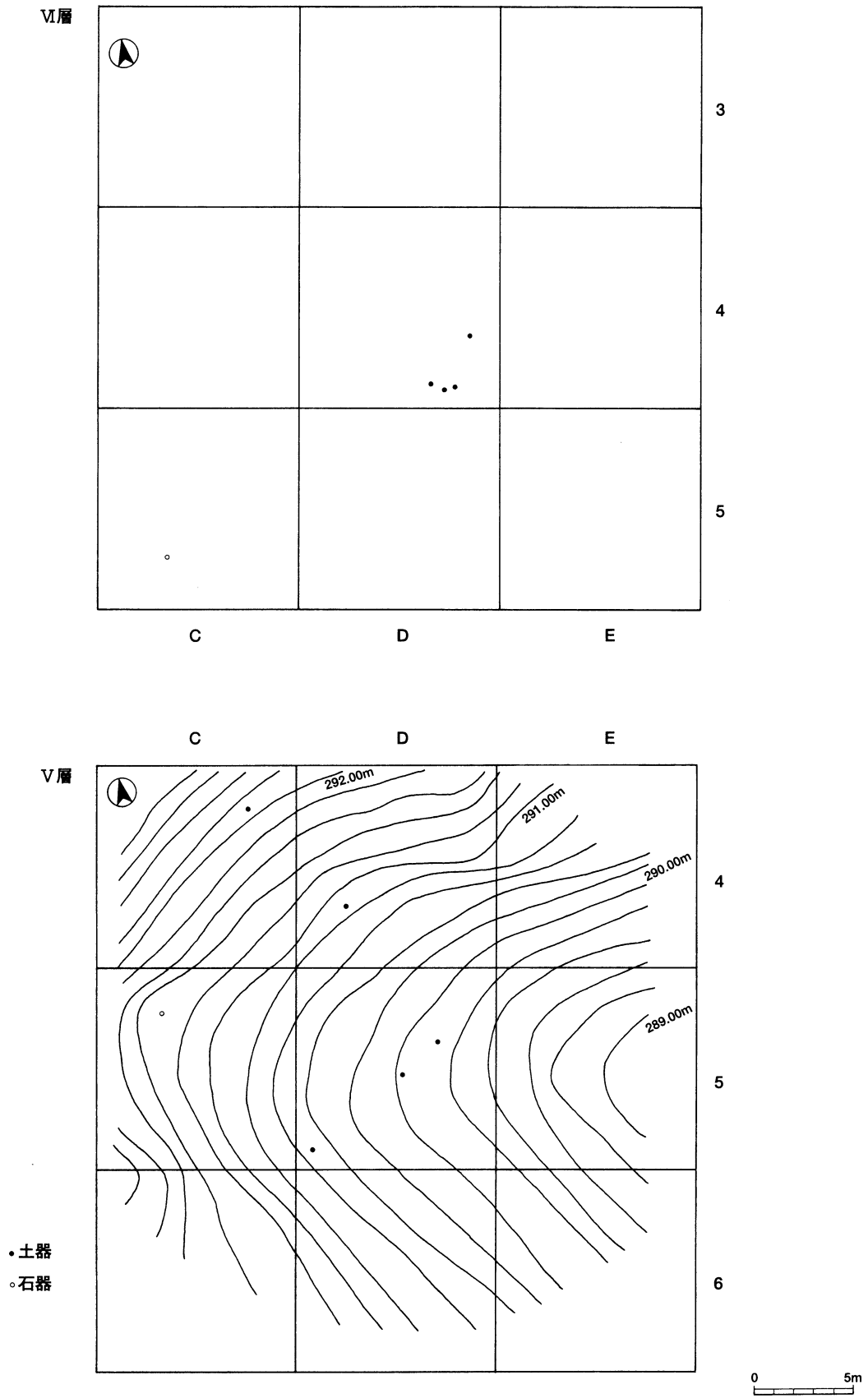
第14図 早期の石器 (2)

石皿（第14図）

計4点出土しているがいずれも破片である。46がⅧ層からの出土で他はⅦ層である。43は使用により中央部が磨り凹んでいる。石材は砂岩である。44～46は磨面は認められるものの平坦に近いものである。45は表裏両面ともに磨面が見られる。いずれも石材は安山岩である。

第4表 早期の石器計測表

挿図	番号	出土区	層位	器種	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
第13 図	36	D-3	Ⅶ	石 鏃	黒曜石	0.70	0.70	0.25	0.08	
	37	D-4	Ⅶ	石 鏃	黒曜石	1.80	1.15	0.30	0.34	
	38	D-4	Ⅶ	石 鏃	チャート	2.20	1.45	0.40	0.78	
	39	D-5	Ⅶ	石 鏃	チャート	2.60	2.20	0.35	1.02	
	40	D-4	Ⅶ	スクレイパー	シルト質頁岩	2.30	4.55	0.90	12.14	
	41	D-4	Ⅶ	楔形石器	黒曜石	1.80	2.15	0.65	2.19	
	42	D-4	Ⅷ	石 鏃	チャート	2.15	1.40	0.25	0.56	
第14 図	43	D-5	Ⅶ	石 皿	砂 岩	21.60	17.40	14.40	4,520.00	
	44	C-4	Ⅶ	石 皿	安山岩	17.30	13.20	5.80	1,900.00	
	45	D-4	Ⅶ	石 皿	安山岩	9.80	6.80	5.80	580.00	
	46	E-5	Ⅷ	石 皿	安山岩	13.30	10.60	8.10	1,410.00	



第15図 V・VI層遺物出土状況

第3節 縄文時代晩期の調査

縄文時代晩期の調査は、C～E-4～6区のIV層を中心に行った。遺構等は検出されず、遺物が出土したのみである。

土器 (第17図)

土器はIV層を中心に一部IIIb層からも出土した。出土量もそれほど多くなく、大半は小破片で、復元により器形などが明らかにできるものはなかった。種類は大きく粗製の深鉢と精製の浅鉢に分けられる。

47は粗製深鉢の破片である。外反する口縁部で、口唇部はほぼ平坦である。内外面ともにナデ整形で、外面がやや粗い。外面にはススの付着が認められる。48は「く」字状に張る胴部の破片である。内外面ともにナデ整形であるが、内面には条痕が残る。外面の張る部分より下位にススの付着がわずかに見られる。49も48同様「く」字状に張る胴部の破片と考えられるものである。外面にわずかにススの付着が見られる部分がある。内外面ともにナデ整形である。50は内外面ともにヘラミガキにより仕上げた深鉢と考えられる口縁部の破片である。外面の整形がやや粗い。口唇部はやや丸みをおびる。胎土は砂粒の混入が少なく精製粘土に近いものである。51も内外面ともにヘラミガキにより仕上げた深鉢の口縁部と考えられるものである。外面の整形がやや粗く、口唇部は丸みをおびる。52は内外面ともナデ仕上げによる粗製浅鉢の口縁部と考えられるものの破片である。口唇部はやや丸みをおびるがほぼ平坦である。外面にはススの付着が認められる。53は内外面ともヘラミガキの大型の浅鉢と考えられるものの破片である。口縁部はわずかに内湾し、口唇部はわずかに丸みをおびる。内外面ともヘラミガキであるが、内面はナデに近く、外面の整形はやや粗い。54は深鉢の底部の破片である。接地面が外側に大きく張り出し、胴部へと移行するもので、いわゆる円盤貼付の底部である。復元底径は6.7cmである。

55～57は精製浅鉢の破片で、いずれも内外面ともに丁寧な研磨が施されているものである。55は大きく外反する口縁部で、内面はわずかな段を持ち、外面には1条の沈線を廻らすものである。56は直線状に大きく延びる口縁部で、端部に近い位置に内外面ともに段を有するものである。57は丸く張る胴部の破片で、頸部でくびれ、外反する口縁部へ続くと考えられるものである。

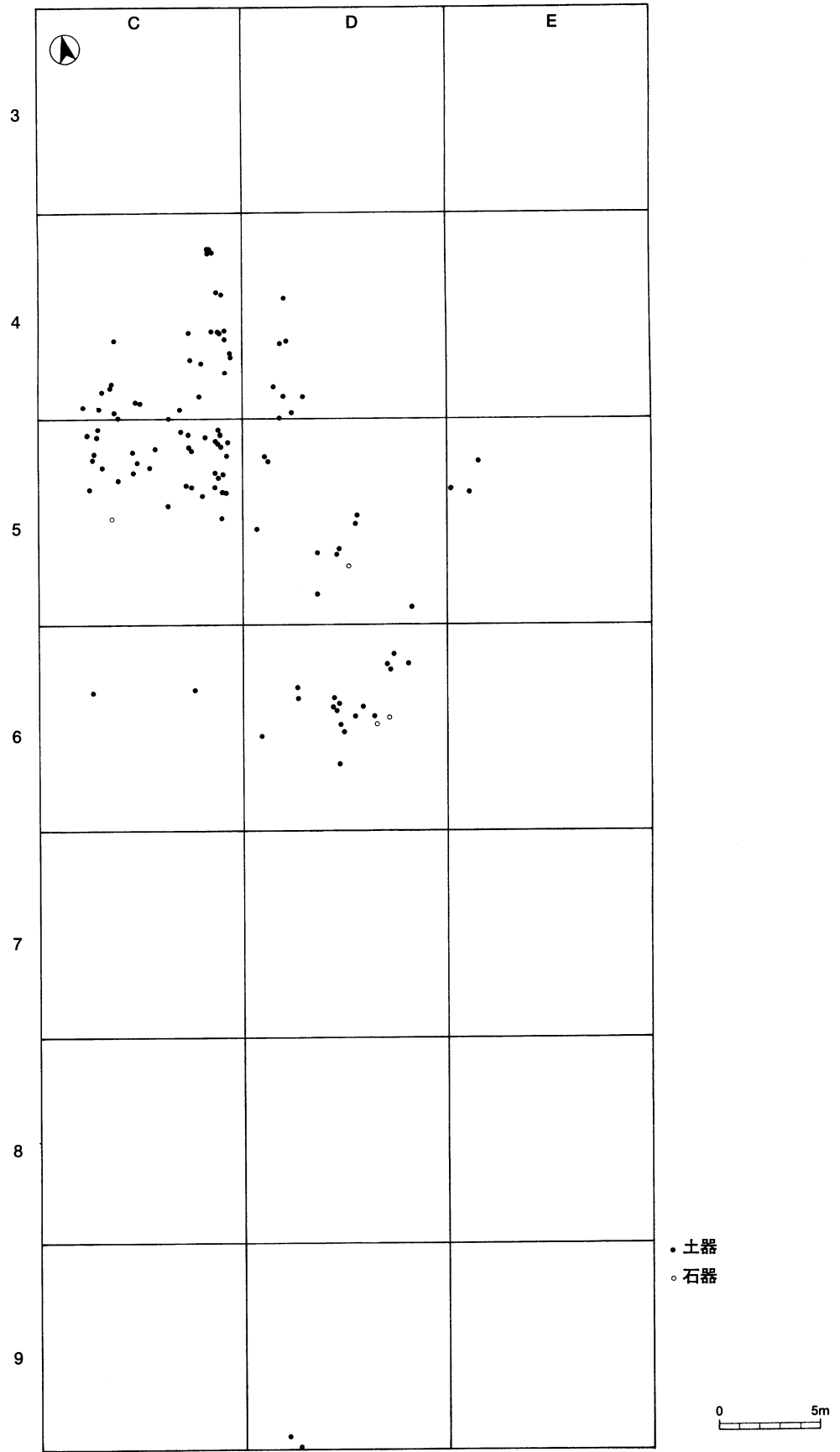
石器

石鏃 (第18図58～61)

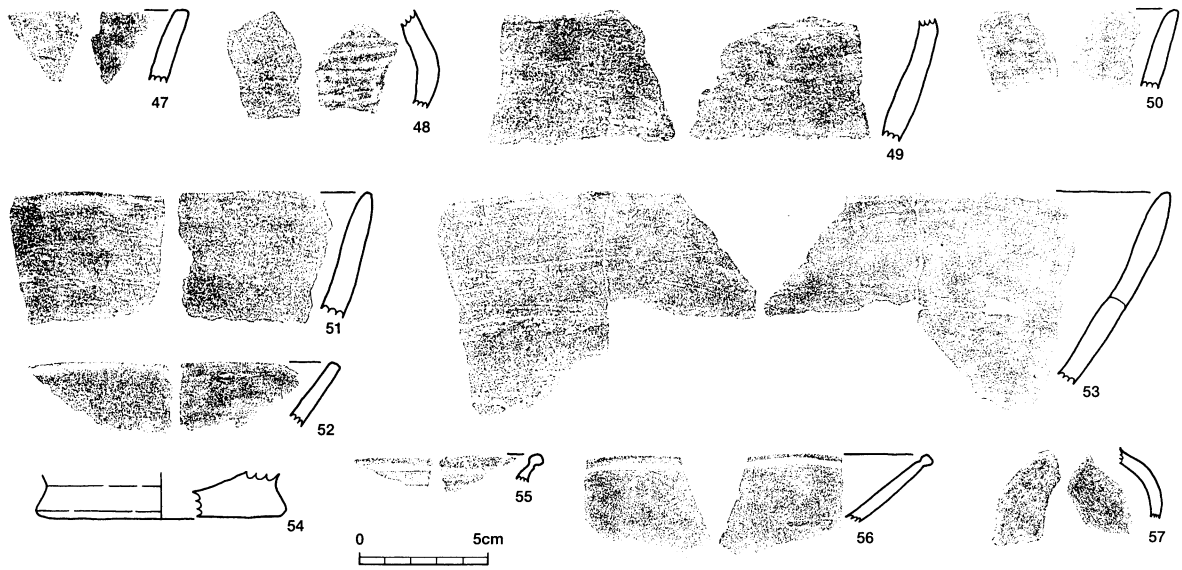
58はE-11区III a層からの出土である。基部の形態は平基に近く、弧状にわずかに抉りが入る。側縁部はわずかに張るものである。石材は黒色の頁岩を用いている。脚部が片方欠損している。59はD-11区III b層から出土している。基部の形態は凹基で三角形に抉りが入る。側縁部は先端部近くでわずかに張る。石材は石英である。60はC-5区V a層で出土している。基部は59同様三角形に抉りが入る。側縁部はやや粗い鋸歯状を呈しており、脚部近くは張り出すように作出している。石材は頁岩である。61は表採品である。基部の形態ははわずかに内湾する平基である。裏面は主要剥離面を残し、二次加工がやや粗い。石材はチャートを使用している。

二次加工剥片 (第18図62)

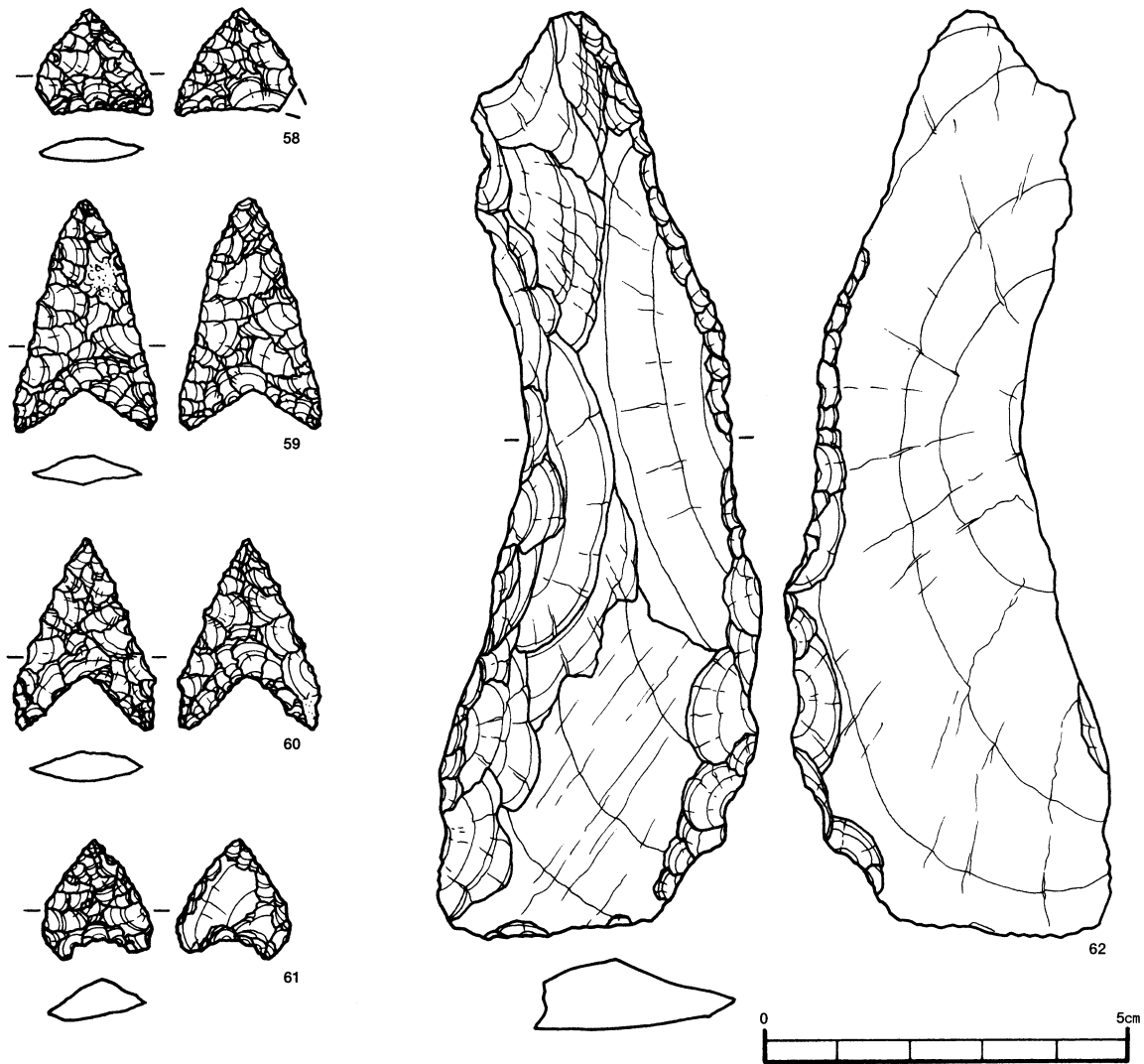
ホルンフェルス素材とし、石斧の製作途中で割れたとものを再利用し、割れた後に1側縁に表裏ともに二次加工を施したと考えられるものである。



第16図 IV層遺物出土状況



第17図 晩期の土器



第18図 晩期の石器

第5表 晩期の土器観察表

挿図	番号	出土区	層位	部 位	胎 土	焼成	色 調		文 様 器 面 調 整 等		備 考
							内面	外面	内 面	外 面	
第	47	C-5	Ⅳ	口縁部	石,長,角	良	黄褐色		ナデ	ナデ	外スス付
	48	D-6	Ⅳ	胴部	石,長,角	良	褐色~黄褐色		条痕後ナデ	ナデ	外スス付
	49	C-5	Ⅳ	胴部	石,長,角,細礫	良	淡黄褐 褐色		ナデ	ナデ	
12	50	5 T	Ⅳ	口縁部	石,長,角(少)	良	淡褐色		ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	51	D-6	Ⅳ	口縁部	石,長,角	良	淡黒褐	黒褐色	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	52	D-5	Ⅳ	口縁部	石,長,角	良	淡褐色	褐色	ナデ	ナデ	外スス付
	53	D-6	Ⅳ	口縁部	石,長,角	良	黄褐色~褐色		ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	54	C-4	Ⅳ	底部	石,長,角	良	淡褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	
図	55	C-5	Ⅲb	口縁部	精製粘土	良	褐色		研磨	研磨	
	56	D-6	Ⅳ	口縁部	精製粘土	良	淡褐色		研磨	研磨	
	57	E-6	Ⅲb	胴部	精製粘土	良	淡灰褐色		研磨	研磨	

第6表 晩期の石器計測表

挿図	番号	出土区	層 位	器 種	石 質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備 考
第 18 図	58	E-11	Ⅲa	石 鏃	頁 岩	1.95	1.60	0.30	0.61	
	59	D-11	Ⅲb	石 鏃	石 英	3.20	1.95	0.40	1.66	
	60	C-5	Va	石 鏃	頁 岩	2.65	2.00	0.35	1.14	
	61	表採		石 鏃	チャート	1.65	1.50	0.50	1.00	
	62	D-6	Ⅳ	スクレイパー	ホルンフェルス	12.70	4.45	0.95	51.84	

第4節 古代の調査

古代については、C・D-4・5区において土坑及びピット群が検出された。この区域はこの時期の本来の包含層であるⅢa層がほとんど残存しておらず、遺物はE-6区でわずかに数点出土したのみで、遺構のみの調査であった。一方、C～E-10～12区では包含層が残っており、土師器等が出土したが、遺構は検出されなかった。

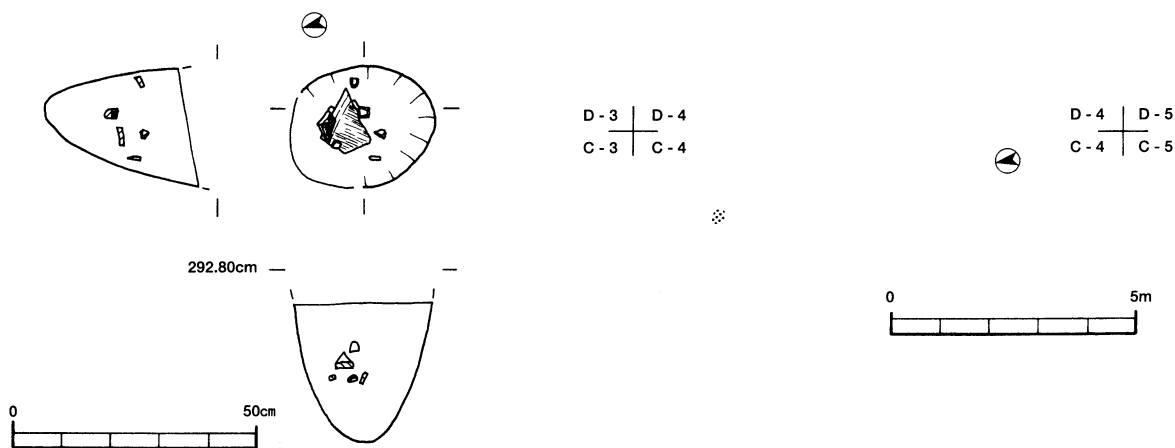
1 遺構

土坑（第19・20図）

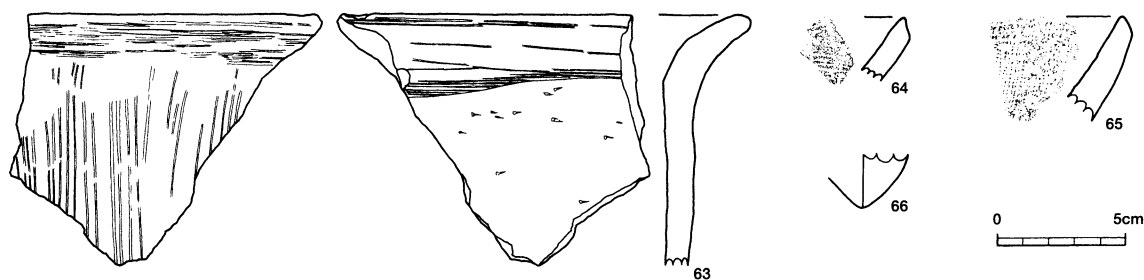
C-4区のⅣ層中で検出された。遺物包含層であるⅢaが残存していないため明らかでないが、実際の掘り込み面はこれより上位にあったものと考えられる。検出面での平面形は30cm×25cmの長円形である。断面は検出面からの深さが30cmで、底面が丸くなるV字状を呈している。

遺物は埋土中から12点出土したが、いずれも底面に密着した状態ではなかった。また、小破片が多く図化できるものは少なかった。

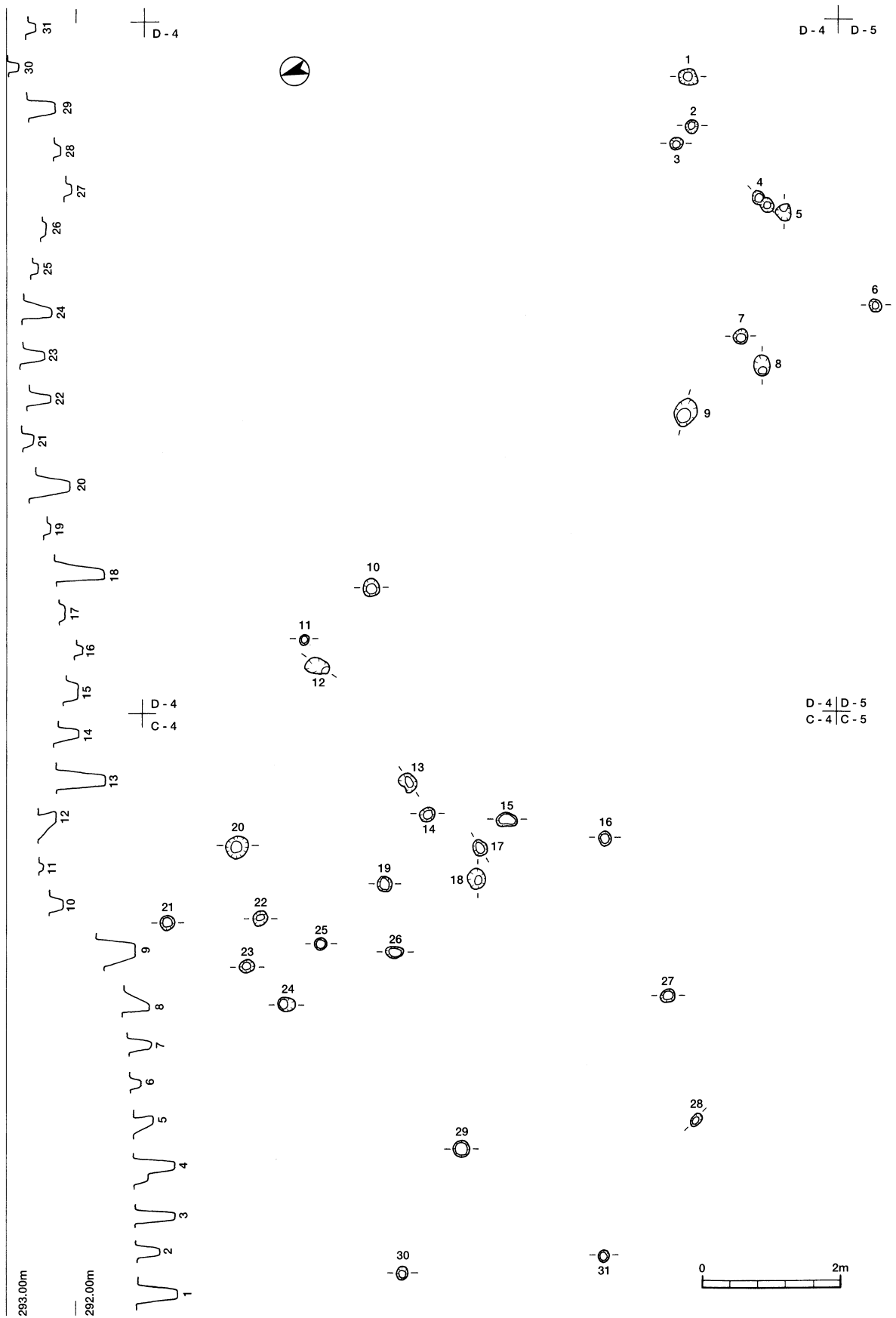
63は土師器の甕である。口縁部が大きく外反し、口唇部は丸みをおびる。内面の口縁部は刷毛による整形を行った後、ナデにより仕上げている。頸部以下はヘラケズリを施し、このためその境は明確な稜を持つ。外面は口縁部では横位のナデ調整を行い、頸部以下は縦位の刷毛目による調整である。64・65は内面に布目圧痕を持つ土器の口縁部である。胴部から直線的に外傾しながら口縁部へと続き、口縁端部は平坦で口唇部は尖る。胎土は精製粘土を用いている。66は尖底の底部である。胎土は精製粘土であり、64・65の器形の底部と考えられるが、同一個体であるかは明らかでない。



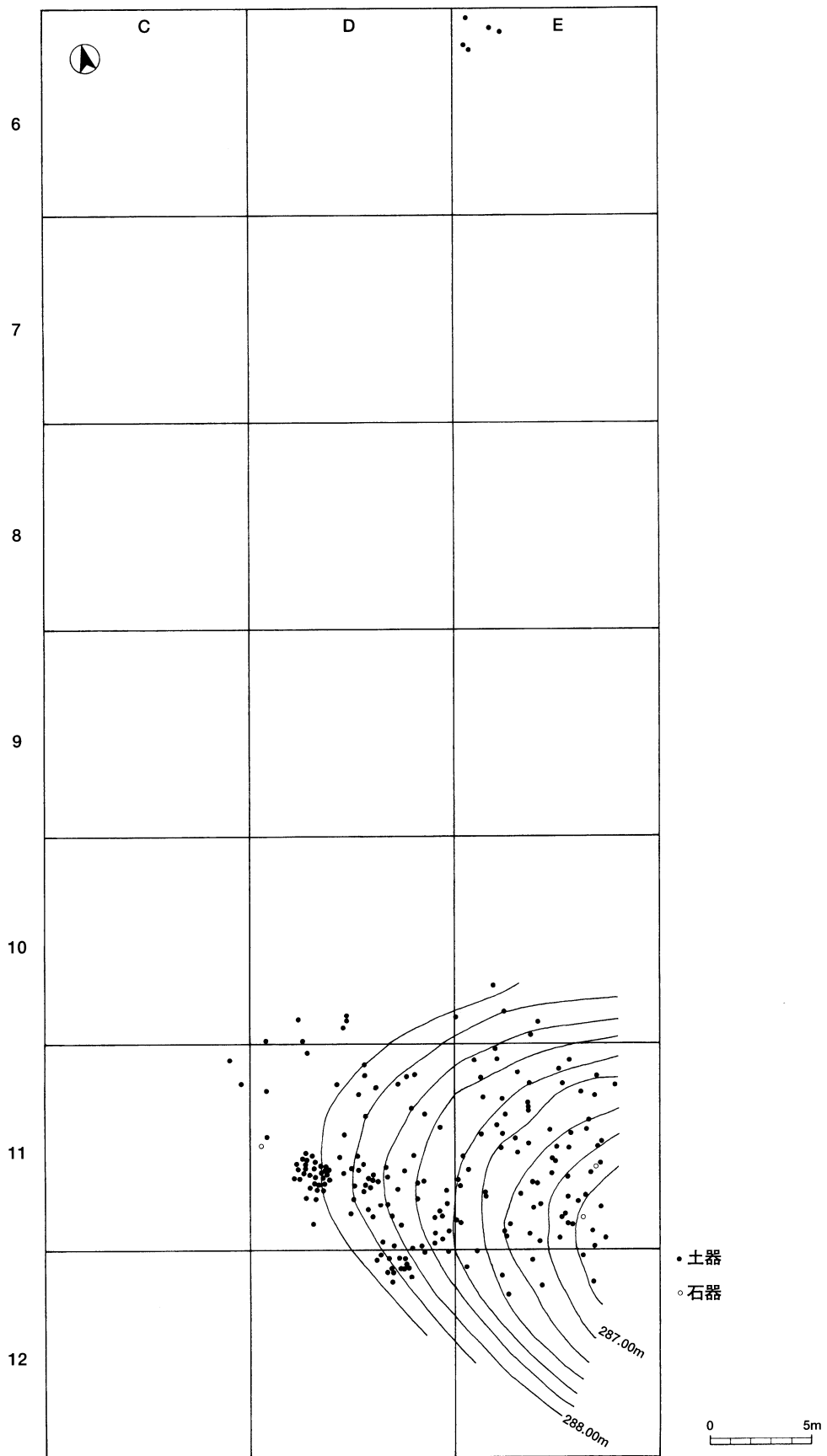
第19図 土坑



第20図 土坑内出土遺物



第21図 ピット群



第22図 III層遺物出土状況図

ピット群 (第21図)

C・D-4・5区のIV層でピット群が検出された。この区域は遺物包含層であるⅢa層が削平されており、表層の下はIV層以下の層であった。ピットはこの中で検出されたので、本来の掘り込み面はもう少し上位であったものと考えられる。また、D-4区北東部分ではピットは確認されなかったが、この部分は削平がⅥ層まで及んでいる部分であり、ピットは存在していた可能性も考えられる。ピットは合計31個確認されたが、大きさや形もそれほど規格性はなく、深さもばらつきがあり、建物の配置に並ぶものはなかった。

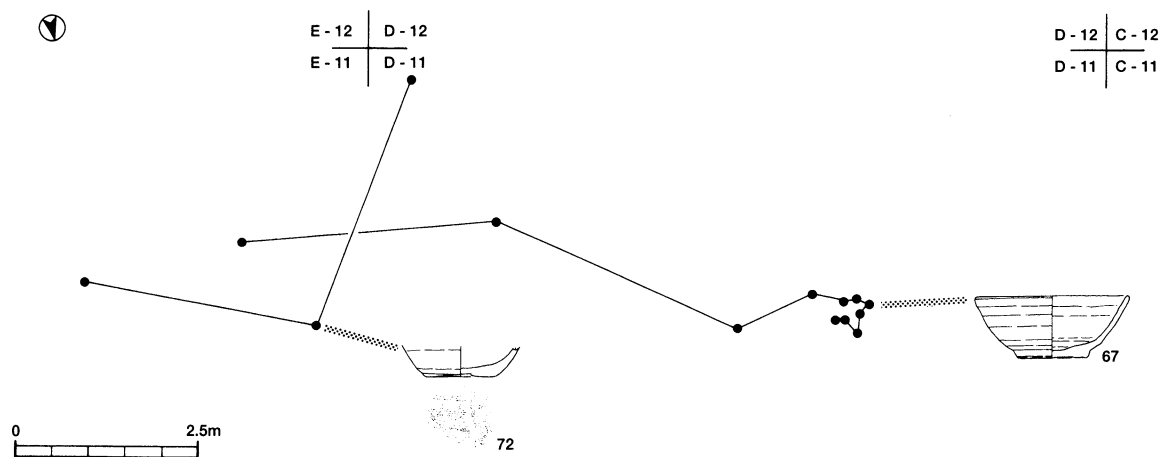
第7表 ピット計測表

番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
1	31	25	56	12	35	25	27	23	23	19	35
2	19	19	33	13	28	20	72	24	26	19	43
3	19	17	58	14	22	21	37	25	17	17	11
4	36	19	60	15	31	19	22	26	26	18	7
5	23	23	26	16	22	19	10	27	21	18	21
6	18	18	16	17	26	20	7	28	19	12	10
7	22	20	35	18	29	24	73	29	15	14	41
8	29	22	40	19	20	19	10	30	19	16	16
9	41	33	56	20	34	33	61	31	17	16	13
10	25	23	21	21	21	20	16				
11	15	14	6	22	23	20	35				

2 遺物 (第24図)

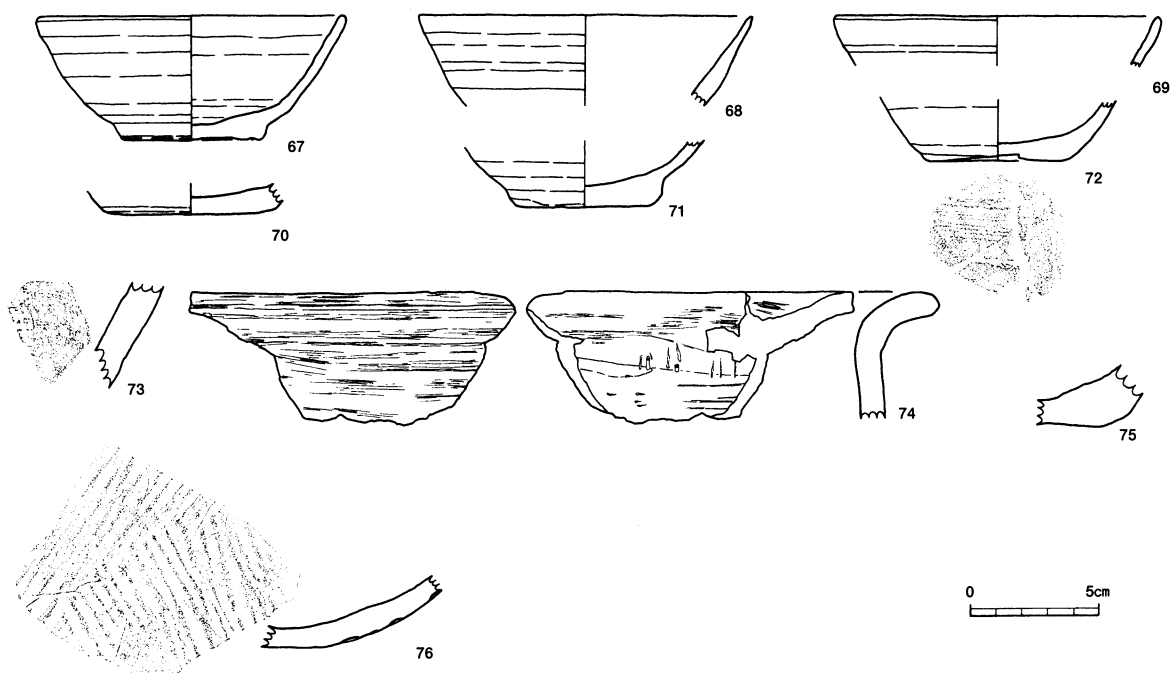
遺物はそのほとんどがC～E-10～12区から出土した。青磁の破片と須恵器の破片が数点出土しているが、ほとんどが土師器であり、内側が黒くなった黒色土器A類も数点見られた。小破片が多く、図化できるものは少なかった。

67は土師器の坏である。胎土は精製された粘土を用い、色調は淡黄褐色を呈している。器面は内外面ともに横ナデであるが底部付近はやや粗く仕上げている。底面にはヘラ切り痕が見られるが、ナデにより仕上げている。体部はやや丸みをもつ形態でやや深い。底部は円盤状で肥厚し、高台状に見える。口径11.9cm、底径5.4cm、器高4.9cmである。68～72は土師器の坏あるいは碗と考えられるものである。68・69はいずれも横ナデである。69は口縁部がわずかに内湾する。71の底部は67と同様で、肥厚することにより高台状に見えるものである。底面にはヘラ切り痕が見られる。72の底面には板目痕が見られる。73は精製粘土を用いているが、少量の砂粒を混入している。内面に布目



第23図 土師器接合図

痕が見られる。74は土師器の甕の口縁部である。口縁部が大きく外反し、口唇部は丸みをおびる。外面は横位のナデ調整を行い、内面は口縁部は横位のナデにより仕上げている。頸部以下は横位のヘラケズリの後、縦位のヘラケズリを行っている。胎土はやや粗い砂粒がめだち、中には5mm前後の細礫も見られる。75はおそらく須恵器の甕の底部と考えられるものであるが、細片のためはっきりしない。76は土師器の甕の底部と考えられるものである。外面には明瞭なタタキが見られ、内面はヘラケズリである。



第24図 古代の遺物

第8表 土坑内出土遺物観察表

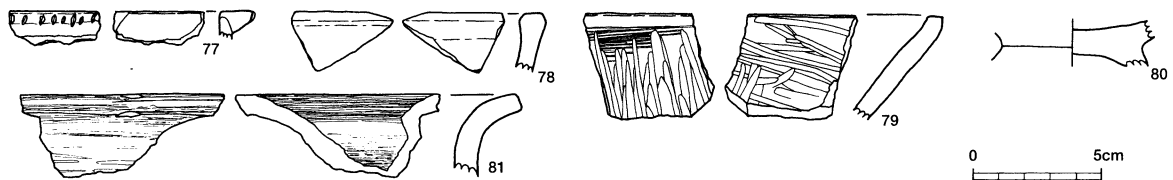
挿図	番号	出土区	層位	部位	胎土	焼成	色調		文様器面調整等		備考
							内面	外面	内面	外面	
第20 図	63	C-4土坑	埋土	口縁部	石,長,角,細礫	良	黄褐色		刷毛後ナデ,ケズリ	ナデ,刷毛(縦位)	外面ス
	64	C-4土坑	埋土	口縁部	精製粘土	普	黄橙色		布目	ナデ	
	65	C-4土坑	埋土	口縁部	精製粘土	普	黄橙色	黄褐色	布目	ナデ	
	66	C-4土坑	埋土	底部	石,長,角(少ない)	普	黄褐色			ナデ	
		C-4土坑	埋土	胴部	精製粘土	普	黄褐色		布目	ナデ	
		C-4土坑	埋土	胴部	精製粘土	普	黄褐色		布目	ナデ	
		C-4土坑	埋土	胴部	精製粘土	普	黄褐色			ナデ	
		C-4土坑	埋土	胴部	精製粘土	良	淡黄褐色			ナデ	
		C-4土坑	埋土	胴部	精製粘土	良	黄褐色			剥落	
		C-4土坑	埋土	胴部	精製粘土	良		黄橙色	剥落	ナデ	
		C-4土坑	埋土	胴部	精製粘土	良		黄褐色	剥落	ナデ	

第9表 古代の遺物観察表

挿図	番号	出土区	層位	部位	胎土	焼成	色調		文様器面調整等		備考
							内面	外面	内面	外面	
第 24 図	67	D-11	Ⅲa	完形	精製粘土	良	淡黄褐色		ナデ	ナデ	ヘラ切
	68	E-11	Ⅲa	口縁部	精製粘土	普	淡黄褐色		ナデ	ナデ	
	69	D-11	Ⅲa	口縁部	精製粘土	普	淡黄褐色		ナデ	ナデ	
	70	E-11	Ⅲa	底部	精製粘土	普	灰白色	淡黄褐色			
	71	D-11	Ⅲa	底部	精製粘土	普	淡灰黄色		ナデ	ナデ	ヘラ切
	72	E-11	Ⅲa	底部	精製粘土	良	灰黄色		ナデ	ナデ	板目痕
	73	C-4	Ⅳ	胴部	精製粘土	普	黄橙色	黄褐色	布目	ナデ	
	74	1 T	旧表	口縁部	石,長,角,細礫	良	茶褐色	褐色	ナデ,ケズリ	ナデ	
	75	E-11	Ⅲa	底部	須恵器	良					
76	C-5	Ⅳ	底部?	石,角,細礫	良	黄褐色	褐色	ケズリ,ナデ	タタキ?		

第5節 その他の遺物 (第25図)

77は甕の口縁部で、逆L字状になる端部にヘラ状の工具で刻みを施すものである。内外面ともにナデによる仕上げで、胎土は少量の砂粒を混入している。78・79は鉢形土器の口縁部と考えられるものであるが、破片が細かいため器形等ははっきりしない。78は口縁端部が肥厚している。内外面とも表面の剥落が著しく整形などもはっきりしない。79は直線的に延びる口縁部が端部で内湾気味にわずかにち上がるものである。内外面ともにヘラミガキによる仕上げであるが、端部ではわずかに横位のナデ整形痕が残る。79は胎土に精製された粘土を用いている。80は高坏あるいは台付鉢等の器形が考えられるものであるが、小破片のため明らかでない。内外面ともにミガキによる整形である。81は壺形土器の口縁部と考えられるがはっきりしない。大きく外反する口縁部は内外面とも横位のナデによる整形で、外面の頸部付近にヘラミガキの痕跡がわずかに見られる。胎土に金雲母の碎片を少量混入している。



第25図 その他の遺物

第10表 その他の遺物観察表

挿図	番号	出土区	部位	胎土	焼成	色調		文様器面調整等		備考
						内面	外面	内面	外面	
第 25 図	77	491pit	口縁部	石,長,角	良	黄褐色	暗褐色	ナデ	ナデ	
	78	491pit	口縁部	石,長,角	良	灰褐色	淡褐色			
	79	491pit	口縁部	精製粘土	良	褐色~黄褐色		ナデ後ヘラミガキ	ナデ後ヘラミガキ	
	80	表採		石,長,角	良	灰褐色~淡茶褐		ミガキ	ミガキ	
	81	491pit	口縁部	石,長,角,金	良	淡褐色	淡黄褐	ナデ	ナデ,ミガキ	

第6章 まとめ

遺跡の現況は畑であり、段差はあるもののほぼ平坦に近い状況であった。調査の結果、旧地形は全体的には西から東及び北から南へと傾斜していることが確認された。4～6区及び10～12区の2箇所付近では西から東へ緩やかに傾斜する谷状の地形となっており、旧地形は現況と違い起伏があったことが明らかになった。いつの時点かははっきりしないが、このような起伏を造成して現況の畑としたものと考えられる。この造成により、包含層が削平された部分もあり、場所によっては表層の下はシラスとなっている。その結果、谷状の部分の包含層が残り、遺物も残存したのと考えられる。4～6区周辺においては縄文時代早期・晩期の遺構・遺物及び古代のピット群と少量の遺物が確認されており、10～12区周辺においては古代の遺物が確認された。これらのことから考えると、遺跡全体の調査を行っていないので断定的なことは言えないが、縄文時代早期及び晩期は調査区の北側がその活動範囲であり、古代は調査範囲のほぼ全域に広がっている可能性が考えられる。

縄文時代早期の遺物は数型式の土器が出土しているが、量はそれほど多くはない。1, 2の口縁端部がわずかに内湾し、口唇部は水平となる器形及び胴部の短い綾杉状の条痕文については、近年桑ノ丸式と呼んでいる土器に類似している。しかし、この条痕文と口縁部の貝殻腹縁による波状の刺突文及び連点状の刺突文の組み合わせは、西之表市下剥峯遺跡や鹿屋市打馬平原遺跡等で確認されているが類例は多くない。桑ノ丸式は石坂式と近い関係にあるとされるが、石坂式以降には角筒の器形は確認されておらず、再検討が必要であろう。3～18は近年下剥峯式土器と呼ばれているものの範疇で捉えることのできるものである。特に、内湾する口縁部は下剥峯式の特徴としてあげられる。6, 8, 9のように三角形の無文部を持つ土器は鹿屋市の打馬平原遺跡の12a, 12b類土器に類似する。この下剥峯式は先の桑ノ丸式とともに石坂式に近い位置に置かれている。19～28は押型文土器である。文様は19～23が24～28に比較してやや粗い。小破片のため型式は特定できない。29, 30は塞ノ神式土器で29は貝殻文施文の塞ノ神B式、30は撚糸文施文の塞ノ神A式である。31はA式に伴う壺型土器の破片と考えられるものである。32は石坂式系土器の胴部から底部の破片であると考えられる。

晩期の土器については、小破片が多く型式の特定は困難であるが、54, 55, 57から黒川式土器の可能性が考えられる。

古代については、ピット群が検出されているが建物が建つ配置には並んでいない。調査区は一部上部が削平されている部分があり、このことを考慮すると掘立柱建物跡が存在した可能性は否定できない。遺物については64～66, 73のような内面に布目の圧痕を持つ尖底の焼塩土器が出土している。このような土器は、遺跡の所在する大隅半島北部の古代の遺跡から多く出土する傾向にある。時期については、小破片が多いことから特定することは困難であるが、67の土師器は9世紀末～10世紀初のものと考えられる。

《参考文献》

- 1 鹿児島県教育委員会 「桑ノ丸遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財報告書(7) 1977
- 2 西之表市教育委員会 「下剥峯遺跡」 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書 1978
- 3 鹿屋市教育委員会 「打馬平原遺跡」 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(8) 1988

圖 版



遺跡近景 (南西から)



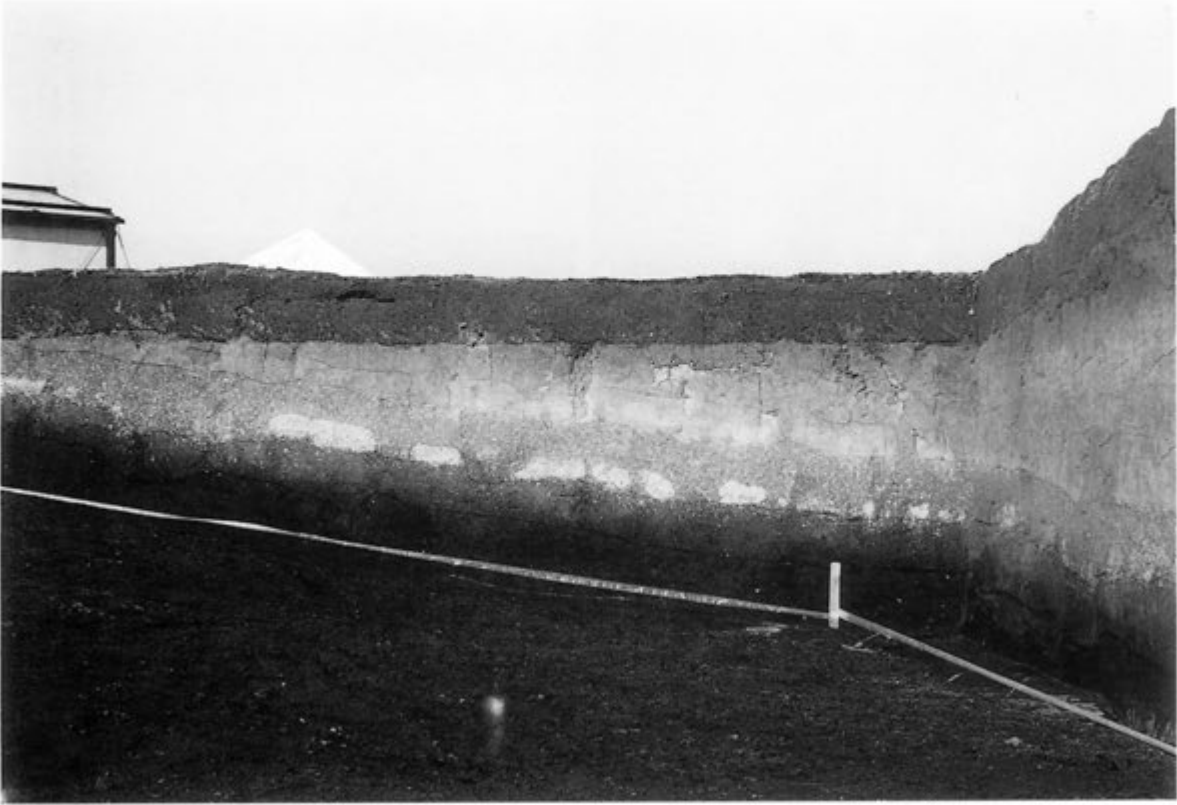
遺跡近景 (南から)



調査風景 (D-4~6区Ⅵ層上面)



調査風景 (C-5区)



土層断面 (C-4区北壁)



土層断面 (C-4~6区東壁)



1号集石



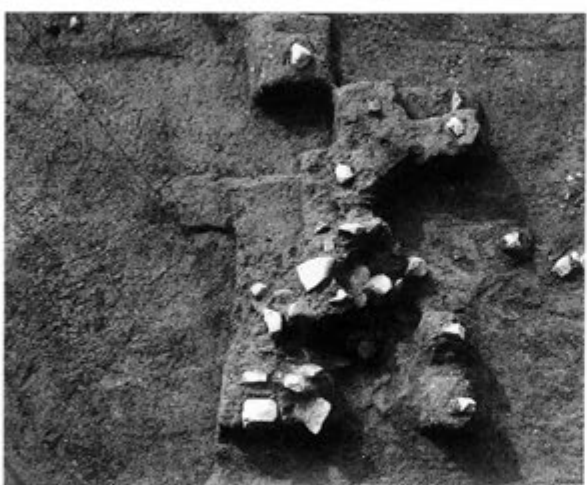
4号集石



2号集石



5号集石



3号集石



ピット群完掘状況 (C-4区)



ピット群完掘状況 (D-4・5区)



遺物出土状況 (D-11区Ⅲ a層)



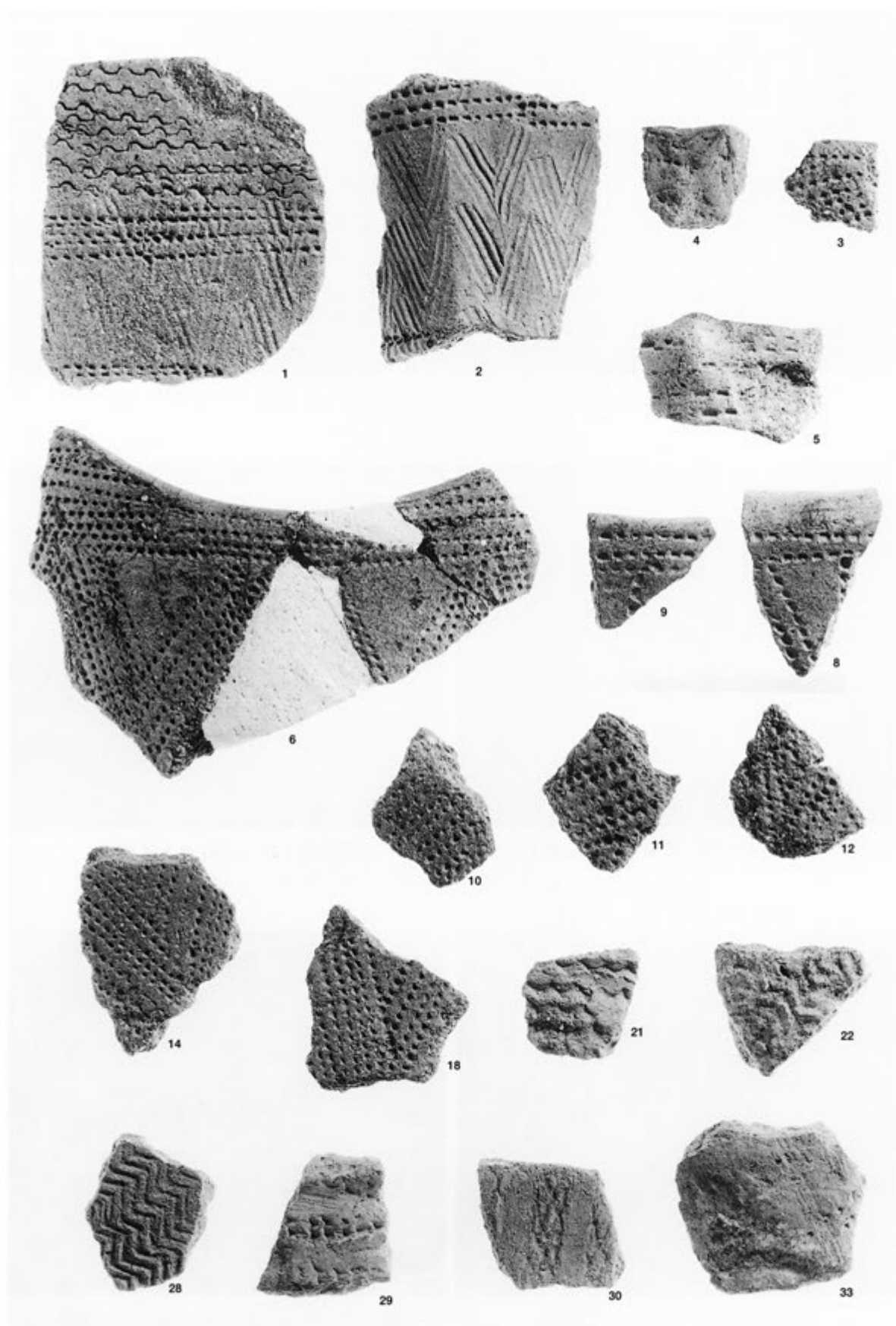
遺物出土状況 (D-5区Ⅶ層)



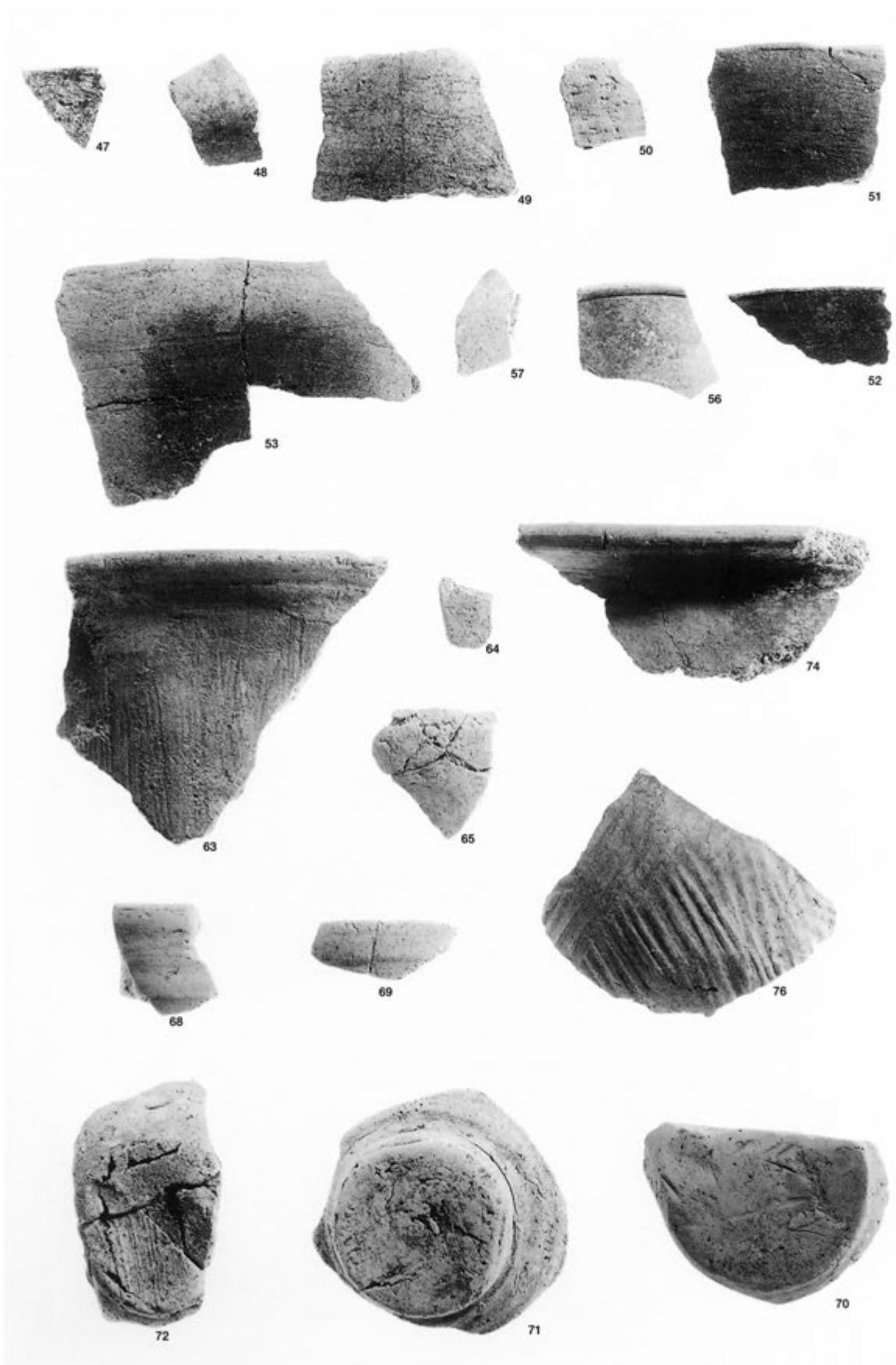
遺物出土状況 (D-4区Ⅶ層)



遺物出土状況 (C-4～6区Ⅶ・Ⅷ層)



出土遺物 (1)



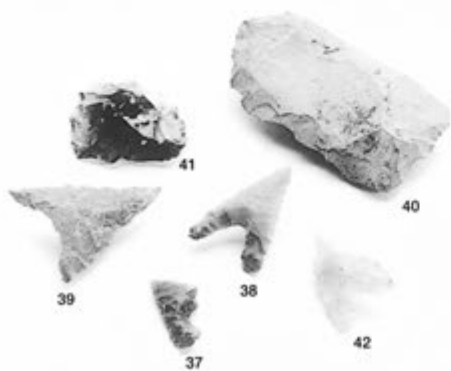
出土遺物 (2)



32



57



41

40

39

38

37

42



61

60

59

58

62



43



44



45



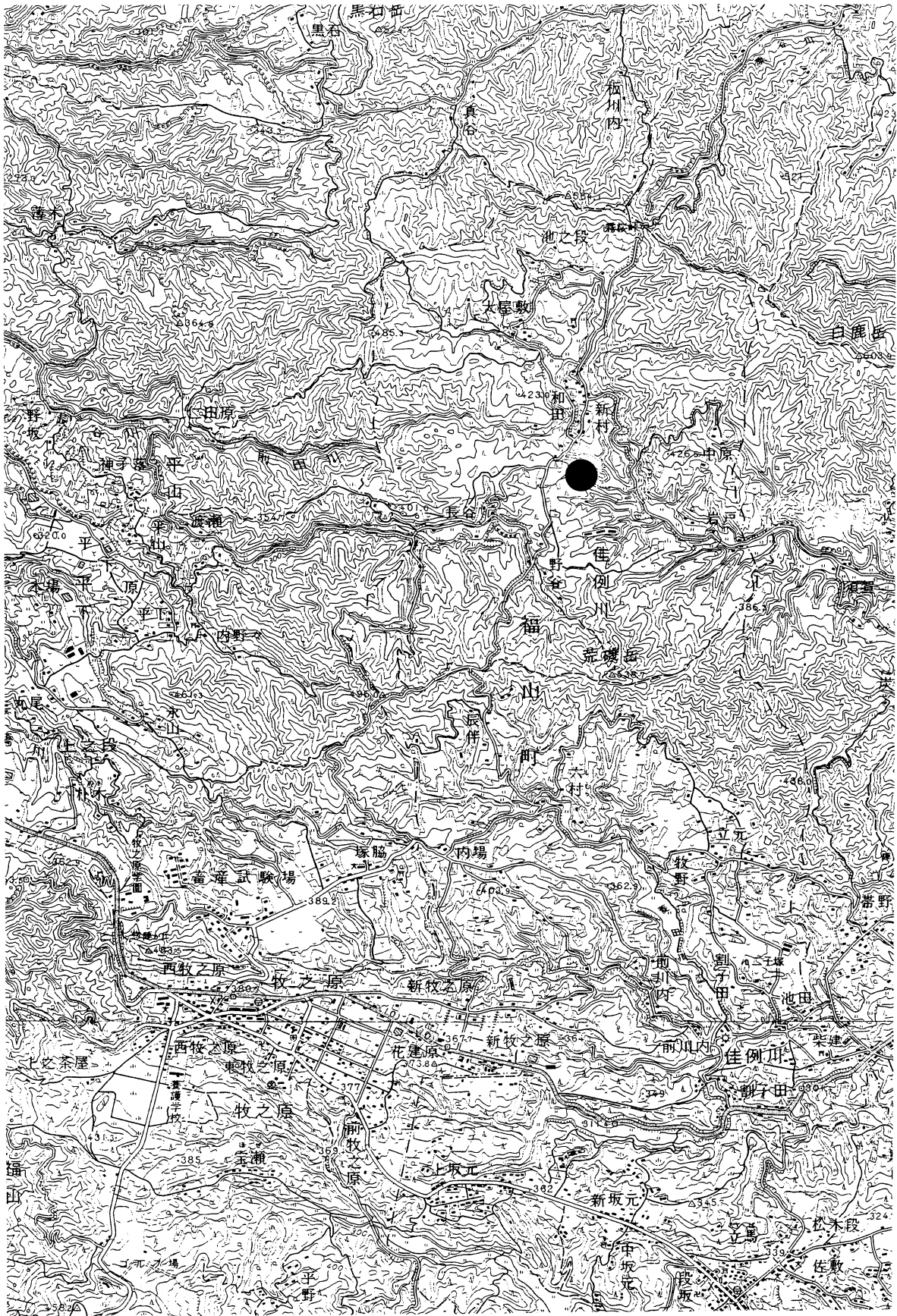
46

出土遺物 (3)

供養之元遺跡

報 告 書 抄 録

ふりがな	くようのもといせき								
書名	供養之元遺跡								
副書名	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
巻次	I								
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書								
シリーズ番号	36								
編集者名	野邊盛雅・山崎克之								
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター								
所在地	〒893-5652 鹿児島県始良郡始良町平松6252番地 TEL0995-65-8787								
発行年月日	2002年3月31日								
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
くようのもと 供養之元	かごしまけん 鹿児島県	市町村	遺跡番号	31°	130°	確認調査	9,000㎡	東九州自動車道建設(末吉IC~国分IC間)に伴う埋蔵文化財発掘調査	
		464518	62-23	42′	53′	19970421			
	あいらくん 始良郡	ふくやまちょう 福山町	かれいがわ 佳例川		43″	8″			}
						19971009			
						全面調査			
						19981104			
					}				
					19990324				
					19990901				
					}				
					19991130				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
供養之元	包含地	縄文時代早期	集石遺構 落し穴状遺構 溝状遺構	手向山式土器 平椀式土器 塞ノ神式土器 石鏃 石匙 スクレイパー		異形石器 (2点)			



遺跡の位置図

本文目次

報告書抄録

遺跡位置図

目次

第1章 調査の経過	51
第1節 調査に至るまでの経過	51
第2節 調査の組織	51
第3節 調査の経過（日誌抄）	53
第2章 遺跡の位置及び環境	56
第1節 位置と特色	56
第2節 歴史的環境	60
第3章 土層模式柱状図	63
第4章 縄文時代の調査	68
第1節 調査の概要	68
第2節 遺構	70
1 集石遺構	70
2 落とし穴状遺構	81
第3節 遺物	86
1 土器	86
2 石器	101
第5章 古墳時代の調査	129
第1節 調査の概要	129
第2節 遺構	129
第3節 遺物	129
第6章 まとめ	131

表目次

第1表 I-2類土器（Ⅵa・Ⅶ層出土）	95
第2表 I-3類土器（Ⅵa・Ⅶ層出土）	96
第3表 Ⅳa・Ⅴ類土器（Ⅲ・Ⅳa層出土）	97
第4表 Ⅶ層出土石器観察表（1）	118
第5表 Ⅶ層出土石器観察表（2）	119
第6表 Ⅵ層出土石器観察表	124
第7表 Ⅴ層出土石器観察表	125
第8表 Ⅳ層出土石器観察表	127

挿 図 目 次

第1図	国分図幅における地形分類（5万分の1）	59
第2図	国分図幅における水系図（5万分の1）	59
第3図	横市川・前田川の河床断面曲線	59
第4図	遺跡周辺の地形図	61
第5図	調査区と周辺の地形	62
第6図	供養之元遺跡土層模式柱状図	63
第7図	土層断面図（1）	64
第8図	土層断面図（2）	65
第9図	土層断面図（3）	66
第10図	土層断面図（4）	67
第11図	トレンチ及びグリッド配置図	68
第12図	Ⅷ層上面地形図及び早期集石位置図（1号～20号）	69
第13図	集石（1）	72
第14図	Ⅶ層出土石器（17）	72
第15図	集石（2）	73
第16図	集石（3）	74
第17図	集石（4）	75
第18図	集石（5）	76
第19図	集石（6）	77
第20図	集石（7）	78
第21図	集石（8）	79
第22図	集石（9）	80
第23図	落とし穴状遺構位置図	82
第24図	落とし穴状遺構図（1）	83
第25図	落とし穴状遺構図（2）	84
第26図	落とし穴状遺構図（3）	85
第27図	I-1類土器実測図	87
第28図	I-2類土器拓本	88
第29図	I-3類土器拓本	89
第30図	II-1類土器実測図	90
第31図	II-2類土器拓本	91
第32図	III-A-1, III-A-2類土器実測図	92
第33図	III-B-1類土器	93
第34図	IV類土器拓本	94
第35図	V類土器拓本	95

第36図	Ⅶ層遺物出土分布図	99
第37図	Ⅵ・Ⅴ層遺物出土分布図	100
第38図	Ⅶ層出土石器(1)	102
第39図	Ⅶ層出土石器(2)	103
第40図	Ⅶ層出土石器(3)	104
第41図	Ⅶ層出土石器(4)	105
第42図	Ⅶ層出土石器(5)	106
第43図	Ⅶ層出土石器(6)	107
第44図	Ⅶ層出土石器(7)	108
第45図	Ⅶ層出土石器(8)	109
第46図	Ⅶ層出土石器(9)	110
第47図	Ⅶ層出土石器(10)	111
第48図	Ⅶ層出土石器(11)	112
第49図	Ⅶ層出土石器(12)	113
第50図	Ⅶ層出土石器(13)	114
第51図	Ⅶ層出土石器(14)	115
第52図	Ⅶ層出土石器(15)	116
第53図	Ⅶ層出土石器(16)	117
第54図	Ⅵ層出土石器(1)	119
第55図	Ⅵ層出土石器(2)	121
第56図	Ⅵ層出土石器(3)	122
第57図	Ⅵ層出土石器(4)	123
第58図	Ⅴ層出土石器	124
第59図	Ⅳ層出土石器(1)	125
第60図	Ⅳ層出土石器(2)	126
第61図	Ⅳ層遺物出土分布図	128
第62図	Ⅲ層遺物出土分布図	128
第63図	溝状遺構図	130

図 版 目 次

図版 1	遺跡遠景 調査前遠景	133
図版 2	13トレンチ完掘状況(1) 13トレンチ完掘状況(2) 溝状遺構近景 成川式土器底部出土状況 溝状遺構断面	134
図版 3	2号落とし穴状遺構断面 4号落とし穴状遺構断面	135
図版 4	1号集石 3号集石 4号集石	136

図版 5	Ⅲ-B-1 類土器出土状況	137
	D-2・3区Ⅶ層遺物出土状況 B-0区Ⅶ層遺物出土状況	137
図版 6	Ⅱ-1 類土器出土状況 Ⅱ-2 類土器出土状況 C-6区遺物出土状況	138
図版 7	Ⅲ-A-2 類土器 Ⅲ-B-1 類土器	139
図版 8	I-1 類土器 Ⅱ-1 類土器 Ⅲ-A-1 類土器	140
図版 9	I-2 類土器	141
図版10	I-3 類土器	142
図版11	Ⅱ-2 類土器 IV類土器	143
図版12	V類土器	144
図版13	IV層~Ⅵ層出土石器	145
図版14	Ⅶ層出土石器 (1)	146
図版15	Ⅶ層出土石器 (2)	147
図版16	Ⅶ層出土石器 (3)	148

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は、東九州自動車道（末吉IC～国分IC）の建設を計画し、事業区域内の埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会に照会した。

これを受けて、鹿児島県教育委員会は日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所と協議を行い、鹿児島県立埋蔵文化財センターが工事予定区域内を対象にして、埋蔵文化財の分布調査を行うこととなった。分布調査は平成6年10月と平成7年5月に実施した。

この結果、工事予定区域内に13箇所の遺物散布地や確認調査の必要な地点の所在することが判明した。そこで、再度協議を行い、平成8年4月から用地買収等の条件が整った区域を対象として順次確認調査を実施することとなった。

供養之元遺跡は、暫定2車線部分及び工事施行区域内の9,000㎡を対象にして平成9年4月21日から10月9日の間に、確認調査を実施した。

確認調査の結果、縄文時代早期及び古墳時代の遺物包含層が残存することが明らかになった。

この結果をもとに、鹿児島県教育委員会と日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は協議を行い、緊急発掘調査の必要な9,000㎡について、鹿児島県立埋蔵文化財センターが全面発掘調査を実施することとなった。発掘調査は平成10年11月4日から平成11年3月31日までの間と平成11年9月1日から平成11年11月30日までの間に行った。

第2節 調査の組織

平成9年度確認調査

事業主体者 日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所

調査主体者 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	吉元 正幸
調査企画者	〃	次長兼総務課長	尾崎 進
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋
	〃	課長補佐兼第一調査係長	新東 晃一
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	立神 次郎
調査担当者	〃	文化財主事	國生 誠（故人）
	〃	文化財研究員	今村 敏照
	〃	文化財研究員	福永 修一
事務担当者	〃	主 査	前屋敷裕徳
	〃	主 査	政倉 孝弘
	〃	主 事	追立ひとみ

平成10年度発掘調査

事業主体者	日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	吉永 和人
調査企画者	〃	次長兼総務課長	尾崎 進
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋
	〃	課長補佐兼第一調査係長	新東 晃一
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	立神 次郎
調査担当者	〃	文化財研究員	今村 敏照
	〃	文化財研究員	福永 修一
事務担当者	〃	主 査	前屋敷裕徳
	〃	主 査	政倉 孝弘
	〃	主 事	溜池 佳子

平成11年度発掘調査

事業主体者	日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	吉永 和人
調査企画者	〃	次長兼総務課長	黒木 友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋
	〃	課長補佐兼第一調査係長	新東 晃一
	〃	第二調査係長	立神 次郎
	〃	主任文化財主事	長野 眞一
調査担当者	〃	文化財主事	濱崎 一富
	〃	文化財研究員	今村 敏照
事務担当者	〃	総務係長	有村 貢
	〃	主 事	溜池 佳子

平成13年度報告書作成

事業主体者	日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所		
作成主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井上 明文
作成企画者	〃	次長兼総務課長	黒木 友幸
	〃	調査課長	新東 晃一

	〃	調査課長補佐	立神 次郎
	〃	第二調査係長	彌榮 久志
	〃	主任文化財主事	長野 眞一
作成担当者	〃	文化財主事	野邊 盛雅
	〃	文化財研究員	山崎 克之
事務担当者	〃	総務係長	前田 昭信
	〃	主 査	栗山 和巳

第3節 調査の経過（日誌抄）

平成9年4月21日から平成9年10月9日まで確認調査を行い、その後、平成10年11月4日から平成11年3月24日までと平成11年9月1日から平成11年11月30日までの2回に渡り緊急全面発掘調査を実施した。

調査の経過については、日誌抄をもってかえる。

平成9年度発掘調査

4月21日～4月30日

発掘事前準備。グリッド杭打ち。

トレンチ設定、掘り下げ調査。(1～12T)

5月1日～5月30日

B-5・6区表土剥ぎ。 B-5・6区、Ⅲ～Ⅴ層調査。

トレンチ掘り下げ調査。(2, 3, 4, 6, 7, 8, 9, 11, 12T)

2T, Ⅶ層より土器, 11T, Ⅶ層よりスクレイパー出土。

B-5区, Ⅳ層より石鏃, 石皿出土。

4T, Ⅳ層, 土坑遺構検出, 黒曜石出土。9T, 黒曜石出土。

6月3日～6月26日

トレンチ掘り下げ調査。(3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 11, 12, 13T, B-6区)

5T (Ⅶ～ⅩⅡ層), 9T (ⅩⅡ～ⅩⅢ) 遺物取り上げ。

A・C-1区, 表土剥ぎ。

7月1日～7月31日

トレンチ掘り下げ調査。(11, 13T, B-5区)

B-5区, Ⅵ～Ⅶ層調査, チャート片, 打製石斧出土。

トレンチ13T, Ⅶ層掘り下げ調査。B-4区, 表土剥ぎ。

B-1区, Ⅵ～Ⅷ層掘り下げ調査。Ⅵ層より土器, チャート, 黒曜石片出土。

B-5区, Ⅵ～Ⅷ層(サツマ火山灰層上面)調査。

B-1区, Ⅵ～Ⅶ層調査。(塞ノ神式土器, 黒曜石, 石皿出土)

A-4・5・6区, グリッド設定。

8月4日～8月29日

B-1区, VII層調査。石器, チャート片, 土器片出土, 集石遺構検出。

B-5・6区, V～VII層調査。B-5区, VIII層上面まで終了。

B-1区, VII層調査。B-6区, V～VII層調査, 早期土器1固体出土。

B-4区, IV層調査, 異形石器出土。B-6区, VII～VIII層調査。

9月1日～9月26日

B-4区, IV～V層調査。B-5区, VIII層調査。B-6区調査終了。

B-5・6区, IX層調査。B-6区, 異形石器出土。B-2区, IV～V層調査。

B-5・6区, 遺構検出, 異形石器出土。

B-4区, VI～VII層調査, 石鏃出土。B-1区, 遺構検出。

10月1日～10月9日

B-4区, VII層調査終了, スクレイパー出土。

今年度の供養之元遺跡, 調査終了し, 前原和田遺跡へ調査移動。

平成10年度発掘調査

11月4日～11月30日

A-0・1区, B-0・1・2区, VI層, VII層掘り下げ調査。

B-4区, IX層, 遺構検出。

A-1区, VII層調査, 石匙出土, 落とし穴状遺構及び集石遺構検出。

C-1区, VI～VII層調査, 集石遺構検出。

B-0区, 土器片集中部出土。B-2区, 西側トレンチ掘り下げ調査。

12月1日～12月25日

A・B-2区, VI～VII層調査。C-1区, 10号集石遺構検出。

A・B-3区, VII層掘り下げ。B-0・2区, C-1区, コンタ図作成。

A・B-6区, VI, VII層調査。C-6区, IV, V層調査。

D-7区, III～V層調査。A-1区, V～VII層調査, 集石遺構検出。

B-2区, 集石遺構検出。

別府大学教授 橘 昌信氏, 現地指導。(17日～18日)

1月5日～1月29日

A-1・2区, VII層調査。C-6区, VI～VII層調査, VI層上面遺構検出, 早期土器出土。

C-7区, III層調査。D-7区, VI～VII層調査。

A-3・4区, V～VI層調査。VI層上面遺構検出。

B-2区, 北側ベルト掘り下げ。B-3区, VI～VII層調査。

D-6区, VI層調査。

2月1日～2月26日

D-6区, VI～XIII層調査。B・C-7区, VI層上面遺構検出。

A-6・7区, VI層上面遺構検出。A-5区, 落とし穴状遺構掘り下げ。

C-6区, VI~VII層調査, 早期土器片(塞ノ神式)集中部検出。

D-7区, X~XVI層掘り下げ調査。

3月1日~3月24日

D-6・7区, XIV~XVI層掘り下げ調査。

C-4区, IV層調査, 土器, 磨製石鏃出土。A-3・4・5区, VI~VII層調査。

C-5区, IV層調査。

D-7区埋め戻し作業。A・B-7区, VI~VII層調査。

撤収作業。

平成11年度発掘調査

9月1日~9月27日

発掘事前準備。グリッド杭打ち。C~D-3~6区, 土層断面実測。

C-3区, VIII層上面コンタ図作成, VI~VII層調査。

10月1日~10月25日

C~D-3~4区, VIII層コンタ図作成, IV層~VII層調査。

D-10区, IV層溝状遺構調査, 遺構内遺物出土。

C-5区, VI~VII層調査, VIII層上面コンタ図作成。

11月1日~11月30日

C・D-4区, 17~19号集石遺構検出調査。

D-10・11区, III層調査。D-5~7区調査。

撤収作業

第2章 遺跡の位置及び環境

第1節 位置と特色

前原和田・供養之元遺跡は、鹿児島県始良郡福山町佳例川に所在する。県中央部に位置する福山町は、北は国分市、南は曾於郡輝北町・垂水市、東は曾於郡財部町・末吉町・大隅町に隣接し、西は鹿児島湾に面しており、標高380mの丘陵性台地をなす牧之原地域（地元でいう「上場地域」）と海岸地域（「下場地域」）に大別される。

同じ町でありながら、この2つの地域はその景観の上で大きな対照をなしており、始良カルデラ東縁のカルデラ壁にあたるため、約300mの急崖が海に迫り、後背地がほとんどみられない下場に対し、入戸火砕流堆積物によって形成された、いわゆるシラス台地が卓越する上場は、緩やかな傾斜をなす台地である。この2つの地域性は、気候においても明瞭であり、年平均気温18.7度で、寒暖の差が小さい海洋性気候を示す下場に対して、上場では、年平均気温15.0度で、冬場は氷点下を記録する日が年40日程を数える。このように自然環境において対照的な両地域であるが、これらが歴史的な生産基盤や現在の経済活動などの地域性を生み出す要因の一つであることは言うまでもない。

さて、前原和田・供養之元遺跡が所在する佳例川地区は、上述の上場にあたるが、遺跡はさらに北方の町境付近に位置する。この地域は、平坦な丘陵性台地から、山地が卓越する地域に漸移しており、これらの山地によって、小規模な台地や丘陵が分断されて散在する。本遺跡は、こうした小規模な台地上に立地する。

◇ 遺跡を取り巻く地形環境及び水文環境

まず、5万分の1地形図図幅の範囲において行った地形分類によって、遺跡のおかれた地形を概観すると、図幅中央をほぼ南北に走る山地があって、東側の都城盆地へ傾く地域と西側の国分低地へ傾く地域を分かっている。南部は、南接する岩川図幅と同じく、西岸に高隈山地があり、その東に東へ傾く牧之原台地が付着し、西高東低の地形を形成している。（第1図）

まず、山地は北部より南部に向かって、瓶臺山（543.0m）、黒石岳（524.7m）、白鹿岳（603.9m）、荒磯岳（538.7m）と標高500～600mの山々をもつ主として中生代後期から新生代前期からなる小起伏山地が連なるが、瓶臺山や白鹿岳を中心とした山地には中起伏山地もみられる。これらの山地を九州を構成する大地形の枠組みの中でみると、西南日本外帯西縁にあたる九州山地とひと続きの地質構造をもち、南の大隅半島側が大きく屈曲することによって、琉球外弧の北端をなすに至った地域である。さらに、九州山地の延長部は、宮崎平野から南南西に続く都城盆地により、東側の鱈塚山地と西側の高隈山地に分けられ、本図幅にみられる山地群は西側の高隈山地から種子島・屋久島へと連なっていく。また、この山地群の西は、火山フロント及び琉球内弧にある鹿児島地溝の東縁の断層崖によって明確に区分される。

次に山地群に付着するような形で分布するのが、丘陵地である。上述した山地群は約2.8～2.5万年前に噴出した入戸火砕流堆積物によって、その谷が埋められて緩傾斜の丘陵地形を形成したものと

思われる。さらに、この火砕流堆積物によって形成された台地も広範囲に分布する。この台地は本図幅中央の山地群を境に、東西にいずれも約300m程の標高を示し、河川による侵食・開析が進んでいるが、その様相は東西で異なる。台地原面を比較的広く残す西側の台地（牧園・春山原・須川原・上野原）に対し、東側は、台地を侵食した河谷の斜面が広い部分を占め、台地原面は局部的に残存するにすぎない。近接する谷底との比高も西側では200～250mに達するのに対し、西側では100m未満であることが多い。

台地に小規模ながら、付着するのが段丘面である。本分類では中位段丘面として取り扱った。大淀川水系に属する横市川、後川などが都城盆地の西縁をなす財部市街地付近に集まる部分に比較的まとまって見出せる。これらは、いずれもシラス台地に多くみられる河成侵食段丘であると思われる。入戸火砕流堆積後、極めて短期間に形成されたであろうことが報告されているが、詳細は後述する。

最後に低地だが、台地や丘陵間の河谷沿いにみられる小規模な谷底平野を除けば、図幅西縁の国分低地が最大である。この低地を含めた始良カルデラ北縁地域には完新世段丘が認められる。隼人面と名づけられた最高位の隆起三角州と、その下位の2段の海成段丘面（始良Ⅰ面、始良Ⅱ面）に分けられ、これらの段丘面とその構成物質の古環境解析と編年から、後氷期、特に高海水準期いわゆる縄文海進前後からの地形発達史が描かれている。

さて、こうした地形の概観をふまえて、遺跡周辺の地形に絞ってみてみると、遺跡は北に黒石岳、東に白鹿岳、南に荒磯岳といった山々をもつ山地に囲まれた西北西から東南東方向に細長い台地・丘陵部に立地している。遺跡周辺の基盤をなすものは、山地の主体となっている四万十層群であると思われるが、入戸火砕流堆積物によって、その原地形の低所が埋積された。さらに、その後の侵食・開析過程によって、現在の地形を形成するに至っている。

この侵食・開析過程については、その大半が入戸火砕流堆積後、無植生のうちに、流水による激しい侵食・開析が極めて短期間に行われたという説明がある。本地域でも、台地面のみならず、河成侵食段丘の段丘面や地形分類に表せない小規模な階段状地形における平坦面などにおいて、シラス上位に、後述する成層した二次シラスが露頭や近辺の発掘調査で数多く確認されることが、その証左である。加えて、二次シラスの上ののろーム層中に、約2.2～2.3万年前の噴出物とされるSz-Tk 6（桜島高峠6・P17）が見出されることは、少なくとも、このテフラ層の堆積までには、現地形の大半が形成されたことが推察される。

このようにして、台地の分断や高密度の谷分布が本地域でも形成されたが、ここで現在の水系に目を移してみたい。遺跡を含む台地付近は大淀川水系に属する横市川と鹿児島湾に注ぐ検校川水系に属する前田川の最上流部にあたり、両者の分水界をなしている点に特徴がある。（第2図）この両河川は、遺跡北方を上流として、南へ並行して流路をとった後、本遺跡付近で東西に分かれる。この両河川の上流部については、過去、流路変更した可能性が指摘できる。前田川に西方から流れる支流や谷については、水系図や接峰面図からみても、そのまま横市川に流れ込む方が自然である。おそらく、現在の前田川の上流部は、横市川に属していたが、その後の前田川によって争奪されたものと思われる。河川争奪の時期の詳細は不明であるが、これまでの先行研究と合わせてみると、入戸火砕流の堆積がその契機であった可能性がある。すなわち、入戸火砕流堆積の前後で流路が異なったわけである。

その原因としては、一つには侵食基準面すなわち海水面までの距離が考えられる。入戸火砕流堆積後、両河川の開析は堆積前の旧河谷をなぞるようになされたものと思われるが、仮にこれが同じ速度で進んだとすると、前田川の方が早く遺跡付近の地域に到達するのは当然である。加えて、両河川の河床勾配をみると、大淀川の合流点までほとんど大きな遷移点もなく、一定勾配で流下するのに対し、前田川は本遺跡を含む台地・丘陵部を抜け出す部分で、明確な遷移点をもち、かつ河口まで急勾配である。(第3図) この急傾斜も開析初期に谷頭侵食を、より速やかに上流部に進行していった要因の一つとして考えられる。なお、前田川については、現在も下方侵食が旺盛であり、下流部より谷頭侵食が進めば、さらに現在の横市川を争奪にかかることも予想される。

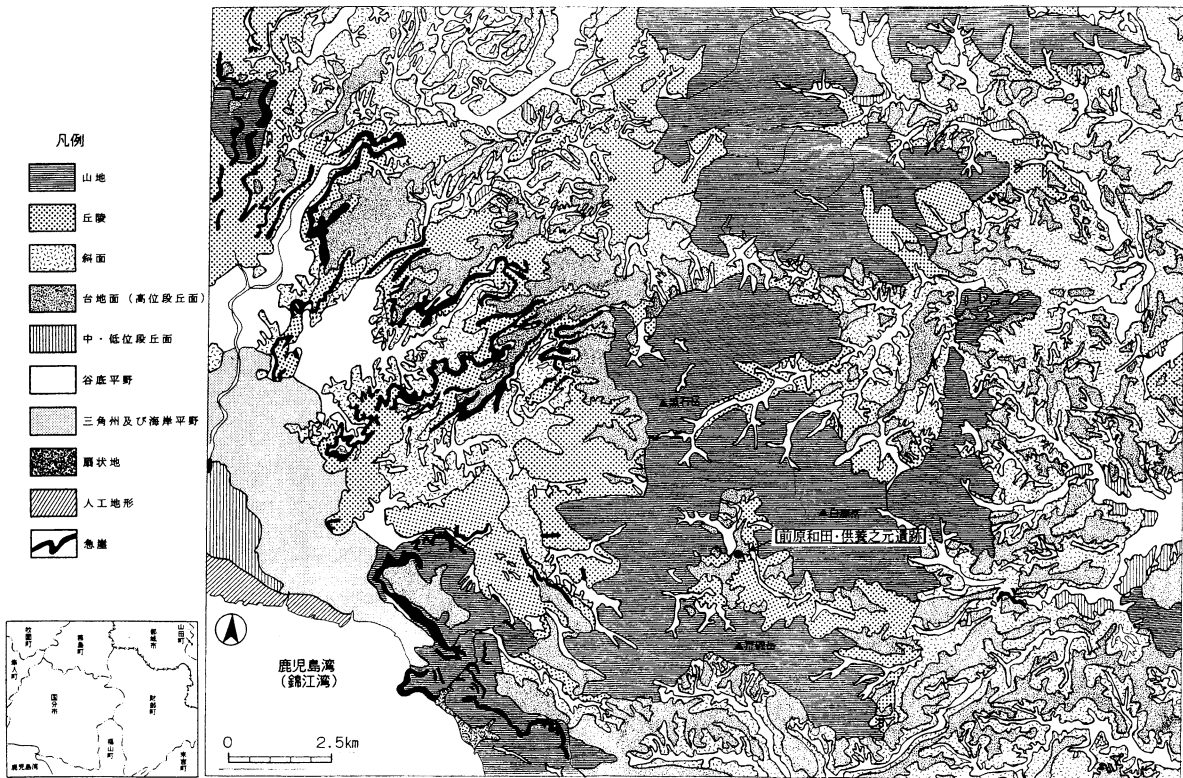
◇ 遺跡を取り巻く地質環境

地形上の特色は、本地域の地質の相違を反映している。遺跡周辺でみられる最も古い岩石は、砂岩頁岩互層からなる固結堆積物であり、中央部の山地の主体である。これらの岩石は、地質構造的には四万十累帯に属し、秩父累帯とともに九州山地の主体をなすが、九州南部において、西南日本外帯の構造が南北方向に急変し、広く南部九州の基盤となっている。四万十累帯は北帯と南帯とに分かれるが、本地域にみられるものは、主に白亜紀～古第三紀からなる北帯である。こうした岩石は、第1図幅東南部の台地を刻む河谷中にも小露頭がみられることより、図幅南東部には基盤岩として広く分布することが予想されよう。

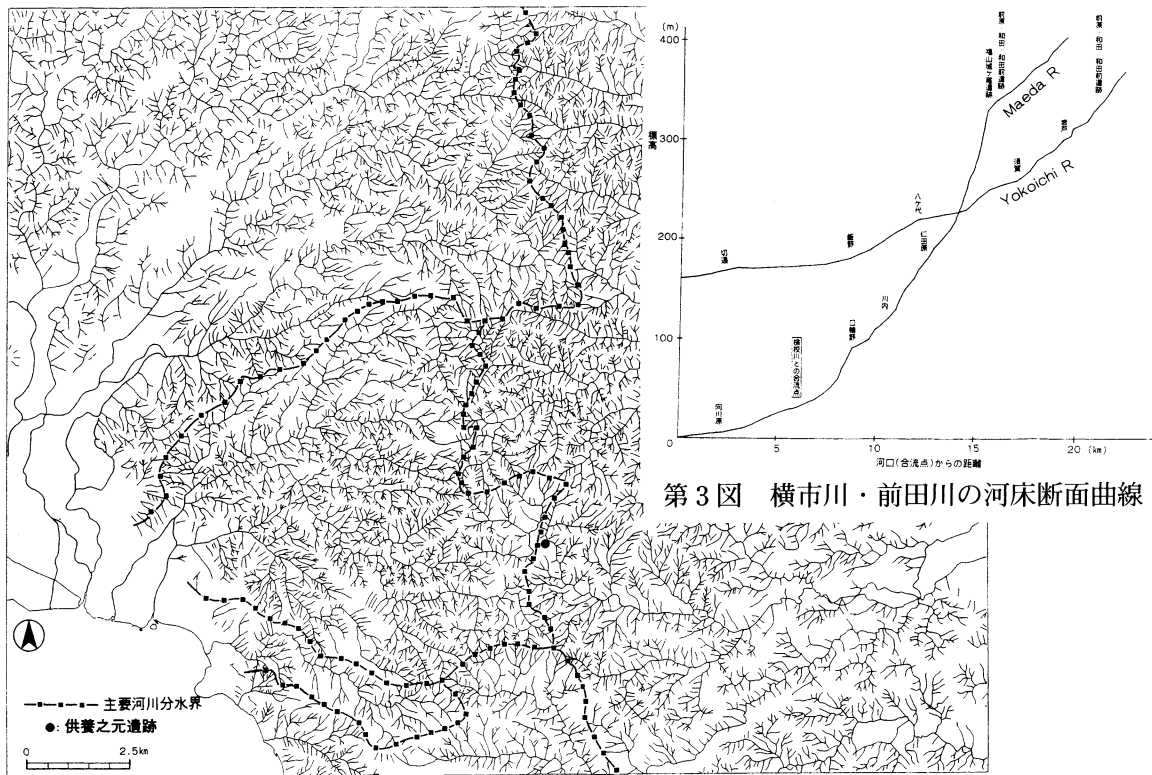
これら基盤の上に、入戸火砕流堆積物が台地を構成する。入戸より下位にみられる諸岩類は、いずれもほぼ水平に広範囲に分布するが、シラスが厚く堆積しているため、遺跡周辺でのその直接の露出は河床や、崖壁などに限られている。

現地形を支配する入戸火砕流堆積物であるが、その大半は非溶結部いわゆるシラスである。灰色～淡黄褐色を呈し、その上部は風化により黄褐色に変色していることがある。無層理で淘汰が悪く軽石礫の他、多数の外来礫を含む。シラス下位においては、溶結凝灰岩に漸移する場合もある。また、シラス上部には成層した二次的な軽石・火山灰層(二次シラス)が認められることが多い。本遺跡及び周辺の遺跡においてもまた同様であった。これは、先述したように火砕流堆積直後、植生に覆われる前に流水による激しい侵食・堆積が行われたためであると考えられている。

シラスの上位、台地面の最上部をおおって、ローム層が分布する。台地面や平坦面においては3～4mの厚さを示す。このローム層中には多数のテフラが確認される。前原和田・和田前遺跡においては、上位より、Sz-Ts(桜島大正・P1)、Sz-Bm(桜島文明・P3)、Kr-M(霧島御池)、K-Ah(鬼界アカホヤ)、Sz-Sy(桜島末吉・P11)、Sz-St(桜島薩摩・P14)、Tkn(高野)、Sz-Tk4(桜島高峠4・P15)、Sz-Tk6(桜島高峠6・P17)といった9枚のテフラが確認されている。詳細は、層序の項を参照されたい。(立部 剛)



第1図 国分図幅における地形分類 (5万分の1)



第3図 横市川・前田川の河床断面曲線

第2図 国分図幅における水系図 (5万分の1)

第2節 歴史的環境

前原和田・供養之元遺跡は、福山町比曾木野地区に所在する。

近年、特に比曾木野地区では、東九州自動車道建設に伴う発掘調査により永磯遺跡、福山城ヶ尾遺跡の調査成果が加えられ、考古学的にも大変貴重な資料が提供されており、早い時期から当地区において人々の活動が展開されていたことを窺わせる。

旧石器時代

両遺跡に近い福山城ヶ尾遺跡では、平成10・11年度に全面発掘調査を行い、ナイフ形石器文化期(約2万年前)の遺構・遺物が確認されている。隣接する永磯遺跡でも同じくナイフ形石器文化期の遺物が確認されている。このほか福山町教育委員会を中心とした発掘調査や情報収集により、比曾木野地区には多くの遺跡が集中することが知られるようになり、当地区は古い時代から生活根拠地として利用されていたと推測される。

縄文時代

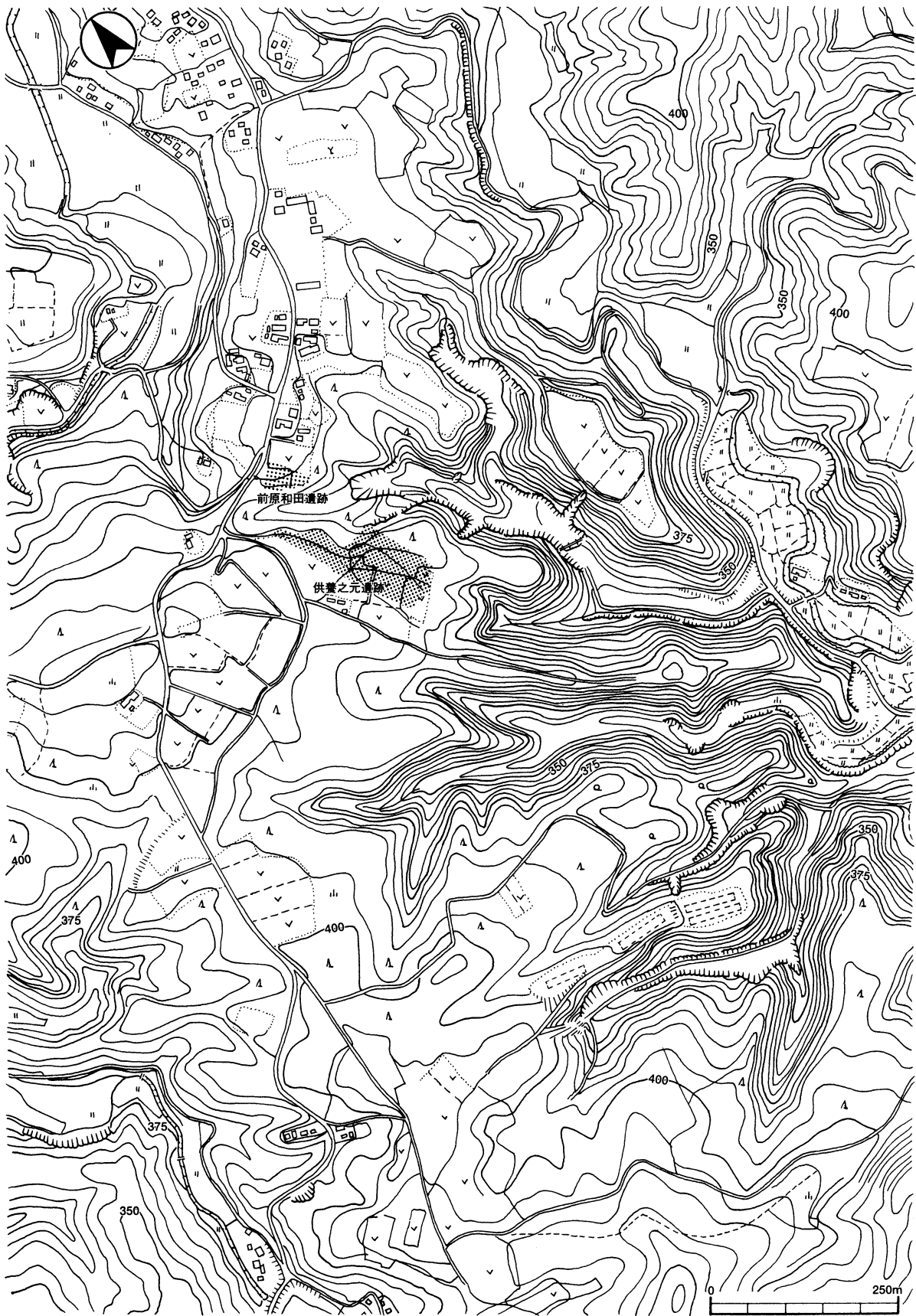
調査内容等の詳細は未発表ではあるが、東九州自動車道建設関連の発掘調査によると当地区周辺には多数の縄文時代の遺跡が確認されている。また、福山町教育委員会の調査報告においても、イラケ谷遺跡、寺屋敷遺跡等多くの縄文時代の遺跡所在が報告されている。旧石器時代と比較すると福山町内陸部のシラス台地上に多く確認されるようになり、シラス小台地上を基盤にした狩猟採集生活が本格的に繰り広げられるようになった様子が窺える。

弥生時代以後

弥生時代から古代にかけての遺跡数は少なくなる。今後の調査が待たれるところであるが、藤兵衛坂段遺跡では文明ボラにバックされた古代の畠跡が検出されるなどの考古学的な成果も報告されており、今後は新たな発見もあることと期待される。歴史時代に入ると、城郭跡や墓塔等が多く見られるようになり、これらの考古学的資料や文献等の資料から推測すると、政治・経済・軍事面においても重要な地域として積極的に開かれていった様子が窺われる。中世は、島津氏と肝付氏を初めとする諸豪族の激しい政争の場となったが、近世に入り、島津氏の統一が完成されるとともに、福山もその支配下に置かれ、福山牧の創設等により、藩の重要な牧場としての地位を確立していったようである。

《参考文献》

- 1 福山町役場 『福山町郷土誌』 1979年
- 2 福山町教育委員会 『新原段遺跡・中尾立遺跡・藤兵衛坂段遺跡』 1992年
- 3 福山町教育委員会 『中尾立遺跡』 1994年
- 4 福山町教育委員会 『藤兵衛坂段遺跡』 1997年
- 5 根占町教育委員会 『大中原遺跡』 2000年
- 6 南九州縄文研究会 『南九州縄文通信 No.13』 1999年



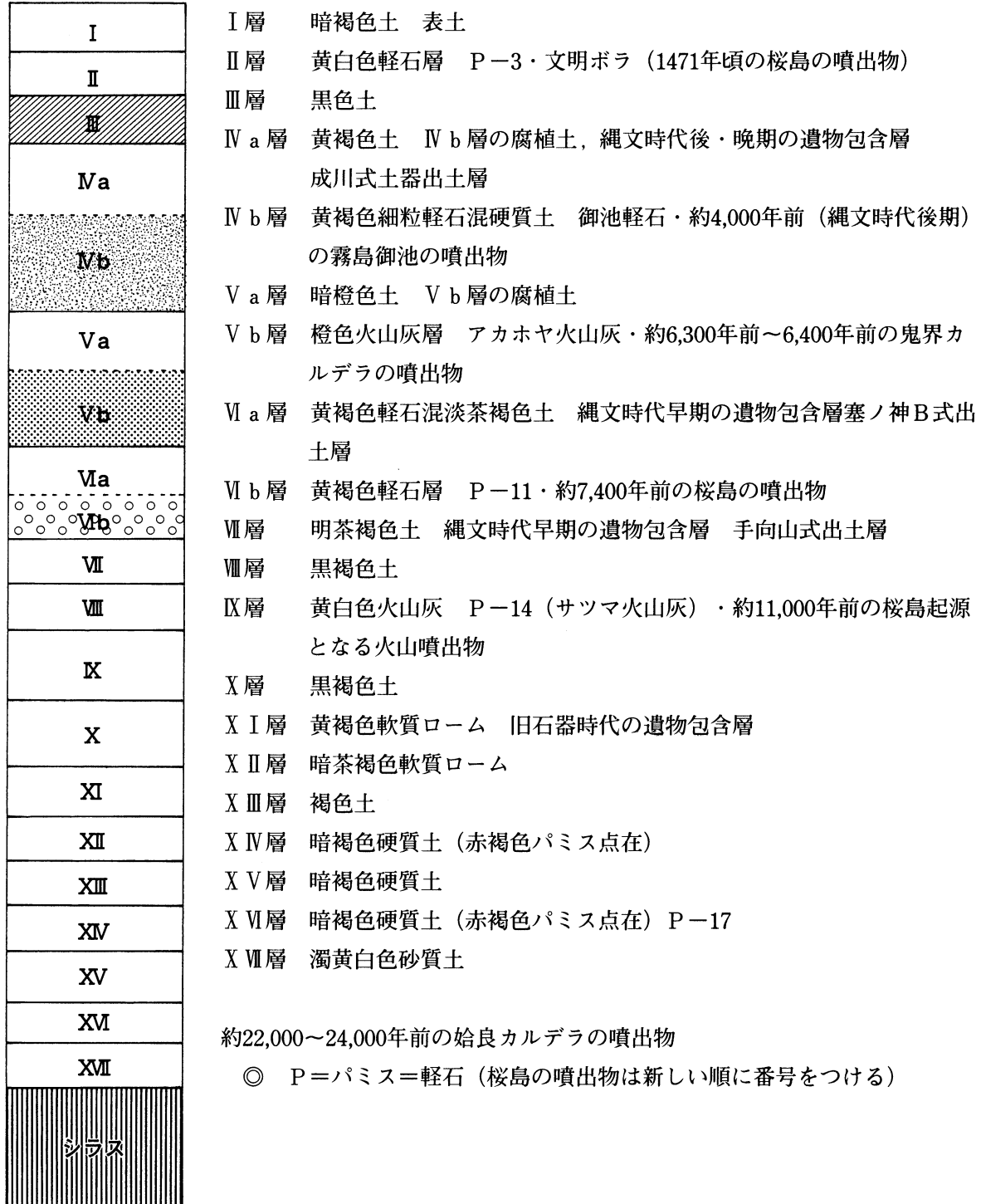
第4図 遺跡周辺の地形図



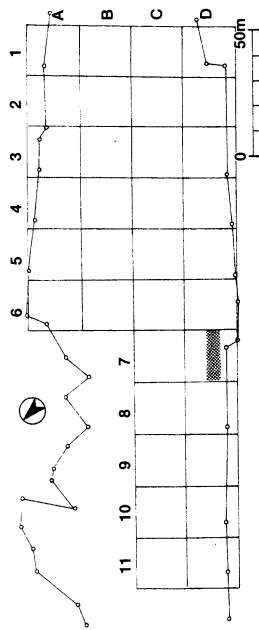
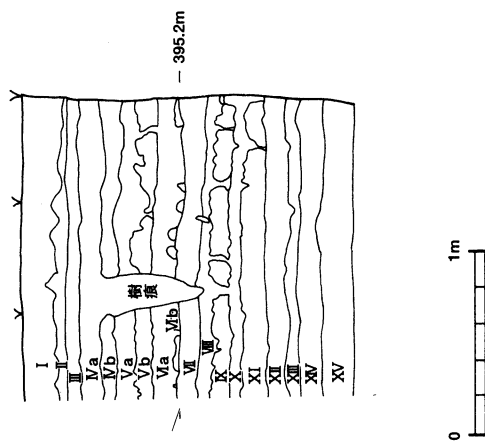
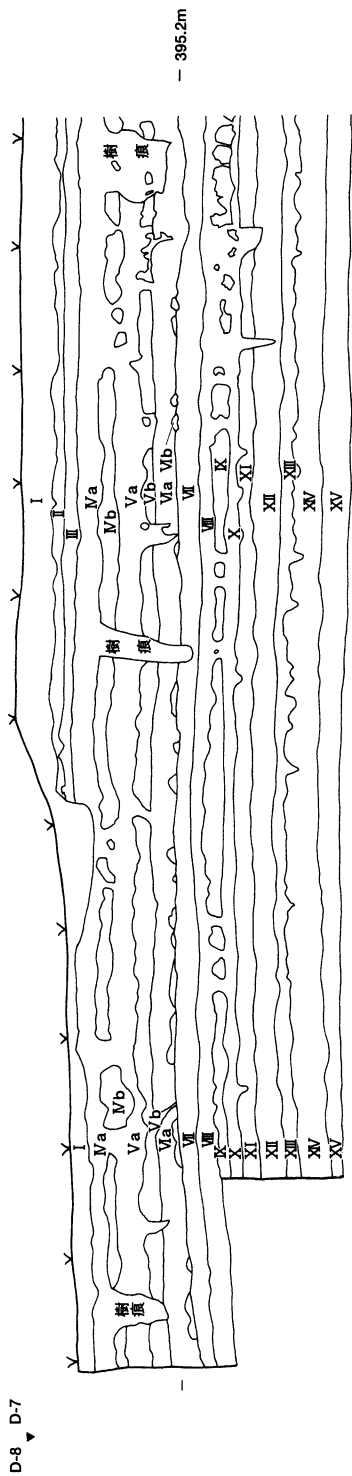
第5図 調査区と周辺の地形図

第3章 遺跡の層位

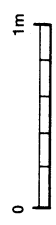
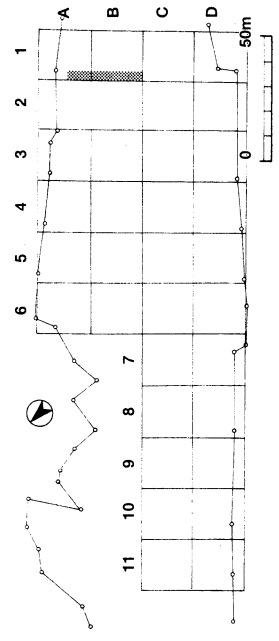
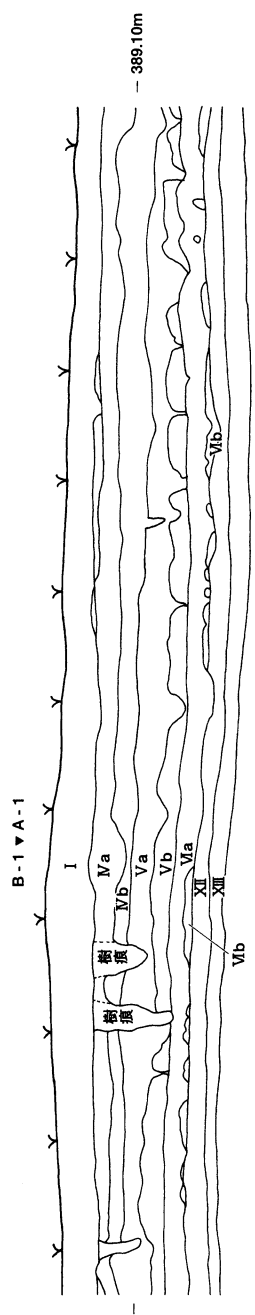
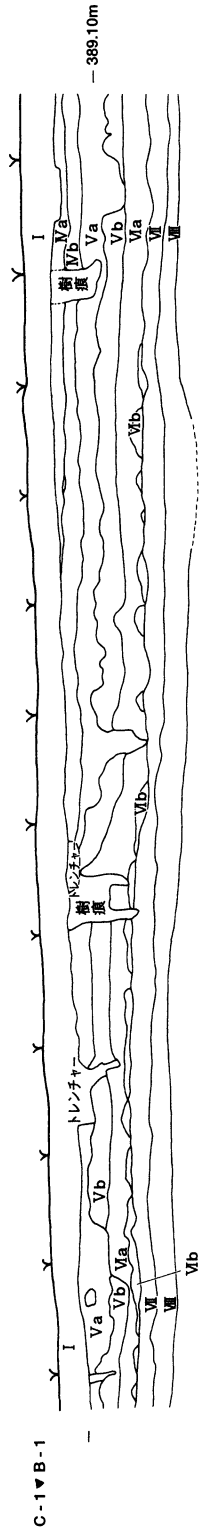
供養之元遺跡では、D-7区南西壁を基準土層とした。



第6図 土層模式柱状図

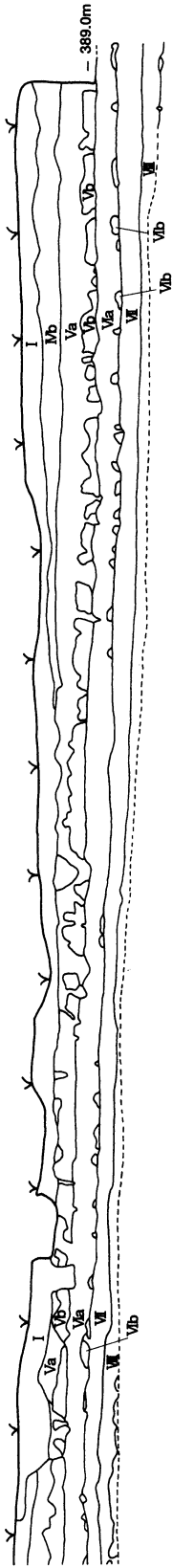


第7図 土層断面図(1)

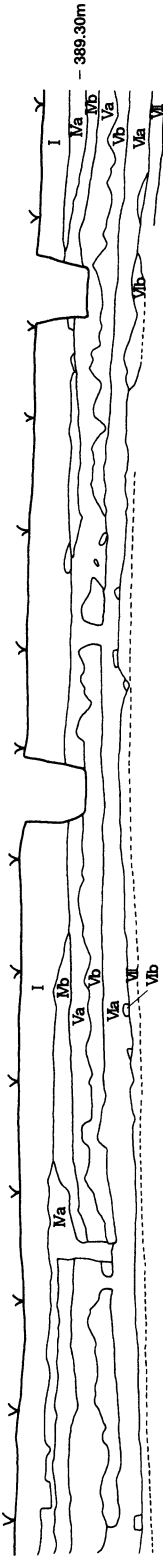


第8図 土層断面図(2)

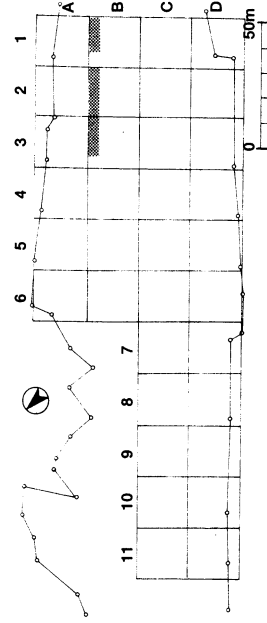
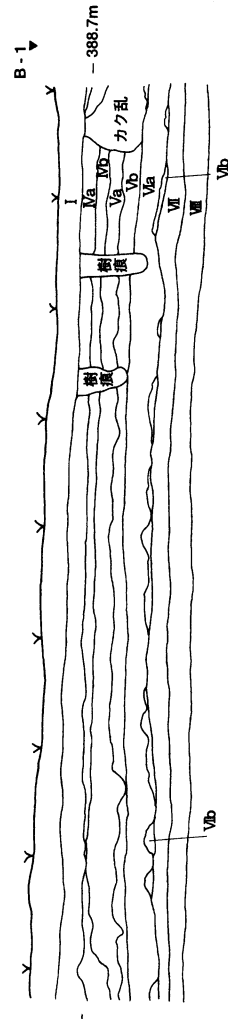
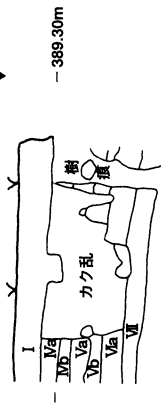
B-3 B-2



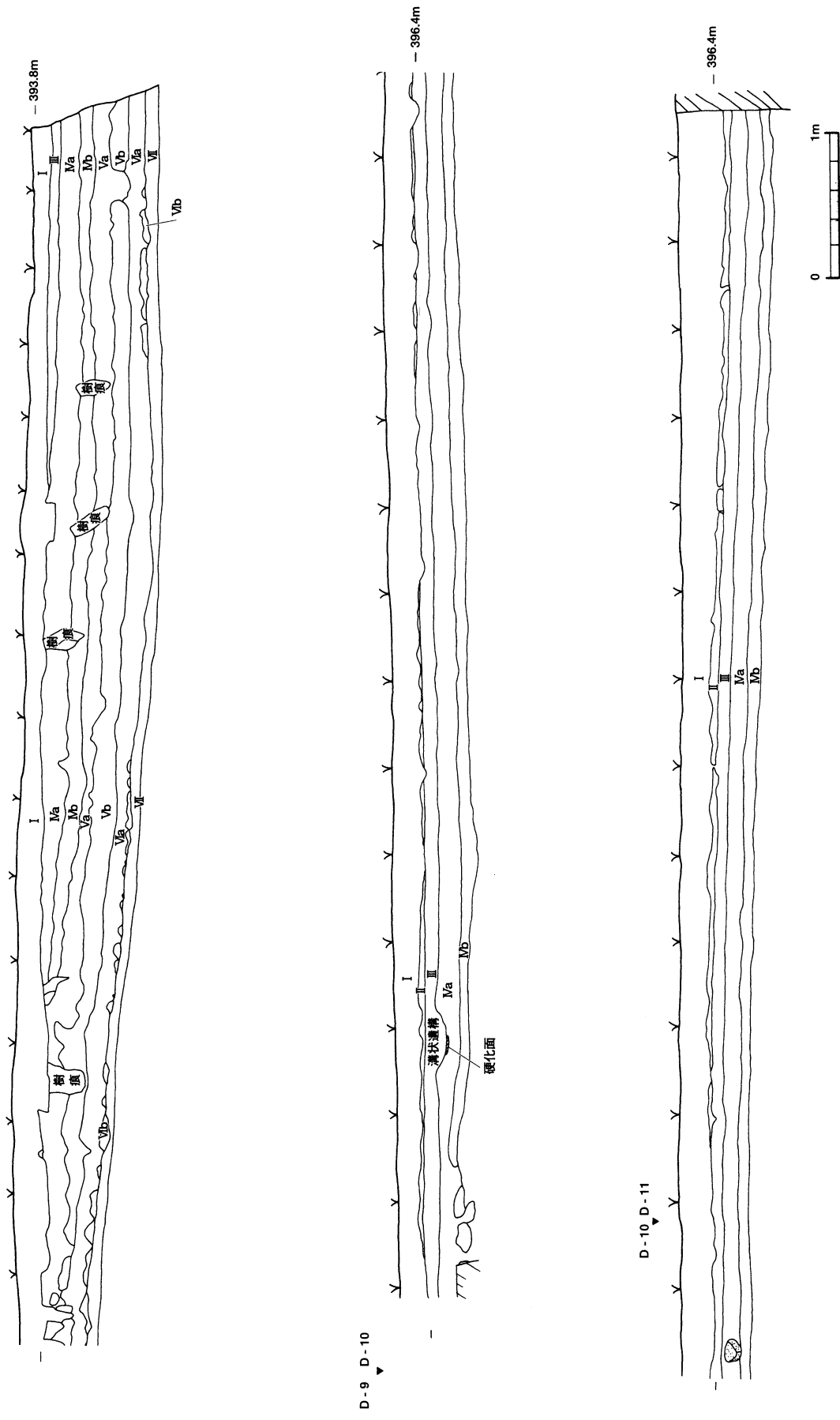
B-3 B-2



B-2 B-1



第9図 土層断面図 (3)



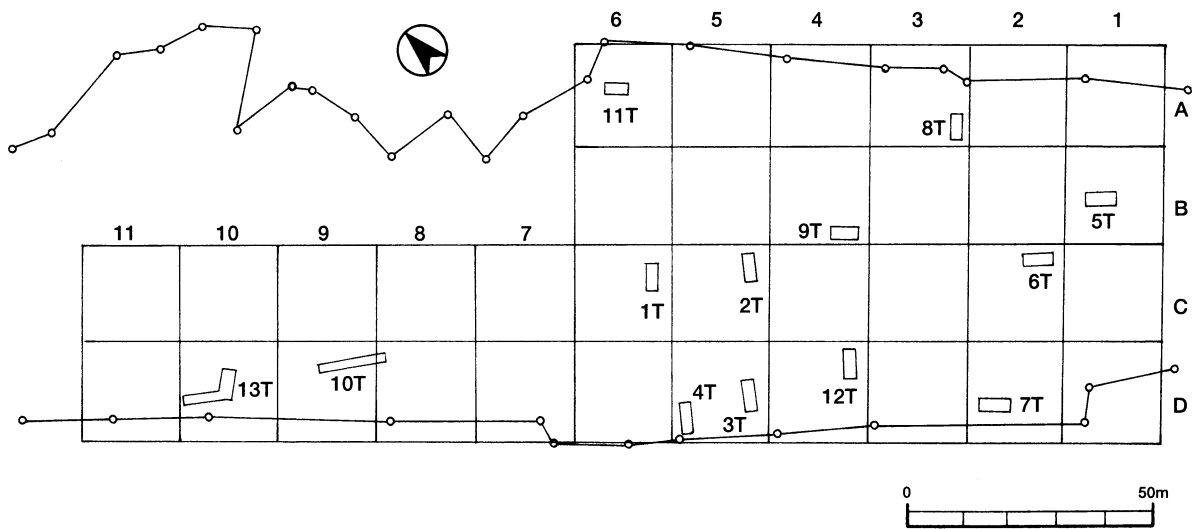
第10図 土層断面図 (4)

第4章 縄文時代の調査

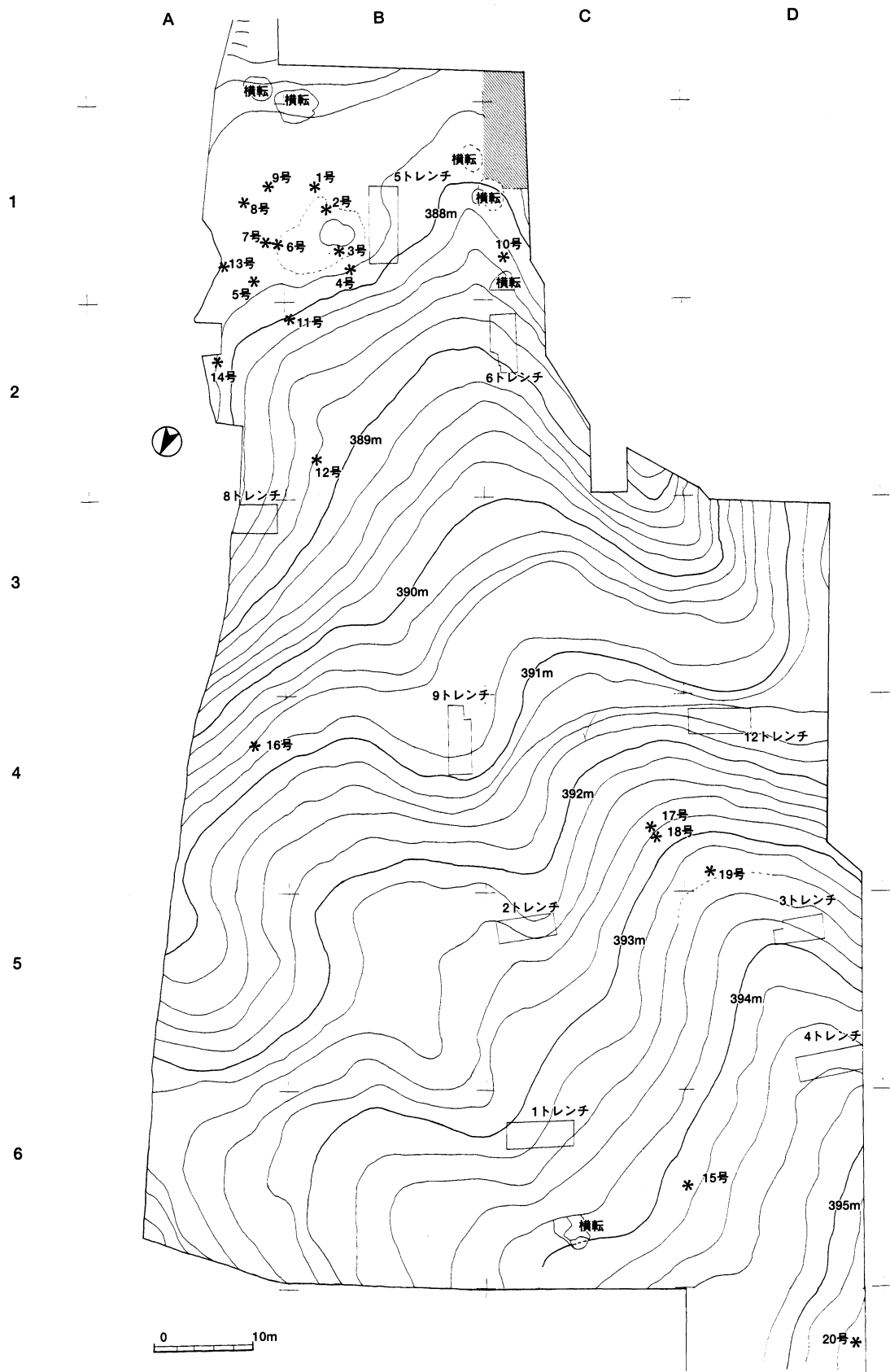
第1節 調査の概要

供養之元遺跡は、北側に谷部を控える緩やかな丘陵のシラス台地上に位置する遺跡である。平成9年度に、北側に面した発掘調査対象区域に13箇所のトレンチを設定し、確認調査を行ったところ、縄文時代早期から古墳時代にかけての文化層が確認された。(トレンチ9のⅩⅡ～ⅩⅢ層の旧石器時代に相当する文化層から黒曜石小片が確認されたため、周囲の拡張調査をしたが、遺物・遺構は確認されず。黒曜石小片は流入物とみなし、旧石器時代の文化層は存在しないと判断した。) 調査結果を受けて、平成10年度より11年度にわたって全面調査を実施。調査は、20m×20mの単位で、南北にAからDの4区、東西に1から11区の調査区を設定して行った。

第12図の地形図は、A～D-1～6区の縄文時代早期層(Ⅷ層上面)の遺構出土の最終面を記録したものである。この区域は、遺物出土、遺構検出において最も集中した場所であり、本遺跡の中心的場所と推定される。最高部のコンタラインは395.2m、最低部は387.4mで、高低差は7.8mあり、西から東側方向へ緩やかに傾斜した地形である。遺物は中央部から、北東部の傾斜した区域に多く出土し、集石遺構はA・B-1・2区に集中して検出されている。



第11図 トレンチ及びグリッド配置図



第12図 VIII層上面地形図及び早期集石位置図（1号～20号）

第2節 遺構

縄文時代の集石遺構，落し穴状遺構が，遺跡東側の区域を中心に多数検出された。

1 集石遺構（第13図～第22図）

縄文時代早期層（Ⅶ層）下面より20基の集石遺構が検出される。供伴する遺物に手向山式土器が見られるため，時期的には，手向山式土器の時代と同一であると推定される。

全体的にどの集石も礫数が少なく，散在したものが多い。礫の大半は赤化や破碎等が多数観察されることから加熱を受けたと判断されるが，その下部には明確な焼土痕等は確認されなかった。

1号集石は，浅い皿状の土坑を有し，その縁の周囲を少数の礫が取り囲む形態を呈している。土坑と礫にどのような関連性があるかは明確でない。

2号集石は，礫数が14個と少なく，明確な使用痕跡は確認できないが，礫の中に磨石が1個含まれている。120磨石は一部が欠損し，加熱による変色が見られた。

3号集石は，B-1区の集石遺構が集中して検出された区域にあり，他の集石遺構と比較して礫数が多く，形態的に良くまとまっている。下部に焼土や炭化物は確認されなかった。

4号集石は，こぶし大の礫が集積するような形で中心部に密集し，それにほぼ隣接して，少数の礫を内蔵する浅い掘り込みが見られる。

5号集石は，中心部に平坦面を上部に向けた最大径15cmほどの礫が置かれ，それに5個のこぶし大ほどの礫が付随し，その周囲には同じく5個のこぶし大の礫が点在する形態を呈している。中心部の礫の配置を見ると，土器等の何らかの物体を固定する敷石を彷彿とさせる。

6号集石は，中央部に浅い皿状の土坑が見られ，1号集石と形態が似ているが，両者の関連性は分からない。炭化物はほとんど見られず，皿状の土坑も意図的なものか，自然の落ち込みによるものかは明確でない。

7号集石は，中心部に最大径20cm大の礫が置かれ，周囲にこぶし大の石が点在する形態を呈する。

8号集石は，中心部に数個の礫が重なって集積し，周囲に礫が点在する。約1m離れた所に最大径20cm大ほどの礫が置かれてあるが，関連性は明確でない。焼土や炭化物，掘り込み等は無かったが，熱変色した礫が多数確認された。

9号集石は，熱変色による少数個の礫が散在した形態を呈している。

10号集石は，南西へ傾斜する面上に赤色に熱変色した礫が点在する形態を呈している。炭化物はほとんど見られない。

11号集石は，9号集石と同じく，少数個の礫が散在した形態を呈する。

12号集石は，少数個の礫がひとかたまりに集まる形態を呈する。長径15cm弱の板状の礫が置かれていた。礫の上面は窪んでおり，敷石としての機能を持っていたものか，廃棄された石皿の再利用かは明確でない。

13号集石は，最も礫数が少なく，最大径10cm～15cm大の礫が僅かに4個数認められる程度である。炭化物，焼土等は確認できない。

14号集石は，中心部に礫が密集し，北東方向の傾斜面へ向かって礫が散在する。散在した礫は自

然に流出したものと考えられる。熱変色した礫が多数見られ、ひびが入りもろくて割れやすい礫が見られる。

15号集石は、礫数は少ないが、大半の礫が赤色や黒色に熱変色しており、形態的にもよくまとまった形態を呈している。

16号集石は、最大径20cm弱の礫からこぶし大のものまで、大きささまざまの礫がまとまった形態を呈し、大部分の礫が熱変色している。

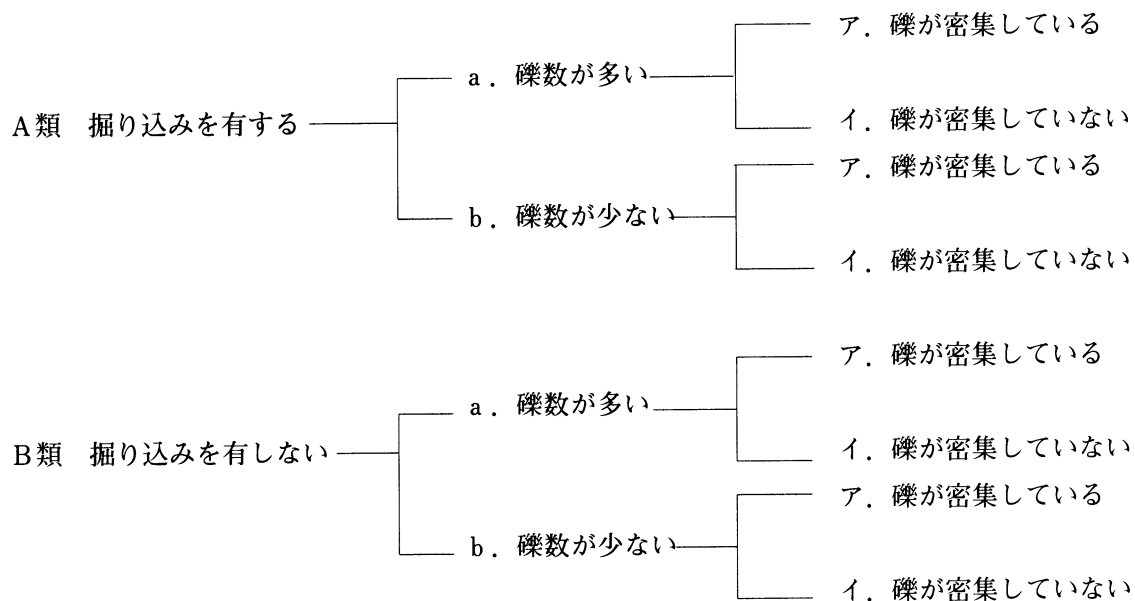
17号集石は、熱変色の礫が散在する形態を呈する。

18号集石は、礫数は少ないが、熱変色した礫がほぼ円形にまとまった形を呈しており、15号集石と同様のタイプである。

19号集石は、平面部を上に向けた最大径10cmの礫が中心部に置かれ、数個の礫がそれに付随する。形態的には5号集石と似ており、何らかの機能的な集石と考えられるが、明確ではない。

20号集石は、数個の礫が散在する形態を呈する。隣接する集石からの流れ込みであろうと考えられる。

20基の集石遺構をタイプ別に分類すると、以下のようになる。



①A-a-A類 (該当なし)

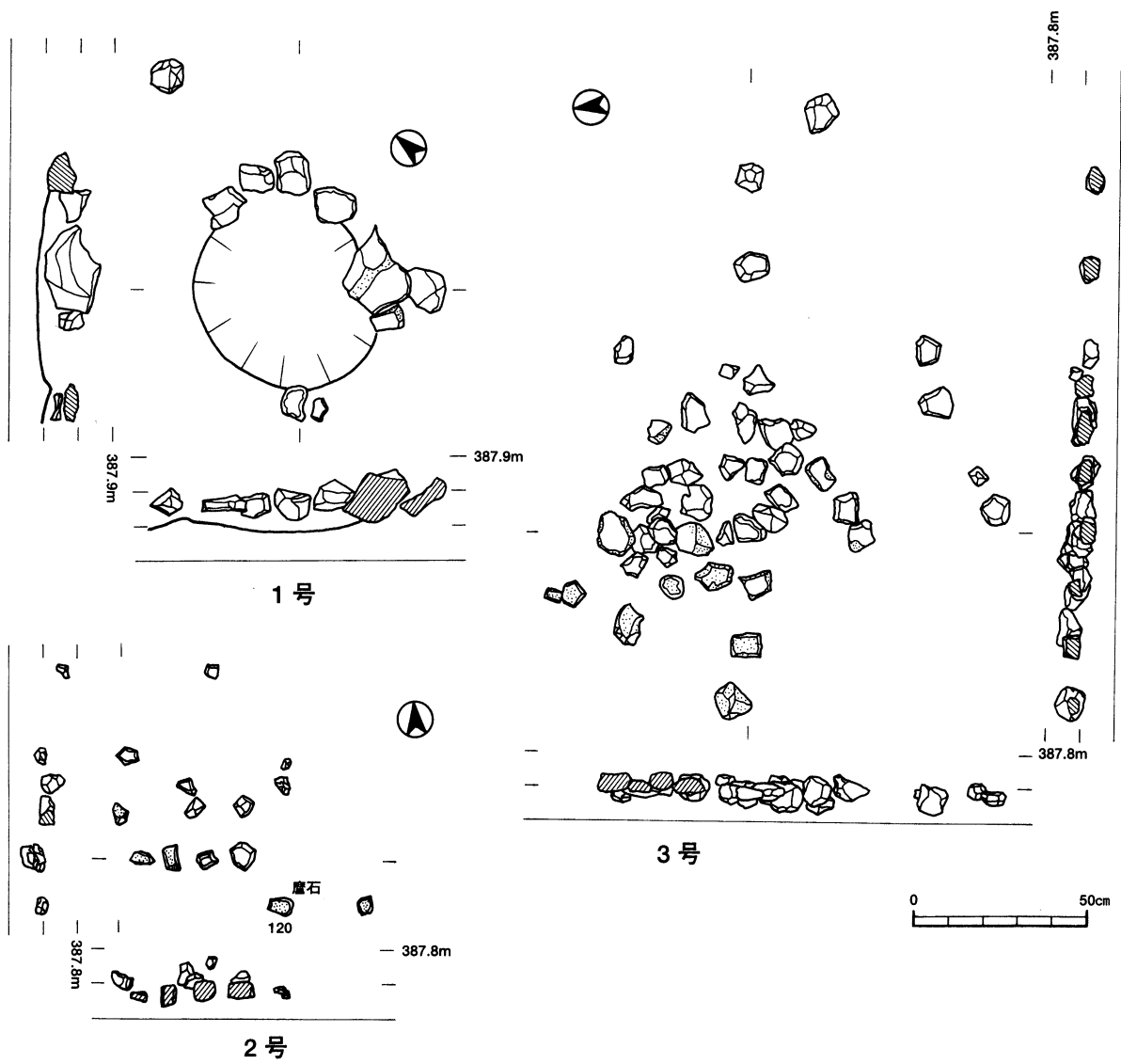
②A-a-I類 (16号)

礫数は割と多いが、全体的にまとまりがない。焼土や炭化物は見られない。

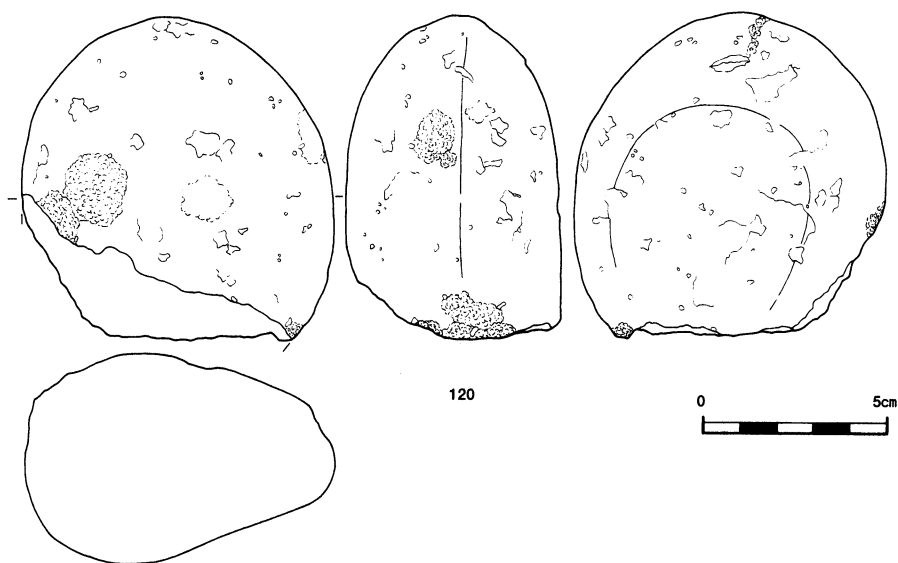
③A-b-A類 (該当なし)

④A-b-I類 (1, 6号)

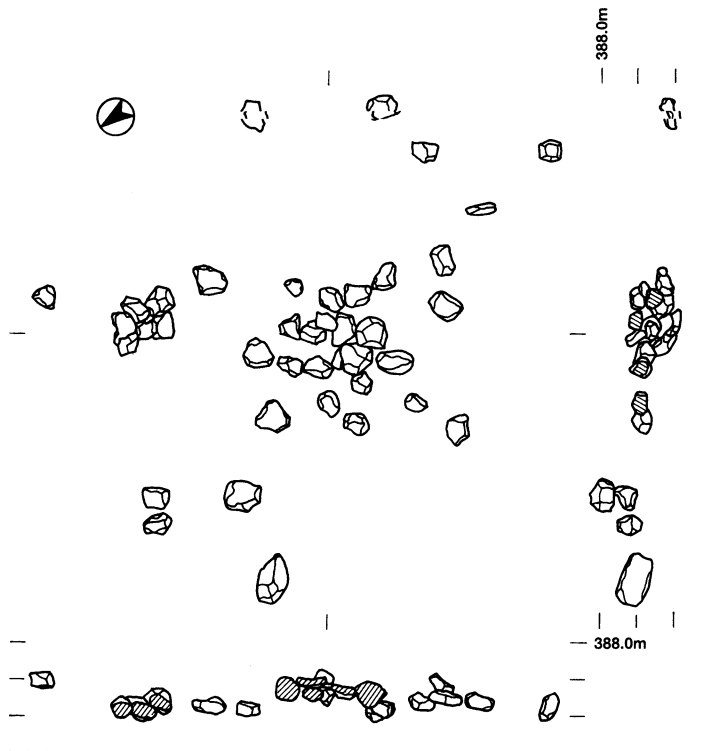
皿状の浅い土坑を有し、礫数は少なく周囲を取り囲むように点在するタイプのものである。何らかの機能的な集石と考えられるが、土坑の中央部に焼土や炭化物は残っておらず、自然の落ち込みとも考えられ、その性格は明確ではない。



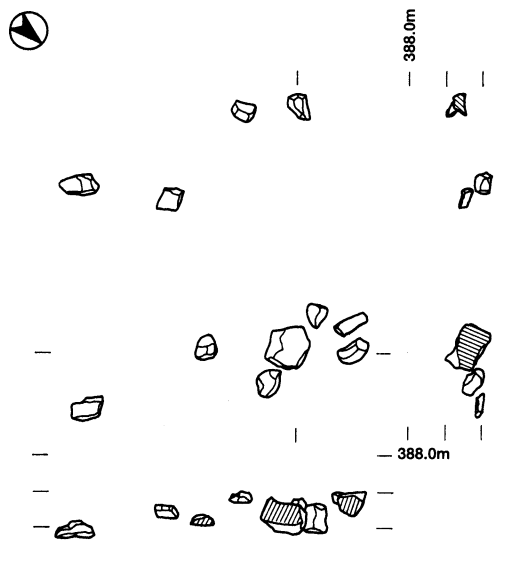
第13图 集石 (2)



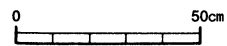
第14图 VII層出土石器 (17)



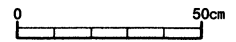
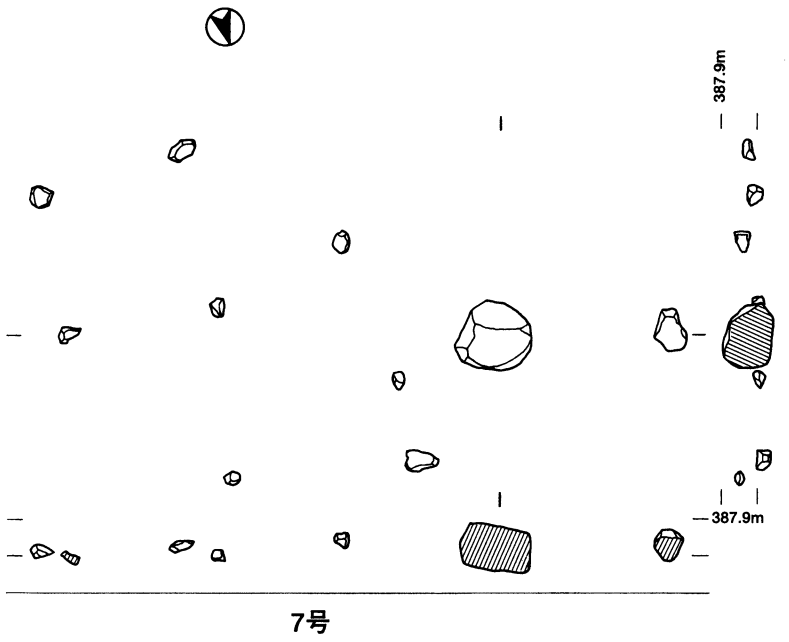
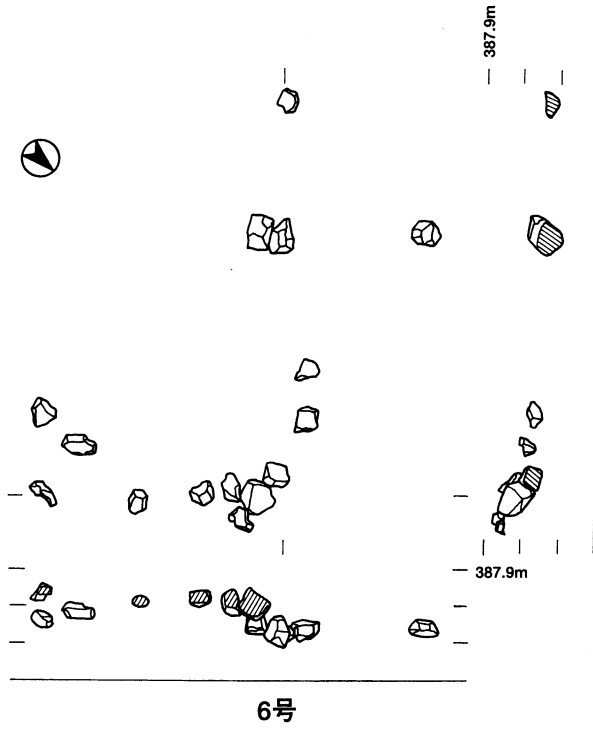
4号



5号



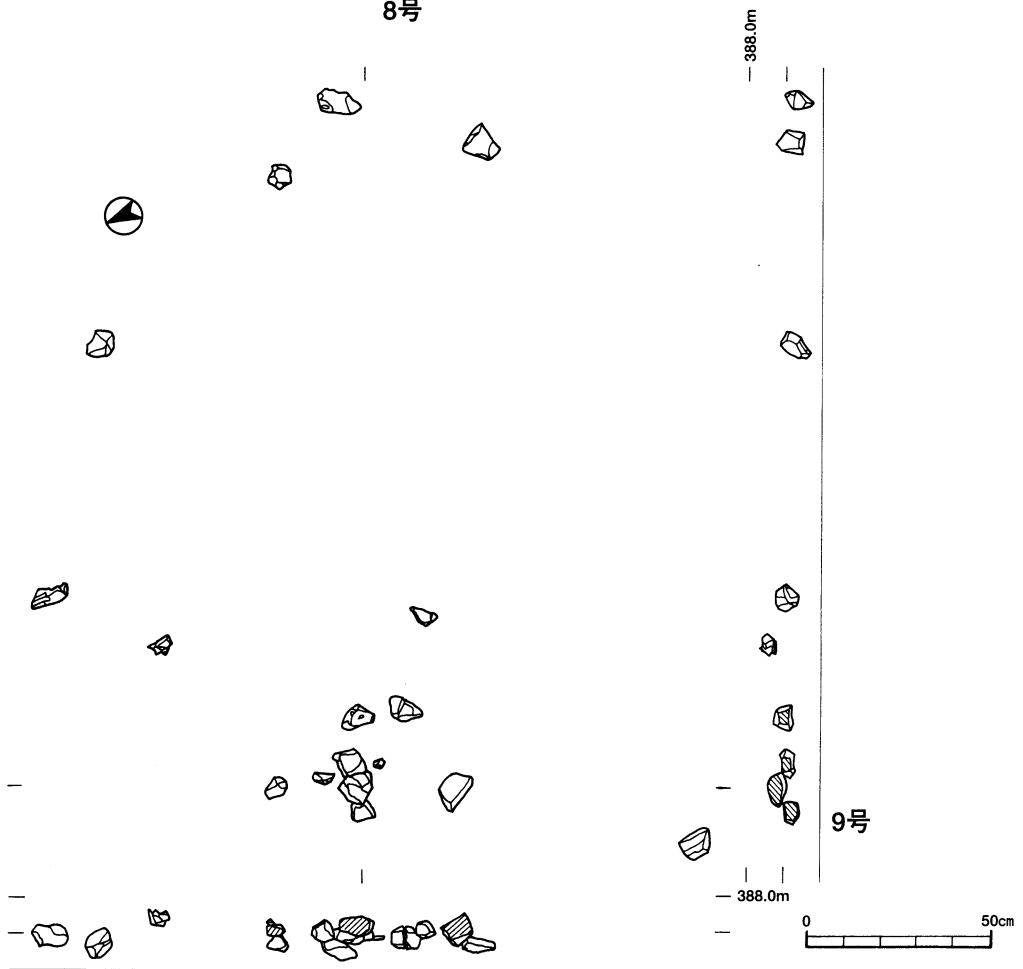
第15図 集石 (2)



第16図 集石 (3)

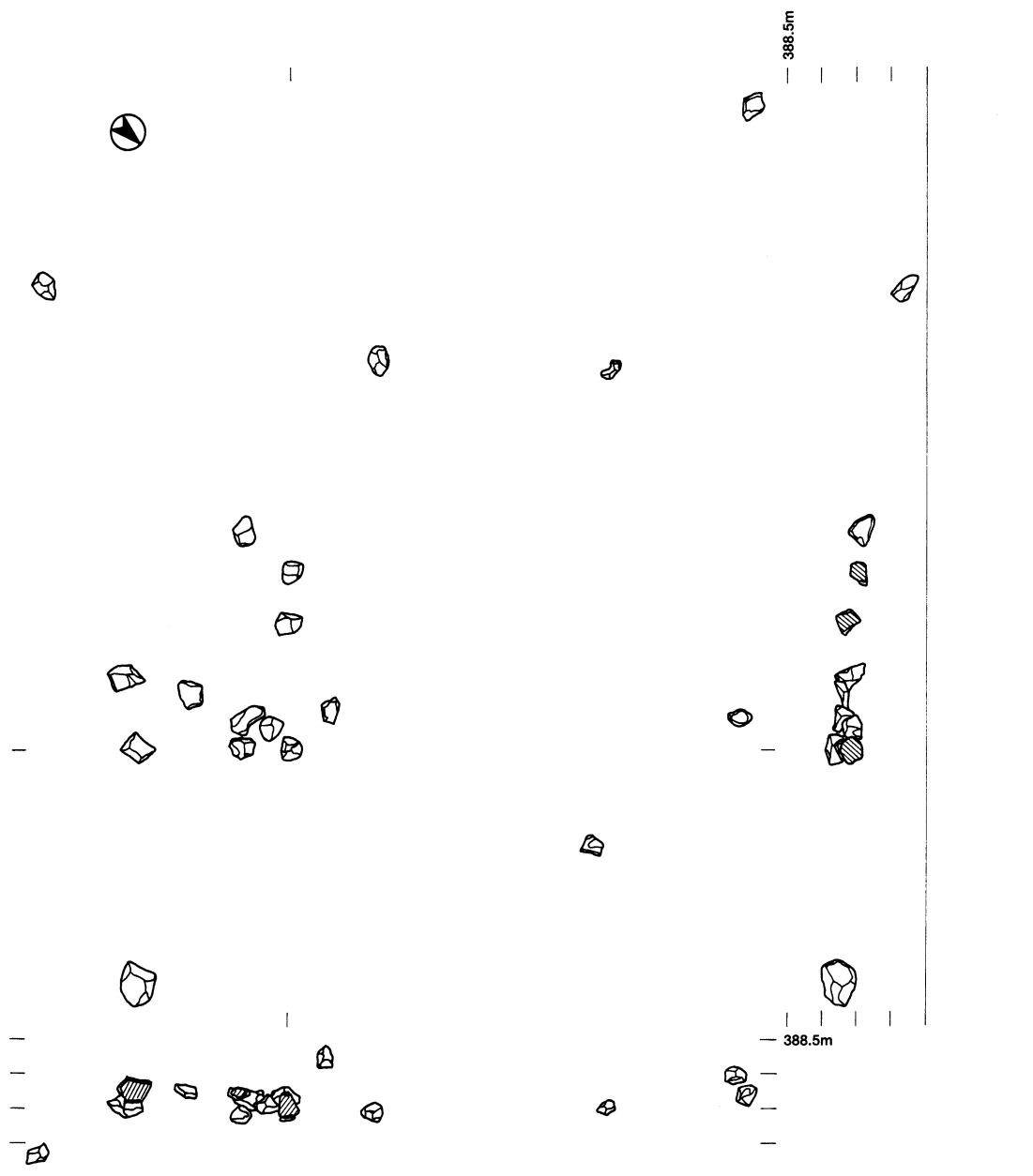


8号

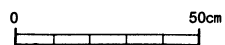


9号

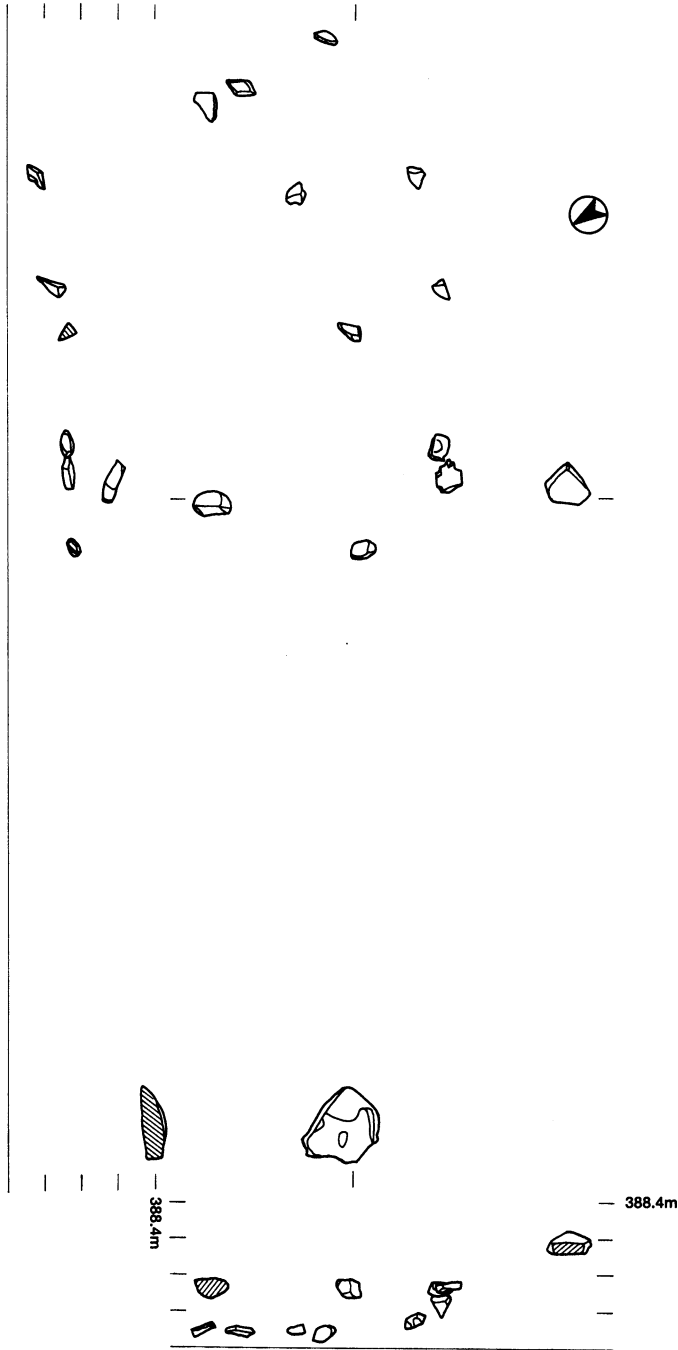
第17图 集石 (4)



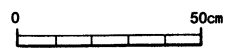
10号



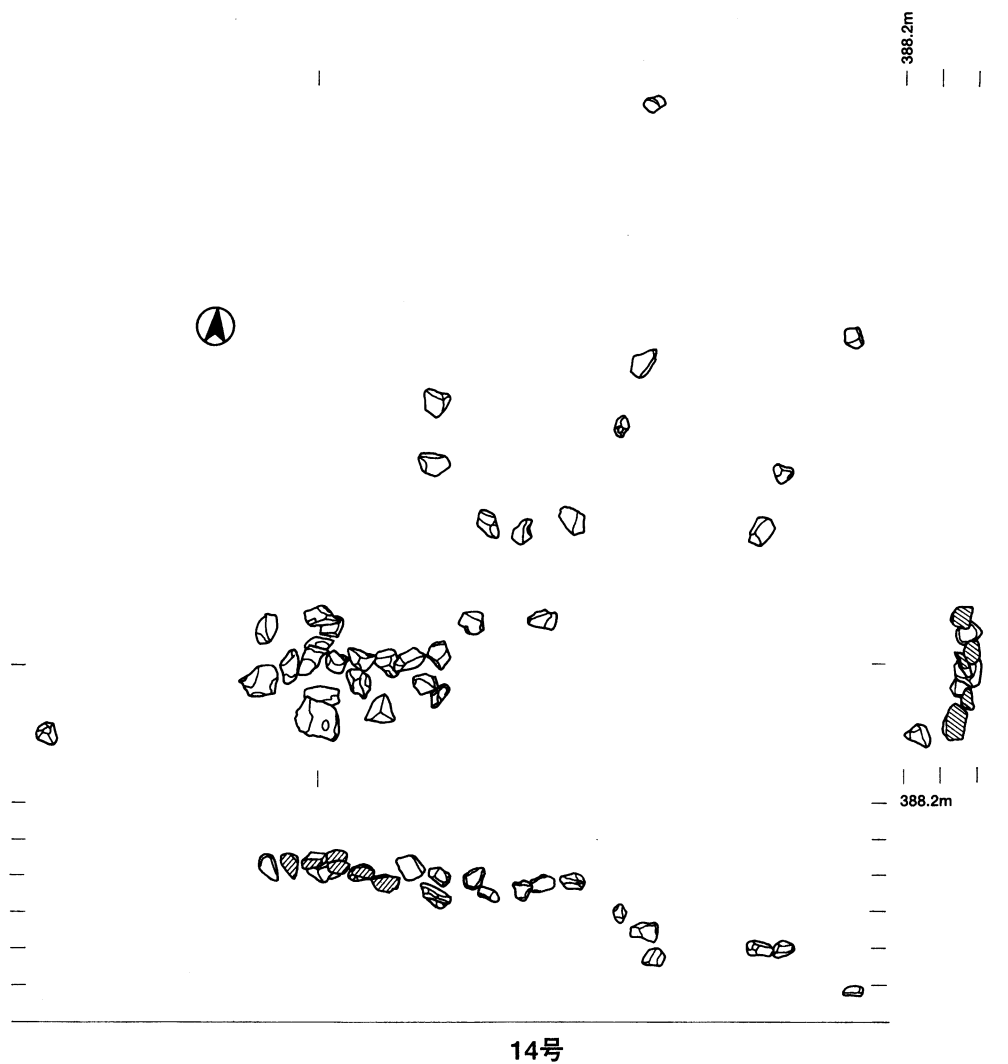
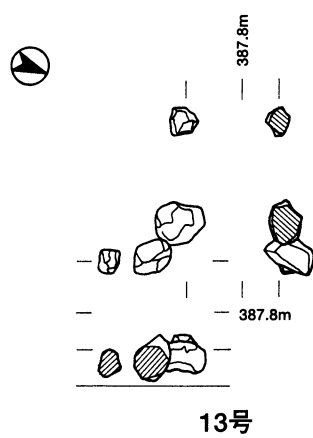
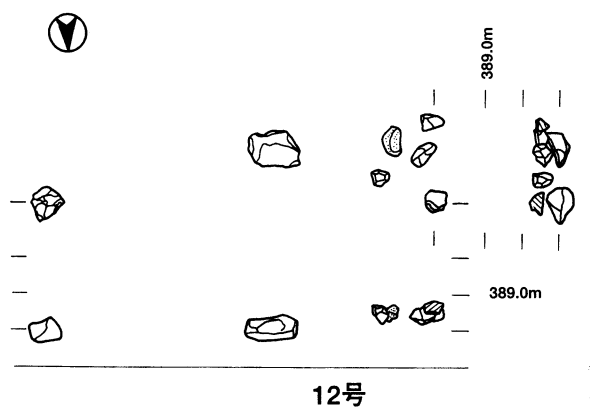
第18図 集石 (5)



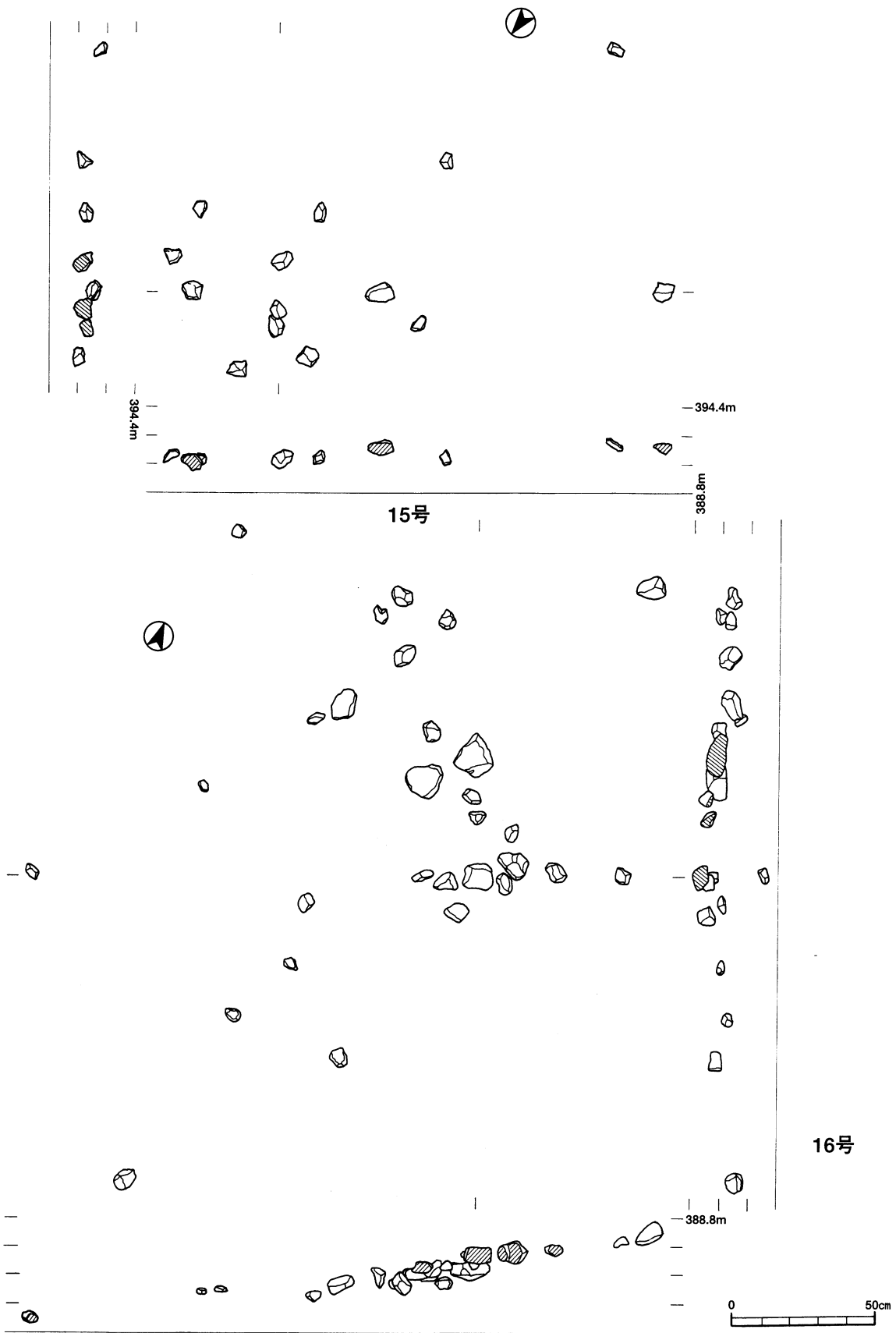
11号



第19図 集石 (6)



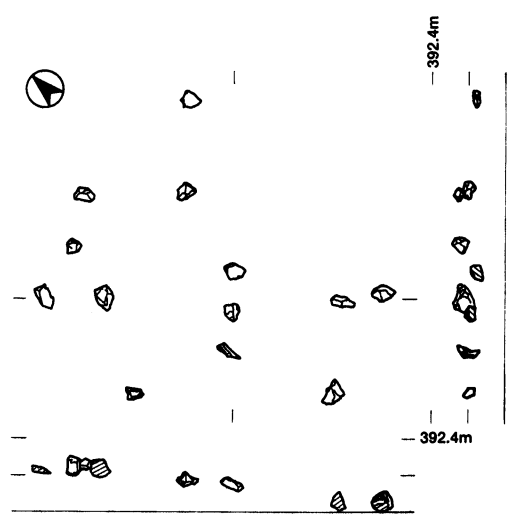
第20图 集石 (7)



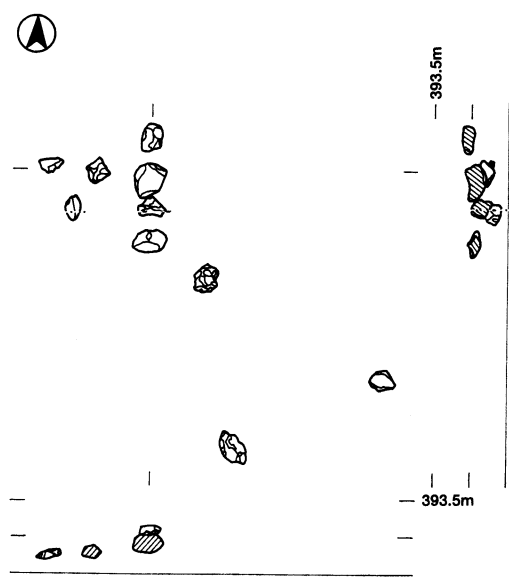
第21図 集石 (8)



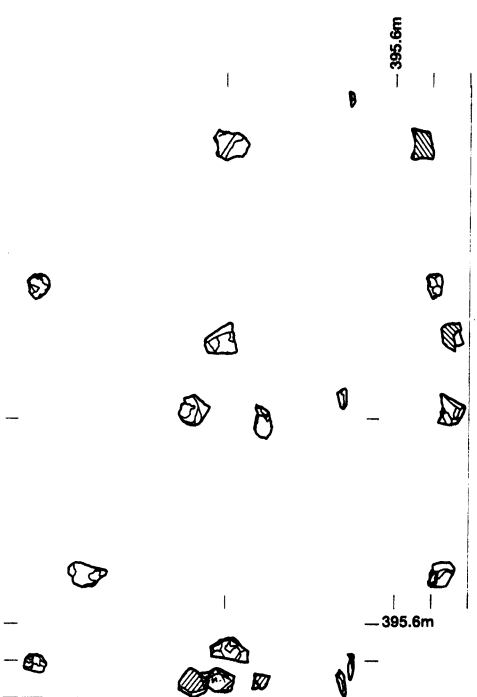
17号



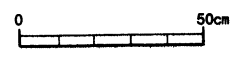
18号



19号



20号



第22図 集石 (9)

⑤B-a-ア類 (3, 4号)

焼土は確認できないが、集石の形態も円形にまとまり、熱変色した礫が多数確認される。

⑥B-a-イ類 (該当なし)

⑦B-b-ア類 (2, 5, 13, 14, 17, 19号)

礫数は少ないが、中心部に礫が密集したタイプの集石で、中には、土器等の敷石としての機能を彷彿とさせるものがある。

⑧B-b-イ類 (7, 8, 9, 10, 11, 12, 15, 18, 20号)

このタイプが本遺跡で最も多く9基を数える。礫数も少なく、密集度も比較的低いため、実用として使用された集石として疑問視される面もあるが、周辺の状況と比較して礫が集まっていることや熱変色した礫が多数見られること等から集石遺構として取り扱うこととした。

2 落とし穴状遺構 (第24図～第26図)

5基の落とし穴状遺構が検出された。集石遺構とは層位的に明らかな時期差が見られ、縄文時代早期より新しい時代の遺構であると思われる。

1号落とし穴状遺構は、A-1区、VI層上面より検出される。

上面プランは隅丸長方形を呈し、検出ラインの長軸が101cm、短軸が63cm、底面の長軸が73cm、短軸が47cm、深さが101cmである。VI層上面で検出された。

底部には、濁黄茶褐色土のアカホヤ火山灰が流入堆積しており、時期的には鬼界カルデラ噴出の直前かそれ以前の時代であると思われる。供伴する遺物は見られない。

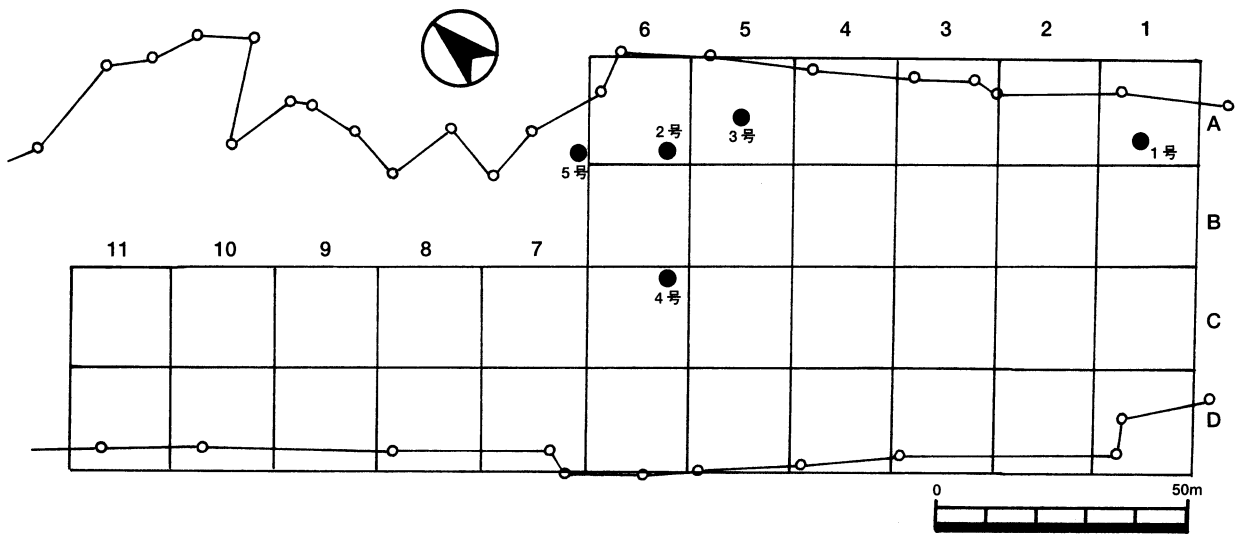
2号落とし穴状遺構は、A-6区、VI層上面より検出される。上面プランは隅丸長方形を呈し、長軸が139cm、短軸が58cm、長軸と短軸の対比は約2.4:1で、他の落とし穴状遺構に比べ、かなり縦長形態の強い様相を呈する。底面の長軸が127cm、短軸が47cm、深さが48cm (検出面のVI b層から、IV b層上面まで約65cmあり、落とし穴として機能していた当初の深さは約113cmだったと思われる。)である。プランの検出面はVI b層だが、底部の埋土に、IV b層の御池白色パミスを大量に含む黄茶褐色土が認められるので、時期的には御池白色パミス堆積直前かそれ以前ではないかと推測される。供伴する遺物は見られない。

また、底面に中央を縦走する形で、逆茂木痕2本が確認され、21～22cmの深さまで打ち込まれている。逆茂木痕内の埋土は、御池パミスが混在する黒褐色土や茶褐色土である。

3号落とし穴状遺構は、A-5区、VI層上面より検出され、上面プランは隅丸長方形を呈する。

検出ラインの長軸は103cm、短軸は57cm、底面の長軸は95cm、短軸は57cm、深さは40cmである。VI b層より検出され、底部の埋土は、V a層 (アカホヤ二次) の埋土が主体であり、時期的には1号落とし穴状遺構の時期に近いと思われる。

4号落とし穴状遺構は、C-6区、VI層上面より検出され、上面プランは隅丸長方形を呈する。

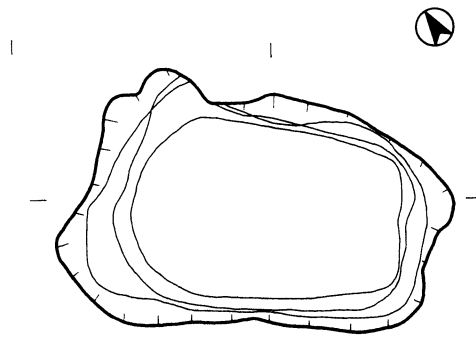
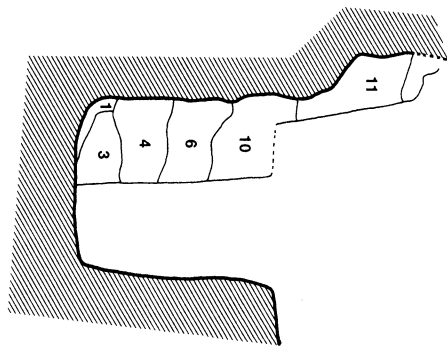


第23図 落とし穴状遺構位置図

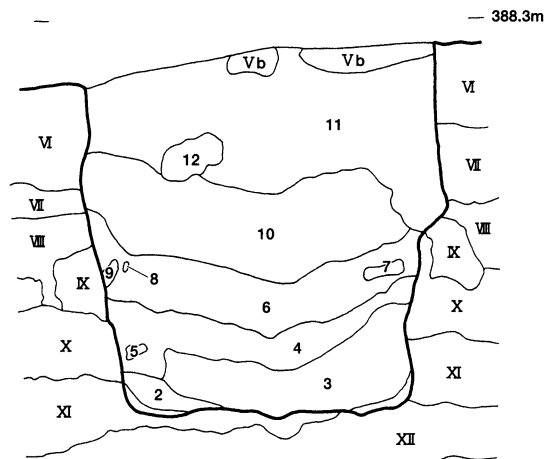
検出ラインの長軸は87cm，短軸は46cm，底面の長軸は67cm，短軸は43cm，深さは62cmである。VI a層上面よりプランが検出され，底面はIX層（サツマ火山灰層）下層まで掘り込んでいる。底部の埋土は，1・3号落とし穴状遺構や前原和田遺跡の1号落とし穴状遺構と同質で，大小のパミスが混入するV層（アカホヤ二次）をベースにしている。

5号落とし穴状遺構は，A-7区，VI層上面よりプランが検出された。長軸が短軸に対して著しく長く，2号落とし穴状遺構と形態が似ている。長軸は170cm，短軸は61cmで長軸と短軸の対比は約2.8：1である。底面の長軸は150cm，短軸は52cm，深さは68cmである。長軸の向きが南北に伸び，2号落とし穴状遺構とほぼ同じ並びである。底部の埋土は黄白橙色のパミス混硬質土で，硬く締まっており，御池のパミスと判断している。検出プランの形態や埋土の土質等より推測すると，2号落とし穴状遺構と時期をほぼ同一にするものと思われる。

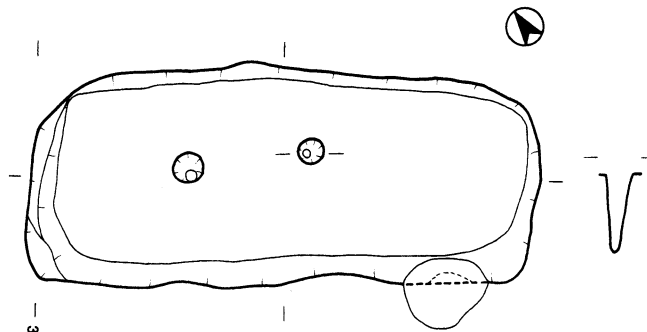
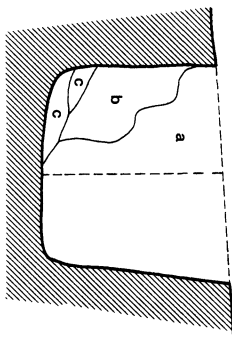
以上，これら5基の落とし穴状遺構のプランはいずれもVI層上面からの検出である。しかし，埋土状況からVI層の時期ではないことは明らかであり，2つの時期が考えられ，（第6図 土層模式柱状図参照）当初に設置された落とし穴の深さは幾分深かったと考えられる。



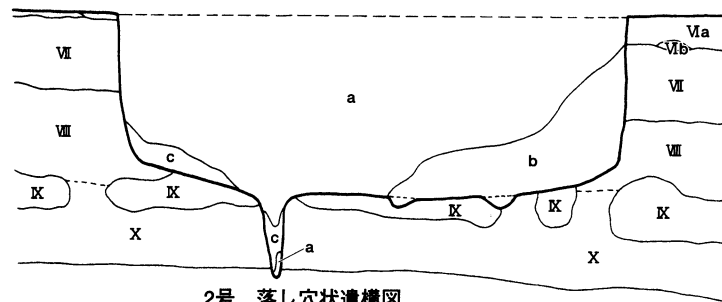
1. 濁黄茶褐色アカホヤ混入土
2. 濁黄茶褐色アカホヤ混入土
3. 濁明黄褐色アカホヤ混入土
4. 濁明茶褐色黄茶褐色混入土
5. 3と同じだが黄白色のパミス見られず
6. 濁明黄茶褐色土
7. 4と同じだがパミスの径が5mm以下
8. Ⅸ層もしくはⅤb層の土
9. 樹痕
10. 黄白色パミス (アカホヤ1次あり)
11. 黄白色パミス
12. Ⅴ層の土



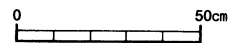
1号 落とし穴状遺構図



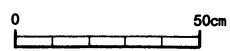
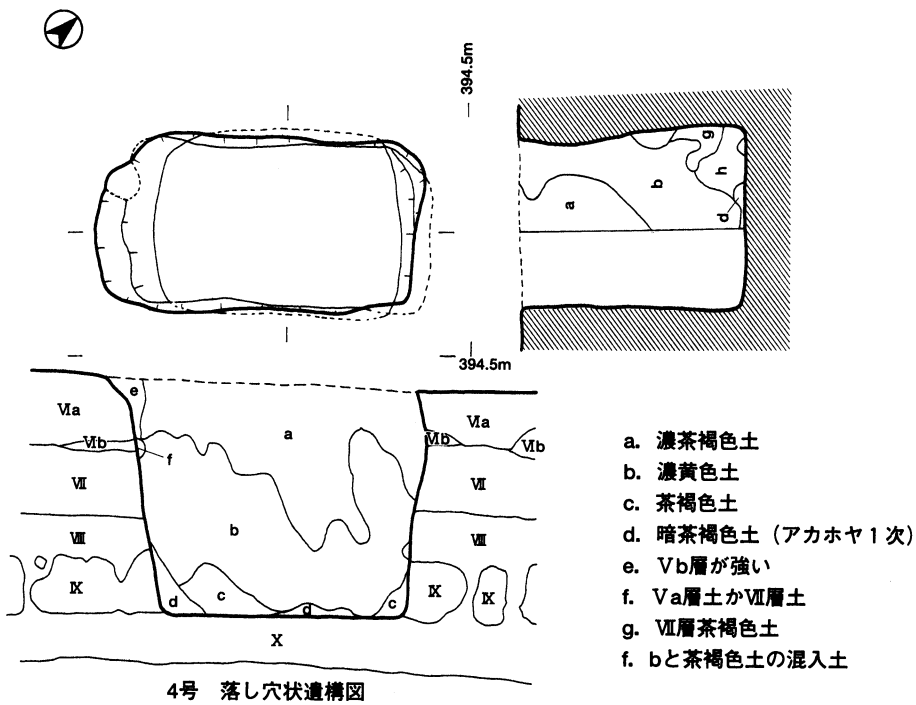
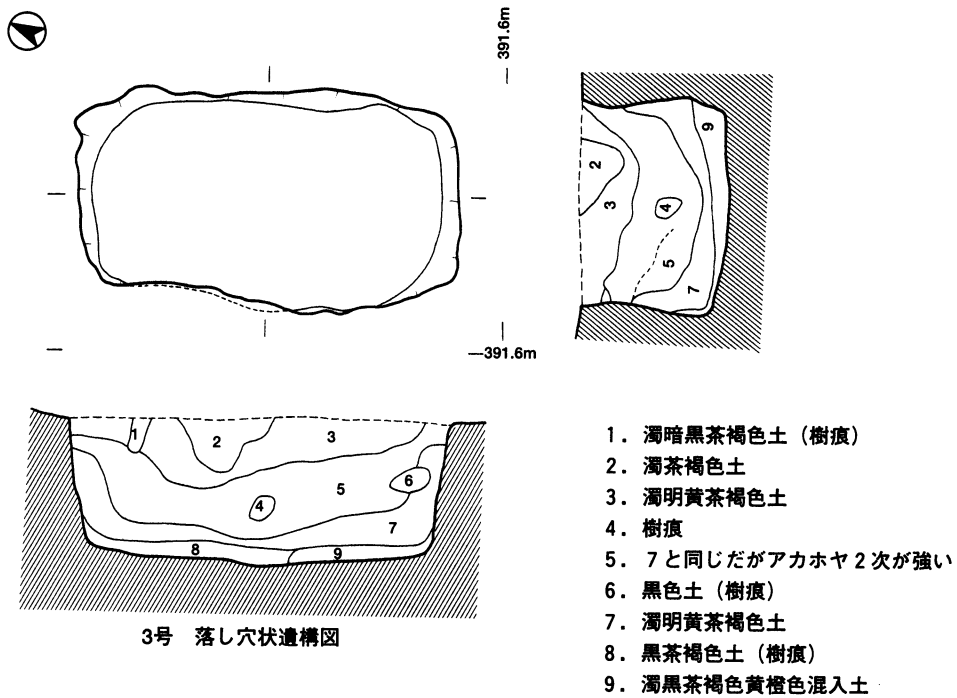
- a. 黄茶褐色白色パミス混入土
- b. オレンジ色パミス混入土
- c. 黒褐色パミス混入土



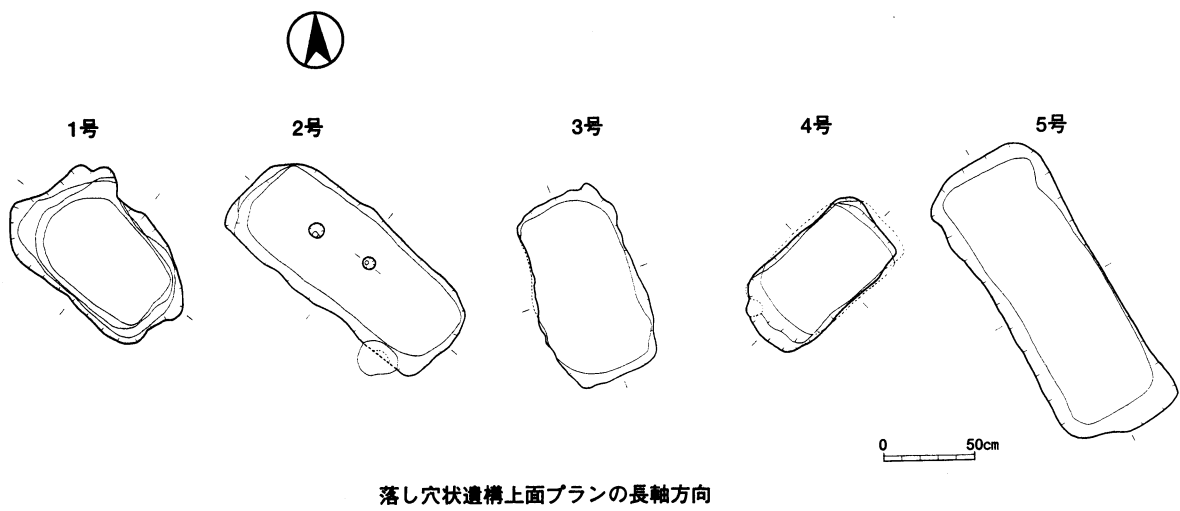
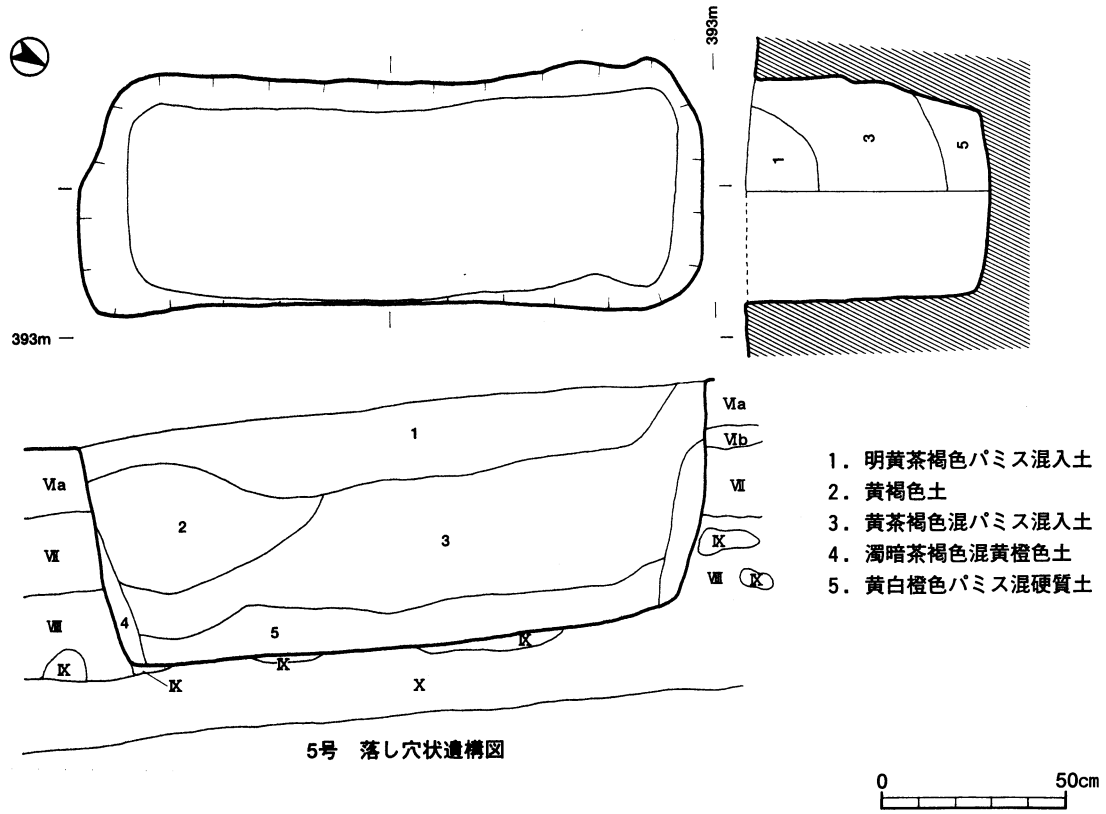
2号 落とし穴状遺構図



第24図 落とし穴状遺構 (1)



第25図 落とし穴状遺構 (2)



第26図 落とし穴状遺構 (3)

第3節 遺物

1. 土器

本遺跡の遺物は、以下の通り、形状によりⅠ～Ⅴ類に分類し、さらに各類で文様等の違いにより細分した。出土層はⅠ～Ⅲ類が縄文時代早期に相当するⅥ・Ⅶ層、Ⅳ・Ⅴ類が同晩期に相当するⅣ層である。なお、Ⅲ層出土の遺物については古墳時代の調査の章に記載した。

Ⅰ類は器壁が薄く胴部上半が内弯した後、口縁部にむかってひらく。胴部中央では「く」の字形に屈曲し、小さな平底にいたる器形をもつ深鉢形土器である。さらに文様の違いにより沈線を施文したものを1、回転押捺による山形押型文を2、同じく縄文その他の押型文を3に細分した。1は胴部屈曲部から上半部分、2・3は土器片である。Ⅱ類は口縁部が外反し隆起部を持った波状口縁となり胴部がやや張り、上げ底状の平底になる深鉢形土器である。1は口唇部にのみ文様が施され、2・3は肥厚した口縁部と胴部にも施文する。Ⅲ類は円筒状の胴部に口縁部もしくは胴部上半で外側に開く形状をもつ深鉢形土器である。文様の種類により撚糸文をA、貝殻文をBに細分した。Ⅳ類は深鉢形土器で文様が無いもの、Ⅴ類は浅鉢形土器で底部に組織痕が確認できるものとした。

Ⅰ-1類 (第27図 1)

第27図は胴部の屈曲が認められる器形である。D-5区のⅧ層上面で出土した。口縁部と胴部(屈曲部)までの出土である。口径は長径が22cm、短径19.5cmの深鉢形土器である。器壁はやや薄めである。調整は良好で、内外に薄く煤の付着がみられる。胎土は細粒で砂質であり石英、角閃石、微細の金雲母を含む。

器形は、胴部上半が内弯した後、口縁部に向かって開いていく。胴部は「く」の字状に屈曲し稜が認められるがその度合いは強くない。

文様は、狭く平坦な口唇部に直行するように斜めに棒状の工具を押圧している。口縁部から胴部の屈曲部分にかけては棒のようなものを櫛状に束ねたと思われる施文具を用い、やや斜めの方向に太めの短沈線文を施している。沈線の断面は浅いU字状を呈している。また、屈曲部をはさみ径1cmの竹管文を上下に1条ずつ巡らせる。外器面側から穿孔が1箇所あるが貫通していない。胴部屈曲部以下は出土していない。

Ⅰ-2類 (第28図 2~18)

第28図は胴部上半が内弯した後、口縁部にむかい開いていき、胴部中央で「く」の字状に屈曲する深鉢形土器である。器壁は薄く砂質である。器面に縦位の山形押型文をもつ。2は口縁部から胴部中央にあたる。口唇部には横位の山形押型文が1段施文され、内面の口縁端部には横位の山形押型文が4段確認できる。口縁部から屈曲する胴部にかけては縦位の山形押型文が施文されている。屈曲部より下部ではより大きな山形文を施文し、一部で菱形文を形成しているが磨耗により明瞭ではない。3は口縁部から胴部にあたる。外面全体に縦位、内面には横位の山形押型文が6段施文されている。両面共煤の付着がみられるが口縁端部にその度合いが強い。

4は口縁部から胴部にあたる。胴部屈曲部までは明瞭な縦位の山形押型文が施文されるが、屈曲部より下半では、より大きな山形文を施文し、一部では菱形文に類似した文様も確認できる。

5は胴部の屈曲部にあたる。屈曲の度合いは緩やかである。施文は無く内外面共に丁寧なナデ調整

が行われている。6は口縁部にあたる。7は胴部の屈曲部にあたるが4・5に比べ稜が緩やかである。縦位の山形押型文が施文されるが屈曲部より下半では文様が見られない。

8～18は胴部にあたる。いずれも屈曲部より下半であり、縦位の大きい山形文が施文されている。但し、全てが同一方向からのものではなく、一定ではないがある程度の範囲を左右両方から施文するため、その先端部分では菱形文に類似した文様を構成している。13は磨耗等により文様の確認が困難である。10・11は屈曲部における胎土の接合部分に相当している。

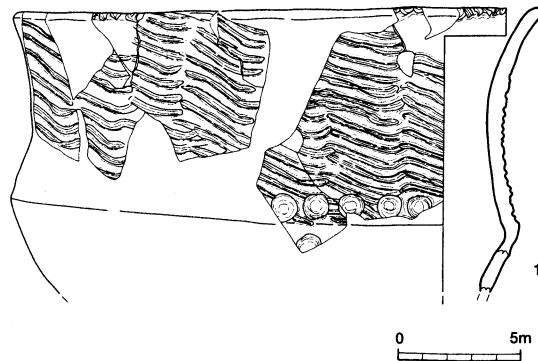
I-3類 (第29図 19～37)

第29図は胴部上半が内弯した後、口縁部にむかい開いていき、胴部中央で「く」の字状に屈曲する深鉢形土器である。縄文を主文様とする。19～26までは縄文原体の結節が大きく、27～33は小さいものに細分できる。19・20は口縁部にあたる。19は口唇部にも斜めに縄文が施文され、外面と内面の口縁端部にも短い縄文が斜めに施文される。21・22は口縁部にあたる。22は外面に煤の付着がみられる。

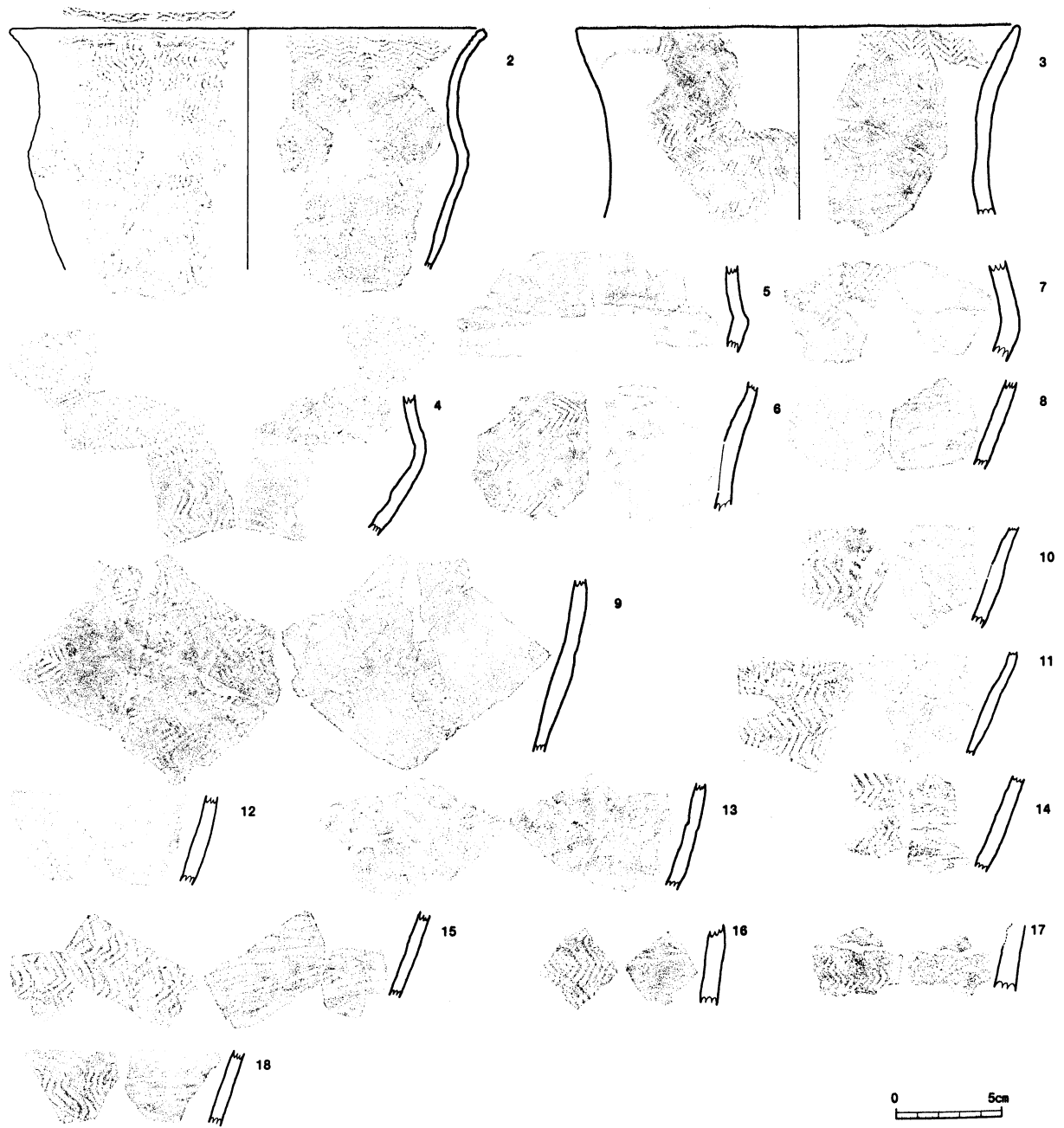
23は口縁部から胴部上半にあたる。24は胴部屈曲部の直下と思われる。内面に煤の付着がみられる。

25・26は胴部にあたる。27～29は口縁部にあたる。30・31は口縁部から胴部屈曲部を含む。

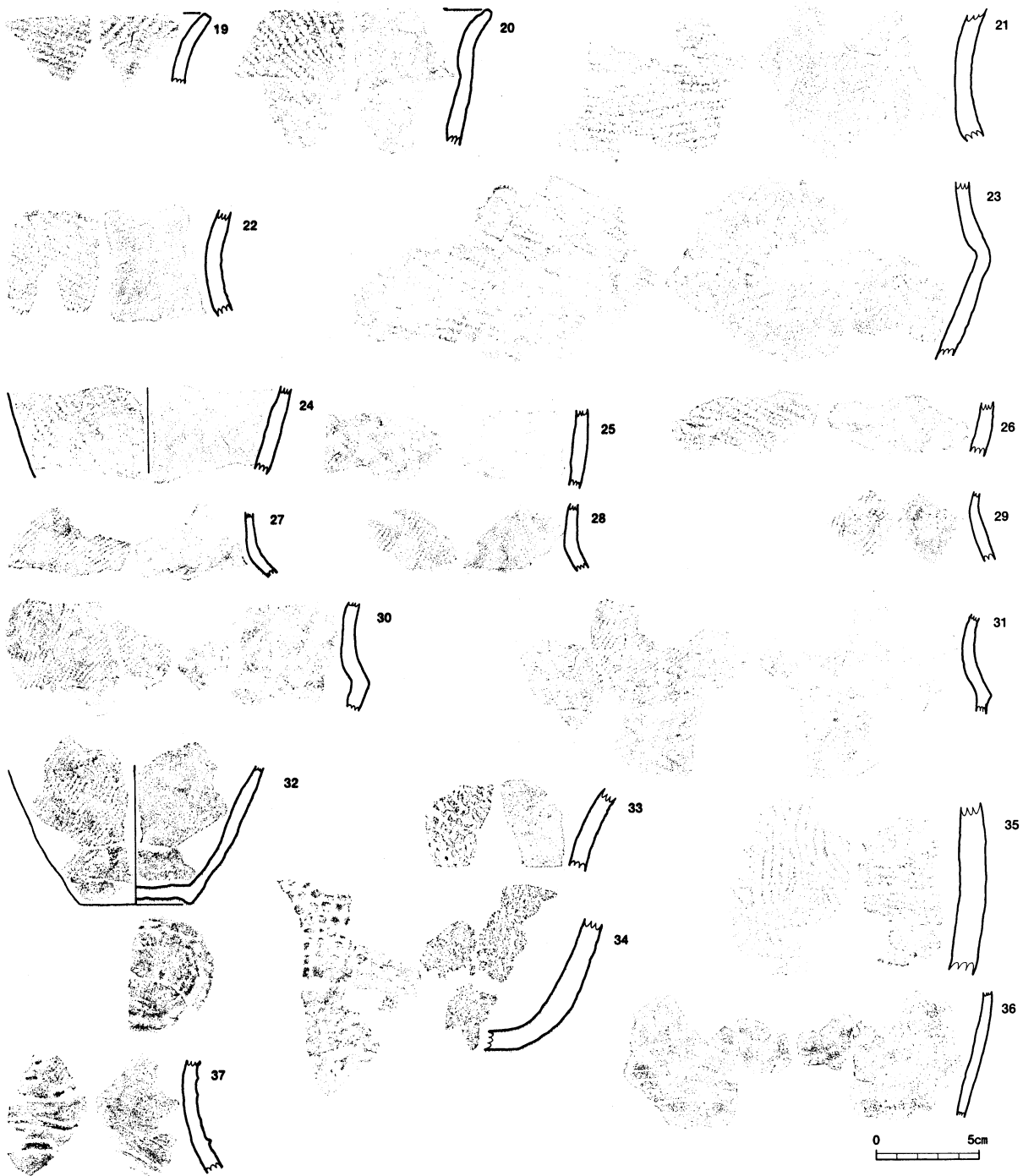
32は胴部下半から底部までを含む。33・34は楕円押型文の胴部と底部、35は胴部、36は胴部屈曲部にあたる。屈曲の度合いは弱く、文様は確認できない。37は胴部上半の内弯部分にあたる。貼り付けによる突帯が施される。突帯の断面は三角形である。



第27図 I-1類土器



第28図 I-2類土器



第29図 I-3類土器

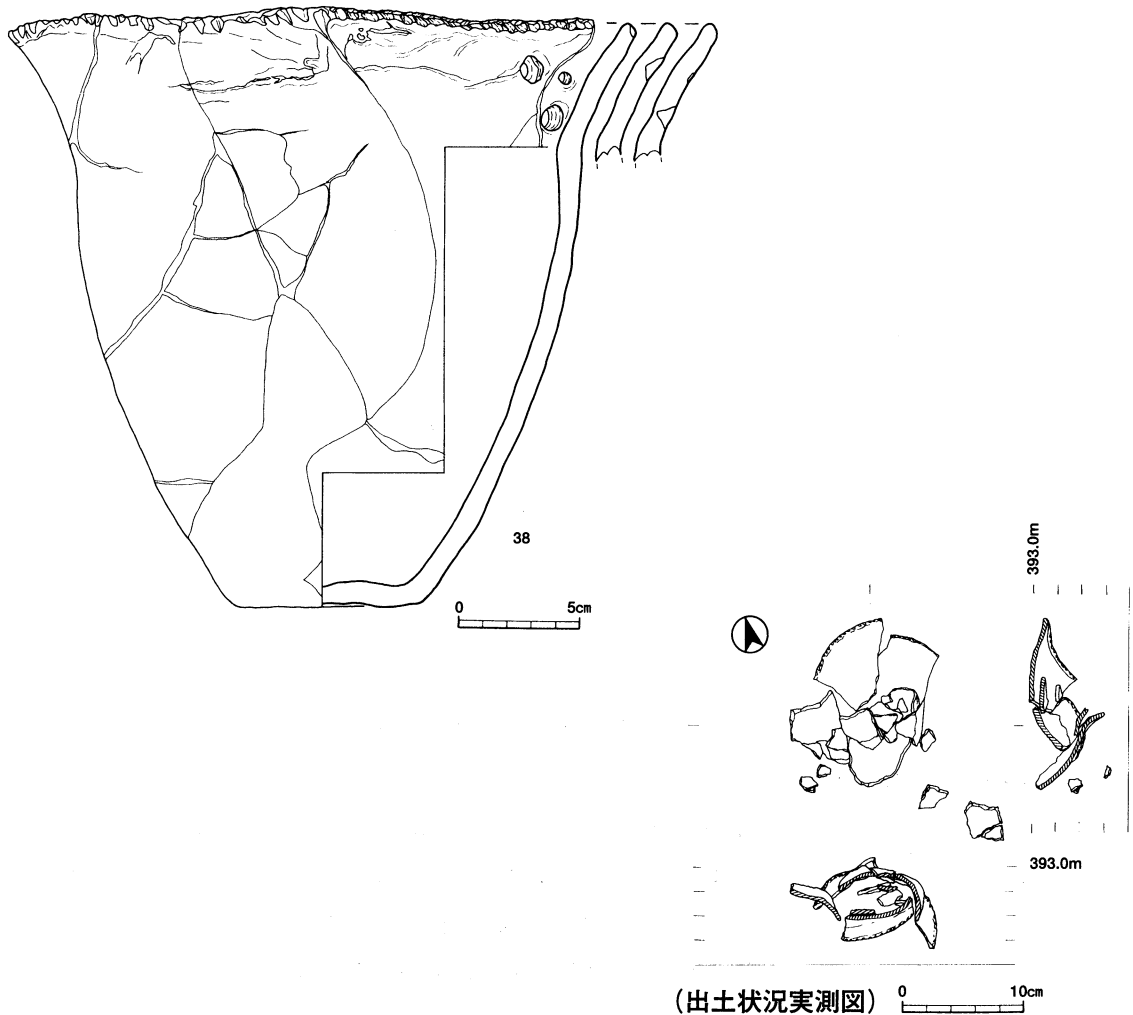
II-1類 (第30図 38)

第30図はB-5区のP-11のパミスとゴマシオ状の小粒子が混入する、Ⅶ層に相当する茶褐色土層で出土した。出土時は口縁部を下向きに潰れた状況であった(出土状況実測図参照)。口径は25cm、底部径は7.5cmである。焼成は良好で胴部中央部から口縁部にかけて煤の付着がみられる。胎土は細粒で長石、石英、雲母、角閃石を含む。調整は内外面共に基本的に横方向のナデ調整を行っている。

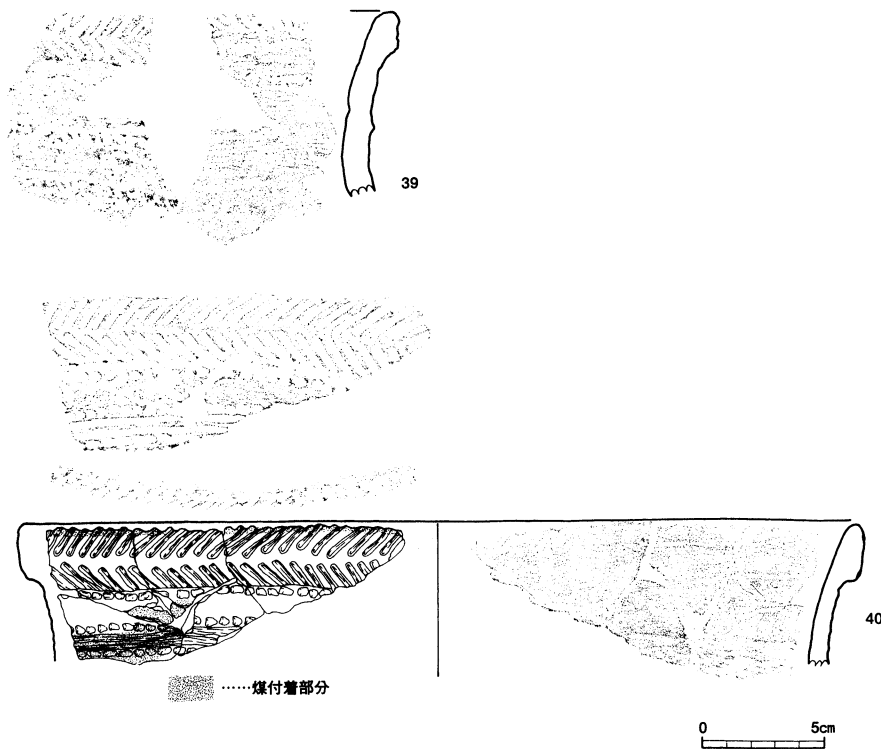
形状は口縁部がラッパ状に開くが屈曲はみられない。4ヶ所の僅かな隆起部をもつ波状口縁である。胴部は円筒形で中央部から底部にかけて急に小さくなっていく。底部はやや上げ底気味である。文様は平坦な口唇部のみで、棒状の施文具により羽状に押圧がなされている。内側からの押圧を後から施したことが窺われる。口縁部には外面側からの穿孔が3箇所あるが、いずれも貫通していない。うち2箇所は内面の同じ位置からも穿孔している。残る1箇所は外面からのみの穿孔で前述のものよりも浅い。

Ⅱ-2類 (第31図 39・40)

第31図の39はD-3区, 40は4TのⅦ層で出土した。39・40ともに口縁部と胴部の一部のみの出土である。焼成は良好で胎土は細粒で石英, 角閃石を含む。内外面共にナデ調整が行われたあと施文がなされている。口縁部は肥厚部があり幅3mmの太目の短沈線文を羽状に施している。40は狭く尖り気味の口唇部にも棒状の施文具により押圧がなされ, 沈線の断面はU字状を呈している。復元口径は35cm。39の胴部は2条の刻み目突帯が確認できる。40の胴部には棒状の施文具による右方向からの刺突連点文を2条巡らし, その下方に2条の沈線を巡らし, 再度刺突連点文を巡らせているのが確認される。



第30図 Ⅱ-1類土器



第31図 II-2類土器

Ⅲ-A-1類 (第32図 41)

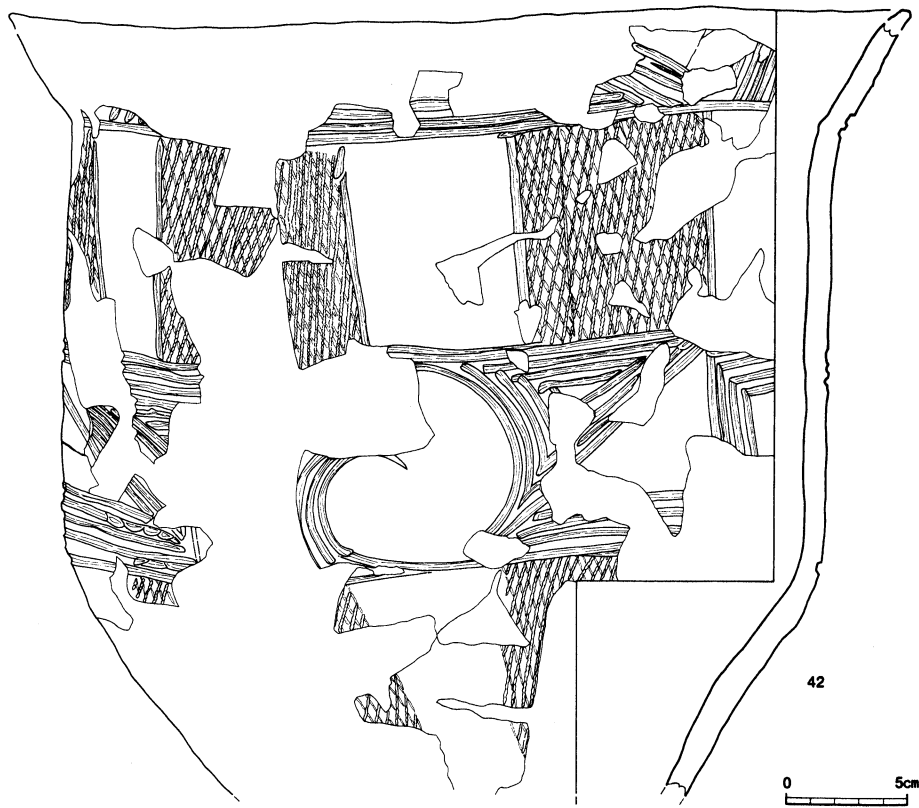
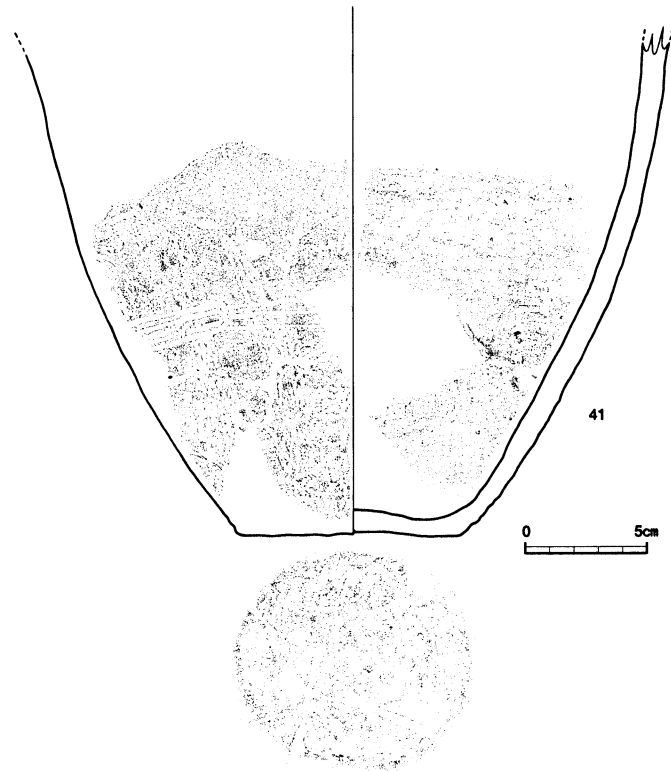
第32図41はB-1・2区のⅦ層から出土した。底部と胴部のみ出土である。底部の径は9.5cmである。焼成は良好で、調整は内外面共に、ナデ調整が行われている。胎土は細粒で石英、角閃石、長石を含む。胴部中央と内面に煤の付着が見られる。文様は胴部上半に撚糸文を縦位に回転押捺し、胴部中央下半より3条の平行沈線文を巡らし、胴部下半には撚糸文を縦位に回転押捺し、胴部の立ちあがり部分に2条の平行沈線文を巡らせているが不明瞭な箇所もある。

Ⅲ-A-2類 (第32図 42)

第32図42はC-2・3区、D-3区のⅥa・Ⅶ層から出土した。器高32.5cm、口径は長径38cm、短径37cm、復元による底部の径が18cmの深鉢形土器である。

焼成は良好で、調整は内外面共に丁寧なミガキ調整を行っている。胎土は細粒で石英、角閃石、長石を含む。口縁部と胴部上半に煤の付着が認められる。

形状は、底部から胴部下半にかけて内弯し、胴部上半から口縁部までは直行し、口縁部でラッパ状に開き、僅かに波状を呈していると思われる。文様は口縁部に棒状工具による沈線文の幾何学文を施文する。胴部との境には棒状工具による沈線が1条巡る。胴部上半の上段には縦方向の沈線文で区画し縦位の撚糸文を回転押捺している。下段には棒状工具による数条の沈線文を平行、斜方向、あるいは曲線を描くようなもので組み合わせた幾何学文を施文する。底部から外反する胴部下半にかけては、棒状工具による区画の無い縦位の撚糸文を回転押捺する。沈線の断面形はU字状を呈している。



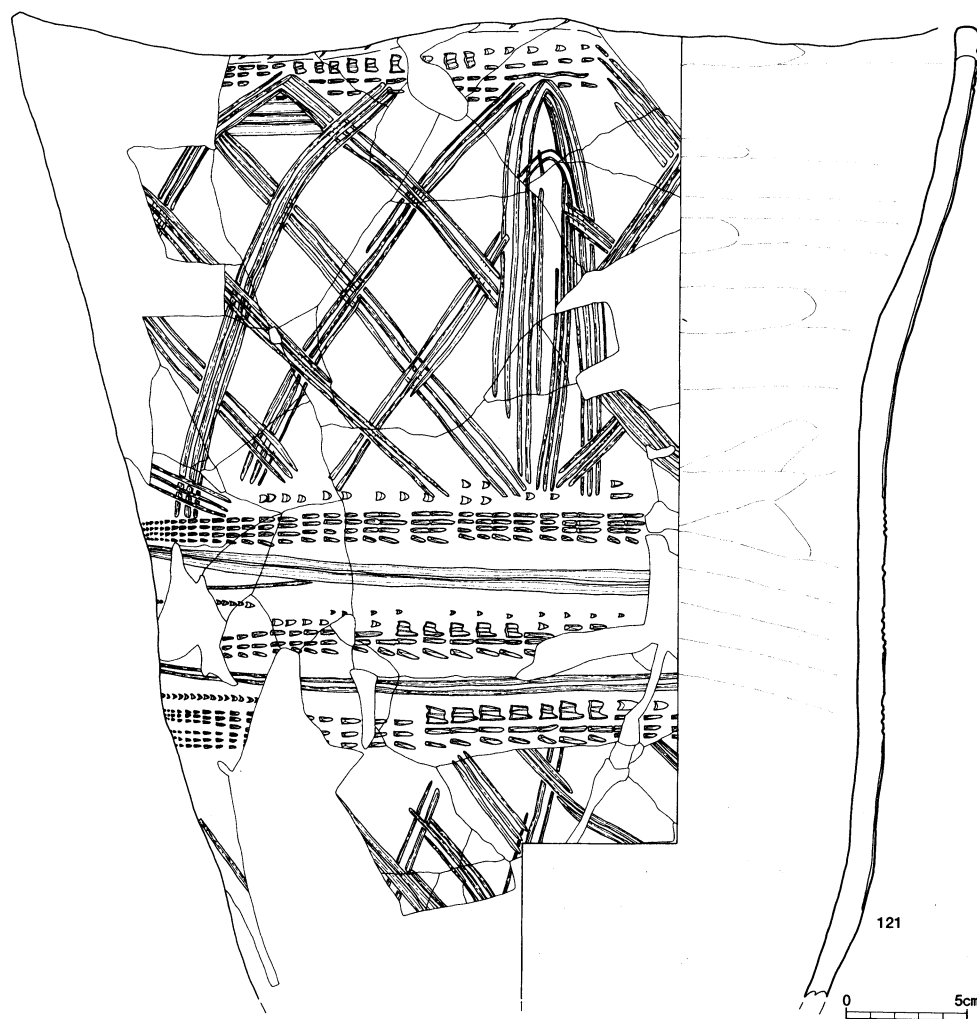
第32図 Ⅲ-A-1類土器, Ⅲ-A-2類土器

Ⅲ-B-1類 (第33図 121)

第33図はC-6区のP-11より上層のⅥa層から出土した。器高は42.5cm，口径は長径が40.5cm，短径が39.5cmの深鉢形土器である。焼成は良好で，口縁部から胴部上半にかけて煤の付着が見られる。胎土は細粒で石英，角閃石，長石，微細な金雲母を含む。調整は外面がナデ調整を行っている。内面も横方向のナデ調整がなされ，一部でケズリ調整が行われている。

形状は，口縁形態が4ヶ所の隆起を持った波状になり，長い口縁部がわずかに外側に開き，口縁部と胴部の境が不明瞭である。胴部は胴部中央でわずかに膨らみ底部にかけてわずかに狭まる。

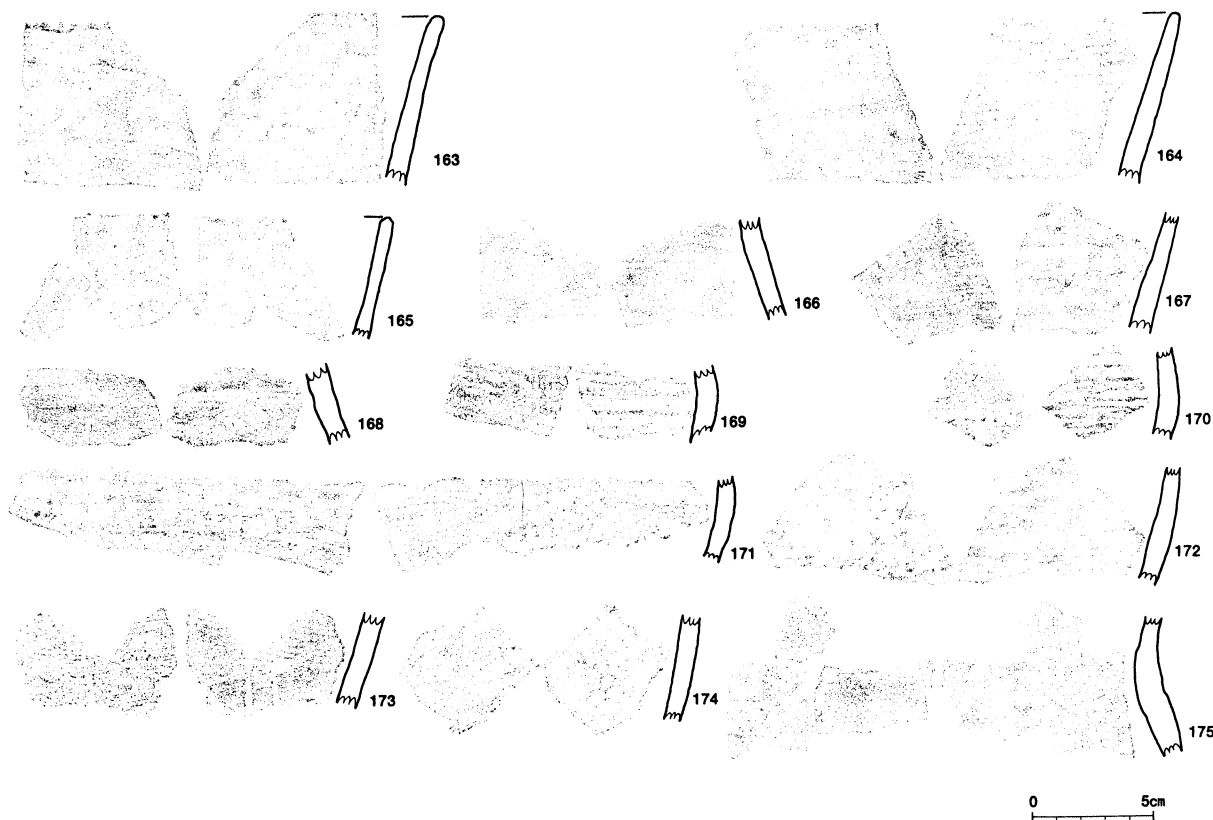
文様は口唇部が丸みを帯び，貝殻腹縁部を利用した刺突文が施される。口縁部には口縁上端部に貝殻腹縁による右方向への押し引き状の刺突文を縦位に巡らし，口縁下端部に貝殻の放射ロクを利用した3～6条の平行沈線文が斜格子状に施文される。口縁部が波状になる位置では沈線による縦長の同心円状の文様も施される。胴部上半には貝殻腹縁による刺突文を1ないし2条，その下に右方向への押し引き状の刺突文を3条巡らせるものを1単位とする文様を3段施し，その間に貝殻の放射ロクを利用した2～3条の平行沈線文を巡らしている。胴部下半には貝殻の放射ロクを利用した2～3条の平行沈線文を斜格子状に施文している。沈線の断面形はいずれも浅いU字状である。



第33図 Ⅲ-B-1類土器

IV類 (第34図 163~175)

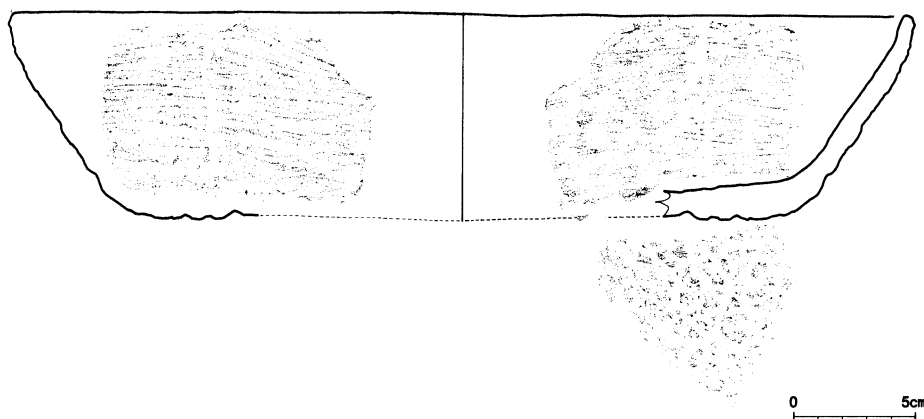
第34図はIV a層での出土土器である。163~165は口縁部で全体に煤の付着がみられる。166~175は胴部にあたる。168, 170には煤の付着が部分的にみられる。167は胴部の外反部から屈曲部にあたり、断面図からは観察しにくいのが、内面の上端部と下端部に立ちあがりの部分がみてとれる。168・169は僅かに稜が認められ、緩やかに内弯している。175は胴部の屈曲部分にあたる。外面は煤が付着しているが、内面は朱色である。



第34図 IV類土器

V類 (第35図 176~179)

第35図176~179はD-10区のIV a層から出土している。出土資料の形状から平面形は楕円形と思われるが、接合資料の不足により復元することが困難な為、口径・底径は推定できない。しかし、口縁部から底部を含む資料の出土により浅鉢形の土器であることは判明しており器高は8.5cmである。胎土は細粒で石英、角閃石を含む。焼成は良好で全体が赤褐色を呈している。調整は内面が条痕調整であるが、胴部下半から底部にかけては条痕調整の後へラみがきが行われている。外面も条痕調整である。形状は、底部は平底と思われるが、胴部との境が明瞭でなく、緩やかに内弯しながら胴部へ続いている。胴部は外開きであるが口縁部でやや内弯する。胴部下半が厚く、口唇部にかけて薄くなっていく。底部全面と胴部立ち上がり部分にかけては明瞭な組織痕があり、陽版による観察から編目圧痕が確認できる。編目の幅は2~2.5cmで粗い。糸は2本を撚って1本としており、糸幅は1.2mm~2.0mmであるが1.5mm幅のものが多い。糸の重なり具合から複数枚重ねたか、もしくは複数回折りたたんだ編目を敷いたことが考えられる。



第35図 V類土器

第1表 I-2類土器 (VI a・VII層出土)

挿図	番号	器種	部位	出土	登録番号	胎土	調整	備考
27	2	深鉢形土器	口縁部 口唇部 胴部	B-1	72 73	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:山形押型文 内:ナデ	口唇部2段,口縁端部内側に4段の横位の山形押型文が施文され,胴部屈曲部を境に大小2種の山形押型文が施文されている。胴部下半では2方向から大型の山形押型文が施文され,菱形文に類似した文様を構成する。
	3	深鉢形土器	口縁部 胴部	C-5	26 28	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:山形押型文 内:ナデ	屈曲部の下半から山形押型文の大きさに変化がみられる。胴部下半では2方向から山形押型文が施文され,菱形文に類似した文様を構成する。
	4	深鉢形土器	胴部	D-5	69 213	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:山形押型文 内:ナデ	屈曲部を境に大小2種の山形押型文が施文されている。胴部下半では2方向から大型の山形押型文が施文され,菱形文に類似した文様を構成する。
	5	深鉢形土器	胴部	D-10	96 97	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:ナデ 内:ナデ	胴部屈曲部。破碎部分で胎土の接合部分が確認される第27図のNo1と同類の形式・文様と思われる。
	6	深鉢形土器	胴部	C-5	30	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:山形押型文 内:ナデ	2方向から山形押型文が施文され,菱形文に類似した文様を構成する。
	7	深鉢形土器	胴部	〃	22	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:山形押型文 内:ナデ	屈曲部分の内面で胎土の接合部分が確認できる。
	8	深鉢形土器	胴部	D-6	66	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:山形押型文 内:ナデ	大型の山形文が施文されている。2方向から山形押型文が施文され,菱形文に類似した文様を構成する。
	9	深鉢形土器	胴部	C-5	18 19 21	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:山形押型文 内:ナデ	2方向から山形押型文が施文され,菱形文に類似した文様を構成する。
	10	深鉢形土器	胴部	B-1	76	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:山形押型文 内:ナデ	屈曲部にあたる。胎土の接合部分が確認ができる。屈曲部分に小型の,それ以下に大型の山形文が施文される。
	11	深鉢形土器	胴部	B-11	78	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:山形押型文 内:ナデ	屈曲部にあたる。胎土の接合部分が確認できる。屈曲部分に小型の,それ以下に大型の山形文が施文される。
	12	深鉢形土器	胴部	D-6	78	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:山形押型文 内:ナデ	胴部下半にあたり大型の山形文を施文している
	13	深鉢形土器	胴部	〃	47	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:山形押型文 内:ナデ	外面は磨耗し文様が確認できない。

	14	深鉢形土器	胴部	〃	52	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外;山形押型文 内;ナデ	胴部下半にあたり大型の山形文を施文している。
	15	深鉢形土器	胴部	〃	74 75	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外;山形押型文 内;ナデ	胴部下半にあたり大型の山形文を施文している。一部で施文の方向が変化し、菱形文に類似した文様を形成している。
	16	深鉢形土器	胴部	〃	20	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外;山形押型文 内;ナデ	
	17	深鉢形土器	胴部	C-5	8	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外;山形押型文 内;ナデ	
	18	深鉢形土器	胴部	D-6	44	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外;山形押型文 内;ナデ	

第2表 I-3 類土器 (VI a・VII層出土)

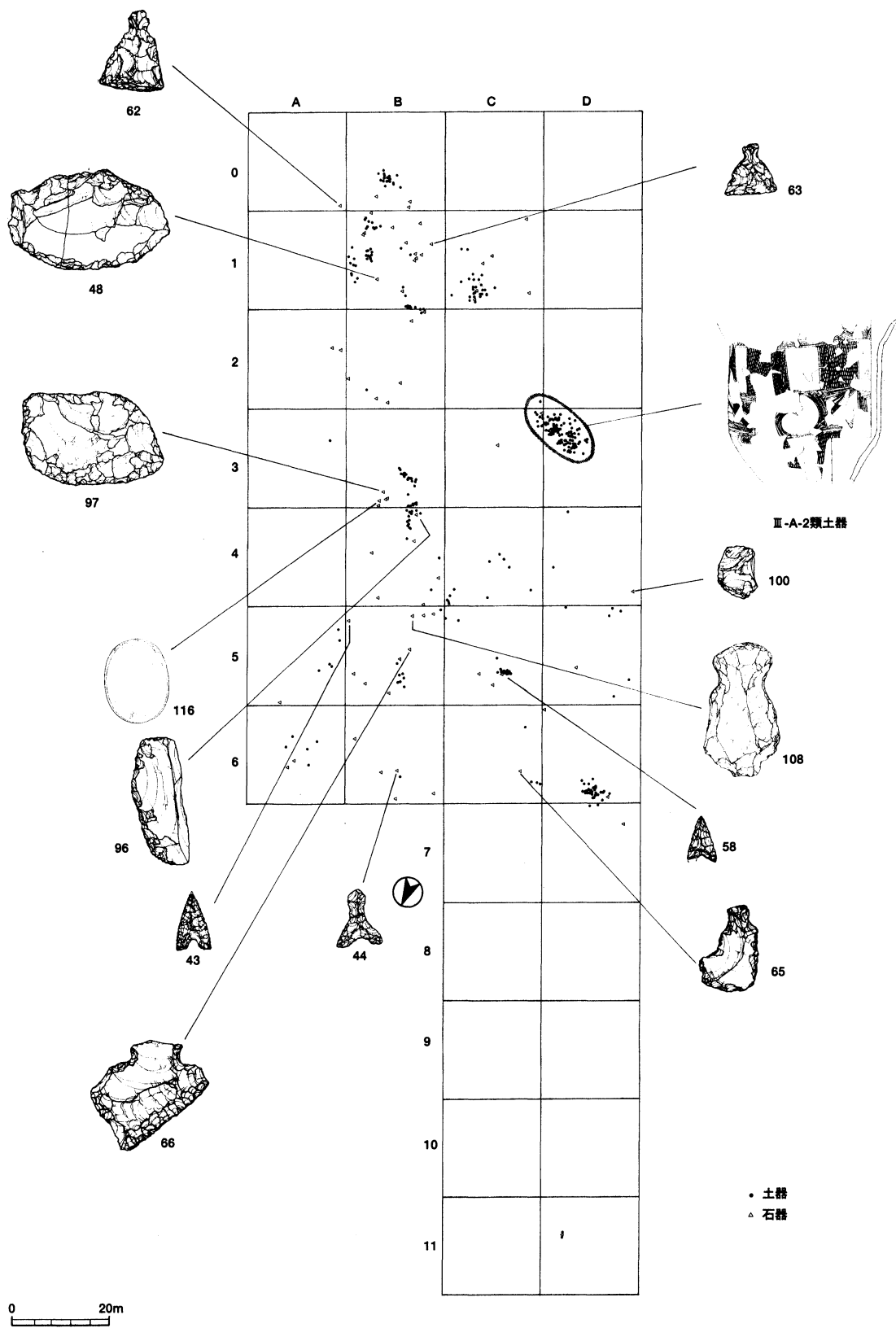
挿図	番号	器種	部位	出土	登録番号	胎土	調整	備考
28	19	深鉢形土器	口縁部	B-3	15	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外;縄文 内;ナデ	口唇部、内面の口縁端部にも斜めの縄文を施文している。縄文原体が大きい。
	20	深鉢形土器	口縁部	A-6	6 7	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外;縄文 内;ナデ	内側に煤の付着がみられる。縄文原体が大きい。
	21	深鉢形土器	胴部	B-4	17 35 36 38	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外;縄文 内;ナデ	胴部上半のくびれにあたる。内側に煤の付着がみられる。縄文原体が大きい。
	22	深鉢形土器	胴部	〃	30	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外;縄文 内;ナデ	胴部上半のくびれにあたる。内側に煤の付着がみられる。縄文原体が大きい。
	23	深鉢形土器	胴部	B-3	10 11	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外;縄文 内;ナデ	屈曲部を含む。上半と内面に煤の付着がみられる。縄文原体が大きい。
	24	深鉢形土器	胴部	A-5	2 3	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外;縄文 内;ナデ	内側に煤の付着がみられる縄文原体が大きい。
	25	深鉢形土器	胴部	A-6	8 18	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外;縄文 内;ナデ	縄文原体が大きい。
	26	深鉢形土器	胴部	B-4	27	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外;縄文 内;ナデ	縄文原体が大きい。
	27	深鉢形土器	胴部	B-1	104	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外;縄文 内;ナデ	胴部上半のくびれにあたる。縄文原体が小さい
	28	深鉢形土器	胴部	〃	9	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外;縄文 内;ナデ	胴部上半のくびれにあたる。縄文原体が小さい
	29	深鉢形土器	胴部	〃	84	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外;縄文 内;ナデ	胴部上半のくびれにあたる。外に薄く赤化した部分が見られ、内に煤の付着が見られる。縄文原体が小さい
	30	深鉢形土器	胴部	〃	101	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外;縄文 内;ナデ	屈曲部上半にあたる。内外共に煤の付着がみられる。縄文原体が小さい
	31	深鉢形土器	胴部	〃	105	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外;縄文 内;ナデ	屈曲部上半にあたる。縄文原体が小さい

	32	深鉢形土器	胴部 底部	〃	83 103 117	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:縄文 内:ナデ	底部は上げ底気味。縄文原体が小さい
	33	深鉢形土器	胴部	B-4	54	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:楕円押型文 内:ナデ	外側に煤の付着がみられる
	34	深鉢形土器	胴部 底部	A-1	11 13 14	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:楕円押型文 内:ナデ	内側に煤の付着がみられる
	35	深鉢形土器	胴部	B-0	8	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:押型文 内:ナデ	内側に煤の付着がみられる
	36	深鉢形土器	胴部	B-0	28	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外: 内:ナデ	器壁が薄い
	37	深鉢形土器	胴部	D-3	84	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:貼付け突帯 内:ナデ	胴部のくびれにあたる。ナデ調整の後、貼付け突帯を波状に施す。突帯の断面は三角形である。

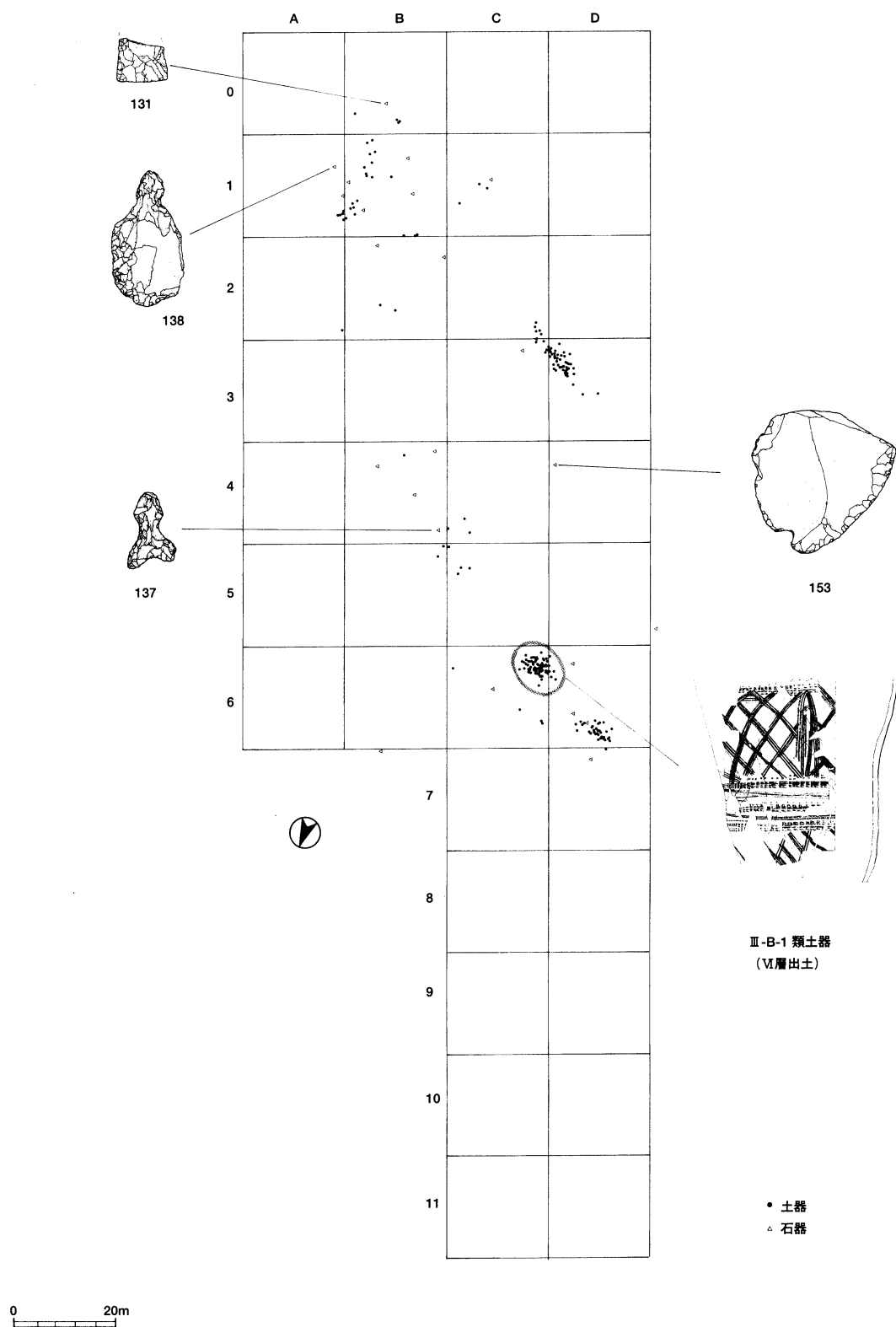
第3表 IV・V類 (Ⅲ・Ⅳa層出土)

挿図	番号	器種	部位	出土	登録番号	胎土	調整	備考
33	163	深鉢形土器	口縁部	D-11	64	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:ナデ 内:ナデ	煤の付着がみられる。
	164	深鉢形土器	口縁部	〃	35	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:ナデ 内:ナデ	煤の付着がみられる。
	165	深鉢形土器	口縁部	〃	45 68	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:ナデ 内:ナデ	煤の付着がみられる。
	166	深鉢形土器	胴部	〃	12	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:ナデ 内:ナデ	「く」の字状に緩やかに屈曲する胴部の一部と思われる。上端に外反部、下端に屈曲部が僅かに確認される。
	167	深鉢形土器	胴部	〃	54	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:ナデ 内:ナデ	
	168	深鉢形土器	胴部	〃	65	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:ナデ 内:ナデ	緩やかな屈曲がみられる
	169	深鉢形土器	胴部	〃	33	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:ナデ 内:ナデ	緩やかな屈曲がみられる
	170	深鉢形土器	胴部	〃	36	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:ナデ 内:ナデ	
	171	深鉢形土器	胴部	〃	21 46 52	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:ナデ 内:ナデ	
	172	深鉢形土器	胴部	〃	48 69	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:ナデ沈線 内:ナデ沈線	
	173	深鉢形土器	胴部	〃	63 67	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:ナデ 内:ナデ	
	174	深鉢形土器	胴部	〃	56	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:ナデ 内:ナデ	
	175	深鉢形土器	胴部	D-10	4 84	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外:ナデ 内:ナデ	屈曲部分に相当する。

176	浅鉢形土器	口縁部 胴部	〃	105	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外;条痕 内;条痕	口縁部で内湾している。
177	浅鉢形土器	口縁部 胴部	〃	26	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外;条痕 内;条痕	口縁部で内湾している。
178	浅鉢形土器	胴部 底部	D-10	101 102 103	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外;条痕 内;条痕 ヘラみがき	底部に組織痕あり。経糸の間隔は平均2.5cm～3.5cm程度で形状は菱形になる。内面は条痕調整の後、胴部下半から底部にかけてヘラみがきが行われている
179	浅鉢形土器	口縁部 胴部 底部	〃	32 95 99	砂粒・細砂粒で石英・長石・角閃石を多く含む	外;組織痕 内;条痕 ヘラみがき	口縁部は内湾し、底部に組織痕あり。経糸の間隔は平均2.5cm～3.5cm程度で形状は菱形になる。内面は条痕調整の後、胴部下半から底部にかけてヘラみがきが行われている



第36图 VI層遺物出土分布図



第37图 V·VI層遺物出土分布图

2 石器

Ⅶ層からⅣ層にかけて132点の石器が出土する。主な石器の種類は、石鏃、スクレイパー、石匙、磨石、石皿、打製石斧の6種類が見られ、縄文時代早期に該当するⅦ層の出土が多い。出土状況は、石鏃やスクレイパー、石匙等の剥片石器に対して、石皿、磨石等の礫石器の出土数が少なく、石皿は自然礫の一面をそのまま使用したものであった。また、Ⅶ層とⅥ層からは異形石器が1点ずつ出土した。

(1) Ⅶ層出土の石器

①打製石鏃(第38・40図)

61は片側の脚部と先端部が欠損している。調整は粗い。58の石材は姫島産の黒曜石である。厚みはあるが、丁寧に調整されており、先端は鋭い。脚部が一部欠損している。60は丁寧に調整されており、基部の挟りが浅い。59は先端部が鋭く、両側辺が若干内湾し、逆刺が丸く、挟りが深い。全体的に非常に丁寧に調整が施されている。43は基部の厚さが薄く、先端部が鈍い。両側辺は外湾し、逆刺は方形で挟りが深い。

②異形石器(第38図)

44はⅦ層出土の137と同タイプのものである。石材はハリ質安山岩である。調整も良く成されており形態が整っている。

③抉入石器(第49図)

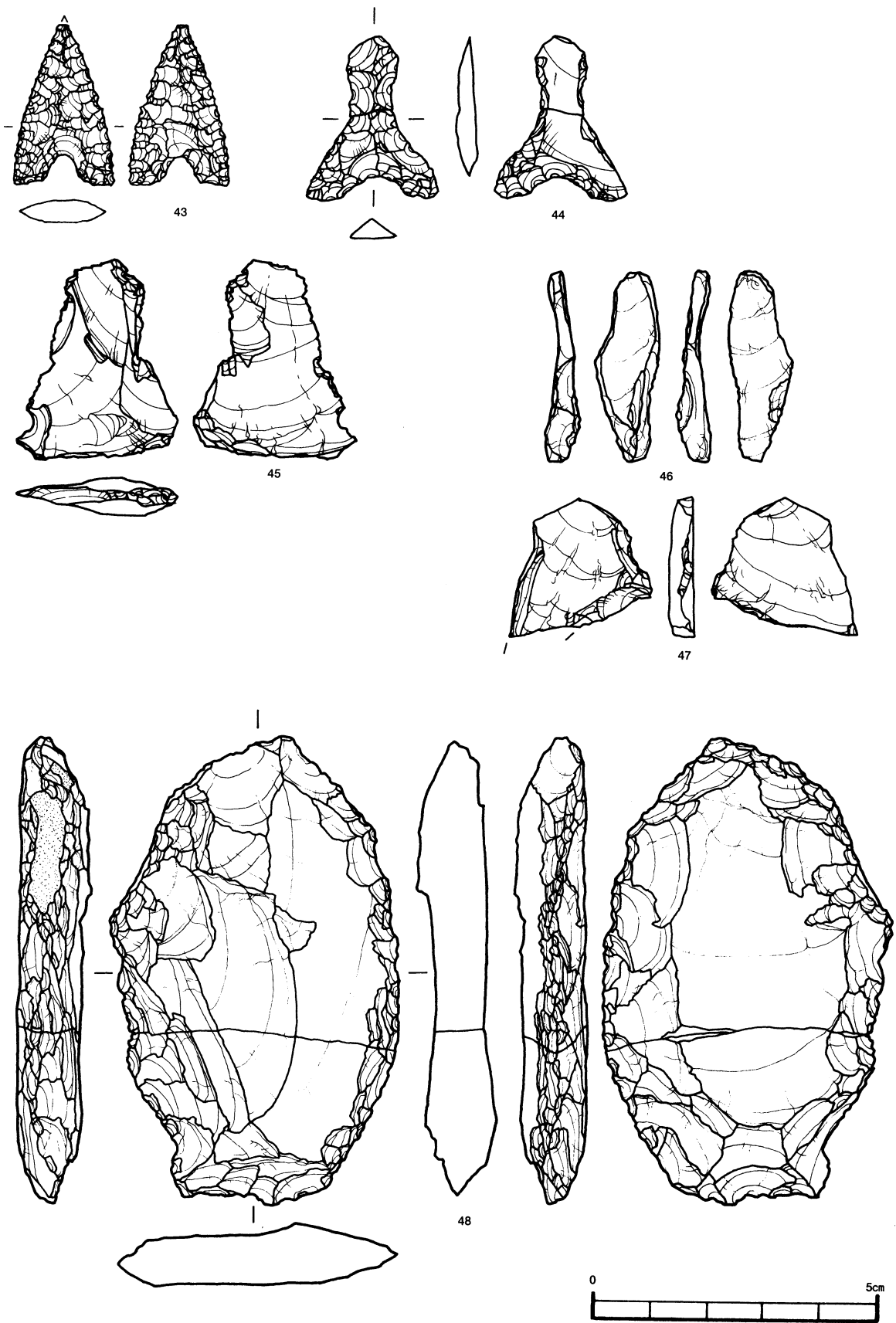
107は両側辺に簡単な挟りを施しており、石匙に良く似た形態を呈する。石材はチャートである。

④石匙(第39・40図)

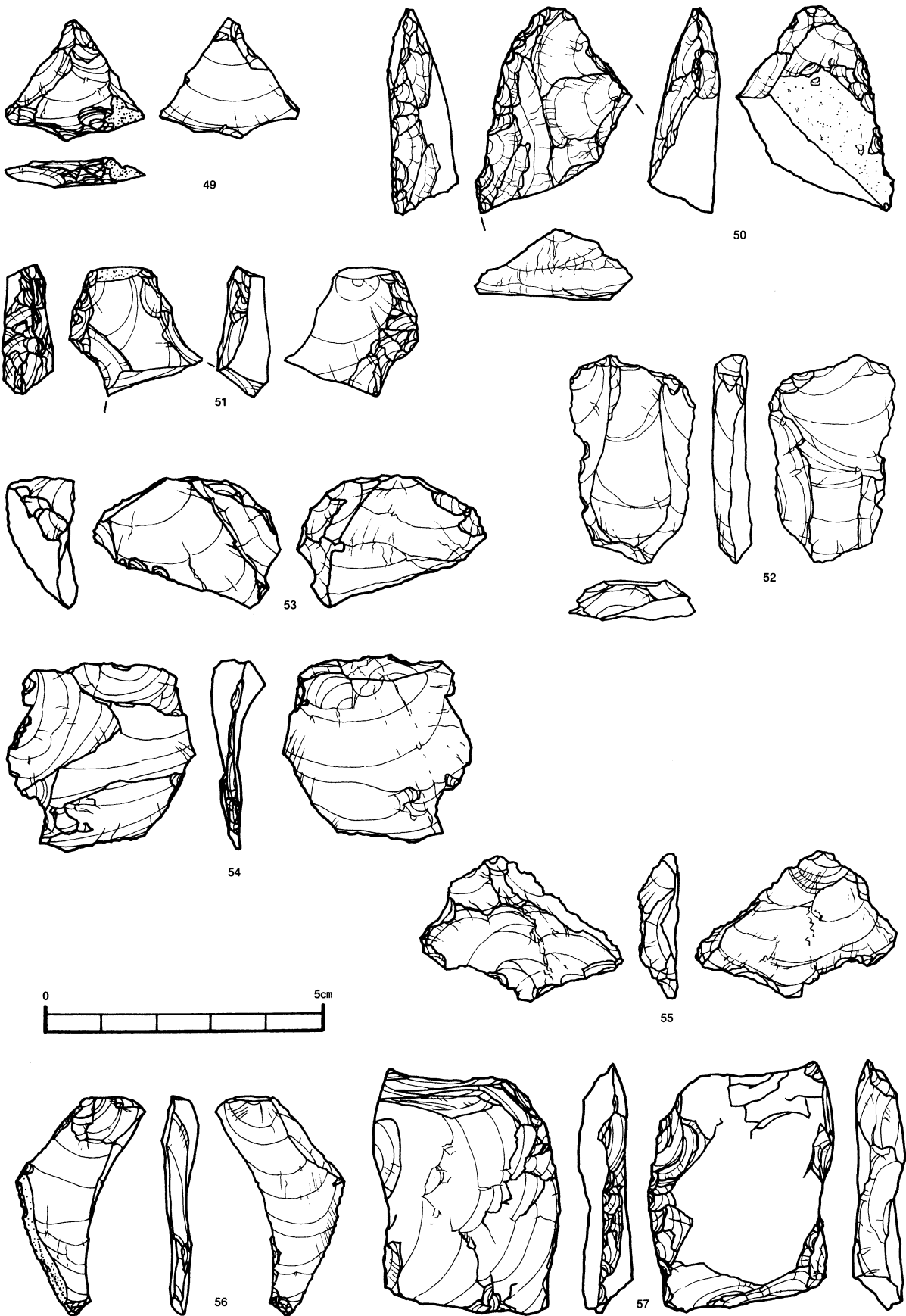
計6点が出土する。51はつまみ部分にあたるものである。65はチャートの剥片を利用し、縦型に調整したものである。身部の片面が大きく剥離しているが刃部の両面加工痕は良く確認できる。63はつまみ部の左右の挟りを結ぶ線を基準にした場合、斜行する側縁と並行する刃部を持ち、台形状に良く整った形態を呈する。刃部は丁寧に両面調整がなされている。66はチャート製で横型の石匙である。身部の両面とも調整前の剥離面を大きく残している。つまみ部に対する側縁部には直交する形で2辺に刃部が形成されている。64はチャート剥片を利用した縦型の石匙で、片面に大きく剥離面を残す。62は63と良く似た形態を呈する台形状の石匙で、厚みもあり、全面に丁寧に調整が施されている。刃部には両面加工が見られる。

⑤スクレイパー(第41・42・46・47図)

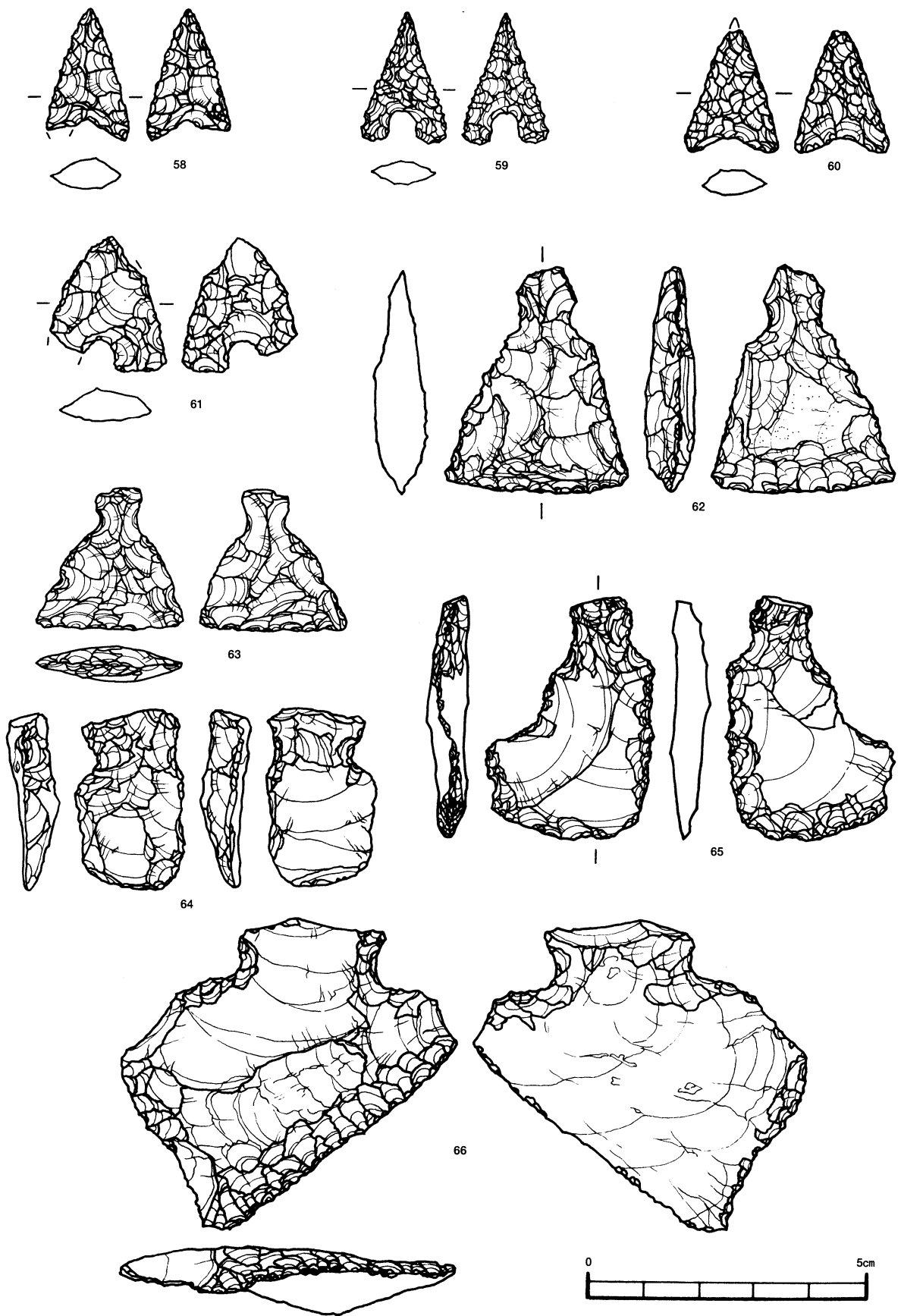
計7点が出土する。石材としてはチャートが多用されており、それ以外の石材は90の安山岩のみであった。Ⅶ層は他層と比較して、スクレイパーのほか石匙や使用痕剥片の遺物が多く出土しているのが特徴である。68はチャートの剥片をそのまま利用したもので身部の両面に剥離面を大きく残している。69はチャート剥片を利用したもので身部の両面に剥離面を残す。2つの側辺がほぼ直交する形で両面調整による刃部が形成されている。全体的に肥厚で重厚感がある。72はチャート剥片を利用したもので刃部は片面調整がされており、剥離面を多く残す。92は縦長剥片を利用し、片側の側辺のみ両面調整による刃部を形成している。身部は薄く、若干湾曲している。96も92と同様のタイプである。97は方形状の形態を呈し、一側辺のみを残し、身部周囲に両面調整による刃部を形



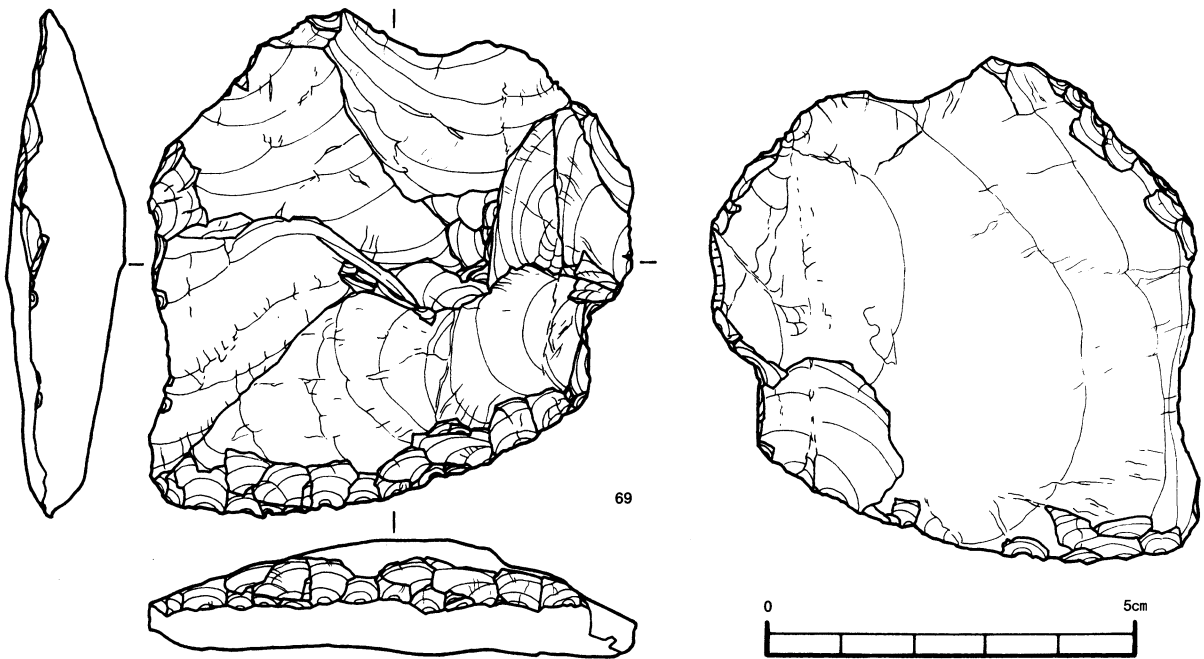
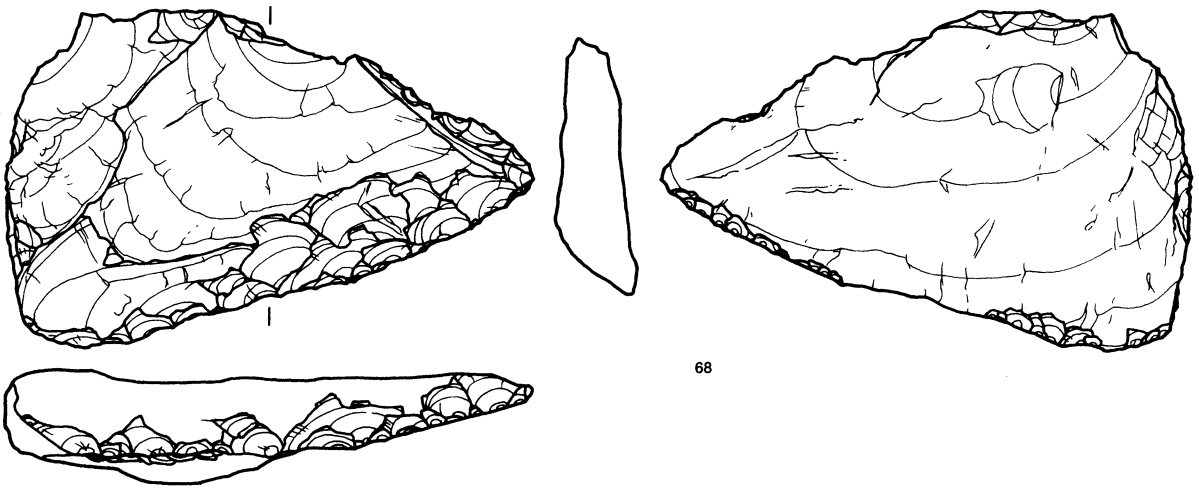
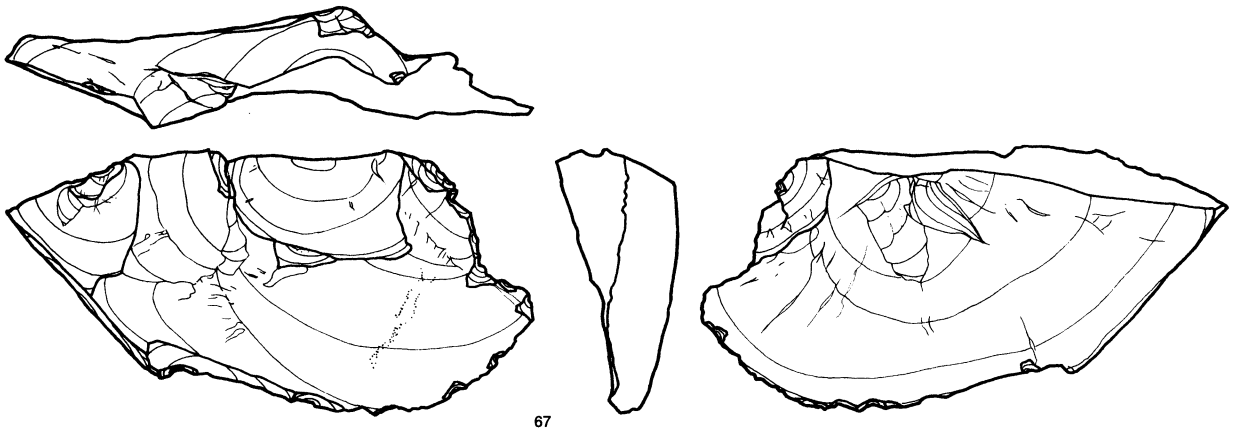
第38图 VII層出土石器(1)



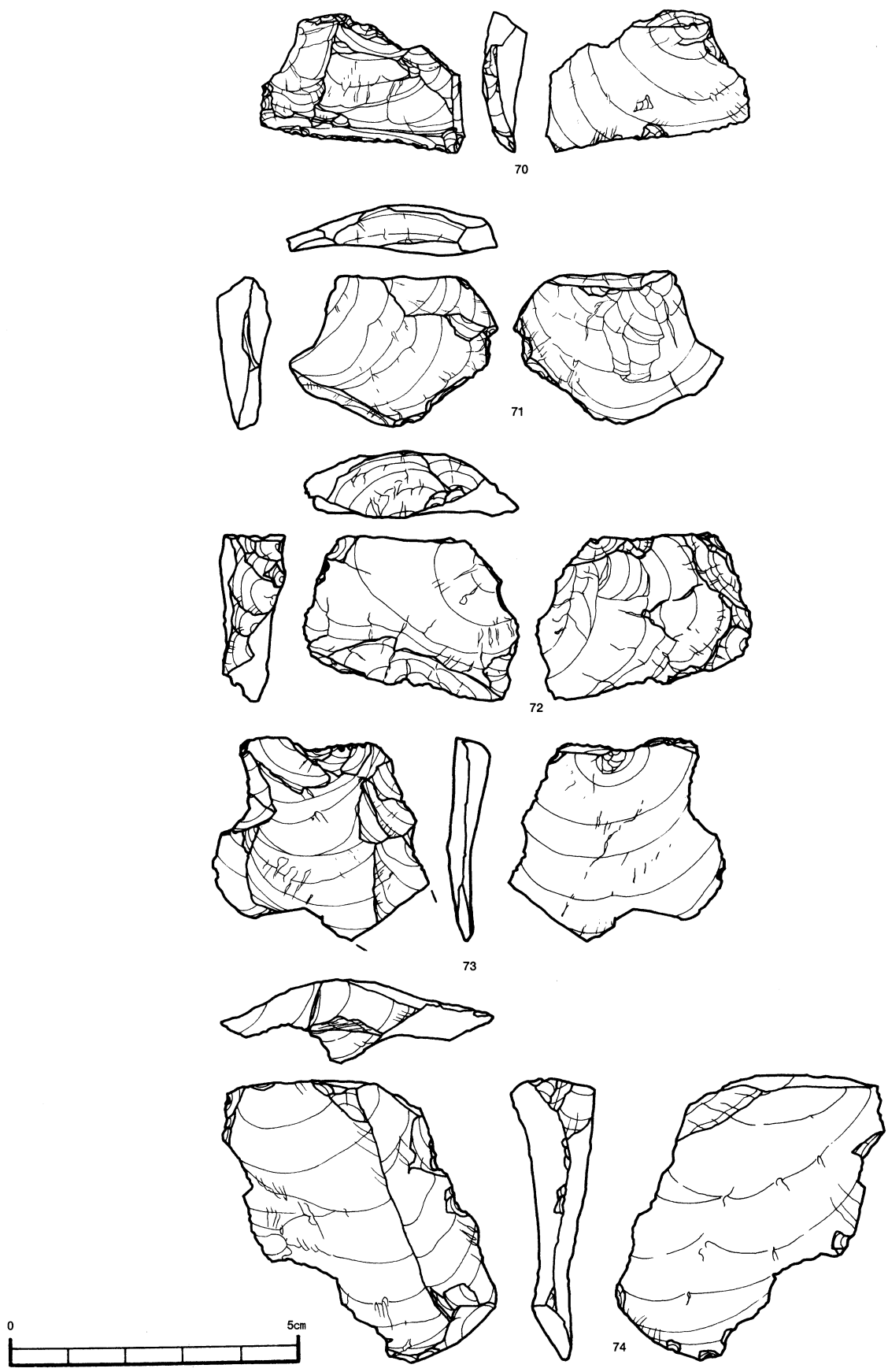
第39图 VII層出土石器(2)



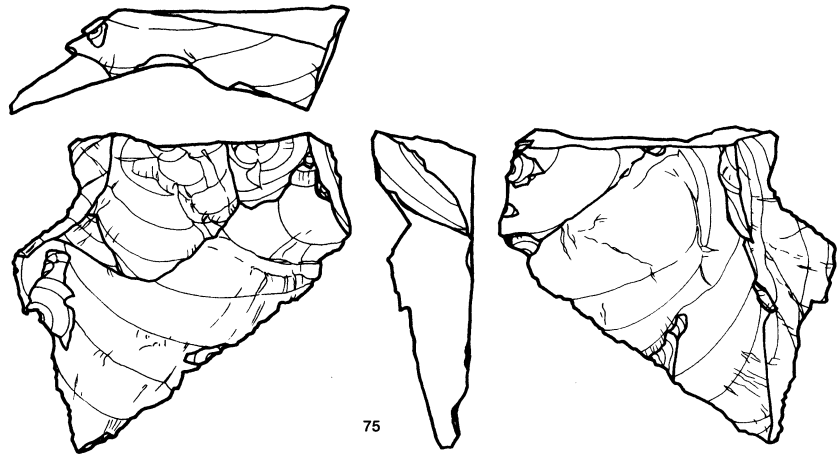
第40图 VII層出土石器(3)



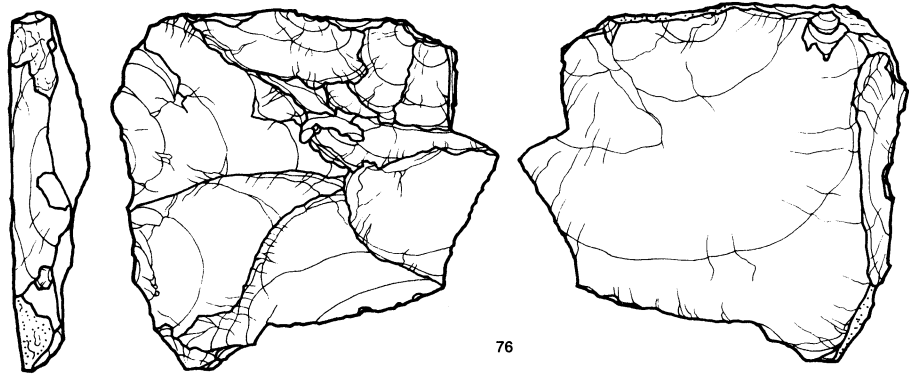
第41图 VI層出土石器(4)



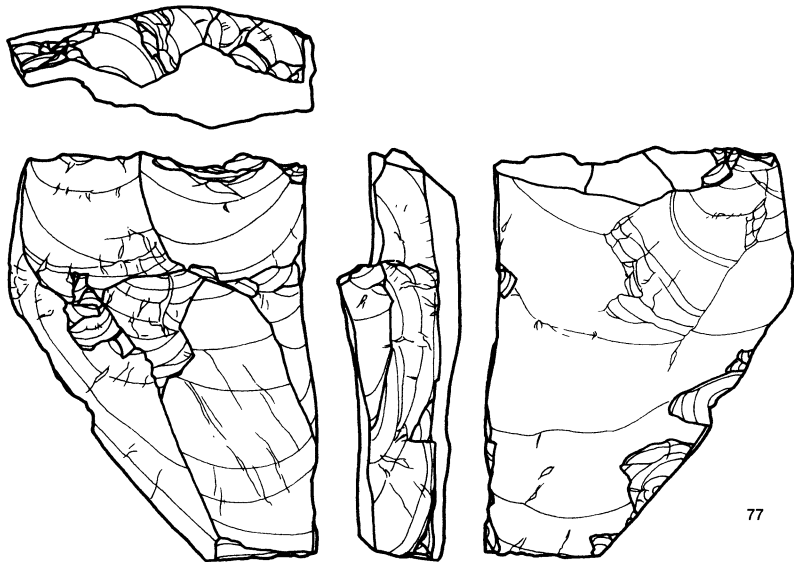
第42图 VII層出土石器(5)



75



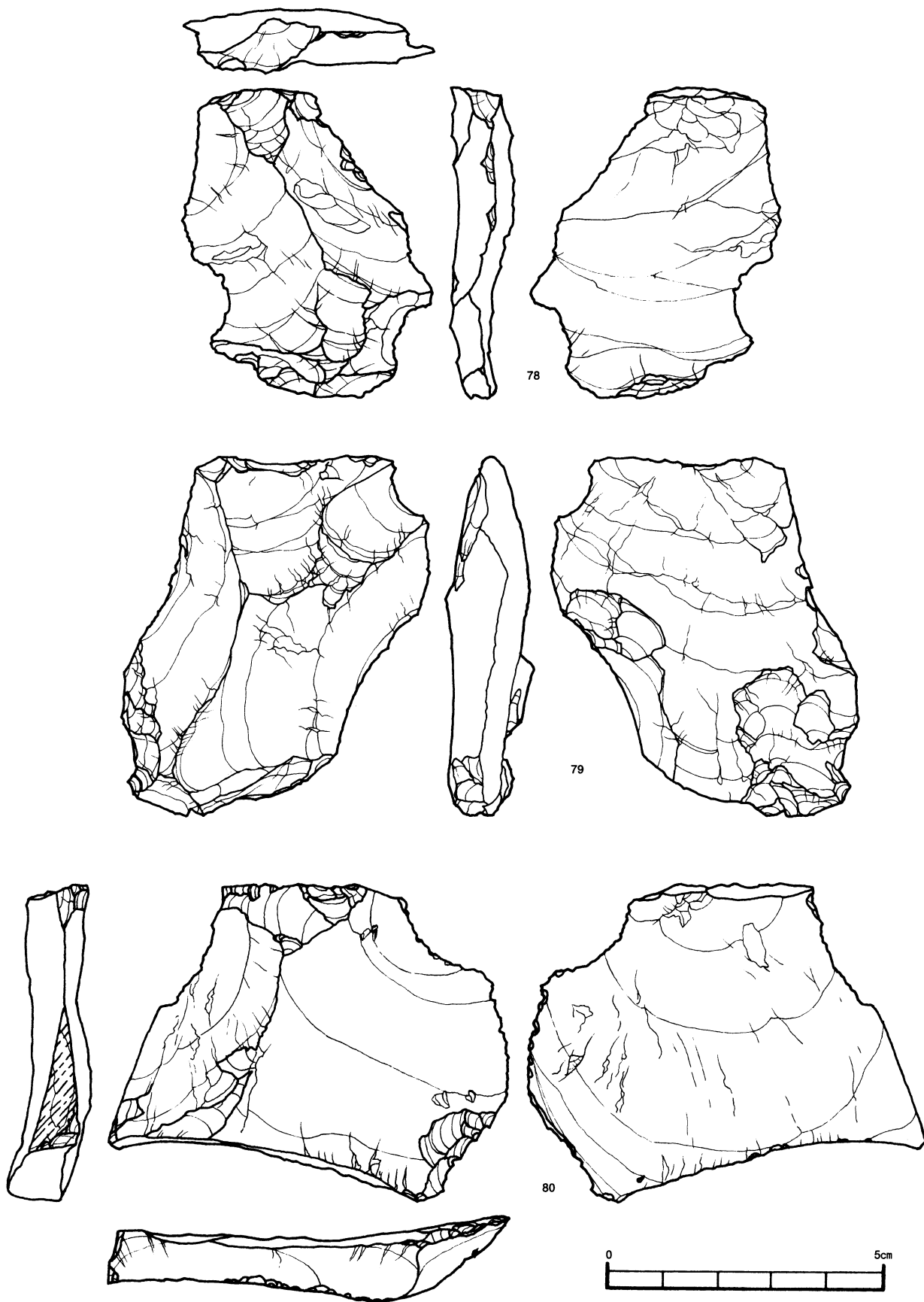
76



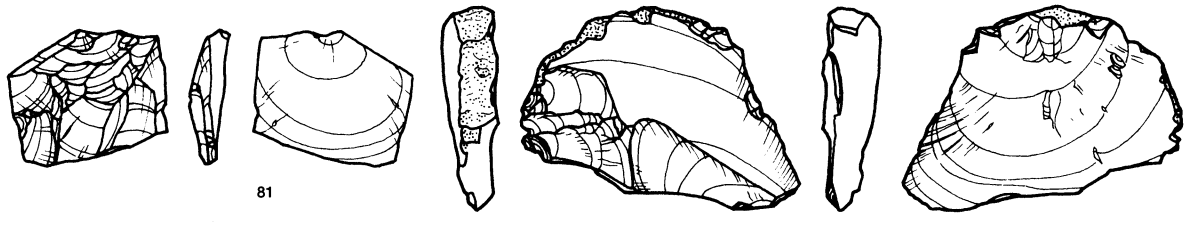
77



第43图 VII層出土石器(6)

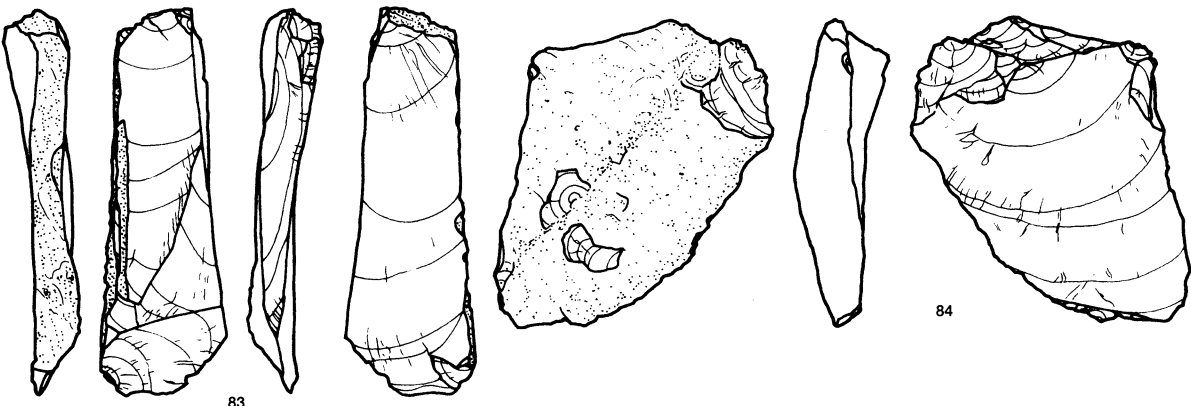


第44图 VII層出土石器(7)



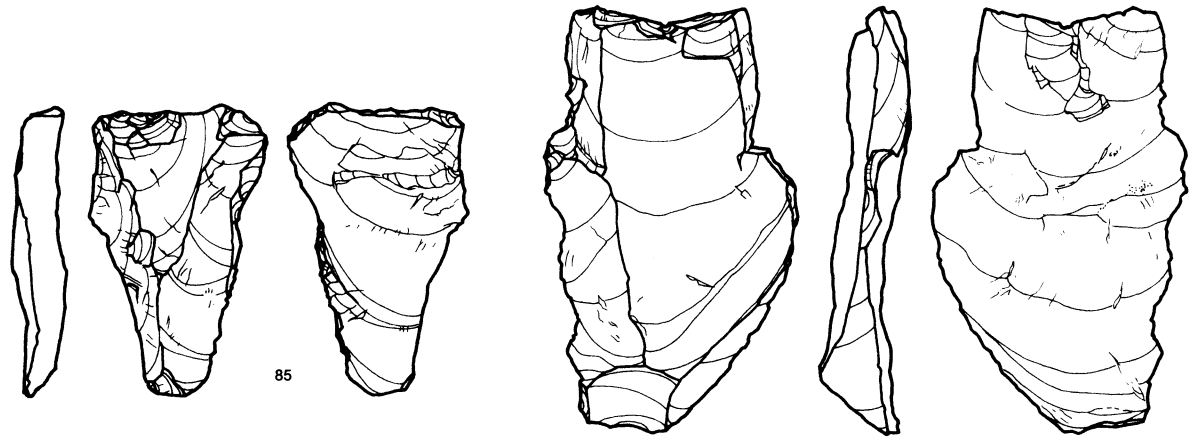
81

82



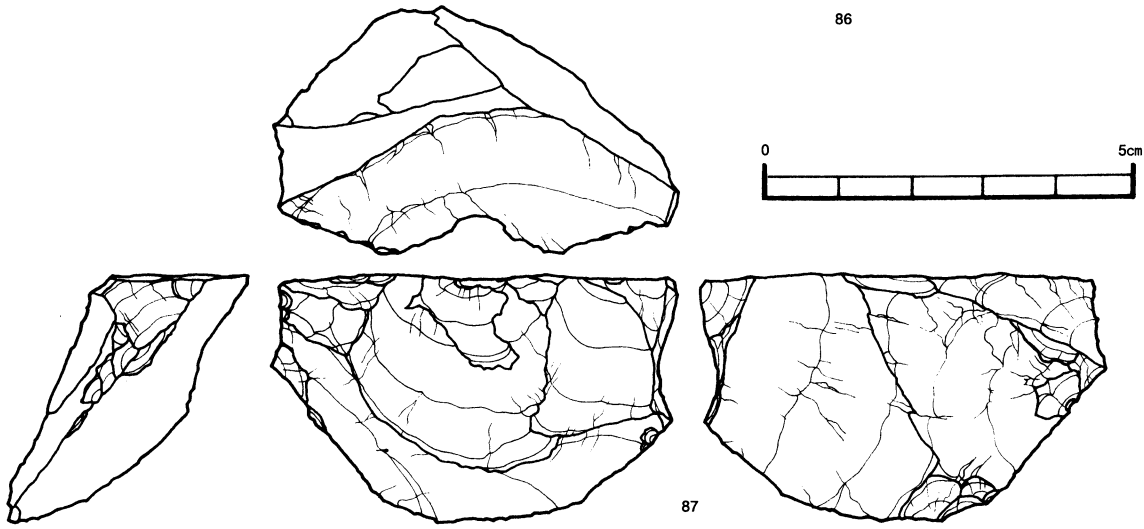
83

84



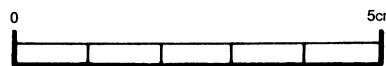
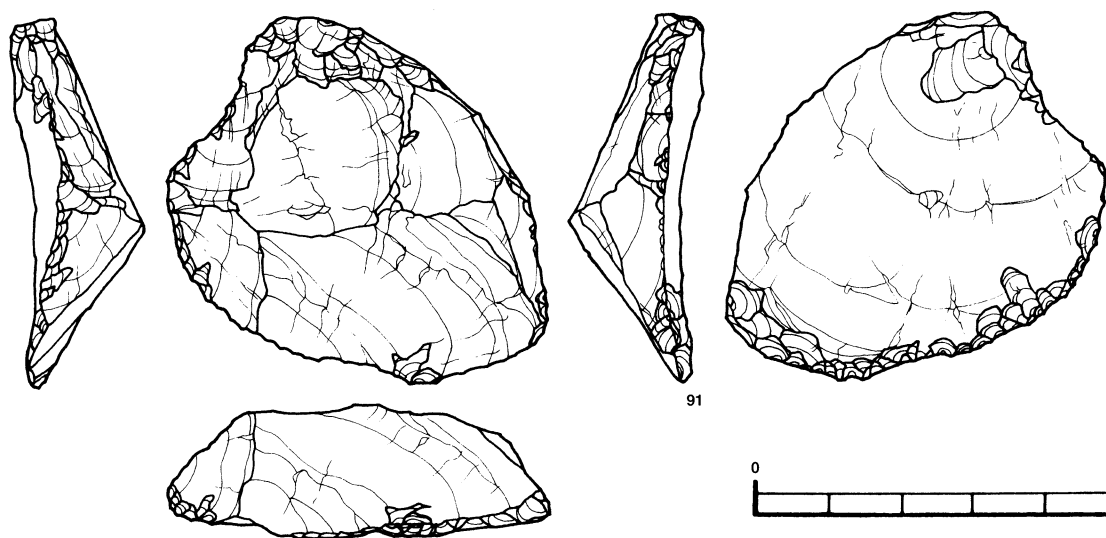
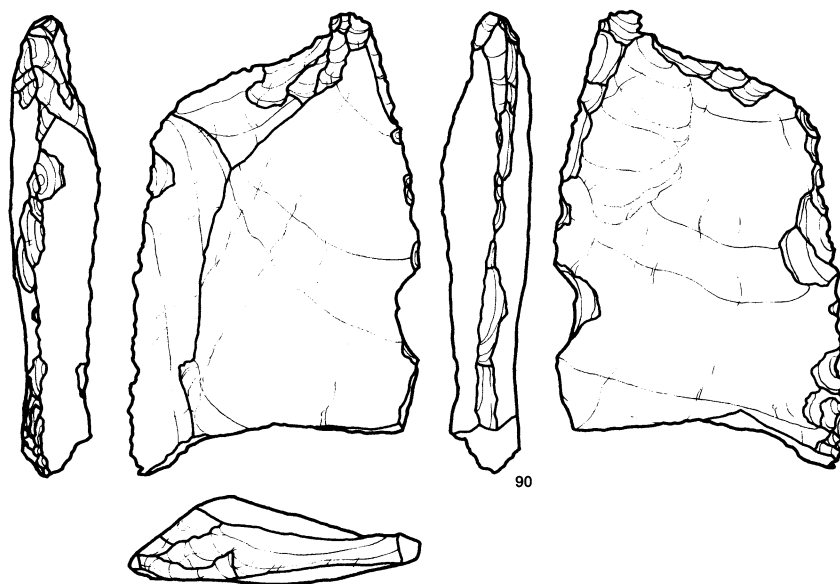
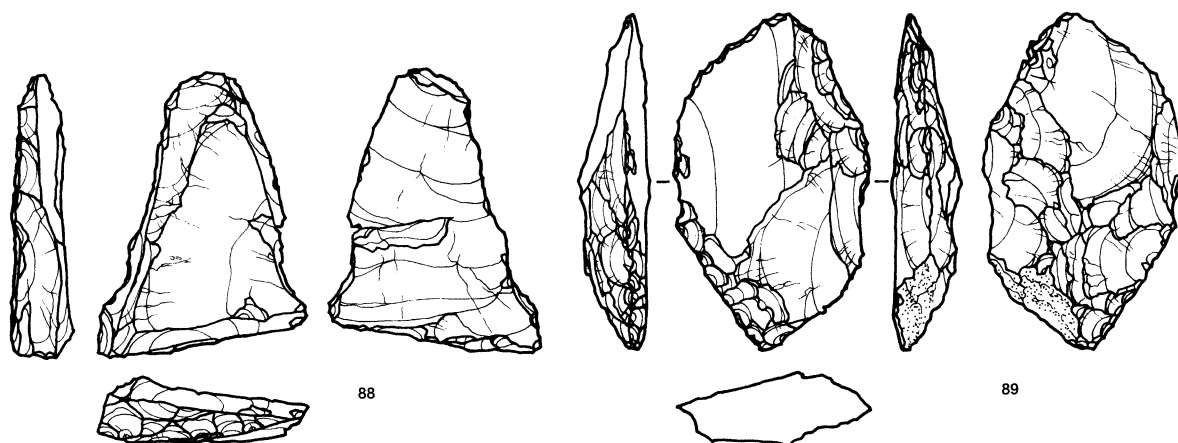
85

86

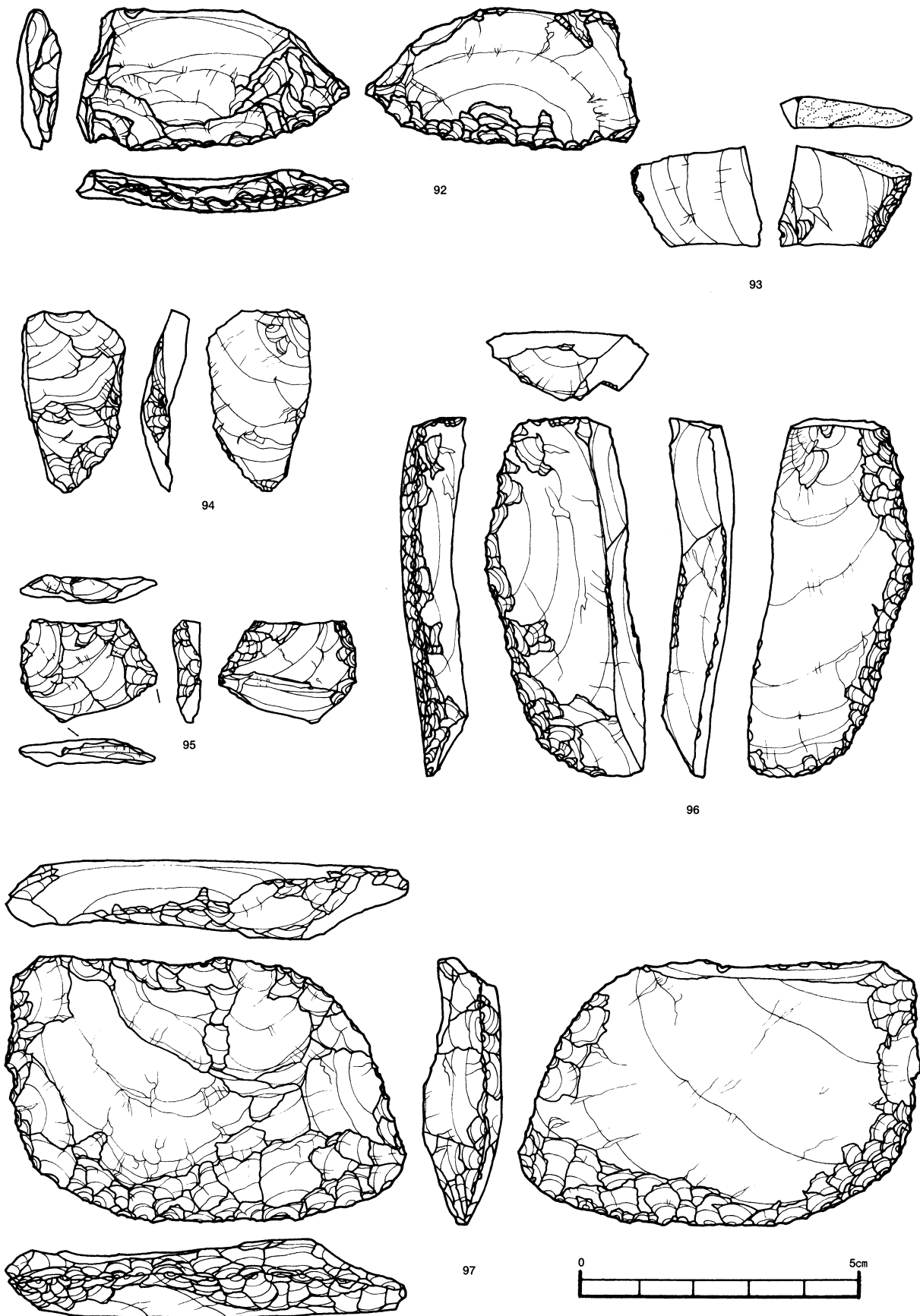


87

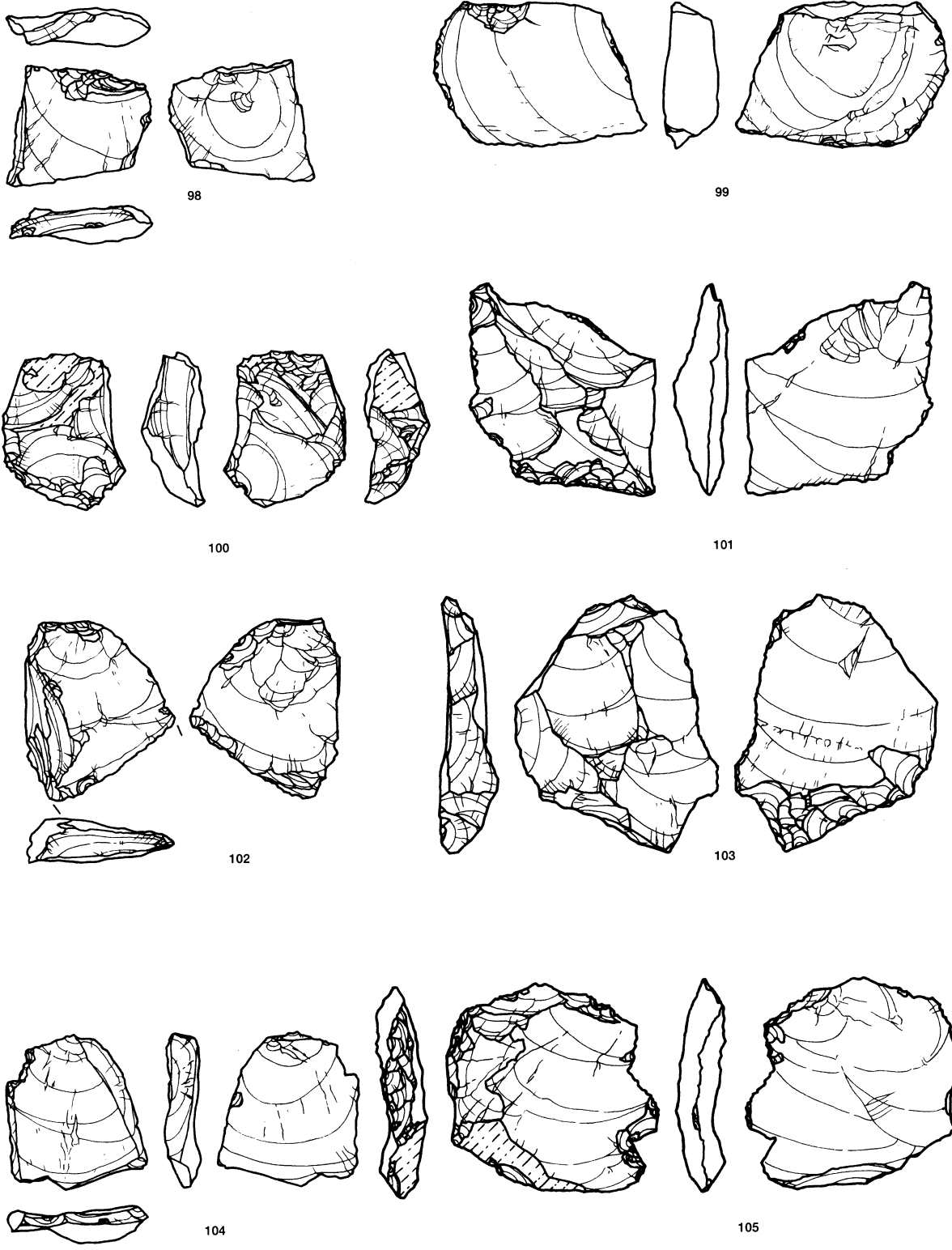
第45图 VII層出土石器 (8)



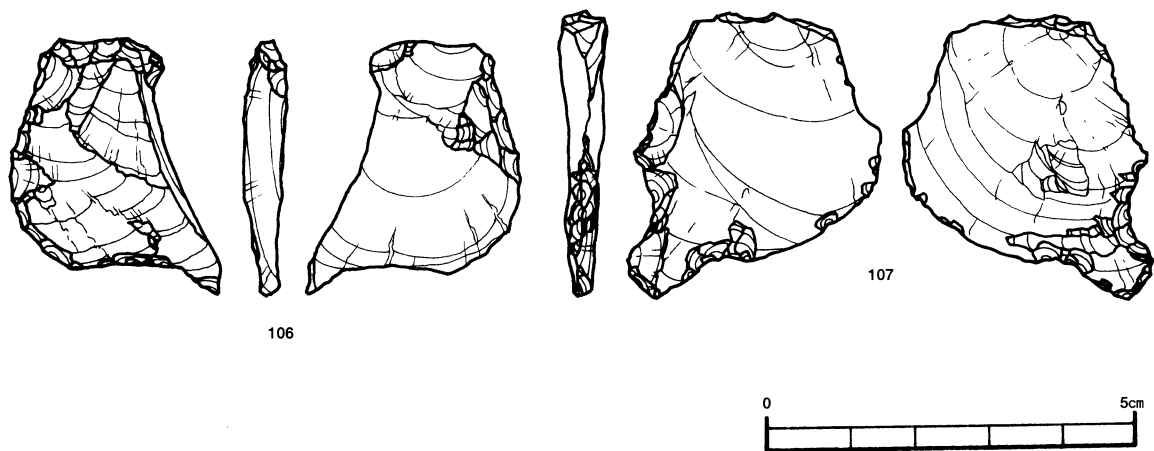
第46图 VII層出土石器(9)



第47图 VII層出土石器 (10)



第48图 VII層出土石器 (11)



第49図 VII層出土石器 (12)

成している。剥離面を大きく残し、69と同じく肥厚で重厚感がある。90は安山岩の剥片を利用したもので、自然面に対する剥離面を刃部として使用したと考えられる。全体的に粗雑な作りである。

⑥楔形石器 (第48図)

1点出土する。100はチャート製で、台形状を呈し、両側辺に直交する上下の2側辺に剥離痕及び加工痕を残す。上部の剥離痕は敲打によるものと推測される。

⑦石核 (第45図)

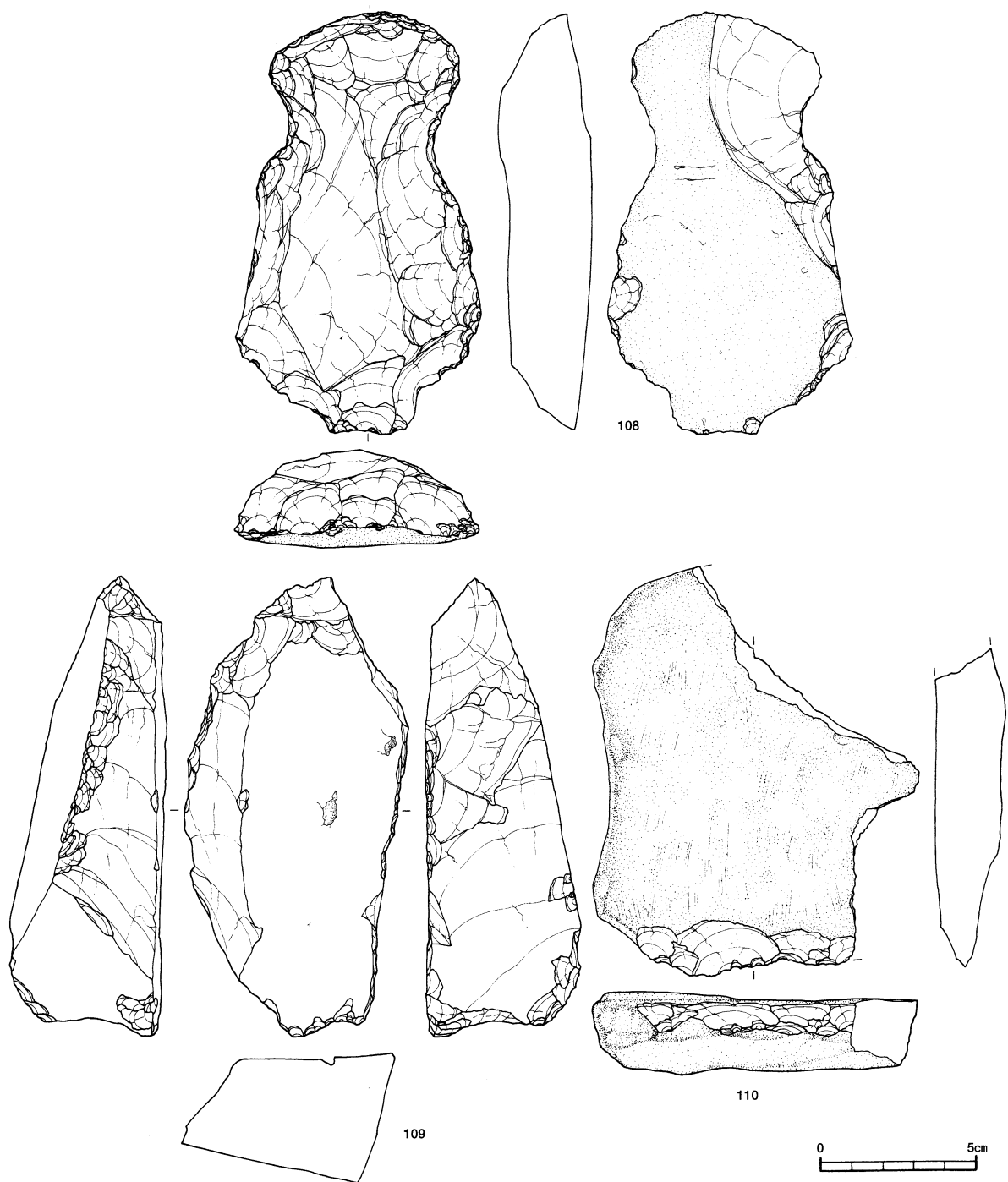
87はチャート製の剥片素材の石核である。剥片のポジ面を作業面として幅広の剥片を剥離している。打面は単設で大剥離面を利用し、打面調整は行なわれていない。

⑧加工痕のある剥片 (第39・46・47図)

49は三角形状を呈し、片面に剥離面を残す。3つの縁辺にそれぞれ加工痕が見られる。石材は黒曜石である。94は身部が湾曲し、外湾する縁辺に片面調整を施す。石材はチャートである。57は方形状を呈し、1縁辺に両面調整を施し、刃部とする。93は縁辺に自然面を残し、それにほぼ直交する1つの縁辺に片面調整の刃部を施す。石材は黒曜石である。95は2つの縁辺に両面調整を施す。50はハリ質安山岩の剥片を利用し、1つの縁辺に両面調整を施す。88はチャート剥片を利用したものである。89はハリ質安山岩の剥片を利用し縁辺に両面調整が見られる。48はB-1区のV層とVII層から出土した2点が接合したものであるが、出土状況等から考えてVII層の遺物と考えられる。石材はハリ質安山岩で、両面加工が見られる。

⑨剥片 (第38・42・43・45・46・47・48・49図)

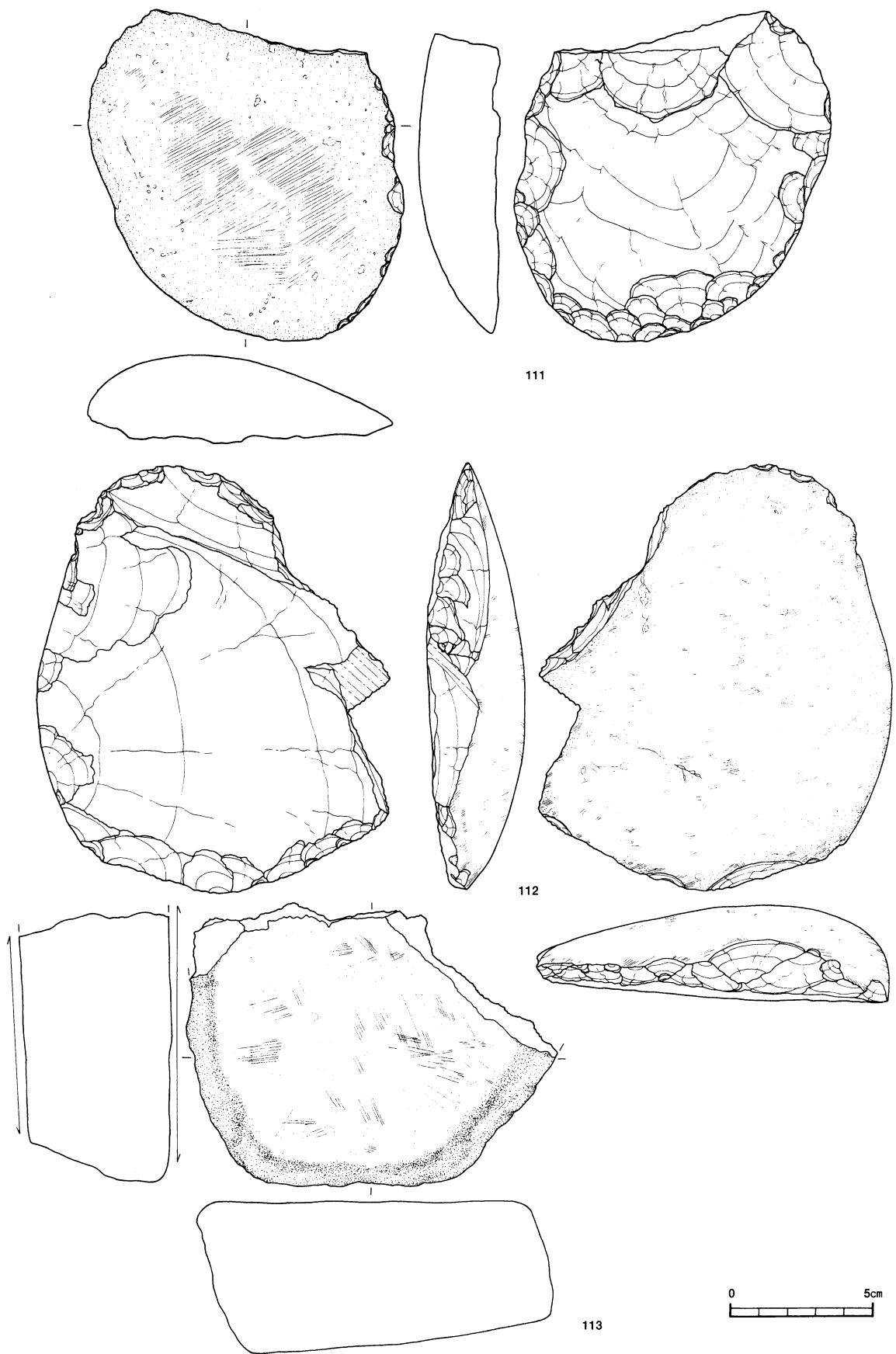
計33点が出土する。うち102・101・80・91の4点には使用痕が認められる。全て石材はチャートで、調整は見られず、縁辺を使用した結果の痕と見られる。剥片のうち83と76のみがハリ質安山岩で、後は全てチャートである。



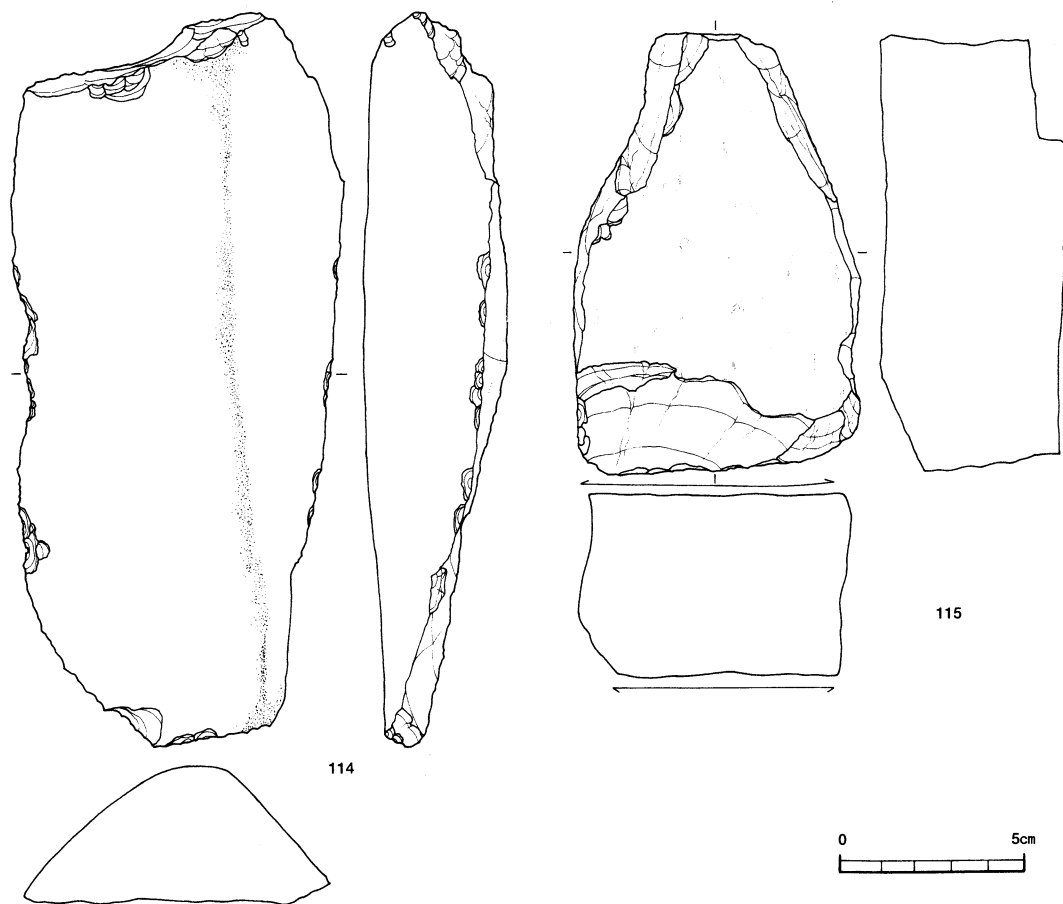
第50図 VII層出土石器 (13)

⑩磨石 (第53図)

計5点が出土する。石材は119の砂岩を除き他は安山岩である。116は扁平楕円状の磨石で、両面に研磨痕、縁辺部には敲打痕が見られる。118は全面に研磨痕が見られるが、破損が著しい。119は116と同様の形態である。両面に研磨痕が見られ、片面の中央部には僅かながら敲打痕が残る。縁辺部には敲打痕が確認される。120はB-1区、2号集石の礫の中より出土する。(集石の項で説明)



第51图 VII層出土石器 (14)



第52図 VII層出土石器 (15)

117は小型の楕円形を呈しており、端部に敲打痕が見られる。主にハンマーとして使用されたと考えられる。

⑪石斧 (第50図)

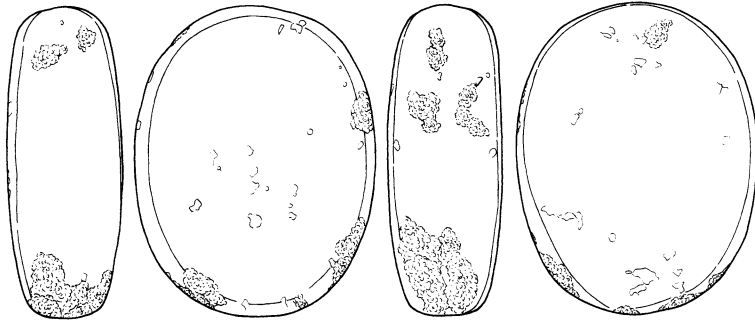
108は頁岩礫の剥片の両側部に抉りを入れることで刃部、柄部を作り出した大胆かつ機能的な打製石斧である。片面に自然面を大きく残し、刃部には使用の際生じたと思われる剥離痕が見られる。

⑫礫器 (第50・51図)

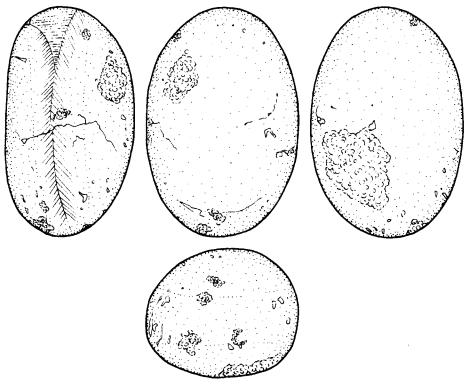
111・110・109・112の4点が出土する。いずれも安山岩礫の縁辺に簡単な加工を施し、刃部としたものである。

⑬石皿 (第51図・第52図)

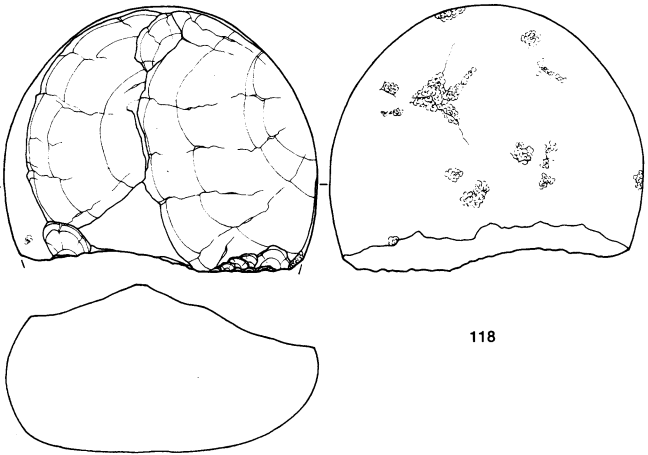
3点が出土する。いずれも自然礫をそのまま利用したものであり、敲打整形して形状を整えたものは見られなかった。114は破片部であるが、本来はかなり大きな石皿か若しくは長方形を呈したものでなかったかと思われる。石材は砂岩である。113・115ともいずれも小型で自然礫の面に使用痕の見られるものである。



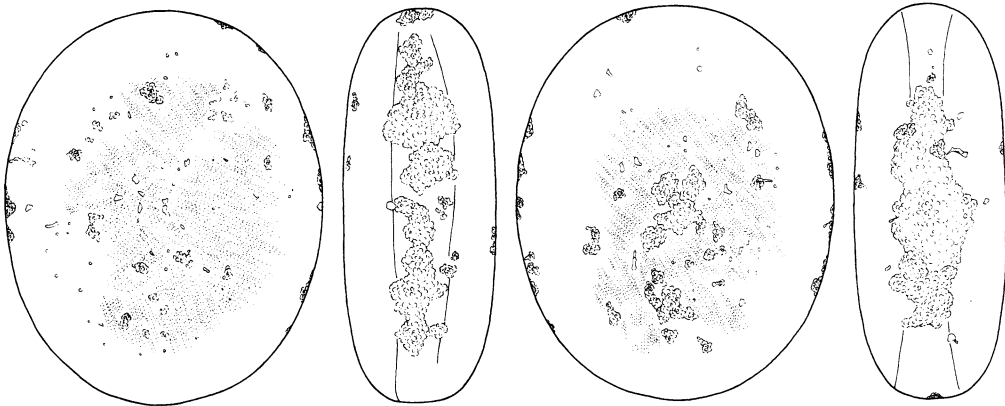
116



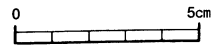
117



118



119



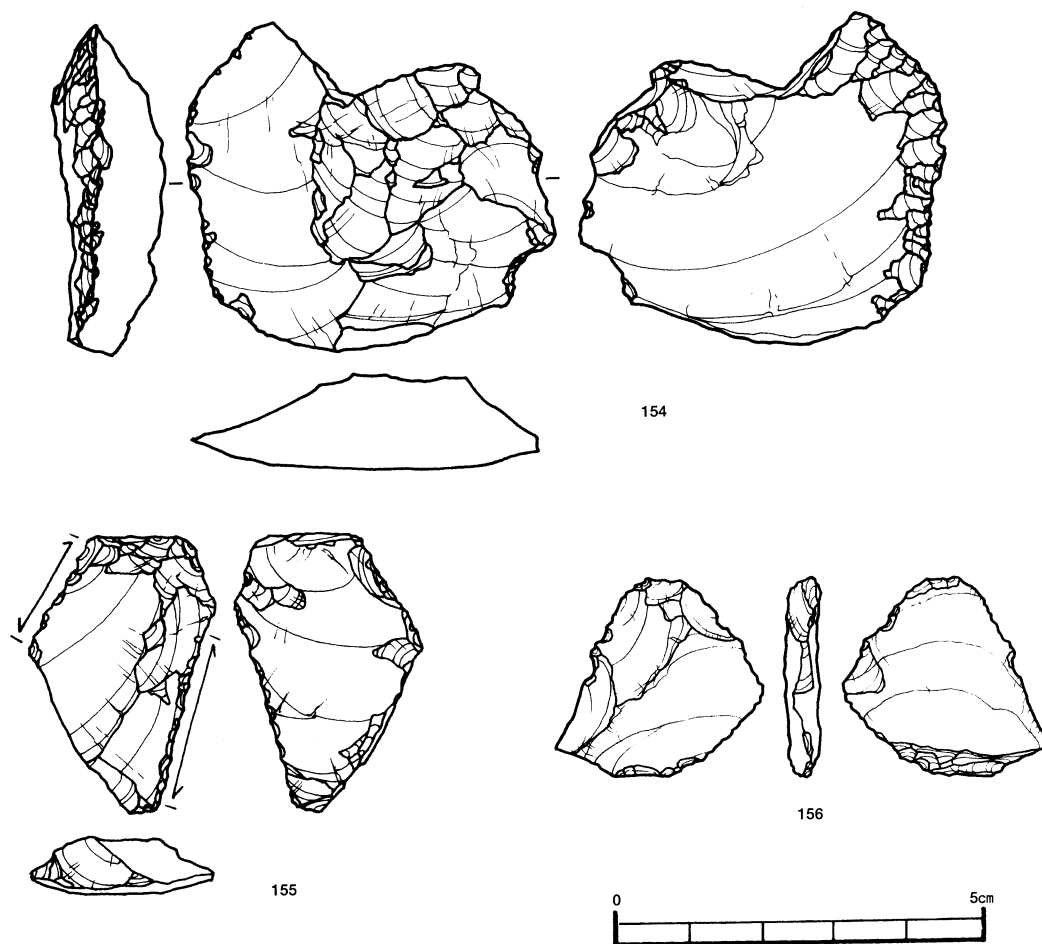
第53図 VII層出土石器 (16)

第4表 VII層出土石器観察表(1)

挿図	器種	石材	出土区	層	遺物番号	標高m	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	備考
43	石鏃	チャート	B-5	VII下	20	391.80	2.8	1.8	0.35	1.62	
44	異形石器	ハリ質安山岩	B-6	VII下	21	393.34	2.9	2.3	0.5	1.64	
45	剥片	チャート	B-5	VII	14	392.12	—	—	—	4.85	
46	剥片	チャート	9T	VII	4	390.60	—	—	—	1.39	VII層出土
47	剥片	チャート	B-5	VII下	15	392.02	—	—	—	2.64	
48	両面加工	ハリ質安山岩	B-1	V	153,154	388.15	8.2	5.1	1.3	58.54	
49	加工痕	黒曜石	B-2	VII	45	389.71	2.1	2.5	0.4	1.71	
50	加工痕	ハリ質安山岩	B-4	VII	47	391.89	3.7	2.8	1.1	7.55	
51	石匙	ハリ質安山岩	B-2	VII	52	389.50	—	—	—	4	刃部欠損
52	剥片	チャート	D-4	VII	2	392.65	—	—	—	6.05	
53	剥片	チャート	B-5	VII	12	392.53	—	—	—	7.98	
54	剥片	チャート	C-4	VII	10	391.98	—	—	—	5.78	
55	剥片	チャート	B-1	VII	225	387.89	—	—	—	4	
56	剥片	チャート	D-5	VII	1	393.89	—	—	—	3.11	
57	加工痕	チャート	11T	VII	1	392.36	4.5	3.2	0.8	16.14	
58	石鏃	黒曜石	B-3	VII上	23	390.64	2.3	1.5	0.5	1.02	姫島産黒曜
59	石鏃	黒曜石	B-3	VII	27	390.73	2.4	1.5	0.4	0.79	
60	石鏃	黒曜石	B-0	VII	16	387.30	2.2	1.7	0.45	1.15	
61	石鏃	黒曜石	A-2	VII	10	388.37	—	—	—	1.99	脚部欠損
62	石匙	ハリ質安山岩	A-0	VII	2	387.78	4.05	3.3	0.9	8.13	
63	石匙	ハリ質安山岩	B-1	VII	12	388.04	2.5	2.1	0.65	3.09	
64	石匙	チャート	C-5	VII	17	393.25	3.2	1.9	0.8	4.87	
65	石匙	チャート	B-6	VII	15	392.99	4.3	2.9	0.6	6.32	
66	石匙	チャート	B-5	VII	13	392.67	5.55	6	1	24.78	
67	剥片	チャート	B-5	VII	30	392.38	—	—	—	24.55	
68	スクレイパー	チャート	D-7	VII	2	395.44	4.6	7.2	1.35	38.76	
69	スクレイパー	チャート	D-6	VII	77	394.96	6.6	6.7	1.6	68.86	
70	剥片	チャート	B-5	VII	34	392.18	—	—	—	4.73	
71	剥片	チャート	B-5	VII	17	392.21	—	—	—	7.49	
72	スクレイパー	チャート	B-1	VII	227	387.82	2.9	3.7	1	10.72	
73	剥片	チャート	B-1	VII	181	388.24	—	—	—	5.26	
74	剥片	チャート	C-5	VII	12	393.04	—	—	—	15.35	
75	剥片	チャート	C-4	VII	10	391.98	—	—	—	13.38	
76	剥片	ハリ質安山岩	B-1	VII	152	387.66	—	—	—	22.7	
77	剥片	チャート	B-5	VII	10	392.51	—	—	—	40.03	
78	剥片	チャート	C-5	VII	1	393.28	—	—	—	20.63	
79	剥片	チャート	C-5	VII	10	392.86	—	—	—	47.44	
80	使用痕剥片	チャート	C-5	VII	14	392.96	5.7	7.2	1	42.85	
81	剥片	チャート	B-2	VII	42	389.73	—	—	—	1.47	
82	剥片	チャート	B-3	VII	34	389.47	—	—	—	6.46	
83	剥片	ハリ質安山岩	B-1	VII	130	387.65	—	—	—	6.59	
84	剥片	チャート	B-6	VII	7	393.72	—	—	—	11.92	
85	剥片	チャート	C-4	VII	7	392.09	—	—	—	5.47	
86	剥片	チャート	B-1	VII	24	387.99	—	—	—	15.11	
87	石核	チャート	C-5	VII	13	393.08	3.4	5.5	1.65	35.6	
88	加工痕	チャート	C-6	VII	35	393.53	3.9	2.85	0.8	7.38	
89	両面加工	ハリ質安山岩	B-5	VII	9	392.55	4.6	2.7	0.9	9.75	
90	スクレイパー	安山岩	A-1	VII	17	379.25	6.3	3.9	1.1	23.9	
91	使用痕剥片	チャート	B-0	VII	36	387.43	5	5.2	1.5	33.83	
92	スクレイパー	チャート	C-5	VII	11	392.98	2.5	4.3	0.7	9.11	
93	加工痕	黒曜石	B-2	VII上	68	389.46	1.3	2.1	0.55	2.26	
94	加工痕	チャート	B-5	VII上	16	392.25	3.2	1.8	0.45	3.33	
95	加工痕	チャート	B-1	VII	146	387.67	1.8	2.4	0.45	2.12	
96	スクレイパー	チャート	B-4	VII	40	390.41	6.4	2.9	0.9	17.73	
97	スクレイパー	チャート	C-5	VII	23	393.20	4.8	7.2	1.4	56.27	
98	剥片	チャート	B-1	VII	27	387.93	—	—	—	3.05	
99	剥片	チャート	B-4	VII	50	392.27	—	—	—	7.67	
100	楔形石器	チャート	D-4	VII	4	392.86	2.1	1.95	1	5.41	
101	使用痕剥片	チャート	C-4	VII	8	392.00	3.6	3.1	0.9	8.12	
102	使用痕剥片	チャート	B-1	VII	224	388.01	3	2.5	0.7	5.66	
103	剥片	チャート	B-5	VII	18	392.14	—	—	—	10.73	
104	剥片	チャート	D-6	VII	49	391.15	—	—	—	2.66	
105	剥片	チャート	D-7	VII	3	395.37	—	—	—	9.32	
106	剥片	チャート	C-6	VII	34	393.43	—	—	—	4.4	
107	挟入石器	チャート	B-0	VII	17	387.71	3.4	2.3	0.5	6.28	
108	石斧	頁岩	B-5	VII	11	392.47	13.6	7.9	3.15	335	

第5表 VII層出土石器観察表(2)

挿図	器種	石材	出土区	層	遺物番号	標高m	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	備考
109	礫器	安山岩	B-0	VII	18	387.97	14.8	7.2	4.2	550	
110	礫器	安山岩	C-6	VII	16	393.99	—	—	—	420	欠損
111	礫器	安山岩	C-5	VII	15	393.03	11.5	11.2	2.8	440	
112	礫器	安山岩	C-6	VII	15	393.96	12.4	15	3.5	730	
113	石皿	安山岩	B-2	VII	1	388.81	—	—	—	1015	破損
114	石皿	砂岩	B-1	VII	176	388.21	—	—	—	720	破損
115	石皿	安山岩	C-6	VII	17	393.95	12	7.8	5	820	
116	磨石	安山岩	B-3	VII	26	390.68	8.5	6.55	3.1	305	
117	ハンマー	安山岩	B-2	VII	15	388.60	6.2	4.1	3.5	130	
118	磨石	安山岩	B-2	VII上	71	389.24	—	—	—	330	
119	磨石	砂岩	B-5	VII	8	392.47	10.75	8.65	4.2	600	欠損
120	磨石	安山岩	B-1	VII	20	388.06	—	—	—	630	2号集石内混入 欠損



第54図 VII層出土石器(1)

(2) VI層の出土石器

①打製石鏃 (第55図)

計11点が出土する。うち6点が完形である。129は姫島産の黒曜石製で、基部の抉りは浅く、脚部に一部欠損が見られる。126は基部の抉りが浅く、128は逆に基部の抉りが深い。127は分厚く、両面の側辺が若干外湾する形態を呈している。基部の抉りは浅い。124は破損が著しく、先端と脚部が欠損している。133は脚部のみ、122は先端部のみ残存である。2点とも黒曜石製である。123は先端部のみ残存である。130は先端部及び逆刺が鋭く、基部の抉りは深い。厚みは全体的に薄く、丁寧な調整が成されている。131は基部から先端部にかけて欠損するが、かなり大型の石鏃であることが分かる。厚さは薄く、両側辺は丁寧な交互剥離調整がなされている。石材はハリ質安山岩である。125は基部の抉りが極めて浅い三角形をなした小型の石鏃である。

②石匙 (第55図)

1点出土する。138は縦型に調整されたチャート製の石匙である。刃部には両面調整が見られる。

③スクレイパー (第54・57図)

154はチャートの剥片を利用して調整されたもので、縁辺の一部に片面調整の刃部が見られる。153はハリ質安山岩の剥片を利用したものであり、縁辺の一部に両面調整を施した刃部が見られる。また、別の縁辺には自然面も残っている。

④異形石器 (第55図)

137は石鏃の変形石器にも見える異形石器である。同タイプのものがVII層からも出土しているが、形態が非常に類似している。全体的に丁寧な調整がなされている。

⑤加工痕のある剥片 (第55図)

132は黒曜石製で、小型であるが、縁辺の一部に加工痕が見られる。135はチャート製である。136はチャートの剥片を転用したもので、縁辺の一部に加工痕が見られる。

⑥剥片 (第54・55・56・57図)

計17点が出土する。うち155は縦長剥片で、唯一、側辺に使用痕が認められた剥片である。石材は多種多様で、チャート11点、黒曜石2点、ハリ質安山岩2点、石英1点、凝灰岩製1点である。

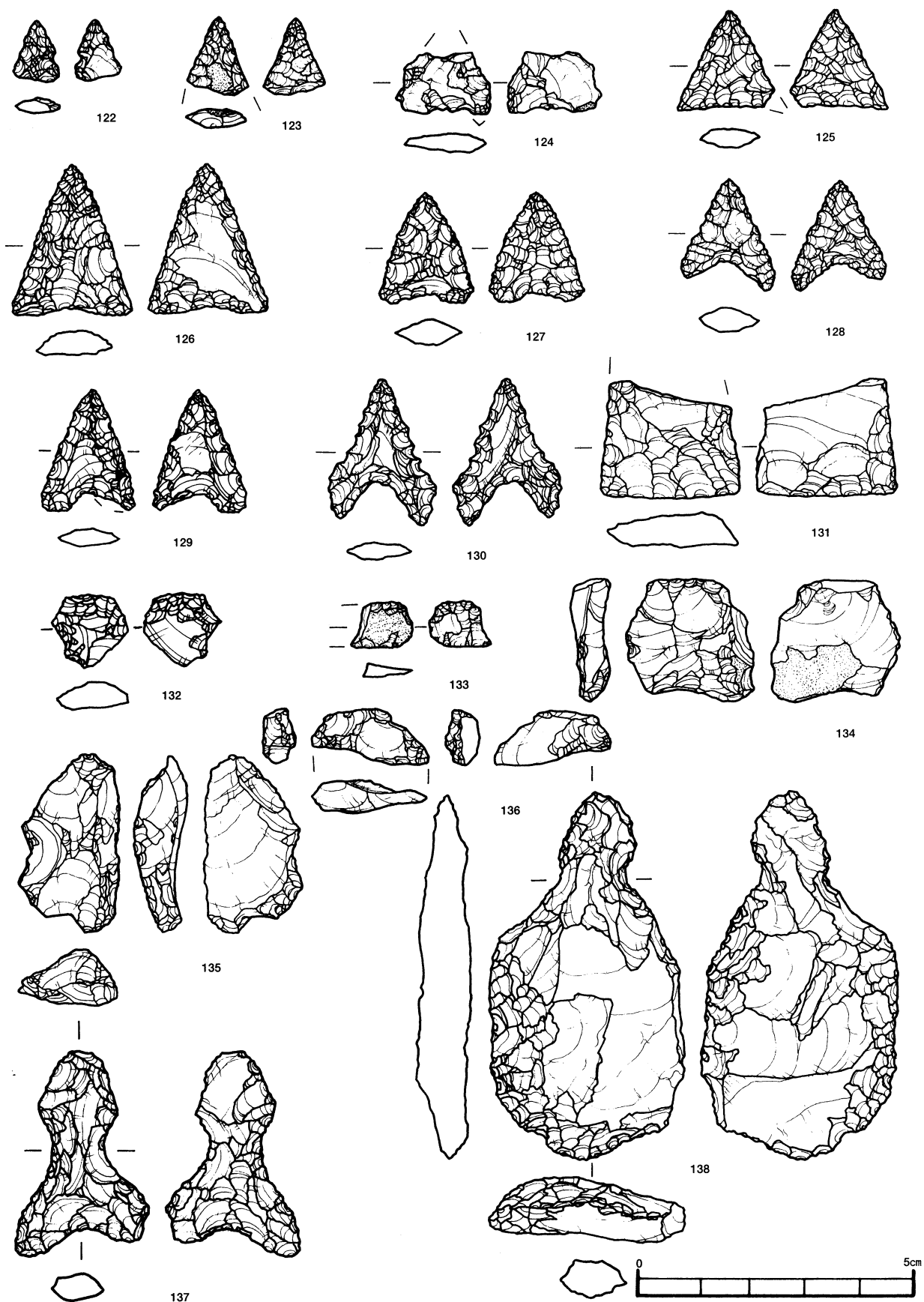
(3) V層出土石器

①打製石鏃 (第58図)

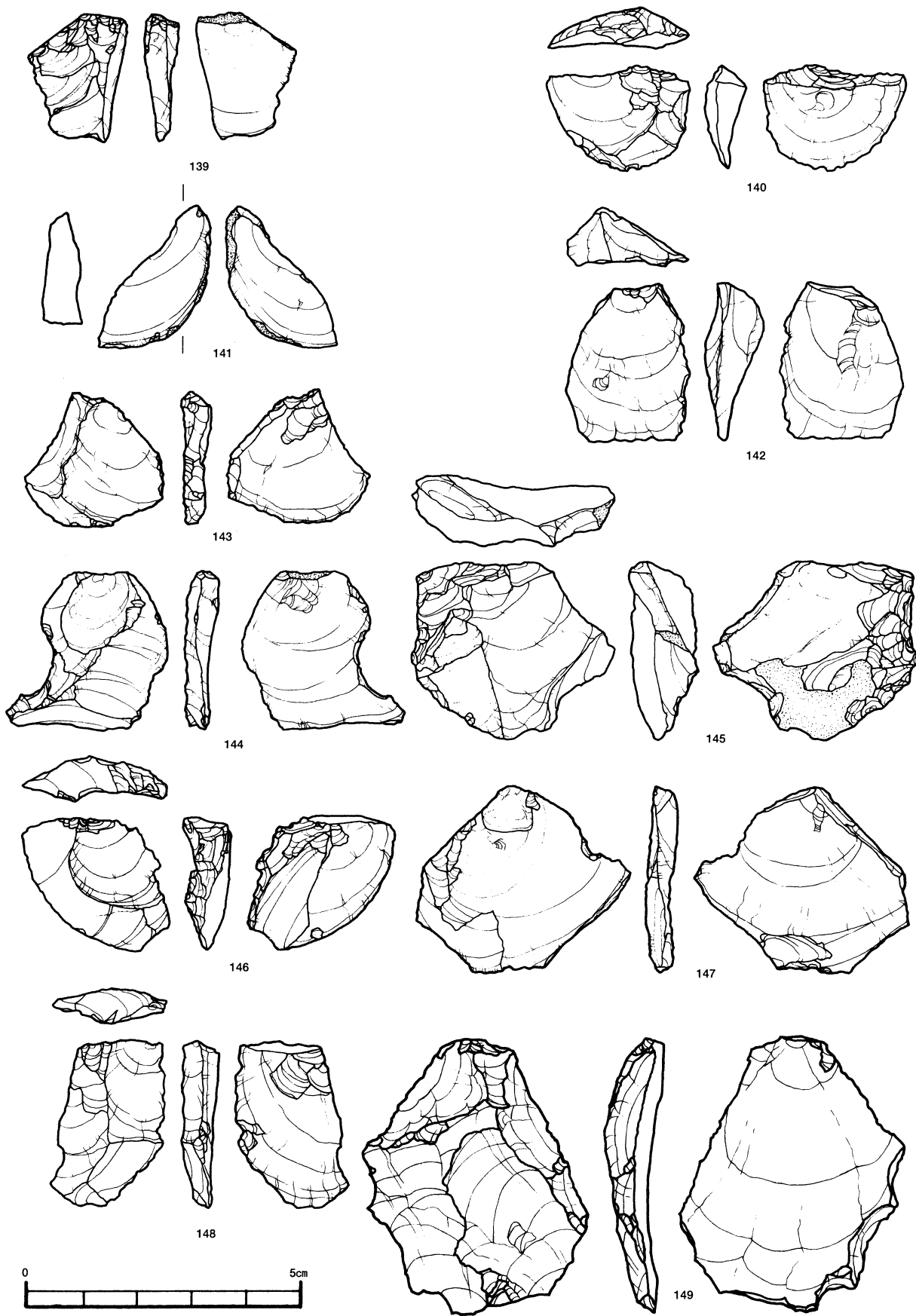
計5点が出土する。159・160・162は完形である。159は頁岩製で基部の抉りは浅く、両側辺は直線状である。160は分厚く、側辺は鋭さに欠け、先端も鈍い。基部の抉りは深く、逆刺は方形で薄い。162は良質の黒曜石製で、基部は薄く、先端部も鋭利である。脚部の片側が欠損している。157は先端部のみ残存し、158は先端部の欠損したチャート製のものである。

②加工痕のある剥片 (第58図)

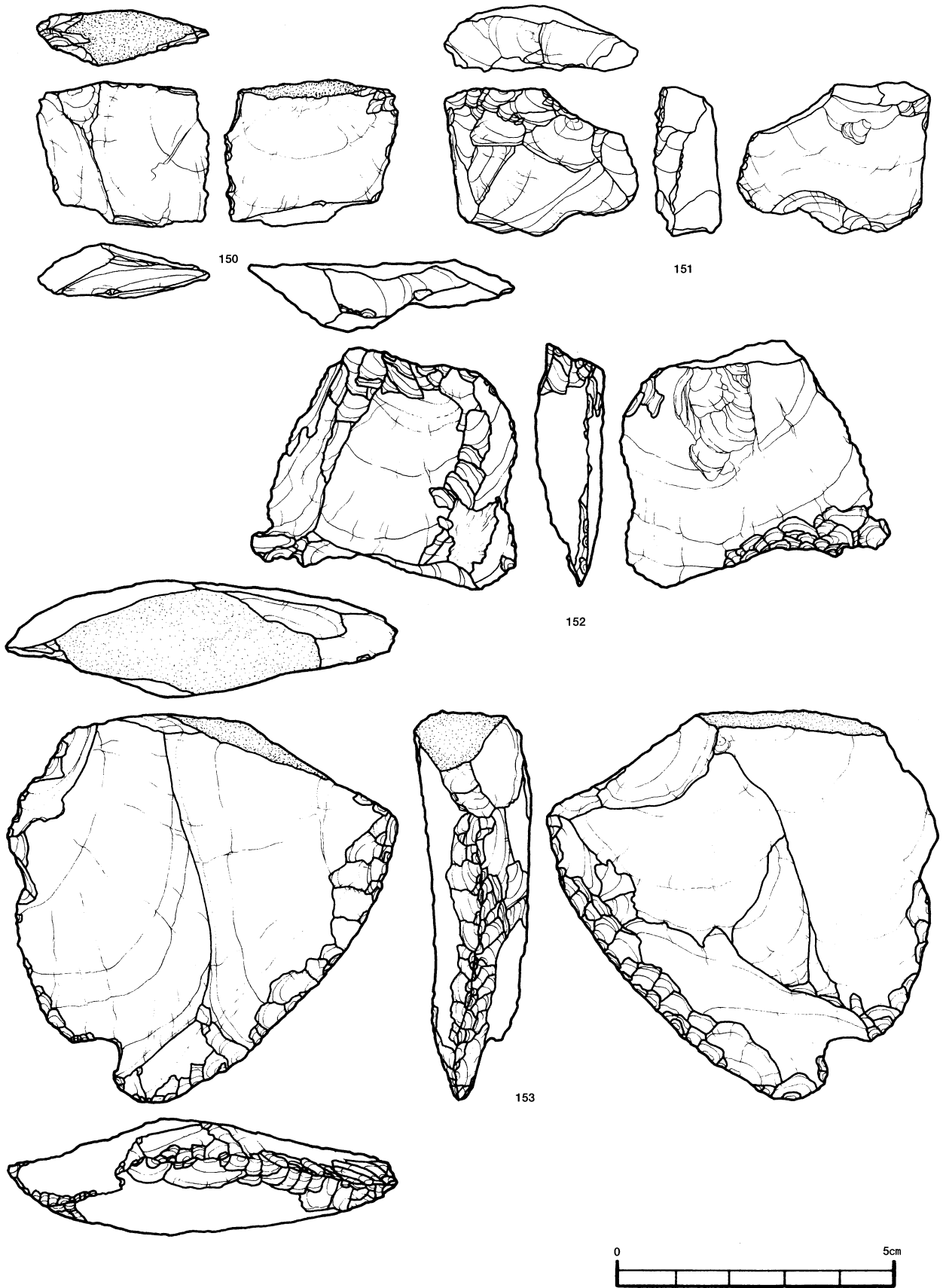
161はチャート製で、側辺の一部に僅かに加工痕が見られる。



第55图 VI層出土石器(2)



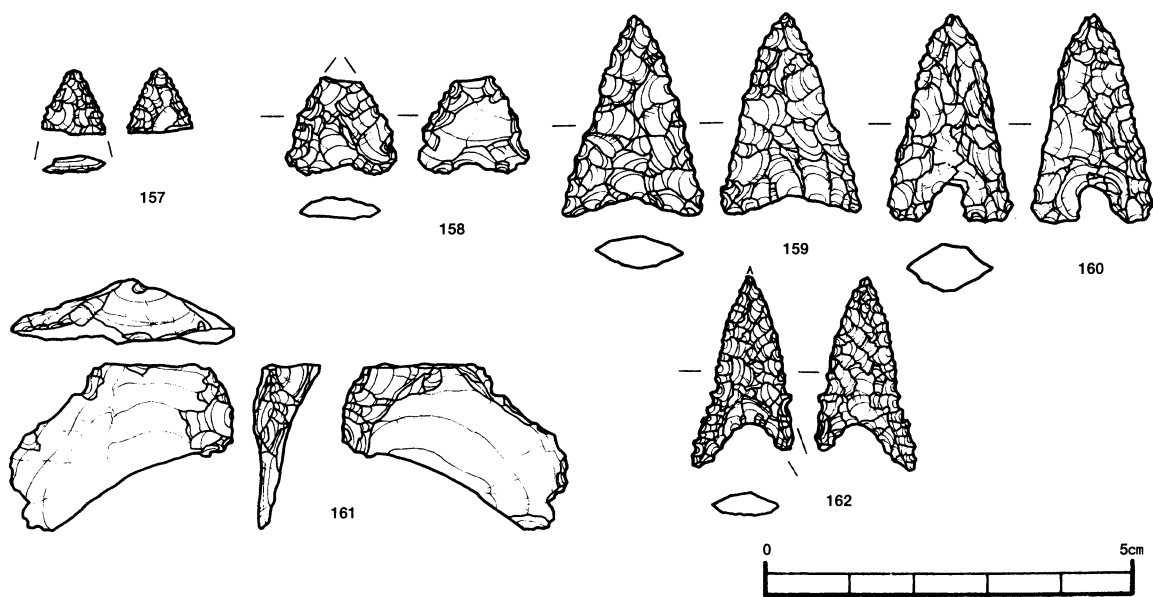
第56图 VI層出土石器(3)



第57图 VI層出土石器(4)

第6表 VI層出土石器観察表

挿図	器種	石材	出土区	層	遺物番号	標高m	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	備考
122	石鏃	黒曜石	B-7	VIa	1	389.83	—	—	—	0.15	先端部のみ
123	石鏃	黒曜石	B-4	VIa	45	391.64	—	—	—	0.31	先端部のみ
124	石鏃	黒曜石	B-0	VIa	5	387.56	—	—	—	0.71	欠損
125	石鏃	チャート	B-1	VI	37	387.93	1.8	1.7	0.4	0.82	
126	石鏃	チャート	D-7	VIa	1	395.14	2.7	2.1	0.45	2	
127	石鏃	黒曜石	D-6	VIa	8	394.99	2	1.7	0.5	1.15	
128	石鏃	黒曜石	A-1	VIa	7	388.08	2	1.7	0.4	0.75	
129	石鏃	黒曜石	D-6	VIa	41	394.67	2.2	1.7	0.4	1.16	姫島産黒曜
130	石鏃	黒曜石	D-6	VIa	14	394.69	2.7	2.2	0.3	0.82	
131	石鏃	ハリ質安山岩	B-0	VIa	31	387.33	—	—	—	3.61	先端部欠損
132	加工痕	黒曜石	A-1	VIa	2	388.05	1.3	1.3	0.4	0.73	
133	石鏃	黒曜石	A-1	VIa	1	388.08	—	—	—	0.22	基部欠損
134	剥片	石英	B-1	VIa	150	387.90	—	—	—	3	
135	加工痕	チャート	A-5	VIa	1	392.43	3.2	2.2	0.85	4.39	
136	加工痕	チャート	4 T	VIa	4	394.85	1	2.1	0.6	1.02	
137	異形石器	ハリ質安山岩	B-4	VI	15	392.67	3.7	2.4	0.5	3.34	
138	石匙	チャート	A-1	VIa	10	388.18	6.7	3.6	1	24.31	
139	剥片	チャート	B-1	VIa	13	388.39	—	—	—	1.71	
140	剥片	ハリ質安山岩	B-1	VI	8	388.24	—	—	—	2.4	
141	剥片	チャート	B-2	VIa	16	389.05	—	—	—	2.79	
142	剥片	チャート	B-1	VI	32	388.14	—	—	—	4.39	
143	剥片	チャート	D-6	VIa	43	395.03	—	—	—	2.32	
144	剥片	チャート	C-5	VIa	2	392.70	—	—	—	3.03	
145	剥片	チャート	B-4	VIa	53	392.19	—	—	—	11.8	
146	剥片	黒曜石	C-5	VI	9	392.80	—	—	—	3.38	
147	剥片	黒曜石	D-6	VIa	48	395.12	—	—	—	5.52	
148	剥片	チャート	B-1	VI	40	388.20	—	—	—	3.17	
149	剥片	チャート	D-6	VIa	42	394.73	—	—	—	13.93	
150	剥片	ハリ質安山岩	B-1	VIa	115	387.95	—	—	—	7.64	
151	剥片	凝灰岩	B-1	VI	9	388.20	—	—	—	7.42	
152	剥片	チャート	2 T	VIa	15	392.82	—	—	—	17.55	
153	スクレイパー	ハリ質安山岩	D-4	VIa	3	392.45	7.1	7.05	1.9	81.63	
154	スクレイパー	チャート	D-6	VIa	40	394.72	4.2	4.7	1.4	28.21	
155	使用痕剥片	チャート	D-6	VIa	38	394.78	3.8	2.3	0.65	5.62	
156	剥片	チャート	B-1	VIa	65	387.99	—	—	—	3.22	



第58図 V層出土石器

第7表 V層出土石器観察表

挿図	器種	石材	出土区	層	遺物番号	標高m	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	備考
157	石鏃	黒曜石	5 T	V a	5	388.28	—	—	—	0.12	先端部残存
158	石鏃	チャート	4 T	V a	3	395.08	—	—	—	0.51	先端部欠損
159	石鏃	頁岩	B-2	V	2	389.74	2.7	1.9	0.4	1.56	
160	石鏃	頁岩	B-2	V	1	389.86	2.8	1.65	0.6	1.99	
161	加工痕	チャート	4 T	V a	2	395.14	2.7	3	0.8	3.01	
162	石鏃	黒曜石	B-4	V b	22	391.48	2.6	1.4	0.3	0.66	

(4) IV層出土石器

①打製石鏃 (第60図)

計5点が出土する。そのうち完形は184・181の2点である。180は基部の一部が残存したものである。183は脚部の欠損したもので、石材は石英である。182は片方の脚部が欠損したもので、黒曜石製である。184は基部形態を凹基とする黒曜石製の石鏃である。

181は凹基の石鏃で、石材はチャートである。

②磨製石鏃 (第60図)

190は脚部の欠損した頁岩製の磨製石鏃である。刃部先端から基部にかけて丁寧な研磨がなされ、先端部から基部にかけて縦方向に擦痕が確認される。

③楔形石器 (第60図)

186は青灰色黒曜石製の楔形石器である。上下両端部からの剥離痕が顕著に認められ、使用による欠損も観察される。

④加工痕のある剥片 (第60図)

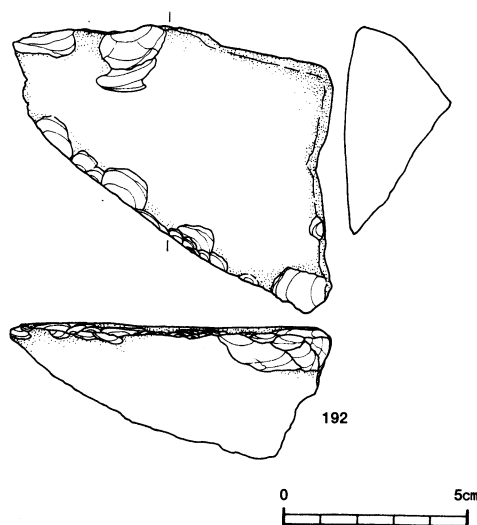
計3点出土する。191と185の石材はチャート製で、185の刃部には両面からの加工痕が見られる。188は頁岩製で、石匙つまみ部の欠損品を思わせるほど形状が整っており、刃部の両面加工が顕著である。

⑤剥片 (第60図)

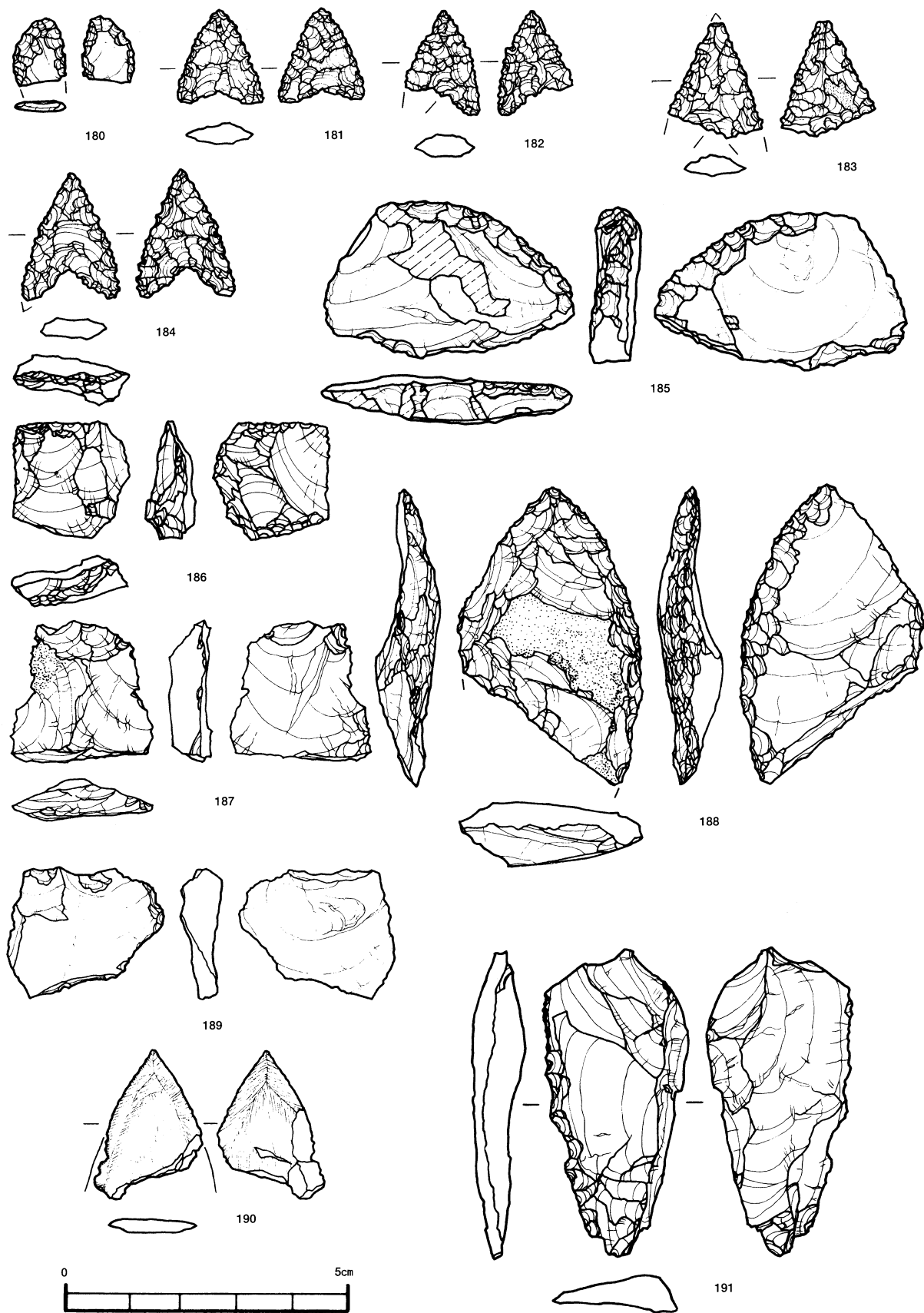
187・189とも石材は石英である。

⑥礫器 (第59図)

192は安山岩礫の一端を打ち欠き、その縁片の一部を刃部として使用したものである。



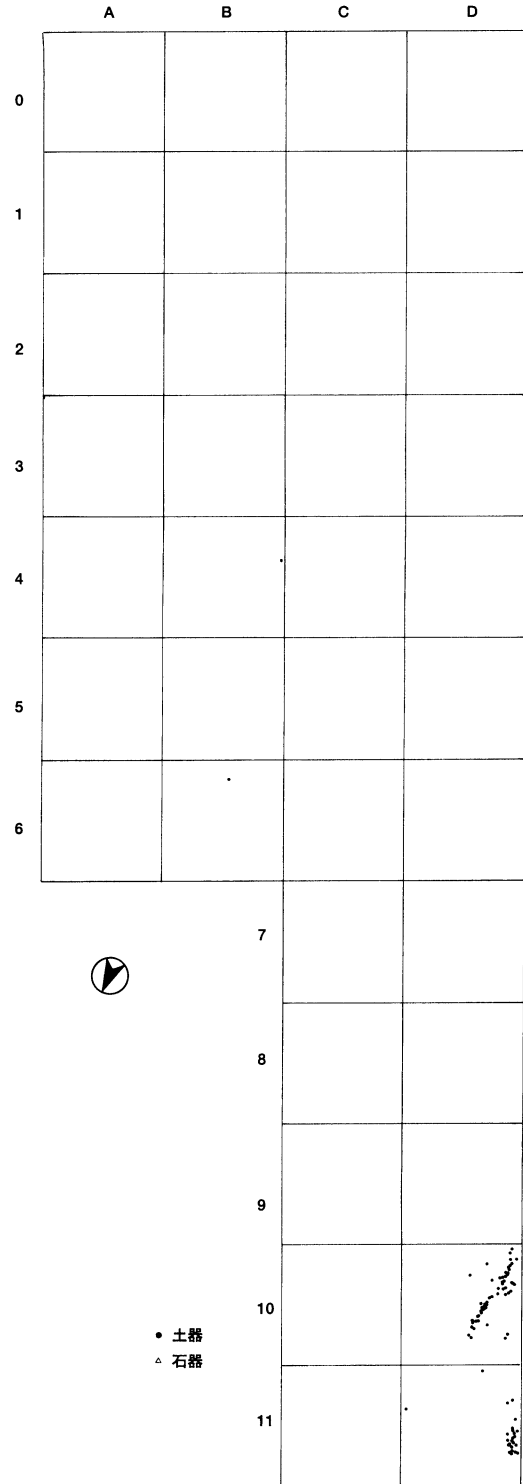
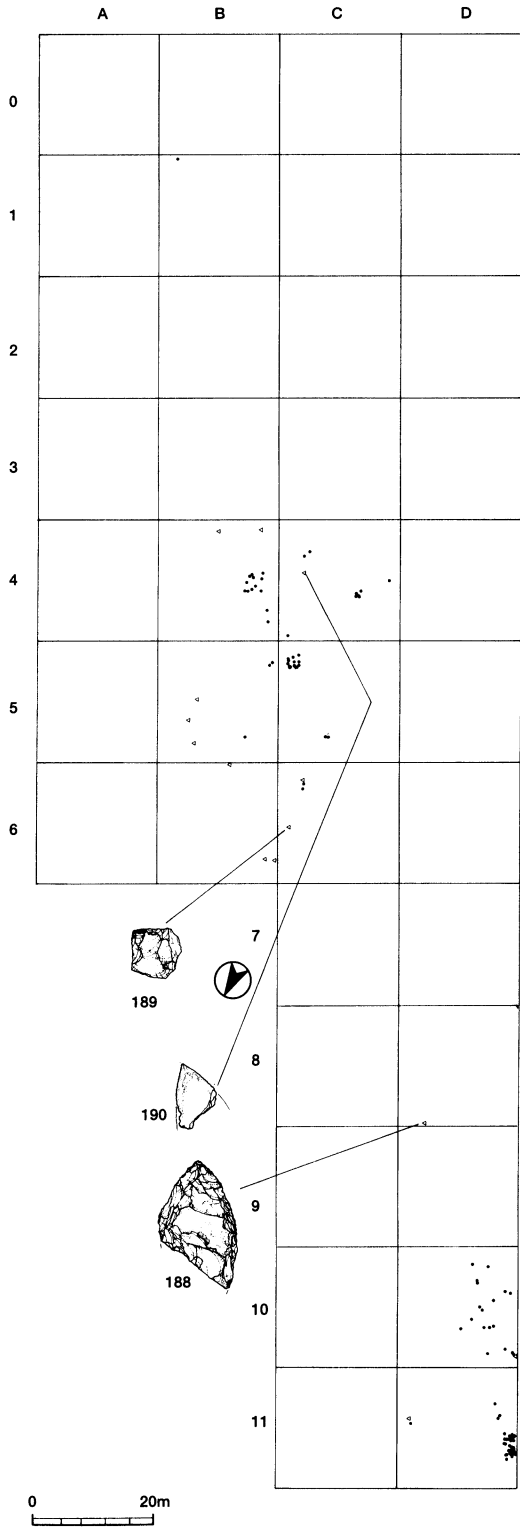
第59図 IV層出土石器 (1)



第60图 IV層出土石器(2)

第8表 IV層出土石器観察表

挿図	器種	石材	出土区	層	遺物番号	標高m	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	備考
180	石鏃	頁岩	T 8	IVa	1	389.22	—	—	—	0.28	基部欠損
181	石鏃	チャート	T 8	IVa	2	389.06	1.6	1.5	0.3	0.61	
182	石鏃	黒曜石	B-5	IVa	8	393.42	—	—	—	0.65	脚部欠損
183	石鏃	石英	B-4	IV	17	391.62	—	—	—	0.96	脚部欠損
184	石鏃	黒曜石	T13	IVa	2	395.61	2.3	1.7	0.4	1.03	
185	加工痕	チャート	B-6	IVa	1	394.41	2.3	4.4	7.5	9.7	
186	楔形石器	黒曜石	C-6	IVa	7	394.33	2	2	7	2.54	
187	剥片	石英	B-5	IVa	1	393.59	—	—	—	3.77	
188	両面加工	頁岩	D-8	IVa	1	395.76	5.2	3.2	1.1	12.58	
189	剥片	石英	B-5	IVa	5	393.87	—	—	—	2.4	
190	石鏃	頁岩	C-4	IVa	10	392.82	—	—	—	0.98	磨製
191	加工痕	チャート	B-6	IVa	2	394.30	5.4	2.5	0.8	9.68	
192	礫器	安山岩	D-10	IVa	91	395.56	7.8	8.75	3.6	190	



第5章 古墳時代の調査

第1節 調査の概要

D-10・11区のⅣ層上面より溝状遺構が検出された。遺構内には古墳時代に該当するⅢ層黒色土が埋土し、遺構内及びその周辺より成川式土器が数十点出土したことから古墳時代の遺構と判断した。他の遺構は検出されず、遺物も成川式土器片のみで石器等の他の遺物は出土しなかった。

D-10・11区以外の調査区からはほとんど遺物の出土は見られず、B-4・6区より成川式土器片が1点ずつ出土したのみであった。

第2節 遺構

調査区西端D-10区のⅣa層上面に3条の溝状遺構がほぼ南北方向に並んで検出された。現在の地形では遺構延伸方向の南側は高台になっているが、北西方向は緩やかな傾斜となり谷へ続いている。遺構検出地点の地形は標高約396mで北東に隣接する前原和田遺跡に最も近い地点である。時期は異なるが、前原和田遺跡では埋土に文明ボラ（1,471年頃の桜島火山噴出物）を含む溝状遺構が数条検出されている。

溝1は南北に約5m伸びて検出される。最大幅80cm,最小幅52cmである。埋土はⅢ層の黒色土であるが、第1段階での埋土として、Ⅲ層、Ⅳa層の混在した層が確認される。このことは溝2・3についても同様である。時期差は明確ではないが、溝2とは方向がずれ、検出上面の延長線上に溝2が若干被る形で検出されていることから、溝2より時期は古いものと推測される。遺構内から成川式土器が21点出土した。

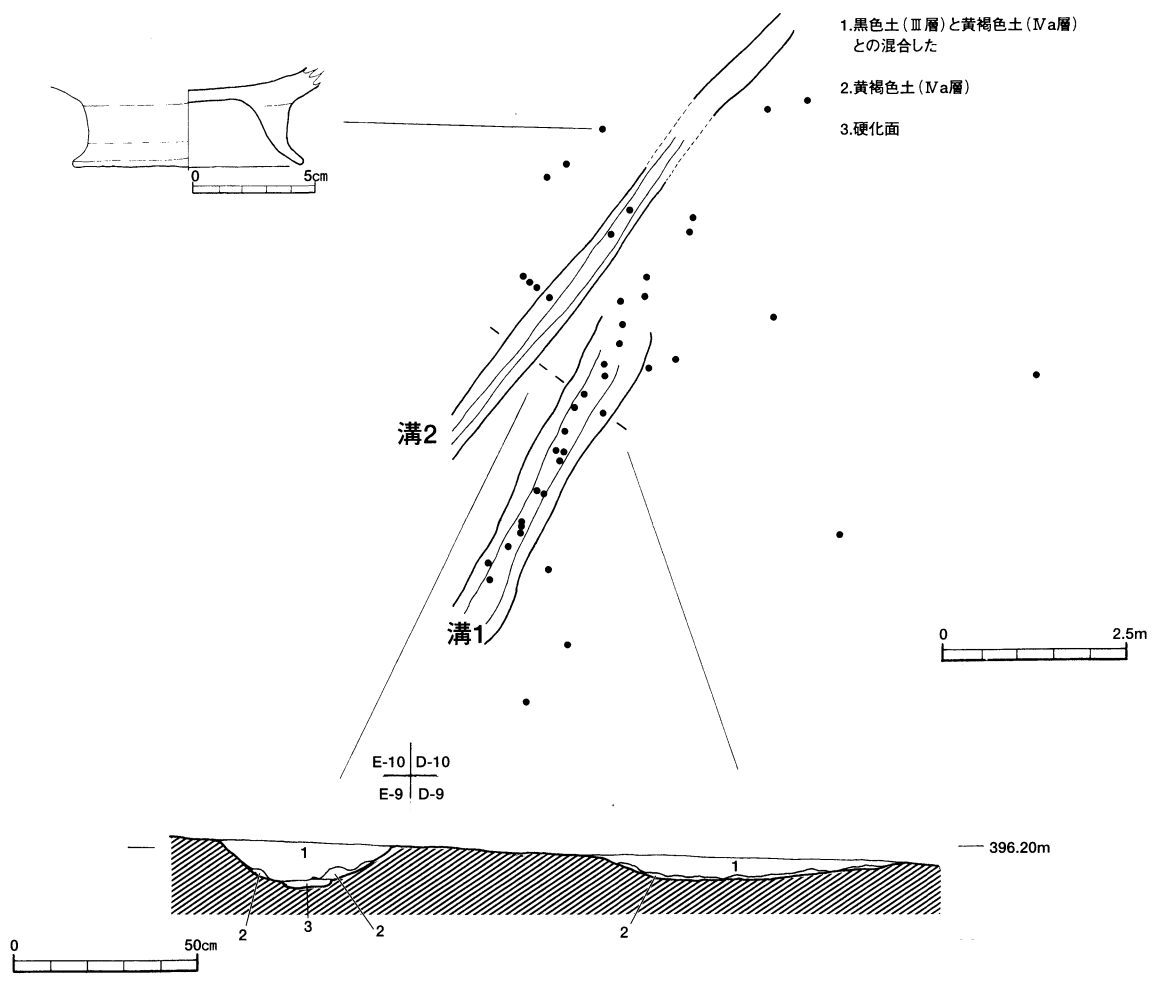
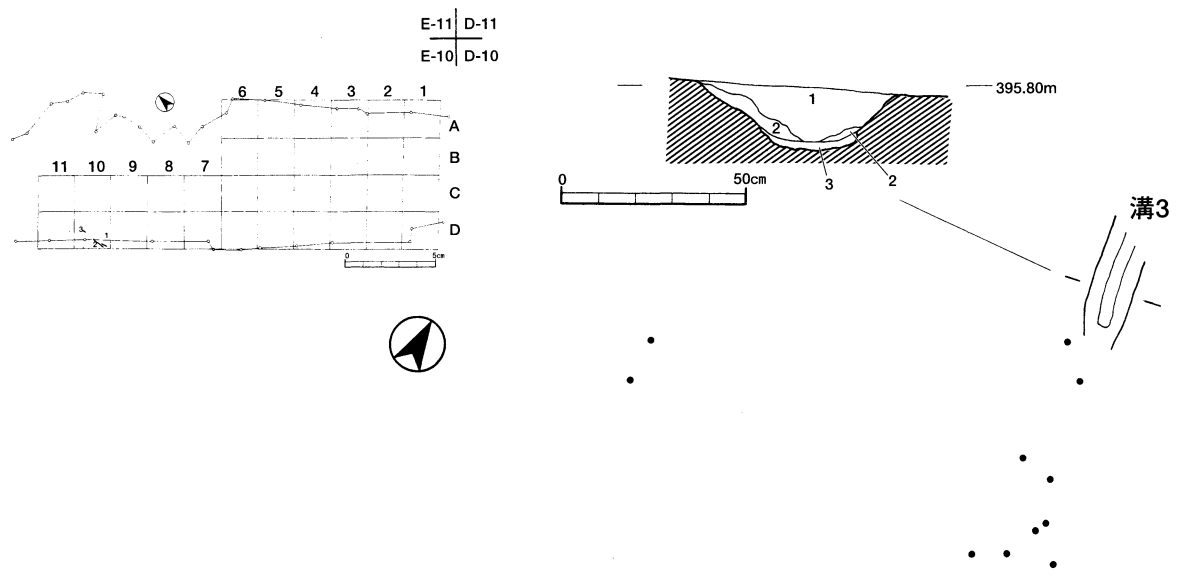
溝2は溝1と隣接し、約7m検出されている。最大幅50cm,最小幅32cmである。溝1に比べて検出ラインは明瞭である。掘り込みは10cmあるが、底部床面のレベル高は溝1と極めて近い。4点の成川式土器が遺構内より出土する。平均10cmの幅で厚さ2～3cmの硬化面がⅣb層上面に確認されている。

溝3は溝2から北に6m離れた地点で検出された。最大幅60cm,最小幅41cmである。掘り込みの深さは16cmあり、溝2と同じくⅣa層とⅣb層の境界付近に厚さ2～3cmの硬化面が見られる。

以上、3条の溝状遺構は規模や底部に残された硬化面から考察すると、古道としての性格が濃いと思われる。また、平面プランでは検出されなかったが、D-10区の北東壁土層面に溝状遺構の断面が確認された。埋土は溝1～3と同様のⅢ層黒色土であることからほぼ同時期のものと考えられる。他の溝状遺構との連続性は確定できなかった。

第3節 遺物

溝状遺構の検出されたD-10・11区に集中して成川式土器が55点出土した。他の調査区からはほとんど出土せず、B-4・6区より1点ずつ確認されたのみである。出土した土器はいずれも無文である。遺構図中に表示した土器底部は、小片の多い成川式土器の中で比較的形状・大きさ等保存の良好な資料である。深鉢形土器の底部にあたり、調整は良好で内外面ともにナデ調整である。



第63図 溝状遺構

第6章 ま と め

供養之元遺跡の位置する地域は、福山町内奥の地にあり、多くの河川の水源地を持つシラス台地上にある。前原和田遺跡や城ヶ尾遺跡、永磯遺跡等の旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が集中し、人々の活動拠点として古くから積極的な展開が見られていたと思われる。そのような環境の中に本遺跡は所在する。

第1節 縄文時代

早期を主体とした遺物や遺構が出土、検出する。特に注目される遺構としては、Ⅶ層下層から検出された20基の集石遺構である。その遺構に供伴する遺物として手向山式土器を初め多数の石器が見られる。また、遺物出土状況の特徴としては、土器の出土量が少ない反面、石鏃やスクレイパー、石匙等の石器が多数出土したことである。

1 遺構について

早期集石遺構20基と落とし穴状遺構5基が検出された。集石遺構はⅦ層下より検出され、落とし穴状遺構はそれよりも新しい時代層より確認された。

集石遺構は、全体的に礫数が少なく、散在した形態を呈するものが多い。礫の数や形態の違いを基に分類を試みたが、掘り込みを有せず礫が散在し、かつ、礫数の少ないタイプのB—b—イ類が9基と最も多かった。次に多いタイプはB—b—ア類で、B—b—イ類に比べ、割と礫が密集しているタイプで、6基が検出された。また、いずれの集石にも熱変色した礫は見られたものの焼土は確認されなかった。あくまでも推測ではあるが、住居跡遺構が検出されなかったことや狩猟具としての機能を持つ石鏃等の石器が多数出土したこと等から、縄文時代早期の本遺跡は、主に動物を狩猟するキャンプベース地として利用された可能性が高いと思われる。

また、時期は下って、縄文時代早期末から縄文時代後期に該当すると思われるⅥ～Ⅳ層からは、落とし穴状遺構が5基検出されている。1・3・4号落とし穴状遺構はいずれもアカホヤ二次火山灰土が底部に堆積しており、鬼界カルデラ噴出物堆積の時期（約6,300年前）直前かそれ以前の時期のものではないかと推測される。検出プランの形態も非常に似ており、ほぼ同時期に設置された落とし穴と考えてよさそうである。一方、2・5号落とし穴状遺構は、長軸が極端に長く、他の落とし穴状遺構とは明らかに形態を異にしている。底部の埋土に御池白色パミスが大量に含まれており、御池カルデラ噴火の直前（約4,000年前）か、それに近接する時期と考えられ、両者には明らかな時代差が見られる。また、これら落とし穴の設置された時期に該当すると思われるⅤ層・Ⅳ層からの出土遺物は少なく、石鏃を中心とした石器等が僅かに出土する程度である。このことから、この時期の本遺跡は縄文早期の時代とは様相を異にし、落とし穴を設置し、動物捕獲の場として利用する人々の長く立ち入らない場所としての時期がしばらく続いたものと想像できる。住居跡や溝状遺構等の遺構は検出されなかった。

2 土器について

縄文時代早期を主体とした、手向山式土器、平椀式土器、塞ノ神式土器が出土する。手向山式土器は、縄文時代早期のⅦ層より出土し、集石遺構と時期を同一とする。出土数は少なく、口縁部と胴部の破片、底部の一部が僅かに出土する程度である。種類としては、縄文、押し型文の

タイプが見られる。平椀式土器はほぼ完形に復元する土器 1 固体と口縁部の破片 2 点が出土した。出土数は少ないが、どれも口縁部には羽状の短沈線文が見られる。なお復元された土器は口唇部に短沈線文が周回して施文されているが、胴部や底部は全く無文のタイプである。口縁部付近に貫通未遂の補修孔が 3 個見られる。

特筆すべきは塞ノ神式土器で、約7,400年前の桜島の噴出物とされる P-11 を挟んで 2 タイプの種類が出土したことである。(巻頭カラー参照) P-11 の下層の明茶褐色土から、捺糸文を施文した塞ノ神 A 式土器(Ⅲ-A-2 類)が出土、上層の黄褐色軽石混淡茶褐色土からは貝殻文の塞ノ神 B 式土器(Ⅲ-B-1 類)が出土した。この出土状況から、塞ノ神 A 式が B 式に先行するということを示している。塞ノ神式土器の変遷については様々な議論が交わされているが、本遺跡の塞ノ神式土器の出土状況は捺糸文系塞ノ神式土器から貝殻文系塞ノ神式土器へ移行していったことを裏付けている。また、未報告ではあるが、福山城ヶ尾遺跡でも同様の出土例がある。(注 1) さらに末吉町桐木遺跡においても、P11 軽石(7,400 年前・桜島起源)を挟んで上位に塞ノ神 B 式土器、下位の層に塞ノ神 A 式土器が出土し、その上下関係が明確に確認されたことから、塞ノ神式土器の捺糸文系土器が貝殻文系土器に先行するとの報告がなされている。(注 2) 今後の詳細な調査及び報告が待たれるところである。

また、その他の出土土器に縄文時代晩期の浅鉢形土器がある。底部の外面には一辺が約 2 cm の菱形目を持つ網状の圧痕が見られる。何重かに折りたたんだ上で底部を押圧した様子が窺える。

3 石器について

計132点が出土する。時期は、縄文時代早期の時期から縄文時代後・晩期にかけてのものである。特に縄文時代早期に該当するⅥ・Ⅶ層の出土が多く、全出土数の約86%を占める。出土した器種の内訳としては、石鏃27点、石匙 7 点、スクレイパー 9 点、加工痕のある石器16点、楔形石器 2 点、異形石器 2 点、挟入石器 1 点、石核 1 点、使用痕のある剥片 5 点、剥片48点、磨石・ハンマー 5 点、礫器 5 点、石皿 3 点、石斧 1 点である。堅果類の調理や根菜類等の植物質の食料獲得に使用されたと推定される磨石や石皿等の礫石器の出土数が少なく、剥片石器が多いのが特徴的である。石材の内訳は、132点中、チャートが71点と全体の約半数以上を占めた。

また、異形石器がそれぞれⅦ層・Ⅵ層より 1 点ずつ出土した。石鏃の変形にも見えるが、明確な用途は不明である。

第 2 節 古墳時代

ほぼ南北に縦走する溝状遺構が遺跡の西側 D-10 区より 3 条検出される。上面検出プランの幅の最も広い所で約 80 cm、深さは最も深い所で約 15 cm である。全体的に掘り込みの浅い溝状遺構である。底部床面には硬化面が見られ、何らかの通り道として利用されたものとみなしても良さそうである。供伴する遺物は成川式土器の胴部と底部の破片が少数個のみである。また、溝状遺構周辺には住居跡や焼土等の生活及び生業に関わる遺構は見られない事等から、この時代の本遺跡は、生活基盤の地に全くかからない場所かその隣接地にあったものと推測される。

(注 1) 鹿児島県教育委員会 「福山城ヶ尾遺跡」現在報告書作成中

(注 2) 長野真一 2000 「旧石器時代の人体型石製品―耳取遺跡―」『考古学ジャーナル467』

圖 版



調査前遠景



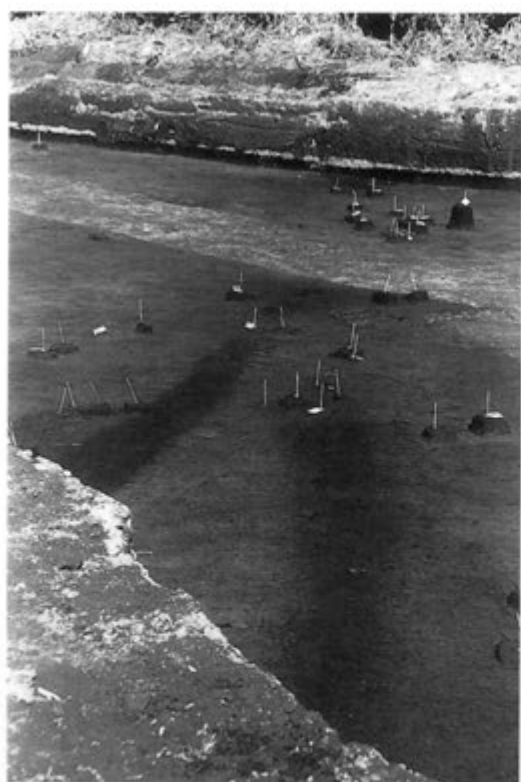
遺跡遠景



13トレンチ完掘状況（1）



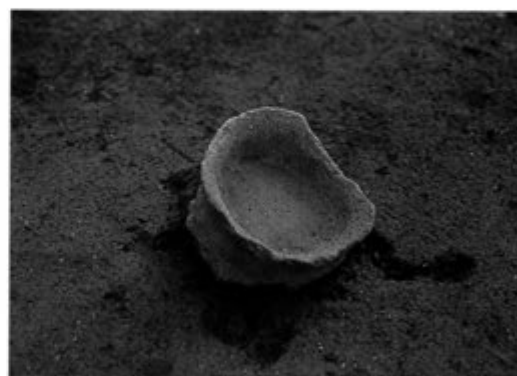
13トレンチ完掘状況（2）



溝状遺構近景



溝状遺構断面



成川式土器底部出土状況



2号落とし穴状遺構断面



4号落とし穴状遺構断面



1号集石



3号集石



4号集石



Ⅲ-B-1 類土器出土狀況



B-0 区Ⅵ層遺物出土狀況



D-2・3 区Ⅵ層遺物出土狀況



Ⅱ-1 類土器出土状況



Ⅱ-2 類土器出土状況



C-6区遺物出土状況



Ⅲ-A-2 類土器



Ⅲ-B-1 類土器



I-1 類土器



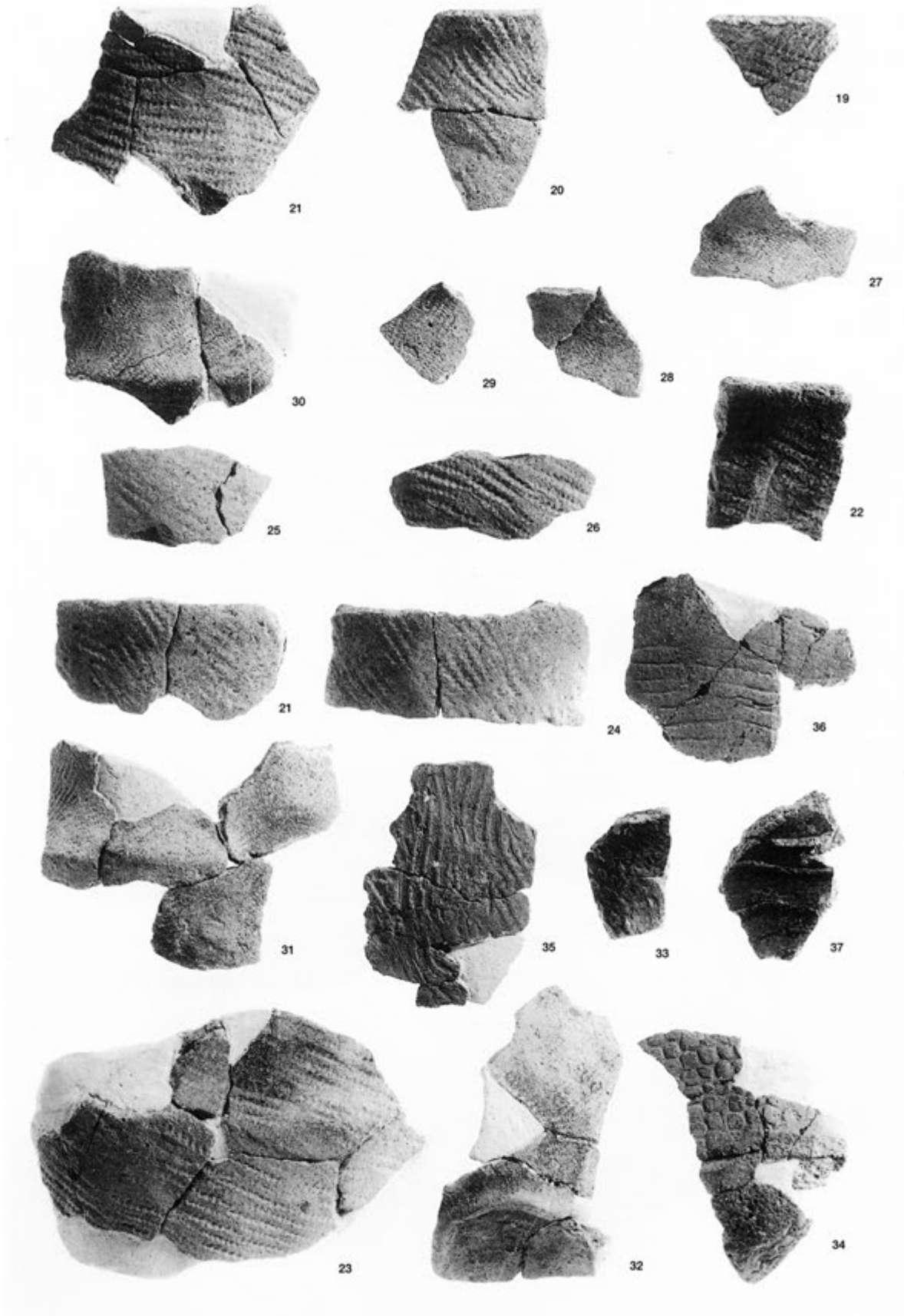
II-1 類土器



III-A-1 類土器



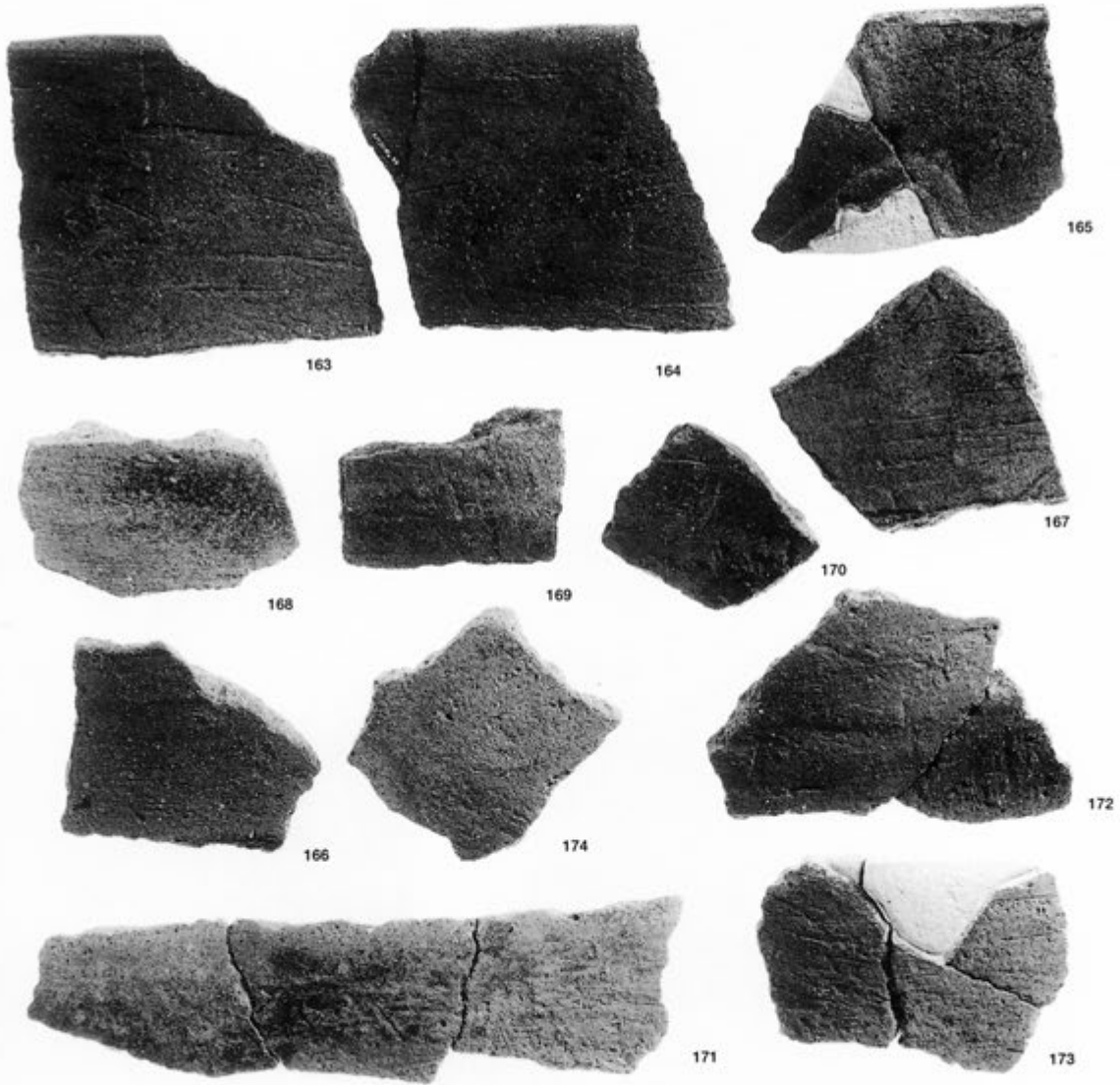
I-2 類土器



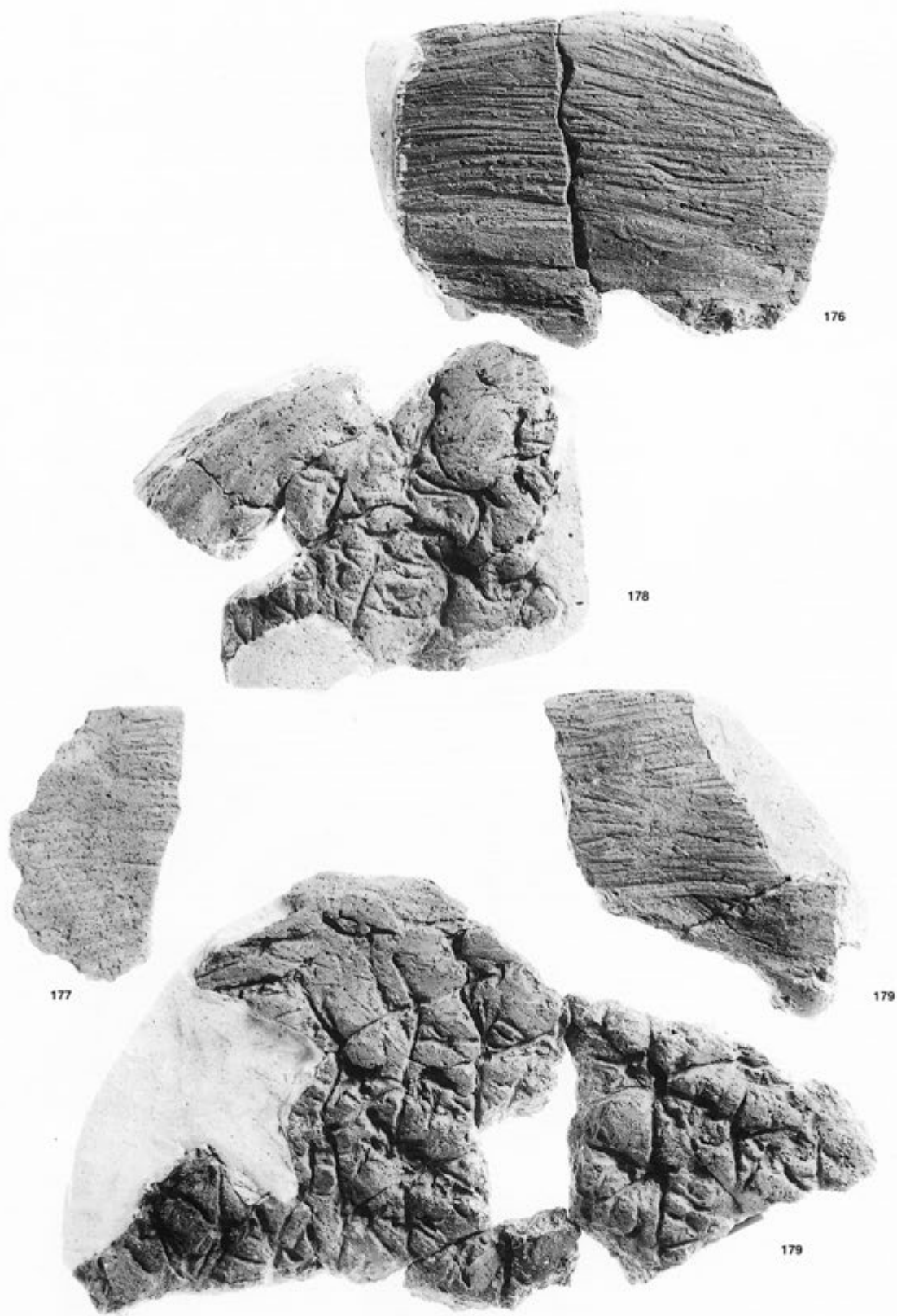
I-3 類土器



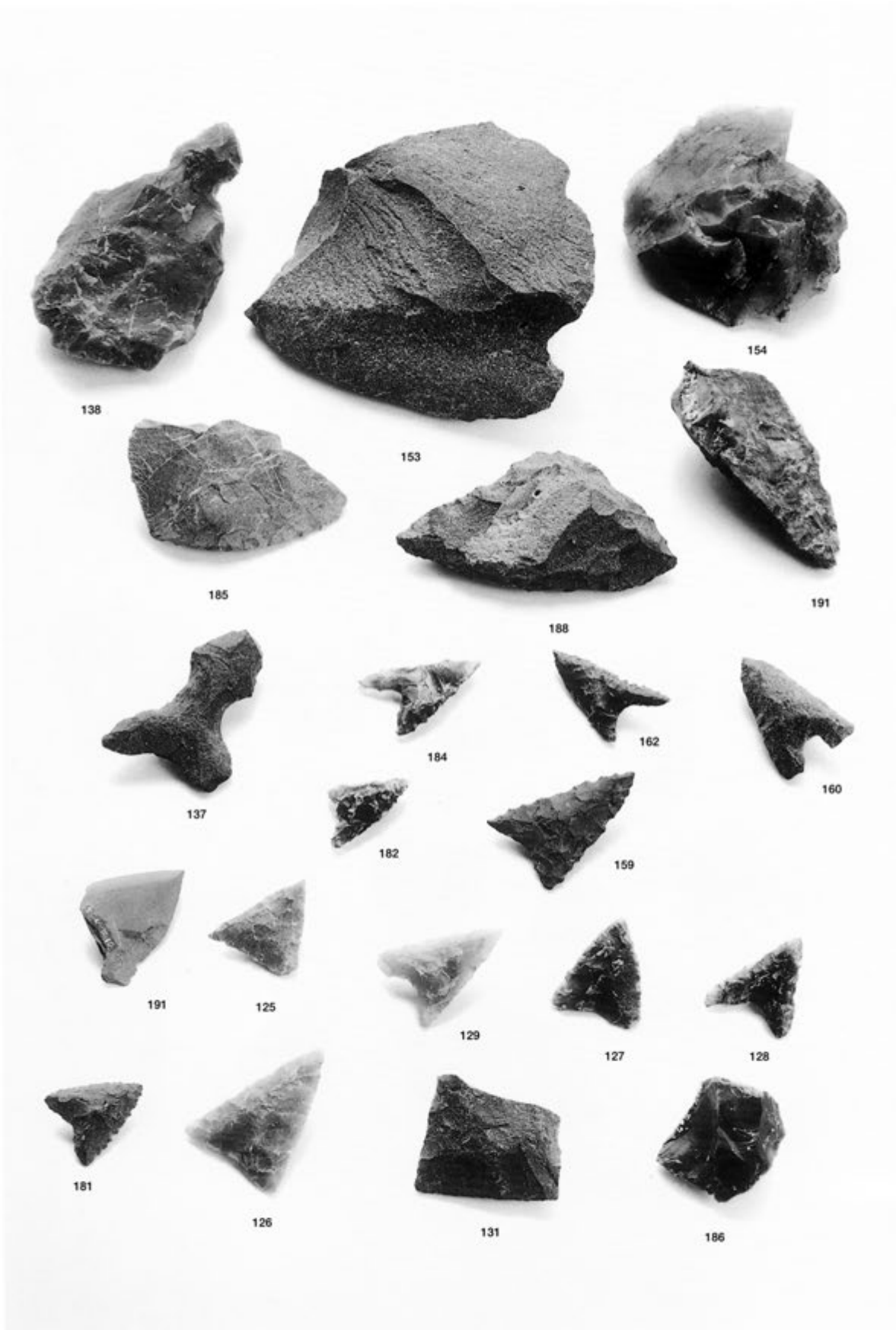
II-2 類土器



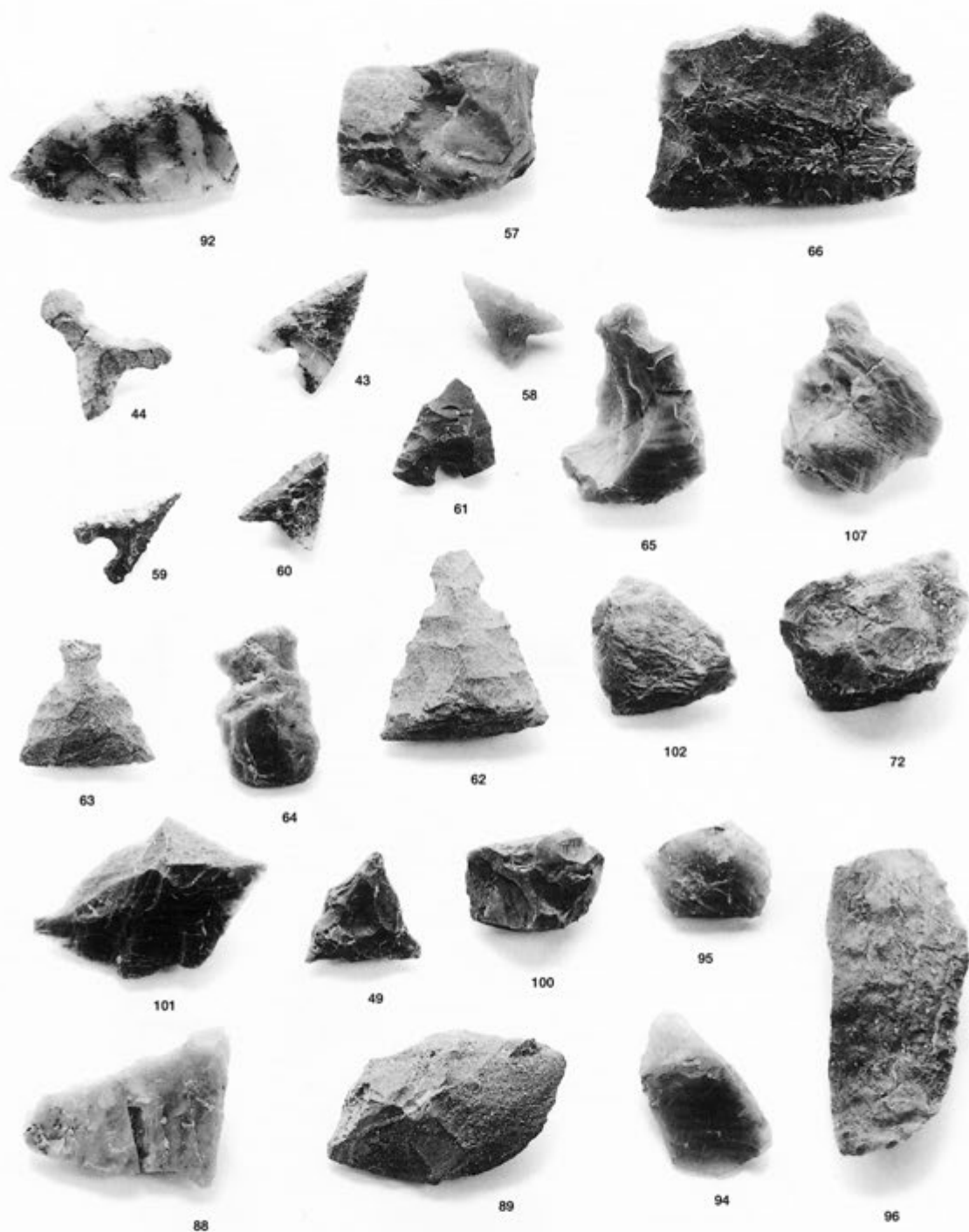
IV 類土器



V類土器



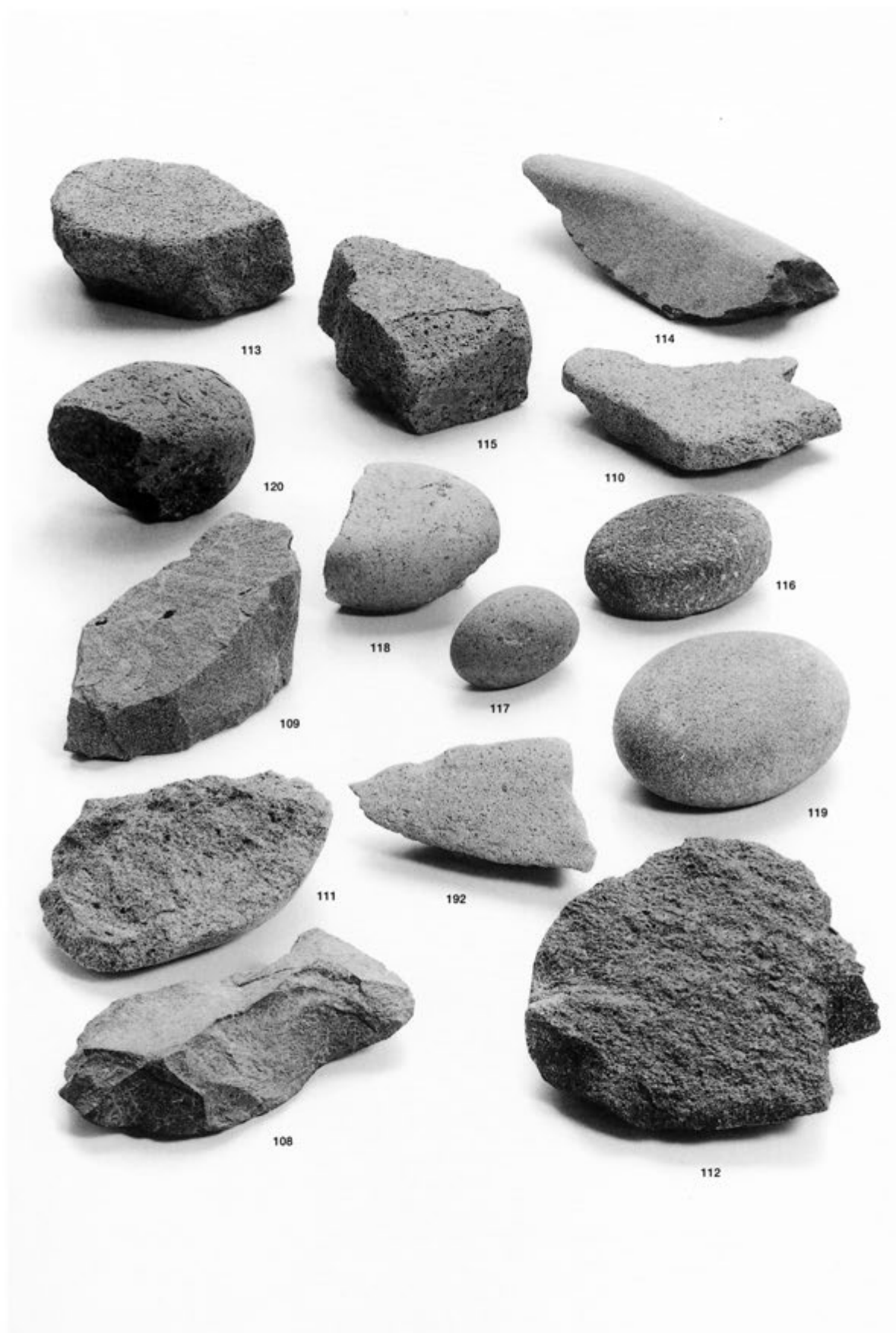
IV~VI層出土石器



Ⅱ層出土石器（1）



Ⅵ層出土石器(2)

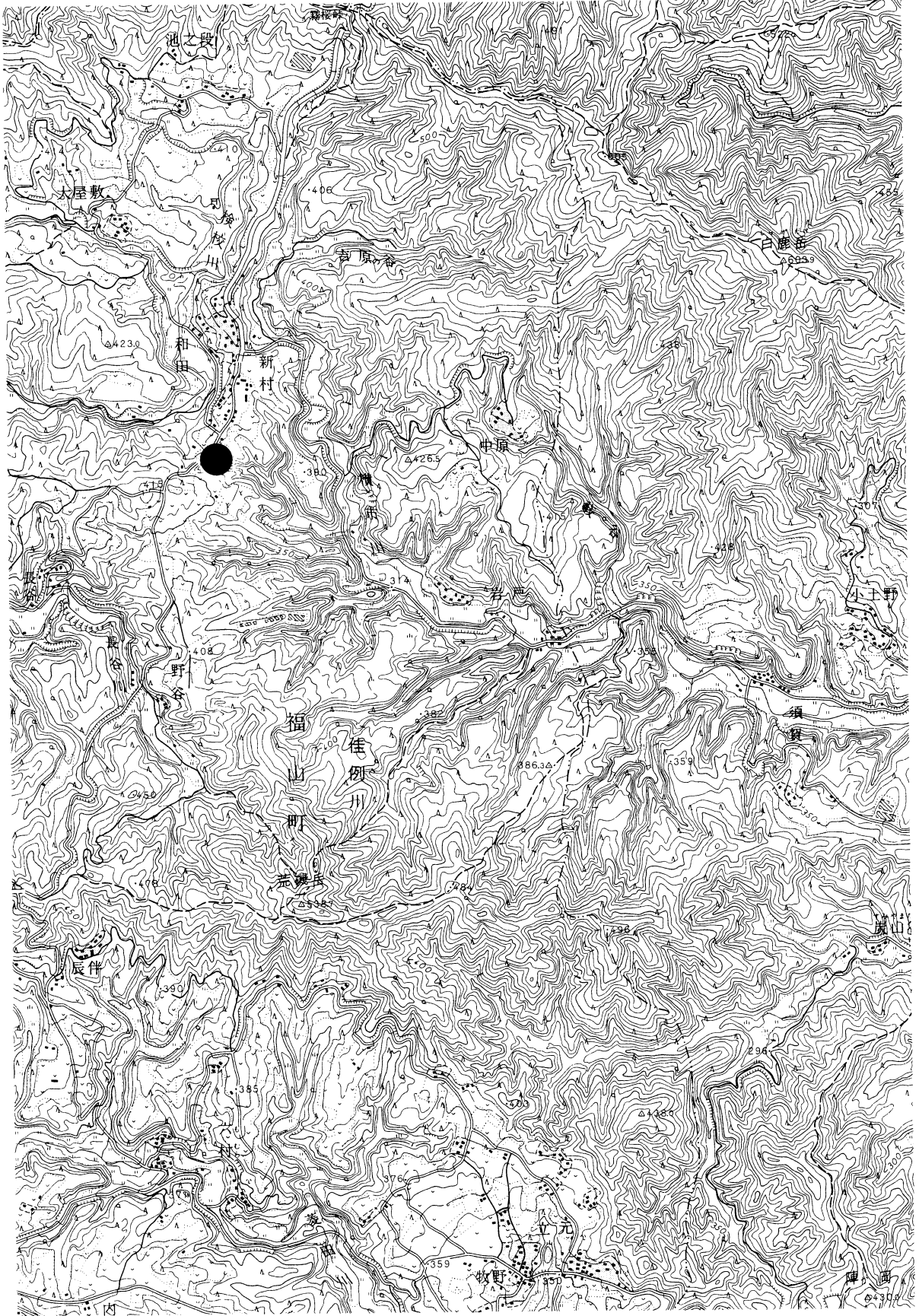


Ⅵ層出土石器(3)

前原和田遺跡

報 告 書 抄 録

ふりがな	まえはらわだいせき							
書名	前原和田遺跡							
副書名	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	I							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	36							
編著者名	大保秀樹							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-5652 鹿児島県始良郡始良町平松6252 Tel0995-65-8787							
発行年月日	2002年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
まえはらわだ 前原和田 いせき 遺跡	鹿児島県 あいらぐん 始良郡 ふくやまちょう 福山町 かれいがわ 嘉例川 あざまえはら 字前原 わだ・わだまえ 和田・和田 前	市町村	遺跡番号	31°	130°	確認調査 19971007	1,000 m ²	東九州自 動車道建 設(末吉 IC~国分 IC間)に 伴う埋蔵 文化財発 掘調査
		62	3	42′	53′	19971024		
				46″	5″	全面調査 19980506		
						19981030		
						20000508		
				20000613				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
前原和田遺跡	包含層	旧石器時代 縄文時代 草創期 早期 中期 後・晩期 中世~近世	礫群遺構22基 (XⅥ層18基 ・XⅢ層4基) 落とし穴状遺構 2基 落とし穴状遺構 1基 集石 2基 古道	ナイフ形石器, 台形石器, ハンマーストーン 三稜尖頭器 石鏃, 土器片 石鏃, 石斧, 吉田式土器 押型文土器, 塞ノ神式土 器 石鏃, 磨石, 春日式土器 撚糸文土器 精製浅鉢, 組織痕土器 須恵器				



遺跡の位置図

本文目次

報告書抄録

遺跡位置図

目次

第1章 調査の経過	155
第1節 調査にいたるまでの経緯	155
第2節 調査の組織	155
第3節 調査の概要と経過	156
第2章 層序	159
第3章 旧石器時代の調査	162
第1節 調査の概要	162
第2節 遺構	162
第3節 出土遺物	181
第4章 縄文時代草創期の調査	220
第1節 調査の概要	220
第2節 遺構	220
第3節 出土遺物	220
第5章 縄文時代早期の調査	225
第1節 調査の概要	225
第2節 遺構	225
第3節 出土遺物	225
第6章 縄文時代中期の調査	235
第1節 調査の概要	235
第2節 出土遺物	235
第7章 縄文時代後期・晩期の調査	239
第1節 調査の概要	239
第2節 出土遺物	239
第8章 中世～近世の調査	242
第1節 調査の概要	242
第2節 遺構	242
第3節 出土遺物	242
第9章 出土炭化物の自然科学分析報告	245
第10章 調査のまとめ	250
第1節 旧石器時代（礫群）	250
第2節 遺物	253
第3節 縄文時代	253

表 目 次

表 1	礫群の分類	176
表 2	炭化物の分類	176
表 3	小礫群の分類	176
表 4	X VI層礫群の分類	176
表 5	X III層礫群の分類	176
表 6	石器観察表 (1)	216
表 7	石器観察表 (2)	217
表 8	石器観察表 (3)	218
表 9	石器観察表 (4)	219
表10	石器観察表 (5)	224
表11	土器観察表 (1)	231
表12	石器観察表 (6)	233
表13	石器観察表 (7)	239
表14	土器観察表 (2)	243

挿 図 目 次

第 1 図	年度別調査区	158
第 2 図	土層模式柱状図	159
第 3 図	土層断面図	160
第 4 図	周辺地形図及びグリッド配置図	161
第 5 図	X VI層礫群配置図及び 1 号・2 号礫群	163
第 6 図	X VI層 3 号礫群	164
第 7 図	X VI層 4 号礫群	165
第 8 図	X VI層 5 号礫群	166
第 9 図	X VI層 6 号礫群	167
第10図	X VI層 7 号・8 号礫群	168
第11図	X VI層 9 号礫群	169
第12図	X VI層10号・11号礫群	170
第13図	X VI層12号礫群	171
第14図	X VI層13号・14号礫群	172
第15図	X VI層15号・16号礫群	173
第16図	X VI層17号礫群	174
第17図	X VI層18号礫群	175
第18図	X VI層礫群配置図	177

第19図	X VI層礫群間接合図	178
第20図	X III層礫群配置図及び1号・2号礫群	179
第21図	X III層3号・4号礫群	180
第22図	X VII層石器出土状況	182
第23図	X VII層石器(1)	183
第24図	X VII層石器(2)	184
第25図	X VI層石器出土状況	185
第26図	X VI層石器(1)	186
第27図	X VI層石器(2)	187
第28図	X VI層石器(3)	188
第29図	X VI層石器(4)	189
第30図	X VI層石器(5)	190
第31図	X VI層石器(6)	191
第32図	X VI層石器(7)	192
第33図	X V層石器出土状況	193
第34図	X V層石器	194
第35図	X IV層石器出土状況	195
第36図	X IV層石器	196
第37図	X III層石器出土状況	198
第38図	X III層石器(1)	199
第39図	X III層石器(2)	200
第40図	X III層石器(3)	201
第41図	X III層石器(4)	202
第42図	X III層石器(5)	203
第43図	X III層石器(6)	204
第44図	X III層石器(7)	205
第45図	X III層石器(8)	206
第46図	X III層石器(9)	207
第47図	X III層石器(10)	208
第48図	X III層石器(11)	209
第49図	X III層石器(12)	210
第50図	X I～X II層石器出土状況	213
第51図	X II層石器(1)	214
第52図	X II層石器(2)	215
第53図	X II層石器(3)	216
第54図	X I層地形図及びX層1号落とし穴状遺構	221
第55図	X層2号落とし穴状遺構	222
第56図	X層土器出土状況	222

第57図	X層石器出土状況	223
第58図	X層石器	224
第59図	V層地形図及びVI層落とし穴状遺構	226
第60図	VII層地形図及び1号・2号集石遺構	227
第61図	VII・VI層土器出土状況及び接合図	228
第62図	VII層土器	229
第63図	VI層土器	230
第64図	VII・VI・V層石器出土状況	232
第65図	VII・VI・V層石器	234
第66図	V・IV層土器出土状況及び接合図	236
第67図	IV層土器	237
第68図	IV層石器出土状況	238
第69図	IV層石器	238
第70図	III層土器出土状況	240
第71図	IVa・III層土器	241
第72図	IV層上面地形図及びIII層古道	244
第73図	層位別石器変遷図	251

図版目次

図版 1	255	図版17	271
図版 2	256	図版18	272
図版 3	257	図版19	273
図版 4	258	図版20	274
図版 5	259	図版21	275
図版 6	260	図版22	276
図版 7	261	図版23	277
図版 8	262	図版24	278
図版 9	263	図版25	279
図版10	264	図版26	280
図版11	265		
図版12	266		
図版13	267		
図版14	268		
図版15	269		
図版16	270		

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は、末吉～国分間に東九州自動車道の建設を計画し、工事を行った。この建設工事に伴い、鹿児島県教育委員会・日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所・鹿児島県立埋蔵文化財センターとの間で協議が重ねられ、鹿児島県立埋蔵文化財センターは工事予定地を対象に平成6年10月と平成7年5月に埋蔵文化財の分布調査を実施した。

分布調査の結果、工事予定地に13か所の遺物散布地や確認調査の必要な地点が存在することが判明した。そこで、平成8年4月から用地買収等の条件が整った部分を対象に順次確認調査を実施することとなった。

前原和田遺跡は、平成9年度の確認調査の結果を受け、調査対象面積約1,000㎡について平成10年度緊急発掘調査を行った。しかし、遺跡南側に未買地が残されたため、平成12年度に追加の発掘調査を行った。

第2節 調査の組織

平成9・10年度緊急発掘調査

事業主体者	日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所	
調査主体者	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長 吉元 正幸（9年）
		“ 吉永 和人（10年）
	次長兼総務課長	尾崎 進
	主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋
	課長補佐兼第一調査課係長	新東 晃一
	主任文化財兼第二調査課係長	立神 次郎
調査担当者	文化財研究員	今村 敏照
	“	福永 修一
調査事務担当者	主 査	前屋敷 裕徳
	“	政倉 孝弘
	主 事	追立 ひとみ

平成12年度緊急発掘調査

事業主体者	日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所
調査主体者	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井上 明文
		次長兼総務課長	黒木 友幸
		主任文化財主事兼調査課長	新東 晃一
		課長補佐兼第一調査課係長	立神 次郎
		主任文化財兼第二調査課係長	彌榮 久志
調査担当者		文化財主事	立部 剛
		文化財研究員	有馬 孝一
調査事務担当者		主 査	有村 貢
		〃	栗山 和己

平成13年度報告書作成事業

事業主体者	日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所		
作成主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井上 明文
作成企画者	〃	次長兼総務課長	黒木 友幸
		主任文化財主事兼調査課長	新東 晃一
		課長補佐	立神 次郎
		主任文化財兼第二調査課係長	彌榮 久志
		主任文化財主事	長野 眞一
作成担当者		文化財主事	大保 秀樹
事務担当者		主 査	前田 昭信
		〃	栗山 和己

発掘調査及び報告書作成に当たり多くの方々に、御指導・御助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

岡村道雄	文化庁記念物課主任文化財調査官
橘 昌信	別府大学文学部教授
森脇 広	鹿児島大学法文学部教授
木崎康弘	熊本県教育庁文化課

第3節 調査の概要と経過

前原和田遺跡の調査対象面積は約1,000㎡であり、調査前は畑地と山林からなっていた。そこで、まず遺物包含層と遺構の有無・時代・地表面からの深さ・遺物包含層の広がり把握するために、平成9年10月に、3m×4mを基本とした3か所のトレンチと、西側谷部に2m×3mトレンチ3か所の計6本を設定し、確認調査を実施した。その結果、調査対象地区のほぼ全域にわたり7つの異なる時期の遺物包含層が存在することを確認した。それを受けて、平成10年5月から平成10年10

月、平成12年5月から平成12年6月まで緊急発掘調査を実施した。

緊急発掘調査においては、工事用センター杭「STA86」と最寄りの西側センター杭とを結ぶ線を基準軸とし、10m四方のグリッド（調査用区画）を設定して実施した。グリッドは南北をA区～E区、東西を1区～6区と呼ぶこととし、1グリッドは「A-1, B-2……」というようにアルファベットと数字を組み合わせた呼称とした。平成10年度の緊急発掘調査は、A～D-1～6区の部分の調査を行い、平成12年度の緊急発掘調査は未買地部分の調査を実施した。

日誌抄

調査の経過については1月毎に記載。

平成10年5月

6日より作業開始。グリッド設定し、Ⅲ層より掘り下げ。Ⅳ層上面で溝状遺構検出し、写真撮影及び実測する。Ⅳ層遺物取り上げ。Ⅴ層上面で20cmコンタ図作成。Ⅵより落とし穴状遺構を検出する。

平成10年6月

Ⅵ層検出1号・2号落とし穴状遺構の写真撮影及び実測。Ⅵ層遺物出土状況写真撮影及び遺物取り上げ。Ⅶ層上面・Ⅷ層上面の20cmコンタ図作成。Ⅷ層上面で集石を2基検出し実測する。Ⅶ層遺物取り上げ。

平成10年7月

X層掘り下げ。X層より黒曜石や流紋岩のチップ・剥片が出土。航空写真撮影を行う。XI層より細石刃やチップが出土。

平成10年8月

XI～XIII層掘り下げ。XII層で3か所の遺物集中区出土。石器に伴いチップ、フレイクが大量に出土する。土層断面図実測。

平成10年9月

遺物集中区のA, Cブロックの写真撮影。XI～XII層の20cmコンタ実測及び遺物取り上げ。XIII～XIV層で礫群を2基検出。1号・2号礫群の写真撮影及び実測。XIV層上面コンタ図作成。XVII層上面20cmコンタ図作成及び遺物取り上げ。

平成10年10月

遺跡東半分のXIV～XVII層掘り下げ。XVII層上面で炭化物を伴う礫群を多数検出。1T周辺礫群出土状況写真撮影。縄文早期落とし穴状遺構写真撮影、断面実測。

供養之元遺跡への移転準備。

平成12年5月

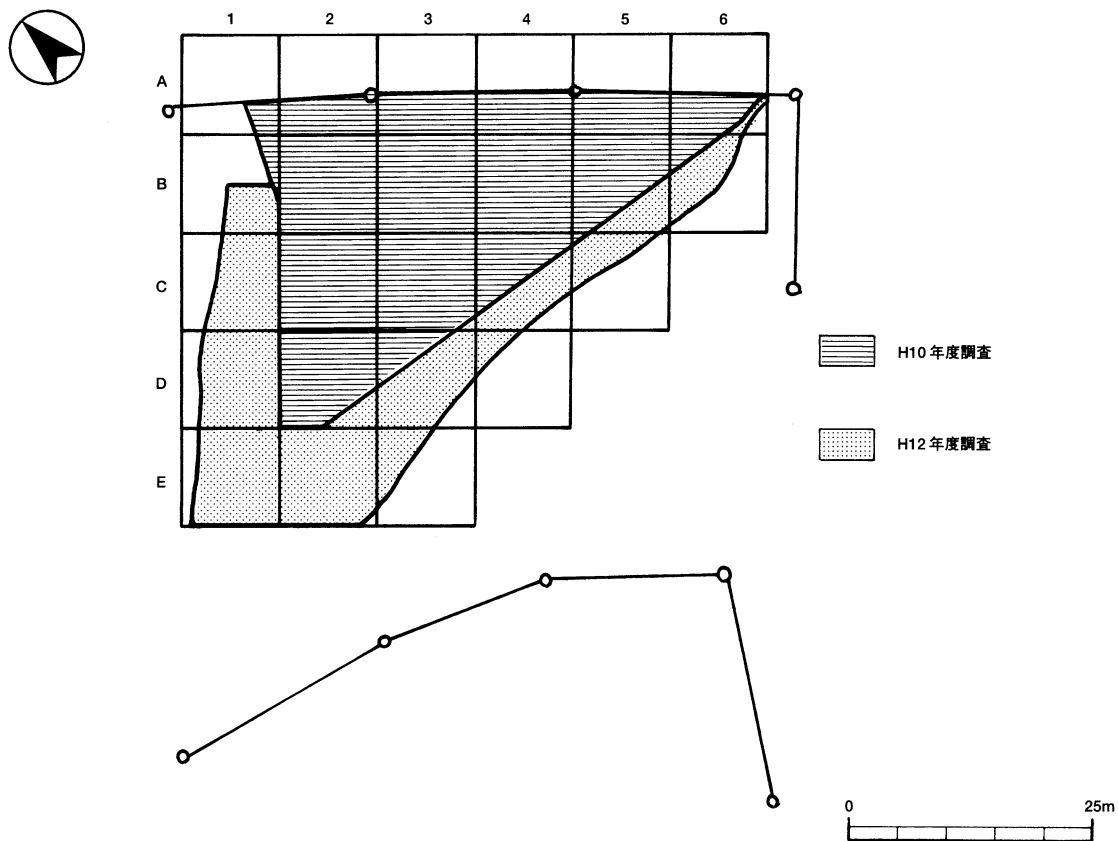
8日より1パーティーで調査を開始する。

D・E-2・3区Ⅱ層より掘り下げ。E-2区で古道検出。X層検出落とし穴状遺構写真撮影及び実測。XⅥ層で礫群4基検出。

平成12年6月

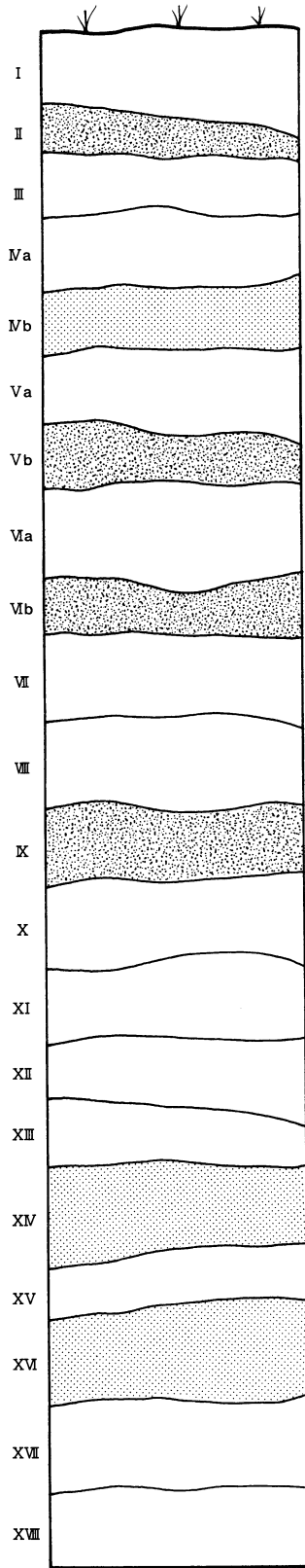
XⅥ層検出の礫群写真撮影及び実測。遺物平板実測及び取り上げ。移転準備と同時に踊場遺跡のプレハブ予定地の整地を行う。

6月13日で調査を終了し、翌日より財部町踊場遺跡の調査を開始する。



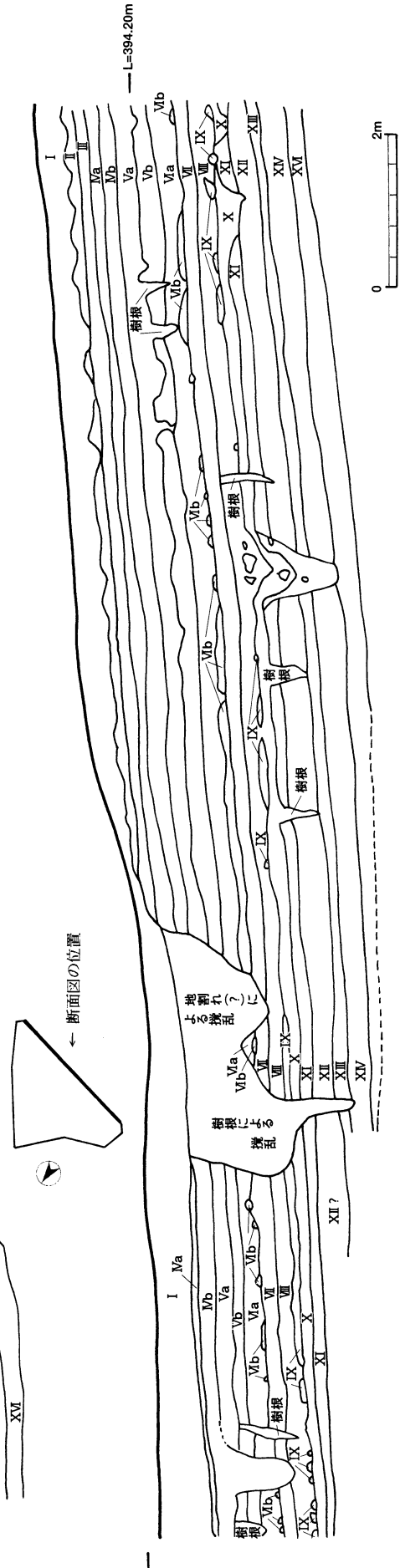
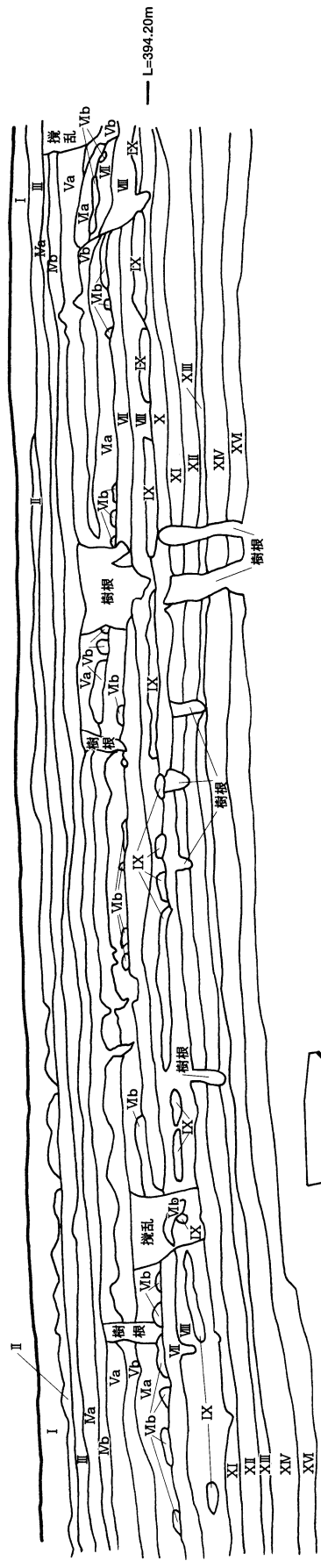
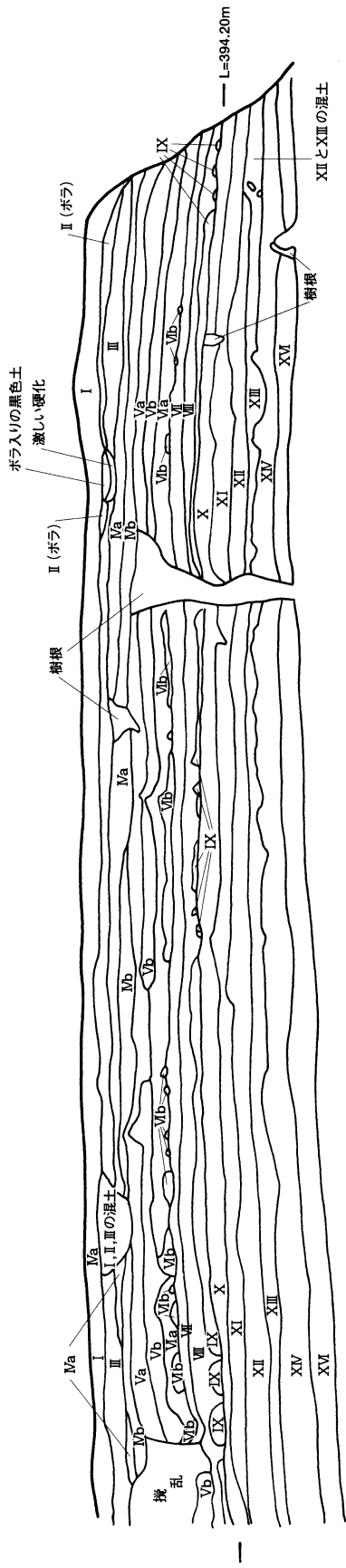
第1図 年度別調査区

第2章 層序

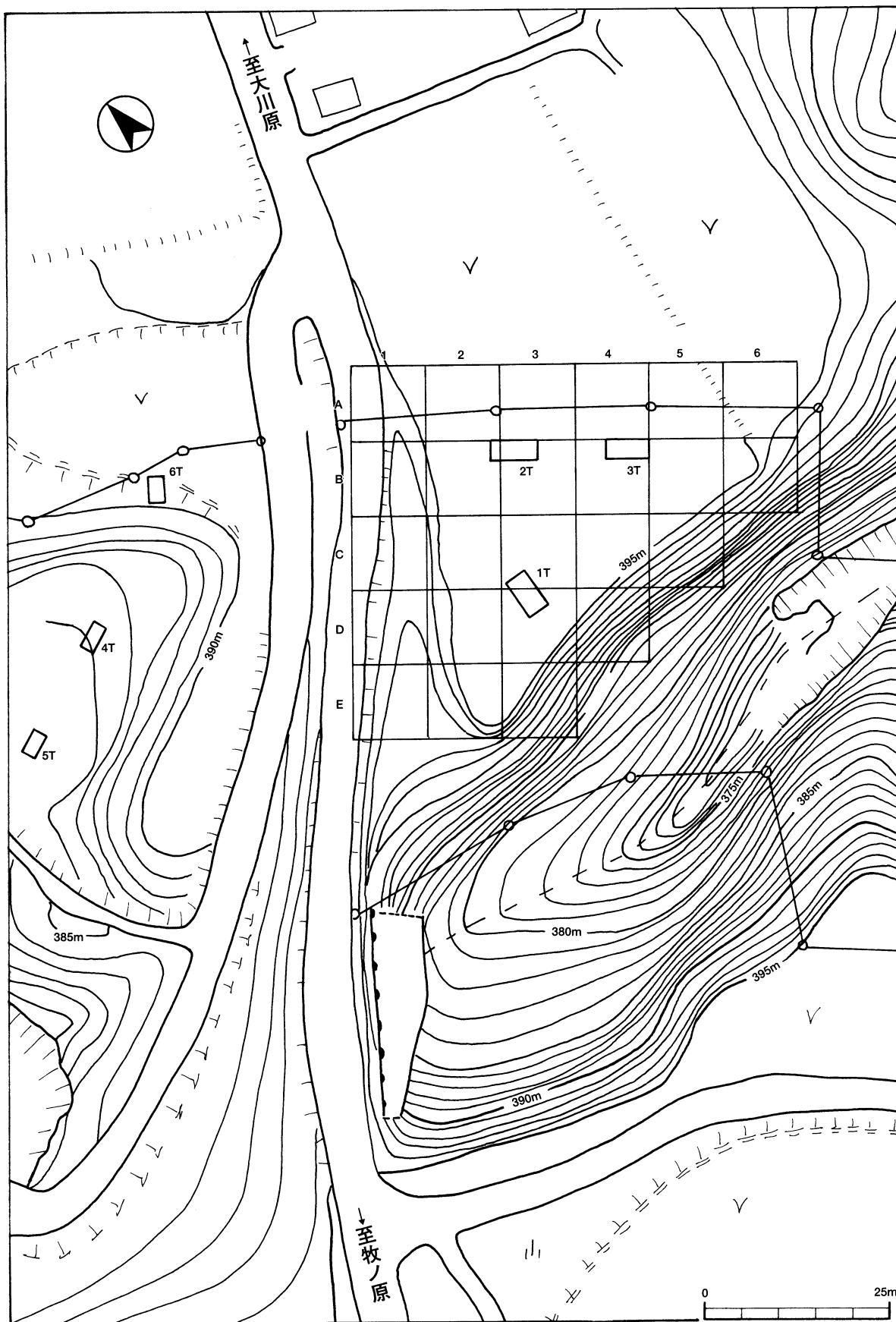


- | | |
|----------|--|
| I 層 | 暗褐色土 現耕作土 |
| II 層 | 黄白色軽石層 文明ボラ 西暦1471年頃の桜島の噴出物 |
| III 層 | 黒色土 |
| IV a 層 | 黄褐色土 縄文時代後期から晩期の遺物包含層 |
| IV b 層 | 黄褐色細粒軽石混土 約4,000年前の御池軽石 |
| V a 層 | 暗褐色土 V b 層の腐植土 |
| V b 層 | 橙色火山灰層 アカホヤ火山灰 約6,300年～6,400年前の鬼界カルデラ噴出物 |
| VI a 層 | 軽石混淡茶褐色土 縄文時代早期の遺物包含層 |
| VI b 層 | 黄褐色軽石層 (P-11) 約7,400年前の桜島起源の噴出物 |
| VII 層 | 明茶褐色土 縄文時代早期の遺物包含層 |
| VIII 層 | 暗黒褐色土 |
| IX 層 | 黄白色火山灰 (P-14) 薩摩火山灰 約11,000年前の桜島起源の噴出物 |
| X 層 | 黒褐色土 VIII層より粘質が強い 縄文時代草創期の遺物包含層 |
| X I 層 | 黄褐色軟質ローム 旧石器石器時代の細石器文化期の遺物包含層 |
| X II 層 | 軽石混暗茶褐色軟質土 旧石器時ナイフ形石器文化期の遺物包含層 |
| X III 層 | 暗褐色硬質土 |
| X IV 層 | 暗褐色硬質土 赤色パミス点在 (P15?) 桜島起源 |
| X V 層 | 暗褐色軟質土 |
| X VI 層 | 濁黄色軟質土 赤色パミス (P17) 点在 (約22,000年前) 桜島起源 |
| X VII 層 | 二次シラス |
| X VIII 層 | シラス 入戸火砕流堆積物 (約24,000年～) |

第2図 土層模式柱状図



第3図 土層断面図



第4図 周辺地形図及びグリッド配置図

第3章 旧石器時代の調査

第1節 調査の概要

旧石器時代の遺構及び遺物は、第XⅦ～XⅠ層にかけて検出されている。第XⅦ層は入戸火砕流堆積物（シラス）の二次堆積物であり、この上部のXⅥ層で18基の礫群が検出された。このXⅥ層を挟んで上下から遺物が出土している。また、XⅢ層より4基の礫群と多数のナイフ形石器等が出土した。礫群の規模はXⅥ層のものに比べ形状・規模ともに劣る。炭化物もXⅥ層の礫群のように分類できるまでには至らなかった。遺物は6つのブロックから、ナイフ形石器や三稜尖頭器等が出土した。本遺跡の旧石器層の中で、最も多く遺物を含む文化層である。

第2節 遺構

1 XⅥ層礫群

XⅥ層で礫群18基を検出した。XⅥ層は東側に緩やかに傾斜する。その微高地に沿って礫群が検出された。礫群に伴い炭化物も多量に検出され、ナイフ形石器文化期の礫群の用途を解明するうえで、貴重な資料となりうるものである。

礫群に伴い多くの炭化物が検出されているが、炭化物の大きさや密度の状況を4パターンに分類し、挿図の中でも濃淡により炭化物の集中度を表現した。

礫群は個々で見ると26基から成るが、炭化物と密接な関係を持っており、その関連でセットとしてとらえたものもあり、最終的には18基のグルーピングで礫群をとらえることにした。

XⅥ層礫群の炭化物パターン

Aパターン	7～8mmの炭化物が密集して分布し、黒ずんだ色調を呈する範囲
Bパターン	7～10mm以上の炭化物が100cm ² に数十点分布する範囲
Cパターン	5～10mmの炭化物が100cm ² に十数点以上分布し、薄黒い色調を呈する範囲
Dパターン	1～2mmの微細な炭化物が分布する範囲

1号礫群（第5図）（長軸46cm，短軸24cm）

D-3区で検出された。礫は比較的まとまっているが、掘り込みは確認できなかった。炭化物状況については、実測漏れのため詳細は不明。

2号礫群（第5図）（長軸150cm，短軸124cm）

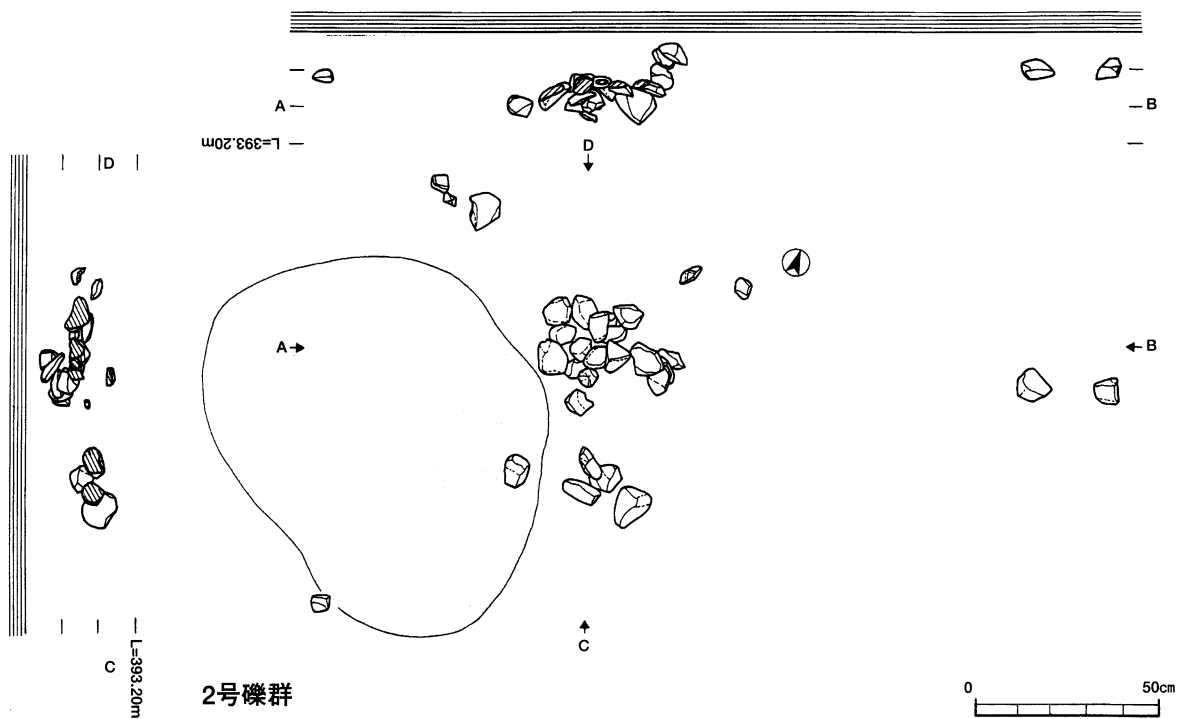
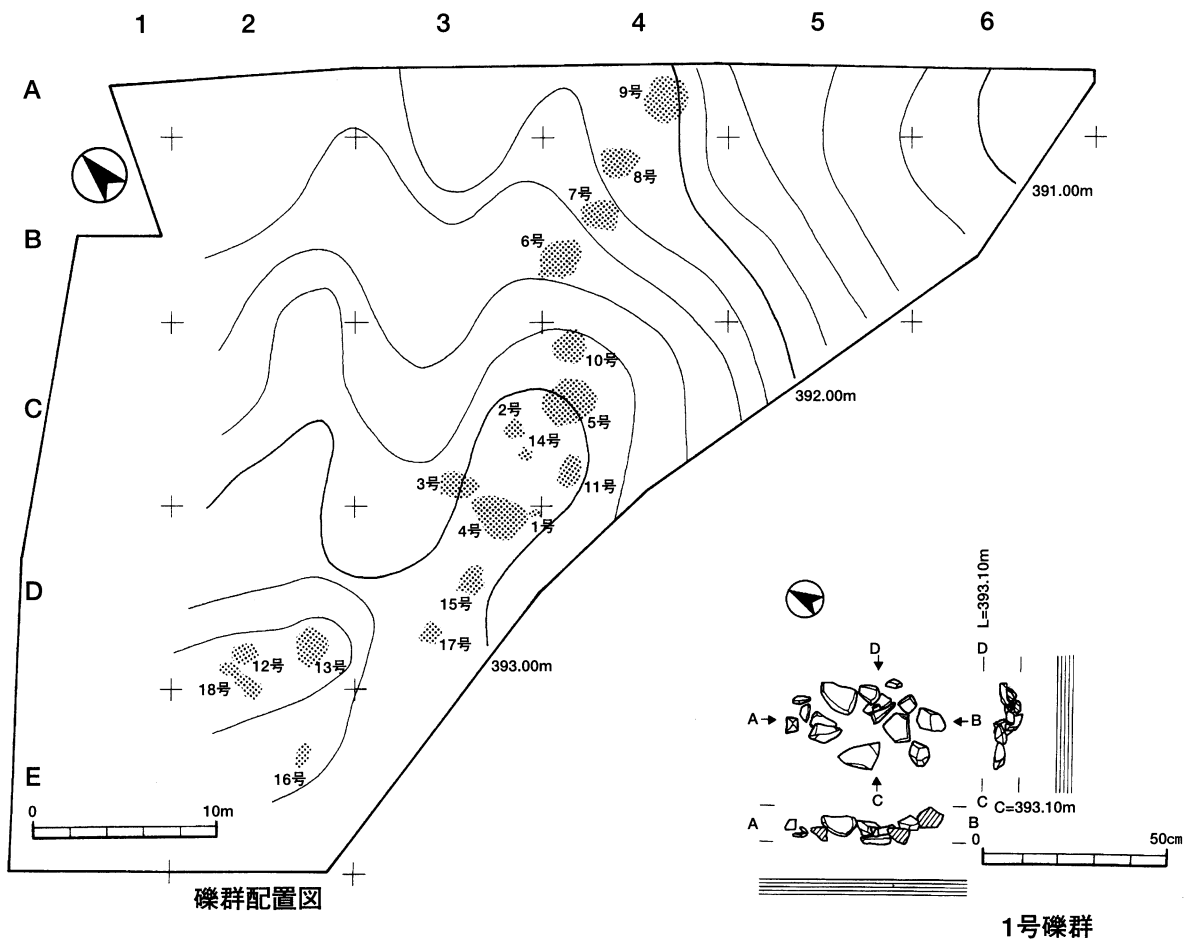
C-3区で検出され、掘り込みが確認できる。炭化物についてはCパターンで礫群の東側に広がる。掘り込みは径36cm，深さ12cm中に礫16個を検出。

3号礫群（第6図）（長軸158cm，短軸228cm）

C-3区で検出され、ア号に掘り込みが確認できる。炭化物については掘り込み部分と周辺の礫郡の中間地を中心に、Bパターンで円形に広がっている。その外部にはCパターンの炭化物が礫群全体を取り囲むように広がる。掘り込み径約36cm，深さ10cm中に礫19個を検出。

4号礫群（第7図）（長軸316cm，短軸236cm）

D-3区で検出され、ア号，イ号ともに掘り込みが確認できる。炭化物についてはア号の礫下に炭化物集中部分のAパターンがあり，中間部にBパターンで円形に，礫群を取り囲む形でCパタ



第5図 X VI層礫群配置図及び1号・2号礫群

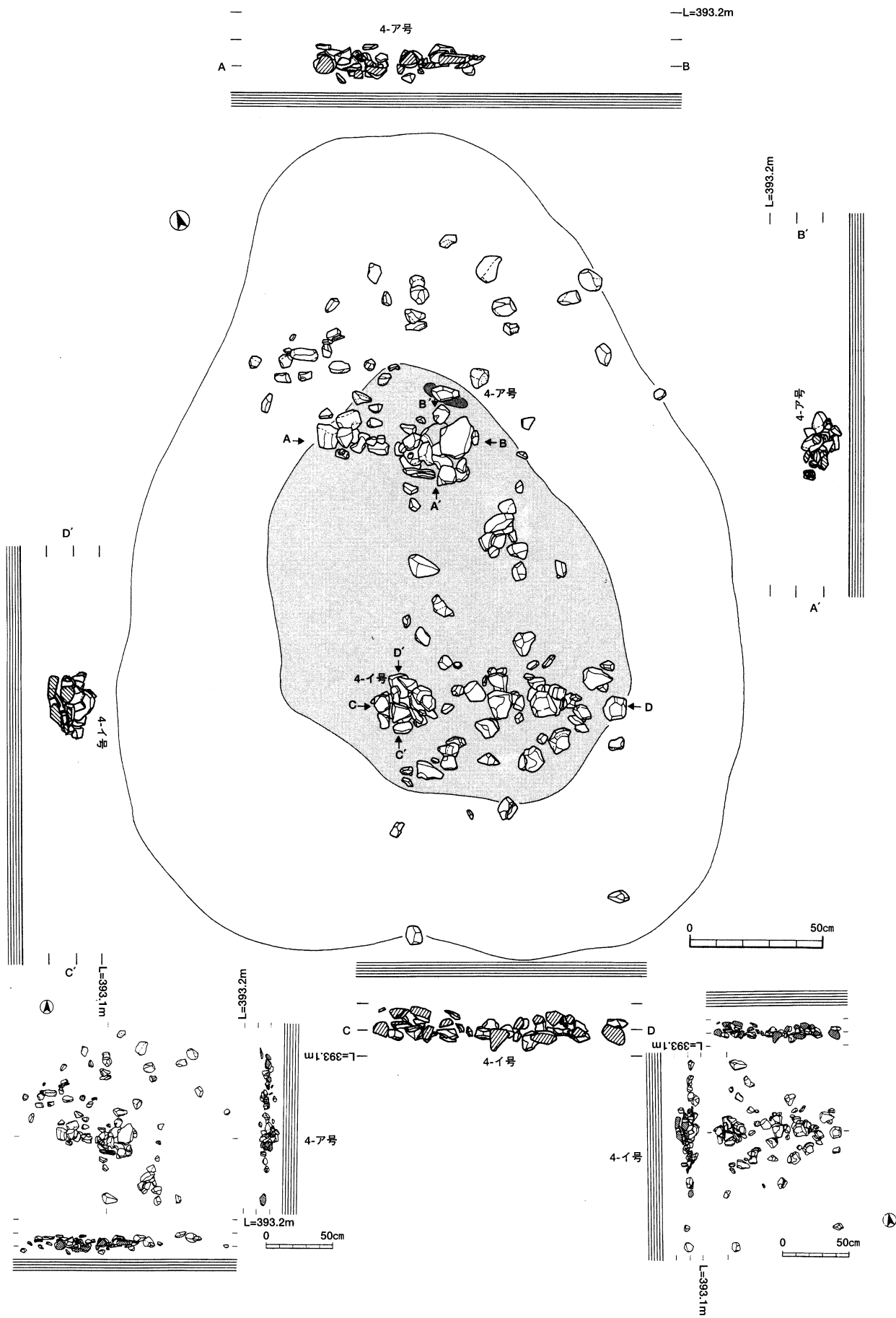


第6図 X VI層3号礫群

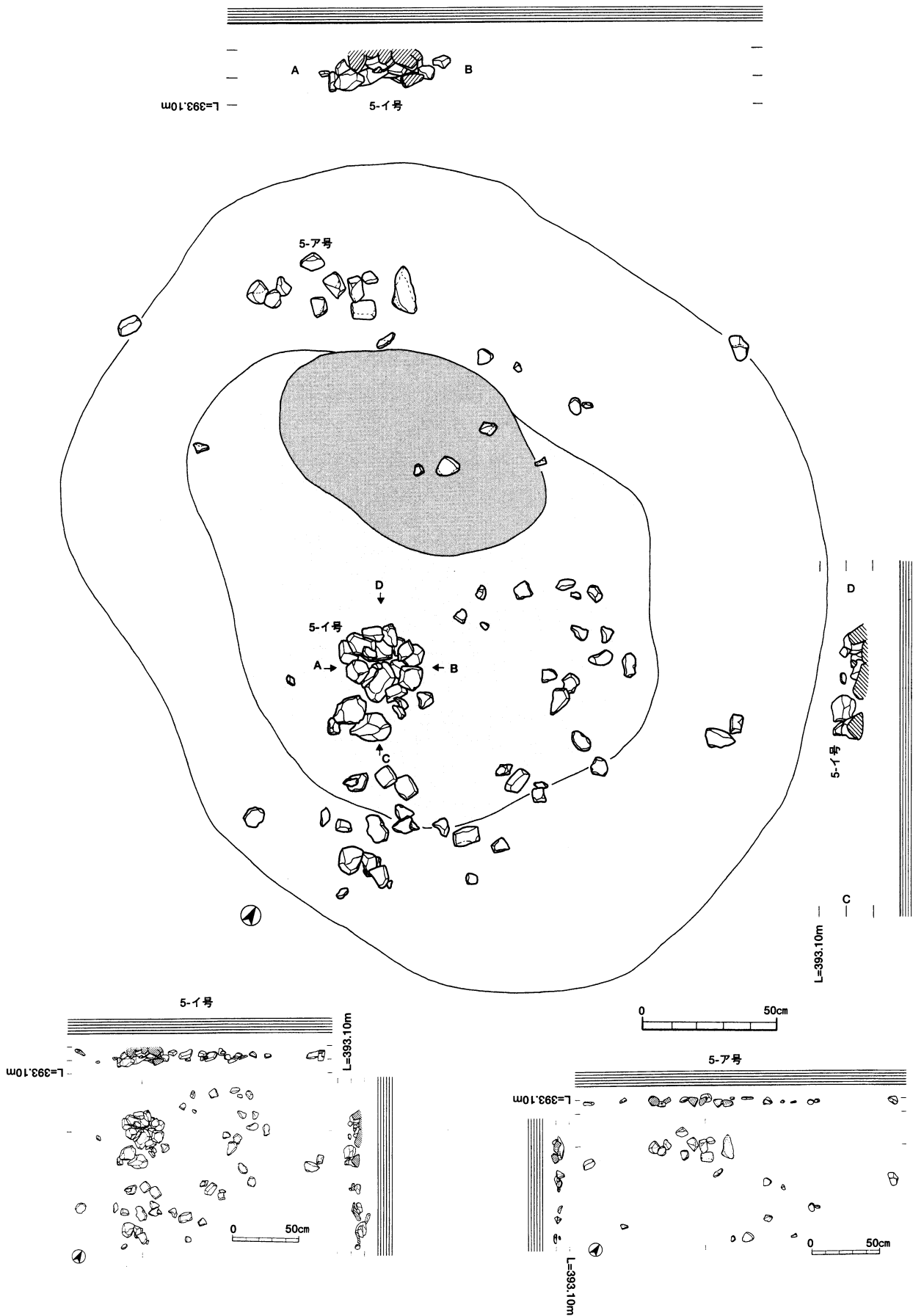
ーンが広がる。ア号は掘り込み径32cm、深さ13cm中に礫14個、イ号は掘り込み径約27cm、深さ11cm中に礫15個を検出。

5号礫群 (第8図) (長軸320cm, 短軸256cm)

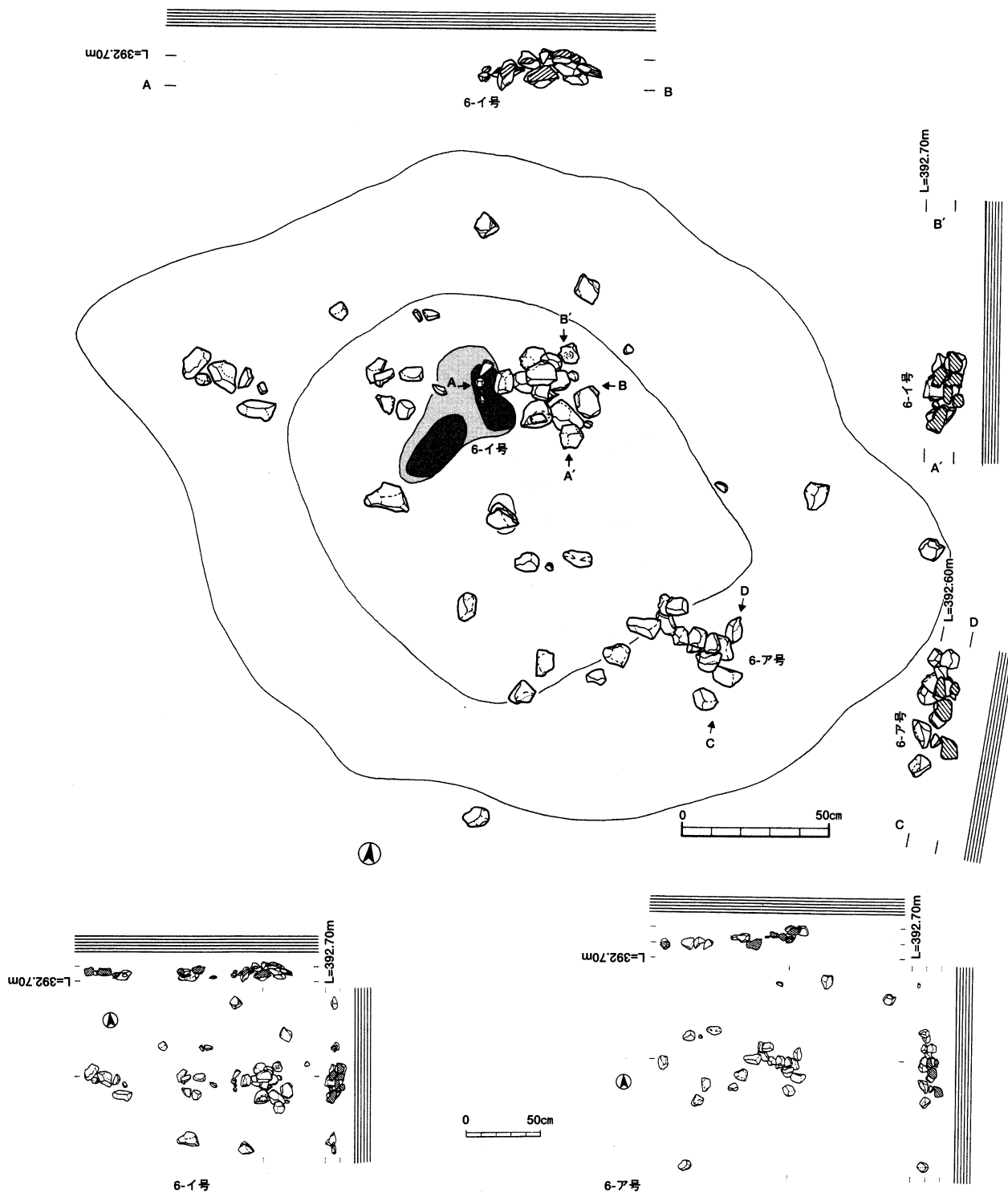
C-3・4区で検出され、イ号に掘り込みが確認できる。炭化物についてはア号よりにBパターンで、これとイ号を取り囲むようにCパターンが広がり、さらに全体を取り囲む形でDパターンが広がる。イ号は掘り込み径約38cm、深さ12cm中に礫16個を検出。



第7図 XVI層4号礫群



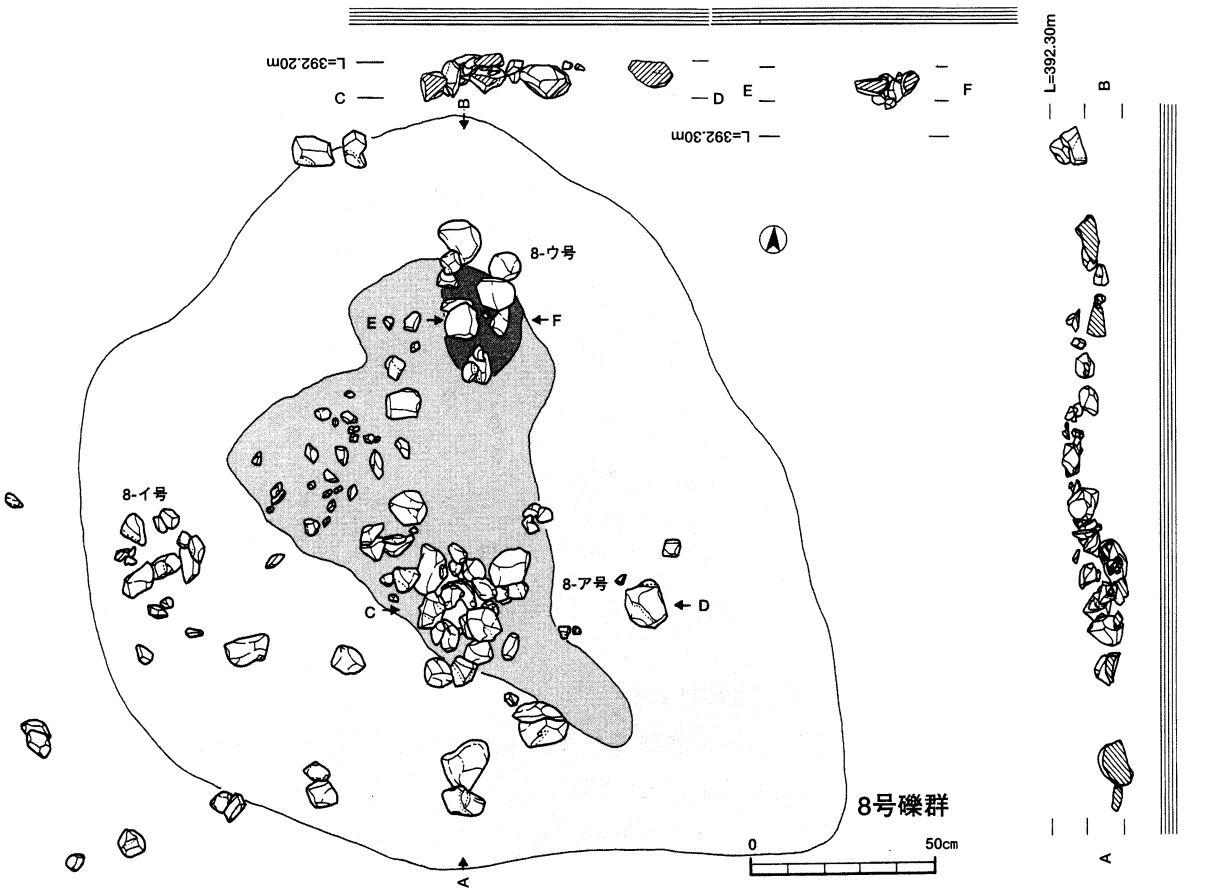
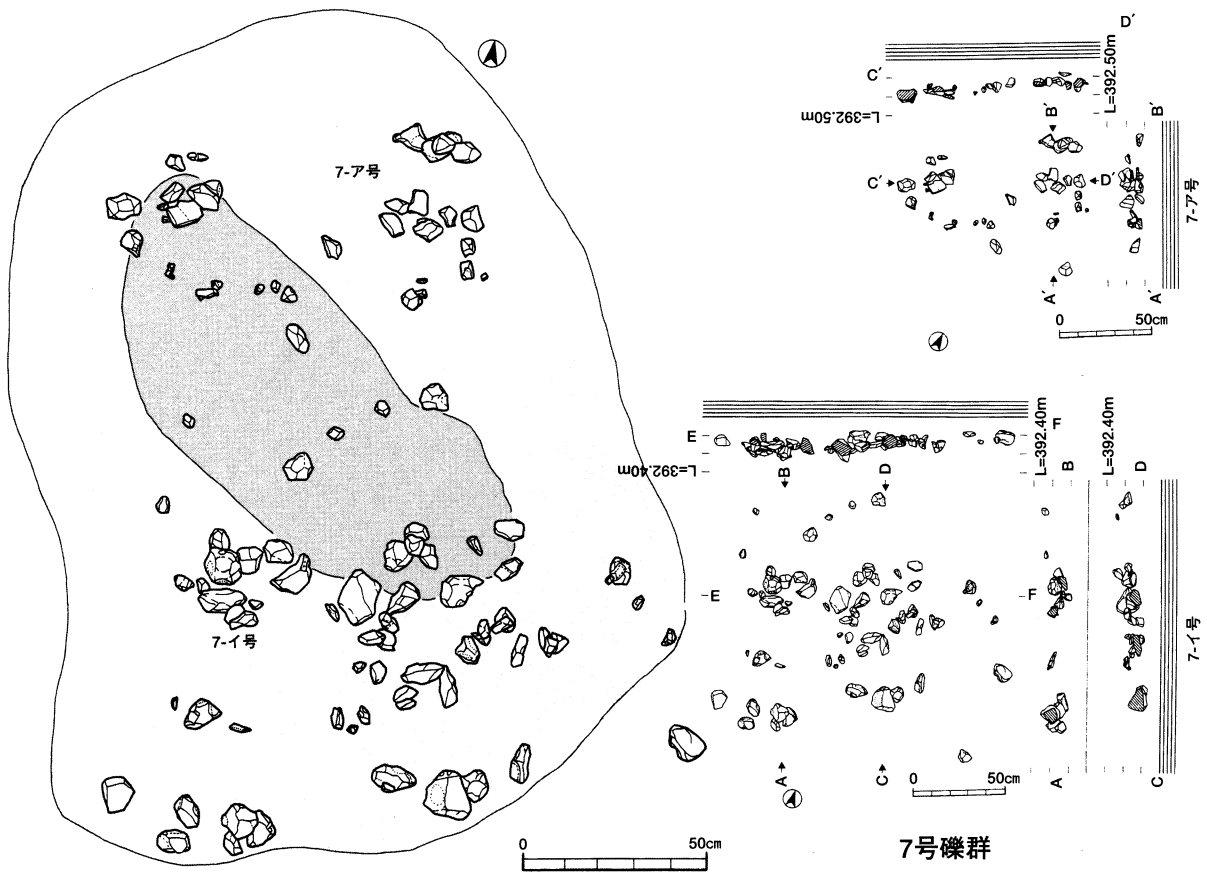
第8図 XVI層5号礫群



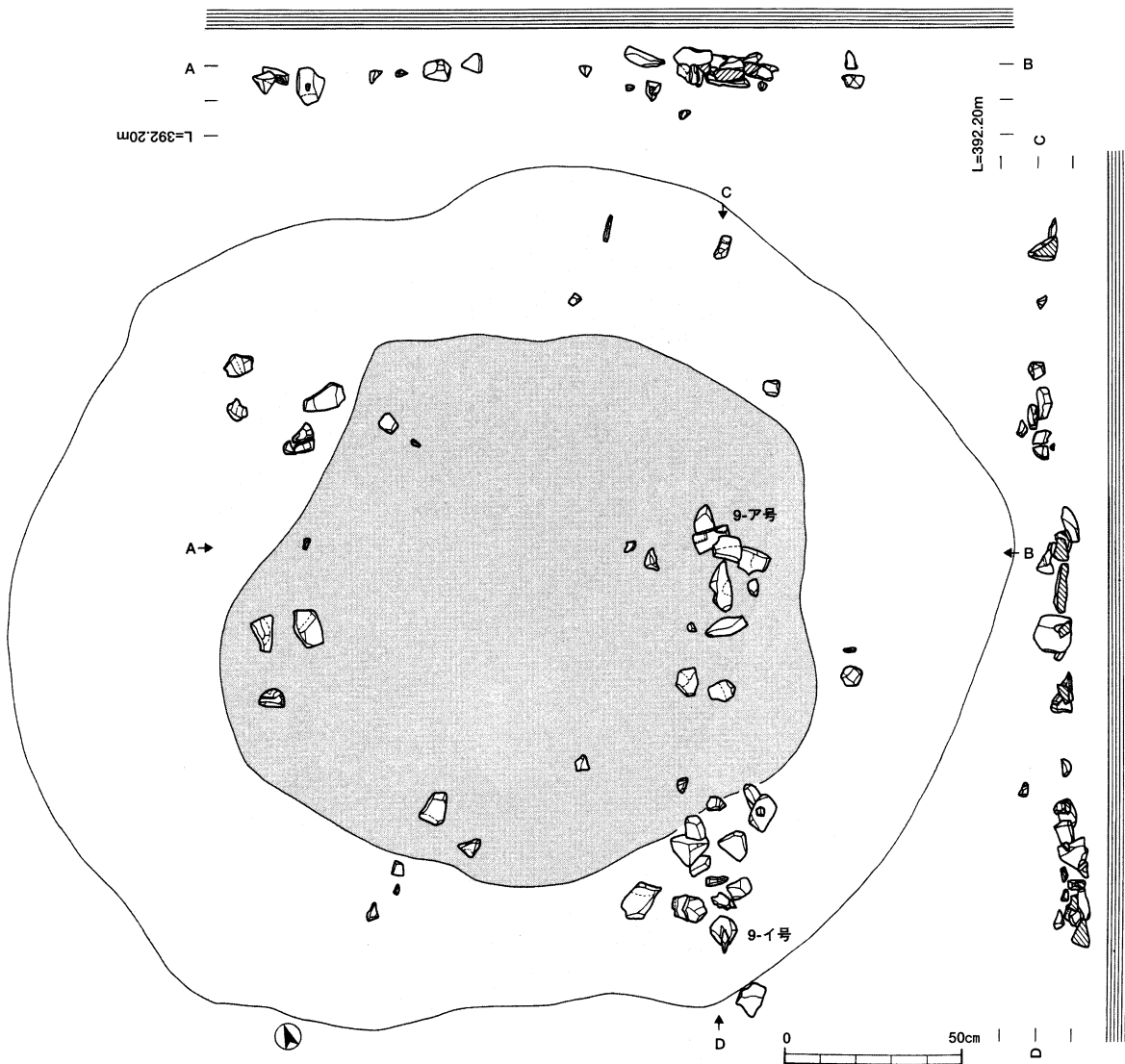
第9図 XVI層6号礫群

6号礫群（第9図）（長軸304cm，短軸212cm）

B-4区で検出され、イ号に掘り込みも確認できる。炭化物はイ号周辺に7～8mm程度の炭化物密集部分のAパターンがあり、土も黒く変色している。その周辺にBパターン、イ号とア号の一部を取り囲むようにCパターン、さらに全体を取り囲む形でDパターンが広がる。イ号は掘り込み径約34cm、深さ10cm中に礫15個を検出。



第10図 X VI層 7号・8号礫群



第11図 XVI層9号礫群

7号礫群 (第10図) (長軸220cm, 短軸180cm)

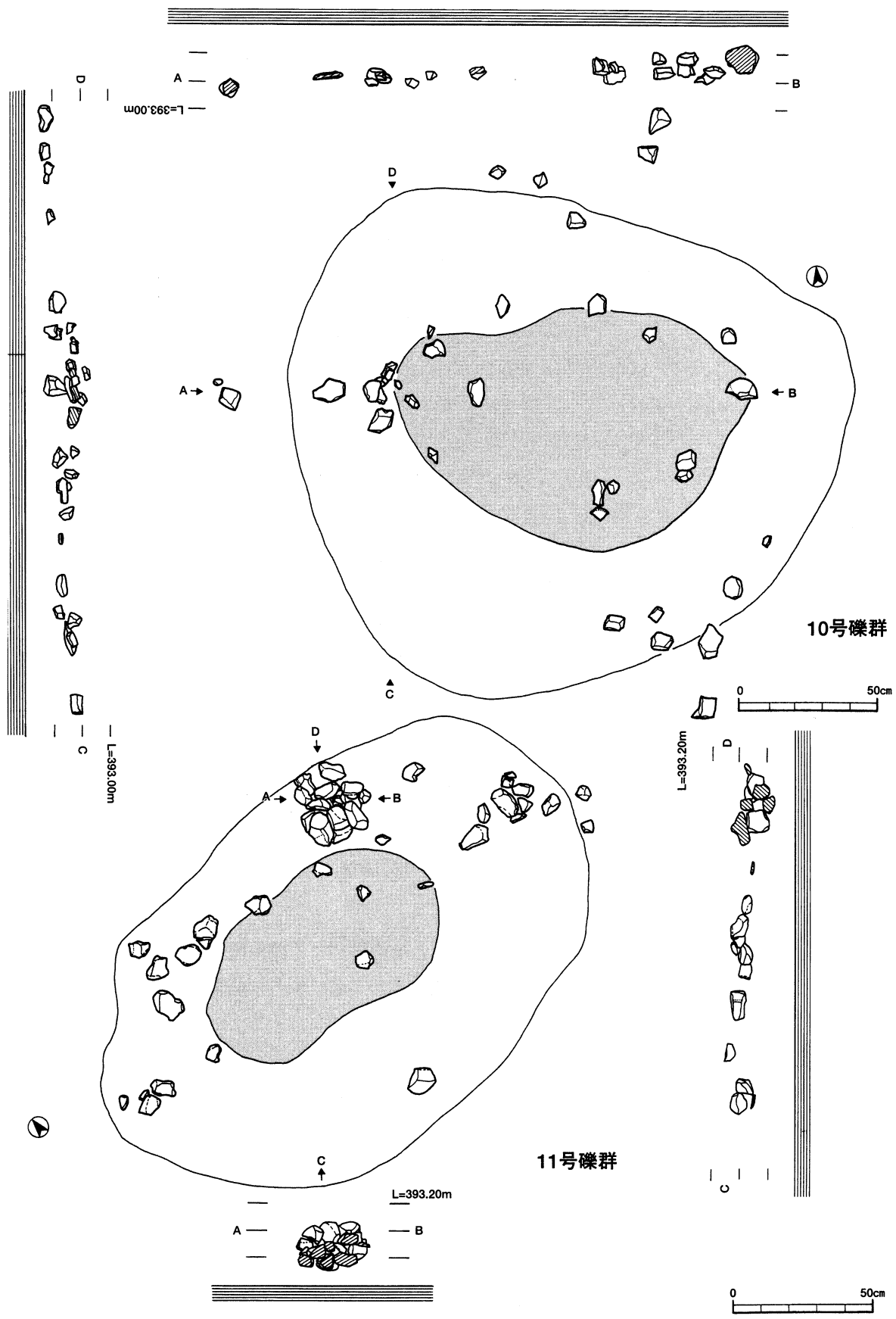
B-4区で検出され、イ号に掘り込みも確認でき、その周辺にも礫が散在する。炭化物についてはア号とイ号の中間部にBパターン、礫群を取り囲むようにCパターンが広がる。イ号の掘り込み径約35cm、深さ10cm中に礫11個を検出。

8号礫群 (第10図) (長軸236cm)

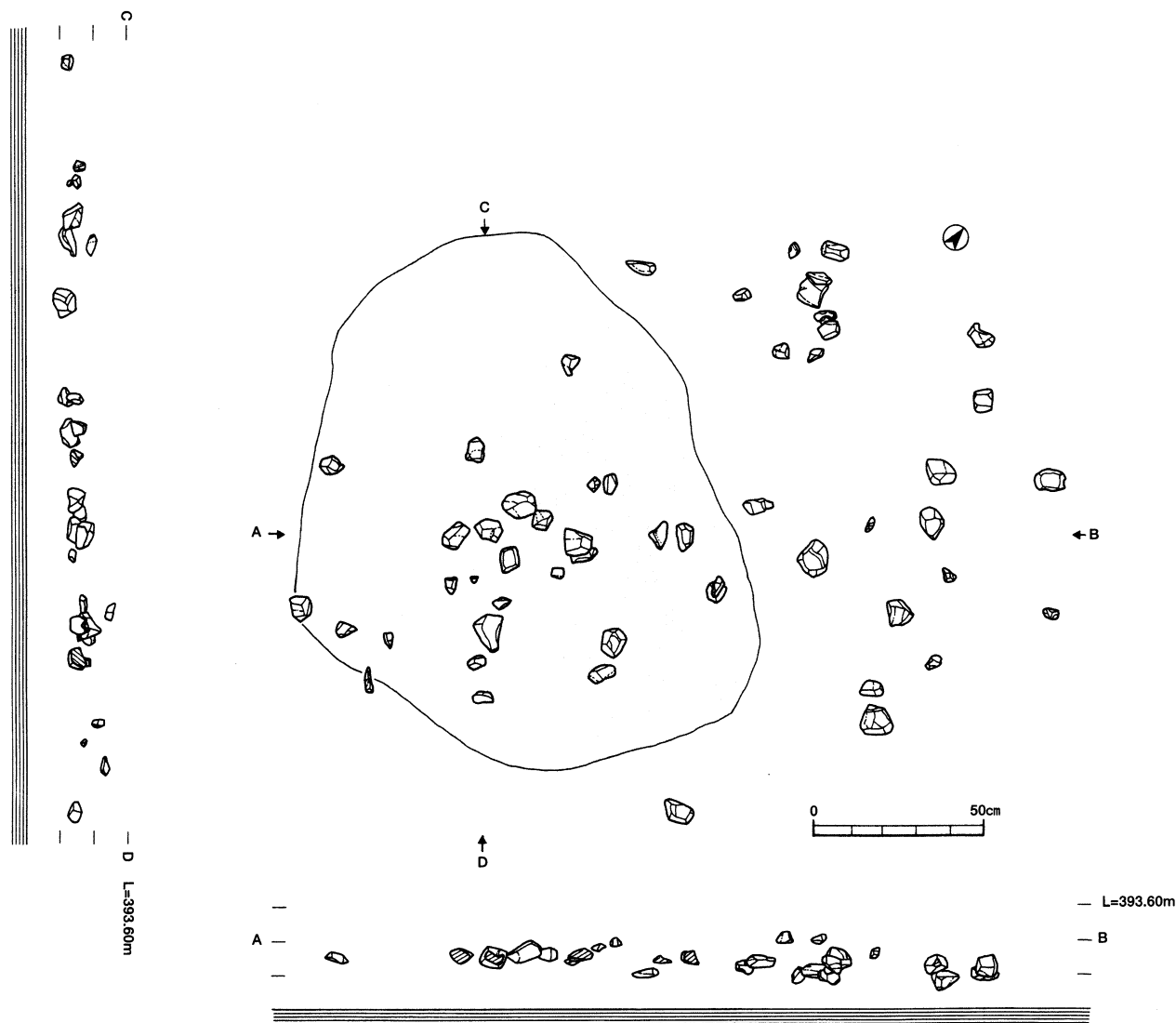
B-4区で検出された。ア号に掘り込みも確認でき、その周辺にも礫が散在する。炭化物についてはC号付近にAパターンの炭化物密集部分があり、土も黒く変色している。その外側にア号を取り囲む形でBパターン、さらに全体を取り囲む形でCパターンが広がる。ア号の掘り込み約40cm、深さ12cm中に23個の礫を検出。

9号礫群 (第11図) (長軸284cm, 短軸240cm)

A-4区の遺跡東側で検出された。礫群の中では、なだらかに東側へ傾斜していく一番低い位置にある。掘り込みは確認できなかった。炭化物については礫群の北側を中心にBパターン、礫群を



第12図 XVI層10号・11号礫群



第13図 X VI層12号礫群

取り囲む形でCパターンが広がる。

10号礫群 (第12図) (長軸200cm, 短軸180cm)

C-4区で検出された。礫は散在した状態で掘り込みも確認できなかった。炭化物については、散在している礫群の中央部にBパターン, さらに同心円上に礫群を取り囲んでCパターンが広がる。

11号礫群 (第12図) (長軸200cm, 短軸128cm)

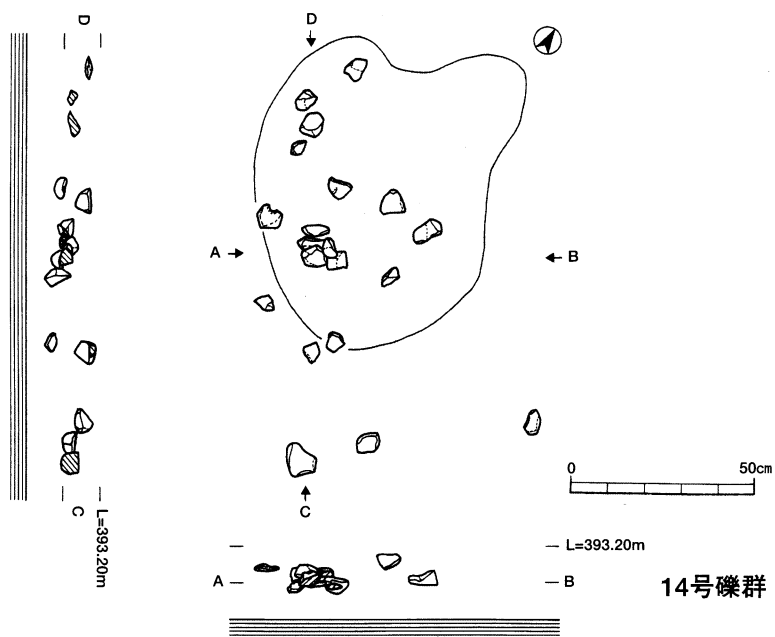
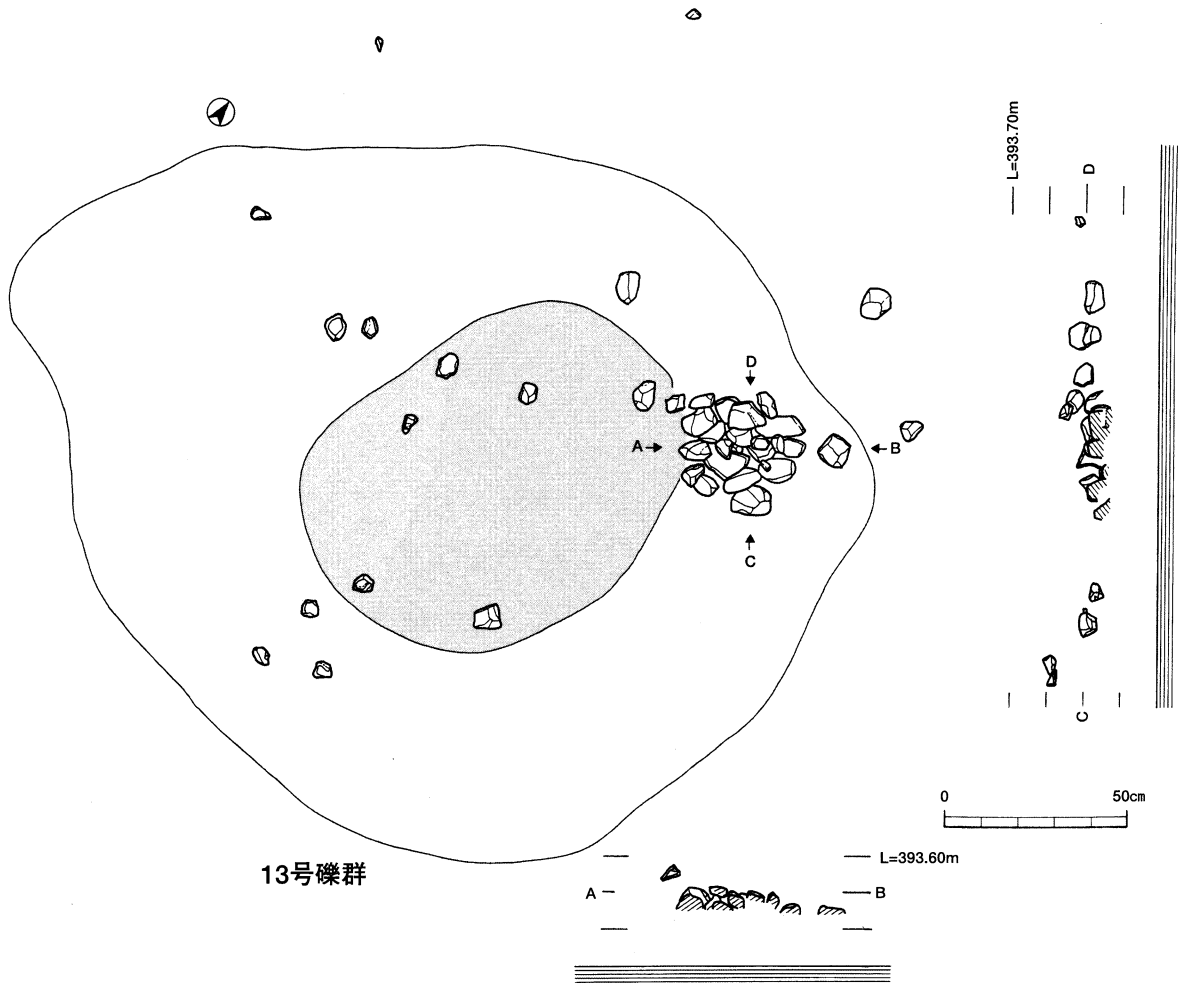
C-4区で検出された。掘り込みも確認でき, その周辺にも礫が散在する。炭化物については礫群南側にBパターン, さらに同心円上に礫群を取り囲んでCパターンが広がる。掘り込み径約26cm, 深さ10cm中に17個の礫を検出。

12号礫群 (第13図) (長軸160cm, 短軸124cm)

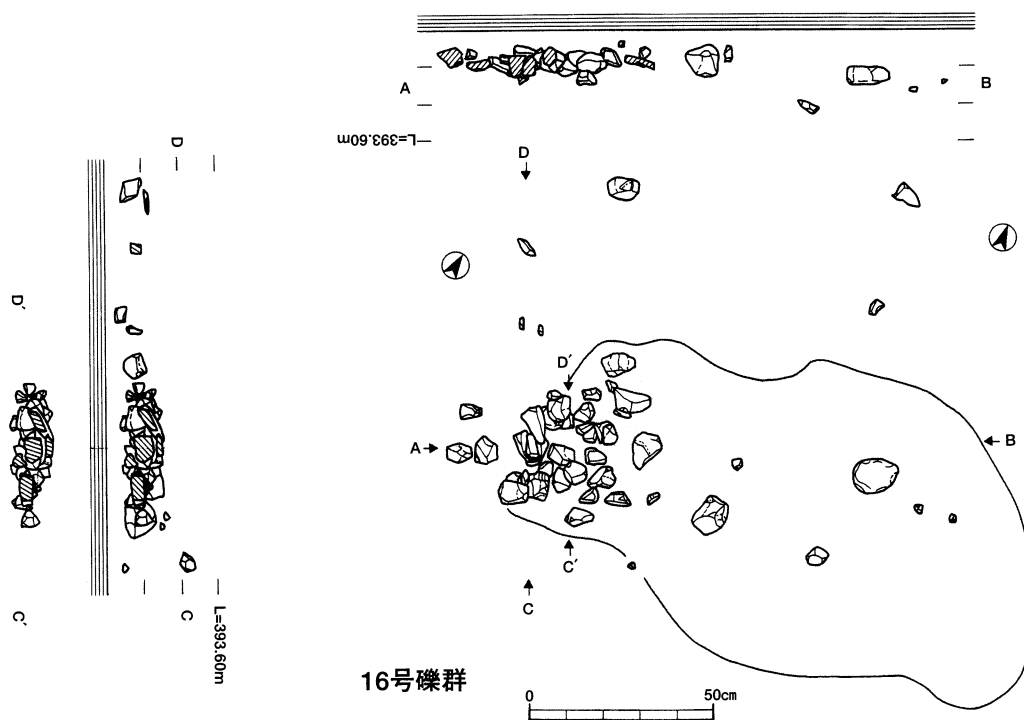
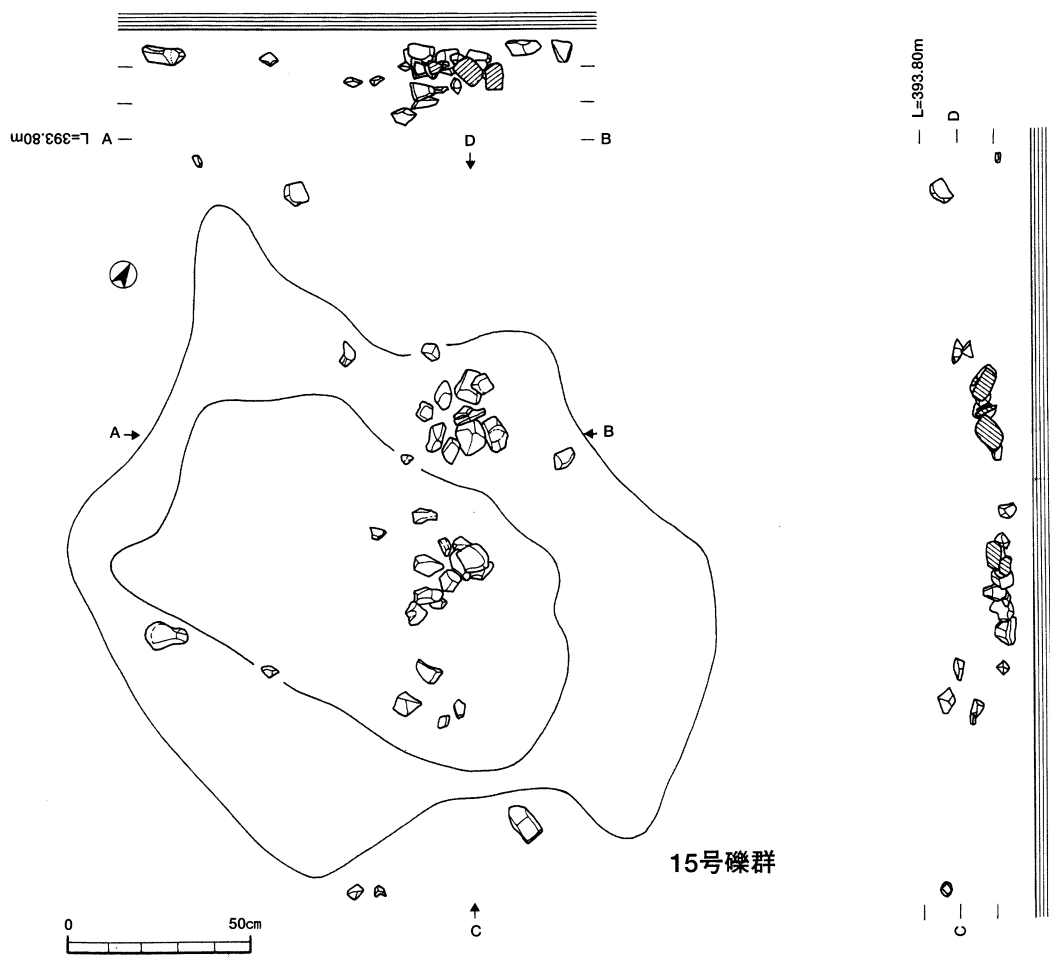
D-2区で検出された。礫は散在した状態で掘り込みも確認できなかった。炭化物については礫群の南西よりにCパターンが広がる。

13号礫群 (第14図) (長軸232cm, 短軸188cm)

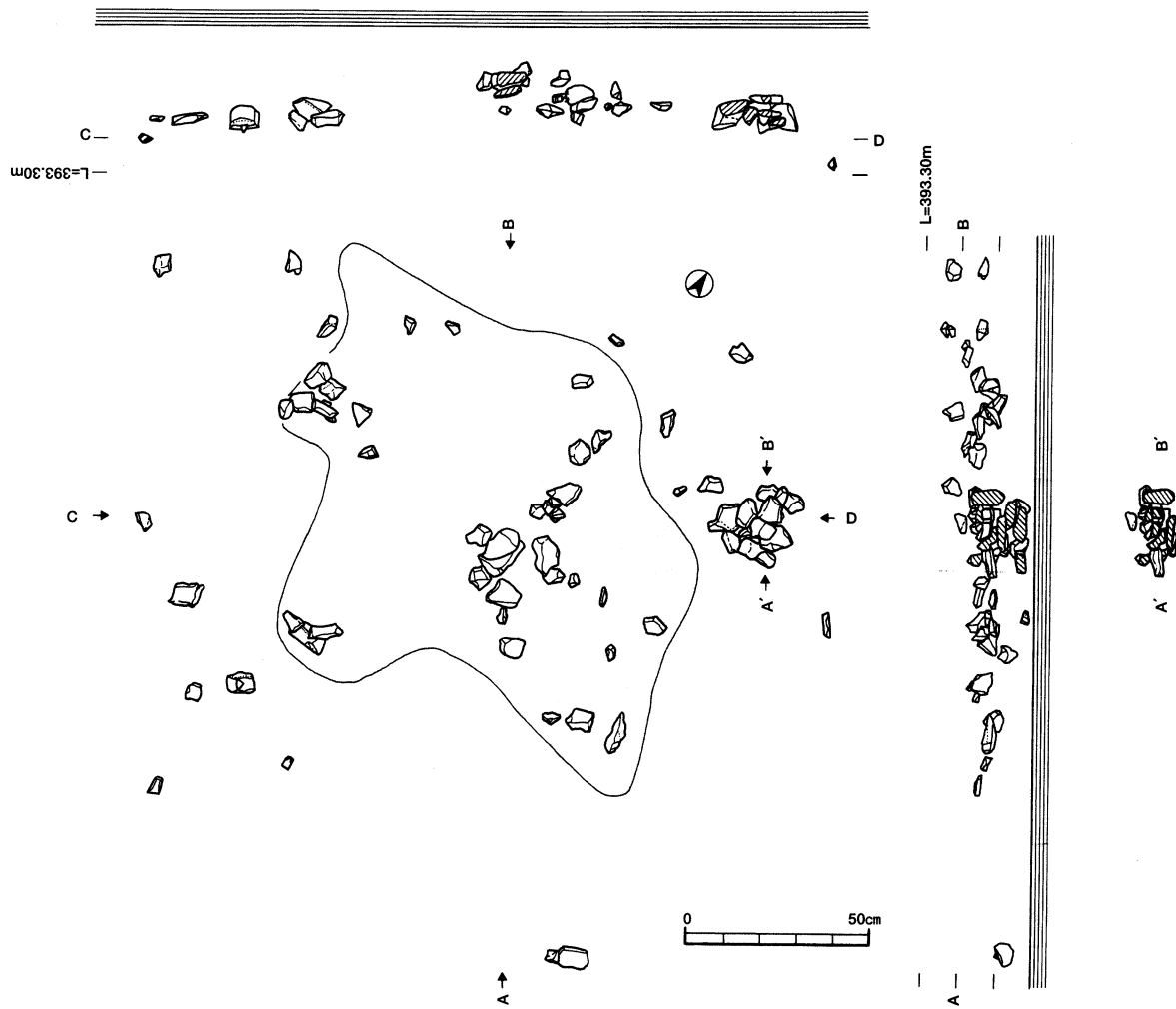
D-2区で検出された。掘り込みも確認でき, その周辺にも礫が散在する。炭化物については,



第14図 X VI層13号・14号礫群



第15図 XⅥ層15号・16号礫群



第16図 X VI層17号礫群

南西方向にBパターンが広がり、礫群を取り囲むようにCパターンが広がる。掘り込み径約34cm、深さ10cm + α の中に22個の礫を検出。

14号礫群 (第14図) (長軸92cm, 短軸76cm)

C-3区で検出された。礫はやや集中するが、掘り込みは確認できなかった。炭化物については、礫群を取り囲む形でCパターンが広がる。

15号礫群 (第15図) (長軸204cm, 短軸144cm)

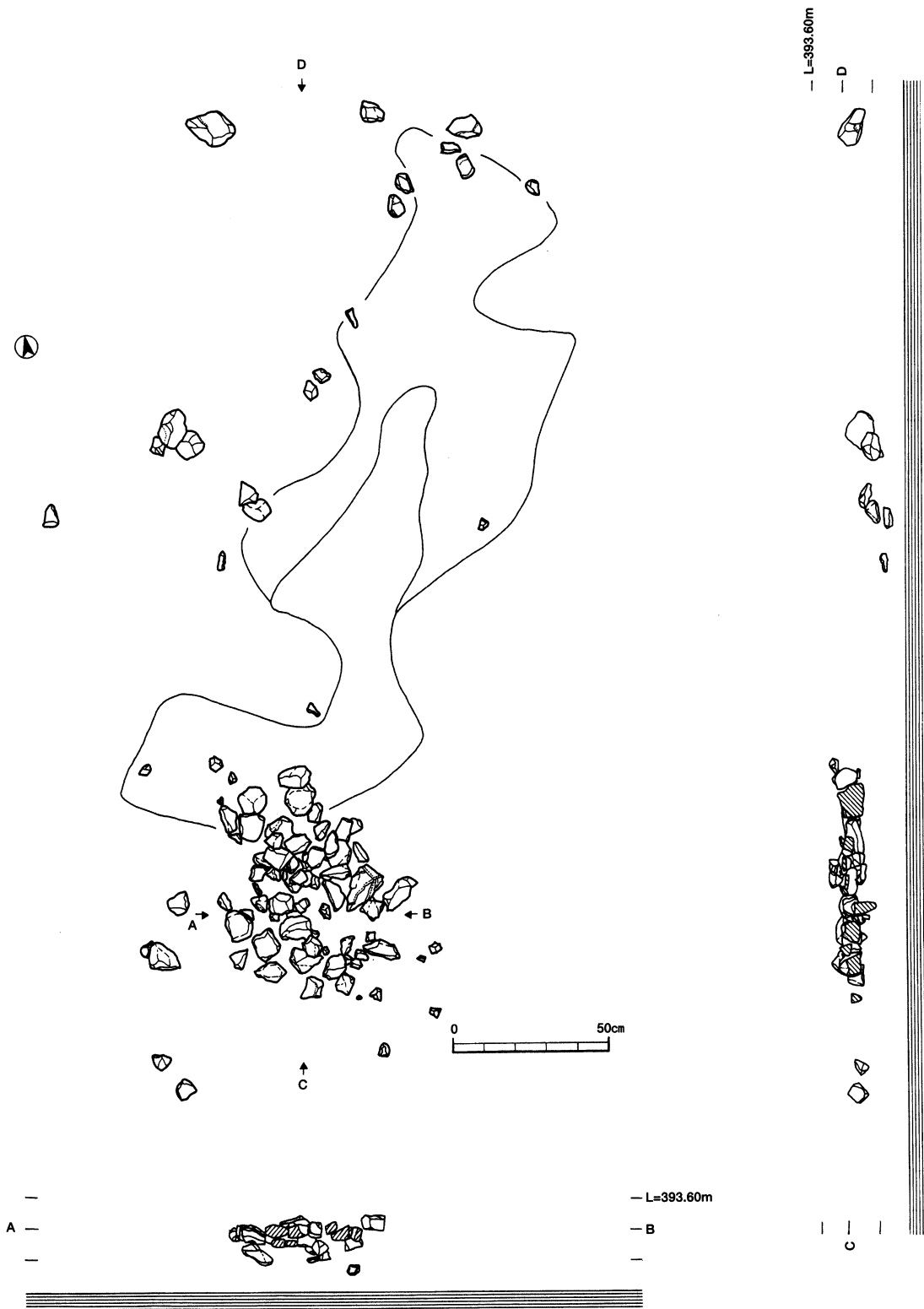
D-3区で検出された。礫は集中するが、掘り込みは確認できなかった。炭化物については、礫群集中箇所の南側よりにCパターンが広がり、その外側にDパターンが広がる。

16号礫群 (第15図) (長軸168cm, 短軸84cm)

E-2区で検出された。礫は集中するが、掘り込みは確認できなかった。炭化物については、礫群の東よりにCパターンで広がる。

17号礫群 (第16図) (長軸168cm, 短軸152cm)

D-3区で検出された。礫は集中するが、掘り込みは確認できなかった。炭化物については、礫集中部分の南西方向へCパターンで広がる。



第17図 X VI層18号礫群

18号礫群（第17図）（長軸288cm，短軸86cm）

D・E-2区で検出された。礫は集中するが，掘り込みは確認できなかった。炭化物については，礫集中部分の北側から散礫方向へCパターンで広がり，その先へDパターンが広がる。

表1 礫群の分類

I 類	炭化物の分布範囲の中に礫が散在するもの
II-A類	炭化物の分布範囲の中に小礫群は集中するが、掘り込み等の痕跡を認めないもの
II-B類	炭化物の分布範囲の中に小礫群が集中し、その状況から掘り込みの存在を予測できるもの

表2 炭化物の分類

Aパターン	7～8mm程度の炭化物が密集して分布し、黒ずんだ色調を呈する範囲
Bパターン	7～10mm以上の炭化物が100cm ² に数十点分布する範囲
Cパターン	5～10mmの炭化物が100cm ² に十数点以上分布し、薄黒い色調を呈する範囲
Dパターン	1～2mmの微細な炭化物が分布する範囲

表3 小礫群の分類

a	掘り込み等の痕跡を認めないもの
b	掘り込みの存在が予測されるもの

表4 XⅥ層礫群の分類

挿図	礫群番号	類 型	炭 化 物 分 類	炭 化 物 範 囲 長軸×短軸 (cm)	小 礫 群					aの礫数		
					番 号	掘 り 込 み						
						細 分	径 (cm)	深 さ (cm)	礫 数			
5	1	II-A類	詳細不明	46×24	ア	a	—	—	—	15		
	2	II-B類	C	150×124	ア	b	36	12	16	—		
6	3	II-B類	B・C	228×158	ア	b	36	10	19	—		
					イ	a	—	—	—	27		
7	4	II-B類	B・C	316×236	ア	b	32	13	14	—		
					イ	b	27	11	15	—		
8	5	II-B類	B・C・D	320×256	ア	a	—	—	—	11		
					イ	b	38	12	16	—		
9	6	II-B類	A・B・C・D	304×212	ア	a	—	—	—	15		
					イ	b	34	10	15	—		
10	7	II-B類	B・C	220×180	ア	a	—	—	—	18		
					イ	b	35	10	11	—		
	8	II-B類	A・B・C	236×192	ア	b	40	12	23	—		
					イ	a	—	—	—	11		
ウ	a	—	—	—	12							
11	9	II-A類	B・C	284×240	ア	a	—	—	—	10		
					イ	a	—	—	—	16		
12	10	I類	B・C	200×180	—					—		
	11	II-B類	B・C	200×128	ア	b	26	10	17	—		
13	12	I類	C	160×124	—					—		
14	13	II-B類	B・C	232×188	ア	b	34	10+ α	22	—		
	14	II-A類	C	92×76	ア	a	—	—	—	5		
15	15	II-A類	C・D	204×144	ア	a	—	—	—	20		
	16	II-A類	C	168×84	ア	a	—	—	—	33		
16	17	II-A類	C	168×152	ア	a	—	—	—	12		
17	18	II-A類	C・D	288×86	ア	a	—	—	—	59		
平均値				229.9×167.8					33.8	11.0	16.8	18.9

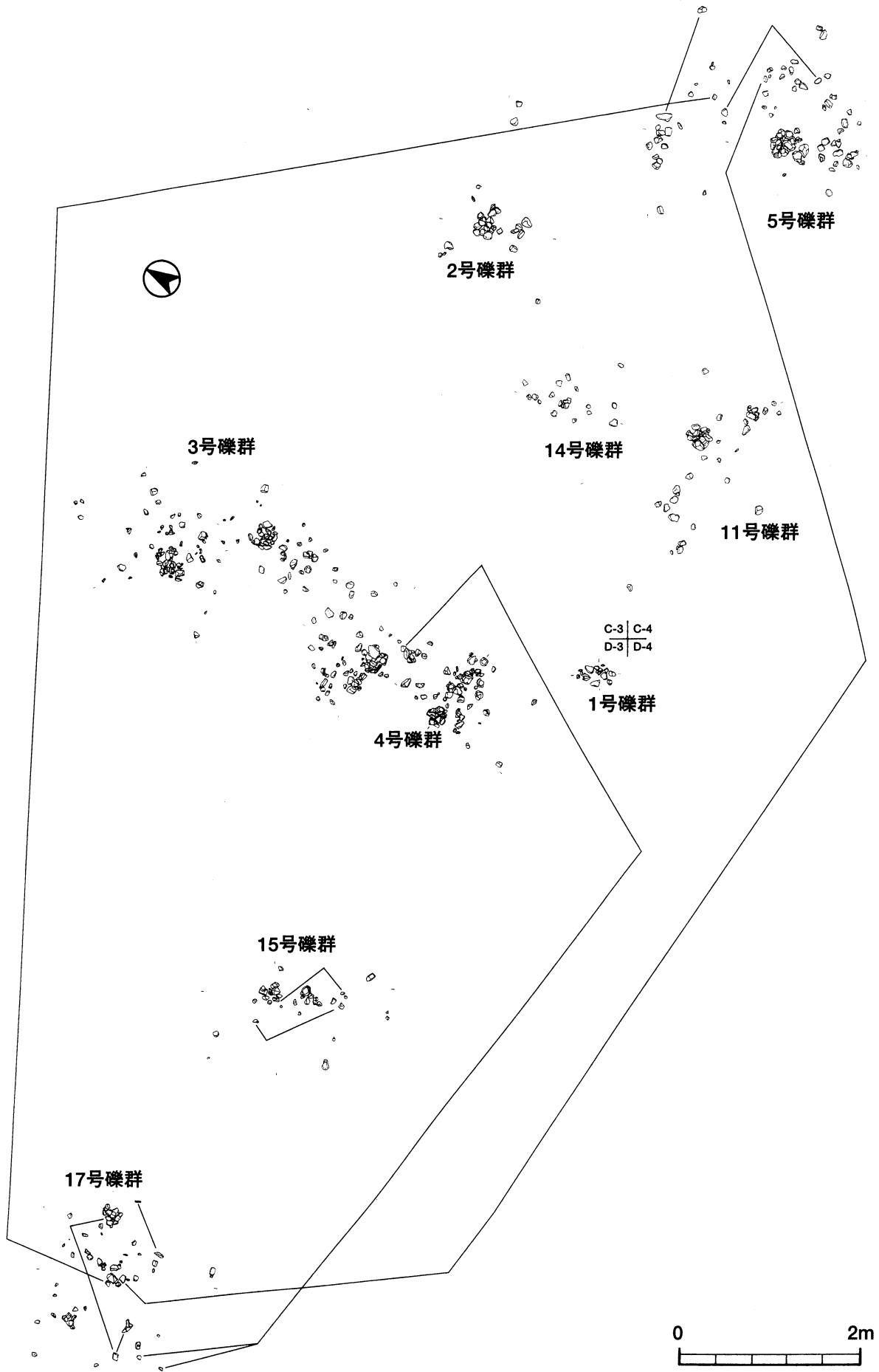
*1号・14号礫群は平均値評漸から除く

表5 XⅢ層礫群の分類

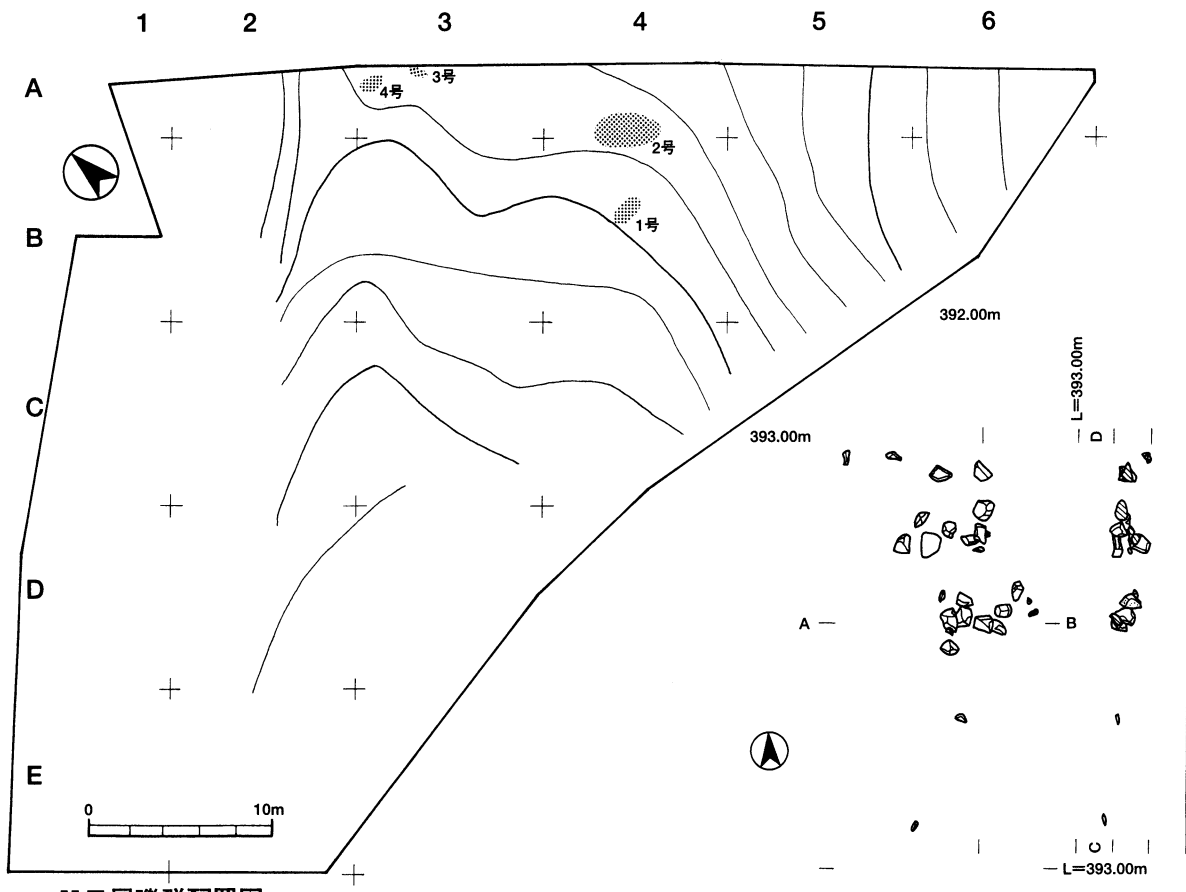
挿図	礫群番号	類 型	炭 化 物	炭 化 物 範 囲	小礫群 番 号
			分 類	長軸×短軸 (cm)	
20	1	I類	—	80×55	—
	2	I類	D	90×60	—
21	3	II-A類	D	60×45	ア号
	4	I類	D	94×67	—



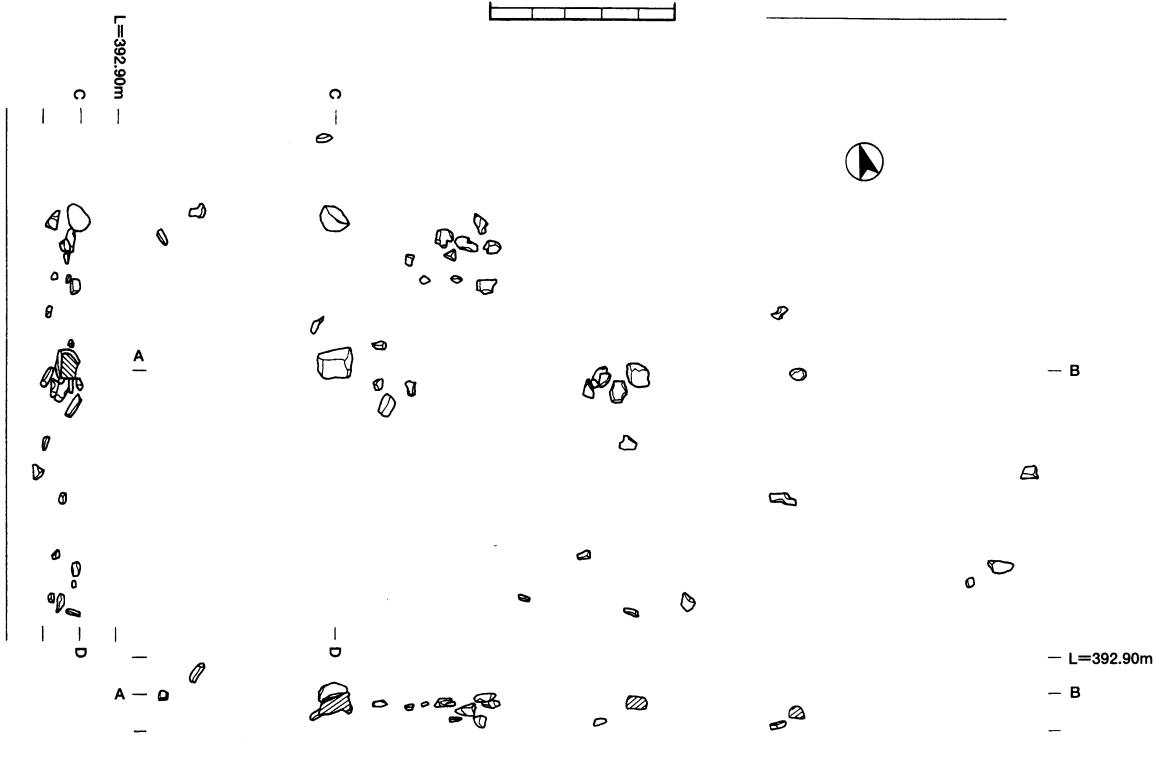
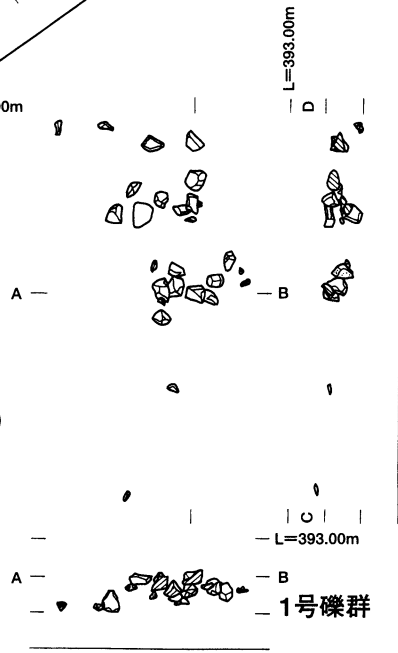
第18图 X VI层磔群配置图



第19図 X VI層礫群間接合図

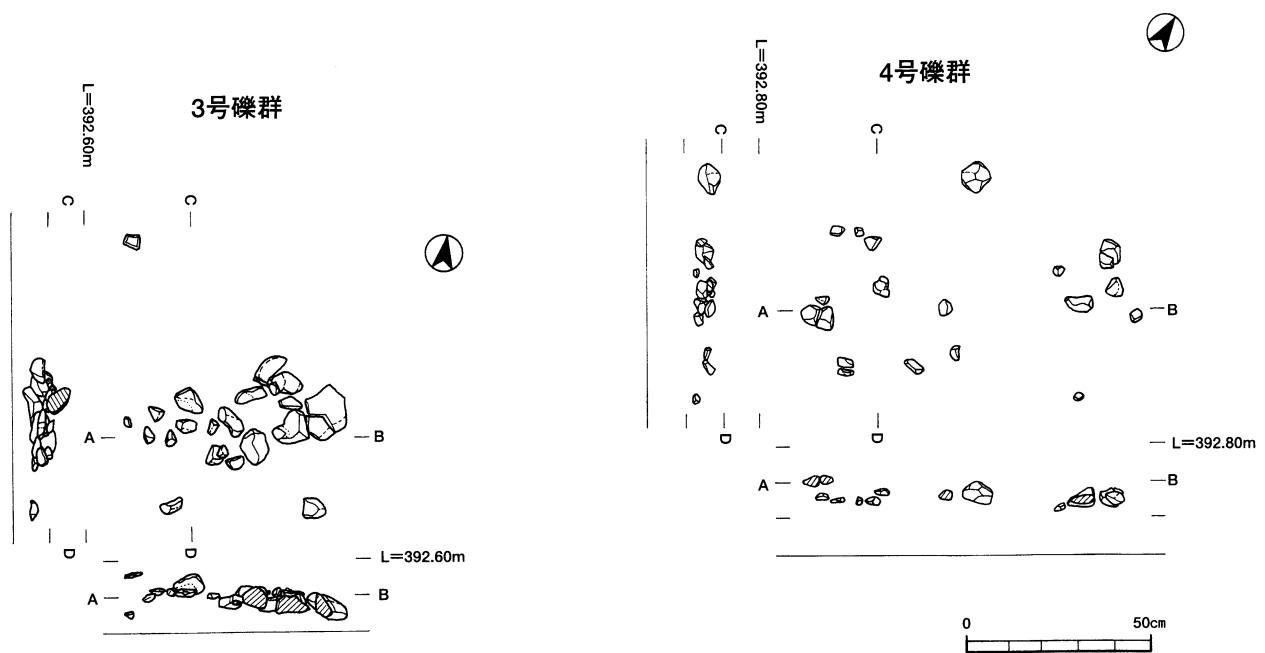


X III層礫群配置図



2号礫群

第20図 X III層礫群配置図及び1号・2号礫群



第21図 XⅢ層3号・4号礫群

2 XⅢ層礫群

XⅢ層の礫群は、遺跡東よりに2基ずつがペアになるような形で、計4基検出された。1号と2号は、約4m位の距離があるが、3号と4号は2m位しか離れていない。

XⅢ層の礫群は、XⅥ層に比べ小規模で炭化物の量も非常に少ない。この炭化物の科学年代測定は18,000年を示しているが、特定するには今後十分な検討が必要である。

1号礫群

B-4区で検出した。27個で構成された礫群は、やや集中した部分と、その北側方向にばらけた散礫状態から成っている。掘り込み及び炭化物は確認できなかった。炭化物については、暗褐色硬質土ということもあり、検出しにくい。

2号礫群

A・B-4区で検出した。36個で構成された礫群は、やや集中部分から南側へばらけた状態で広がっている。掘り込みは確認できなかった。炭化物については、Dパターンの状態で確認できるが、エリアの確認はできなかった。

3号礫群

A-3区で検出した。25個で構成された礫群は、他の礫群に比べ拳大の大きさの礫が多く、まとまっている。一部熱を受け破碎したのものもある。掘り込みは確認できなかった。炭化物については、2号同様Dパターンで検出できたが、エリアの確定までは至らない。

4号礫群

A-3区で検出した。20個で構成された礫群は、ばらけた状態で散在している。掘り込みも確認できなかった。一部熱を受け破碎した礫もある。炭化物については、わずかに確認できた。

第3節 出土遺物

旧石器時代の包含層はXⅦ層、XⅥ層、XⅤ層、XⅣ層、XⅢ層、XⅡ層から総数795点の石器が出土している。各層から遺物の出土はあったものの、各包含層別の平面ドット図を参照すると、XⅦ～XⅥ層でナイフ形石器文化期の1時期、XⅤ層～XⅣ層でナイフ形石器文化期の1時期、XⅢ層～XⅡ層でナイフ形石器文化期の1時期と合計3つのナイフの時期にまとめて捉えられる可能性が高い。ただし客観性を確保するため以下には層ごとの記述を行っていくこととする。

実測図について、ナイフ形石器、台形石器などの定形石器は全て図化を行っている。なお、剥片等は任意で抽出し、実測を行った。

旧石器時代の石器に用いられている石材は黒曜石、水晶、チャート、頁岩、流紋岩など様々なものが使用されており、黒曜石とチャートについては以下に分類をしておく。

黒曜石A—黒色ガラス質で、白く小さな不純物を多く含む。大口市日東産に類似。

黒曜石B—灰色ガラス質で、白く小さな不純物を多く含む。大根占町長谷産に類似。

黒曜石C—アメ色ガラス質で、不純物を少量含む。

チャートA—青灰色を呈し、黒い縞模様が見られる。やや質が悪い。

チャートB—白っぽい色調を呈し、濃紺色の線が無秩序に見られる。白と紺の割合は不安定である。

チャートC—濃い青灰色を呈し、白い縞模様が若干見られる。良質。

チャートD—緑色を呈し、フィッシャーなどに黄色い成分の付着が認められる。

流紋岩—黒灰色を呈し、白っぽい斑点が見られる。

1 XⅦ層

XⅦ層からは総数56点の石器が出土し、うち石核3点、剥片3点、敲石1点の計7点を図化した。出土はC、D、E—1、2、3区に集中している。

(1) 石核

4は黒曜石B製の石核である。打面転移の痕跡が見られる。打面調整は行われていない。5は黒曜石A製の石核である。単設打面より打面調整を行い幅広の剥片を剥離している。7はチャートD製の石核である。打面は2面あり、それぞれの面より連続的に剥片を剥離している。打面調整は行われていない。

(2) 敲石

6はホルンフェルス製の敲石である。上下両端に使用による痕跡が認められる。下端は尖っており、違った器種に分類される可能性も十分に考えられる。

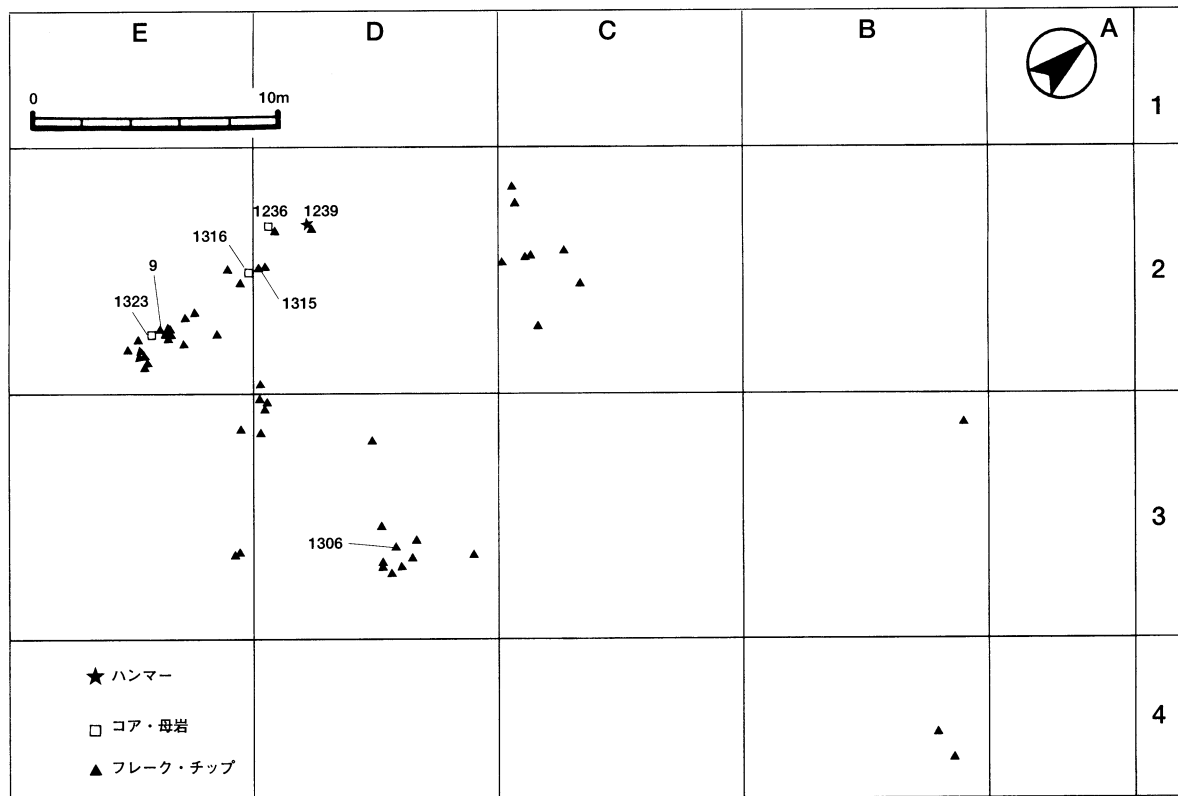
2 XⅥ層

XⅥ層からは総数365点の石器が出土し、うちナイフ形石器6点、台形石器5点、搔器・削器2点、石核11点、敲石1点、剥片17点の計42点を図化した。定形石器の組成率についてはナイフ形石器が24%、台形石器が20%、搔器が8%、石核が44%、敲石が4%である。

石材は黒曜石ABC、チャートC、水晶、石英、頁岩など多様である。

(1) ナイフ形石器

ナイフ形石器は大型の剥片を利用する一群(17・18・19)と、小型の剥片を利用する一群(12・13・16)の2つに大きく分けられる。



第22図 XⅦ層石器出土状況

大型の一群は剥片を縦位，横位に利用し，一部にブランディングを施すものである。

小型の一群は求心状に剥離された剥片を横位に利用するもの（12・13）と礫皮面を取り込んだ剥片を素材とするもの（16）とに細分される。前者は次に述べる台形石器B類と同じ技術に比定されるものである。

(2) 台形石器

台形石器は素材剥片の剥離技術から以下の3つに分類できる。

A—単設打面から連続して剥離された幅広の剥片を利用するもの（8・9・10）

B—求心状に剥離された剥片を横位に利用するもの（14）

C—求心状に剥離された剥片を縦位に利用するもの（11）

いずれも両側面にブランディングを施すものが主で，一部平坦剥離が施されているものもある。

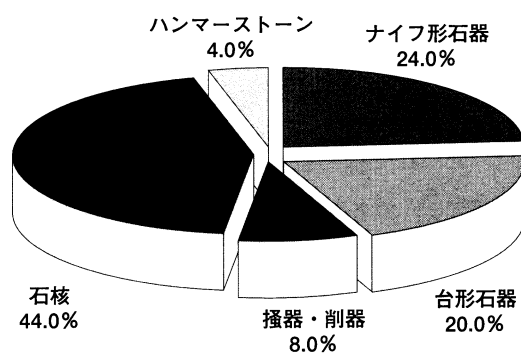
(3) 石核

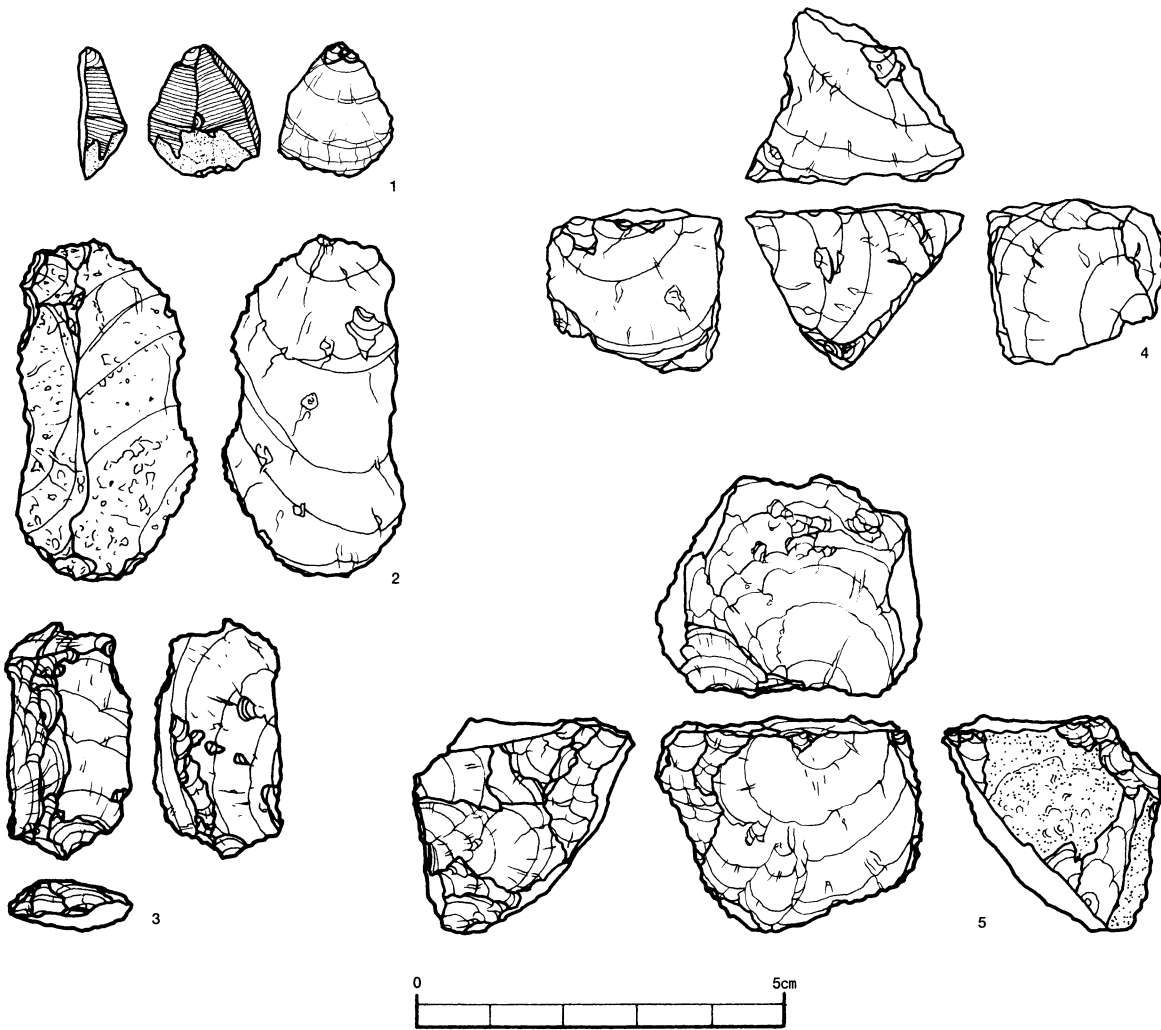
石核は剥離技術から大きく以下の4つに分類できる。

A—単設打面から連続して剥片を剥離するもの（38・40・41・42・44・46・48・49）

B—両設打面から連続して剥片を剥離するもの（43）

XⅦ層定型石器組成表





第23図 XVII層石器 (1)

C—求心状に剥片を剥離するもの (39)

D—打面転移を頻繁に行って剥片を剥離するもの (45)

Aの技術が多く、単設打面からの連続剥離が基本であることが理解できる。中には複数の技術の組み合わせも見られる。これらのことからAを基本としてその他の技術を利用していることが観察される。なお、これらの石核から観察される技術はナイフ形石器や台形石器など同層より出土している剥片石器から観察される剥片剥離技術に対応しており、両者の関連を窺い知ることができる。

(4) 搔器・削器 (15・20)

搔器・削器は厚手の剥片の一端に急角度の二次加工を施すことで刃部を形成するものである。

(5) 敲石 (47)

上下両端に使用痕が観察され片側は使用により欠損している。

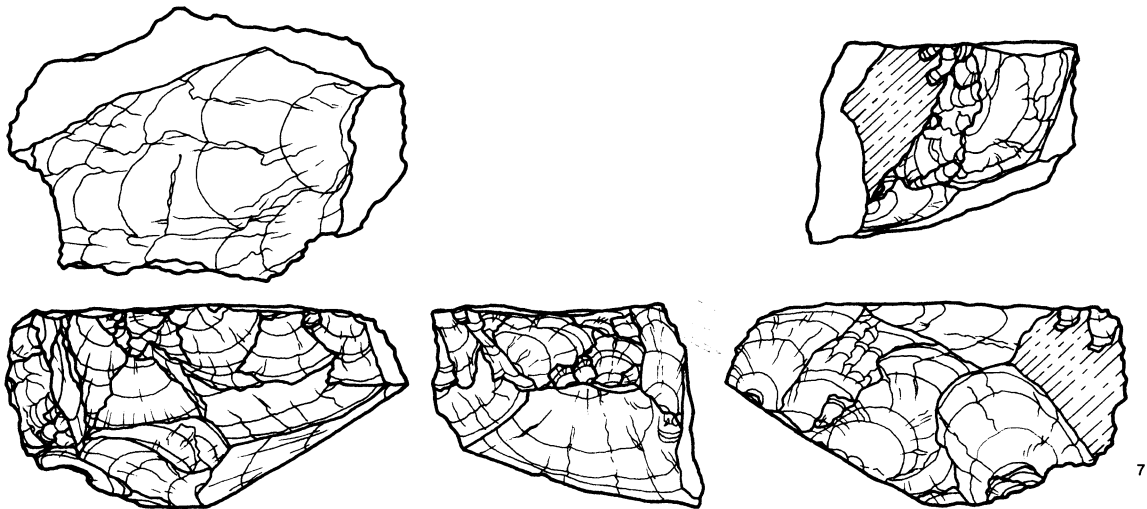
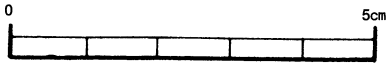
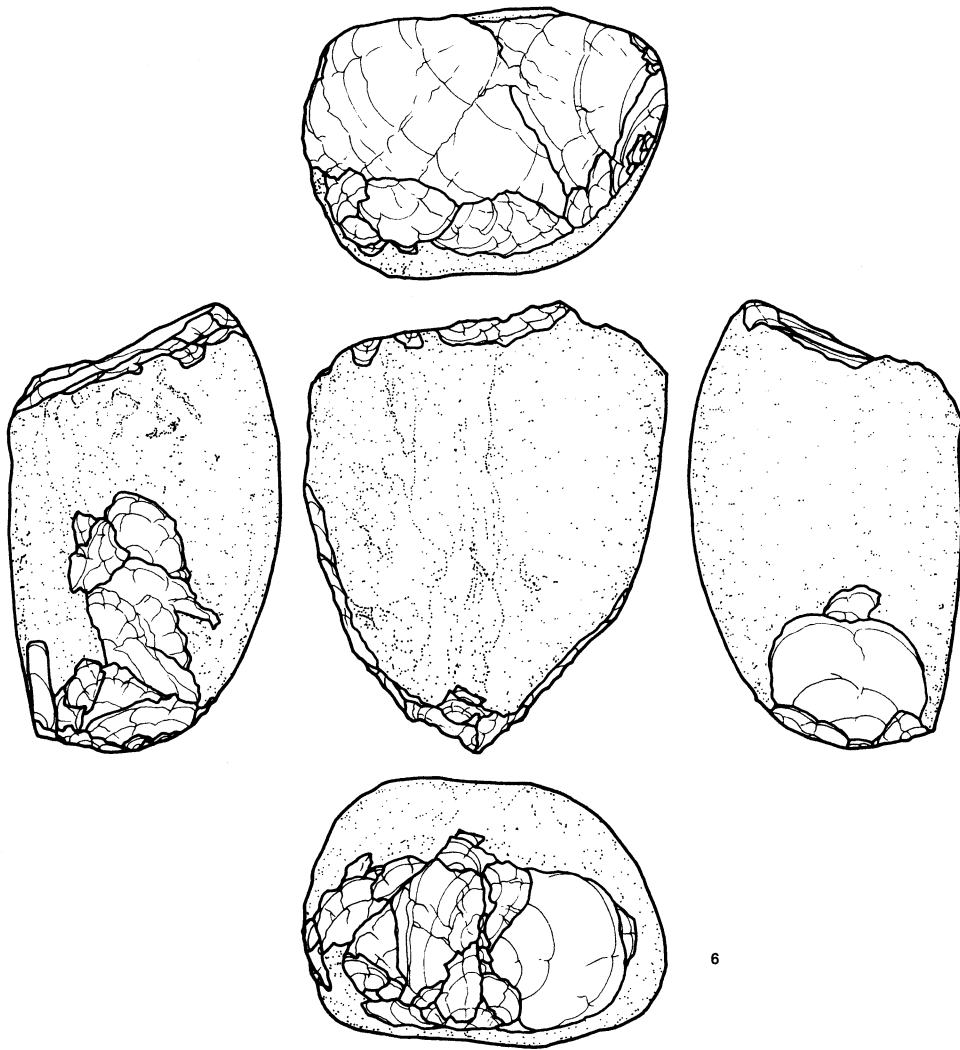
(6) 剥片

剥片は石核と同様の分類で扱う。

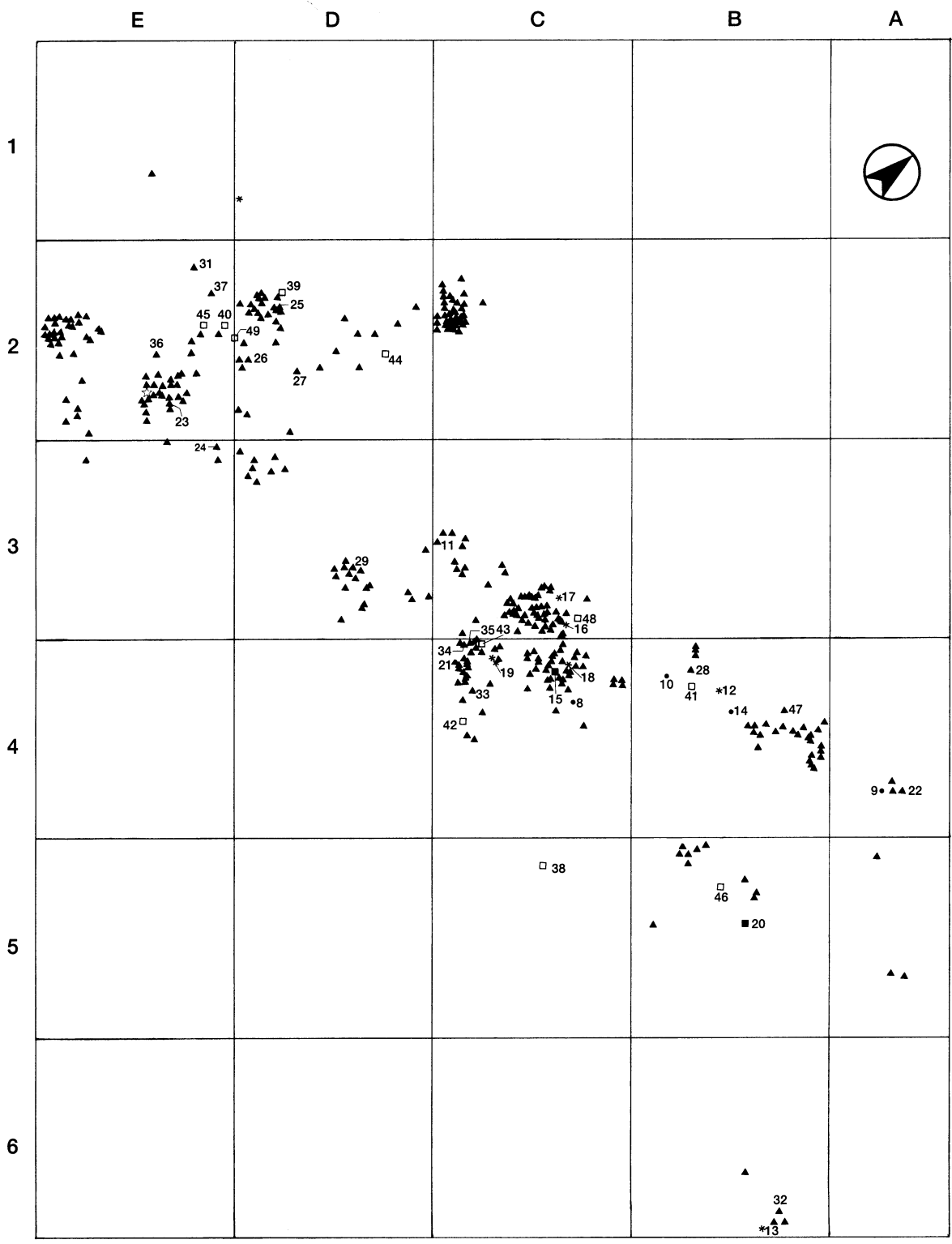
A— (21・22・25・26・28・30・32・34・35・36)

B— (29・33)

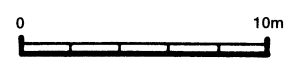
CまたはD— (24・27・31・37)



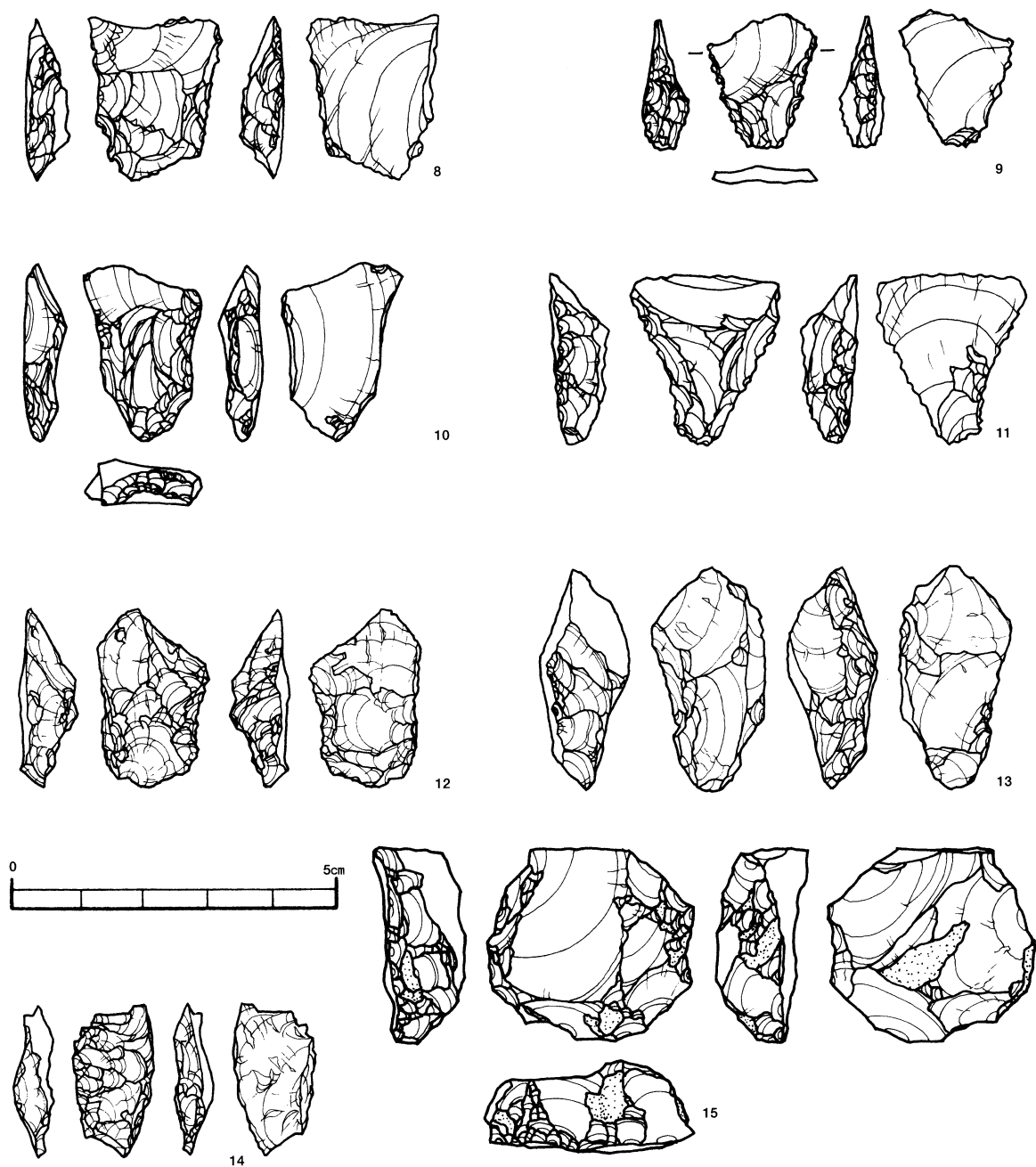
第24図 XⅦ層石器(2)



- スクレイパー
- ☆ 三稜尖頭器
- * ナイフ
- コア・母岩
- ▲ フレーク・チップ



第25図 X VI層石器出土状況



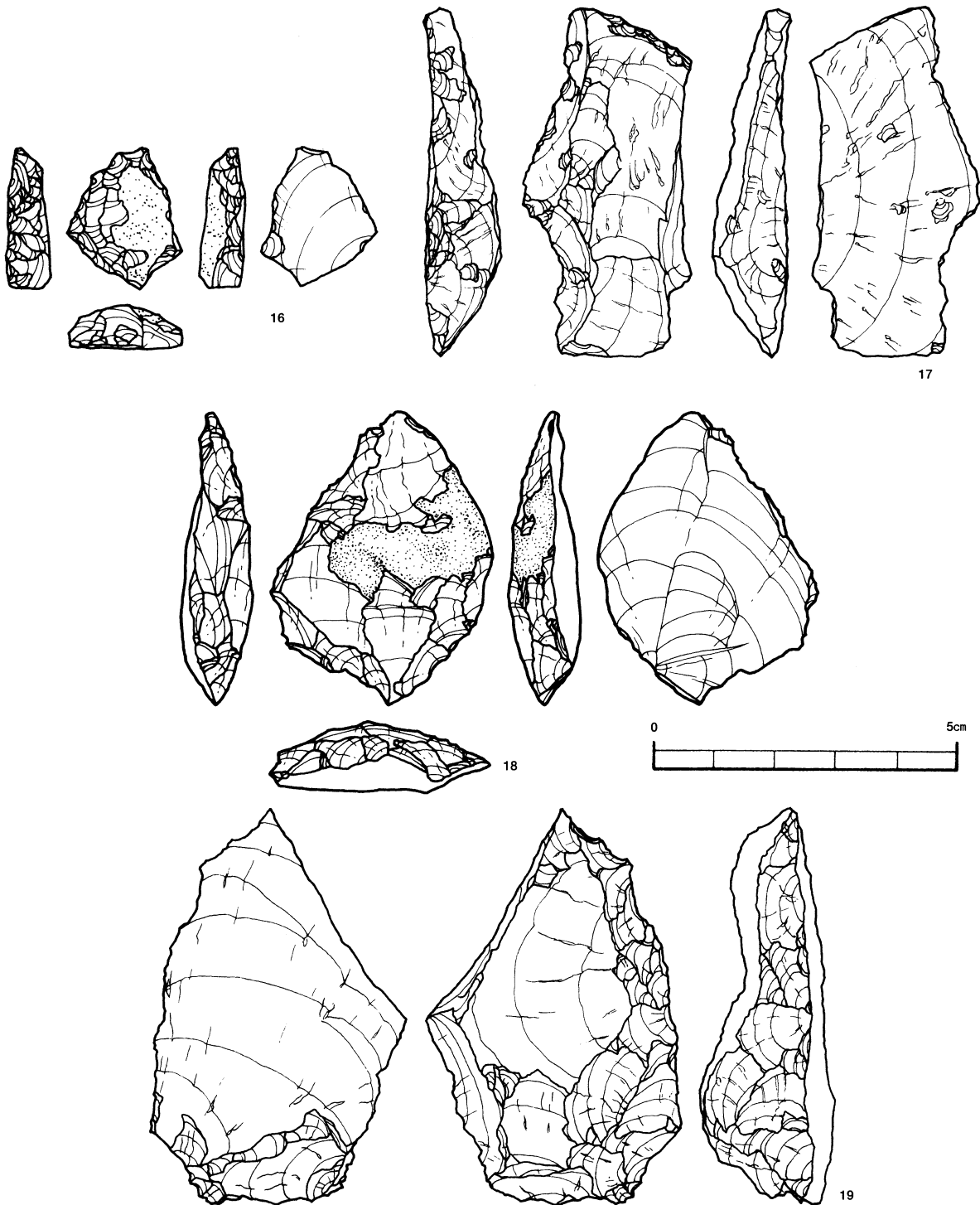
第26図 XVI層石器(1)

剥片も石核の技術と同様に技術Aが中心となる可能性が高く、お互い関連している。

3 XV層

XV層からは総数80点の石器が出土しており、うち台形石器3点、敲石1点、石核1点、剥片3点の計8点を図化した。遺物はE-2区からB-4区にかけて東西方向に直線状に出土している。C-3, 4区に集中が見られるが、特にブロックとしての認定は行っていない。

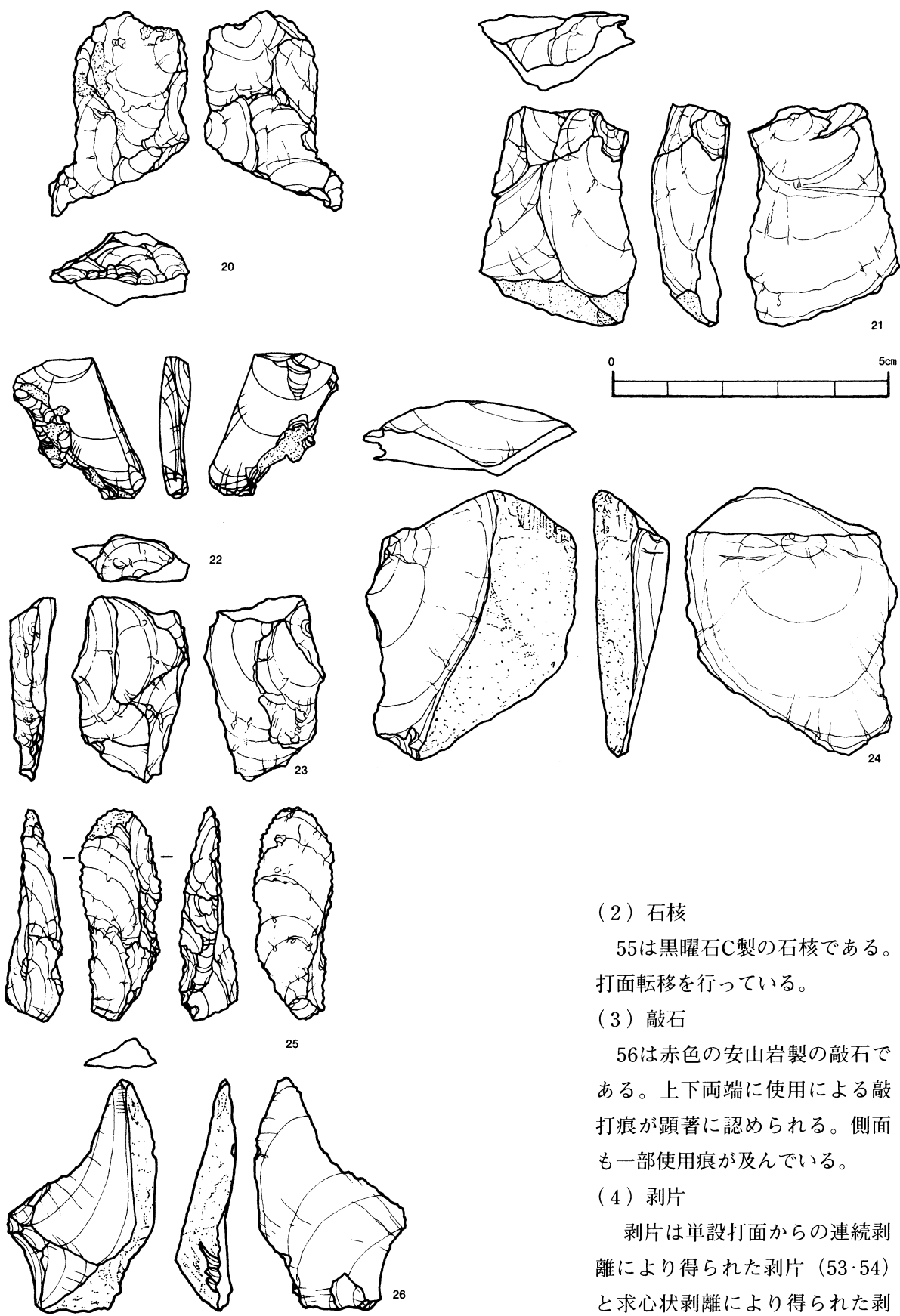
石材は黒曜石ABC, チャートD, 頁岩, 石英などが使用されている。



第27図 XVI層石器(2)

(1) 台形石器

台形石器は単設打面からの連続剥離により得られた剥片を利用するもの(50・51)と、両設打面から剥離された剥片を利用するもの(52)とに分けられる。



第28図 XVI層石器(3)

(2) 石核

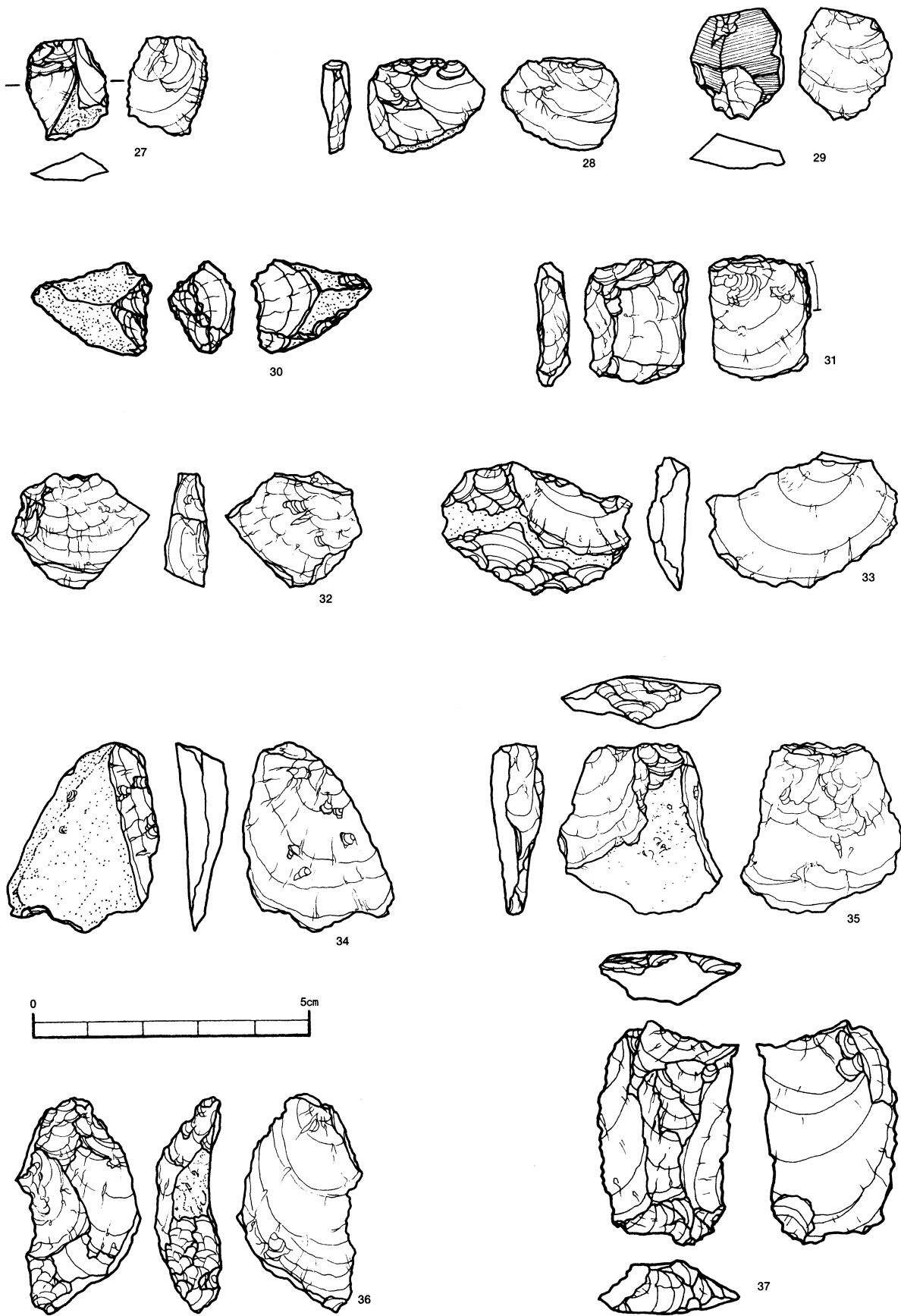
55は黒曜石C製の石核である。打面転移を行っている。

(3) 敲石

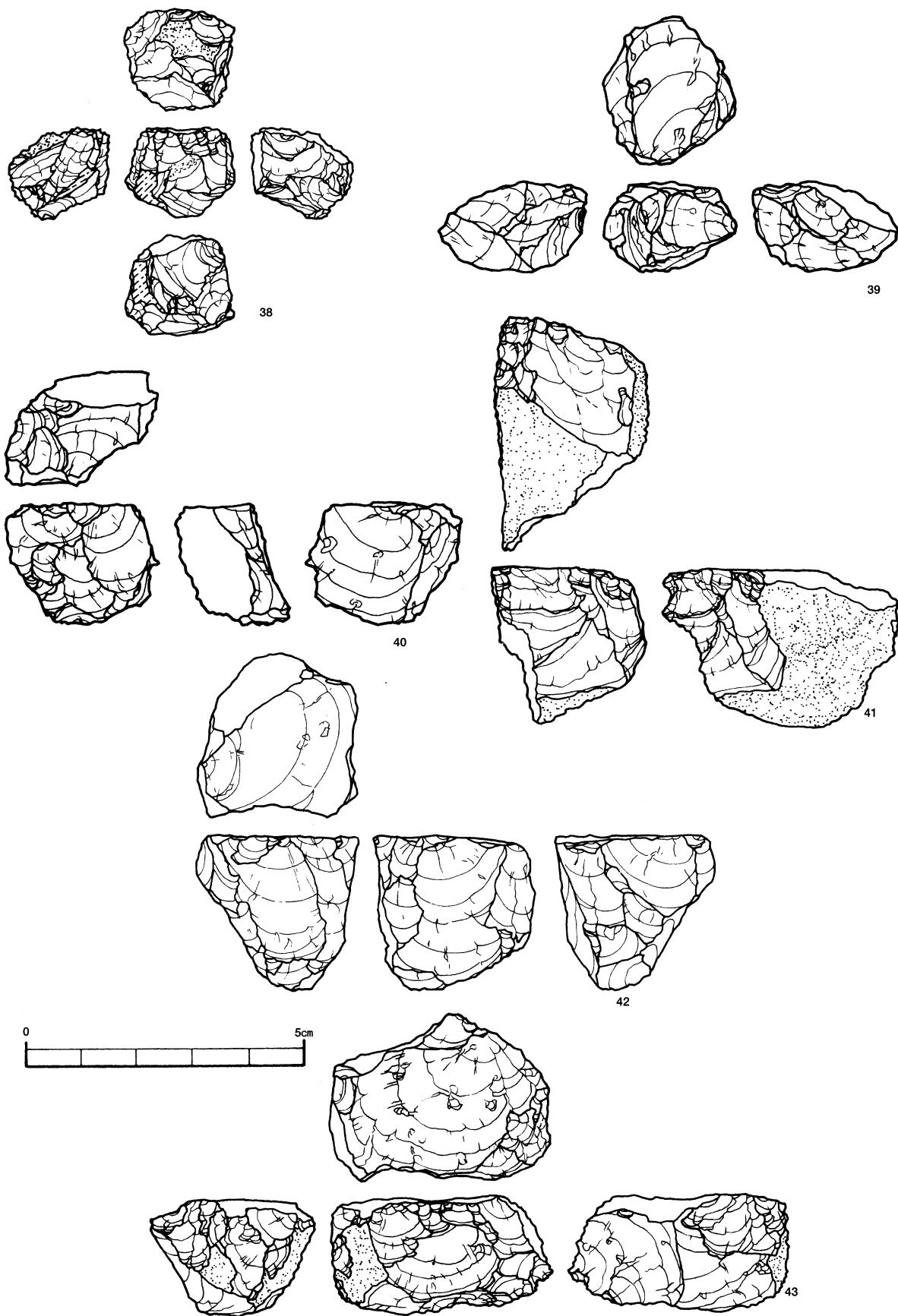
56は赤色の安山岩製の敲石である。上下両端に使用による敲打痕が顕著に認められる。側面も一部使用痕が及んでいる。

(4) 剥片

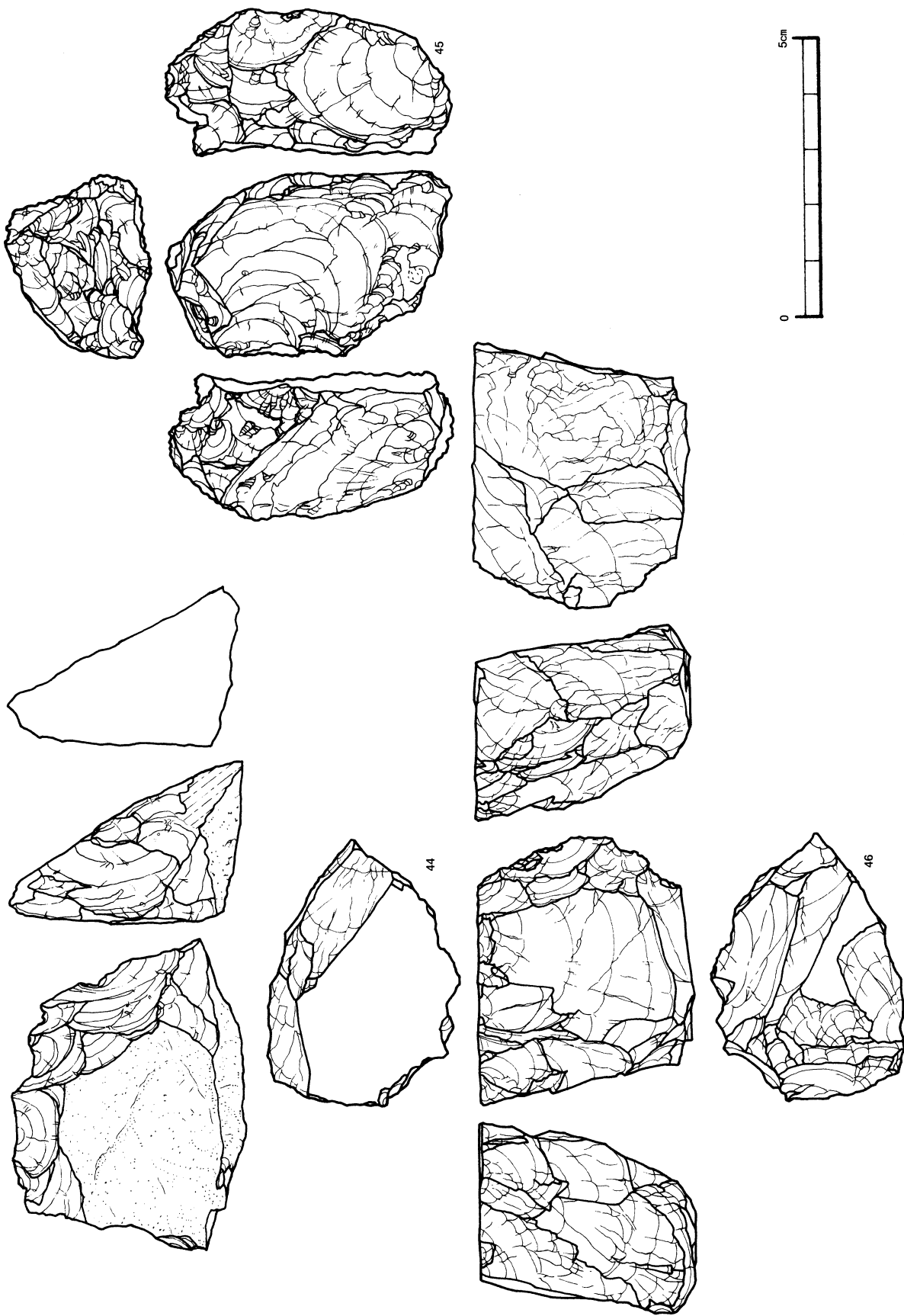
剥片は単設打面からの連続剥離により得られた剥片(53・54)と求心状剥離により得られた剥



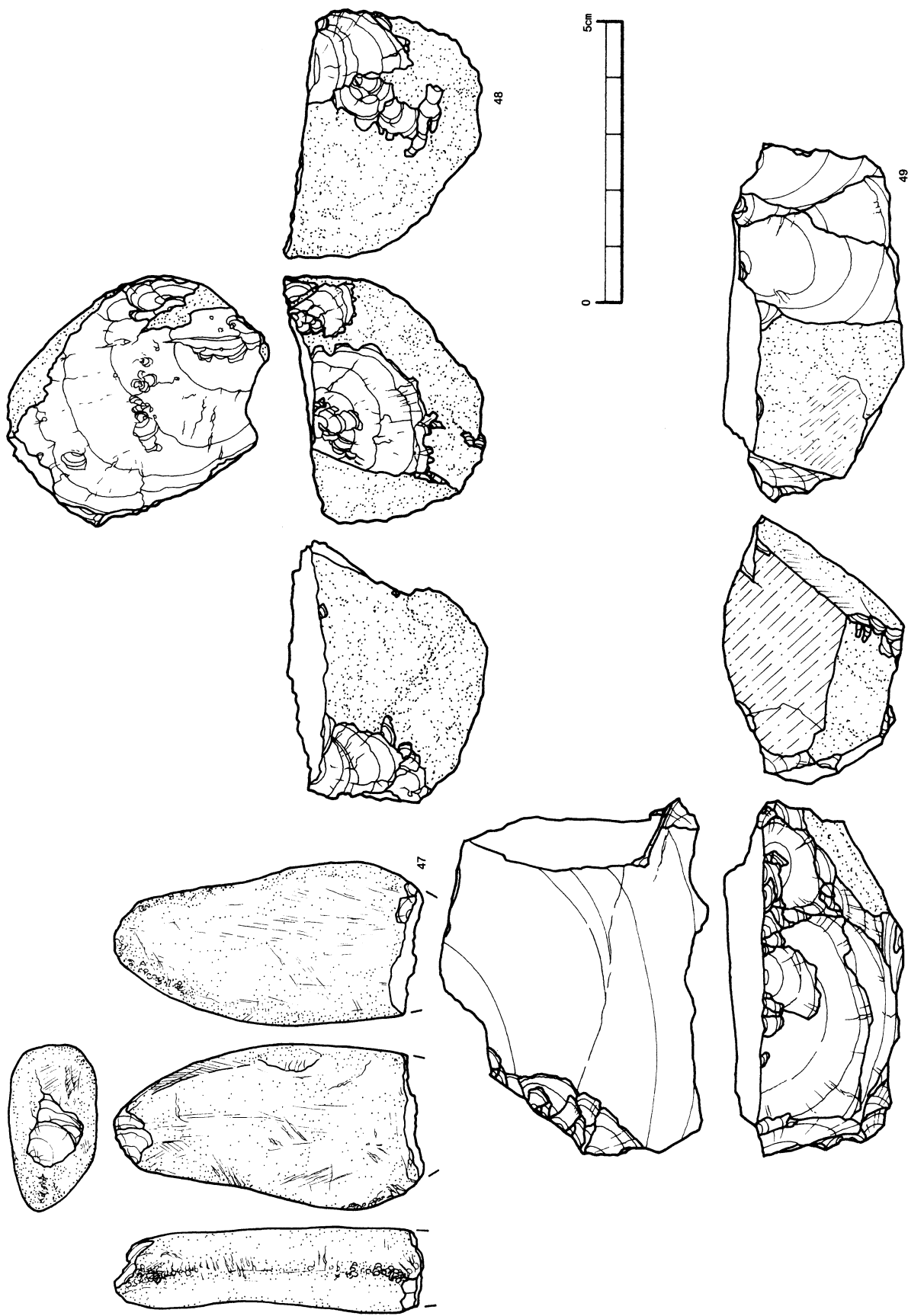
第29图 X VI層石器(4)



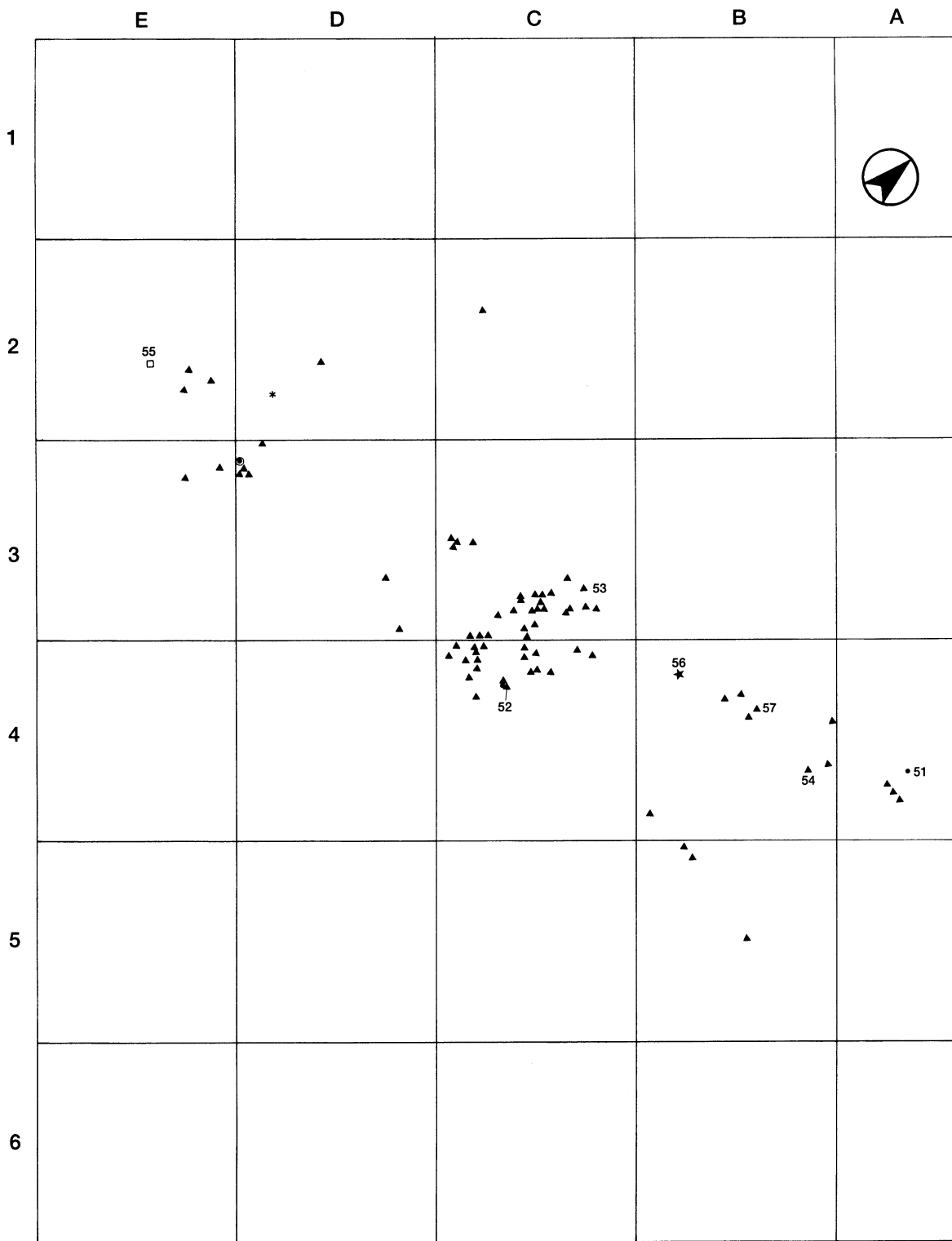
第30図 X VI層石器 (5)



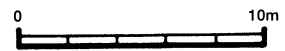
第31図 X M層石器 (6)



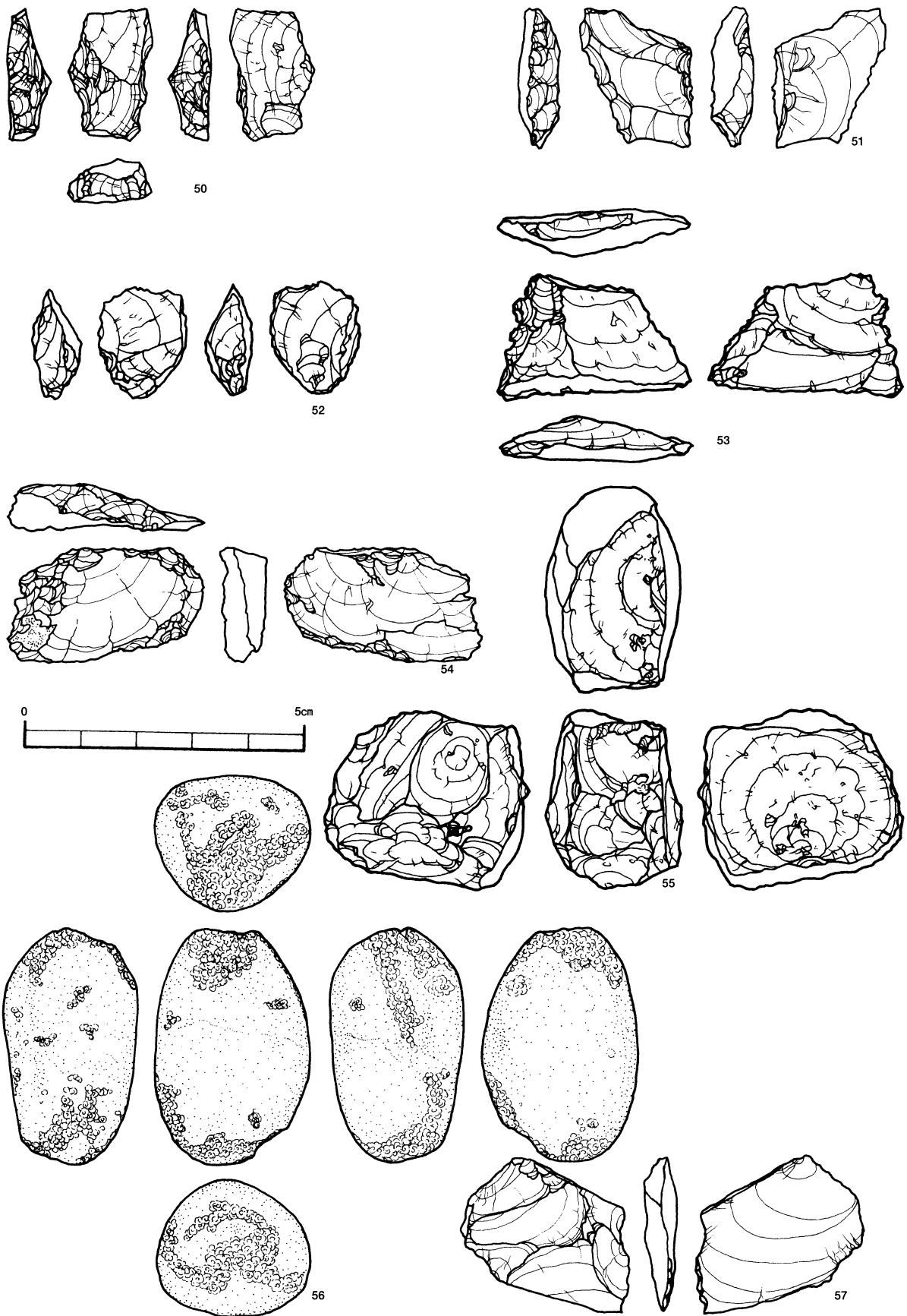
第32図 X VI層石器 (7)



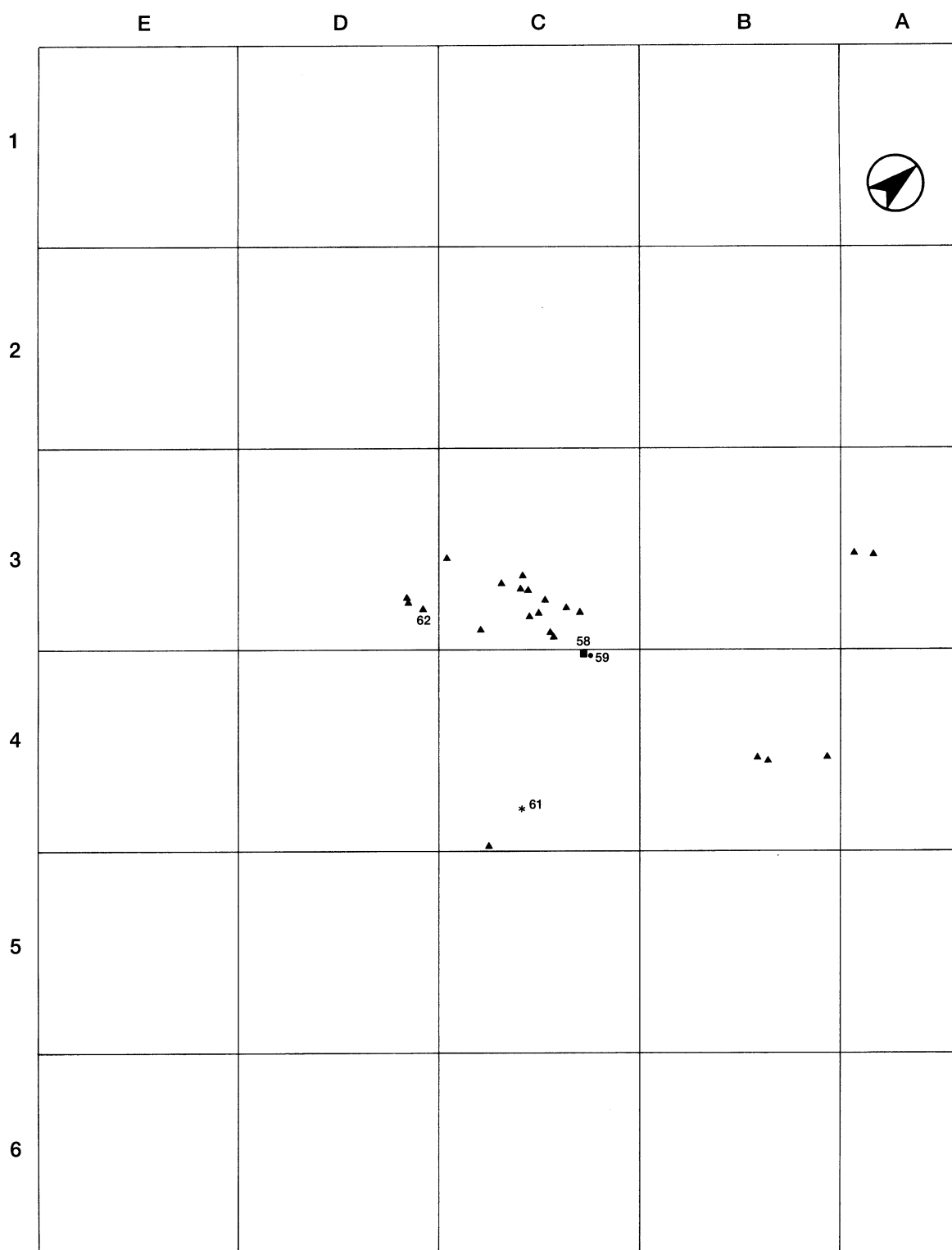
- 台形石器
- * ナイフ
- ◎ 剥片尖頭器
- ★ ハンマー
- コア・母岩
- ▲ フレーク・チップ



第33図 XV層石器出土状況



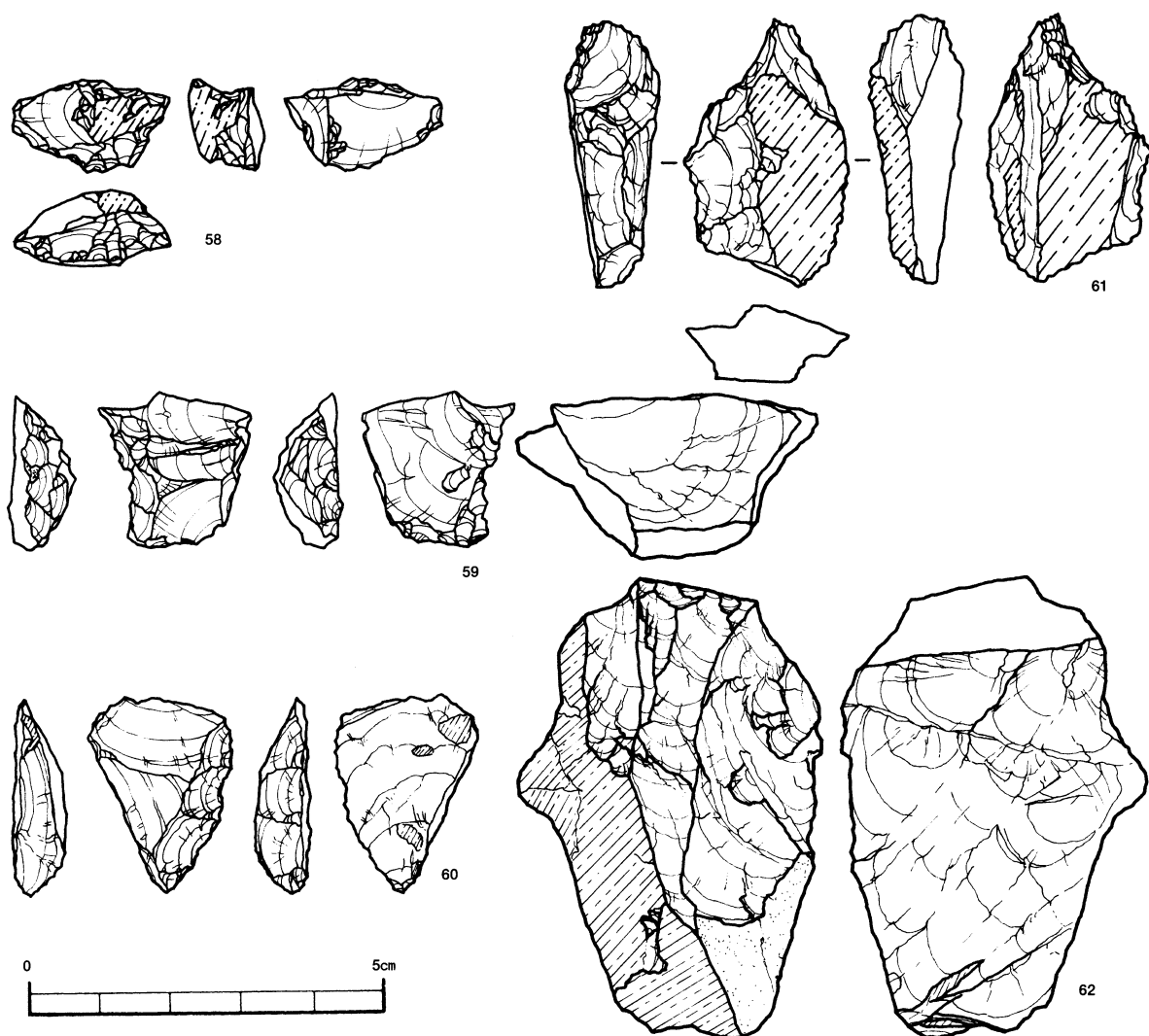
第34图 XV層石器



- スクレイパー
- ▲ フレーク・チップ
- 台形石器
- * ナイフ



第35図 X IV層石器出土状況



第36図 XIV層石器

片（57）とに分けられる。54には微細剥離痕が認められる。

4 XIV層

XIV層からは総数25点の石器が出土しており、うちナイフ形石器1点、台形石器2点、搔器・削器1点、剥片1点の計5点を図化した。遺物はC-4区を中心に出土している。

石材は黒曜石C、石英、チャートABC等が使用されている。

(1) ナイフ形石器

61はチャートA製のナイフ形石器である。礫素材で両面に礫皮面を残している。一部分にブラントニング状の二次加工が認められ、ここではナイフ形石器として分類した。

(2) 台形石器

台形石器は単設打面からの連続剥離により得られた剥片を利用するもの（59）と、求心状に剥離された剥片を利用するもの（60）とに分けられる。

(3) 搔器・削器

58は石英製の搔器である。小型厚手の剥片一端に急角度の二次加工を施し刃部を形成している。

(4) 剥片

62は単設打面からの連続剥離により剥離された厚手の剥片である。チャートB製である。

5 XⅢ層

XⅢ層は本遺跡の旧石器層で最も豊富な定形石器を出土する包含層で、総数159点が出土している。A～Dの4つの遺物集中箇所が検出され、ブロックとして認定した。ブロックの認定に当たっては視覚的な遺物の集中のみを考慮しているため、同一ブロック内で石材が数種類存在することもあり得る。総数159点中ナイフ形石器19点、石核16点、三稜尖頭器4点、搔器・削器8点、敲石1点、剥片35点、器種不明の基部1点の計84点を図化した。XⅢ層全体の定形石器の組成比率はナイフ形石器39.6%、石核33.3%、三稜尖頭器8.3%、搔器・削器16.7%、敲石2.1%である。

石材は黒曜石ABC、チャートACD、頁岩、石英、水晶、流紋岩等が使用されている。

5-1 分類

XⅢ層は定形石器量が多いため、層全体における器種毎の分類を行う。

(1) ナイフ形石器

ナイフ形石器はその形態的特徴から大きく2つに分けられる。

A—薄手の剥片を素材とするもの (63・64・65・66・67・68・69・70・78・80・81・82・83・84・85)

Aは素材剥片の剥離技術からさらに細分される。

A—1：単設打面からの連続剥離により得られた剥片を素材とするもの (64・67・69・80)

A—2：求心状剥離、あるいは打面転移の石核より得られた剥片を素材とするもの

(63・65・66・68・70・78・81・82・83・84・85)

B—厚手で縦長、三稜尖頭器状を呈するもの (71・72・73・74)

(2) 石核

石核は剥離技術から大きく以下の4つに分類できる。

A—単設打面から連続して剥片を剥離するもの (134・135・136・138・139・140・143・144)

B—両設打面から連続して剥片を剥離するもの (133)

C—求心状に剥片を剥離するもの (145)

D—打面転移を頻繁に行って剥片を剥離するもの (131・132・137・141・142・146)

Aを基本とするところはXⅥ層と同じであるが、Dの技術が多いことがXⅥ層と異なる点である。

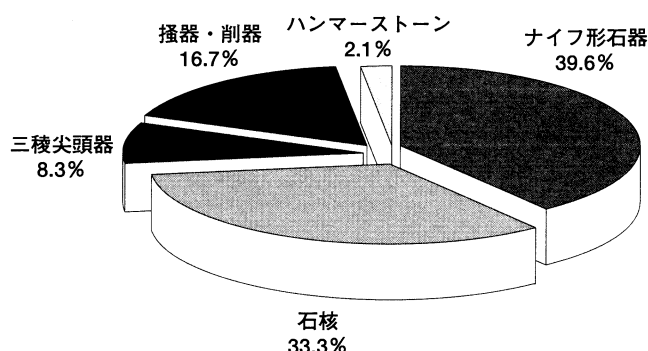
(3) 三稜尖頭器

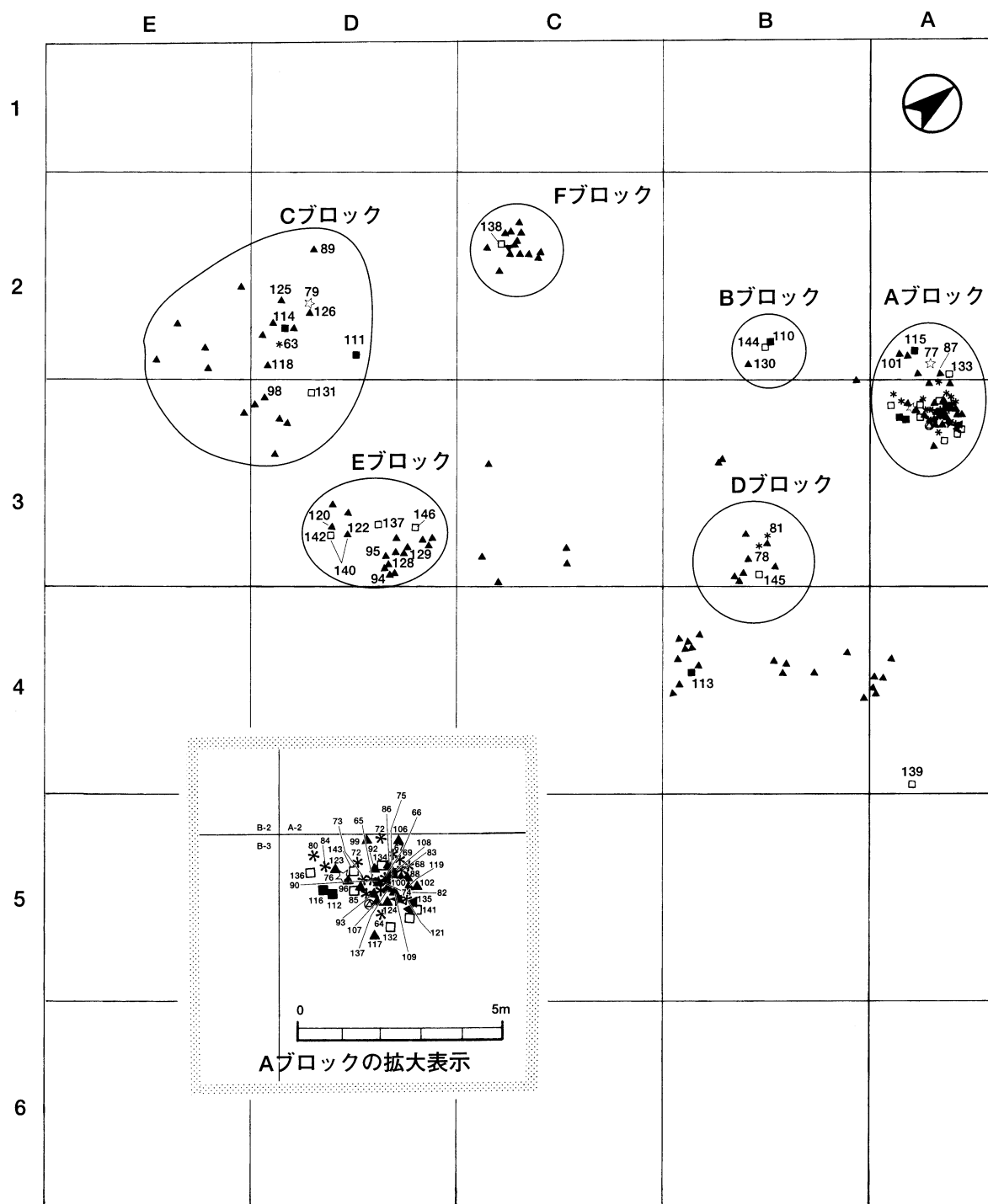
三稜尖頭器はいずれも腹面の基部に平坦剥離を施す特徴的なものである。

(4) 搔器・削器

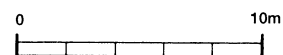
搔器・削器は刃部形成の技術から以下の3つに分類できる。

XⅢ層定型石器組成表

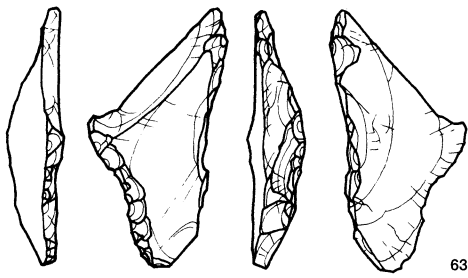




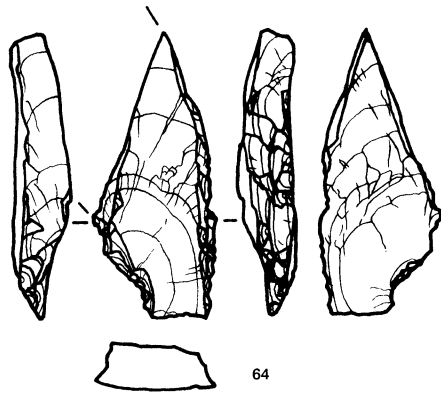
- スクレイパー
- ☆ 三稜尖頭器
- * ナイフ
- ★ ハンマー
- コア
- ◎ 基部
- ▲ フレーク・チップ



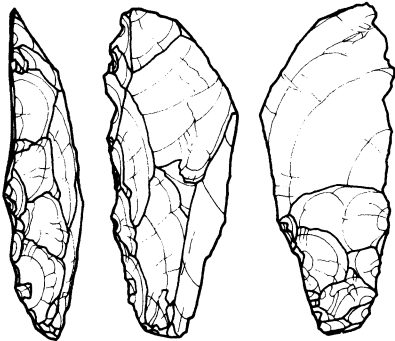
第37図 X III層石器出土状況



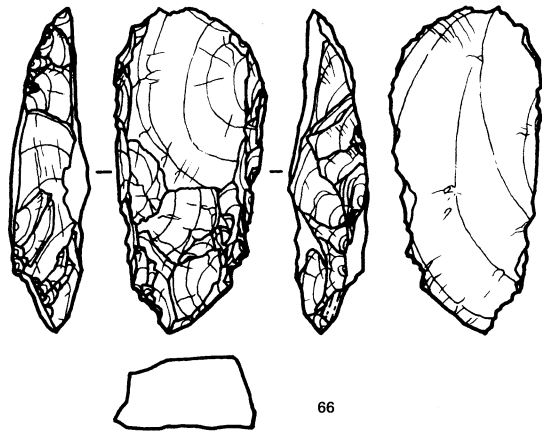
63



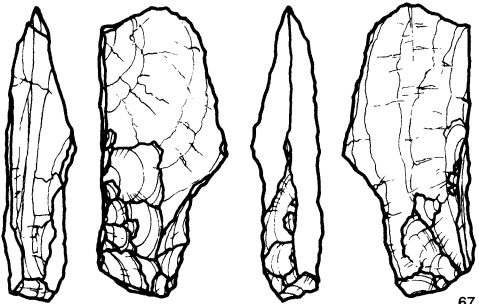
64



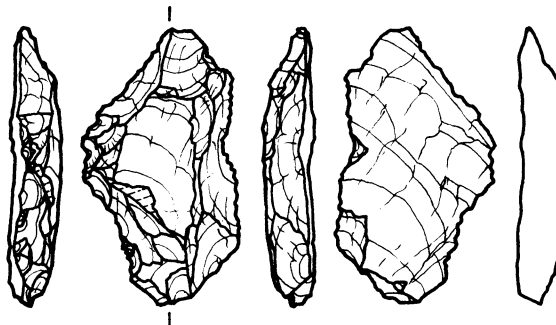
65



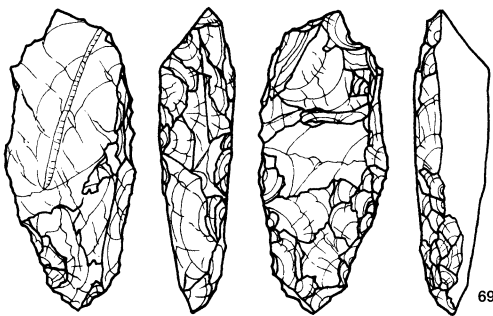
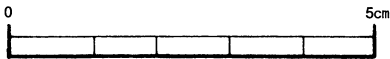
66



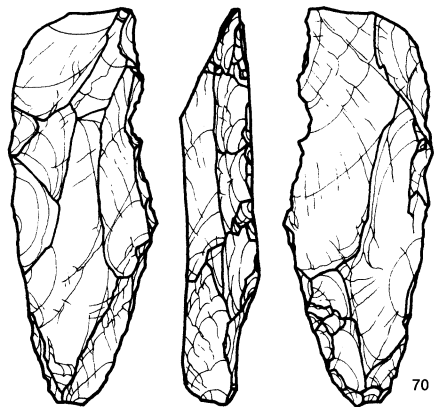
67



68

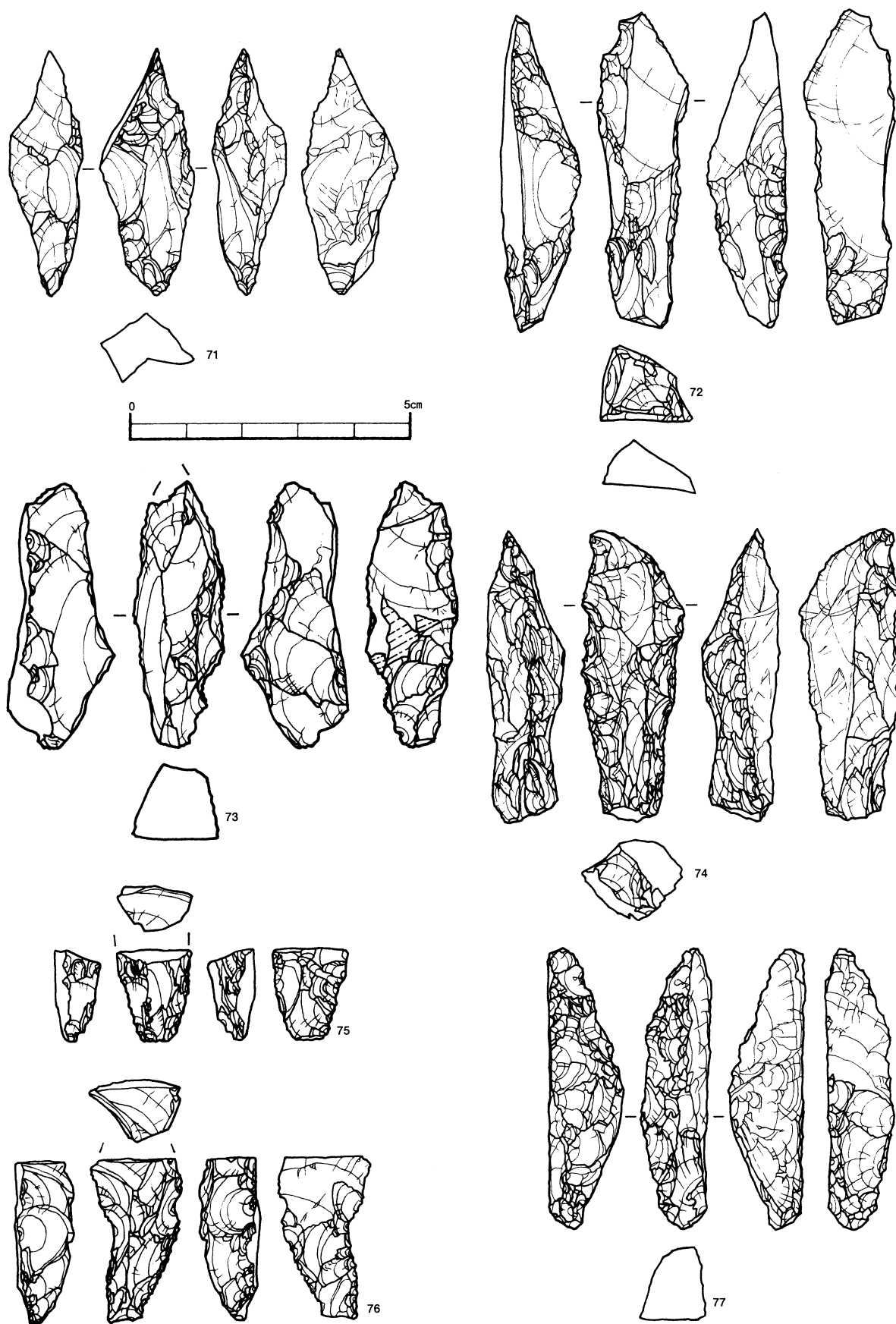


69

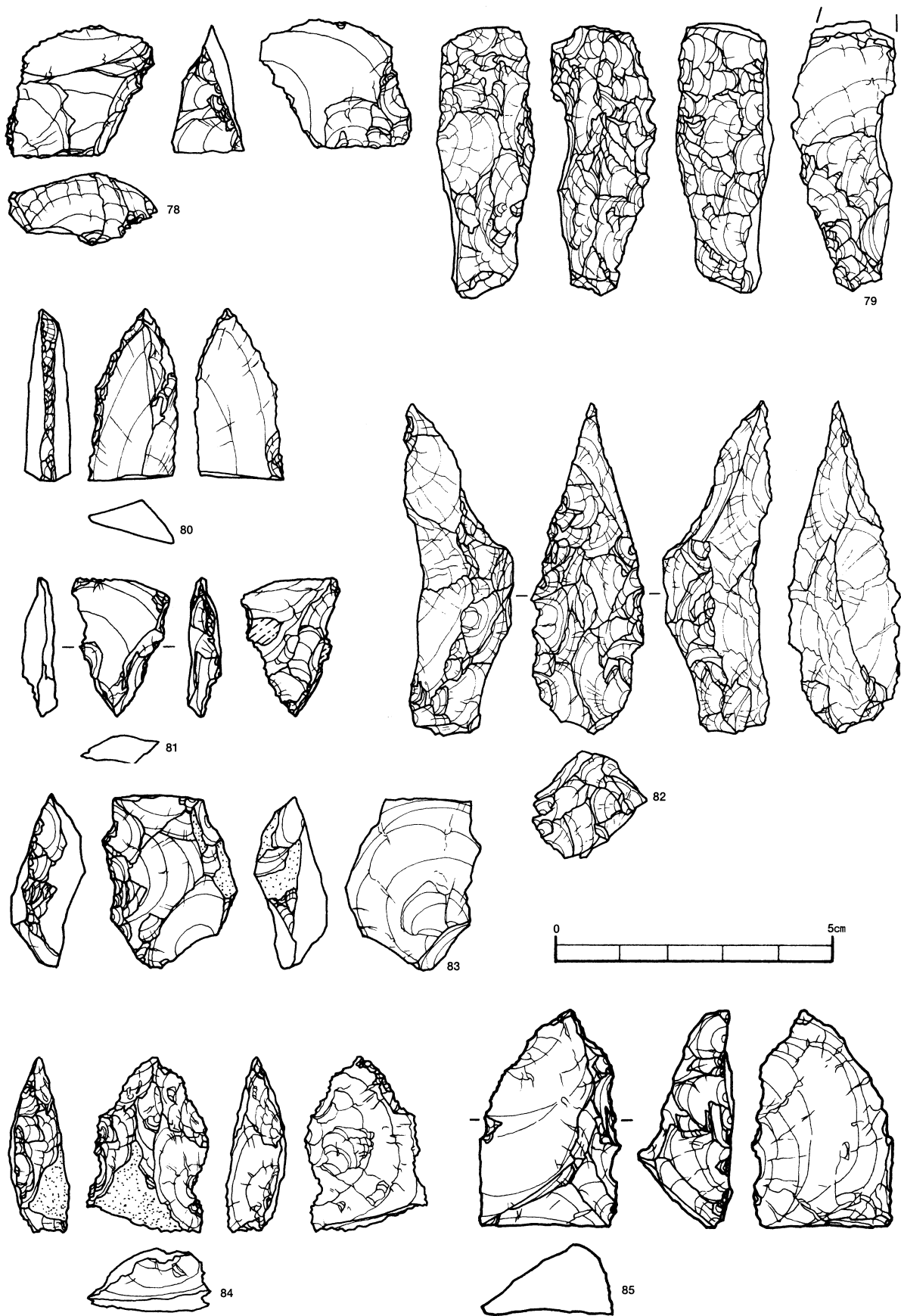


70

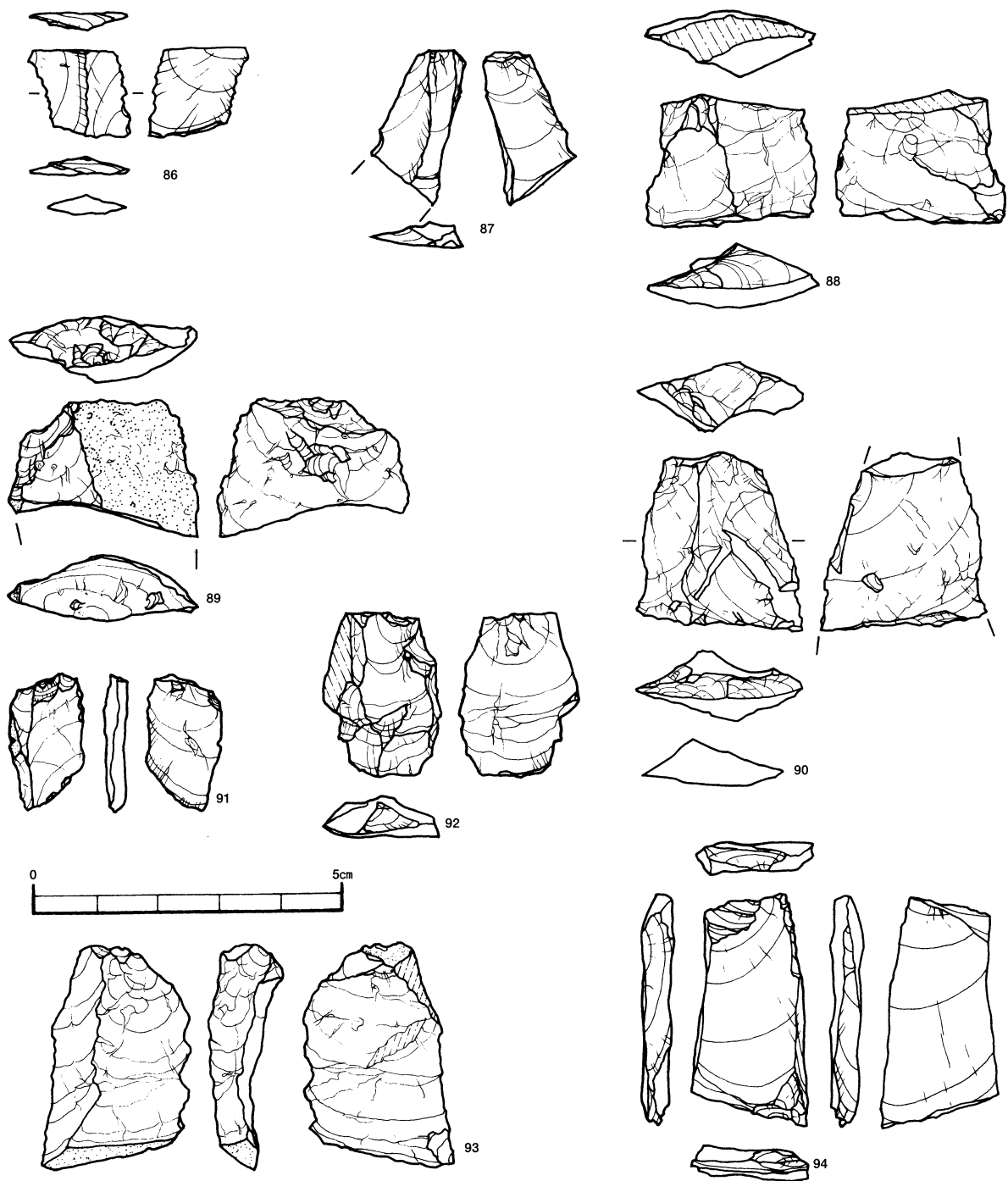
第38图 X III層石器 (1)



第39图 X III層石器(2)



第40图 X III層石器 (3)



第41図 X III層石器 (4)

A：刃角が急角度で腹面からのみの二次加工が施されるもの。(108・110・113・114・116)

B-1：刃角が浅く、腹面からのみの二次加工が施されるもの。(112)

B-2：刃角が浅く、腹面・背面両面に二次加工が施されるもの。(111・115)

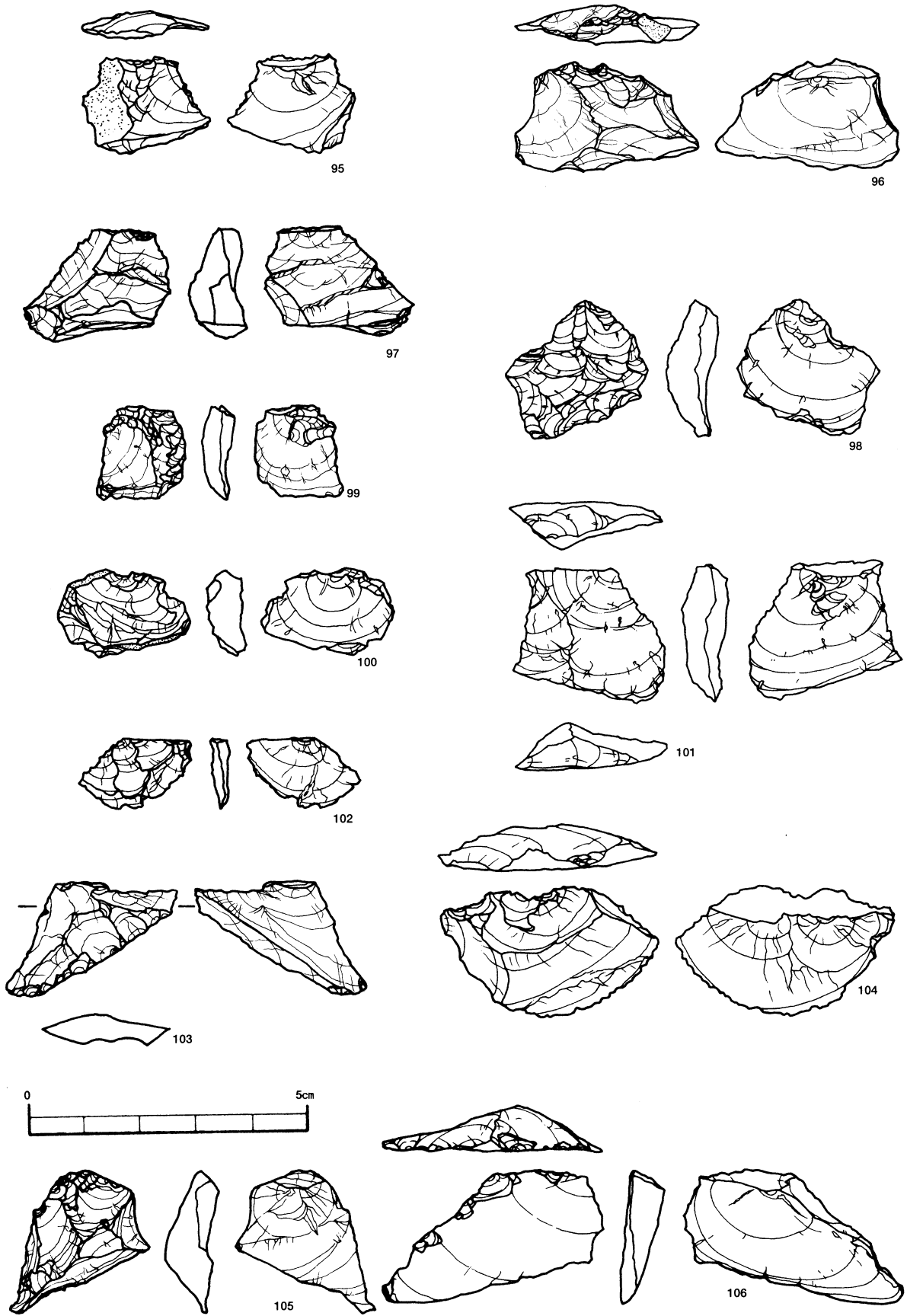
(5) 剥片

剥片は石核と同様の分類で以下に扱う。

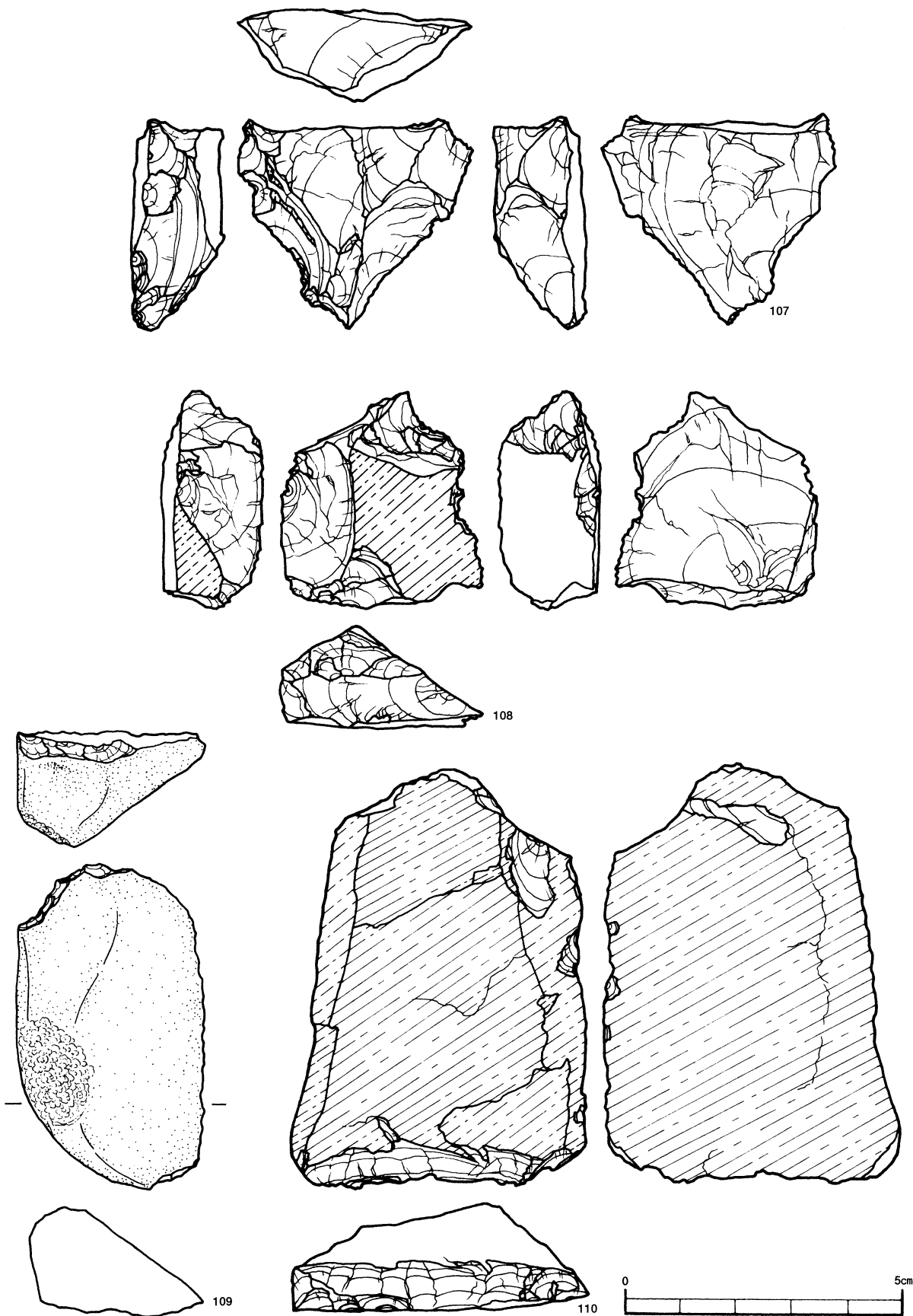
A - (87・88・89・90・92・93・94・95・97・101・102・104・106・118・119・120・122・123・124・128・129)

B - (96・99・100)

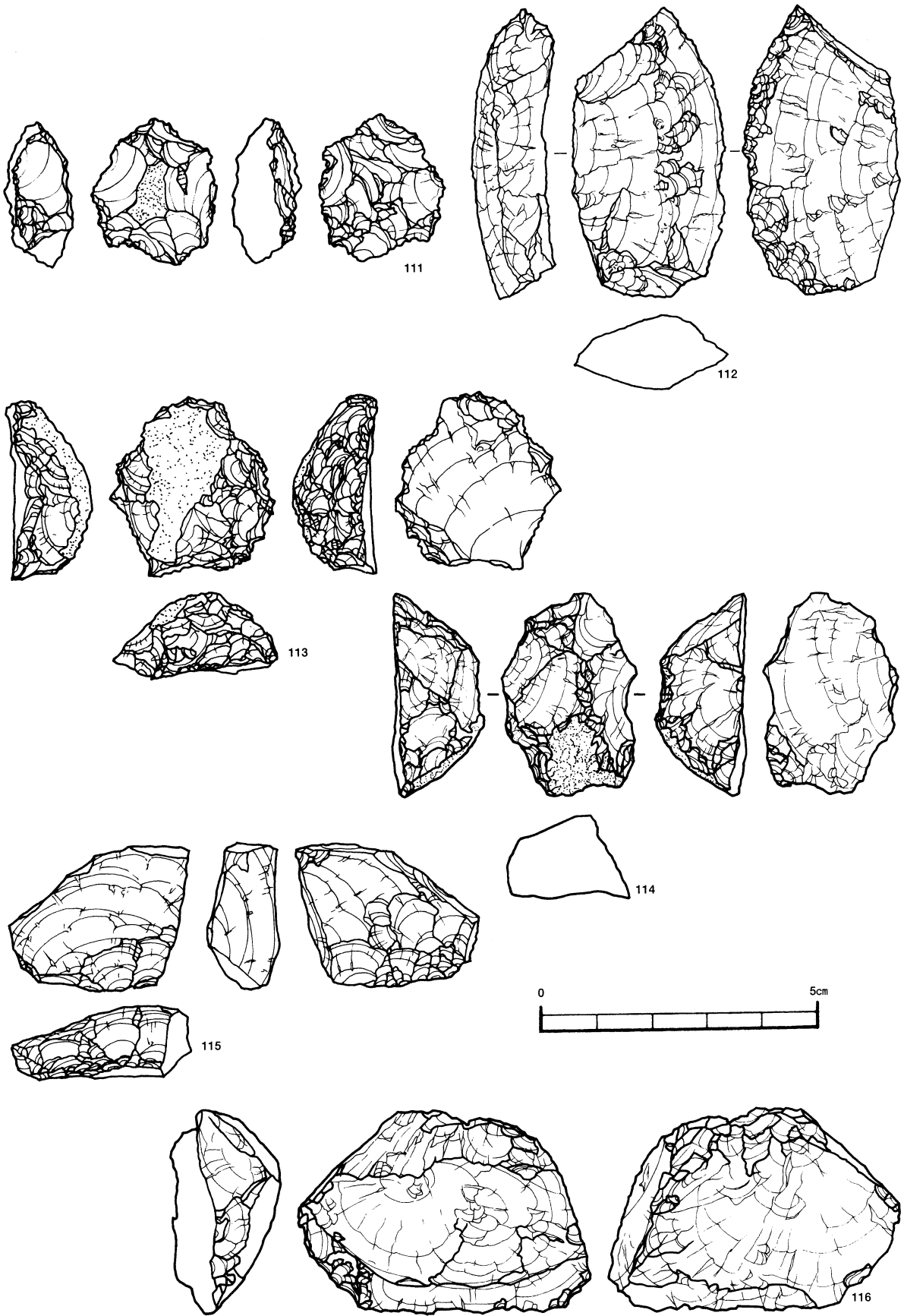
C - (98・105・121・126・127)



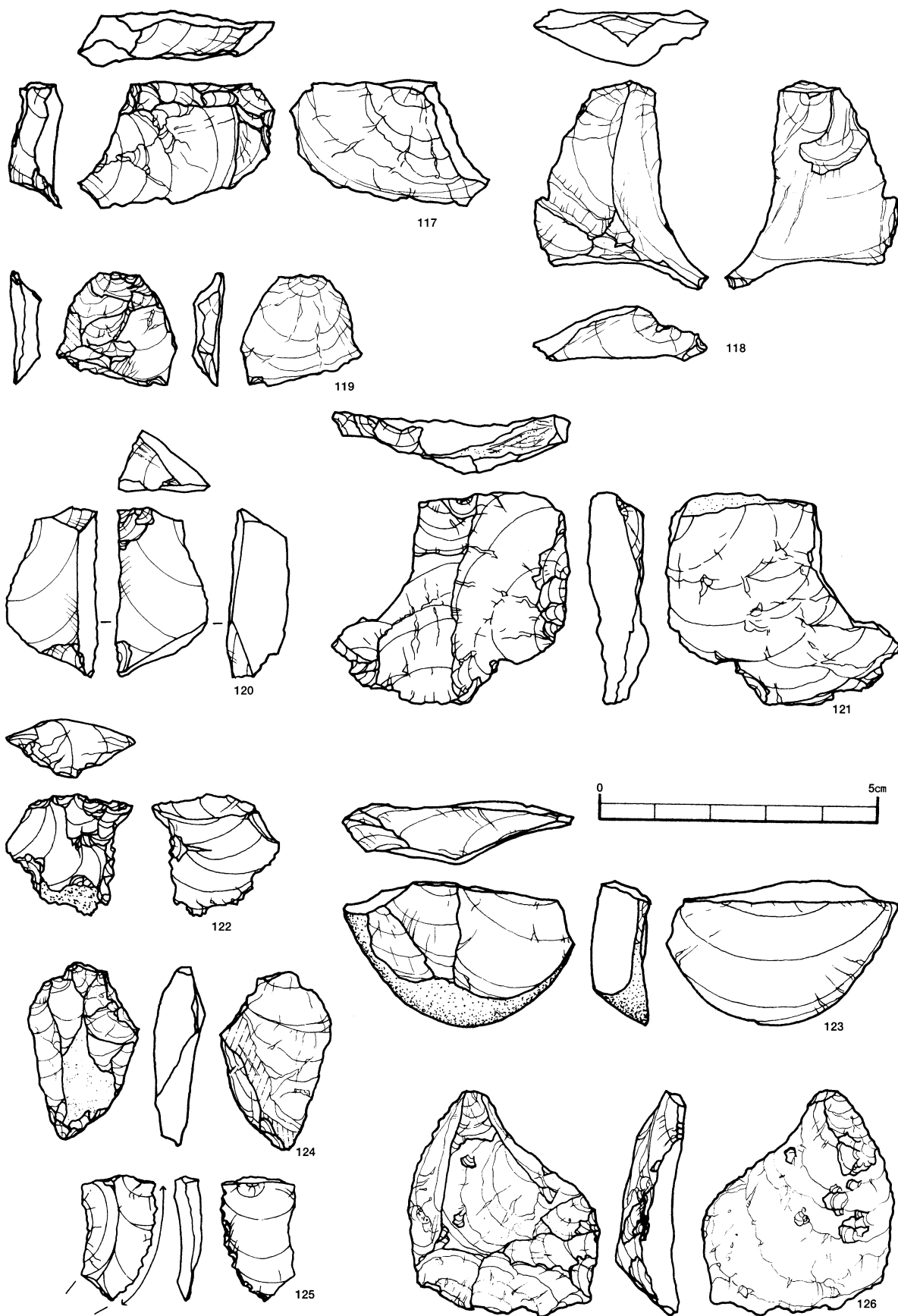
第42图 X III層石器 (5)



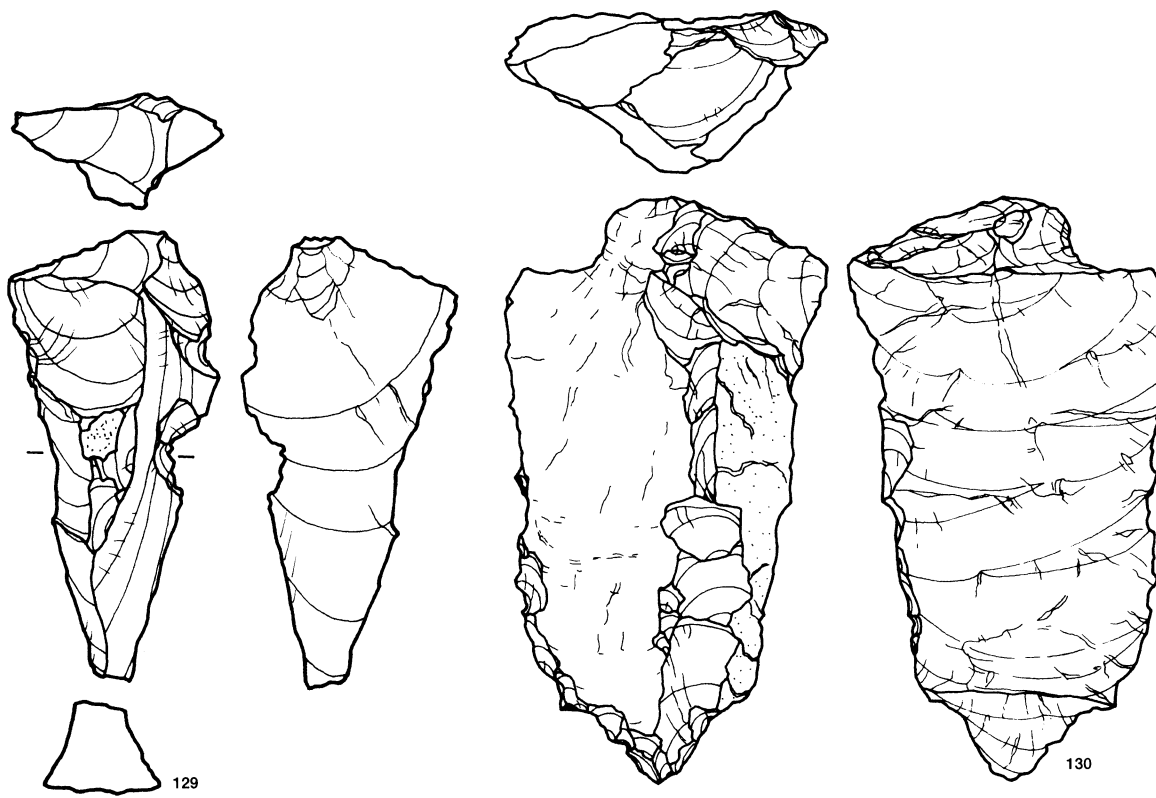
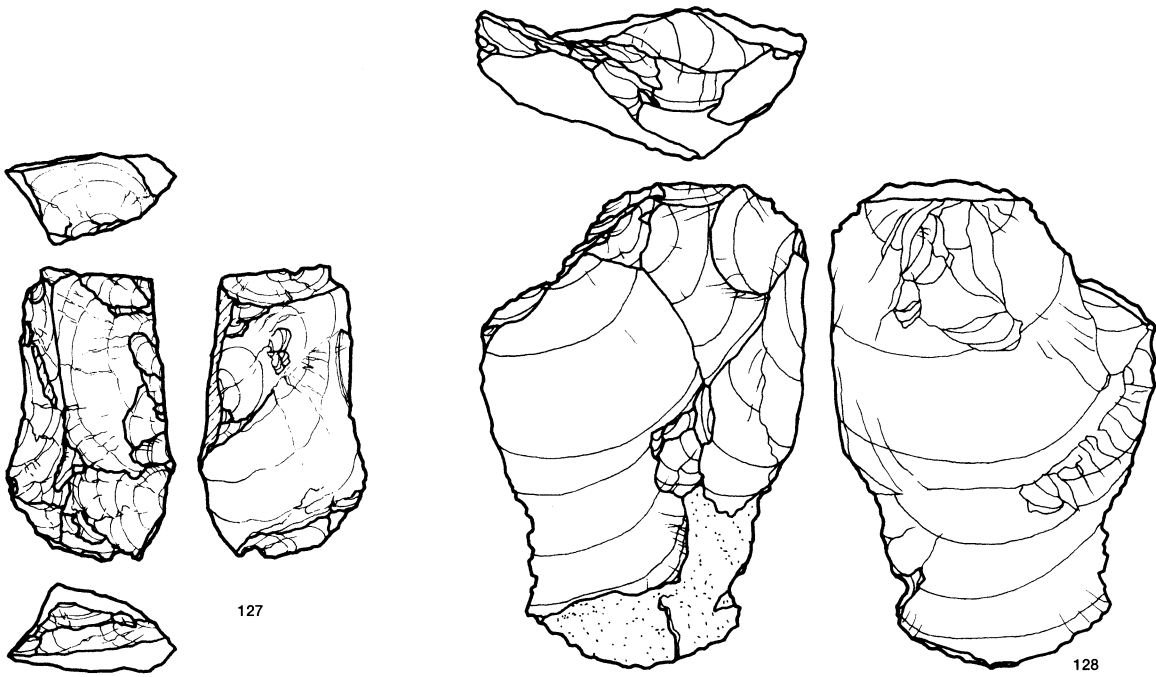
第43图 X III層石器 (6)



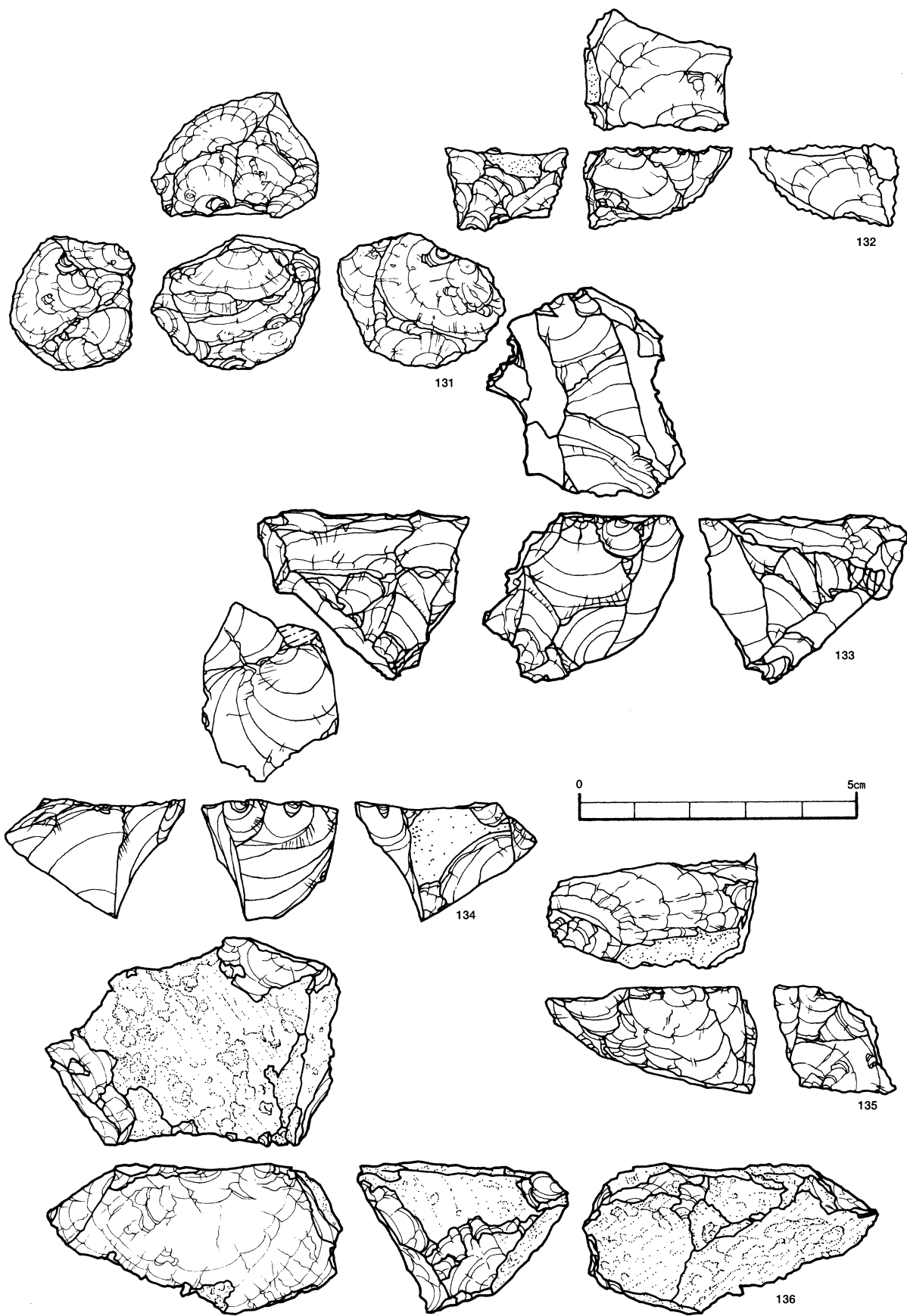
第44图 X III層石器 (7)



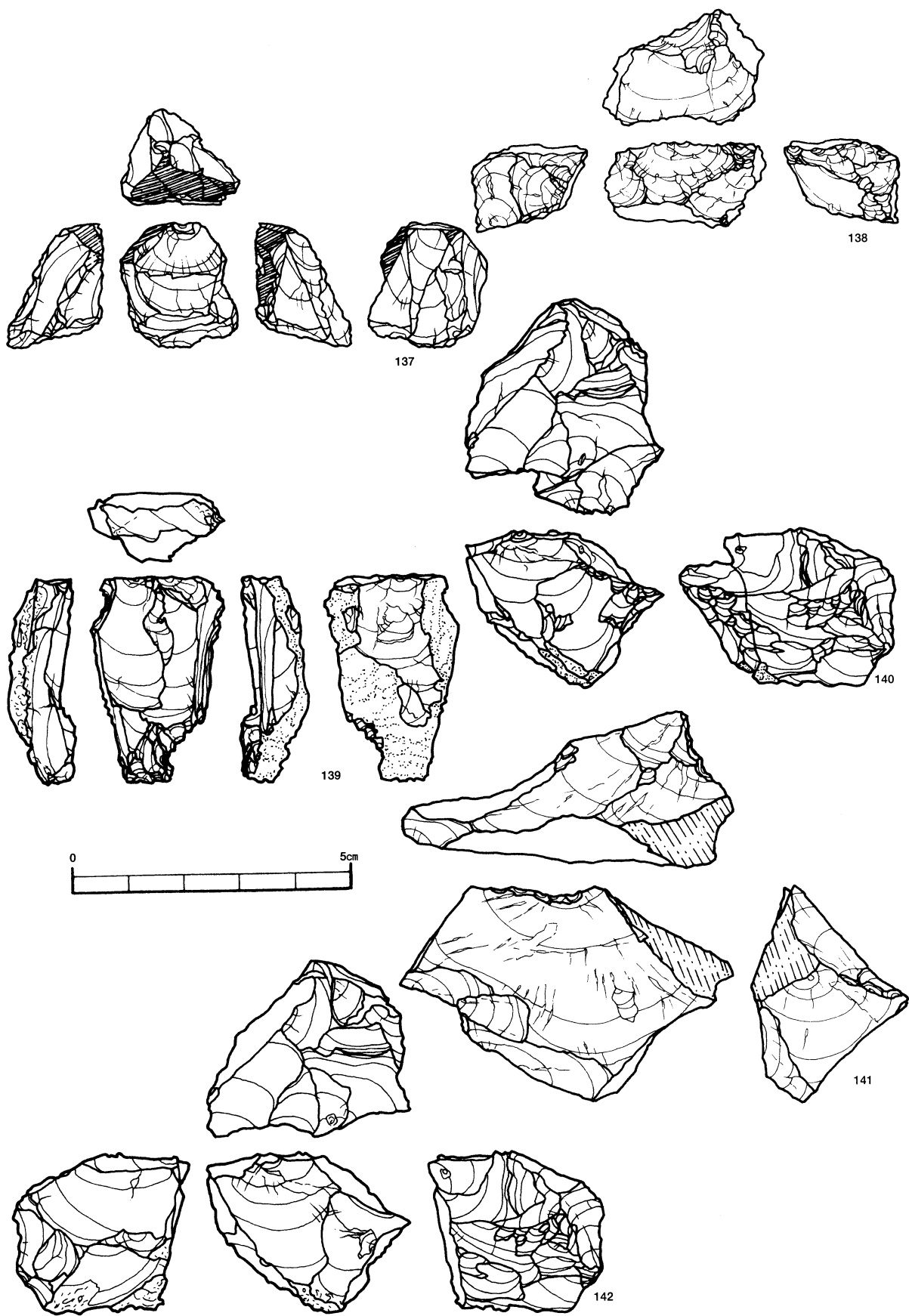
第45图 X III層石器 (8)



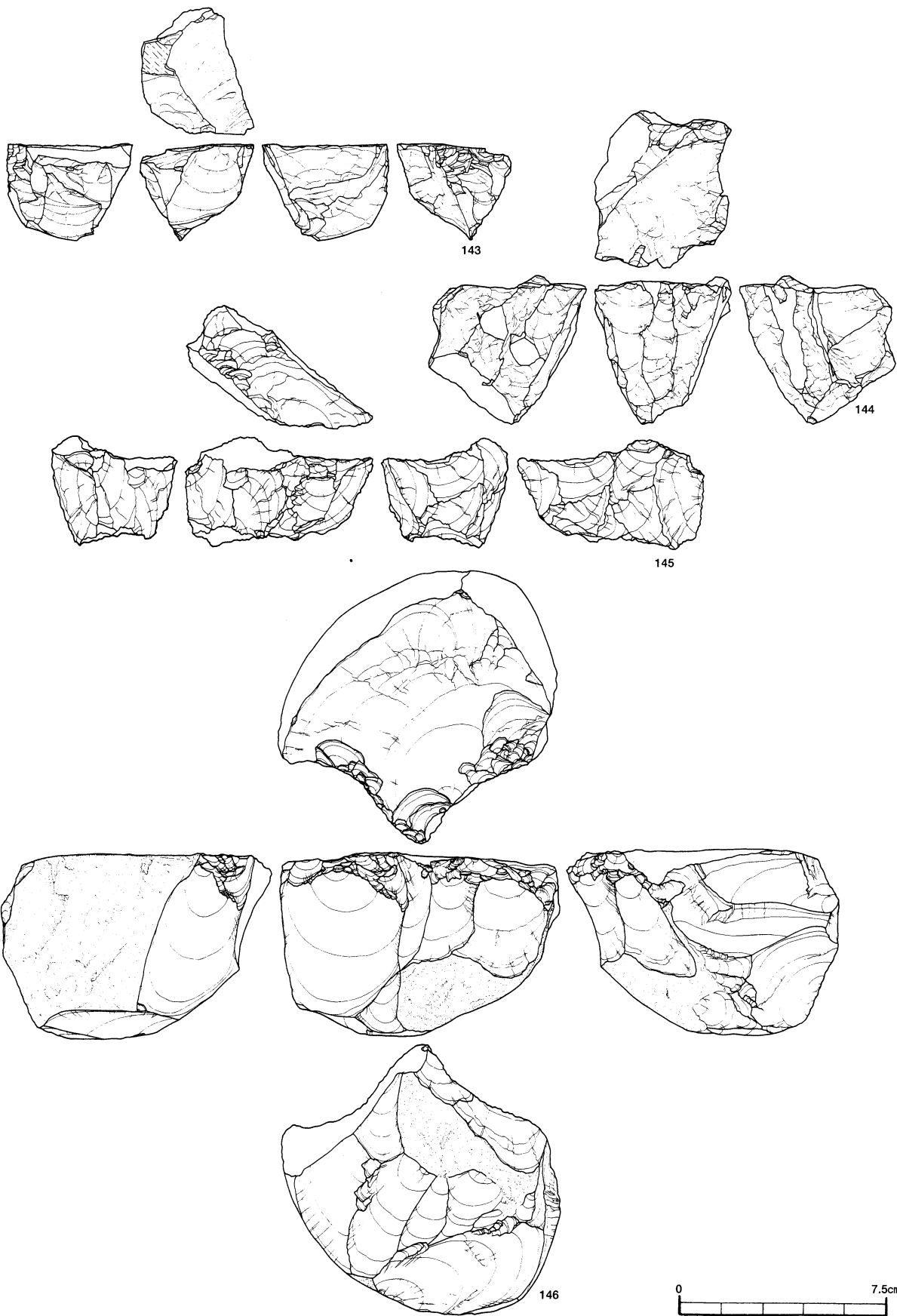
第46図 XⅢ層石器(9)



第47图 X III層石器 (10)



第48图 X III層石器 (11)



第49图 X III層石器 (12)

D- (117・125・130)

CまたはD- (86・91・103)

剥片も石核と同様、Aを基本としてその他の技術を利用している様子が窺える。

5-2 各ブロックの概要

各ブロックの概要を以下に述べる。

(1) Aブロック

AブロックはA-3区を中心に5×6mの範囲で遺物が集中しており、当該層における最大のブロックである。ナイフ形石器16点、搔器・削器4点、石核8点、敲石1点、三稜尖頭器3点を組成している。石材は黒曜石、頁岩、チャートなど多様である。

Aブロック石器組成重量表

ナイフ形石器	搔器・削器	石核	敲石	三稜尖頭器
16点	4点	8点	1点	3点
120.40 g	86.38 g	154.00 g	36.78 g	14.07 g

(2) Bブロック

BブロックはB-2区を中心に2×3mの範囲で遺物が集中しており、チャートを主体とする小規模なブロックである。石核1点、搔器・削器1点を組成する。

Bブロック石器組成重量表

石核	搔器・削器
1点	1点
131.40 g	84.87 g

(3) Cブロック

CブロックはD-2・3区を中心に8×12mの範囲で遺物が集中しており、黒曜石と頁岩が主体のブロックである。ナイフ形石器1点、搔器・削器2点、石核1点、三稜尖頭器1点を組成する。

Cブロック石器組成重量表

ナイフ形石器	搔器・削器	石核	三稜尖頭器
1点	2点	1点	1点
2.45 g	17.35 g	16.48 g	14.18 g

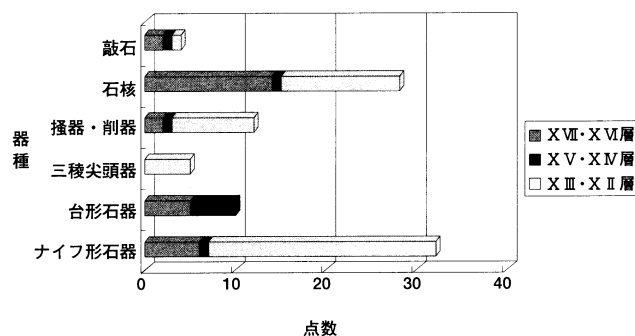
(4) Dブロック

DブロックはB-3区を中心に4×4mの範囲で遺物が集中しており、チャートを主体とするブロックである。ナイフ形石器2点、石核1点を組成する。

Dブロック石器組成重量表

ナイフ形石器	石核
2点	1点
7.67 g	81.83 g

各文化層ごとの石器組成の変化



(5) Eブロック

EブロックはD-3区を中心に7×5mの範囲で遺物が集中しており、石核3点を組成する。石材は流紋岩、赤色チャート、頁岩、水晶など多様である。

Eブロック石器組成重量表

石核
3点
772.2g

(6) Fブロック

FブロックはC-2区を中心に4×4.5mの範囲で遺物が集中しており、石核1点を組成する。石材は黒曜石で、重量8.93gである。

6 XII層

A~D-2・3・4区に分布が認められる。また、ナイフ形石器等の主要石器はA-3区に集中する傾向が読み取れる。

ナイフ形石器(5点)、三稜尖頭器(1点)、搔器(1点)、二次加工痕のある剥片(3点)を主体に、折断剥片(5点)が加わる構成である。なお、石核(1点)も存在し、剥片やチップも一定の範囲に分布することから石器製作が行われた可能性を指摘できる。また、168の細石刃に近い資料もあるが、細石核等は認められない。

(1) ナイフ形石器(147・148・149・153・155)

147は切出形石器と呼称されるもので、本体の二側縁に刃潰し加工を施し、刃部は斜めに設定されている。正面と裏面の剥離方向はほぼ直行し、刃潰し加工は裏面から実施している。148は厚手の剥片を用いたもので、左側縁に急角度の刃潰し加工を観察できる。149は気泡の多い黒曜石を使用したもので、左側縁の内外面に刃潰し加工を施し、右側縁は剥離面をそのまま活かしている。先端部は欠落しているが、刃部は斜めに設定されている。153は断面三角形の側縁に刃潰し加工を施したもので、先端の一部は欠損している。155は基部が欠落したもので、二側縁に刃潰し加工が認められ特に、右側縁は明瞭である。正面が摂理面に該当するようで確実ではないが、裏面と剥離方向が異なるようである。

(2) 三稜尖頭器(154)

体部右側が大きく欠損したものと判断している。稜の高い剥片素材に裏面から急角度の調整剥離が認められるが、後退した感は否めない。

(3) 搔器(156)

正面の一部に礫面を残すことから、円礫を分割したものを使用したと判断される。刃部は両側縁に裏面からの急角度剥離で設定され、上下両端も分割しているが特に刃部形成は認められない。

(4) 二次加工痕のある剥片(150・152・172)

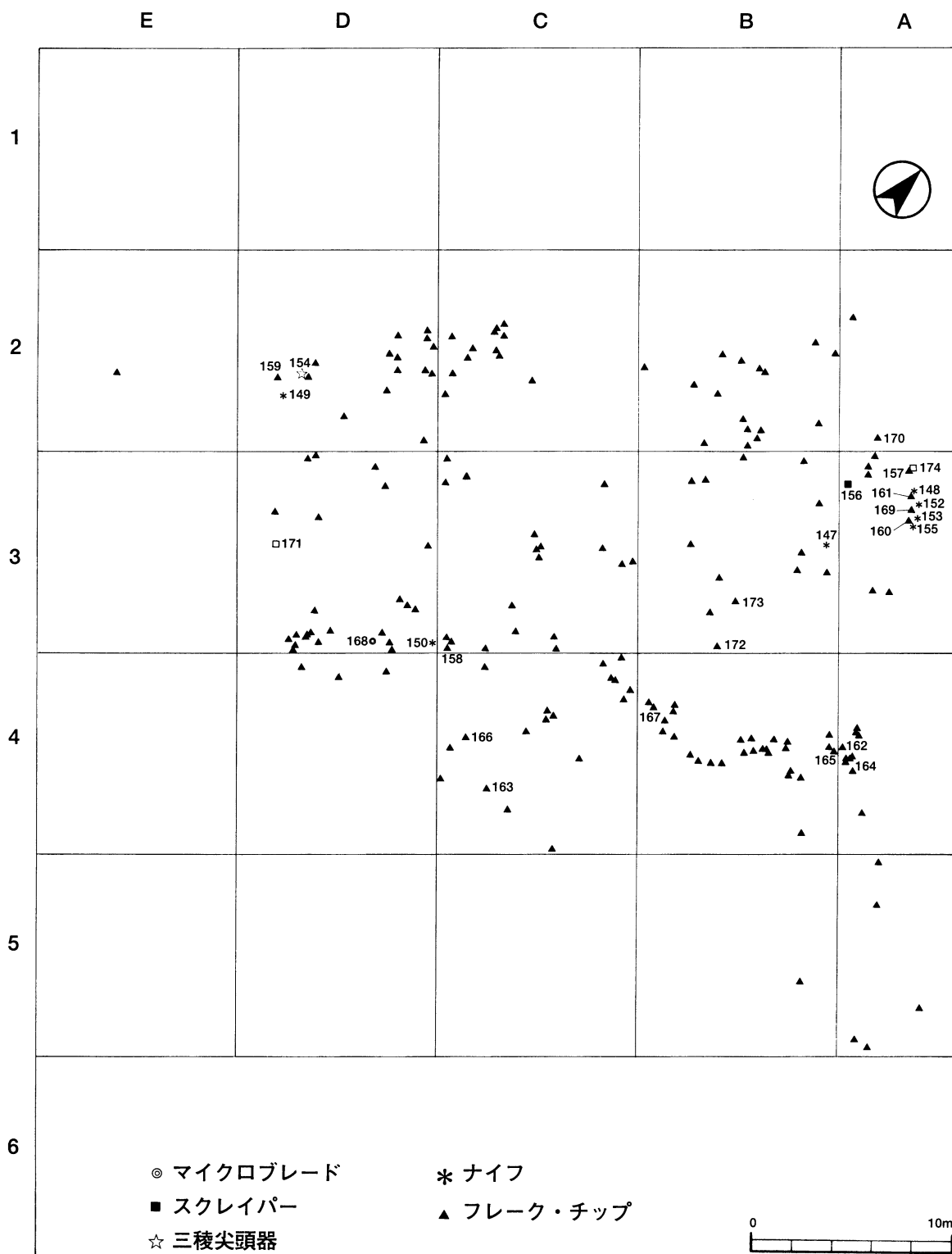
152は不定形剥片の一部に加工を加えたもので、その形状から削器様の機能は備えていると思われる。150は第1剥片の一部に二次加工が認められ、左側縁には使用痕らしき微細な痕跡を観察できる。172も不定形剥片の一部に粗い二次加工が認められる。

(5) 折断剥片(159・160・161・165・170)

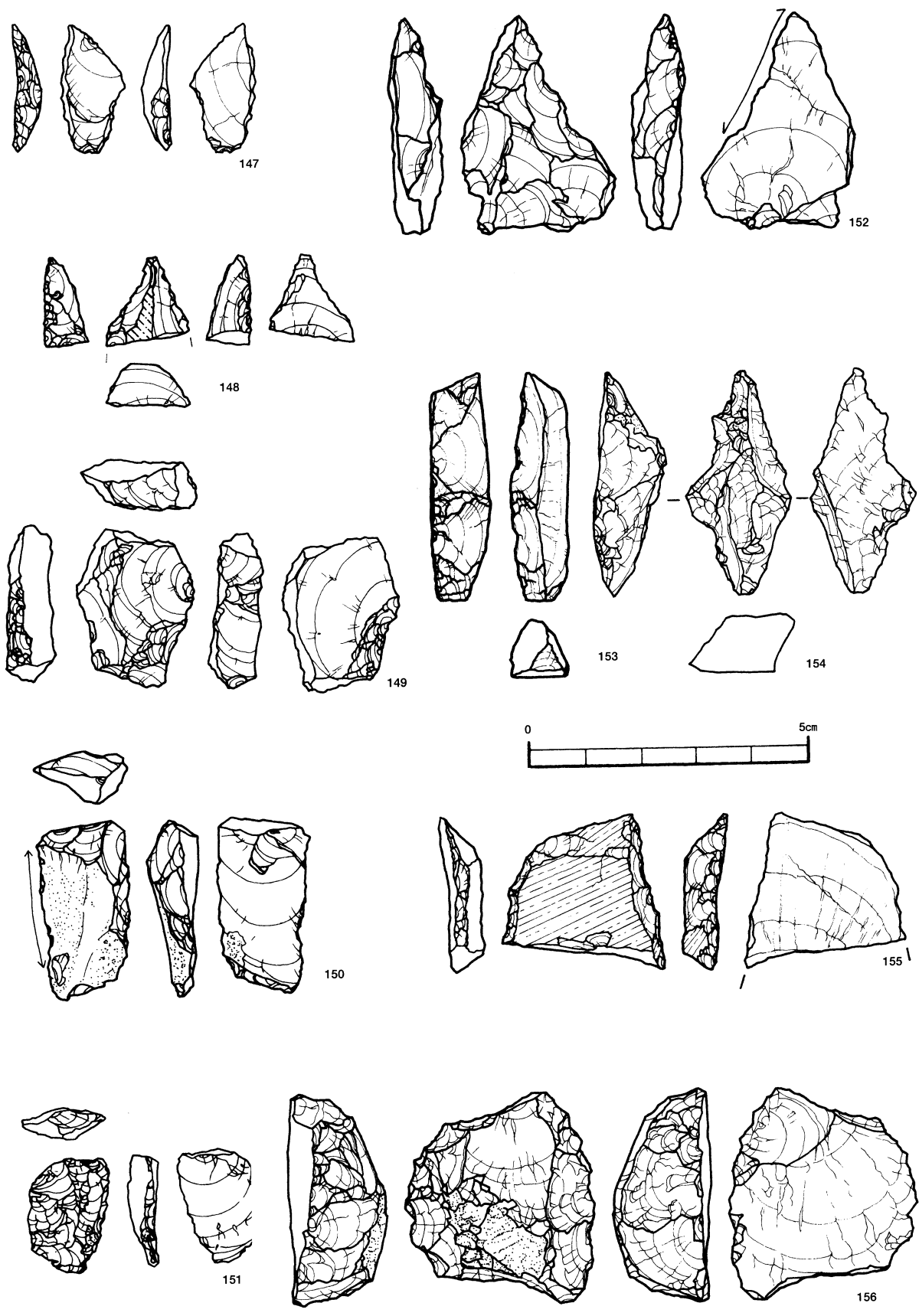
160を除き単設打面をもつ縦長剥片を分割している。素材剥片としての機能は充分備えていると思われるが、これらを素材とした石器は確認されない。

(6) 石核 (174)

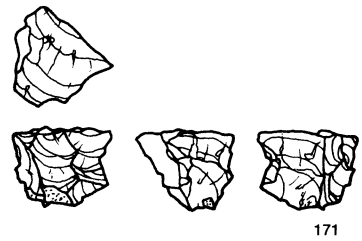
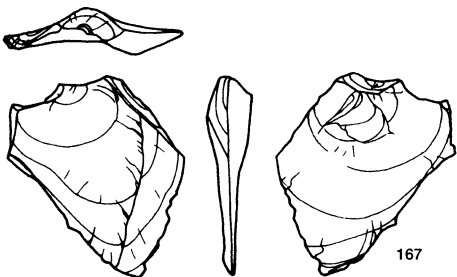
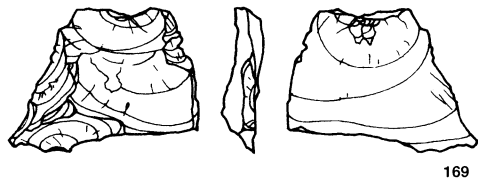
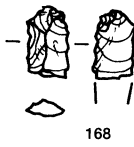
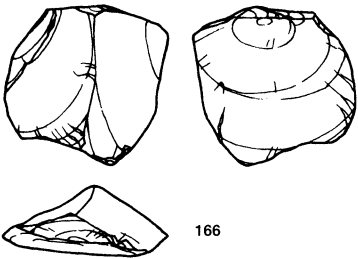
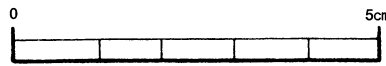
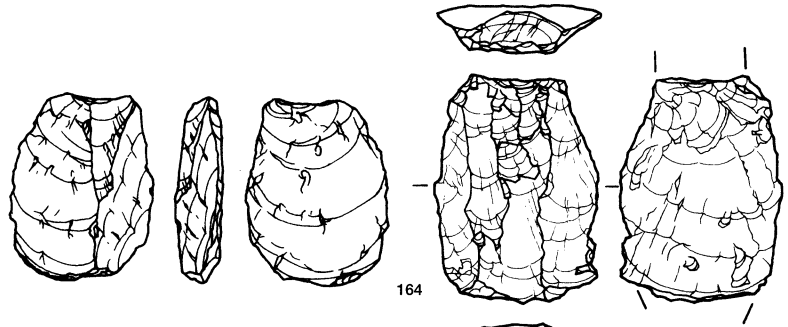
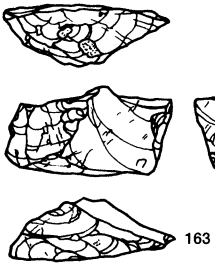
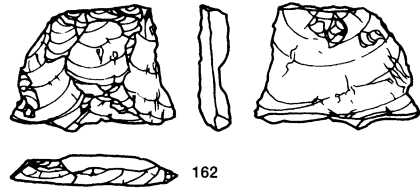
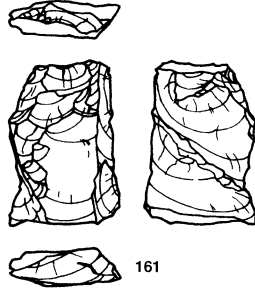
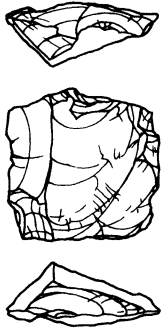
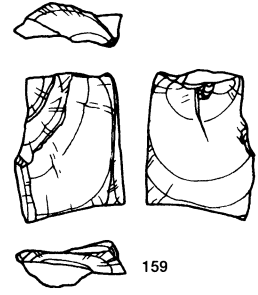
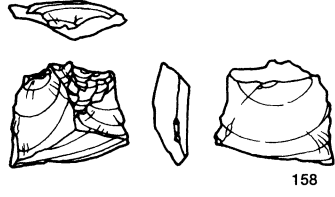
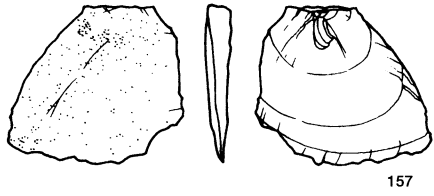
174は両側縁を構成する剥離面は先行する剥離で、不定形な剥片を生産している。図示した作業面は最終面に相当し、狭小な打面から縦長剥片を剥ぎ出している。



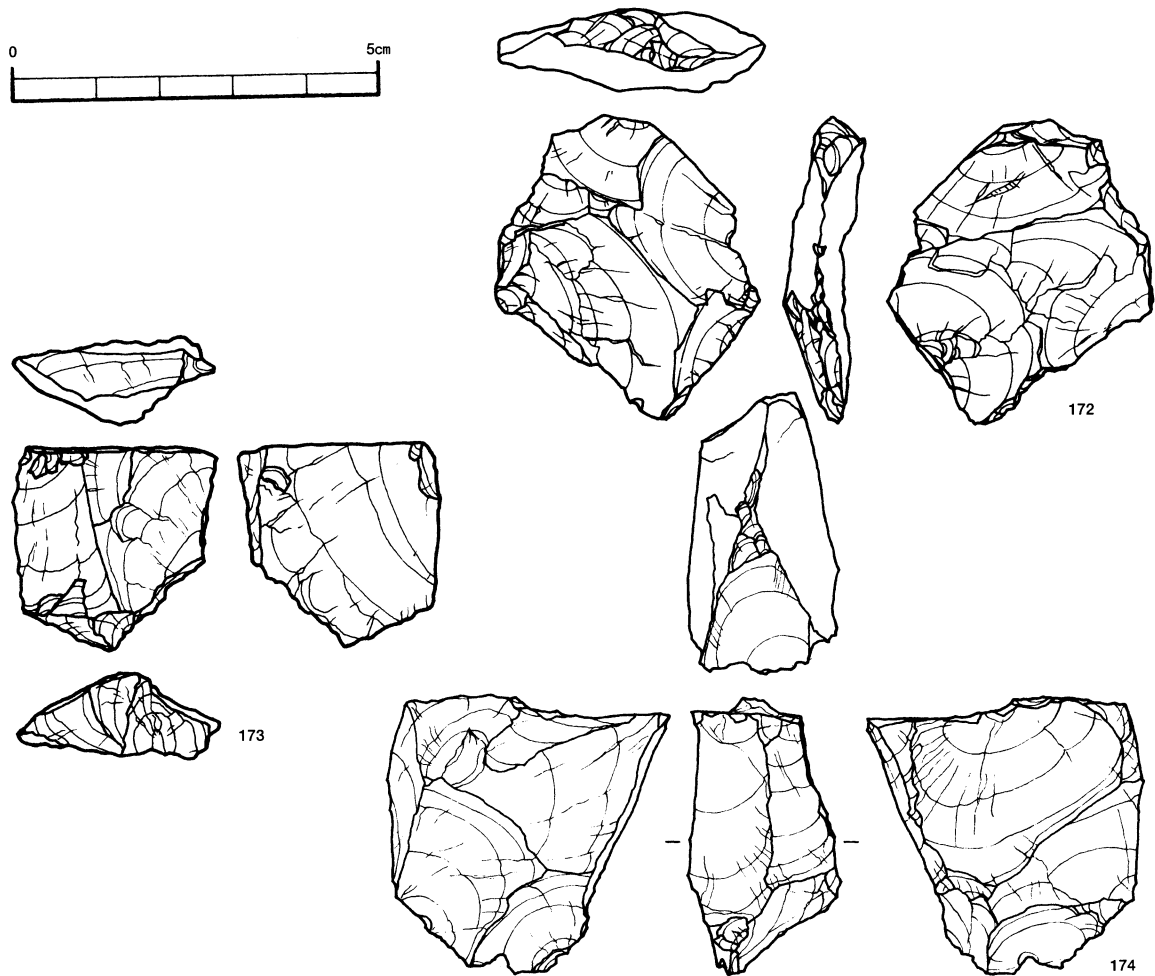
第50図 X I ~ X II 石器出土状況



第51图 X II层石器 (1)



第52图 X II層石器(2)



第53図 X II層石器 (3)

表6 石器観察表 (1)

挿図	番号	層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
23	1	X VII	剥片	1.82	1.58	0.70	1.38	水晶	
	2	X VII	剥片	4.68	2.51	0.75	11.35	黒曜石	
	3	X VII	剥片	3.30	1.76	0.72	3.49	黒曜石	
	4	X VII	石核	2.28	3.02	2.43	11.25	黒曜石	
	5	X VII	石核	2.98	3.68	3.08	28.18	黒曜石	
24	6	X VII	ハンマー・ストーン	6.15	4.97	3.71	149.13	ホルンフェルス	
	7	X VII	石核	2.76	5.48	3.78	61.38	チャート	
26	8	X VI	台形石器	2.52	2.10	0.72	3.17	頁岩	
	9	X VI	台形石器	2.08	1.70	0.77	1.56	頁岩	
	10	X VI	台形石器	2.75	1.88	0.72	2.50	石英	
	11	X VI	台形石器	2.67	2.32	0.98	4.08	石英	
	12	X VI	ナイフ形石器	2.78	1.75	0.95	3.41	黒曜石	
	13	X VI	ナイフ形石器	3.46	1.25	1.42	6.73	黒曜石	
	14	X VI	台形石器	2.48	1.30	0.66	1.46	黒曜石	
27	15	X VI	搔器	3.00	3.20	1.95	11.91	石英	
	16	X VI	ナイフ形石器	2.48	1.92	0.80	2.78	石英	
	17	X VI	ナイフ形石器	5.72	2.85	1.32	16.45	黒曜石	
	18	X VI	ナイフ形石器	4.97	3.70	1.22	—	?	

表7 石器観察表(2)

挿図	番号	層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
27	19	X VI	ナイフ形石器	6.51	4.27	2.30	44.08	黒曜石	
28	20	X VI	搔器	3.72	2.57	0.90	6.61	石英	
	21	X VI	剥片	4.02	2.88	0.93	11.72	チャート	
	22	X VI	剥片	2.56	2.40	0.62	2.17	石英	
	23	X VI	剥片	3.41	2.18	0.90	4.31	黒曜石	
	24	X VI	剥片	5.00	3.85	1.39	17.83	頁岩	
	25	X VI	剥片	3.86	1.50	1.15	3.41	黒曜石	
	26	X VI	剥片	4.25	2.72	1.14	6.84	頁岩	
29	27	X VI	剥片	1.85	1.50	0.60	1.06	頁岩	
	28	X VI	剥片	1.72	2.14	0.58	1.46	石英	
	29	X VI	剥片	2.02	1.71	0.67	1.74	水晶	
	30	X VI	剥片	1.72	2.20	1.25	2.84	水晶	
	31	X VI	剥片	2.30	1.90	0.65	2.64	黒曜石	使用痕有り
	32	X VI	剥片	2.11	2.50	0.83	3.55	黒曜石	
	33	X VI	剥片	2.43	3.49	0.80	3.65	黒曜石	
	34	X VI	剥片	3.45	2.30	0.98	5.29	黒曜石	
	35	X VI	剥片	3.10	3.00	1.00	6.02	黒曜石	
	36	X VI	剥片	3.92	2.30	1.27	7.18	黒曜石	
	37	X VI	剥片	4.06	2.58	1.01	8.11	黒曜石	
30	38	X VI	石核	1.65	2.00	1.83	5.91	石英	
	39	X VI	石核	1.66	2.43	2.75	8.53	黒曜石	
	40	X VI	石核	2.20	2.80	2.10	9.65	黒曜石	
	41	X VI	石核	2.90	2.85	4.22	29.23	チャート	
	42	X VI	石核	2.84	2.93	2.95	23.41	黒曜石	
	43	X VI	石核	2.16	3.98	3.05	23.98	黒曜石	
31	44	X VI	石核	4.25	5.60	2.97	58.64	チャート	
	45	X VI	石核	5.08	3.40	2.70	37.96	黒曜石	
	46	X VI	石核	3.93	4.78	3.52	74.67	頁岩	
32	47	X VI	ハンマー・ストーン	5.52	2.89	1.61	32.32	ホルンフェルス	ストーン・ストレッチャー
	48	X VI	石核	3.63	4.50	4.70	66.27	黒曜石	
	49	X VI	石核	3.25	6.35	4.92	102.21	安山岩	
34	50	X V	台形石器	2.42	1.56	0.85	2.32	黒曜石	
	51	X V	台形石器	2.52	2.08	0.81	3.61	チャート	
	52	X V	台形石器	2.04	1.63	0.90	2.74	黒曜石	
	53	X V	剥片	2.32	3.52	0.88	4.22	黒曜石	
	54	X V	剥片	2.10	3.60	0.90	5.50	石英	使用痕有り
	55	X V	石核	3.25	2.49	3.72	33.93	黒曜石	
	56	X V	ハンマー・ストーン	4.30	2.85	2.47	41.31	安山岩	
	57	X V	剥片	3.80	2.35	1.38	3.68	頁岩	
36	58	X IV	搔器	1.33	2.25	1.10	2.72	石英	
	59	X IV	台形石器	2.22	2.20	1.02	3.27	黒曜石	
	60	X IV	台形石器	2.80	2.60	0.81	3.57	黒曜石	
	61	X IV	ナイフ形石器	3.80	2.35	1.38	8.91	チャート	
	62	X IV	剥片	6.45	4.25	2.33	51.68	チャート	
	63	X III	ナイフ形石器	3.55	1.92	8.50	2.45	流紋岩	
38	64	X III	ナイフ形石器	3.95	1.75	0.87	4.60	チャート	
	65	X III	ナイフ形石器	4.58	1.85	1.14	7.30	シルト質頁岩	
	66	X III	ナイフ形石器	4.45	2.13	1.15	9.62	チャート	
	67	X III	ナイフ形石器	3.98	1.82	1.05	5.24	チャート	
	68	X III	ナイフ形石器	3.82	2.20	0.80	5.02	チャート	
	69	X III	ナイフ形石器	4.12	1.82	1.80	6.81	チャート	
	70	X III	ナイフ形石器	5.41	1.96	1.16	10.40	頁岩	
	71	X III	ナイフ形石器	4.46	1.73	1.35	5.84	チャート	
39	72	X III	ナイフ形石器	5.66	1.70	1.48	9.52	頁岩	
	73	X III	ナイフ形石器	4.93	1.70	1.98	12.76	頁岩	

表8 石器観察表(3)

挿図	番号	層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	備 考
39	74	X III	ナイフ形石器	5.25	1.90	1.46	10.73	頁岩	
	75	X III	三稜尖頭器	1.71	1.40	0.90	1.77	チャート	基部・基部の裏面加工
	76	X III	三稜尖頭器	2.95	1.68	1.15	4.77	流紋岩	基部・基部の裏面加工
	77	X III	三稜尖頭器	5.03	1.28	1.36	7.53	黒曜石	
40	78	X III	ナイフ形石器	2.40	2.78	1.36	5.76	チャート	
	79	X III	三稜尖頭器	4.98	1.93	1.80	14.18	黒曜石	
	80	X III	ナイフ形石器	3.15	1.62	0.89	3.48	頁岩	
	81	X III	ナイフ形石器	2.52	1.82	0.65	1.91	チャート	
	82	X III	ナイフ形石器?	5.95	2.00	1.97	14.72	チャート	二方向からの背面加工
	83	X III	ナイフ形石器	3.25	2.51	1.40	6.59	チャート	
	84	X III	ナイフ形石器	3.20	2.25	1.12	5.50	黒曜石	
41	85	X III	ナイフ形石器	3.95	2.63	1.80	12.22	チャート	
	86	X III	剥片	1.45	1.68	3.30	0.61	頁岩	折断剥片
	87	X III	剥片	2.54	1.58	0.42	1.06	流紋岩	折断剥片
	88	X III	剥片	2.15	2.75	1.06	4.63	チャート	折断剥片
	89	X III	剥片	2.28	3.10	1.10	5.26	黒曜石	折断剥片
	90	X III	剥片	2.92	2.72	1.17	5.94	チャート	
	91	X III	剥片	2.25	1.78	0.43	0.90	チャート	
	92	X III	剥片	2.65	1.93	0.72	2.97	チャート	
	93	X III	剥片	3.65	2.48	1.26	5.93	チャート	
	94	X III	剥片	3.78	1.95	0.60	3.86	流紋岩	
42	95	X III	剥片	1.78	2.32	0.55	1.62	流紋岩	
	96	X III	剥片	2.00	3.30	0.75	3.24	チャート	
	97	X III	剥片	2.05	2.67	1.10	4.05	チャート	
	98	X III	剥片	2.50	2.60	0.98	3.48	黒曜石	
	99	X III	剥片	1.72	1.63	0.65	1.15	黒曜石	
	100	X III	剥片	1.62	2.40	0.76	1.49	チャート	
	101	X III	剥片	2.50	2.78	0.88	3.93	黒曜石	
	102	X III	剥片	1.30	2.07	0.40	0.60	チャート	
	103	X III	剥片	2.08	3.10	0.60	2.19	チャート	
	104	X III	剥片	2.38	3.92	8.80	6.69	頁岩	
	105	X III	剥片	2.60	2.59	1.02	3.22	チャート	
43	106	X III	剥片	2.40	4.00	0.88	3.64	流紋岩	
	107	X III	基部?	3.81	4.22	1.71	20.87	チャート	
	108	X III	削器	3.92	3.65	1.83	22.84	チャート	
	109	X III	ハンマー・ストーン	5.85	3.50	2.12	36.78	砂岩	
44	110	X III	削器	7.50	5.22	2.01	84.87	チャート	
	111	X III	搔器	2.67	2.30	1.30	5.77	白瑪瑙	
	112	X III	削器	5.18	2.75	1.50	19.41	黒曜石	
	113	X III	搔器	3.25	3.00	1.55	11.88	黒曜石	
	114	X III	搔器	3.68	2.48	1.71	11.58	黒曜石	
	115	X III	搔器	2.66	3.30	1.38	10.68	黒曜石	
	116	X III	削器	3.68	5.26	1.97	32.45	黒曜石	
45	117	X III	剥片	2.37	3.60	1.00	6.66	チャート	
	118	X III	剥片	3.76	3.15	1.05	5.98	安山岩	
	119	X III	剥片	2.08	2.20	0.60	2.19	チャート	
	120	X III	剥片	3.12	1.70	1.17	4.88	流紋岩	
	121	X III	剥片	3.87	4.32	1.18	10.88	チャート	
	122	X III	剥片	2.22	2.30	1.10	—	赤色チャート	142と接合
	123	X III	剥片	11.00	4.18	1.15	10.06	安山岩	
	124	X III	剥片	3.20	2.05	0.95	4.54	チャート	
	125	X III	剥片	2.26	1.40	0.55	1.24	チャート	使用痕有り
	126	X III	剥片	4.07	3.49	1.35	11.66	黒曜石	
46	127	X III	剥片	4.05	2.36	1.25	9.84	チャート	
	128	X III	剥片	6.62	4.52	2.12	42.97	流紋岩	

表9 石器観察表(4)

挿図	番号	層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
46	129	X III	剥片	6.12	2.95	1.62	14.18	流紋岩	
	130	X III	剥片	8.00	4.35	2.24	54.59	チャート	
47	131	X III	石核	2.45	3.08	2.28	16.48	黒曜石	
	132	X III	石核	1.53	2.70	2.20	8.69	チャート	
	133	X III	石核	3.11	3.61	3.83	29.44	頁岩	
	134	X III	石核	2.21	2.49	3.28	14.45	頁岩	
	135	X III	石核	1.95	3.85	2.12	14.03	チャート	
	136	X III	石核	3.82	5.30	2.73	42.22	黒曜石	
48	137	X III	石核	2.29	2.16	1.80	6.23	水晶	
	138	X III	石核	1.60	2.95	2.12	8.93	黒曜石	
	139	X III	石核	3.76	2.46	1.29	8.96	白瑪瑙	
	140	X III	石核	2.88	3.60	3.92	33.40	赤色チャート	122・142を接合
	141	X III	石核	3.90	6.00	2.85	36.21	チャート	
49	142	X III	石核	2.92	3.70	3.21	—	赤色チャート	122と接合
	143	X III	石核	3.52	4.16	4.55	—	?	
	144	X III	石核	5.85	4.90	5.32	131.40	チャート	
	145	X III	石核	3.93	6.72	4.42	81.83	チャート	
	146	X III	石核	6.65	10.00	9.73	738.00	流紋岩	
	51	147	X II	ナイフ形石器	2.32	1.22	0.55	1.16	チャート
148		X II	ナイフ形石器	1.60	1.50	0.82	1.28	頁岩	基部欠落
149		X II	ナイフ形石器	2.85	2.13	0.91	5.19	黒曜石	
150		X II	剥片	3.22	1.65	0.93	4.06	頁岩	
151		X II	剥片	2.07	1.50	0.60	1.31	黒曜石	加工痕のある剥片
152		X II	剥片	3.92	2.76	0.96	8.07	チャート	
153		X II	ナイフ形石器	4.13	1.15	1.10	4.98	チャート	一側縁加工
154		X II	三稜尖頭器	4.03	1.90	1.25	5.64	黒曜石	未製品?
155		X II	ナイフ形石器	2.82	2.95	0.72	5.07	チャート	基部欠落
156		X II	搔器	3.80	3.45	1.80	22.29	黒曜石	
52	157	X II	剥片	2.15	2.42	0.38	1.48	頁岩	
	158	X II	剥片	1.45	1.63	0.55	0.93	頁岩	
	159	X II	剥片	2.05	1.50	0.45	1.13	頁岩	折断剥片
	160	X II	剥片	2.07	2.13	0.85	3.67	チャート	折断剥片
	161	X II	剥片	2.20	1.54	0.55	1.67	チャート	折断剥片
	162	X II	剥片	1.75	2.25	0.45	1.43	黒曜石	
	163	X II	剥片	1.22	2.30	0.85	1.89	黒曜石	折断剥片 頭部の折断
	164	X II	剥片	2.56	1.95	0.70	2.61	黒曜石	
	165	X II	剥片	3.15	2.25	0.70	5.13	黒曜石	折断剥片
	166	X II	剥片	2.20	2.25	0.95	4.05	頁岩	
	167	X II	剥片	2.76	2.45	0.40	1.98	頁岩	
	168	X II	細石刃?	1.00	0.62	0.25	0.10	黒曜石	
	169	X II	剥片	2.00	2.62	0.50	1.73	チャート	
	170	X II	剥片	1.53	1.60	0.53	0.82	黒曜石	折断剥片
53	171	X II	ブランク(母核)	1.15	1.40	1.20	1.50	黒曜石	
	172	X II	剥片	4.18	3.63	1.15	9.09	チャート	加工痕有り
	173	X II	剥片	2.85	2.88	1.25	8.53	チャート	
	174	X II	石核	3.87	3.90	2.10	25.79	頁岩	

第4章 縄文時代草創期の調査

第1節 調査の概要

縄文時代草創期の遺構及び遺物は、第Ⅹ層から検出されている。調査区域の第Ⅹ層は、全体にわたり良好に堆積している。しかし、場所によってはⅨ層のサツマ火山灰の堆積状況が悪く、Ⅷ層との分層が難しい箇所もある。

出土遺物は調査区域の北側の狭い範囲に散在した状態であった。遺物の量も極めて少ない。

遺物のなかで土器は小破片に加え、貝殻刺突文や条痕文も確認できることより、南九州の縄文早期前半の土器に類似していることを考慮し、図化しなかった。

石器では、石鏃、剥片、チップが出土した。石器の量も極めて少ない。

遺構としては、調査区東側の台地の縁辺部に沿って落とし穴状遺構2基を検出した。2号の上面プランが一部掘削されて全体像はつかめないが、形状や深さは1号と似ている。

第2節 遺構

第Ⅹ層から2基の落とし穴状遺構が検出された。2基の落とし穴状遺構は、調査区域東側の台地の縁辺部に沿って検出された。そのうち2号落とし穴状遺構は土層断面で検出されたものである。

1号落とし穴状遺構（第54図）

1号落とし穴状遺構は、ⅩⅠ層上面で検出したが埋土にⅨ層のサツマ火山灰が堆積しており、草創期の落とし穴状遺構として判断したものである。上面プランは楕円形を呈し、長軸107cm、短軸75cm、底面の長軸62cm、短軸42cm、深さ115cmである。逆茂木痕は確認できなかった。

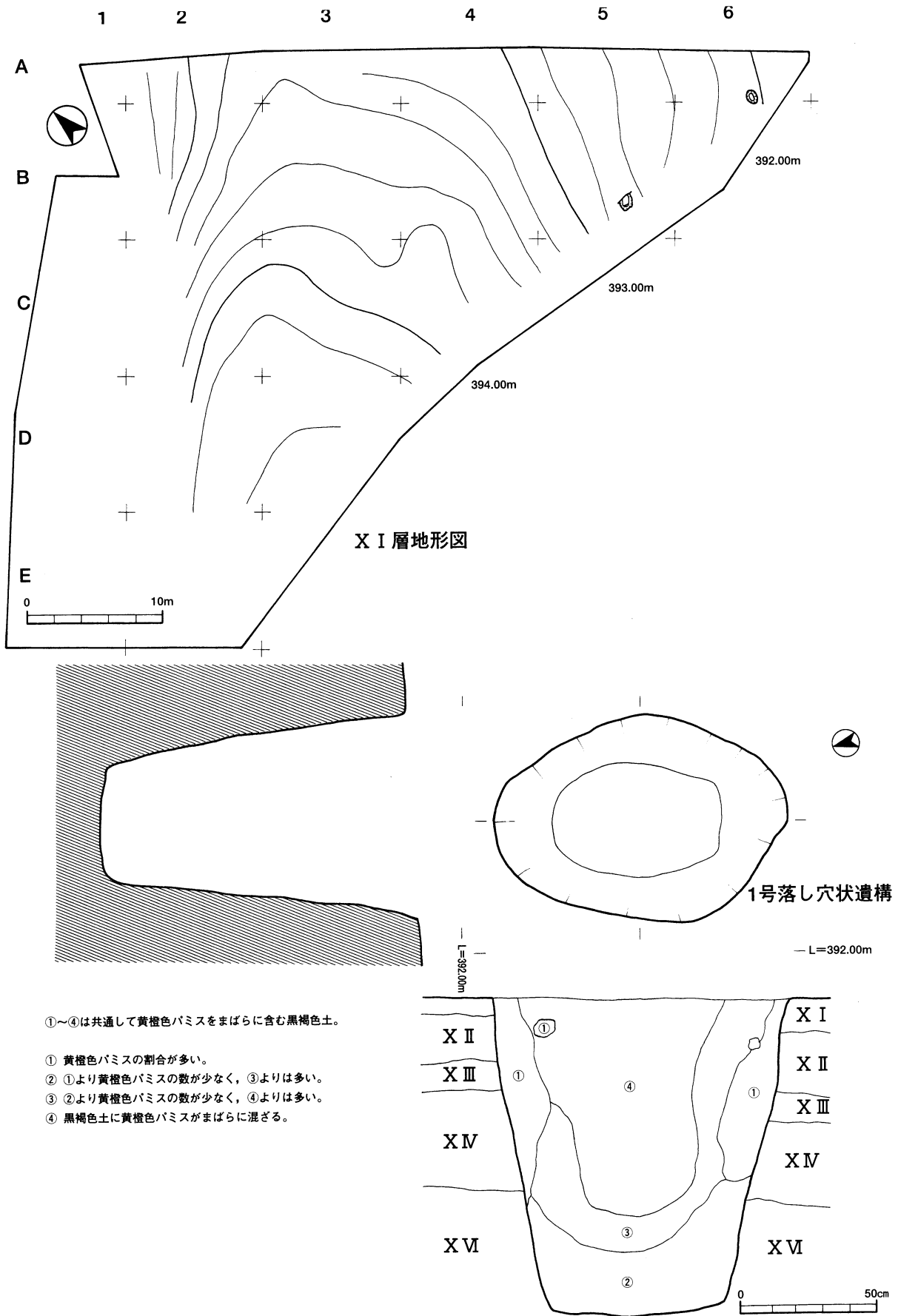
2号落とし穴状遺構（第55図）

2号落とし穴状遺構は、土層断面で検出されたもので北側部分が一部掘削されている。上面プランは楕円形を呈し、残存部分での長軸は125cm、短軸が112cm、底面の長軸92cm、短軸45cm、深さ117cmである。埋土にはⅨ層のサツマ火山灰が上部にレンズ状堆積していた。底には逆茂木痕と思われるピットが5基確認され、逆茂木痕内の埋土はⅩ層が腐食したと思われる暗褐色土が検出された。

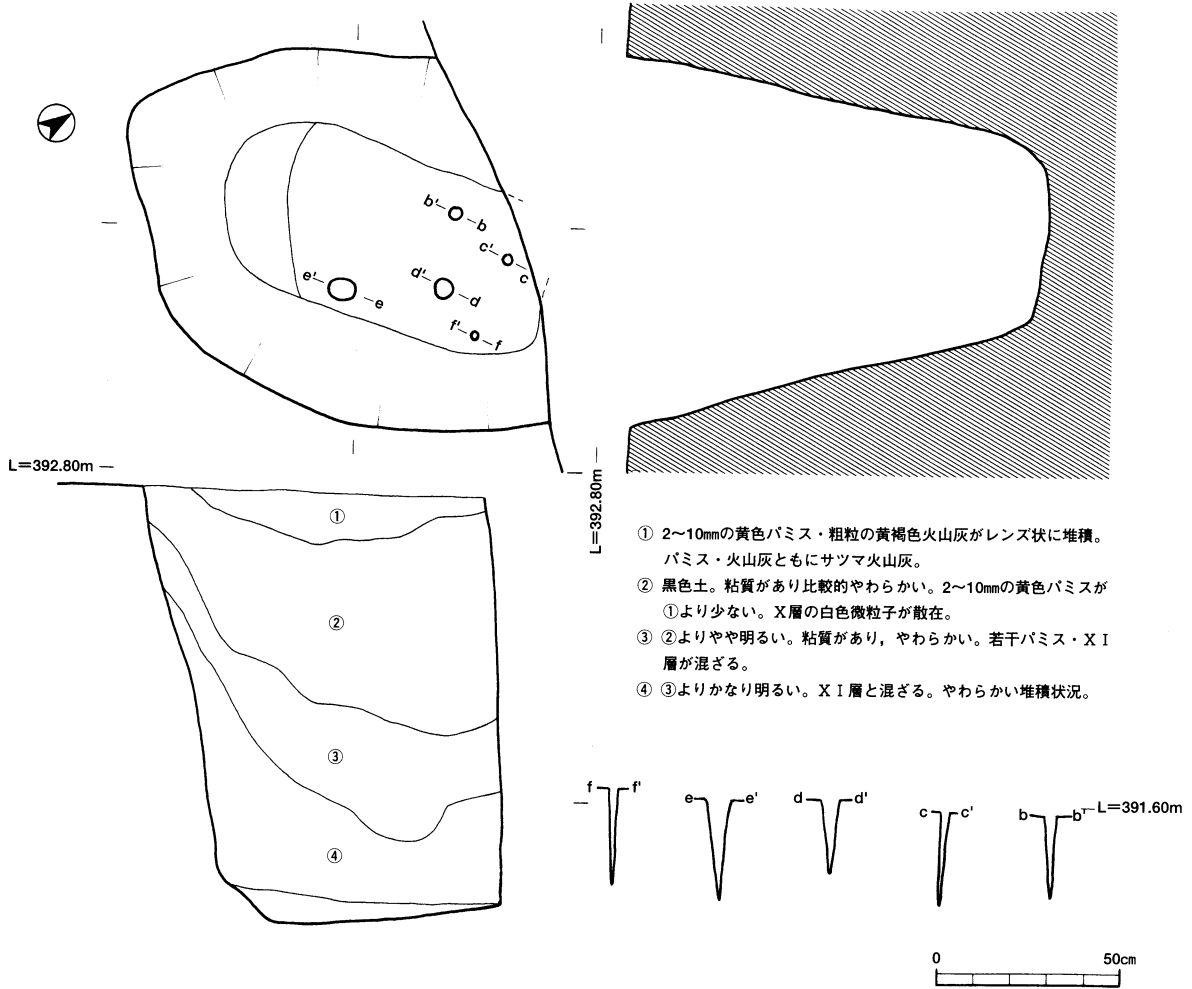
第3節 出土遺物

1 土器

第Ⅹ層の土器は、A-6区及びB-4・6区から出土した。A-6区及びB-4区から数十点出土したが、いずれも小破片で摩耗している。B-6区出土の土器は、黒褐色の色調の口縁部で、内側・外側ともにナデて器面調整を行っている。胎土・焼成も良好である。同じ区より出土した土器は黄褐色の胴部で、摩耗してるため器面調整ははっきりしないが、貝殻刺突状の施文が確認できる。もう1点の土器片は、黒褐色の色調の胴部で、内側に条痕の器面調整が見られる。これらの土器は、従来知られている形態から見ると縄文早期前半の貝殻文土器特有の形状と整形手法に近い。

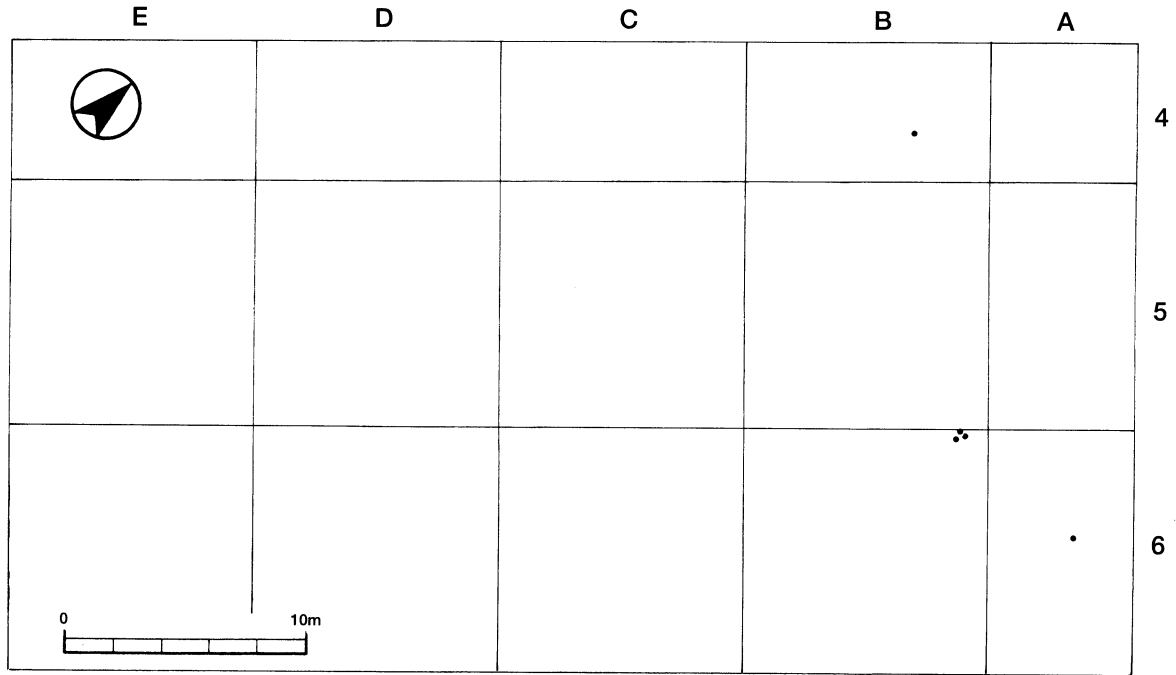


第54図 X I 層地形図及び X 層 1 号落とし穴状遺構

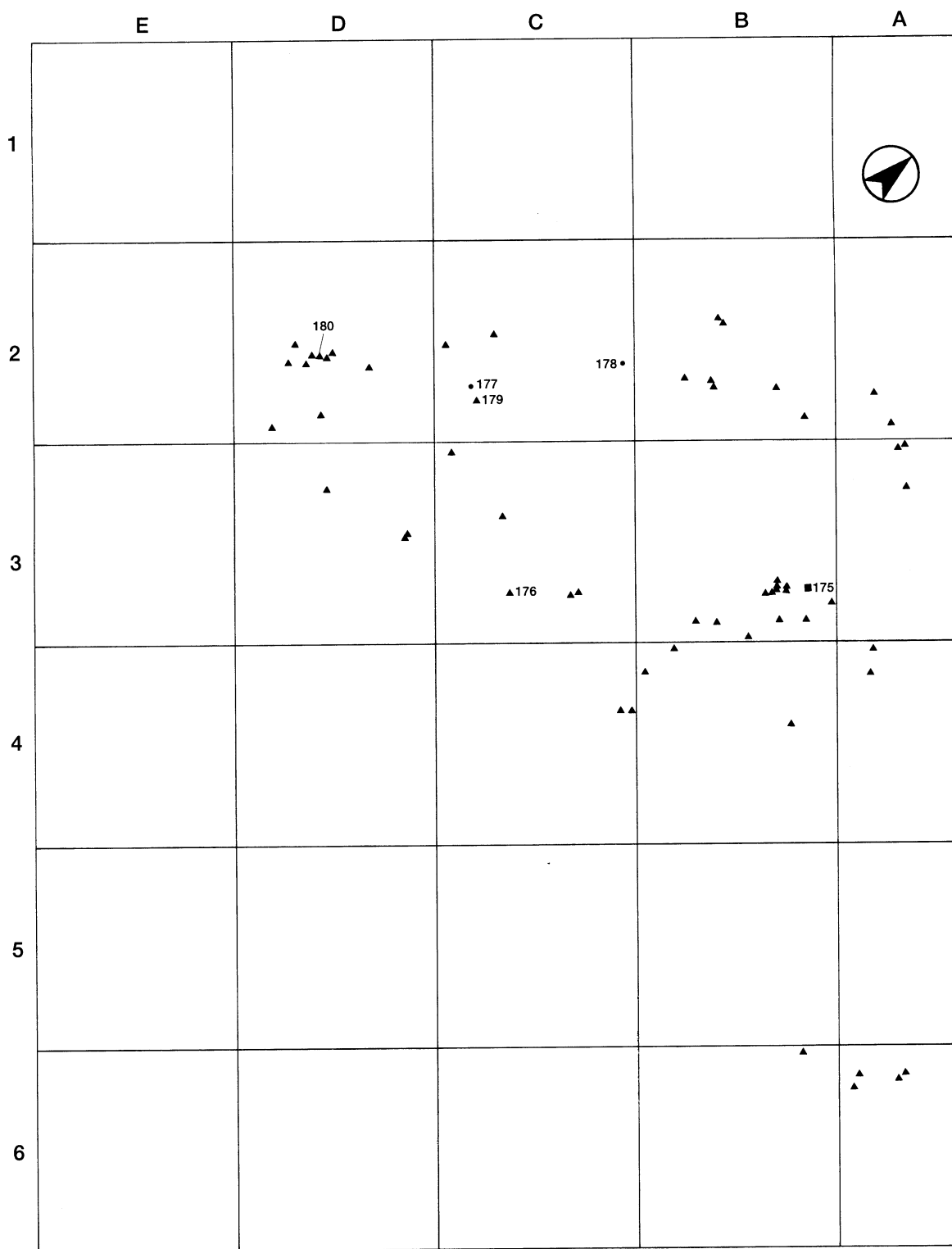


- ① 2~10mmの黄色バミス・粗粒の黄褐色火山灰がレンズ状に堆積。バミス・火山灰ともにサツマ火山灰。
- ② 黒色土。粘質があり比較的やわらかい。2~10mmの黄色バミスが①より少ない。X層の白色微粒子が散在。
- ③ ②よりやや明るい。粘質があり、やわらかい。若干バミス・X I層が混ざる。
- ④ ③よりかなり明るい。X I層と混ざる。やわらかい堆積状況。

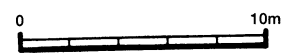
第55図 X層2号落とし穴状遺構



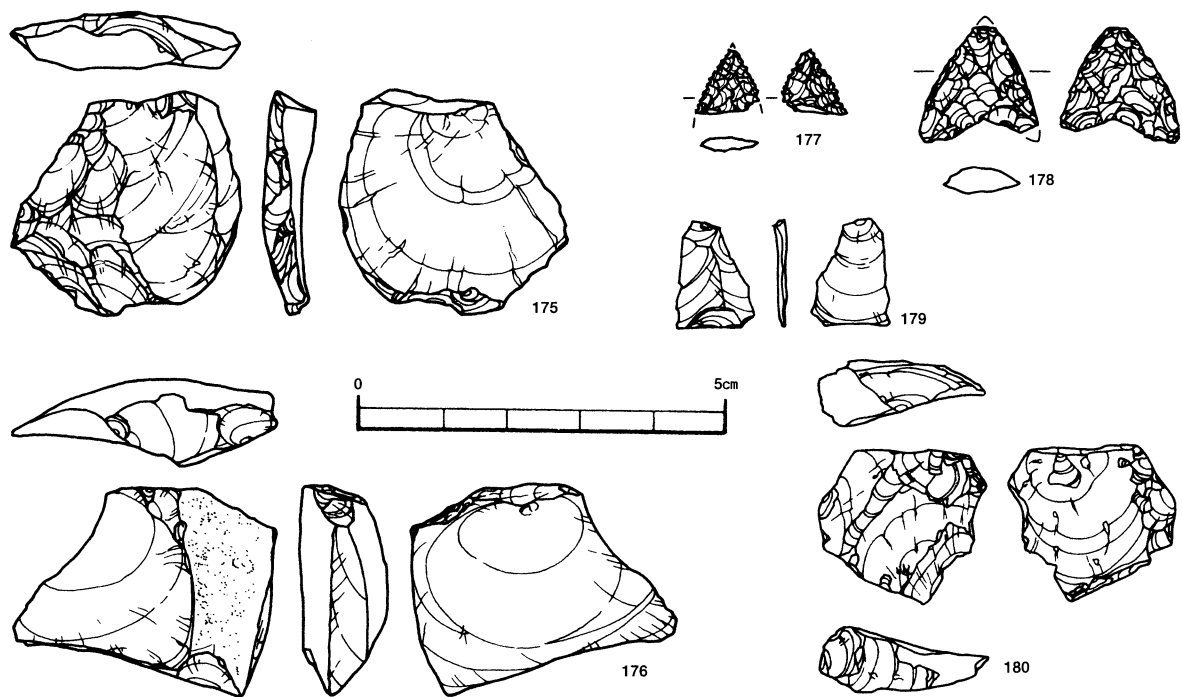
第56図 X層土器出土状況



- 石鏃
- スクレーパー
- ▲ フレーク・チップ



第57図 X層石器出土状況



第58図 X層石器

2 石器

石鏃2点と剥片，チップが出土している。

177の石鏃は，透明度の高い黒曜石を使用したもので，微細な剥離で仕上げている。178は縞状の斑紋を持つ流紋岩を使用したもので，脚部の長さが均一ではない。175の剥片は178と石材を一にする。179と180の剥片は落し穴状遺構から出土し，179は177の黒曜石と同一と見られるが，180は産地を異にする。176は摩耗面を持つ良質の円礫素材で，斑紋を持たない灰黒色の流紋岩である。

表10 石器観察表（5）

挿図	番号	層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
58	175	X	剥片	3.05	3.17	0.55	5.17	流紋岩	
	176	X	剥片	2.90	3.62	1.20	10.47	流紋岩	
	177	X	石鏃	0.90	0.90	0.20	0.11	黒曜石	
	178	X	石鏃	1.60	1.60	0.43	0.76	流紋岩	
	179	X	剥片	1.48	1.07	0.18	0.17	黒曜石	
	180	X	剥片	2.15	2.30	0.92	3.12	黒曜石	

第5章 縄文時代早期の調査

第1節 調査の概要

縄文時代早期の遺構及び遺物は、第Ⅵ～Ⅶ層で検出されている。これら早期の包含層はⅤ層下部のアカホヤ火山灰（6,300年前）と、Ⅸ層の桜島起源のサツマ火山灰（11,000年前）の間に挟まれた層にある。さらにⅥ層の下部Ⅵb層は、桜島起源の火山灰P11（7,400年前）であり、遺構・遺物の年代特定に役立っている。

出土遺物は調査区全般から出土しているが、出土量は少ない。

土器は、前平式土器、吉田式土器、押型文土器、塞ノ神A式・B式土器、苫浜式土器、右京西式土器と、多くの型式が出土した。早期の土器片の総数は約50点である。

石器では、石皿破損品、磨石、局部磨製石斧や石鏃等約20点の石器が出土している。出土箇所はB～E-2～4区の範囲に集約し、土器の出土状況とも重なる。

遺構としては、落とし穴状遺構1基、集石2基を検出した。

第2節 遺構

Ⅵb層上面で1基の落とし穴状遺構が検出された。（第59図）B-2区の北東方向へ緩やかに傾斜する位置に配置されていた。（ただし、コンタラインはⅤ層のものである。）上面プランは隅丸長方形を呈し、長軸100cm、短軸55cm、底面の長軸90cm、短軸44cm、深さ78cmであった。埋土にⅤb層のアカホヤ火山灰が堆積していた。下面に逆茂木痕と思われるピットが1基確認できたため、半截し調査したが樹痕の可能性が高い。検出面はⅥb層であるが掘り込み面はⅥa層と推測される。

集石遺構

B-4区、C-3区で集石2基が検出された。Ⅶ層下面で検出され、その標高は1号で394.50m、2号で393.90mである。

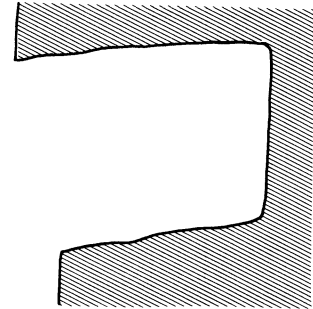
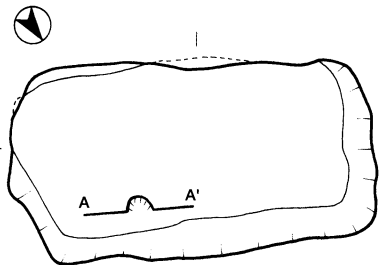
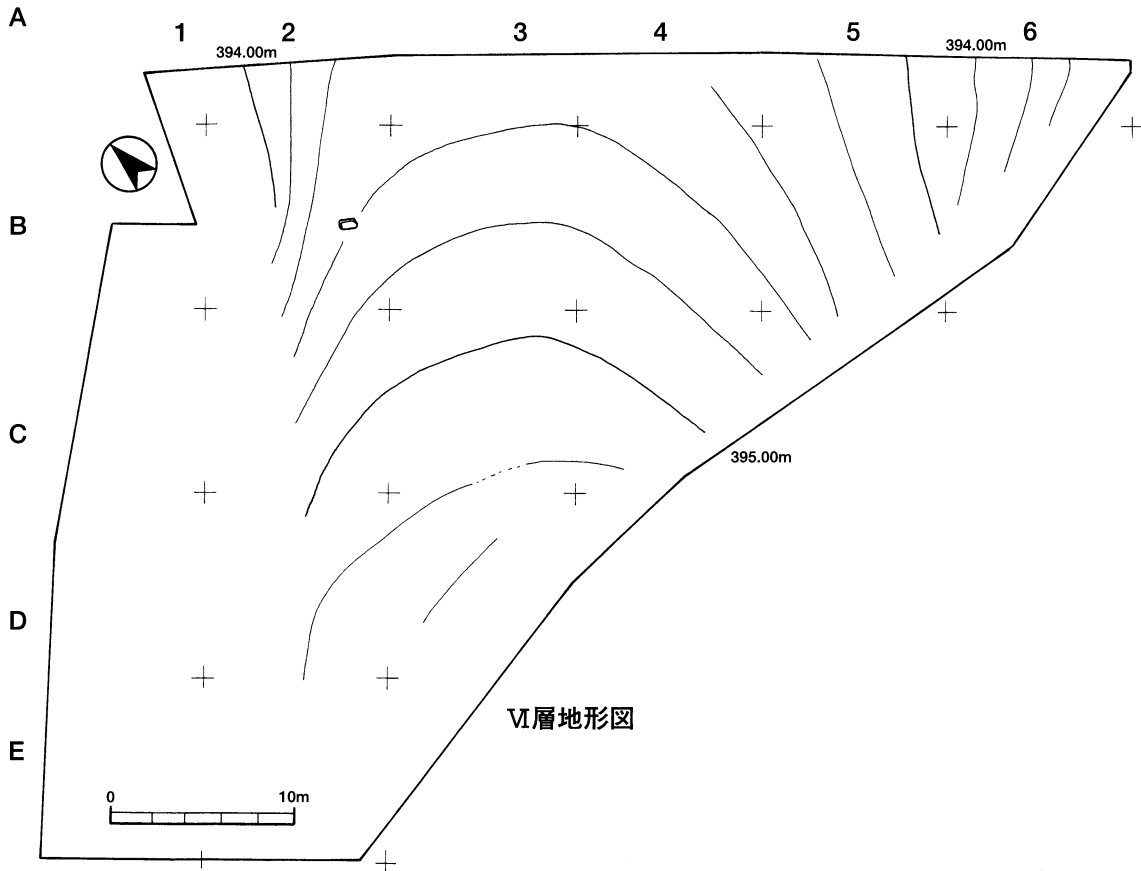
1号集石

20個の礫が長径100cm、短径90cm以内に、中心部がはっきりしない散在した状態で検出された。礫は赤色化し、割れかけているものが多く火を受けて焼けたものと思われる。礫の大きさは、長径5cm前後のものから10cm前後のものまであり、形状も一定しない。石質は大半が安山岩で、次いで花崗岩である。頁岩も2個確認できた。掘り込み等は確認できなかった。

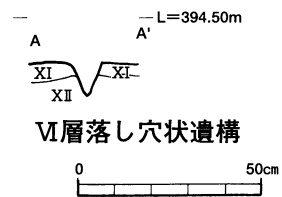
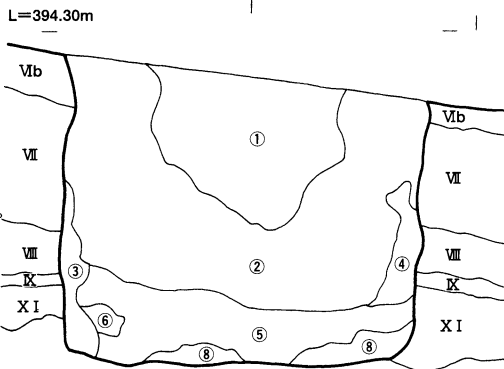
2号集石

10個の礫が長径50cm、短径30cmの円形に近い状態で検出され、その周囲にも4個の礫が散在していた。礫の中には焦げたような黒いシミのある礫も確認された。礫の大きさは10cm前後の拳大で比較的そろっている。石質は大半は花崗岩で2個は安山岩であった。1号同様掘り込み等は確認できなかった。また炭化物や焼土も確認できなかった。

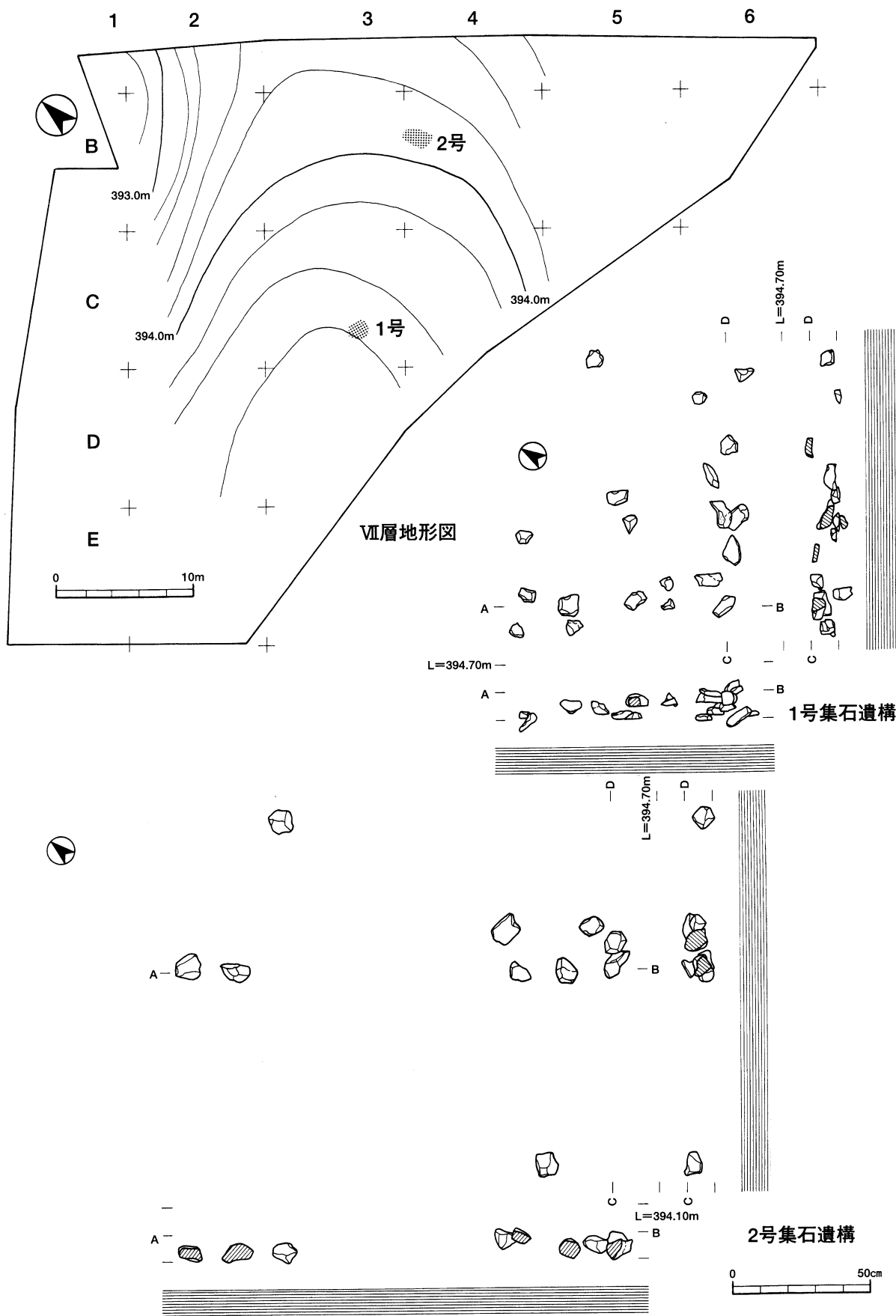
第3節 出土遺物



- ① 橙色土。10~15mmの黄白色軽石が混ざ
る。②より暗色軽石が多い。
白色バミス (2~3mm) もある。
- ② 燈色土。10~15mmの黄白色軽石が混ざ
る。①より明るく燈色が強い。
軽石はまばら。
- 下部はアカホヤ火山灰5~10mm点在。
白色バミス (2~3mm) もある。
- ③ 暗茶橙色土。5~8mmの黄白色軽石点在。
- ④ ③よりにじみが少ない。
- ⑤ アカホヤ火山灰を主体に、暗橙色土が
少し混ざる。15~20mmの黄白色軽石が
混ざる。軟質である。
- ⑥ アカホヤ火山灰がブロック状にあり、
黒褐色土が混在。
- ⑦ 黄褐色軟質ロームに、黒褐色土・アカ
ホヤ粒子が入っている。
- ⑧ 黄褐色軟質ロームに、上部はアカホヤ
粒子が混入し、下部はXII層のブロッ
クが混ざる。



第59図 VI層地形図及びVI層落とし穴状遺構



第60図 VII層地形図及び1号・2号集石遺構

1 土器

1 類土器 (2・3・4)

2・3・4の土器で、器壁は4～5mmと薄く、規則性を持った斜位の貝殻条痕仕上げの上位に貝殻刺突線を縦方向に刺突している。色調等の観察から2と3は同一個体の可能性が高い。4は、焼成がより良好な資料である。いずれも円筒形土器で、内面の整形は縦方向のケズリが認められるが工具は定かでない。

2 類土器 (1・5)

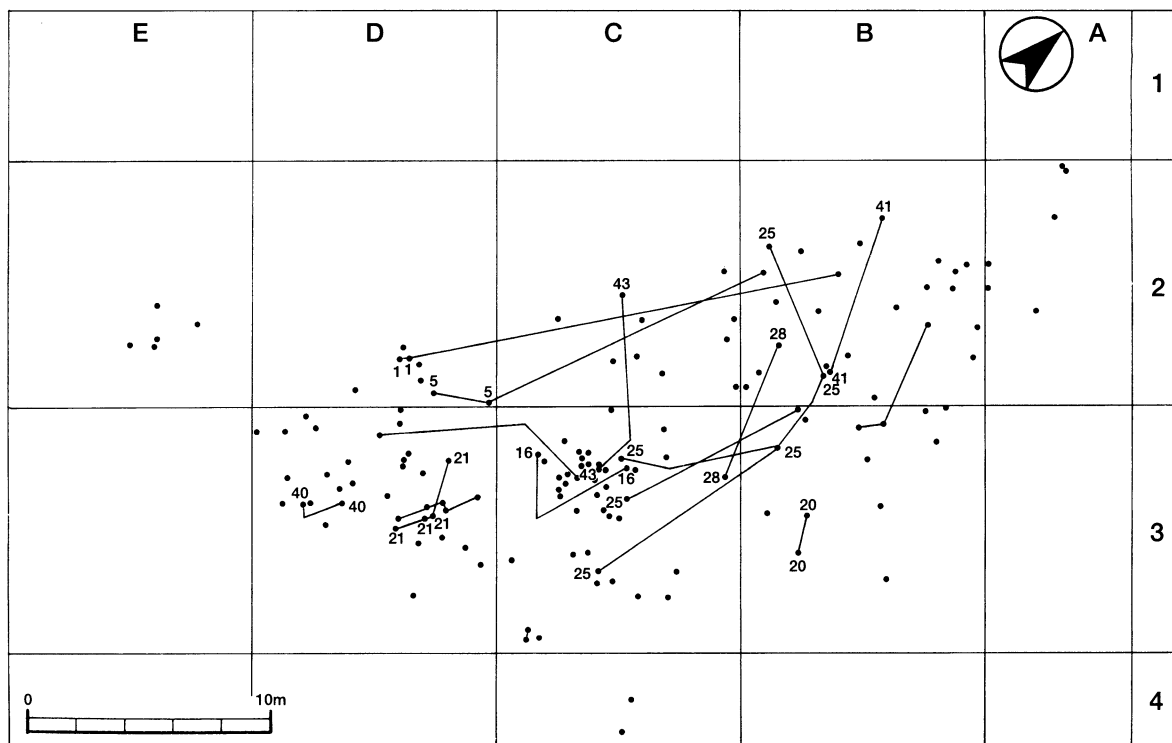
1の器壁は5mm程と薄く、口唇部の狭い平坦面に縦方向のヘラ刻みを密に規則的に施し、口縁端部は直に立ち上がる。口縁部直下には施文具に貝殻腹縁を用い、口縁部に並行して横位3列の貝殻刺突線文(貝殻復縁刺突線文)が施され、更に、刺突線文の下位に縦位の楔形突帯が貼りつけられる。楔形突帯の周辺は丁寧にナデられ、突帯の上面は鋭いヘラ状工具で横位に刻まれている。なお、突帯間は5～6mm程と狭く、突帯を貼りつけた後、貝殻腹縁部を緩やかに押し引いている。内面は、ヘラ状工具により丁寧にナデて仕上げている。5は胴部資料で、貝殻腹縁の押し引きである。胎土には多量の石英粒を含み、内面は丁寧にナデて仕上げている。

3 類土器 (6・7・8・9・10・11)

5点とも胴部資料で、器面は明瞭な横方向の貝殻条痕で仕上げている。11は底部の接地面を残すと判断したもので、胴部上位は直線的に開きながら立ち上がる傾向を示している。

4 類土器 (12・13・14・15・16・17・18)

押型文を施文した一群を一括して取り扱っている。文様としては、山形と楕円形に区分される。12・13は頸部と認識できる資料で、内外面をナデ仕上げた後、山形の押型文を縦方向に回転する手



第61図 VII・VI層土器出土状況及び接合図

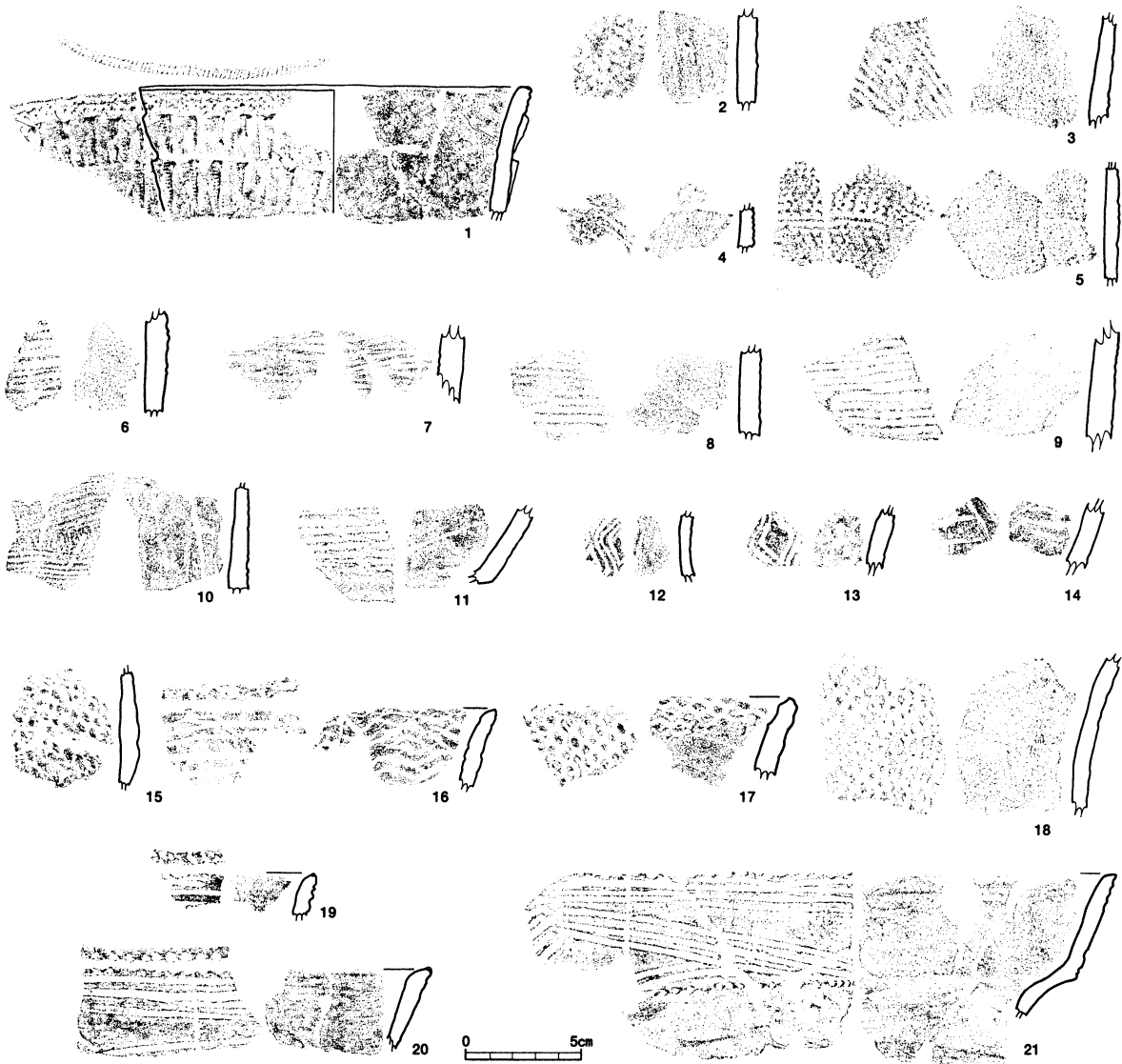
法が読み取れる。まず、縦方向に1条回転し、次に先の施文帯に添い工具を180度移替えて回転することを繰り返す、その結果、菱形の文様を創出している。器壁は薄く5mm程である。16は緩やかに外反する口縁部の内面に横位の山形押型文を残し、工具を180度回転して施文している。なお、尖りぎみの口唇部はヘラ状工具で刻まれた痕跡がある。14は小破片で、16と同一個体と判断している。17は口縁部、18は頸部、15は胴部屈曲部で、楕円形の押型文を施文している。17の口縁部は大きく外反し、内面上位（ベルト状）と口唇部に同一の工具で施文が認められる。

5類土器 (20・21・24・41)

内面は明赤褐色を呈し、横方向の条痕整形後に指でナデて丁寧な仕上がりを成すもので、3点とも口縁部資料で同一個体の可能性が高い。口縁端部の4隅が山形に突出すると思われ、口唇部外面は刻まれ、また二重口縁のくの字の屈曲部に一条巡らした微隆起線も同様に刻む。施文は浅く並行する沈線で、幾何学の三角形が構成される。

6類土器 (22・23・25~40)

23以外は極めて類似する資料で、25がその特徴を表し、口縁部は若干開く傾向を示している。口



第62図 VII層土器

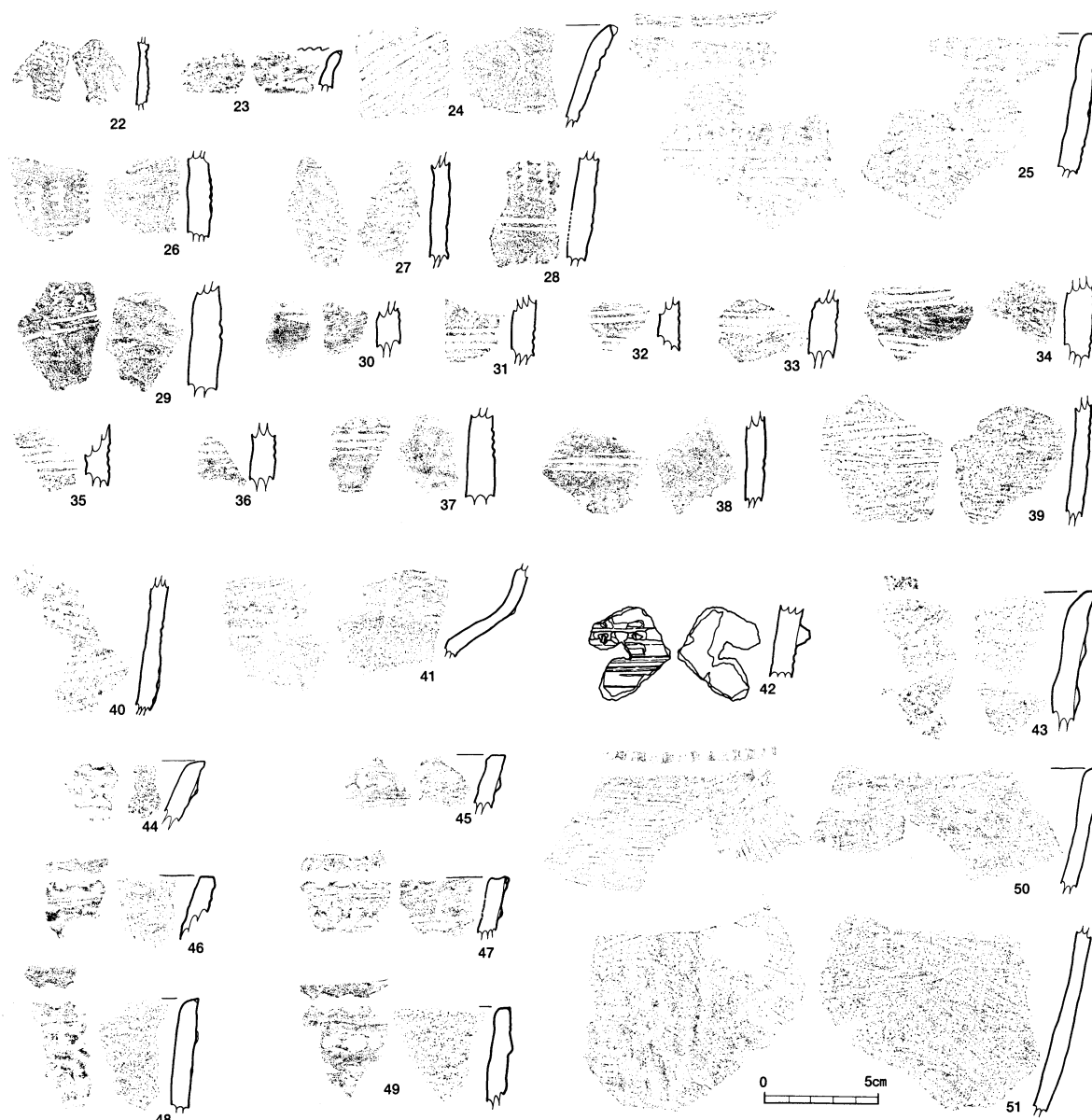
唇部は平坦面で、外面端部には縦位の貝殻刺突線を一巡し、以下は規則性を持つ条痕と貝殻刺突線を組み合わせたことを示している。器壁は10mm程と厚く、重量のある仕上がりが読み取れる。

7 類土器 (42~49)

いずれも大粒の石英粒を胎土に含む特徴を指摘でき、更に、43とそれ以外に2分される。43の口唇部は外に尖り浅く刻まれ、斜行する隆帯もヘラ状の鋭い工具で刻まれる。他の口唇部は平坦面を成し、端部は深く明瞭に刻み、口縁下位の横走する隆帯の刻みも明瞭である。

8 類土器 (50・51)

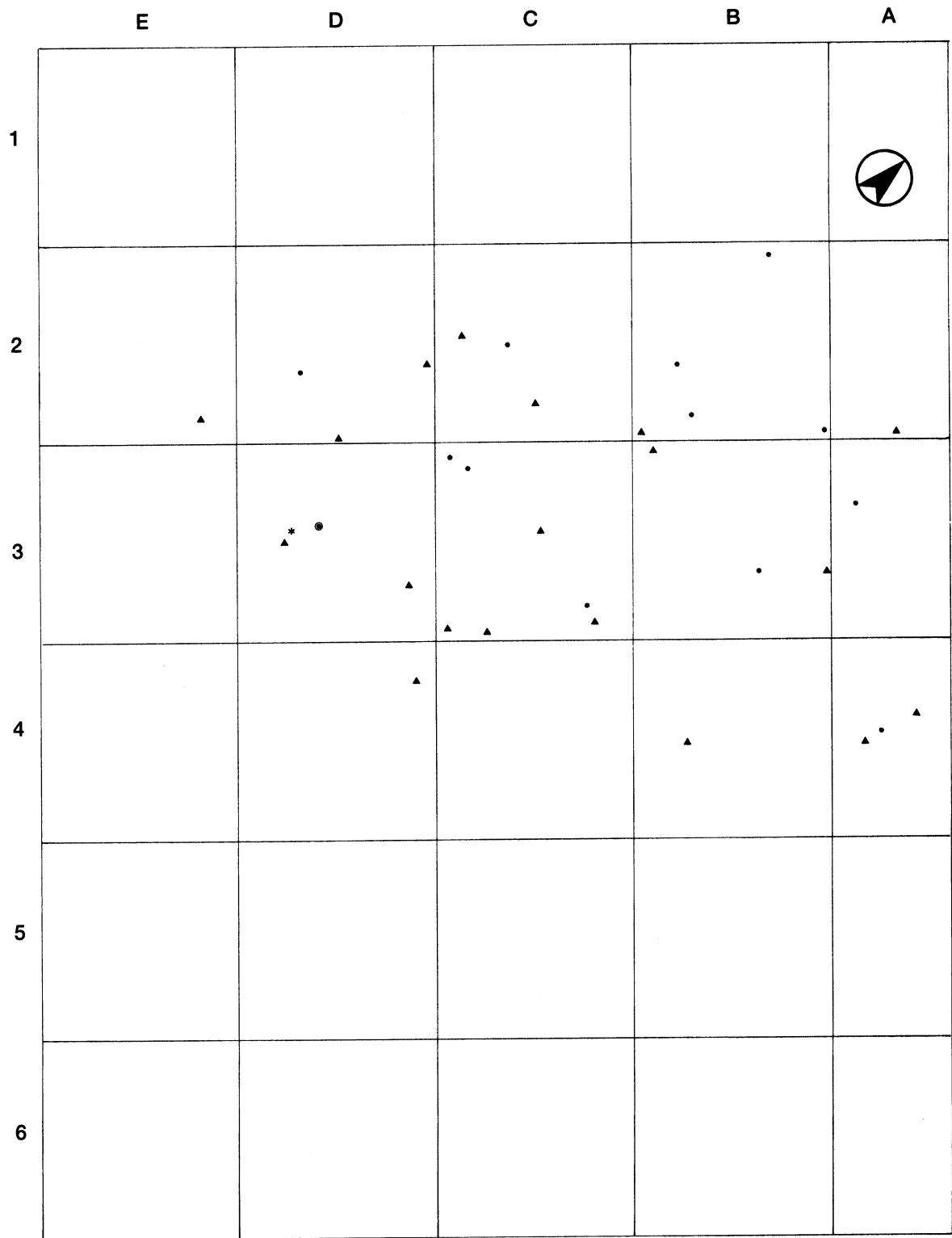
灰褐色の色調を成し、焼成が極めて堅緻で硬質な資料で、内面は入念なケズリの痕跡を残し、口縁部付近はその後ナデて仕上げている。器壁は5~7mmと薄く、狭い口唇部は規則的に直行する工具刻みが施される。器形は口縁部が最大径となる鉢形である。



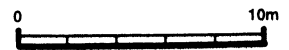
第63図 VI層土器

表11 土器観察表(1)

番号	出土区	層位	部位	胎土	焼成	内面色調	外面色調	内面器面調整	外面器面調整
1	D-2	Ⅶ	口縁部	石・長・角・細礫	普通	黄褐色	橙	ナデ	ナデ 口唇部刻み 口縁部下横位 3 段の貝殻刺突文、縦位 2 列の楔形突帯
2	B-2	Ⅶ	胴部	石・長・角	普通	黄褐色	橙	ケズリ	貝殻条痕 貝殻刺突線文 摩耗して文様がはっきりしない。
3	B-3	Ⅶ	胴部	石・長・角	普通	褐色	橙	ケズリ	貝殻条痕 貝殻腹縁の刺突
4	C-2	Ⅶ	胴部	石・長・角	良	橙色	褐色	ケズリ	条痕 縦位の貝殻刺突
5	B-2	Ⅶ	胴部	石・長・角・細礫	普通	黒褐色	褐色	ケズリ	押し引き文
6	不明	Ⅶ	胴部	石・長・角・細礫	普通	黒褐色	橙	ナデ	貝殻条痕 摩耗して文様がはっきりしない。
7	A-2	Ⅶ	胴部	石・長・角	普通	黄褐色	明褐色	条痕	貝殻条痕
8	E-2	Ⅶ	胴部	石・長・角	普通	黒褐色	橙	ナデ	貝殻条痕
9	C-2	Ⅶ	胴部	石・長・角・細礫	普通	明黄褐色	橙	ナデ	貝殻条痕
10	3T	Ⅶ	胴部	石・長・角	普通	黒褐色	黄褐色	ケズリ	貝殻条痕
11	E-2	Ⅶ	底部近く	石・長・角	普通	黒	橙	ケズリ	貝殻条痕
12	A-2	Ⅶ	頸部	石・長・角	普通	褐色	褐色	ナデ	山形押型文
13	A-2	Ⅶ	胴部	石・長・角	普通	明褐色	明褐色	ナデ	山形押型文
14	C-3	Ⅶ	頸部	石・長・角	普通	褐色	褐色	ナデ	ナデ 内面に山形押型文
15	B-2	Ⅶ	胴部	石・長・角	普通	黄褐色	黄褐色	ナデ	楕円押型文
16	C-3	Ⅶ	口縁部	石・長・角	普通	褐色	褐色	ナデ	横位の沈線 内面は山形押型文
17	B-2	Ⅶ	口縁部	石・長・角	普通	黄褐色	黄褐色	ナデ	内外共に楕円押型文
18	C-2	Ⅶ	頸部	石・長・角	普通	褐灰色	黒褐色	ナデ	楕円押型文
19	C-2	Ⅶ	胴部	石・長・角	普通	暗褐色	黒褐色	ナデ	棒状工具による沈線、口唇部への刻み目
20	B-3	Ⅶ	口縁部	石・長・角	普通	明赤褐色	赤褐色	ヘラナデ	棒状施工具による横位の浅い沈線 口唇部外側にヘラによる刻み すす付着
21	D-3	Ⅶ	口縁部	石・長・角	普通	明赤褐色	赤褐色	ヘラナデ	棒状施工具による横位の浅い沈線 口唇部外側にヘラによる刻み目 すす付着 二重口縁部の境目に刻みを持つ微隆起線
22	C-3	Ⅵa	胴部	石・長・角	普通	黄褐色	黄褐色	ナデ	燃糸
23	C-3	Ⅵa	口縁部	石・長・角	普通	黒褐色	黒褐色	条痕後ナデ	ナデ 口唇部に刻み目
24	B-3	Ⅵa	口縁部	石・長・角	普通	明赤褐色	赤褐色	ナデ	棒状施工具による横位の浅い沈線 口唇部外側にヘラによる刻み目 すす付着
25	B-2	Ⅵa	口縁部	石・長・角・細礫	普通	明赤褐色	褐色	条痕後ナデ	ナデ 沈線 貝殻刺突 口唇部平坦面
26	B-2	Ⅵa	口縁部近く	石・長・角・細礫	普通	明赤褐色	褐色	ナデ	沈線 貝殻刺突 ナデ
27	C-3	Ⅵa	胴部	石・長・角・細礫	普通	明赤褐色	褐色	条痕	ナデ 浅い沈線 貝殻刺突
28	B-2	Ⅵa	頸部	石・長・角・細礫	普通	明赤褐色	褐色	条痕後ナデ	ナデ 沈線 貝殻刺突
29	C-3	Ⅵa	頸部	石・長・角・細礫	不良	赤褐色	赤褐色	ナデ	沈線と縦位の貝殻刺突
30	B-2	Ⅵa	胴部	石・長・角・細礫	普通	明赤褐色	褐色	ナデ	ナデ 並行沈線
31	C-2	Ⅵa	胴部	石・長・角・細礫	普通	明赤褐色	褐色	ナデ	ナデ 並行沈線
32	C-3	Ⅵa	胴部	石・長・角・細礫	普通	明赤褐色	褐色	ナデ	並行沈線
33	C-3	Ⅵa	胴部	石・長・角・細礫	普通	明赤褐色	褐色	ナデ	ナデ 並行沈線
34	A-2	Ⅵa	胴部	石・長・角・細礫	普通	明赤褐色	暗赤褐色	ナデ	ナデ 並行沈線
35	C-3	Ⅵa	胴部	石・長・角・細礫	普通	明赤褐色	褐色	ナデ	ナデ 並行沈線
36	B-2	Ⅵa	胴部	石・長・角・細礫	普通	明赤褐色	褐色	ナデ	ナデ 並行沈線
37	D-3	Ⅵa	胴部	石・長・角・細礫	普通	明赤褐色	褐色	ナデ	ナデ 並行沈線
38	1T	Ⅵa	胴部	石・長・角・細礫	普通	暗赤褐色	暗赤褐色	ナデ	ナデ 並行沈線 貝殻刺突
39	D-3	Ⅵa	胴部	石・長・角	普通	赤褐色	明赤褐色	条痕後ナデ	ナデ 並行沈線
40	D-3	Ⅵa	胴部	石・長・角・細礫	不良	暗赤灰色	明赤褐色	ナデ	ナデ 並行沈線
41	B-2	Ⅵa	口縁部付近	石・長・角	普通	明赤褐色	暗赤褐色	ナデ	二重口縁上部はヘラナデ 下部はナデ 屈曲部に刻みを持つ微隆起線
42	C-4	Ⅵa	頸部	石・長・角・細礫	不良	暗赤褐色	暗赤褐色	ナデ	沈線 貼付突帯に刻み目(台形)
43	C-3	Ⅵa	胴部	石・長・角・細礫	不良	赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ 口唇部外側にヘラによる刻み目 口縁部下に貼付突帯し、ヘラで刻み目(三角)
44	D-3	Ⅵa	口縁部	石・長・角・細礫	不良	黄褐色	黄褐色	条痕	口縁部直下に貼付突帯をし刻み目
45	D-3	Ⅵa	口縁部	石・長・角・細礫	不良	黄褐色	黄褐色	条痕	口縁部直下に貼付突帯をし刻み目
46	E-2	Ⅵa	口縁部	石・長・角	良	灰黄色	灰黄色	ナデ	条痕後ナデ 口唇部に刻み目 すす付着 刻みを持つ突帯
47	D-3	Ⅵa	口縁部	石・長・角・細礫	不良	黄褐色	黄褐色	ナデ	棒状施工具で刻み目、棒状工具による刻み目突帯
48	E-2	Ⅵa	口縁部	石・長・角・細礫	不良	黄褐色	黄褐色	条痕後ナデ	棒状施工具で刻み目、貝殻による刻み目突帯
49	D-3	Ⅵa	口縁部	石・長・角・細礫	不良	黄褐色	黄褐色	条痕	口唇部外面に貝殻施工具で刻み目、貝殻による刻み目
50	D-3	Ⅵa	口縁部	石・長・角・細礫	不良	黄褐色	黄褐色	条痕	平坦な口唇部に棒状施工具で刻み目 条痕
51	E-2	Ⅵa	胴部	石・長・角	良	灰黄色	灰黄色	条痕ケズリ	ケズリ後条痕



- 石鏃
- ◎ 石皿
- * 石斧
- ▲ フレーク・チップ



第64図 VII・VI・V層石器出土状況

2 石器

Ⅶ層の石器

5点の石鏃と石皿破損品1点が確認できる。

181と184は透明度の高い良質の黒曜石で、182は乳白色で姫島産に近い黒曜石を使用している。183はチャート、185は黒色の頁岩と思われる。総じて、長身の傾向を示している。石皿は花崗岩の角礫を使用しているが、小型の部類である。

Ⅵ層の石器

石鏃9点、刃部磨製石斧1点が採取されている。

石鏃の使用石材は黒曜石3点、チャート2点、安山岩1点、流紋岩1点、石英2点と多種である。なお、3点の黒曜石もそれぞれ産地を異にする可能性が高い形状及び剥片素材の用い方では、190・191・192の3点は共通性が見られる。196の側縁は鋸歯状に仕上げている。

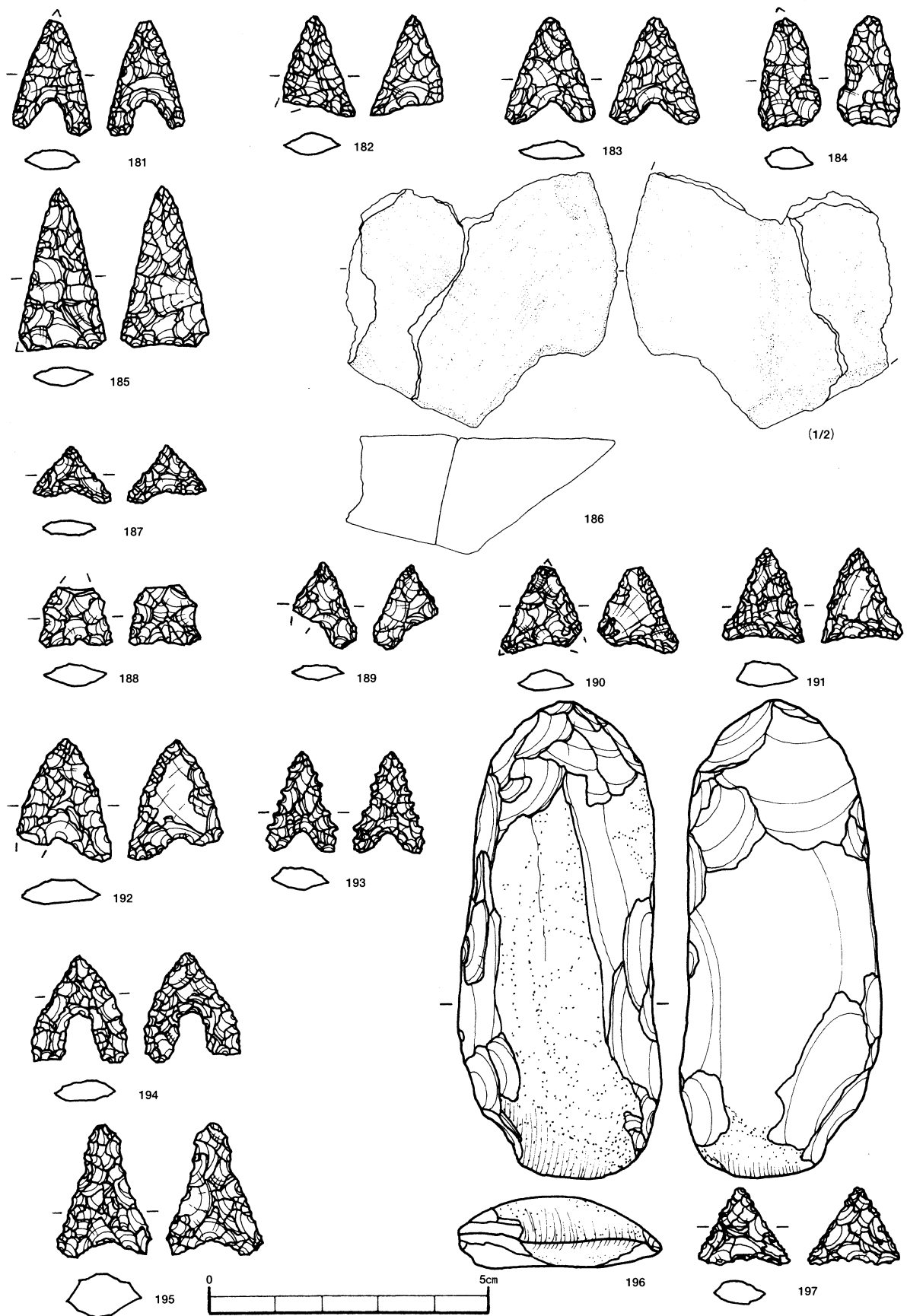
小型の刃部磨製石斧の正面には礫面が残され、側縁は整形剥離が認められる。刃部周辺に研磨が確認できるが、風化が激しく進行している。

Ⅴ層の石器

197の石鏃1点で、斑紋を持つことから流紋岩と判断した。

表12 石器観察表(6)

挿図	番号	層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
65	181	Ⅶ	石鏃	1.97	1.45	0.40	0.67	黒曜石	
	182	Ⅶ	石鏃	1.82	1.85	0.45	0.52	黒曜石	姫島産?
	183	Ⅶ	石鏃	1.95	1.65	0.35	0.75	チャート	
	184	Ⅶ	石鏃	2.05	1.16	0.45	0.77	黒曜石	
	185	Ⅶ	石鏃	2.95	1.57	0.35	1.26	頁岩	
	186	Ⅶ	石皿	9.06	9.90	4.54	479.00	花崗岩	
	187	Ⅵ	石鏃	1.07	1.42	0.28	0.19	黒曜石	
	188	Ⅵ	石鏃	1.15	1.35	0.45	0.45	石英	
	189	Ⅵ	石鏃	1.60	1.15	0.30	0.31	安山岩	
	190	Ⅵ	石鏃	1.60	1.45	0.45	0.56	黒曜石	
	191	Ⅵ	石鏃	1.75	1.50	0.50	0.72	黒曜石	
	192	Ⅵ	石鏃	2.25	1.70	0.45	1.15	チャート	
	193	Ⅵ	石鏃	1.80	1.25	0.40	0.45	石英	
	194	Ⅵ	石鏃	1.95	1.75	0.40	0.84	チャート	
	195	Ⅵ	石鏃	2.40	1.75	0.85	1.53	流紋岩?	
	196	Ⅵ	局部磨製石斧	8.58	3.70	1.30	52.10	ホルンフェルス	
	197	Ⅴ	石鏃	1.42	1.68	0.40	0.47	流紋岩	



第65图 VII·VI·V層石器

第6章 縄文時代中期の調査

第1節 調査の概要

縄文時代中期の遺構及び遺物は、Ⅳ層の御池火山灰からⅤa層のアカホヤ火山灰腐植土層にかけて検出されるが、Ⅴa層の遺物は3点であることからⅣ層がその主体と判断できる。また、遺物は、北東方向へ緩やかに傾斜する尾根西側の2区に集中している。

石器は石鏃2点が出土している。

遺構は検出されなかった。

第2節 出土遺物

1 土器

中期の土器の大半はⅣ層から出土したものである。Ⅳ層の御池火山灰層は堆積状況も良好である。土器はB・C-2～4区に集中している。

9類土器 (52・53・54)

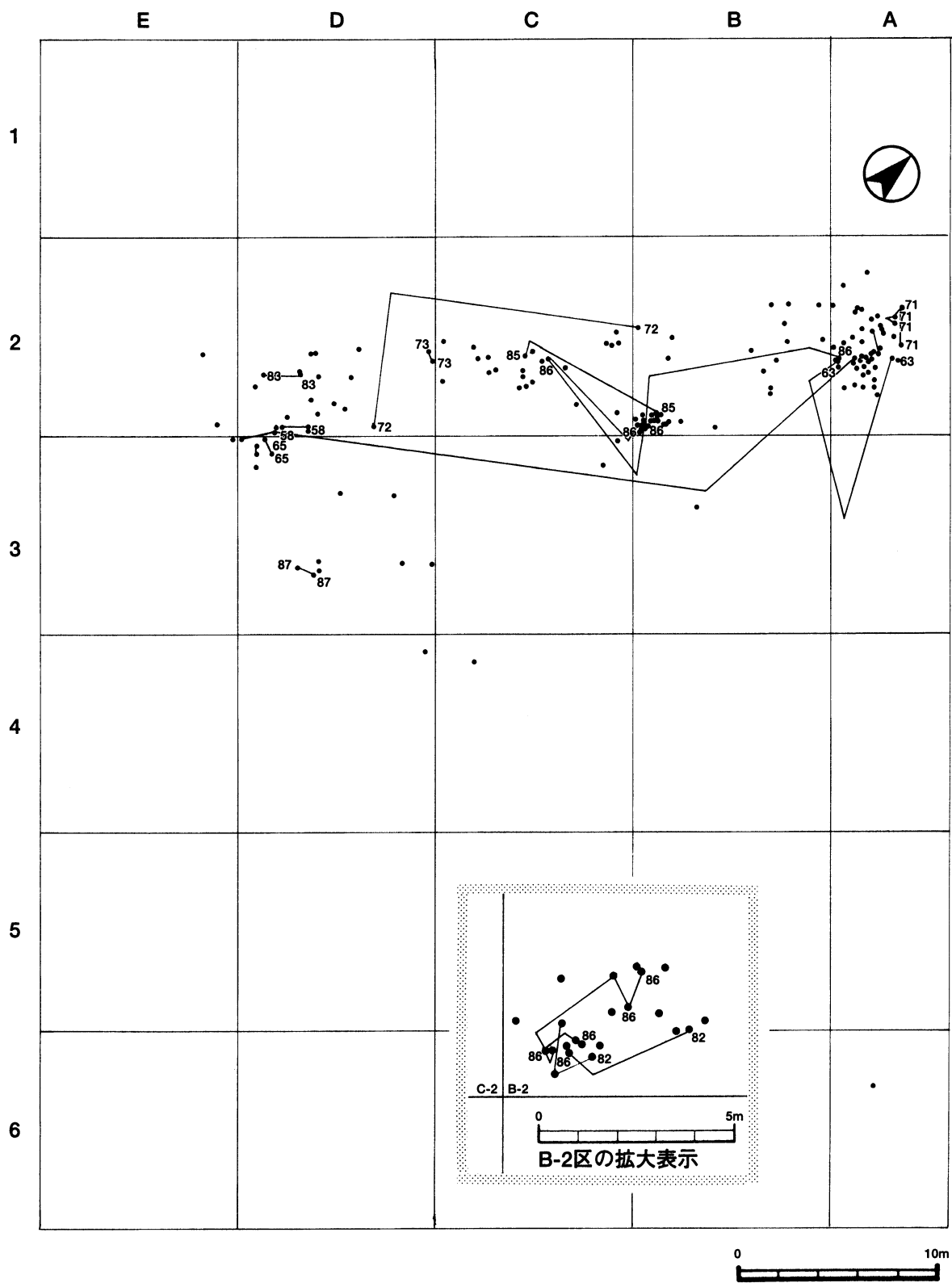
3点とも器壁は5mm以下と極めて薄く、内面の仕上げも特に入念にナデられている。焼成も堅緻で硬質、淡い肌色の色調を呈し、微細な石英粒を胎土に含んでいる。器面は縄文が認められる。

10類土器 (55～66)

55・56は口縁部端部が大きく内湾する資料で、並行する沈線と刺突で構成され、丸く仕上げた口唇部にも同様の刺突が施され、色調等の類似から同一個体と判断できる。57～60も同一個体と判断されるもので、数回接合を試みたが成功していない。四隅に山形の突起を持つ口縁形状と推測されるが、口縁部の屈曲は強くないと思われる。内面には条痕整形の痕跡が明瞭に残され、胎土に角閃石と雲母が多く含まれる。外面には多量の煤が付着し、連続した縦位の短沈線間を覆っている。口唇部の突起は縦方向に粘土帯を後から貼り付けたもので、上から下にかけて指頭で深く押さえている。また、突起の頂点は深い刺突が残される。64・65も同一個体で、丸く張りのある胴部から胴部上位で一度括れた後頸部に至っている。先の土器同様器壁は薄く、内面には条痕整形の跡がそのまま残される。外面は丁寧にナデて仕上げし、胴部上位には煤が多量に付着している。施文は、並行する細い沈線間を刺突で充填する構成が見られるが、全容は掴めない。61は規則性のある浅い沈線で文様を構成し、角閃石・長石・雲母等を胎土に含んでいる。62・63・66は内外面ともに条痕仕上げをそのまま残すもので、器種・部位とも明らかでない。

11類土器 (68～71・73～75)

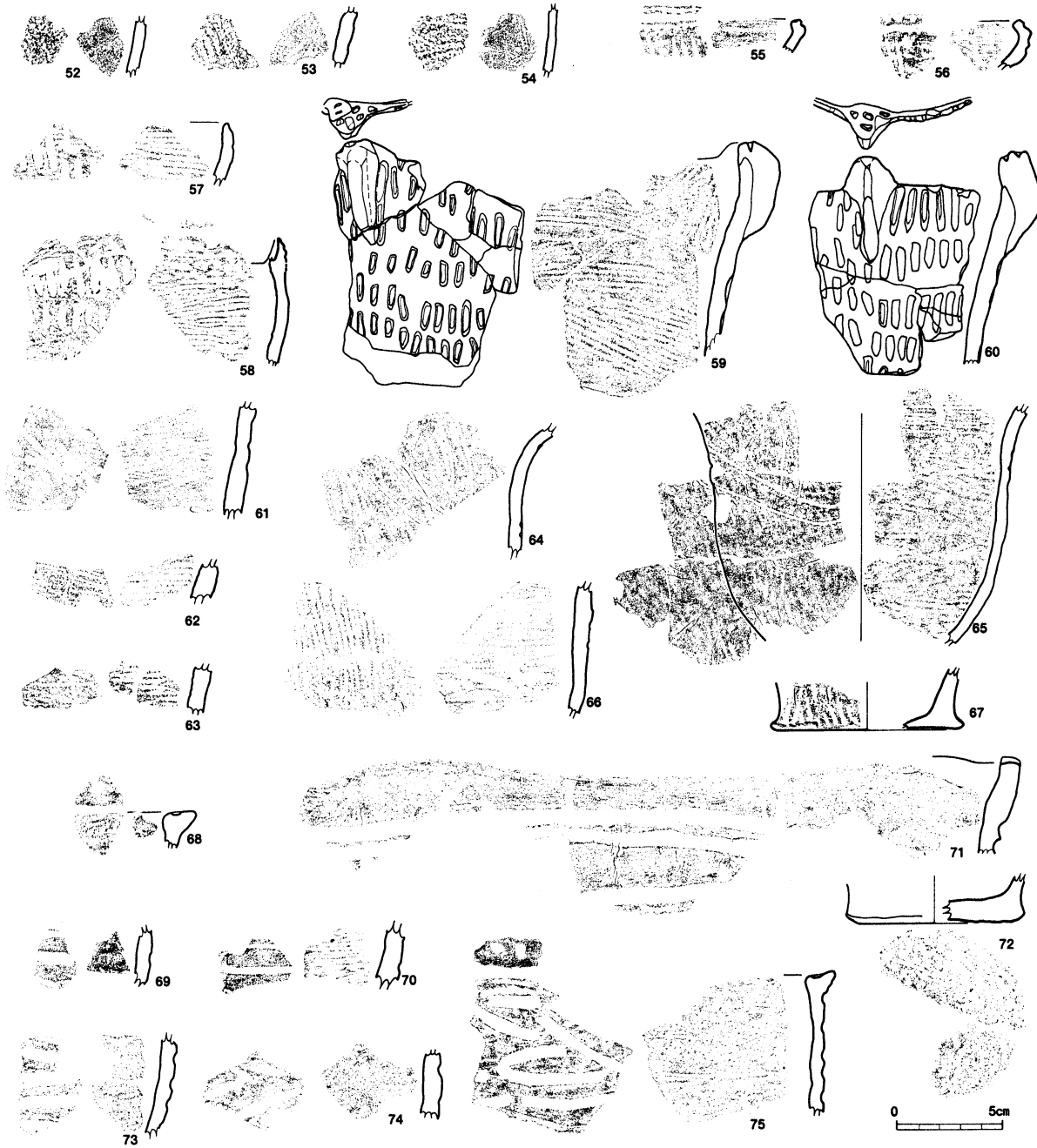
68・75は同一個体で、平坦に仕上げた口唇部の端部は三角形に尖る。器面は棒状工具で直線や曲線文を浅く描き、凹線文様の効果を演出している。また、口唇部にも同一の工具での円形刺突が残される。なお、施文帯具や文様構成との共通から73も同一の可能性が考えられる。69もそれに近い。71の施文具は更に太いもので、横走する並行の凹線文で文様を構成し、緩やかに突出した山形の口唇部は深く刻まれる。更に、口縁部はやや肥厚する特徴も認められる。70・73もこの種の資料と判断できる。



第66図 V・IV層土器出土状況及び接合図

底部 (67・72)

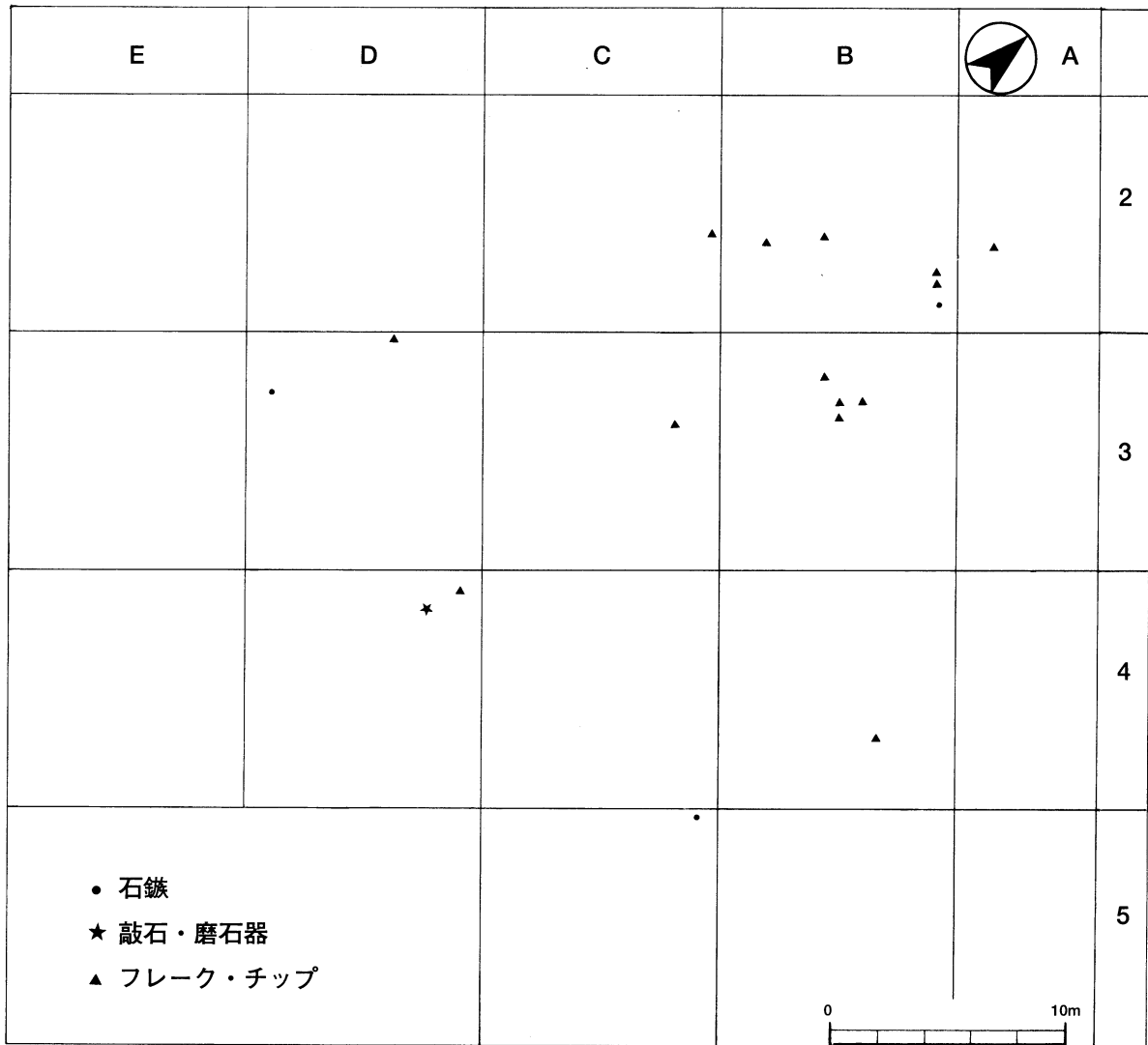
67の接地面端部は外方向に大きく突出し、条痕による掻き上げが明瞭に残される。72の平坦な接地面には圧痕がスタンプされるが解析は困難である。



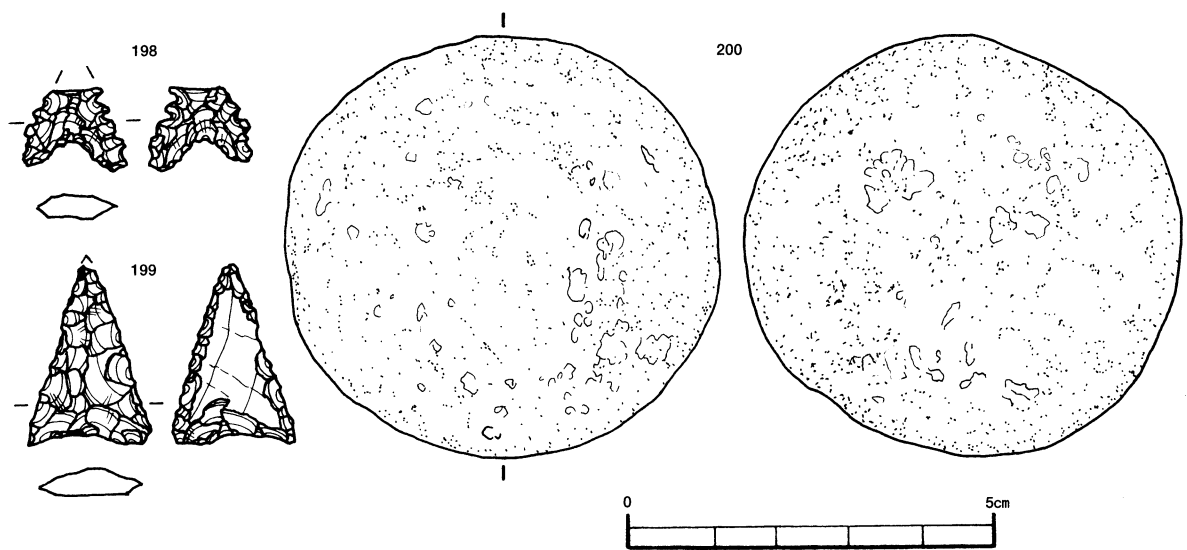
第67図 IV層土器

2 石器

IV層の石器



第68図 IV層石器出土状況



第69図 IV層石器

石鏃 2 点、磨石 1 点を確認している。127は透明度の高い良質の黒曜石で、側縁は鋸歯状に仕上げている。134は斑紋を持つ流紋岩で、裏面には剥離面が多く残される。64はほぼ正円で安山岩を使用している。

第13石器観察表（7）

挿図	番号	層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
71	198	IV	石鏃	1.16	1.45	0.35	0.32	黒曜石	
	199	IV	石鏃	2.45	1.70	0.38	1.02	流紋岩	
	200	IV	磨石	5.76	5.95	5.95	275.86	安山岩	

第7章 縄文時代後・晩期

第1節 調査の概要

縄文時代後・晩期の遺物がⅢ層下部からⅣ a 層にかけて出土している。Ⅲ層は黒色土で遺跡全域で確認され、堆積状況は良好と判断した。火山灰を主体に有機質土が含まれており、上層のⅡ層の桜島起源の文明軽石（西暦1471年頃・P-3）で覆われている。また、Ⅳ層は霧島起源の御池噴出物から成り、上部の風化土及び腐食質土から少数の土器片や石器が出土している。なお、遺構は確認されていない。

第2節 出土遺物

12類土器（81～86・96）

83以外の5点は器壁は5mm以下と極めて薄く、微細な石英粒や角閃石・雲母等を胎土に含み、内面の仕上げも特に丁寧にナデられている。器種の特定や部位も不鮮明であるが、指頭による凹線文状の痕跡をわずかに観察できる。なお、焼成、色調も類似することから、同一個体と判断している。85・86はこれらの胴部相当と判断した。96は棒状工具で山形ないし波状の文様を施文したもので、明確な比定は困難であるが中尾田遺跡や倉園A遺跡等に類似資料がある。極めて硬質な仕上がりである。

13類土器（76～80・88）

80以外の3点は胴部から肩部の屈曲部資料で、いずれも粘土紐接合部で分離した状況を観察できる。これらも同一個体と判断できるもので、外面の胴部は細いヘラにより横方向に繰り返し研磨が行われている。また、一部には煤の付着も認められる。一方、内面は光沢があり丁寧にナデ仕上げたことを示している。胎土に石英粒や角閃石を多く含み、灰黒色の外面に対して内面は橙褐色を呈している。

14類土器(87・91～95・98)

87が唯一口縁部で、98が胴部・他は底部に該当する。広口の洗面器様の形状を成す浅鉢形で、広い接地面を持つものである。口縁部付近及び外面は条痕あるいは粗のナデ仕上げが見られ、内面は

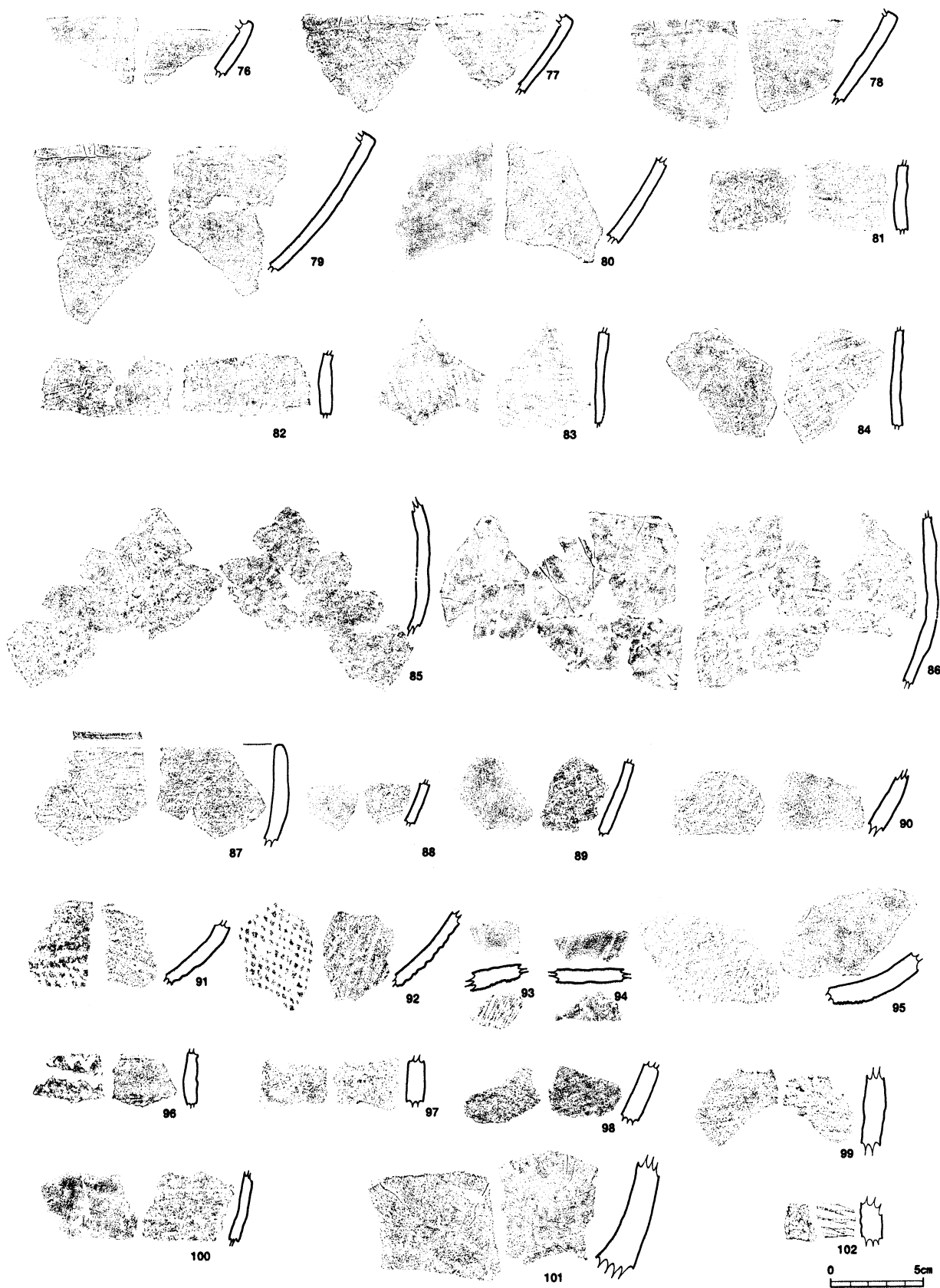
丁寧な研磨様のナデ仕上げが認められる。87の口唇部は丸く、底部から緩やかに立ち上がり、多量の煤が残されている。91・92は網状が、94～95は編布が圧痕される。

15類土器 (89・90・97・100・101)

101以外は明確な判断材料は認められないが、器面や器壁等を区分材料とした。101は胴部最下部で底部との接合資料で、内面には指押さえの痕跡が明瞭に残され、15mm以上の厚い器壁が確認できる。内面は肌色に近く、外面は赤褐色の色調を呈し、重量感のある大型土器であったことが読みとれる。



第70図 Ⅲ層土器出土状況



第71图 IVa·Ⅲ層土器

第8章 中世・近世の調査

第1節 調査の概要

奈良・平安時代の遺構・遺物はⅢ層の上部で検出される。Ⅲ層は黒色土で、ボラ抜きや耕作等で一部削平されている箇所もある。Ⅰ層の表土、Ⅱ層の文明ボラは重機で除去後、Ⅲ層上面をきれいに検出した状態で調査を始めた。Ⅲ層の遺構としては9条の古道が検出された。

遺物は須恵器が古道から1点出土しただけである。

第2節 遺構

古道

Ⅲ層上面で、桜島起源（1471年頃）の文明ボラにパックされた古道が9条検出された。A-2区からE-2区へかけて7条の古道が、それを横切る形でD-2区からD-3区へ1条、もう1条はC-4区で7条の古道に並行する状態で検出された。D-2区の西側の古道だけが埋土に文明ボラとⅢ層の黒色土を持ち、他の古道とは時期を画するものと思われる。他の古道はいずれも文明ボラが主な埋土で、それに黒褐色土が微妙に混じるものもあるが時期差は不明である。

遺跡の立地条件や地勢等から判断すると、南北を深い谷が切り込んでおり、東西方向の古い集落を繋ぐとすれば、いずれにしてもこの古道の残されたエリアしか使用できるエリアは他に無いようである。

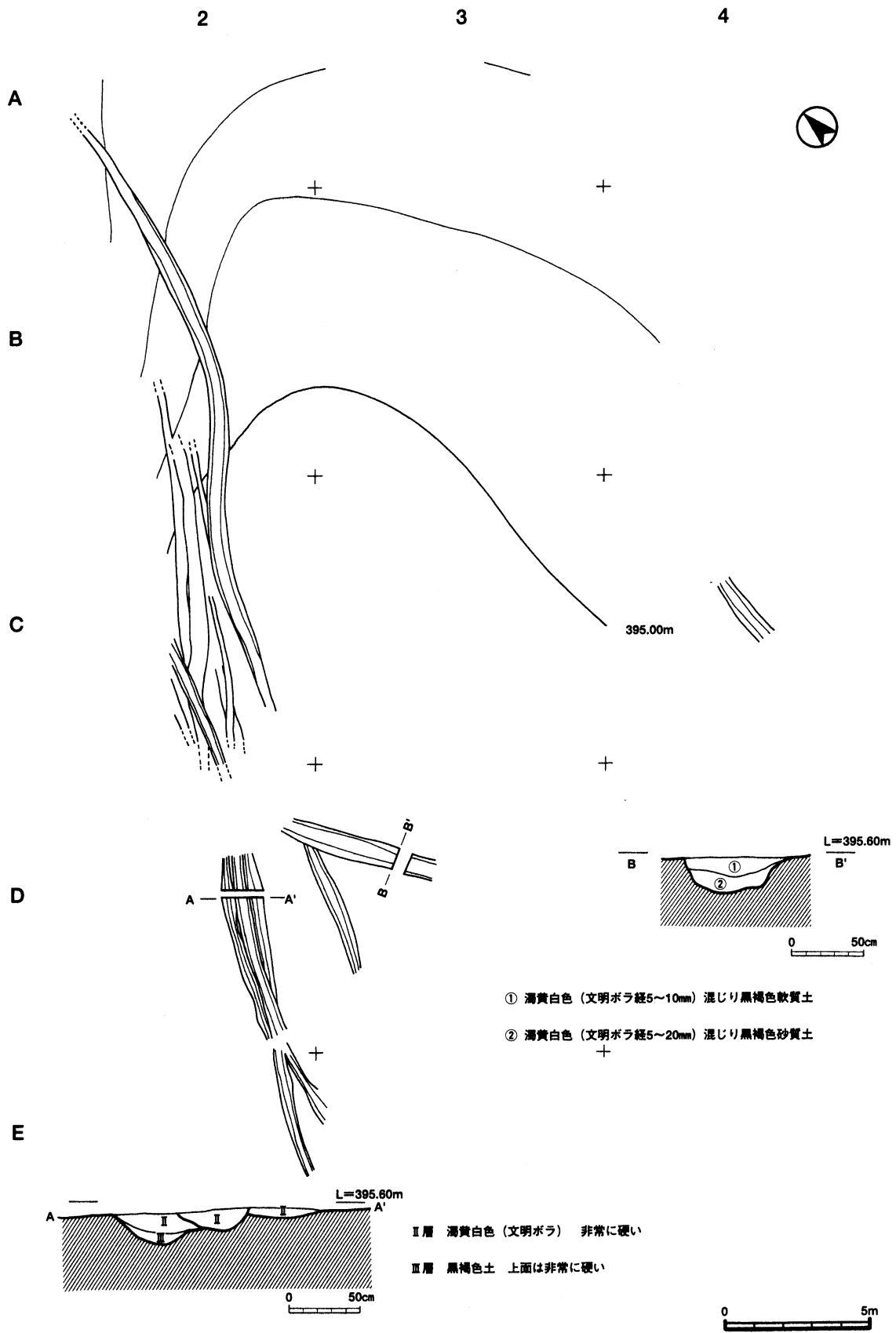
また、古記録等での記載は現状では知見していない。

第3節 出土遺物

Ⅲ層古道上で須恵器が1点出土した。(第71図) NO.102は小破片のため器形は不明である。内面は平行状叩きで、外面は剥落して不明である。青灰色を呈し、焼成は硬質である。

表14 土器観察表(2)

番号	出土区	層位	部位	胎土	焼成	内面色調	外面色調	内面器面調整	外面器面調整
52	B-2	IV	胴部	石・長・角	普通	黄褐色	明黄褐色	ナデ	縄文
53	B-2	IV	胴部	石・長・角	普通	黄褐色	暗褐色	ナデ	縄文 すす付着
54	A-2	IV	胴部	石・長・角	普通	黄褐色	黄褐色	ナデ	縄文
55	D-2	IV	口縁部	石・長・角	普通	黒褐色	黒褐色	ナデ	口唇部に刺突 刺突縄文と並行沈線 キャリバー形
56	D-3	IV	口縁部	石・長・角	普通	黒褐色	黒褐色	ナデ	口唇部に刺突 刺突縄文と並行沈線 キャリバー形
57	D-2	IV	頸部	石・長・角	普通	黄褐色	黒色	貝殻条痕	縦位に短沈線
58	D-2	IV	口縁部	石・長・角	普通	黄褐色	黒色	貝殻条痕	口縁部下縦位の短沈線 キャリバー形
59	不明	IV	口縁部	石・長・角	普通	黄褐色	黒色	条痕	ナデ 縦位の短沈線 貼付口唇部に刺突 キャリバー形
60	不明	IV	口縁部	石・長・角	普通	黄褐色	黒色	条痕	ナデ 縦位の短沈線 貼付口唇部に刺突 キャリバー形
61	C-3	IV	胴部	石・長・角	普通	橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ 刺突連点文 すす付着
62	A-2	IV	胴部	石・長・角	普通	黄褐色	黒色	条痕	ナデ すす付着 摩耗しているためはっきりせず。
63	A-2	IV	胴部	石・長・角	普通	黄褐色	黒色	条痕	ナデ 条痕らしき文様があるが摩耗してははっきりせず。すす付着
64	E-2	IV	頸部	石・長・角	普通	橙色	暗褐色	条痕	ナデ 沈線間に刺突 同じ工具沈線と刺突 キャリバー形
65	D-3	IV	胴部	石・長・角	良	橙色	明赤褐色	条痕	ナデ 沈線間に刺突 同じ工具沈線と刺突 キャリバー形
66	C-2	IV	胴部	石・長・角	普通	黒褐色	黄褐色	条痕	縦位の条痕 すす付着
67	不明	IV	底部	石・長・角・細礫	普通	黒褐色	明赤褐色	ナデ	縦位の条痕 接地面はナデ
68	C-2	IV	口縁部	石・長・角	普通	赤褐色	赤褐色	ナデ	口唇部に5mm程度の円形刺突
69	B-2	IV	胴部	石・長・角	普通	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ 凹線文
70	B-2	IV	胴部	石・長・角・金雲母	普通	暗赤褐色	赤褐色	条痕	ナデ 沈線
71	A-2	IV	口縁部	石・長・角・細礫	普通	明褐色	明褐色	ナデ	ナデ 凹線(棒状工具) 山形口縁
72	D-1	IV	底部	石・長・角・細礫	普通	灰黄色	黄褐色	ナデ	ナデ 網代圧痕?
73	D-2	IV	胴部	石・長・角	普通	赤褐色	赤褐色	ナデ	凹線文(棒状工具) すす付着
74	D-2	IV	胴部	石・長・角	普通	黄褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ 棒状工具による沈線
75	不明	IV	口縁部	石・長・角・細礫	普通	赤褐色	赤褐色	条痕後ナデ	ナデ 凹線文(棒状工具) 口唇部に刺突
76	D-3	IVa	胴部	石・長・角	良	明赤褐色	黒褐色	研磨	研磨 すす付着
77	D-2	IVa	胴部	石・長・角	良	明赤褐色	黒褐色	研磨	研磨 すす付着
78	C-2	IVa	胴部	石・長・角	良	明赤褐色	黒褐色	研磨	研磨 すす付着
79	C-2	IVa	胴部	石・長・角	良	明赤褐色	黒褐色	研磨	研磨 すす付着
80	D-2	IVa	胴部	石・長・角・精製	良	明褐色	黒褐色	研磨	研磨 すす付着
81	B-2	IVa	胴部	石・長・角	普通	黒褐色	黒色	工具ナデ	ナデ すす付着
82	B-2	IVa	口縁部	石・長・角	普通	黒褐色	明褐色	ナデ	ナデ すす付着
83	D-2	IVa	胴部	石・長・角	良	黒褐色	黒褐色	条痕	ナデ 炭化物付着
84	B-2	IVa	胴部	石・長・角	普通	黒褐色	褐色	条痕	ナデ すす付着
85	B-2	IVa	胴部	石・長・角	普通	黒褐色	明赤褐色	条痕後ナデ	ナデ すす付着
86	B-2	IVa	胴部	石・長・角	普通	黒褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ すす付着
87	D-3	IVa	口縁部	石・長・角・粗製	普通	黄褐色	明赤褐色	ヘラナデ	ヘラナデ すす付着 丸い口唇部
88	D-2	IVa	胴部	石・長・角	良	明褐色	黒褐色	ナデ	ナデ すす付着
89	A-2	IVa	胴部	石・長・角・細礫	普通	褐色	褐色	ナデ	ナデ すす付着
90	A-2	IVa	胴部	石・長・角・細礫	普通	黒褐色	黒褐色	ナデ	ナデ
91	C-2	IVa	底部	石・長・細礫	普通	黄灰色	黄褐色	ナデ	網目状圧痕
92	IT	IVa	胴部	石・長・角	普通	黒褐色	明褐色	条痕	網目状圧痕
93	B-3	IVa	胴部	石・長・角	普通	オリブ褐色	赤褐色	ナデ	編布圧痕
94	D-3	IVa	胴部	石・長・角	普通	黒褐色	赤褐色	ナデ	ナデ 編布圧痕
95	D-3	IVa	底部	石・長・角	普通	黒褐色	赤褐色	ヘラケズリ	編布圧痕
96	A-2	III	胴部	石・長・金雲母	良	黒褐色	黒褐色	工具ナデ	棒状工具による波状沈線
97	B-2	III	胴部	石・長・角	普通	黒色	明赤褐色	ナデ	ナデ
98	C-2	III	胴部	石・長・角・粗製	普通	黄褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ すす付着
99	B-2	III	胴部	石・長・角・細礫	不良	赤褐色	赤褐色	ヘラナデ	ヘラナデ?
100	A-2	III	胴部	石・長・角	普通	赤褐色	赤褐色	ヘラナデ	ナデ
101	A-6	III	底部	石・長・角・細礫	普通	黄褐色	明赤褐色	工具ナデ	ナデ
102	E-2	III	胴部	須恵器	良	青灰色	青灰色	平行状叩き	剥落して不明



第72図 IV層上面地形図及びIII層古道

第9章 出土炭化物の自然科学分析報告

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県始良郡福山町前原和田遺跡
出土炭化物の自然科学分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

前原和田遺跡では、A Tを下限として、ナイフ形石器文化期、細石器文化期、縄文時代草創期、早期、後期～晩期、中～近世の遺構・遺物が検出されている。このうち、旧石器時代では、約18,000年前と考えられるXⅥ層から、燃材料と考えられる炭化材を伴う礫群が検出されている。

本報告では、礫群から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行い、各時期の年代に関する資料を得る。

1. 放射性炭素年代測定

(1) 試料

試料は、XⅢ層の3号礫群、XⅥ層の8号および13号礫群から出土した炭化材各1点、合計3点である。3号礫群の炭化材は少量であるため、加速器質量分析法(AMS)による年代測定を行い、他の2点はβ線計数法で測定する。なお、8号礫群の炭化材は、後述する樹種同定によりコナラ節に同定されている。

(2) 方法

a) AMS法

測定は、株式会社地球科学研究所を通じて、アメリカ合衆国ベータ社(BETA ANALYTIC INC.)で行った。

b) β線計数法

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

(3) 結果

測定結果を表1に示す。XⅢ層の炭化材は18,000y.B.P.、XⅥ層の炭化材は20,830y.B.P.と18,820y.B.P.の年代測定値が得られた。

表1 放射性炭素年代測定結果

層名	遺構名	資料の質	方法	年代	誤差	Code No.
XⅢ層	3号礫群	炭化材	AMS法	18,000yBP	BETA-127,200 X	
Ⅵ層	8号礫群	炭化材(コナラ節)	β線計数法	20,830yBP	±460	Gak-20,239
	13号礫	炭化材	β線計数法	18,820yBP	±250	Gak-20,240

- 1) 年代値は、1950年を基点とした年数。
- 2) 放射性炭素の半減期は、AMS法(試料番号1)は5568年を、β線計数法は5570年を使用した。
- 3) 年代値は、同位体効果の補正を行った値。

(4) 考察

3号礫群は、XⅢ層下面付近で、ほぼXⅣ層直上から検出されている。XⅢ層中には赤色パミスが見られ、桜島起源のP-15あるいはP-17と考えられている。P-15およびP-17については、直上や直下の土壌試料やテフラ中に含まれている木炭を用いて、AMS法による年代測定が行われている（奥野，1997；奥野ほか，1997）。それによれば、P-15の直上の土壌で17,910yBP.、P-15中の木炭で21,260yBP.、直下の土壌で20,490および23,390yBP.の年代値が得られている。また、P-17では、テフラ中に含まれている木炭で22,610yBP.、直下の土壌で21,310および21,240yBP.の年代値が得られている。今回の測定結果は、時期的にはP-15の上位に相当しており、層位的な推定値とも矛盾しない。

一方、8号礫群と13号礫群は、XⅦ層直上のXⅥ層中から検出された。直下のXⅦ層はATの2次堆積層と考えられている。また、XⅥ～XⅤ層中には赤色パミスが認められ、P-17に比定されると考えられている。AMS法による年代測定から、ATは約24,500yBP.の年代値が得られており（奥野ほか，1997）、P-17との時間間隔は約2,000年である。したがって、8号礫群と13号礫群は、約22,500yBP.～24,500yBP.の年代値が推定される。得られた年代値は、20,830と18,820yBP.であり、誤差範囲を含めても推定値よりも新しいP-15付近の年代を示す。

得られた年代値が、既知の年代値や推定値よりも新しい年代を示す場合、後生の根や土壌の付着などによる試料の汚染などが挙げられる（東村，1990）。とくに微細な根を完全に取り除くことは困難であり、複数点の測定を行った場合に一部の試料で年代が新しく出た例もある（中村ほか，1992）。そのため、各遺構の炭化材については、今後さらに測定点数を増やし、年代を確認したい。

2. 炭化材の樹種

(1) 試料

試料は、年代測定値に用いた炭化材のうち、XⅥ層の8号礫群から出土した炭化材から分離された一点である。

(2) 方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 結果

炭化材は、コナラ属コナラ亜属コナラ節に同定された。解剖学的特徴などを以下に記す。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*） ブナ科

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、小道管は管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものとの複合放射組織とがある。

(4) 考察

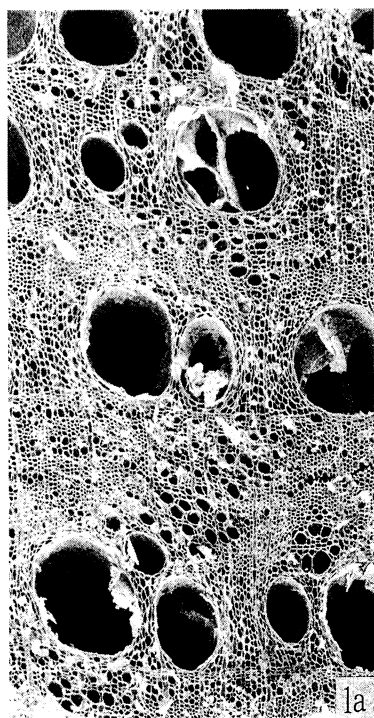
炭化材はコナラ節であった。礫群に伴う炭化材については、これまでの調査結果から、燃料材の一部などが残存したものと考えられている（小田・金山，1978）。旧石器の燃料材については、主に関東地方などで多くの調査例があるが、様々な種類が利用されている（巨理，1971；工藤ほか，

1983；パリノ・サーヴェイ株式会社，1987，1966；四葉地区遺跡調査会・東京都建設局，1996など）。これらの調査結果は，周辺で行われている花粉分析結果などとも調和的であり，遺跡周辺に生育していた種類を利用したことが推定されている。

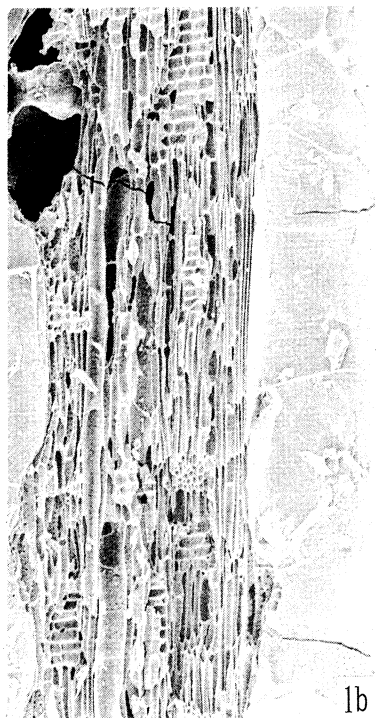
南九州におけるAT以降の植生変遷は，種子島や屋久島などでは氷期を通じて常緑広葉樹が生育しており，約1.1万年頃には加世田市や鹿児島市周辺でシノキ属やクスノキ科が生育していたことが指摘されている（杉山・早田，1997）。しかし，その間の常緑広葉樹の分布等の詳細については不明である。今回の結果から，すくなくとも約22,500yBP～24,500yBPの頃の本地域周辺に落葉広葉樹のコナラ節が生育し，それを燃料材として利用していたことが推定される。今後さらに多くの炭化材について樹種を明らかにし，周辺食性や用材選択の様子を明らかにしたい。

引用文献

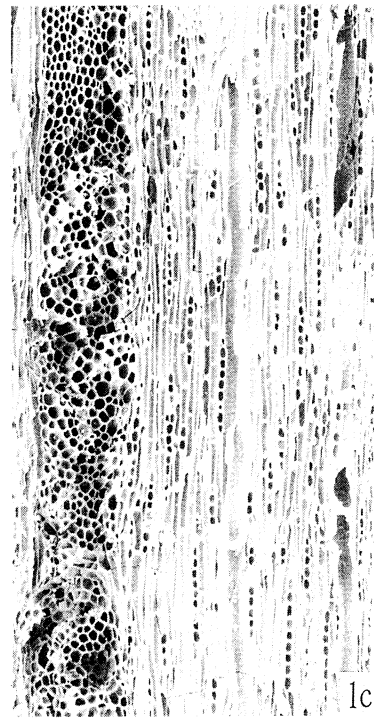
- 東村武信（1990）改訂 考古学と物理化学． 212 p.， 学生社．
- 工藤敏久・千野裕道・阿部祥人（1983）先土器時代における火の使用 ―木炭片の分布状態と樹種同定からの接近―．考古学ジャーナル，222， p.2-9．
- 中村俊夫・藤井登美夫・鹿野勘次・木曾谷第四紀巡会検会（1992） 岐阜県八百津谷の木曾川泥流堆積物から採取された埋没樹木の加速器 ^{14}C 年代．第四紀研究，31， p.29-36．
- 小田静夫・金山喜昭（1978）先土器時代遺跡の炭化物片分布 ―先土器時代研究の新たな視点―．第四紀研究，17， p.125-141．
- 奥野 充（1997）桜島テフラ群の放射性炭素 (^{14}C) 年代学．月刊地球，19（4）， p.231-235，海洋出版株式会社．
- 奥野 充・中村俊夫・長岡信治・森脇 広・小林哲夫（1997）加速器 ^{14}C 年代に基づく始良カルデラの最近3万年間の噴火史．日本地理学会発表要旨集，51， p.94-95．
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1987）水洗選別によって得られた炭化物の同定．「井の頭池遺跡群 武蔵野市御殿山遺跡第1地区D地点」， p.32， 御殿山遺跡調査会．
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1996）化学分析．「富士見台I（古墳時代・近世・化学分析編）」， p.183-234， 都立学校遺跡調査会．
- 杉山真二・早田 勉（1997）南九州の植生と古環境 ―植物珪酸体分析による検討―．月刊地球，19（4）， p.252-257， 海洋出版株式会社．
- 四葉地区遺跡調査会・東京都建設局（1996）四葉地区遺跡 平成8年度【旧石器時代編】．400 p．
- 巨理俊次（1971）木炭片による植物種の検定．「野川遺跡調査概報」， p.18， 野川遺跡調査会．



la



lb



lc

1. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (XVI層8合礫群)

a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m : a

200 μ m : b, c

第10章 まとめ

第1節 旧石器時代（礫群）

X VI層で18基、X III層で4基の礫群を検出している。

X VI層の礫群の配置については、第5図及び第18図に示した。第5図の20cm間隔の地形（コンタ）からは、検出面の最高位に相当し、更に東西方向に並ぶことが観察できる。この整然とした配置からは、礫群が計画的な設営に基づいていたと解釈できる。X VI層の礫群の特徴として、個々の礫群と炭化物の分布が密接な関係にあることが指摘できる。したがって、礫群（小礫群と呼ぶ）と炭化物分布（集中）範囲が1つの組み合わせを成すと推測され即ち、1遺構を構成すると判断される。

礫群の構成については、I類2基（10号・12号）、II A類7基（1号・9号・14号・15号・16号・17号・18号）、II B類9基（2号・3号・4号・5号・6号・7号・8号・11号・13号）の3類に分類できる。

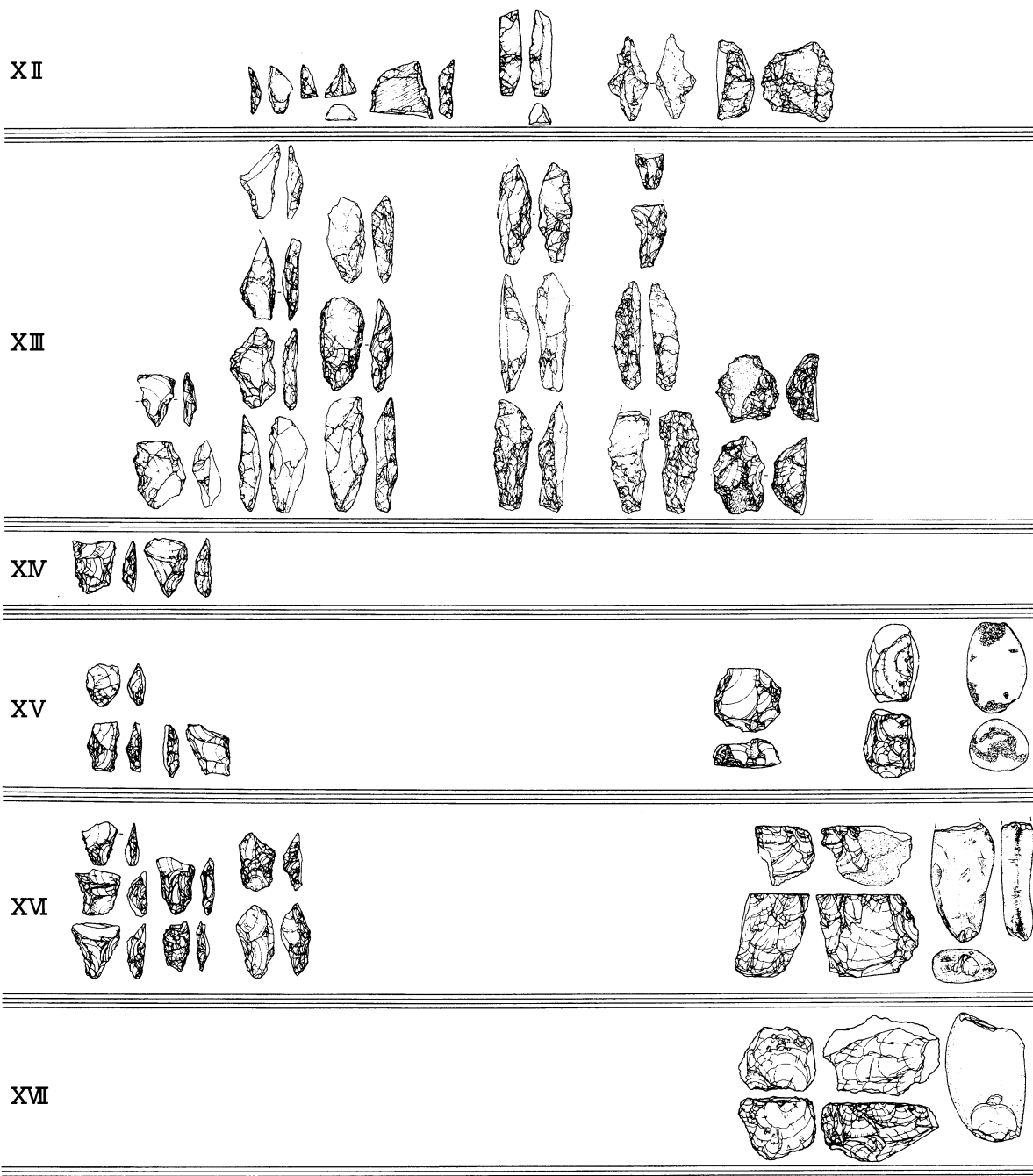
本遺跡の礫群の基本構造として、II B類を想定し、3号礫群と4号礫群がその典型を示すと判断している。

ちなみに3号礫群は、228×158cmの中に2基の小礫群と、炭化物の密集する中央部とやや減少傾向の認められる外縁部で構成される。2ヵ所の小礫群は、炭化物の密集する中央部の外で確認している。南側の小礫群（ア）は径36cmで深さ10cmの掘り込みに19の礫（凝灰岩）から成り、北側的小礫群（イ）は掘り込みを持たず27個の礫が集中している。4号礫群は、316×236cmの中に2基の小礫群があり、同じように炭化物の密集する中央部とやや減少傾向の認められる外縁部で構成される。2基の小礫群は掘り込みを伴い、中央部の炭化物密集帯の北側に（ア）、南側に（イ）を検出している。それぞれ、小礫群（ア）は径32cmで深さ13cm掘り込みに14個の礫（凝灰岩）、南側の（イ）小礫群は径27cmで深さ11cmの掘り込みに15個の礫を確認している。

この礫群の機能については、残念ながら現状では明らかにできないが、炭化物密集帯に接する位置に小礫群が検出されることから、焚き火等で加熱した礫を、あらかじめ用意していた土坑に投げ入れた行為が推測される。また、小礫群の規格や使用礫の数に大きな変移が認められないことから、礫群で一般的とされるボイル・ストーン的機能を直接当てはめることはできない。したがって、基本構造や規格に添った機能の解明が要求されている。

次に、礫群の配置（第18図）及びその前後関係については、II B類を基本構造と想定した場合、II A類とI類では、土坑の消失あるいは礫群中の解体・礫の拡散等が認められ、II B類に先行した可能性を高く提示している。この可能性に関しては、17号礫群の破碎礫と、4号礫群及び5号礫群の礫が接合することからも看取され、17号から4号へ、17号から5号への固体移動と見ることができ。更に、西側にII A類とI類が集中することも、II B類に先行することを補強している。これらのことから、礫群の形成は東から西方向へ移行した可能性を強く感じ取ることができる。

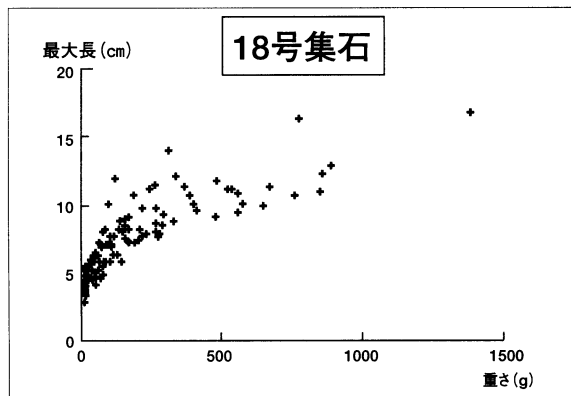
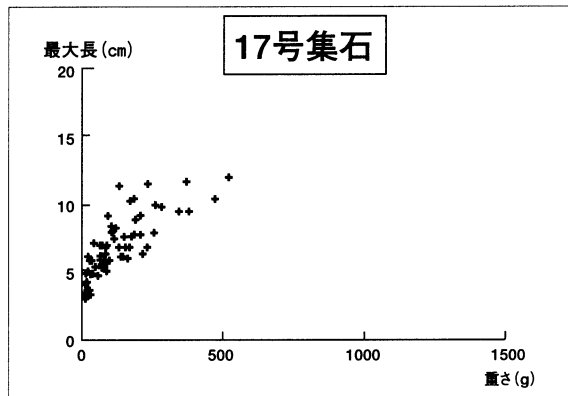
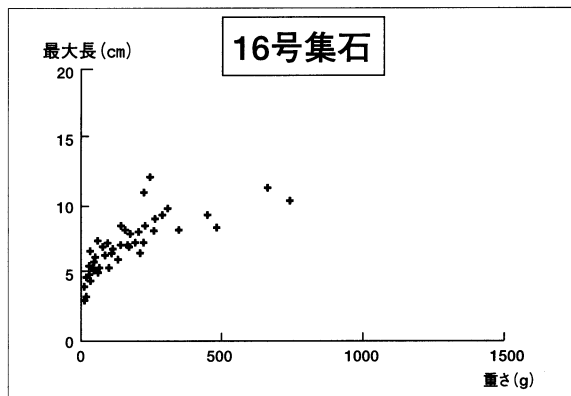
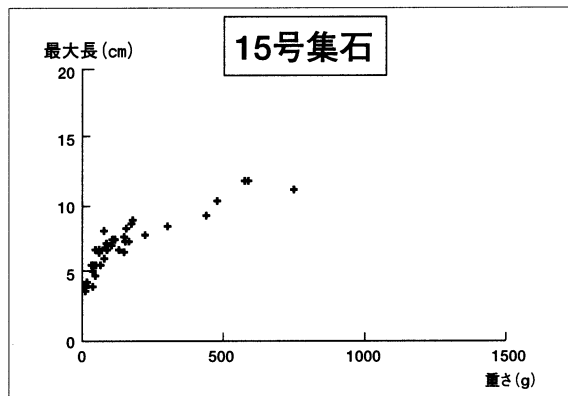
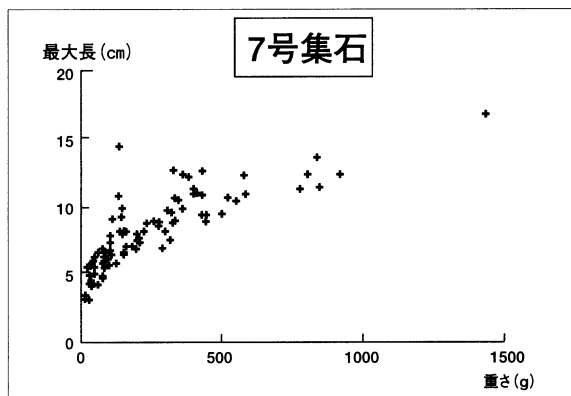
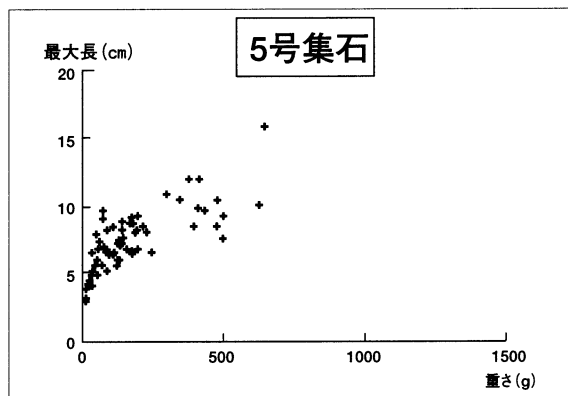
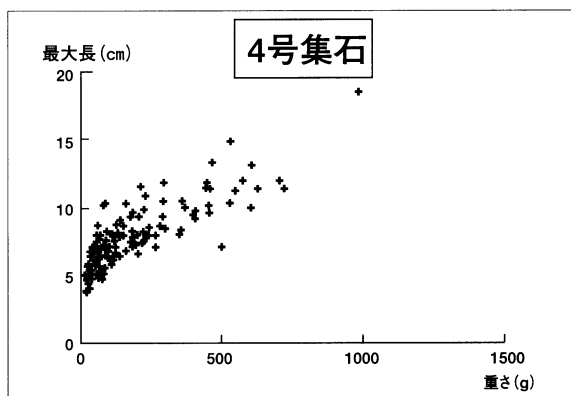
礫群と遺物の関係（第18図）については、石器集中のAブロック以外はその多くが重複する状況が観取できる。中でもI類の12号・10号礫群、II A類の16号・18号・15号礫群との遺物の重なりは明らかで、それらの礫群を廃棄した後、ブロックが形成された様相が読み取れる。特に、II B類の



第73図 層位別石器変遷図

13号礫群を取り巻く12号・16号・18号礫群にはBブロックが重なるが、13号礫群内では石器の出土が認められていないことは注目できる。即ち、13号礫群に伴ってBブロックが形成され、礫群の外で石器製作が行われた可能性が高いと言える。また、4号礫群での出土は少ないが、近くにDブロックあるいはEブロックが残され、接している3号礫群にも石器が重なることは、これらの石器製作が4号礫群に伴って行われた可能性も指摘できる。同様に11号礫群に対し、Fブロック・Gブロックが存在し、更に、Fブロックは5号礫群との関係と読みとれる可能性がある。現状では、まだ概略的な理解であるが、検討を深めることにより個々の礫群の形成の変遷を辿れる可能性及び礫群

XVI層礫群の礫構成グラフ



の同時性の解釈、礫群と石器製作の関係を読み取ることも可能であろう。

現状認識として、これら18基の礫群が同時に展開した可能性は極めて薄く、むしろ礫群の構造や石器製作と礫群の関係等から前後関係が存在したことを色濃く示していると捉えている。また、礫群の配置・配列に規則性が認められる等、礫群造営に計画性も認められ

ることから、その背景に回帰行動があると考えているが表現できるに至っていない。

その後調査した、桐木遺跡と耳取遺跡でも大量の礫群が発見され、礫群形態と遺跡内での礫群構成が極めて類似することが指摘されている。機会を捉えて再度、検証したいと考えている。〈註5〉

第2節 遺物

出土層位毎の石器については、本分で示した通りである。また、出土量についてはそのピークはXⅥ層とXⅢ層に見られる。XⅥ層をピークに下位のXⅦ層と上位のXⅤ層・XⅣ層で減少傾向を示し、その傾向は、XⅢ層とXⅡ層でも認められ、その出土分布についても下位はXⅥ層に上位はXⅢ層に重なる。このことから、XⅡ層以下に2つの石器文化が存在した可能性を読み取ることができる。即ち、XⅥ層を生活基盤としたナイフ形石器文化（台形石器・台形様石器・切出形ナイフ）が、XⅢ層に生活主体を持つナイフ形石器（切出形ナイフ・台形様石器・三稜ナイフ・三稜尖頭器）が存在する（第73図）。

上記を概観すると、不定形剥片素材の台形様石器等から縦長剥片素材の三稜石器に移行したと見られることもできる。なお、遺物指導をいただいた木嶋氏からも同様な見解を頂いており、氏の編年案に照らすと下位の石器文化が「九州第Ⅲ期前半」に、上位の石器文化が「九州第Ⅲ期後半」に相当することになる。

〈註5〉長野眞一「耳取遺跡」『旧石器考古学』61・1994・8

大保秀樹「旧石器時代のヴィーナス？剥片尖頭器とともに出土」『発掘された日本列島』朝日新聞社 2001

稲田孝司「遊動する旧石器人」岩波書店2001・12

第3節 縄文時代

縄文時代に該当する出土遺物について、15類に区分した。しかし、本文で示したように、個々の数量は極めて少ない。遺物のあり方を概観すると、全時期を通してそれぞれが単体として遺跡内に運び込まれているが、土器型式毎に生活拠点として本遺跡が展開した様相は感じられない。したがって、一時的に活用する際持ち込まれた物を破棄した結果と考えてよさそうである。また、遺構もその傾向を読み取ることができ、落し穴状遺構を草創期で2基、早期で1基検出し、集石遺構は早期で2基検出しているに過ぎない。この種の遺跡は各地に散在しており、同時に報告した供養之元遺跡でも同様な様相を指摘することができる。供養之元遺跡では、手向山式土器、平楯式土器、塞ノ神A式a土器、塞ノ神A式b土器、塞ノ神B式d土器がそれぞれ1個体ずつ出土し、本遺跡以上各時期の土器が同様に単体として存在した可能性を色濃く示している。隔絶した時代の所産と考えられるこれらの土器が、単体（1個だけ）として遺跡に運び込まれ存在し且つ、破棄されたことをいかに解釈すべきか、新たな視点を要求されている。

1類土器は所謂前平式土器に相当する。この土器は本県を特徴付けることも加わり、種々の考察

がなされているが、1類土器は、加栗山式土器にその典型を求めることができると判断している。2類土器は吉田式土器、3類土器は器面に条痕を残す程度で明確な帰属は行っていない。4類土器が手向山式土器、5類土器が塞ノ神A式土器、6類土器が塞ノ神B式土器に該当する。7類土器については、出土位置や微隆起線や隆帯を持つことや口縁部の特徴を基底に置き、8類土器は微隆起線や隆帯等を構成要因としないものとして区分している。この種の土器については、近年再評価が行われており、轟式I土器や苦浜式土器と認識されている<註1>。本報告では、混乱を避けることを前提に、隆帯や微隆起線を持ち特に、文様構成の主要素に隆帯を備えるものを7類土器とし、8類土器は、微隆起線や隆帯等の施文帯を主要な構成要因としないものとした。本遺跡7類土器の典型として、木屋原遺跡出土の中に類似資料を見ることができる。8類土器は、極めて硬質な仕上がりを示し、口唇部外面にヘラ刻みを施し、器面整形に用いた工具即ち条痕による文様の類型が認められる程度である。鎌石橋遺跡・小山遺跡・下管生B遺跡等に8類土器の共通性を求めることができる。

9類土器は、胎土及び縄文施文であること等から移入品と想定し、瀬戸内地方（船元式土器）に求められると判断している。10類土器も細分化が進められている土器で、その変遷が明らかにされつつある春日式土器である<註2>。57～60と64・65については北手牧段階、55・56については前谷段階と、先の考察に従ってよさそうである。11類土器は器面調整に磨きが用いられることから、阿高系土器と判断した。12類土器も11類土器に包括される可能性もある。13類から15類土器は同一時期の所産と考えられるが、器種毎に細分して掲載した。13類の精製浅鉢形土器は肩部の屈曲から入佐式土器と判断される。14類土器はその存在が注目を集めているもので<註4>、半粗半精製土器と呼んだことがあった<註3>。入佐式土器以降黒川式土器で盛行する大型の浅鉢形土器で、平底で接地面の広い洗面器状のものと丸底でボール状のものが知られる。今回の資料は前者に相当し、接地面に網目と編布を圧痕している。この器種の特徴は、まず、外面の接地面には編布や網目等を圧痕し、その圧痕作業の状況がそのまま残される。次に、外面調整は条痕等で粗の状態では仕上げていくが、他方内面はヘラ磨きやナデ仕上げを入念におこなっていることである。したがって、内面へのこだわりが際立つこととなる。

<註1> 堂込秀人「熊毛諸島の縄文土器の一型式—苦浜式土器の認定—」考古学ジャーナル 378号・1994・8

高橋信武編「右京西遺跡」『萩台地の遺物X』萩町教育委員会 1986・8

<註2> 東和幸「九州地方の中期（春日式）」『縄文時代』10 1999・10

<註3> 尾関清子「縄文の衣」

<註4> 長野真一編「水の谷遺跡」『鹿屋市埋蔵文化財調査報告書』鹿屋市教育委員会

図

版



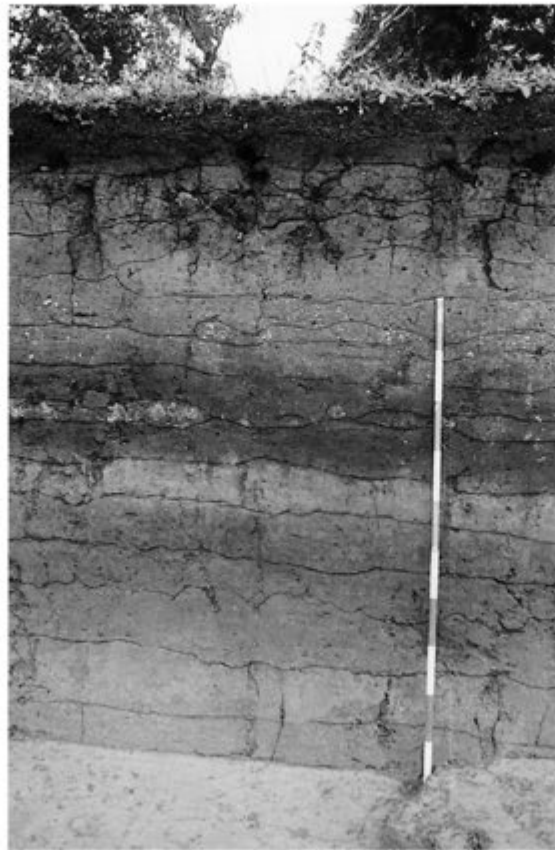
上空から見た前原和田遺跡



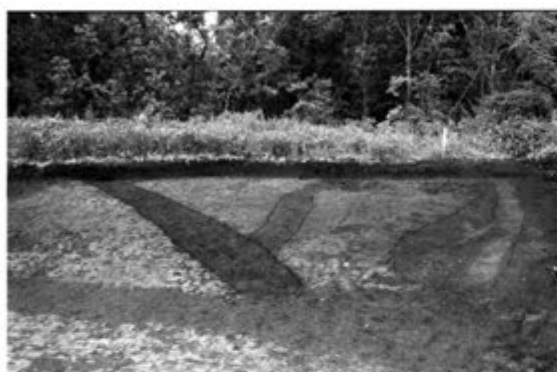
発掘風景



サツマ火山灰→



土層断面図



古道検出状況



古道断面



古道





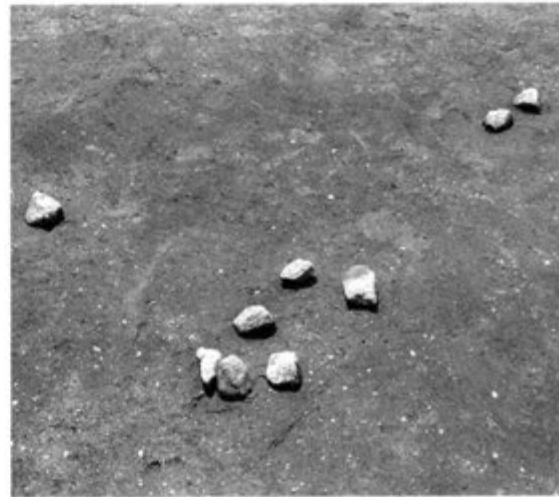
早期落とし穴状遺構



早期集石1号



落とし穴状遺構断面



早期集石2号



落とし穴状遺構完掘状況



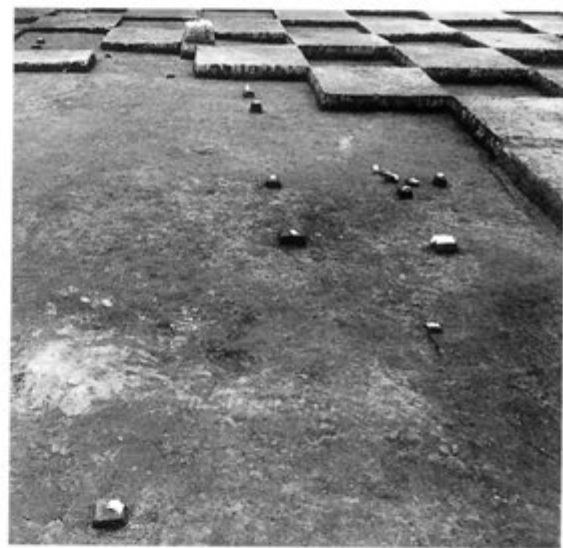
早期遺物出土状況



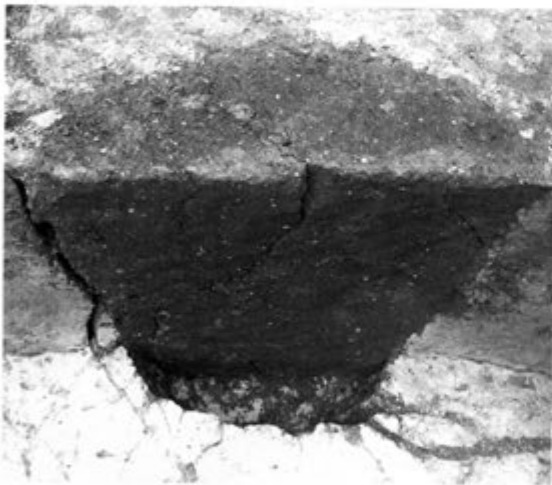
草創期1号落とし穴状遺構完掘状況



1号落とし穴状遺構



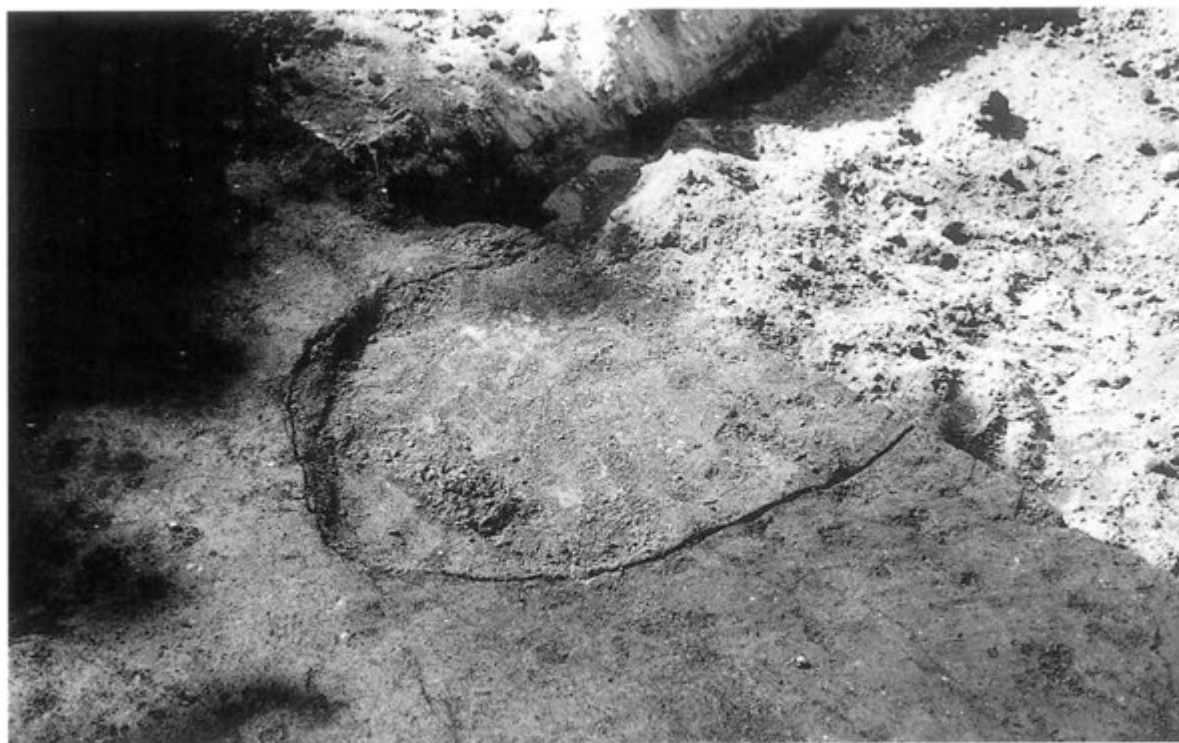
草創期遺物出土状況



1号落とし穴状遺構



草創期石鏃出土状況



草創期2号落とし穴状遺構検出状況



逆茂木痕



完掘状況



X II ~ X III層遺物出土状況
(Aブロック)



X III層3号磔群



X III層1号磔群



X III層4号磔群



X III層2号磔群



X VI層1号磔群



XVI層2号磔群



XVI層3-ア号磔群



2号断面



XVI層3-ア・イ号磔群



XVI層3-イ号磔群



XVI層4-ア号磔群



XVI層4-ア・イ号磔群

5号炭化物



XVI層5-イ号磔群



XVI層6-イ号磔群



5-イ号断面



6-イ号断面



X M層6ーア号磔群



X M層8ーイ号磔群



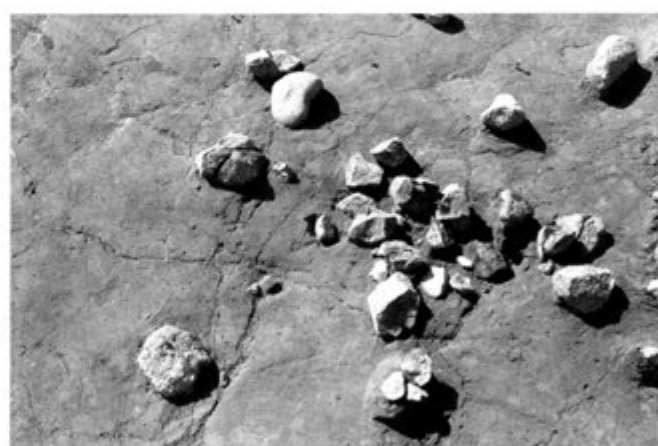
X M層7ーア号磔群



X M層8ーウ号磔群



X M層7ーイ号磔群



X M層8ーア号磔群



X M層9-I号磔群



X M層11号磔群



X M層9-A号磔群



11号断面



X M層10号磔群



X M層12号磔群



XVI层13号碟群



XVI层16号碟群



XVI层14号碟群



XVI层17号碟群



XVI层15号碟群



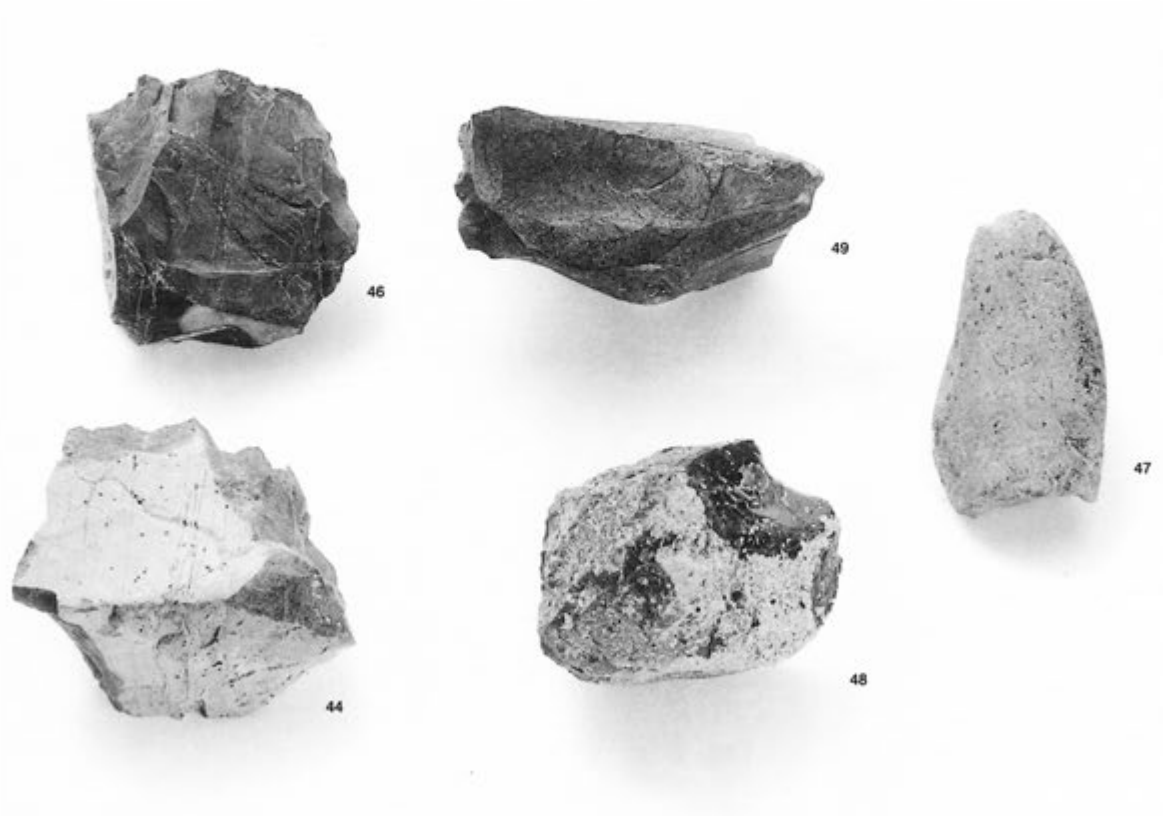
XVI层18号碟群



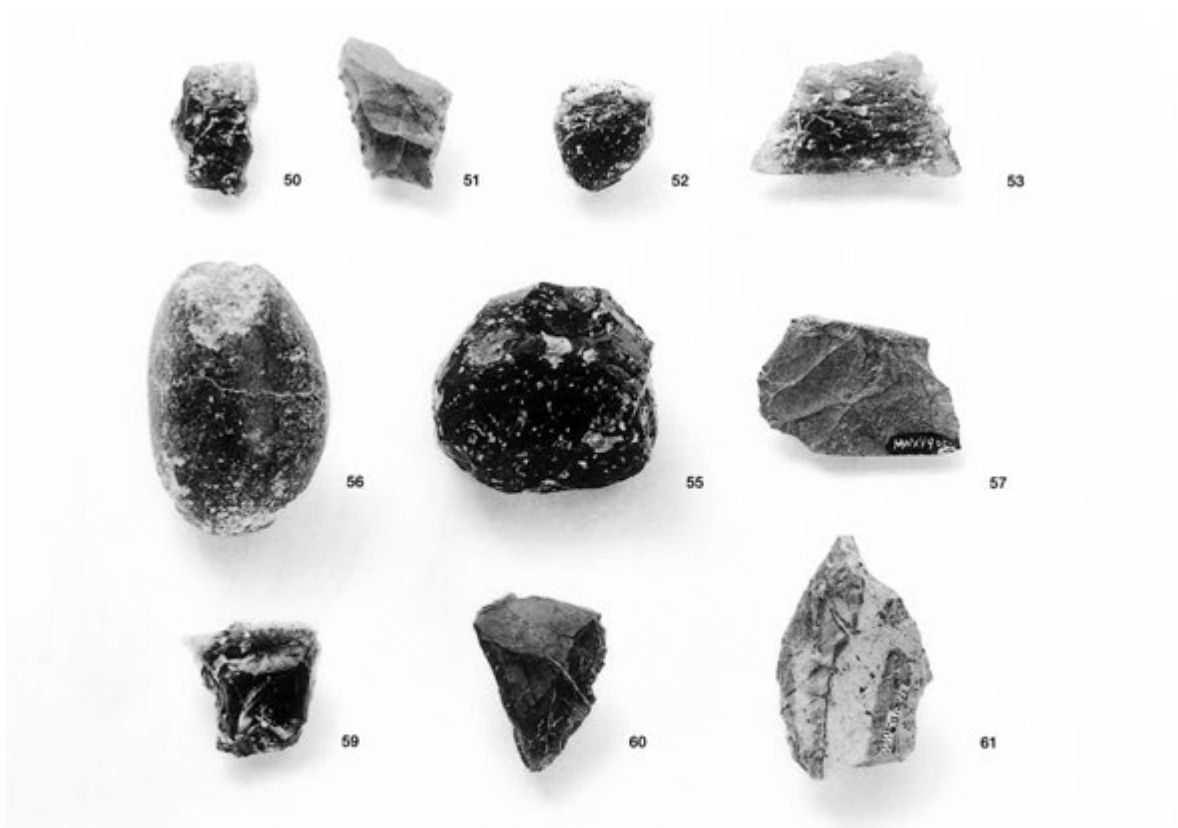
XVII·XVI層出土石器



XVI層出土石器(2)



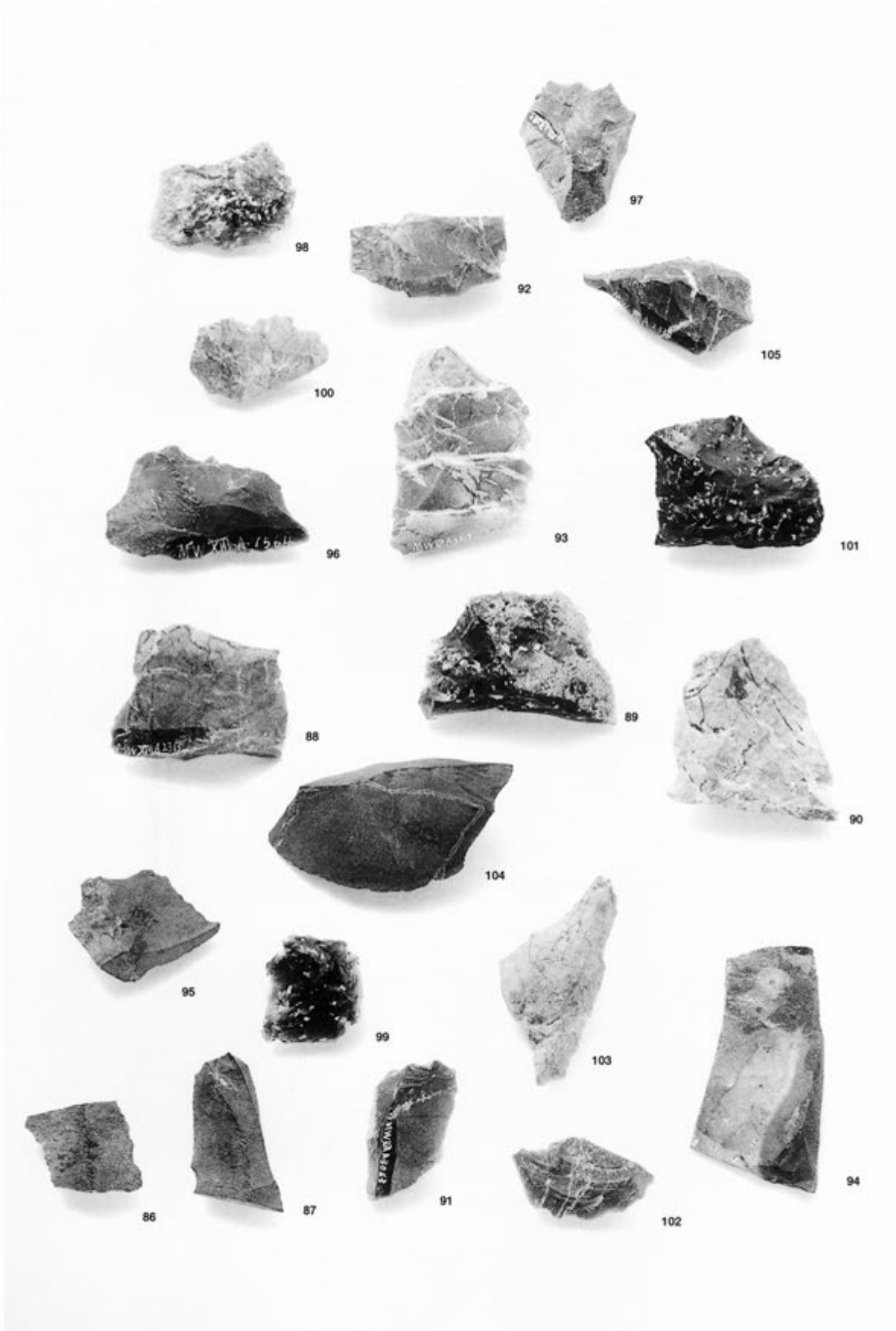
XVI層出土石器(3)



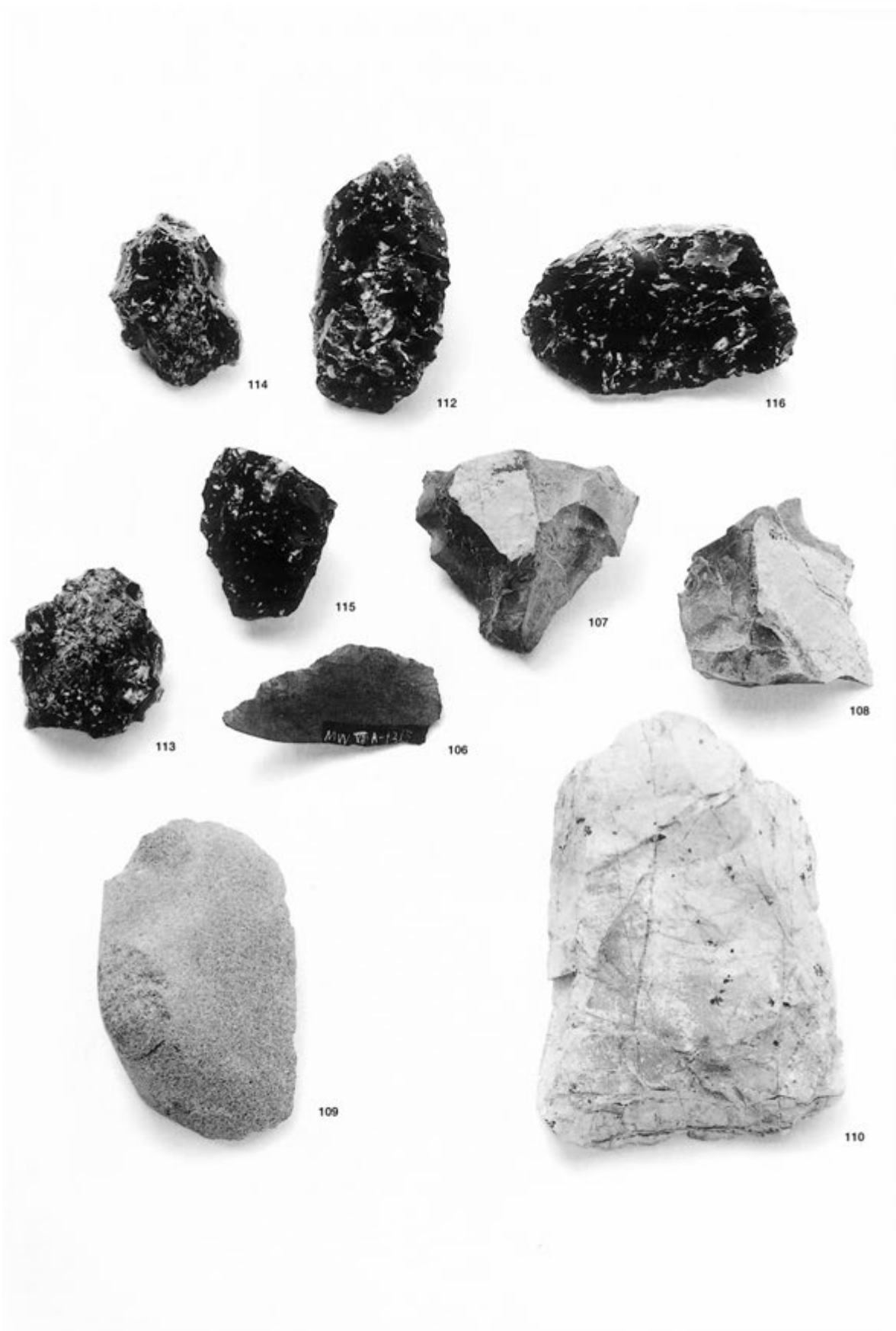
XV·XIV層出土石器



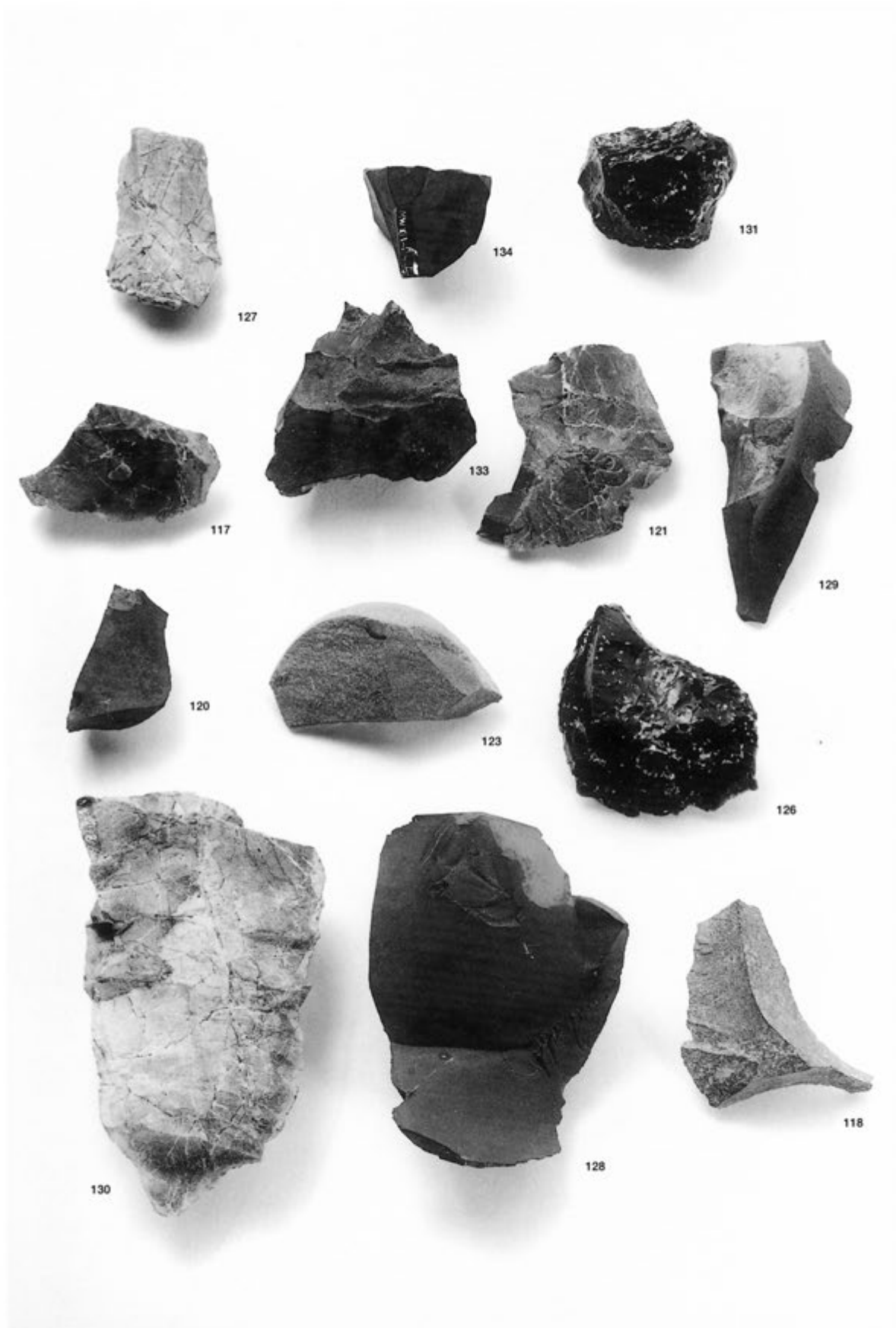
XIII層出土石器(1)



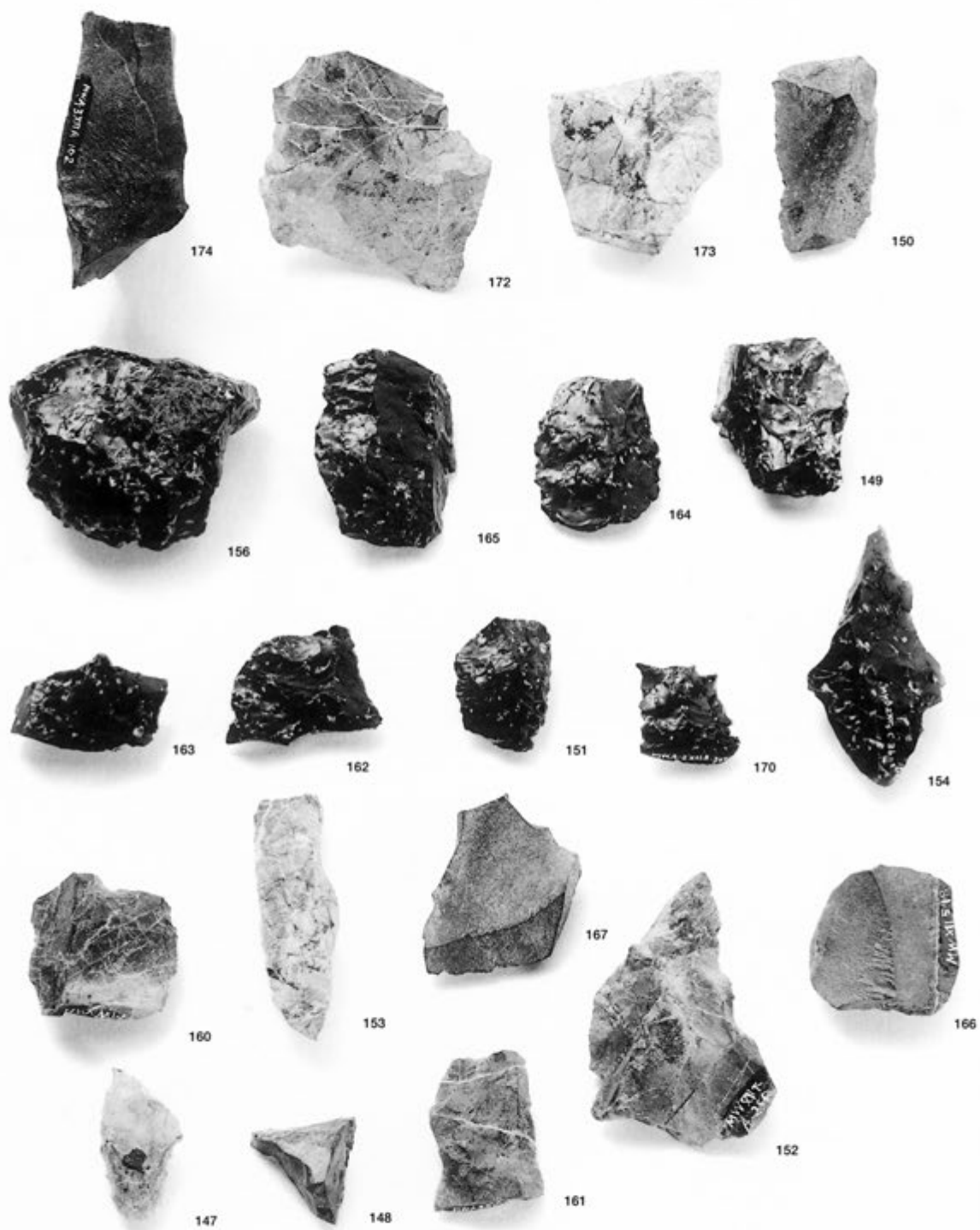
X III层出土石器(2)



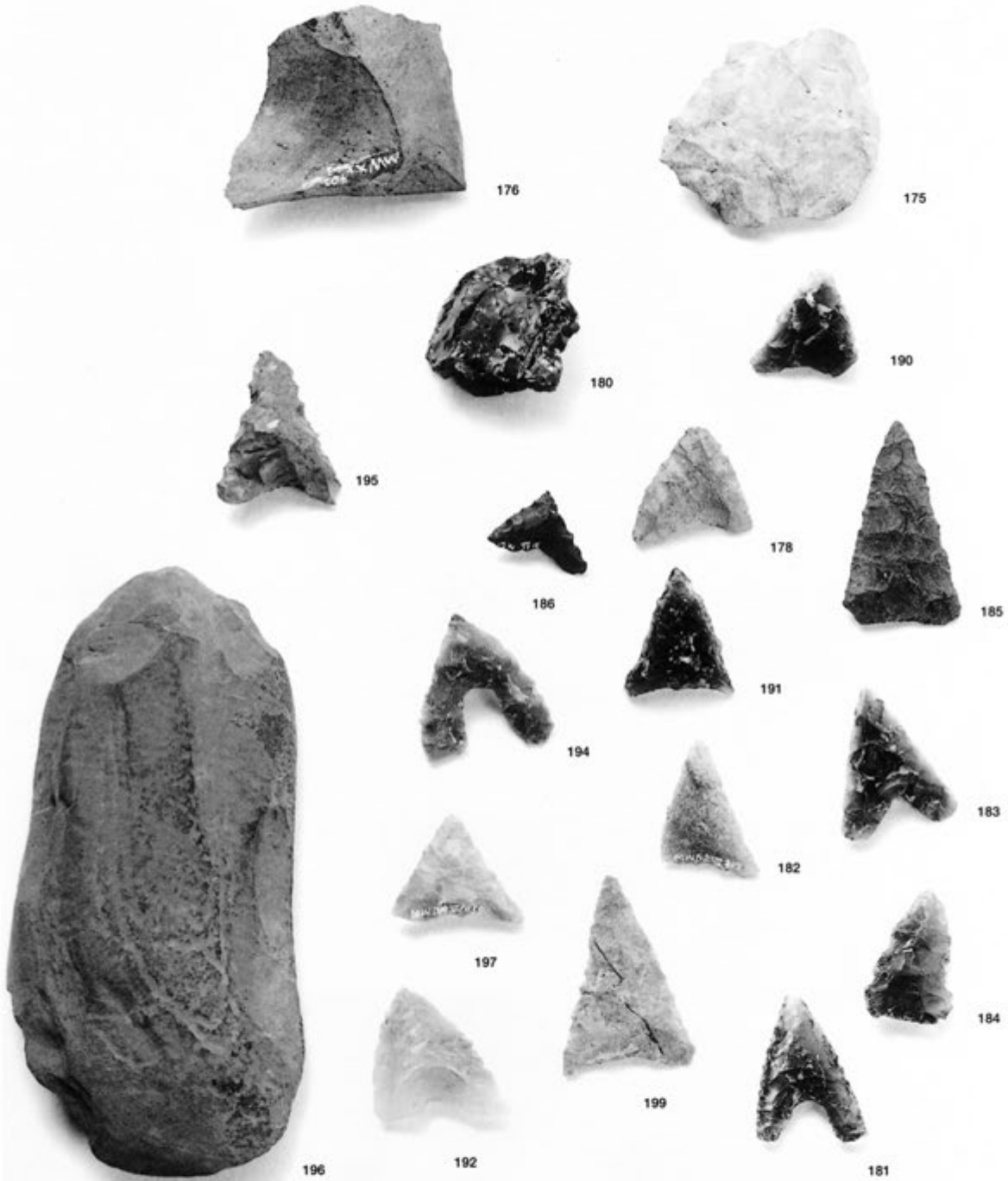
X III層出土石器(3)



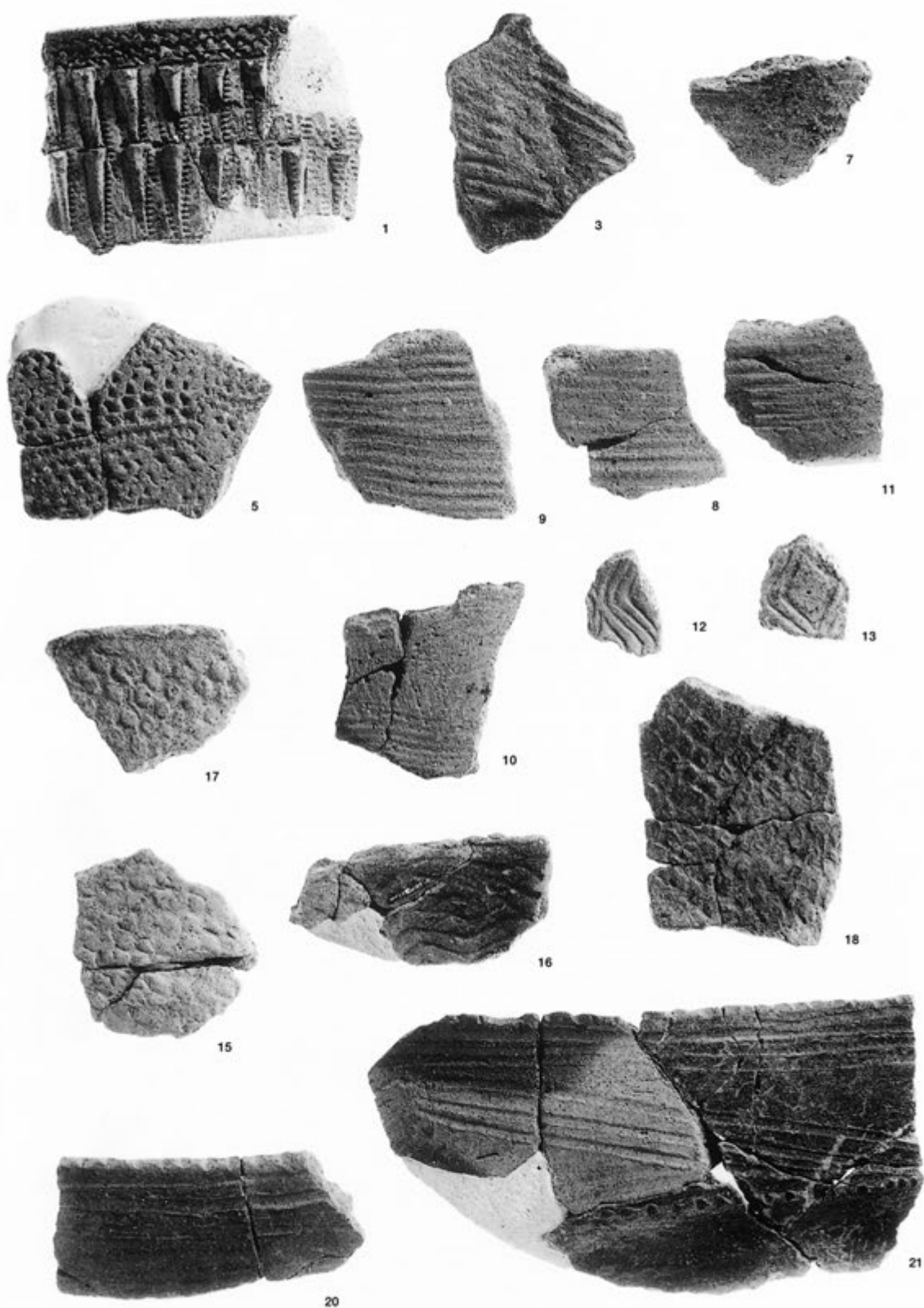
X III層出土石器(4)



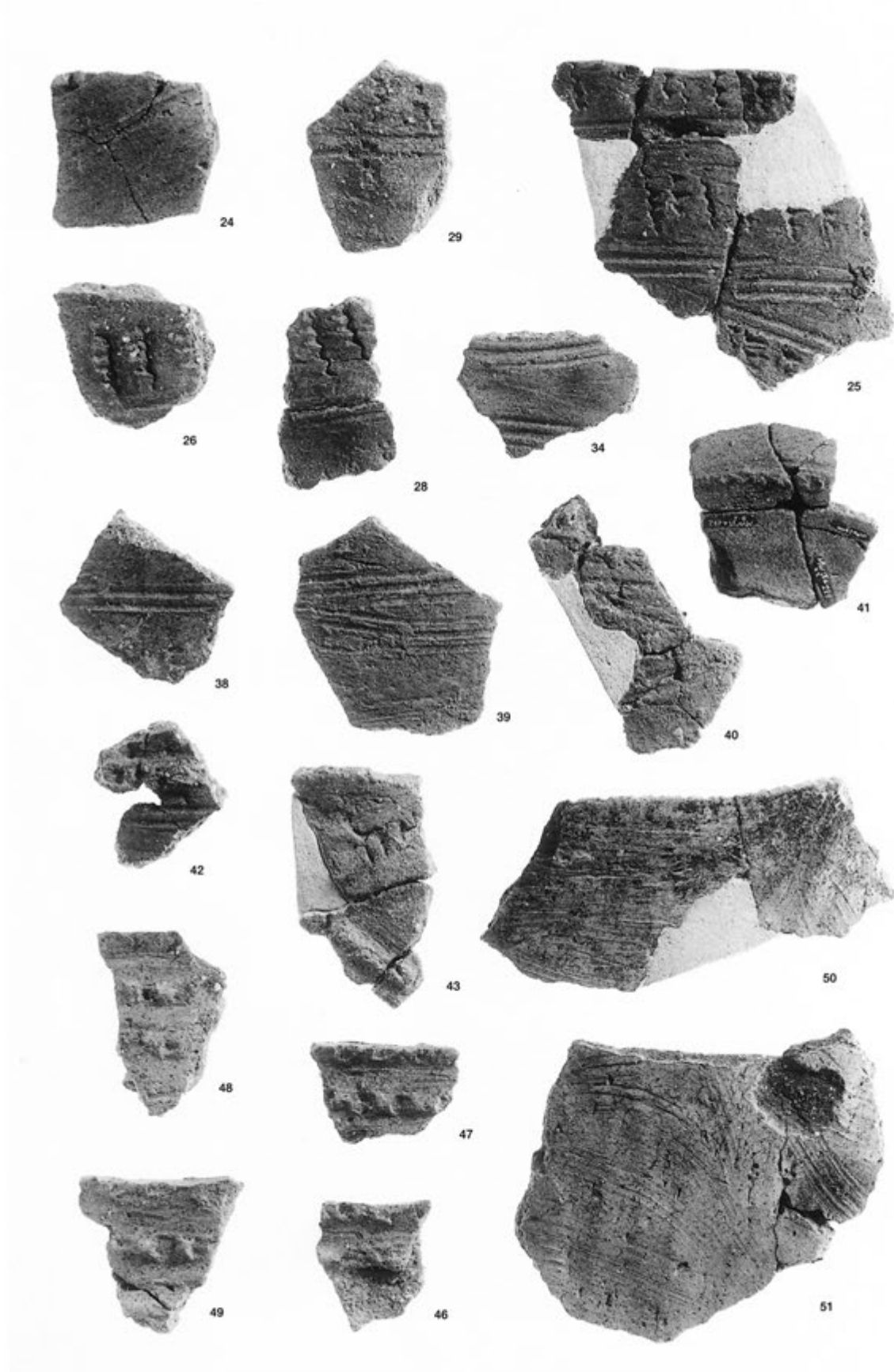
X II 层出土石器



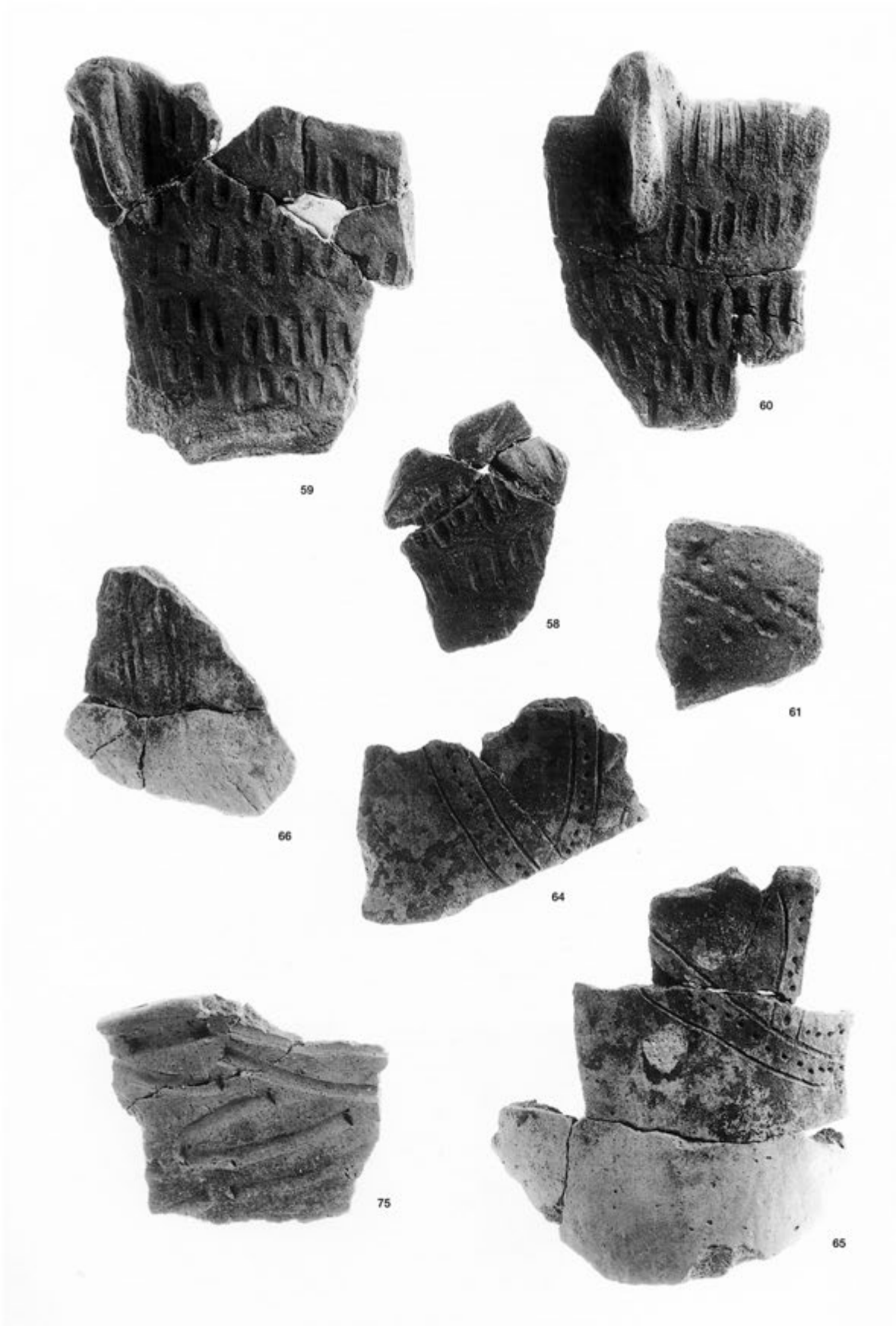
X~IV層出土石器



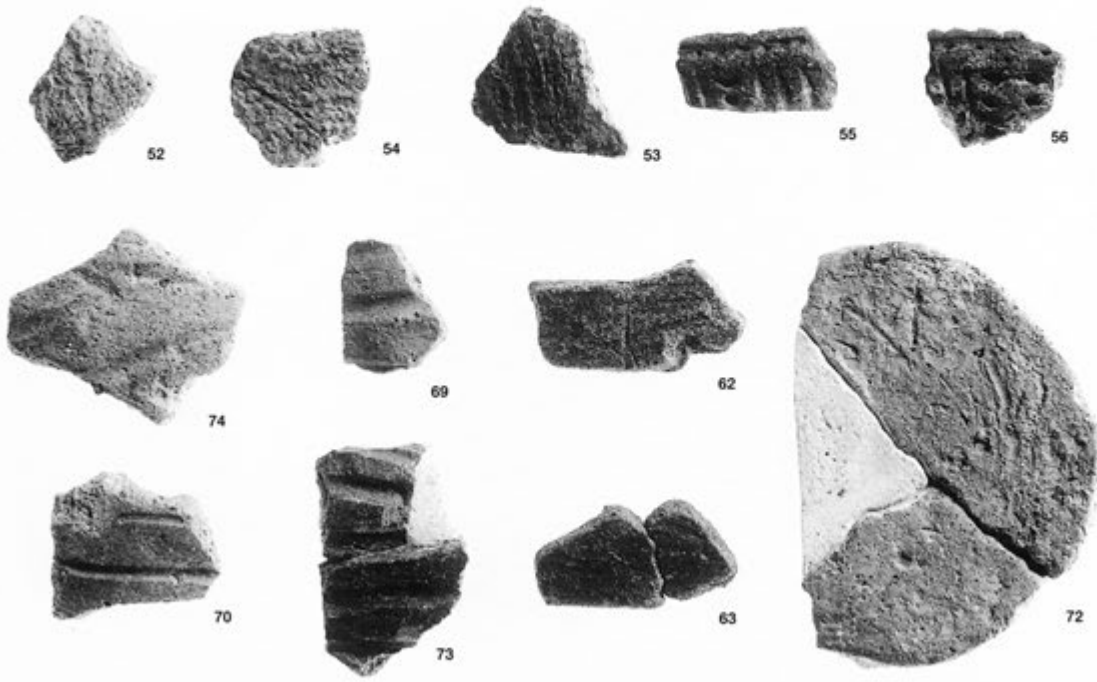
VII層出土土器



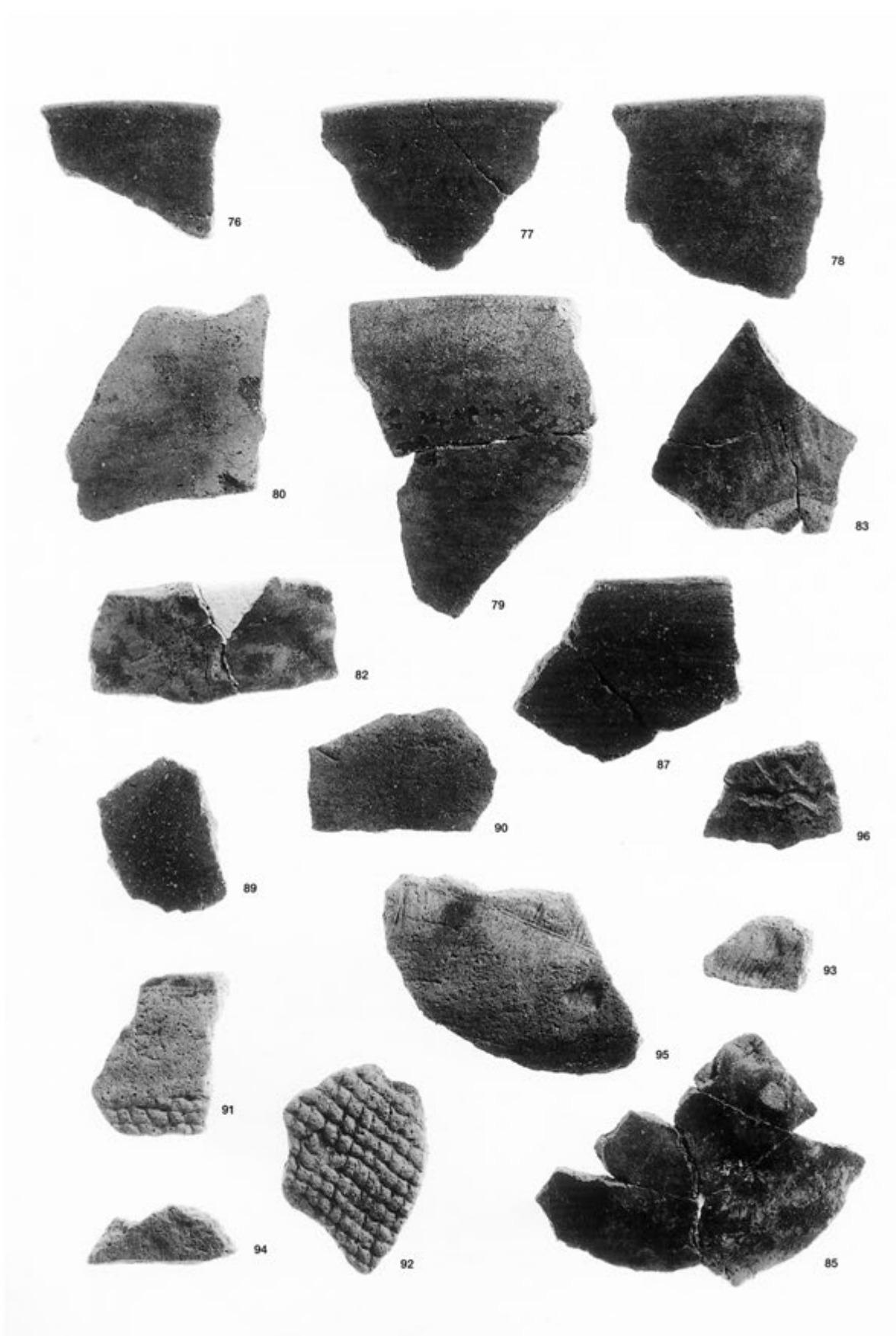
Ⅵ層出土土器



IV層出土土器(1)



IV層出土土器(2)



IV a · III層出土土器

あとがき

平成8年度からスタートした東九州自動車道末吉IC～国分IC間の発掘調査は、14年3月を以って終了にこぎつける状況である。その間、九日田遺跡を皮切りに13遺跡を調査してきた。

各遺跡で新発見や新情報が得られ、その処理に押し潰されそうな内容量である。

また、マスコミでも大いに取り上げられ、速報の伝達は行ったつもりでいる。

福山町城ヶ尾遺跡の縄文時代早期で、意図的に埋められた3個の壺形土器が発見され、その壺の精巧さに驚かされ強烈な映像で脳裏に刻み込まれている。また、この遺跡は狭い急峻な段丘上にあり、遺跡の立地条件に適していないと調査を始めたが、その予測は見事にはずれ、改めてわが身の無知をさらけ出すこととなった。

前原和田遺跡の想像だにできなかった旧石器時代の礫群の発見は、回帰の話題やその機能についても大いに悩むこととなった。回帰の真髄までは至っていないが、2ないし3単位の行動パターンが見えたような気がした。肝心な使用方法については、種々の考えが編み出された。特に、小さな穴に動物の皮を器状に押し込み水や食料を入れた後、近くで熱した石を投げ込んで調理をした施設との意見が出され、ミルク・ストーンの名称まで与えたが、いまだ明らかにできていない。

高篠遺跡では掘立柱建物が多数検出され、墨書土器や帯金具も発見された。また、トイレ遺構を発見したとの連絡で急きょ駆けつけたが、落とし穴状遺構に大量の“ハエ”がはりついていた。

九養岡遺跡で、幽霊を見た職員も現れた。

財部町城ヶ尾遺跡と踊場遺跡では、本県では珍しい仏教関係の遺構があり注目された。

耳取遺跡ではその名のとおり、耳が取れるほどの寒い冬を体験した。押型文土器の礫に悩み、台形石器の製作跡が環状のブロックを形成する事実に興奮した。24,000年前の層からは、前原和田遺跡で見た礫群が90基以上発見され、“石”にこれ程真剣に取り組んだ記憶は他にない。最後に発見した耳取ヴィーナスは、大いにもてはやされ、現在「日本列島展」への出品で全国旅行中である。

桐木遺跡は、これらの調査の拠点となった遺跡で、調査の成果はもちろん情報や生活の拠点でもあった。御池軽石層の下から、大量の土器と石器が出土し、縄文時代中期の成立に新たな視点を提供している。また、P11と呼ばれる桜島起源の軽石層を挟んだ土器の存在も話題の一つである。

急逝した国生誠さんが供養之元遺跡で花壇の手入れをしている姿を忘れることができない。

今回、報告書の1号を送り出した、初めての職員も含め真剣に取り組んだつもりでいるが、反省も大いにある。次回からは、より多くの正確な情報が提供できるように頑張りたい。

関係者の皆さんに感謝します。

東九州自動車道担当一同

整理作業に携わったみなさん

九日田遺跡 今西ゆかり・大田雅子・鮫嶋みどり・瀬戸口良子・高岡真由美・中野充恵・

東国原ゆかり・平岡益子・牧之瀬久美子・山口美百合

供養之元遺跡 小村幸子・瀬戸口良子・吹春美穂・藤田みどり

前原和田遺跡 有村貴子・仮屋涼子・川畑淳子・鮫嶋みどり・東国原ゆかり

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(36)

東九州自動車道建設(末吉IC～国分IC間)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

**九日田遺跡
供養之元遺跡
前原和田遺跡**

発効日 平成14年3月31日
発行所 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-5652
鹿児島県始良郡始良町平松6252番地
☎(0995)65-8787
印刷所 株式会社 秀巧社印刷
〒890-0072
鹿児島市新栄町25-7
☎(099)257-3300